

国立研究開発法人  
国立精神・神経医療研究センター  
精神保健研究所

# 精神保健研究所年報

第30号（通巻63号）

平成28年度

National Institute of Mental Health  
National Center of Neurology  
and Psychiatry

— 2017 —

国立研究開発法人  
国立精神・神経医療研究センター  
精神保健研究所年報

第 30 号（通巻 63 号）

平成 28 年度

National Institute of Mental Health  
National Center of Neurology  
and Psychiatry  
—2017—



「国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成29年2月20日」

## 巻頭言

平成 28 年度精神保健研究所年報をお届けします。皆さまには、ぜひお目を通していただき、叱咤、激励をいただければ幸いです。

精神保健研究所は、社会実装を見据えた研究とともに、その研究成果を最大化するための研修活動に注力しております。たとえ有用な治療プログラムを開発したとしても、実践できる治療スタッフを育成しなければ、その効果を国民に還元することができません。そのため、毎年、治療プログラム等の研修には力を入れており、平成 28 年度も「精神保健に関する技術研修課程」として 15 の研修を開催し、延べ参加者数は 842 名を数えました。さらに、平成 28 年度より保険収載された「認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 (SMARPP)」は当研究所が中心となって開発された薬物依存症に対して初めて承認された心理社会的治療ですが、薬物依存研究部のスタッフは、全国各地の依存症治療拠点機関の精神科医療関係者、地域保健機関職員、民間リハビリ機関スタッフ等を対象に、ワークブックを用いた研修会の立ち上げを支援し、全国 31 箇所の医療機関、32 箇所の精神保健福祉センターで薬物乱用防止プログラムが実施できる体制を構築しました。わが国では、これまで推定 40 万人と推定されている薬物依存症患者に対して専門医療機関は約 10 施設、専門医も 20 名不足、といった状況であったことを鑑みると、画期的な数値であることがおわかりになるかと思えます。

研究活動については、社会的な関心が高い睡眠や発達障害に関する研究が NHK スペシャルで取り上げられました。睡眠に関しては、1 日あたりわずか 1 時間の睡眠不足が、自覚されることなく、心身機能の負担として積み上がり、長期的に健康障害発生リスクとなることを示し、「睡眠負債」という概念を提唱しました。発達障害に関しては、自閉症スペクトラム児にしばしば認められる聴覚過敏を取り上げ、特定の音に過剰反応したり、何でもない日常の音に耐えがたい不快感を生じていることを客観的に示した研究です。これにより、診断基準にある感覚特性を客観的に定量的に評価できる可能性が示されました。これらの研究は、一般国民の健康増進や発達障害に対する理解を深め、治療開発へとつながる可能性を示唆するものであり、まさに社会実装を見据えた研究といえるでしょう。

最後に、医療政策に対する寄与についても触れたいと思います。平成 30 年度に医療計画・障害福祉計画・介護保険事業計画が同時改訂されますが、精神医療関係団体・厚生労働省と連携をとりながら、地域で効果的に展開できるための具体的かつ実現可能なモニタリング方策を構築しました。具体的には、従来の統合失調症や気分障害を中心とした地域医療計画から離れて、多様な精神疾患に対応して 15 疾患等領域を対象に、圏域ごとの医療機関数をストラクチャ、患者数をプロセス、病期別の入院需要、地域移行を受け入れる地域基盤必要量をアウトカム指標とし、これを公表することで、都道府県の地域医療計画立案に寄与するというものです。詳細は、精神保健計画研究部のページをご覧ください。

そのほか、精神保健研究所では、バラエティーに富んだ研究がなされています。とくに多施設共同研究には力を入れていきたいと考えておりますので、引き続き皆さまのご協力、ご支援を何卒よろしくお願いいたします。

2017 年 7 月吉日

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所  
所 長 中込 和幸

# 目 次

<b>I. 精神保健研究所の概要</b> . . . . .	<b>1</b>
1. 創立の趣旨及び沿革 . . . . .	1
2. 内部組織改正の経緯 . . . . .	9
3. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター組織図 . . . . .	11
4. 職員配置 . . . . .	12
5. 精神保健研究所構成員 . . . . .	13
<b>II. 研究活動状況</b> . . . . .	<b>16</b>
1. 精神保健研究所所長室 . . . . .	16
2. 精神保健計画研究部 . . . . .	22
3. 薬物依存研究部 . . . . .	37
4. 心身医学研究部 . . . . .	66
5. 児童・思春期精神保健研究部 . . . . .	76
6. 成人精神保健研究部 . . . . .	89
7. 精神薬理研究部 . . . . .	103
8. 社会精神保健研究部 . . . . .	112
9. 精神生理研究部 . . . . .	117
10. 知的障害研究部 . . . . .	134
11. 社会復帰研究部 . . . . .	145
12. 司法精神医学研究部 . . . . .	157
13. 自殺総合対策推進センター . . . . .	175
14. 災害時こころの情報支援センター . . . . .	184
15. 上級専門職室 . . . . .	194
<b>III. 研修実績</b> . . . . .	<b>198</b>
<b>IV. 平成 28 年度精神保健研究所研究報告会抄録</b> . . . . .	<b>222</b>
<b>V. 平成 28 年度委託および受託研究課題</b> . . . . .	<b>240</b>

# I. 精神保健研究所の概要

## 1. 創立の趣旨及び沿革

### I. 創立の趣旨

本研究所は、精神衛生に関する諸問題について、精神医学、心理学、社会学、社会福祉学、保健学等各分野の専門家による学際的立場からの総合的、包括的な研究を行うとともに、国、地方公共団体、病院等において精神衛生業務に従事する者に対する精神衛生全般にわたる知識、技術に関する研修を行い、その資質の向上を図ることを目的として、昭和27年1月、アメリカのNIMHをモデルに厚生省の附属機関として設立された。

### II. 精神衛生研究所の沿革

昭和25年に精神衛生法が制定された際、国立精神衛生研究所を設立すべき旨の国会の附帯決議が採択された。これを踏まえ、厚生省設置法及び厚生省組織規程の一部が改正され、昭和27年1月、千葉県市川市に国立精神衛生研究所が設置された。

研究所の規模について、当初、厚生省は、1課8部60名程度の組織を構想していたが、財政事情等により、総務課、心理学部、生理学形態学部、優生学部、児童精神衛生部及び社会学部の1課5部30名の体制で発足した。また、附属病院をもつことの重要性は、当時から認識されていたが、病院の新設は困難な情勢であったため、隣接する国立国府台病院と連携、協力することとされた。

その後、知的障害に対する対策の確立が社会的に求められるようになったことを受け、昭和35年10月1日、新たに精神薄弱部を設置するとともに既存の各部の再編と名称変更が行われた。この結果、研究所の組織は、総務課、精神衛生部、児童精神衛生部、社会精神衛生部、精神身体病理部、精神薄弱部及び優生部の1課6部となった。

昭和36年には、国立精神衛生研究所組織細則が制定され、部課長のもとに心理研究室、生理研究室、精神衛生相談室及び精神衛生研修室の4室が置かれた。それとともに、昭和35年1月から事実上行われていた精神衛生技術者に対する研修業務が厚生省設置法上の業務として加えられて医学科、心理学科、社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修が開始されることとなり、研修業務が調査研究と並ぶ研究所の重要な柱として正式に位置づけられることとなった。

昭和40年には、地域精神医療、社会復帰対策の充実等を内容とする精神衛生法の大改正に伴い、社会復帰部が新設されるとともに、新たに精神発達研究室及び主任研究官(3名)が置かれた。また、昭和46年6月には、社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室が設置された。さらに、昭和48年には、人口の高齢化に伴って、痴呆性老人等いわゆる「恍惚の人」が社会問題化したのを背景に、老人精神衛生部が、翌昭和49年には、同部に老化度研究室が新設された。

昭和50年には、精神衛生に関する相談が精神障害者の社会復帰と深く関連することから、社会復帰部を社会復帰相談部に改組、精神衛生相談室を同部に移管した。また、昭和53年12月には、社会復帰相談庁舎が完成し、精神衛生相談をはじめとする精神障害者の社会復帰に関する研究体制が強化された。昭

和54年には、研修各科の名称が医学課程、心理学課程、社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に改称されるとともに、新たに精神科デイ・ケア課程が新設された。翌昭和55年には、研修庁舎が完成し研修業務の一層の充実が図られた。

### Ⅲ. 国立精神・神経センター精神保健研究所の設立

国立精神衛生研究所は、このような着実な歩みをたどった後、昭和61年10月、国立武蔵療養所及び同神経センターとともに国立高度専門医療センターとして発足した国立精神・神経センターに発展的に統合された。ここに、国立精神・神経センター精神保健研究所は、国立高度専門医療センターの一研究部門として、精神保健に関する研究及び研修を担うこととなった。その際組織改正により、総務課が庶務課とされ、精神身体病理部と優生部が統合されて精神生理部とされたほか、精神保健計画部及び薬物依存研究部が新設された。その結果、統合前の1課8部8室は、1課9部19室となり、研究・研修機能の強化が図られた。

半年後の昭和62年4月には、国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合され、二病院二研究所を擁する国立高度専門医療センターが本格的に活動を開始した。これに伴い、庶務課は廃止され、精神・神経センター運営部(国府台地区)に研究所の事務部門(主幹、研究所事務係)が置かれた。また、同年10月には、心身医学研究部の新設と精神保健計画部システム開発研究室の増設が認められ、平成元年10月には、社会復帰相談部に援助技術研究室が設置された。

さらに、平成11年4月には、精神薄弱部が知的障害部に名称変更されるとともに、薬物依存研究部が組織改正により、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成となった。

平成14年1月に精神保健研究所が創立50周年を迎え、創立50周年パーティの開催、記念誌の発行、公開市民シンポジウムを行った。

平成15年10月には司法精神医学研究部が新設され、3室体制で、研究員の増員も認められ、研究所の組織は、11部27室体制(精神保健研修室を含む)となった。

平成17年4月には精神保健研究所は小平(武蔵)地区に移転し研究活動を開始した。

平成18年10月には自殺予防総合対策センターの新設により、自殺実態分析室・適応障害研究室・自殺予防対策支援研究室の3室と、成人精神保健部に犯罪被害者等支援研究室・災害時等支援研究室の2室の増設が認められた。

平成21年6月に精神保健に関する技術研修の事務担当が政策医療企画課から研究所事務係へと移管され、また10月に精神生理部に臨床病態生理研究室が設置され3室編成となり、研究所の組織は11部33室(精神保健研修室含)となった。

### Ⅳ. 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所へ改組

国民の健康に重大な影響のある特定の疾患等に係る医療に関し、調査、研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供、技術者の研修等を行う独立行政法人の名称、目的、業務の範囲等に関する事項を定めることを目的とした、「高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に関する法律」の施行により、それまでのナショナルセンター6組織が平成22年4月1日に独立行政法人化された。

我が国立精神・神経センターは「精神疾患、神経疾患、筋疾患及び知的障害その他の発達の障害に係る医療並びに精神保健」を担当する「独立行政法人国立精神・神経医療研究センター」となり、精神保健研究所も内部の組織が改正された。

自殺予防総合対策センターは、自殺実態分析室、適応障害研究室、自殺予防対策支援研究室の3室編成。

精神保健計画部は、精神保健計画研究部へ名称変更され、統計解析研究室、システム開発研究室の2室編成。

薬物依存研究部は、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成。

心身医学研究部は、ストレス研究室、心身症研究室の2室編成。

児童・思春期精神保健部は児童・思春期精神保健研究部へ名称変更され、精神発達研究室、児童期精神保健研究室、思春期精神保健研究室の3室編成。

成人精神保健部は、成人精神保健研究部へ名称変更され、精神機能研究室、診断技術研究室、認知機能研究室、犯罪被害者等支援研究室、災害等支援研究室の5室編成。

老人精神保健部は、精神薬理研究部へ名称変更され、精神薬理研究室、気分障害研究室の2室編成。

社会精神保健部は、社会精神保健研究部へ名称変更され、社会福祉研究室、社会文化研究室、家族・地域研究室の3室編成。

精神生理部は、精神生理研究部へ名称変更され、精神生理機能研究室、臨床病態生理研究室の2室編成。

知的障害部は、知的障害研究部へ名称変更され、診断研究室、治療研究室、発達障害支援研究室の3室編成。

社会復帰相談部は、社会復帰研究部へ名称変更され、精神保健相談研究室、援助技術研究室の2室編成。

司法精神医学研究部は、制度運用研究室、専門医療・社会復帰研究室、精神鑑定研究室の3室編成。

以上自殺予防総合対策センター及び11部、計33室となった。

また、研究所の事務部門は、主幹が研究所事務室長となり、研究所事務係とともに、研究所の所属となった。

平成23年4月、事務部門の組織変更が行われ、研究所事務室は総務部の所属となった。

平成23年12月には災害時こころの情報支援センターの新設により、情報支援研究室の1室が認められた。

以上自殺予防総合対策センター、災害時こころの情報支援センター及び11部、計34室となった。

平成24年1月、千葉県市川市の地に国立精神衛生研究所が設置されてから、創立60周年を迎え、記念祝賀会を開催し、創立60周年記念誌を発行した。

平成27年4月1日、独立行政法人から国立研究開発法人へ改組。



平成28年4月1日、自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設、自殺実態・統計分析室、自殺総合対策研究室、自殺未遂者・遺族支援等推進室、地域連携推進室の4室編成。

## 沿革

事項 年次	所長	組織等経過
昭和25年5月		精神衛生法国会通過(精神衛生研究所設置の附帯決議採択)
26年3月		厚生省公衆衛生局庶務課が設置の衝にあたる
27年1月	黒沢 良臣 (国立国府台 病院長兼任)	厚生省設置法並びに組織規程の一部改正により精神衛生に関する調査研究を行う附属機関として、千葉縣市川市に国立精神衛生研究所設置総務課、心理学部、生理学形態学部、優生学部、児童精神衛生部及び社会学部の1課5部により業務開始
35年10月		心理学部を精神衛生部に、社会学部を社会精神衛生部に、生理学形態学部を精神身体病理部に、優生学部を優生部に名称変更し、精神薄弱部を新設
36年4月		精神衛生研修室、心理研究室、精神衛生相談室及び生理研究室を新設
36年6月		厚生省設置法の一部改正により精神衛生技術者の研修業務が追加され、医学科、心理学科、社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修開始
36年10月	内村 祐之	
37年4月	尾村 偉久 (公衆衛生局長が 所長事務取扱)	
38年7月	若松 栄一 (公衆衛生局長が 所長事務取扱)	
39年4月	村松 常雄	主任研究官を置く
40年7月		社会復帰部及び精神発達研究室を新設
41年7月		本館改築完成(5カ年計画)
44年4月		総務課長補佐を置く
46年4月	笠松 章	
46年6月		社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室を新設
48年7月		老人精神衛生部を新設

49年7月		老人精神衛生部に老化度研究室を新設
50年7月		社会復帰部を社会復帰相談部に名称変更 精神衛生相談室を精神衛生部から社会復帰相談部の所属に改正
52年3月	加藤 正明	
53年12月		社会復帰相談庁舎完成(2カ年計画)
54年4月		研修課程の名称を医学課程, 心理学課程, 社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に名称変更し, 精神科デイ・ケア課程を新設
55年4月		研修庁舎完成(講義室・図書室・研修生宿舎)
58年1月	土居 健郎	
58年10月		老人精神衛生部に老人保健研究室を新設
60年4月	高臣 武史	
61年5月		厚生省設置法の一部改正により, 国立高度専門医療センターの設置を決定
61年9月		厚生省組織令の一部改正により, 国立高度専門医療センターの名称と所掌事務が決定
61年10月		国立高度専門医療センターの一つとして, 国立武蔵療養所, 同神経センターと国立精神衛生研究所を統合し, 国立精神・神経センター設置 ナショナルセンターの1研究所として精神保健研究所に改組, 精神身体病理部と優生部を統合し精神生理部としたほか, 精神保健計画部及び薬物依存研究部を新設, 1課9部19室となる
62年4月	島藪 安雄 (総長が所長事務取扱)	厚生省組織規程の一部改正により, 国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合し, 2病院, 2研究所となる 庶務課廃止, 研究所に主幹を置く
62年6月	藤縄 昭	
62年10月		心身医学研究部(ストレス研究室, 心身症研究室)と精神保健計画部システム開発研究室を新設
平成元年10月		社会復帰相談部に援助技術研究室を新設
6年4月	大塚 俊男	
9年4月	吉川 武彦	

11年4月		薬物依存研究部で研究室の改組があり, 心理社会研究室と依存性薬物研究室となり, 診断治療開発研究室を新設 精神薄弱部を知的障害部に名称変更
13年1月	堺 宣道	
14年1月		精神保健研究所創立50周年
14年6月	高橋 清久 (総長が所長事務取扱)	
14年8月	今田 寛睦	
15年10月		司法精神医学研究部を新設(制度運用研究室, 専門医療・社会復帰研究室, 精神鑑定研究室)
16年4月	金澤 一郎 (総長が所長事務取扱)	
16年7月	上田 茂	
17年4月		市川市(国府台)から小平市(武蔵地区)に移転
17年8月	北井 暁子	
18年10月		自殺予防総合対策センターの新設(自殺実態分析室, 適応障害研究室, 自殺予防対策支援研究室), 成人精神保健部の増設(犯罪被害者等支援研究室, 災害時等支援研究室)
19年6月	加我 牧子	
21年10月		精神生理部に臨床病態生理研究室を新設
22年4月		独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所となる 8つの研究部の名称を変更(精神保健計画研究部, 児童・思春期精神保健研究部, 成人精神保健研究部, 精神薬理研究部, 社会精神保健研究部, 精神生理研究部, 知的障害研究部, 社会復帰研究部)し, 知的障害研究部に発達障害支援研究室を新設, 11部33室(室長定数29)となる 所長補佐及び自殺予防総合対策センター副センター長を置く
23年12月		災害時こころの情報支援センターの新設(情報支援研究室)

25年4月	野田 広	
25年7月	福田 祐典	
27年4月		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所となる
27年9月	富澤 一郎	
27年12月	中込 和幸	
28年4月		自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設(自殺実態・統計分析室, 自殺総合対策研究室, 自殺未遂者・遺族支援等推進室, 地域連携推進室)

2. 内部組織改正の経緯

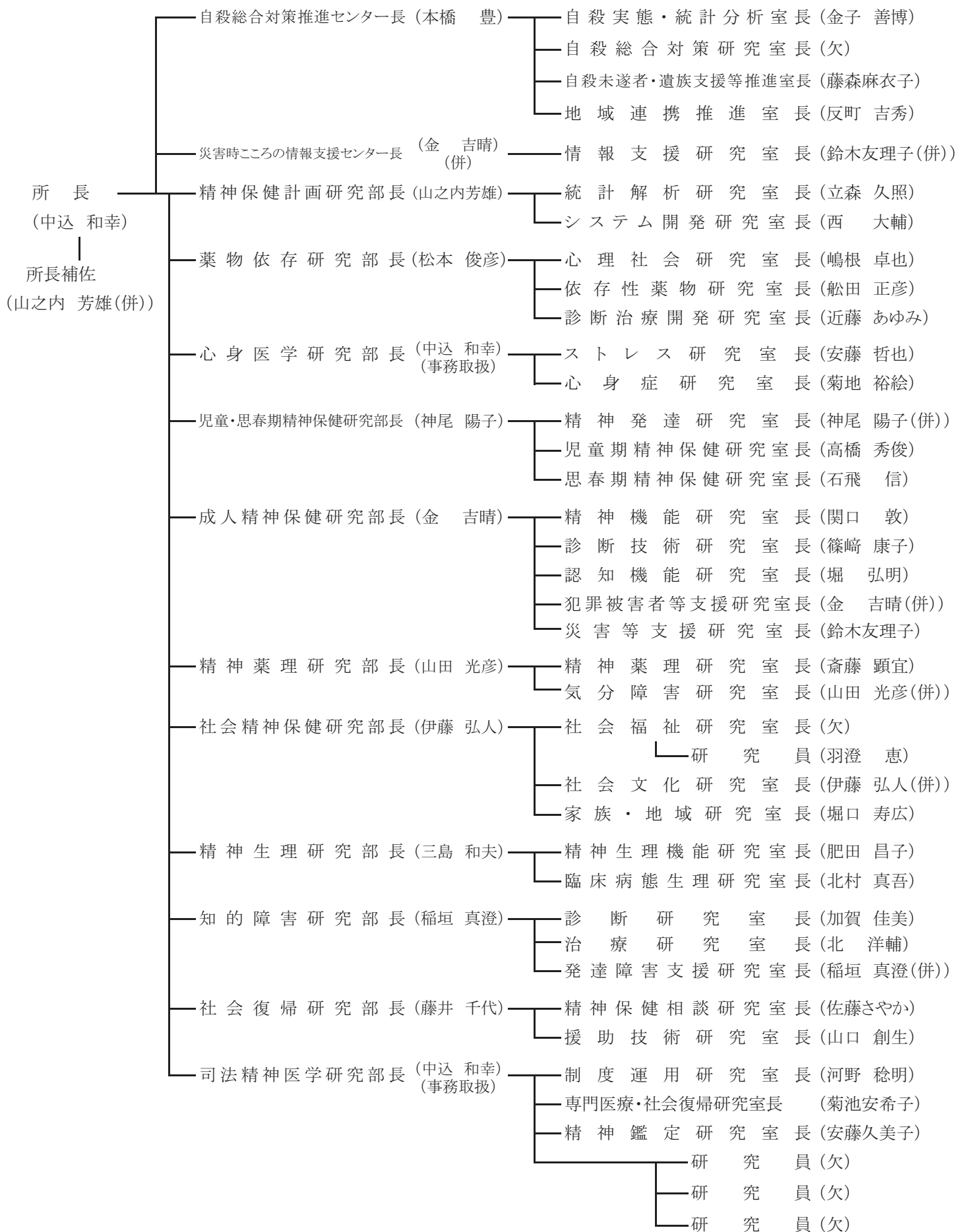
国立精神衛生研究所										国立精神・神経センター精神保健研究所										独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
創立昭和27年1月	35年10月	36年6月	40年7月	46年6月	48年7月	49年7月	50年7月	58年10月	61年4月	61年10月	62年4月	62年10月	元年10月	11年4月	13年4月	15年10月	18年10月	20年6月	21年10月	平成22年4月	平成23年12月	平成27年4月	平成28年4月		
総務課	→	総務課 精神衛生研修室 (6月)							総務課 精神衛生研修室	庶務課 精神衛生研修室	運営部庶務第二課 精神保健研修室	運営部庶務第二課 運営部企画室 精神保健研修室			運営部政策医療 企画課 精神保健研修室	運営局 政策医療企画課 精神保健研修室	運営局 政策医療企画課 精神保健研修室 庶務課 研究所事務係			研究所事務係		研究所事務係			
																	自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室			自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室		自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室			
																					災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室	災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室			
										精神保健計画部 統計解析研究室		精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室					精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室				精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室		精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室		
										薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室					薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		
心理学部	精神衛生部	精神衛生部 心理研究室 精神衛生相談室 (4月)							精神衛生部 心理研究室	精神衛生部 心理研究室							心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室				心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室
児童精神衛生部	→	児童精神衛生部 精神発達研究室							児童精神衛生部 精神発達研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室					児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室				児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室
					老人精神衛生部 老化研究室			老人精神衛生部 老化研究室 老人保健研究室	老人精神衛生部 老化研究室 老人保健研究室	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室		成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室					成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室				成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		
										老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室		老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室					老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室				精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室		精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室		
社会学部	社会精神衛生部				社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室				社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室					社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室				社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		
生理学形態学部	精神身体病理部	精神身体病理部 生理研究室 (4月)							精神身体病理部 生理研究室	精神生理学部 精神機能研究室		精神生理学部 精神機能研究室					精神生理学部 精神機能研究室				精神生理学部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室		精神生理学部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室		精神生理学部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室
衛生学部	衛生学部								衛生学部																
	精神薄弱部								精神薄弱部 診断研究室 治療研究室	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害部 診断研究室 治療研究室				知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室		知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室		知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室
					社会復帰部			社会復帰相談部 精神衛生相談室	社会復帰相談部 精神衛生相談室			社会復帰相談部 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室				社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室				社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室
																	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室				司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室		司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室		司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室

組

織



## 4. 職員配置(平成29年3月31日現在)







部名	部長	委員長	研究員	流動研究員	非常勤研究員	科学研究員 ○科学研究補助員 ○科学研究心理療法士	科学研究補助員 ○科学研究補助員	科学研究補助員 ○科学研究補助員	協力研究員	併任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	外来事務助手	研究生 ○実習生	
成人精神保健研究部	金 吉晴	鈴木 友理子 堀 弘明 関口 敬 篠崎 康子 (29. 1. 1～)	伊藤 真利子 伊藤 圭子 大沼 麻美	馬津 恵子 (28. 6. 1～)	深澤 舞子 石田 康子 篠崎 康子 (28. 8. 1～28. 12. 31) 葛西 伶 (28. 10. 1～) ○新(菅原) 彩子 ○佐藤 安娜 (28. 10. 1～)	○東村 和香子 ○畑山 美穂	水野 恵子 東 祐子	松浦 恵子	小西 聖子 加茂 光恵 石丸 悠一郎 井筒 節 堤 敦 栗山 健一 宮本 成 福地 美枝 藤澤 自紀子 咲崎 自紀子 中島 聡美	小西 聖子 加茂 光恵 石丸 悠一郎 井筒 節 堤 敦 栗山 健一 宮本 成 福地 美枝 藤澤 自紀子 咲崎 自紀子 中島 聡美	伊東 香衣 上野 紗 河瀬 未 成瀬 知美 吉池 卓也 正木 智子 本間 元康 林 明 宮本 悦子 遠野 敬子 松田 陽子 片柳 陽子 宮原 美 栗原 未紗 栗原 未紗 (28. 9. 1～28. 9. 30) 高橋 布三代 (28. 11. 1～)	伊東 香衣 上野 紗 河瀬 未 成瀬 知美 吉池 卓也 正木 智子 本間 元康 林 明 宮本 悦子 遠野 敬子 松田 陽子 片柳 陽子 宮原 美 栗原 未紗 栗原 未紗 (28. 9. 1～28. 9. 30) 高橋 布三代 (28. 11. 1～)	伊東 香衣 上野 紗 河瀬 未 成瀬 知美 吉池 卓也 正木 智子 本間 元康 林 明 宮本 悦子 遠野 敬子 松田 陽子 片柳 陽子 宮原 美 栗原 未紗 栗原 未紗 (28. 9. 1～28. 9. 30) 高橋 布三代 (28. 11. 1～)	伊東 香衣 上野 紗 河瀬 未 成瀬 知美 吉池 卓也 正木 智子 本間 元康 林 明 宮本 悦子 遠野 敬子 松田 陽子 片柳 陽子 宮原 美 栗原 未紗 栗原 未紗 (28. 9. 1～28. 9. 30) 高橋 布三代 (28. 11. 1～)	伊東 香衣 上野 紗 河瀬 未 成瀬 知美 吉池 卓也 正木 智子 本間 元康 林 明 宮本 悦子 遠野 敬子 松田 陽子 片柳 陽子 宮原 美 栗原 未紗 栗原 未紗 (28. 9. 1～28. 9. 30) 高橋 布三代 (28. 11. 1～)
精神薬理研究部	山田 光彦	斎藤 顕正	清園 正敏 中嶋 智史	山田 美佐	松松 真由美 村松 浩美	松本 恵子 江里子 江頭 織佳 (28. 6. 1～)	橋本 恵子 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵子 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵子 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵子 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵子 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵子 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵子 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵子 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	
社会精神保健研究部	伊藤 弘人	堀口 寿彦 小林 清彦 (～28. 7. 31)	橋本 恵 羽澤 恵 (29. 1. 1～)	橋本 恵 羽澤 恵 (28. 4. 20～28. 12. 31)	羽澤 恵 江里子 江頭 織佳 (28. 6. 1～)	橋本 恵 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	橋本 恵 山縣 珠希 大川 泰江 中村 聖子	
精神在理研究部	三島 和夫	肥田 昌子 北村 真吾	藤部 直子 勝沼 るり (28. 5. 1～)	勝沼 るり (～28. 4. 30) 中嶋 燕子 (～28. 5. 31) 吉村 道孝 (28. 10. 1～) ○武田 裕子 ○岡野 希美	加藤 美恵 大嶋 美奈子	加藤 美恵 大嶋 美奈子	加藤 美恵 大嶋 美奈子	加藤 美恵 大嶋 美奈子	加藤 美恵 大嶋 美奈子	加藤 美恵 大嶋 美奈子	加藤 美恵 大嶋 美奈子	加藤 美恵 大嶋 美奈子	加藤 美恵 大嶋 美奈子	加藤 美恵 大嶋 美奈子	
知的障害研究部	稲垣 真澄	北 洋輔 加賀 佳美	豊村 安寿子 鈴木 留木 田中 美沙	口土井 第一朗 (28. 7. 1～28. 12. 31) ○田川 由佳 (28. 1. 1～)	大嶋 啓子 (28. 10. 1～) 井上 悠希 (～28. 9. 30) 藤澤有可子 (～28. 7. 31)	大嶋 啓子 (28. 10. 1～) 井上 悠希 (～28. 9. 30) 藤澤有可子 (～28. 7. 31)	大嶋 啓子 (28. 10. 1～) 井上 悠希 (～28. 9. 30) 藤澤有可子 (～28. 7. 31)	大嶋 啓子 (28. 10. 1～) 井上 悠希 (～28. 9. 30) 藤澤有可子 (～28. 7. 31)	大嶋 啓子 (28. 10. 1～) 井上 悠希 (～28. 9. 30) 藤澤有可子 (～28. 7. 31)	大嶋 啓子 (28. 10. 1～) 井上 悠希 (～28. 9. 30) 藤澤有可子 (～28. 7. 31)	大嶋 啓子 (28. 10. 1～) 井上 悠希 (～28. 9. 30) 藤澤有可子 (～28. 7. 31)	大嶋 啓子 (28. 10. 1～) 井上 悠希 (～28. 9. 30) 藤澤有可子 (～28. 7. 31)	大嶋 啓子 (28. 10. 1～) 井上 悠希 (～28. 9. 30) 藤澤有可子 (～28. 7. 31)	大嶋 啓子 (28. 10. 1～) 井上 悠希 (～28. 9. 30) 藤澤有可子 (～28. 7. 31)	

部名	部長	専長	研究員	流動研究員	非常勤研究員	科学研究員 ○科学研究補助員 □科学研究心理療法士	科学研究補助員 ○科学研究専務助手 ○科学研究補助員	科学研究専務助手 ○科学研究補助員	協力研究員	併任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	外来専務助手	研究生 ○実習生
社会復帰研究部	藤井 千代	佐藤 さやか 山口 創生	水野 雅之 (~28.11.30) 松長 麻美	種田 穂乃 澤田 宇多子 (28.4.15~)	梶垣 卓悟 (28.10.1~)	田中 純子 細谷 章子 土屋 治真 (28.11.1~)	梶垣 卓悟 (~28.9.30)	坂田 晴弘 平林 直次 佐竹 直子	坂田 晴弘 平林 直次 佐竹 直子	柳戸屋 穂太郎 堀井 里江 原 敬造 伊藤 剛一郎 橋 薫子 吉田 光衛 杉山 直也 (29.1.23~)	久永 文恵 佐々木 奈穂記 小川 亮 水野 雅之 (28.12.1~)			
司法精神医学研究部	(部長専務取次)	菊池 安希子 (併任) 安藤 久美子 (併任) 河野 聡明	(併任) 梶弘 曾唯 (~28.12.31)	米田 恵子	岡野 菜穂子 高橋 和三代 (28.5.1~) 熊本 麦子 (28.10.1~)	三輪 靖子 熊本 麦子 (~28.9.30)	野田 隆政 千尋 朝波 佳奈子 中澤	岡田 幸之 安田 拓人 三澤 孝夫 渡邊 和美 柳元 克哉						曾唯 奈弘 (29.1.1~)

## Ⅱ. 研究活動状況

### 1. 精神保健研究所所長室

#### I. 概要

##### 1) 人事

平成28年度は、前年度に引き続き中込和幸が所長をつとめた。本年度の精神保健研究所常勤研究員人事は、下記のとおりである。

4月1日、自殺総合対策推進センター長に本橋豊，同自殺実態・統計分析室長に金子善博，同地域連携推進室長に反町吉秀，知的障害研究部診断研究室長に加賀佳美，29年1月1日，成人精神保健研究部診断技術研究室長に篠崎康子，社会精神保健研究部社会福祉研究室研究員に羽澄恵が着任した。

28年度退職者は，山内貴史自殺総合対策推進センター研究員（5月31日付），小林清香社会精神保健研究部社会福祉研究室長（7月31日付），曾雌崇弘司法精神医学研究部研究員（12月31日付），菊地裕絵心身医学研究部心身症研究室長（3月31日付），安藤久美子司法精神医学研究部精神鑑定研究室長（3月31日付）であった。

##### 2) 概況

平成28年4月，自殺予防総合対策センターを廃し「自殺総合対策推進センター」を新設した。新センターは自殺実態・統計分析室，自殺総合対策研究室，自殺未遂者・遺族支援等推進室，地域連携推進室の4室体制でスタートした。

精神保健研究所は，患者さんやご家族，国民に役立つ研究を実践し，国の精神保健福祉政策策定に貢献するシンクタンクとしての機能を担う一方で，研究発表分野でも精力的な活動を行っている。平成28年度には英文原著116編，和文原著39編，英文総説5編，和文総説125編，英文著書2，和文著書104編を報告した（分担執筆含む）。また，学会発表としては国際学会で82件，国内学会で274件の発表を果たした。主要学会等では，若手研究者が筆頭著者として優秀賞や奨励賞等を受賞した。詳細は各研究部の活動状況を参照されたい。恒例の第28回精神保健研究所研究報告会（平成29年2月20日）では，優秀発表賞（青申賞）に斎藤顕宜（精神薬理研究部），若手奨励賞に綾部直子（精神生理研究部）が選ばれた。

精神保健研究所は，専門家を対象とした各分野の研修（精神保健福祉，薬物依存，心身医学，自殺対策，司法精神医学，発達障害，精神医療均てん化等）を行っている。28年度には15課程を実施し合計842名が受講した。詳細は後述した。

##### 3) 精神保健研究所への主なゲスト

平成28年7月29日

厚生労働省医政局長等5名，NCNPを訪問，精研では薬物依存研究部を視察，意見交換。

平成28年9月28日

内閣官房健康・医療戦略室長等5名，NCNPを訪問，薬物依存研究部を視察，意見交換。

平成28年10月3日

厚生労働省社会・援護局長等4名，NCNPを訪問，自殺総合対策推進センターを視察，意見交換。

平成28年10月11日

厚生労働省障害保健福祉部長等3名，NCNPを見学。精研では災害時こころの情報支援センターを見学，意見交換。

平成 28 年 10 月 17 日

関東弁護士連合会より 16 名, NCNP を訪問. 精研では司法精神医学研究部を見学, 意見交換.

平成 28 年 11 月 8 日

国立羅州病院 (韓国) からの訪問団一行 (5 名, 通訳 1 名) NCNP を訪問. 精研では, 精神保健計画研究部にてレクチャーを行った.

平成 29 年 3 月 28 日

ドイツの精神科病院 Lukas-Werk Gesundheitsdienste GmbH の院長, 医師, 看護師等 9 名来訪. Mental Health Joint Meeting およびレセプションを開催.

## Ⅱ. 研究活動

### 1) 精神疾患の機能ドメインに基づく新しい治療法の開発 (精神・神経疾患研究開発費)

米国 NIMH で進められている NIMH Research Domain Criteria (RDoC) の研究フレームをもとに, 5 つの機能ドメインのうち, Negative Valence Systems (NVS, 不快の感情価: 恐怖, 不安, 喪失感など) に焦点を絞り, 統合失調症, 気分障害患者を対象に臨床評価, 脳画像, 生体サンプル情報を採取し, 機能ドメインに関連するバイオマーカーを探索し, 精神神経疾患の NVS の治療法の開発を目指した. (主任研究者: 中込和幸, 分担研究者: 功刀浩, 山田光彦, 住吉太幹, 野田隆政)

### 2) Negative Valence Systems と認知機能との関連に関する研究 (精神・神経疾患研究開発費)

「精神疾患の機能ドメインに基づく新しい治療法の開発」の分担研究課題であり, NVS と神経認知, 社会認知との関連を検証することを目的とする. 平成 28 年度は, 昨年度作成した認知リハビリテーションに特異的な動機付け評価尺度である MUSIC\_CT の日本語版の妥当性検証研究の中で, 認知リハビリテーションに参加している患者を対象に, 認知リハビリテーションに対する内発的動機付け尺度である IMI (Intrinsic Motivation Inventory) とともに, 一般的な動機付け評価尺度として採用された GCOS (The General Causality of Orientations Scale), BPNSFS (Basic Psychological Need for Satisfaction and Frustration Scale) の相互関連性を検討し, 各尺度の妥当性について検証した. (主任研究者: 中込和幸, 研究協力者: 米田恵子, 池澤聰, 竹田和良)

### 3) 血液バイオマーカーを用いたうつ病と双極性障害の鑑別診断法の開発に関する研究 (日本医療研究開発機構 (障害者対策総合研究開発事業))

本研究の主要目的は, 気分障害 (うつ病および双極性障害) の患者と健常者とを対象に, 血液中の proBDNF および成熟型 BDNF 濃度を測定し, その動態の差異から, うつ病と双極性障害との鑑別診断補助として応用可能かどうかを検証することである. さらに, 神経可塑性と関連する BDNF 濃度と認知機能との関連性についても検証した. (分担研究者: 中込和幸)

### 4) 精神疾患患者に対する早期介入とその体制の確立のための研究 (日本医療研究開発機構 (障害者対策総合研究開発事業))

EDICS (Early Detection and Intervention Center for Schizophrenia) における発症 5 年以下の早期統合失調症患者の登録者に症状, 認知機能, 社会機能の評価を行い, 家族を含めた心理教育, SDM (Shared Decision Making) に準じた抗精神病薬の選択, 用量設定を行い, 心理教育の中で提示した社会資源の紹介及び環境調整を行った上で, 地域医療機関への紹介を行った. さらに, 認知機能, 社会機能の評価に基づいて, 実施可能な者については認知リハビリテーションに導入した.

また, 昨年度改定した新たな患者手帳を用いて心理教育を開始し, 約 1 年が経過した時点で, 改訂版患者手帳及び心理教育プログラムについて, 患者及び家族の意識調査を行い, 心理教育

プログラムの改善につなげることを目指した。(分担研究者：中込和幸，研究協力者：藤井千代)

5) **大うつ病性障害患者を対象とした新規抗うつ薬の長期投与試験 (多施設共同研究)**

抗うつ薬1剤で十分な治療反応がみられなかった大うつ病患者を対象に，エスチロプラムあるいはデュロキセチンのいずれかに割り付け，8週間の治療継続性を主要評価項目とし，さらに1年間の追跡調査を行う，多施設共同非盲検無作為化可変用量長期投与試験である。平成28年度はサンプル集積に努め，年度末にエントリー目標数であった160例に達した。(主任研究者：中込和幸)

6) **気分状態の安定した双極性障害患者の認知機能改善に対する Lurasidone 併用療法 (ELICE-BD) の有効性評価のための6週間のランダム化二重盲検プラセボ対照多施設試験 (国際共同研究)**

カナダのブリティッシュコロンビア大学が代表機関を務め，カナダ，米国，スペイン，英国，日本の5か国が参加する国際共同臨床試験である。気分状態が安定し，一定の認知機能障害を有する双極性障害患者150例を対象に，ルラシドンあるいはプラセボのいずれかに割り付けて，6週間投与後に認知機能障害に対する有効性評価を行う。日本国内では当施設以外に4施設が参加し，当施設が日本国内施設の取りまとめ役を行っている。平成28年度は，評価トレーニングを2回実施し，各施設で倫理審査委員会の承認を得ている。今後，ブリティッシュコロンビア大学との契約を締結し，国内施設との契約を取り交わして，試験開始を目指す。(分担研究者)

### Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) **市民社会に対する一般的な貢献**

市民公開講座(平成29年3月5日)にて「統合失調症のリカバリーを目指した治療」講演。

(2) **専門教育面における貢献**

山梨大学客員教授

昭和大学客員教授

杏林大学客員教授

鳥取大学非常勤講師

(3) **精研の研修の主催と協力**

(4) **保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献**

厚生労働省 障害者政策総合研究事業(精神障害分野) 事前評価委員及び中間・事後評価委員

独立行政法人医薬品医療機器総合機構 専門委員

独立行政法人日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員

全国精神保健福祉連絡協議会 顧問

(5) **センター内における臨床的活動**

外来診療(統合失調症専門外来を含む)，病棟回診(リスク管理目的)

(6) **その他**

### Ⅳ. 研究業績

#### A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Pu S, Nakagome K, Itakura M, Iwata M, Nagata I, Kaneko K: The association between cognitive deficits and prefrontal hemodynamic responses during performance of working memory task in patients with schizophrenia. *Schizophr Res* 172(1-3): 114-122, 2016.
- 2) Pu S, Nakagome K, Miura A, Iwata M, Nagata I, Kaneko K: Associations between depressive symptoms and fronto-temporal activities during a verbal fluency task in patients with schizophrenia., *Sci Rep* 6: 30685, 2016.
- 3) Satoh-Asahara N, Ito H, Akashi T, Yamakage H, Kotani K, Nagata D, Nakagome K, Noda M: A Patient-Held Medical Record Integrating Depression Care into Diabetes Care. *Jpn Clin Med* 7: 19-22, 2016.
- 4) Sumiyoshi T., Nishida K, Niimura H, Toyomaki A, Morimoto T, Tani M, Inada K, Ninomiya T, Hori H, Manabe J, Katsuki A, Kubo T, Koshikawa Y, Shirahama M, Kohno K, Kinoshita T, Kusumi I, Iwanami A, Ueno T, Kishimoto T, Terao T, Nakagome K: Cognitive insight and functional outcome in schizophrenia; A multi-center collaborative study with the Specific Level of Functioning Scale - Japanese version. *Schizophr Res Cogn* 6: 9-14, 2016.
- 5) Kito S, Hasegawa T, Takamiya A, Noda T, Nakagome K, Higuchi T, Koga Y. Transcranial Magnetic Stimulation Modulates Resting EEG Functional Connectivity Between the Left Dorsolateral Prefrontal Cortex and Limbic Regions in Medicated Patients With Treatment-Resistant Depression. *J Neuropsychiatry Clin Neurosci*, 29(2): 155-159, 2017.
- 6) Pu S, Nakagome K, Itakura M, Iwata M, Nagata I, Kaneko K. Association of fronto-temporal function with cognitive ability in schizophrenia. *Sci Rep*, 7: 42858, 2017.

(2) 総説

- 1) Sheehan David V, Nakagome Kazuyuki, Asami Yuko, Pappadopulos Elizabeth A, Boucher Matthieu, Restoring function in major depressive disorder : A systematic review. *J affect disord* 215: 299-313 2017.

(3) 著書

(4) 研究報告書

(5) 翻訳

(6) その他

**B. 学会・研究会における発表**

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 中込和幸: 神経認知・社会認知 (NEAR, SCIT) のリハビリテーションについて (大会企画講演). 日本精神障害者リハビリテーション学会第 24 回長野大会. 長野, 2016.12.2.

(2) 一般演題

(3) 研究報告会

- 1) 中込和幸: 精神・神経疾患研究開発費 精神疾患の機能ドメインに基づく新しい治療法の開

発, 東京, 2016.10.25

(4) その他

**C. 講演**

- 1) 中込和幸: 統合失調症のリハビリーを目指した治療. NCNP 市民公開講座「統合失調症の診断と治療の最前線」, 東京, 2017.3.5.

**D. 学会活動**

(1) 学会主催

(2) 学会役員

日本自殺予防学会理事

日本薬物脳波学会理事

日本神経精神薬理学会副理事長, トランスレーション・メディカル・サイエンス委員会委員長, 執行委員会委員

日本臨床精神神経薬理学会理事、トランスレーショナルリサーチ (サポート) 委員会委員長

日本生物学的精神医学会理事

日本統合失調症学会評議員

日本精神科診断学会評議員

日本不安症学会評議員

日本精神保健・予防学会評議員

東京精神医学会理事

(3) 座長

- 1) 中込和幸: 神経ネットワーク, 認知機能・行動 神経画像, 第 38 回日本生物学的精神医学会・第 59 回日本神経化学学会大会, 福岡, 2016.9.10.
- 2) 中込和幸: 早期精神病のバイオマーカー. 第 20 回日本精神保健・予防学会学術集会, 東京, 2017.11.13.
- 3) 中込和幸: 統合失調症. 第 26 回日本臨床精神神経薬理学会, 大分, 2016.11.17.

(4) 学会誌編集委員等

**E. 研修**

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

- 1) 中込和幸: 作業療法重点課題研修. 日本作業療法士協会. 福岡, 2016.6.4-5.
- 2) 中込和幸: 公益社団法人墨田区医師会理事会. 墨田区医師会. 東京, 2016.7.26.
- 3) 中込和幸: 平成 28 年度松沢病院臨床精神医学講座. 東京都立松沢病院. 東京, 2016.10.18.

**F. その他**

- 1) 平成 29 年 2 月 2 日



講演会開催（精神保健研究所，精神診療部共催）「脳とこころの健康維持に寄与できる人工知能とは？」（コスモホール）。

2) 平成29年3月16～17日

第1回日韓星(日本, 韓国, シンガポール)精神保健合同シンポジウム(1st Annual Mental Health Meeting of NCMH-IMH-NCNP and International Symposium) 開催（ソウル）。河西ひとみ（心身医学研究部），橋本壘（社会精神医学研究部），北村真吾（精神生理研究部），三宅美智（精神保健計画研究部），松長麻美（社会復帰研究部）がポスター発表。

## 2. 精神保健計画研究部

### I. 研究部の概要

精神保健計画研究部は精神保健に関する計画の調査及び研究を行うため昭和61年に設置された。当研究部の英語表記である **Mental Health Policy and Evaluation** が示すように、わが国の精神保健医療の政策について研究し、その評価を行うことを主たるミッションとしている。

医療計画・障害福祉計画・介護保険事業計画が、平成30年度に同時に改訂されることを踏まえ、自治体・医療関係機関等がその着実な策定と確かなモニタリングに関する方策を提示することを今年度の研究活動の主軸におき、厚生労働省で行われた「これからの精神保健医療福祉に関する検討会」の、新たな地域精神保健医療体制のあり方の構築に関する議論と連携し、地域で効果的に展開するための具体的かつ実現可能な方法を提示する方策を構築した。さらには、平成28年度中に起こった精神医療に関わる緊急事案に対応し、隔離拘束の増加要因の検討、精神保健指定医の不正取得問題への対応の検討を始めたところである。

モニタリング研究の礎をもとに、さらにその中身を作るべく、良質な精神科医療の提供を目指すための医療の質指標の開発に関する研究、抗精神病薬の適切な減量に関する臨床研究、栄養学との関連を持った臨床介入研究などの精神疾患の予防に着目した研究活動を行っている。また、これら研究の方法論としての精神保健疫学手法を生かし、当センターの治験・臨床研究への支援や、歴史ある当センターの資料をもとに、今後の精神保健医療政策のヒントとなるべく知見を模索すべく整備も行い、当センターの発展に寄与している。これら活動は、部内のみならず、他研究部、センター病院、全国の精神科医療機関、全国の精神科関連医療団体、厚生労働省、行政機関等と幅広く協調することで、政策系の研究部としてのミッションを達成していくものと考えている。

部長：山之内芳雄、統計解析研究室長：立森久照、システム開発研究室長：西 大輔、客員研究員（10名）：赤澤正人、安西信雄、猪飼周平、伊庭幸人、末安民生、鈴木晃仁、高橋邦彦、竹島 正、野口正行、目黒克己、流動研究員（3名）：菅 知絵美、三宅美智、三宅絵美、科研費研究員（3名）：白田謙太郎、加藤直広、薄田涼子（12/1～）外来研究員：後藤基行、研究生（9名）：木村哲也、久保田明子、下田陽樹、中村江里、原田玄機、的場由木、山邊聖士、山田理絵、大野美子（4/1～）科研費研究補助員：穴澤恵美子、科研費研究助手（2名）：鴨志田由美子、長谷川かおる、センター研究助手（2名）：吉田勺美、松本裕美、外来事務助手：ソウ由香。

### II. 研究活動

#### 1) 政策の議論と連携した精神保健医療福祉のモニタリング研究

厚生労働行政推進調査事業「精神科医療提供体制の機能強化を推進する政策研究」において、精神医療関係団体・厚生労働省と連携をとり、自治体・医療関係機関等が、医療計画・障害福祉計画・介護保険事業計画が平成30年度に同時に改訂されることに対応できるよう、地域で効果的に展開するための具体的かつ実現可能なモニタリング方法を提示する方策を構築した。

○第7次医療計画の指標策定を行った。多様な精神疾患に対応した、地域包括ケアシステム構築に向けて、15疾患等領域における圏域毎の医療機関数をストラクチャ、患者数をプロセス、病期別の入院需要と、地域移行を受け入れる地域基盤必要量をアウトカム指標とした。

○これら指標値を毎年精神保健福祉資料として、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部のホームページ(<http://www.ncnp.go.jp/nimh/keikaku>)で公表することとした。

○NDBの精神医療行政データへの活用について、適当であると結論した。

○630調査に関しては、あり方検討会の議論を受け、またNDBの活用を念頭に改訂が必要であると結論した。

○都道府県が、平成32年36年度末のアウトカム目標を容易にたてることのできる推計ワークシートを開発した。

(山之内, 西, 三宅)

## 2) 医療の質指標の開発に向けた精神科医療の見える化プロジェクト (PECO)

精神科入院医療環境の変化に伴い、わが国でも医療の質を考える際に外形的なものからプロセスやアウトカムを求められるようになってきた。現状では、さまざまな立地・文化の中でそれぞれの病院が、日々工夫と努力を重ね精神医療を行っているが、それらのスタンダードはどのあたりにあるのかを客観的に知り得るソースは限られている。各病院が、提供している医療はどこがどのくらい良質といえるのか? 自院の優れた点はどこか? について、「見える」ためのシステムを作成し、PECO-Psychiatric Electronic Clinical Observation - システムとして運用を続けている。今年度は、患者満足度や医療経験のアウトカムとしての活用可能性の検討、今まで蓄積したデータから入院医療の質に関する分析の試行をした。今後も運用施設の増加を図りつつ、精神保健医療モニタリングの中での本研究の位置づけと利活用、国際的な精神医療プロセスの比較等、解決すべき課題は多い。(山之内, 三宅, 鈴木, 深澤)

## 3) 地域のストレンクスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究

地域の課題の可視化と情報共有を行い、地域の実情とニーズを踏まえた精神保健医療の協働開発を行うことを目的とした。また自立支援医療の適正な給付と精神障害者の人権擁護のあり方を検討することを目的とした。大阪府と鹿児島において、行政、精神医療関係者、研究者の協働による研究会を開催し、地域精神保健医療のあり方の検討を行った。大阪府は面積が小さく、二次医療圏は独立性が低く、大阪市内の精神病床の不足を府内および堺市の二次医療圏がカバーしていた。鹿児島県は面積が大きく、有人離島が多数あることを反映して、二次医療圏単位の独立性が強かった。行政、精神医療関係者、研究者の協働による研究会を持ち、その地域と精神医療の特徴、課題とストレンクスをまとめる取組の広がりが期待される。川崎市の進める全ての地域住民を対象にした地域包括ケアシステム構築の意義を検討した。全ての地域住民を対象とした地域包括ケアシステム構築という考え方が広がるのが期待される。川崎市の行った精神疾患を有する傷病者の救急搬送の状況及び受入れに関する調査を解析した。受診医療機関の選定は、身体疾患等が一次救急の身体救急患者において最も困難であった。厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課の収集した全国精神科医療施設などの状況についての資料を分析した。改革ビジョン終了時点での数値を数値目標と比べると改善は見られるものの目標に届いたものはなかった。NDBによる地域医療特性の描出を行い、大阪、鹿児島における研究会等において話題提供し、意見を収集した。地域毎の特性に応じて発達し維持されてきた必要な医療機能を抽出し、活かしていくことが求められる。(山之内, 立森, 菅, 後藤, 白田, 加藤, 竹島)

## 4) 精神医療に関する空間疫学を用いた疾患発症等の将来予測システムの開発に関する研究

精神科医療機関等を対象とした全国悉皆調査を実施し、わが国の精神医療に関する疾患発症や受療必要数の将来予測および精神保健医療福祉のマクロ動向の把握の基盤となる情報を収集し、データベースを整備した。精神科病院および診療所を受療する患者の受療行動(受療のための移動)について平成26年度630調査追加調査のデータに基づき、二次医療圏、都道府県を地域単位とした空間分析を、全国を対象に実施した。その結果、患者の受療移動は都道府県内でほぼ閉じている状況が確認された。また診断名による大きな変化もみられなかった。さらに厚生労働省が保有するレセプト情報の利活用可能性を検討した。平成28年10月21日にNDBデータの利用申請を行い、承諾通知を得た。公費単独支払いを除く、平成26から27年度における全精神科病床への入院状況を最大2.5年間追跡できるデータベースが利用可能となった。発症・再発の予防による受療必要数への影響の検討として世界精神保健調査日本調査のデータを活用し、患者数が多く疾病負担も大きいうつ病を対象として、運動が予防的施策として推進された場合の受療必要数推計に与える影響を検討した。また、量的なデータからは知ることのできない、精神科医療及び行政現場の地域ごとの特性、事情について現地での行政や医療機関などへの聞き取り調査などを通じて質的な情報を把握した。(立森, 菅, 加藤, 西, 竹島)

## 5) 精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健日本調査セカンド

2010年代中盤の地域住民における精神障害の頻度と受診行動、それらの関連要因や社会生活、自殺行動へ

の影響を検討することを目的とした、世界精神保健日本調査セカンド (WMHJ2) に参画する。調査は世界保健機関 (World Health Organization: WHO) の主導する国際的な精神・行動障害に関する疫学プロジェクトの一環として実施され、その調査結果は国内の疫学データとして有用なばかりでなく、統一規格に基づく国際比較にも利用可能である。予定した全ての調査が完了し、日本を代表する標本による地域住民における精神障害の頻度と受診行動などを明らかにできた。また前回調査であるWMHJ1との結果の比較を行い、この10年間の精神障害の有病率や受療行動の変化を明らかにした。(立森, 菅)

#### 6) 妊婦の精神健康に関する研究

妊娠中のうつ病は母子の双方に悪影響を及ぼすことが指摘されているが、うつ病になった場合には薬物療法を行いにくいいため、安全で有効な予防法・治療法の開発が求められている。そのため、東京医科大学産科婦人科教室、戸田中央産院、国立成育医療研究センター、中国医薬大学と連携し、妊娠うつ病の治療および産後うつ病の予防としてオメガ3系脂肪酸の安全性・有効性を検討するためのランダム化比較試験を実施した。(西, 白田, 岡崎)

#### 7) 特定健康診査を活用した睡眠・こころの健康の状況把握に関する研究

健康日本 21 (第二次) における、こころの健康・休養に関する目標項目「睡眠による休養を十分取れていないものの割合の減少」を推進するにあたり、特定健康診査 (特定健診)・特定保健指導を活用する可能性について検討することを目的に、特定健診の受診者を対象に睡眠や精神健康、働き方などを測定する質問紙調査を行った。健診機関で特定健診を受け、研究参加に同意が得られた 797 人を対象に解析を行ったところ、特定健診に含まれている「睡眠で休養が十分とれているか」どうかを確認する項目の回答は睡眠障害やこころの健康、ワーク・エンゲージメントやワーカホリズムを一定程度反映すること、さらに血圧・血糖・腹囲の異常と睡眠障害が関連する可能性があることが示唆された。(山之内, 西)

#### 8) 抗精神病薬多剤大量処方の安全で効果的な是正

我が国における抗精神病薬の多剤大量処方の安全で効果的な是正の方法について、平成 22-24 年度厚生労働科学研究費補助金「抗精神病薬の多剤大量処方の安全で効果的な是正に関する臨床研究」(研究代表者 岩田仲生 藤田保健衛生大学教授) 班は、1つずつ、ごく少しずつ、休んでも戻しても可とした減量方法 (SCAP 法) で、2 剤以上 CP (クロルプロマジン換算) 500~1,500 mg/d の入院・外来の統合失調症患者 (55 施設, 163 名) の臨床試験を実施し、SCAP 法は忍容性に優れ安全性と効果は、減量してもしなくても変わらない結果を見いだした。この知見に関して、当事者・家族、医師等への広報活動を行った。さらに大量処方されており、ドーパミンに対して感受性の高まった対象への応用は可能かについて、当センター病院と協働して臨床研究を行うべく、検討した。(山之内)

#### 9) 精神・神経疾患等の実態把握に関する研究

デュシェンヌ型筋ジストロフィー患者を対象とした NS-065/NCNP-01 の早期探索的臨床試験、メラス症候群の日本人患者を対象とした EPI-743 の早期探索的臨床試験、妊婦における心身の健康増進に向けたオメガ3系脂肪酸による無作為化比較試験、パーキンソン病発症予防のための運動症状発症前 biomarker の特定、筋ジストロフィーの臨床試験における 6 分間歩行に代わるアウトカムメジャー研究、健常成人志願者を対象とした 123I-イオフルパン SPECT の健常成人データの収集に関する多施設共同研究、広範囲加速度センサを用いたイヌ筋ジストロフィーモデルの瞬発性に基づく運動機能評に疫学・生物統計の専門家として関与し、解析計画書の作成、および中間解析、最終解析、解析結果報告書の作成および学術成果の公表のための統計解析を通して、質の高い研究成果の公表の促進に貢献した。(立森, 加藤)

#### 10) 精神保健医療福祉に関連するアーカイブズを利用した精神病床入院の研究環境の整備

NCNP には、NCNP 病院の起源である傷痍軍人武蔵療養所時代のものを含め、戦中期から戦後にかけての精神医療に関係する貴重な診療録や全国疫学調査のオリジナル資料が、相当量の規模で保管されている。今後の精神保健医療政策を考える上で、精神病床入院が歴史的にどう展開されてきたのかについて考察するため、特に医療費支払区分別に在院期間を検証し、生活保護法での医療扶助入院の場合、社会保険での入院よりも長期在院傾向があることを重回帰分析によって検討している、また、こうした研究のため、資料の保存措置と整備を行った。(山之内, 後藤)

### Ⅲ. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 記者勉強会. 第2回記者勉強会, 東京, 2016.7.15. (山之内)
- ・ 正しい抗精神病薬の減らし方. 小金井市精神障害者家族会, 東京, 2016.9.10. (山之内)
- ・ 府中市, 静岡県, 久留米市などの自治体が主催する講演会・研修会の講師を務め, 市民社会に対する精神保健の啓発に貢献. (西)
- ・ 支援付き住宅推進会議 委員 (立森)

#### (2) 専門教育面における貢献

- ・ 藤田保健衛生大学医学部医学科 3 学年, 客員准教授. (山之内)
- ・ 主な精神疾患の理解/精神科薬物療法の理解. 精神科看護初心者研修会, 東京, 2016.5.12. (山之内)
- ・ 抗精神病薬の多剤併用の適正化. 第10回 精神科専門薬剤セミナー, 東京, 2016.9.10. (山之内)
- ・ 日本の精神保健の現状と課題. 全国保健所長会 平成 28 年度地域保健総合推進事業実践研修, 兵庫, 2016.9.20. (山之内)
- ・ 抗精神病薬多剤大量処方からの安全で現実的な減量法: SCAP 法. 平成 28 年度京都精神神経科診療所協会学術講演会, 京都, 2016.11.5. (山之内)
- ・ 精神疾患合併になぜ取り組むのか. ユマニチュードによる救急医療のメンタル患者への対応研修. 平成 28 年度自殺ハイリスク者対策推進事業, 愛知, 2016.11.19. (山之内)
- ・ 単剤化・低用量化への国の取り組み. 日本精神神経学会多職種協働委員会, 宮城, 2016.11.27. (山之内)
- ・ NCNP 計画部で行う PECO について 質に着目し自律的な改善を促す少し深掘したモニタリング. 全国自治体病院協議会 精神科特別部会運営委員会, 東京, 2016.12.9. (山之内)
- ・ 新しい医療計画に向けた精神医療の可視化. 平成 28 年度静岡県精神保健指定医会議, 静岡, 2017.2.4. (山之内)
- ・ 琉球大学医学部保健学科「うつ病にならないためのセルフケア」講義. (西)
- ・ 人間ドック健診情報管理指導士ブラッシュアップ研修会, 研修講師. (西)
- ・ 人事院「こころの健康づくりの研修(本府省健康管理者対象)」, 研修講師. (西)
- ・ 学術誌 PLOS ONE, Academic Editor. (西)
- ・ 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻精神保健学分野, 客員研究員, 研究者・院生との共同研究. (立森, 西)
- ・ 防衛医科大学医学部, 学生実習協力. (立森, 西)
- ・ 東京大学医学部健康科学看護学科, 学生実習協力. (立森, 西)
- ・ 情報・システム研究機構統計数理研究所, 客員准教授, 研究者・院生との共同研究 (立森)
- ・ 立正大学大学院心理学研究科「心理学研究法特論」の講義, 非常勤講師. (立森)
- ・ 大分県立看護科学大「保健医療政策評価」の講義, 非常勤講師 (立森)
- ・ 積善会看護専門学校「医療倫理学」の講義. (三宅)
- ・ 日本精神科看護協会「行動制限最小化」等の研修活動(11回). (三宅)
- ・ 斉藤病院 看護研究指導. (三宅)
- ・ 「就労支援フォーラム NIPPON2015」運営委員会委員. (三宅)
- ・ 日本精神看護専門学術集会 査読委員. (三宅)
- ・ 東京女子大学「文化心理学(文化と認知)」の講義. (菅)
- ・ 玉川大学「心理学研究法 B」の実験等の教育補助. (菅)
- ・ 武蔵野大学「コミュニティ心理学」の講義, 非常勤講師. (臼田)

## (3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 「精神保健福祉における地域診断」第53回精神保健指導過程研修, 2016.9.29-10.1. (山之内, 西, 鈴木)

## (4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

- ・ 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築支援事業 広域アドバイザー (山之内)
- ・ 公益社団法人 日本精神神経学会 広報委員会 2016年度委員 (山之内)
- ・ 公益社団法人 日本精神科病院協会 精神科版二次医療圏データベース部会 (山之内)
- ・ 厚生科学審議会 専門委員 健康日本21 (第二次) 推進専門委員会 (山之内)
- ・ 厚生労働省 精神科医療体制確保研修 (精神科病院における安心・安全な医療を提供するための研修) 事業評価委員会 (山之内)
- ・ 全国保健所長会 平成28年度地域保健総合推進事業 (山之内)
- ・ 平成28年度日本医療研究開発機構研究費 長寿・障害総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業)「精神科病院の入院処遇における医療水準の向上システムの開発に関する研究 (研究開発代表者: 山之内芳雄)」内「精神科病院の入院処遇における医療水準の向上システムの開発と運用」(山之内)
- ・ 平成28年度 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)) 「精神科医療提供体制の機能強化を推進する政策研究 (研究代表者: 山之内芳雄)」内「研究統括・データベース・データツールの作成, 需給予測」(山之内)
- ・ 平成28年度厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)「地域のストレングスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」(竹島, 山之内, 立森, 後藤, 菅)
- ・ 平成28年度 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業(精神障害分野))「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究 (研究代表者: 金 吉晴)」内「評価ツール開発, モデル地域連携」(山之内)
- ・ 平成28年度 国立精神・神経医療センター 精神・神経疾患研究開発費「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究 (研究代表者: 大塚俊弘)」内「ケースマネジメントのモニタリング指標・技術開発に関する研究」(山之内)
- ・ 平成28年度自殺ハイリスク者対策推進事業 (自殺未遂者地域支援体制推進事業), 愛知県 (山之内)
- ・ 平成28年度 国立がん研究センター研究開発費「国立高度専門医療研究センター独自の政策調査機能に関する研究」内「国立精神・神経研究センターにおける政策調査機能の検討」(山之内)
- ・ 平成28年度 日本学術振興会 科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金 (基盤研究 (C)))「急性期病院におけるせん妄予防管理の標準化に向けたクリニカルパスの開発及び効果検証 (研究代表者: 小林美也)」内「クリニカルパスの開発・検証, データ分析」(山之内)
- ・ 愛媛県地域保健研究集会「周産期のうつに対するスクリーニングと対策」, 講義. (西)
- ・ 人事院事務総局職員福祉局心の健康づくり指導委員会委員 人事院事務総局職員福祉局 職場復帰相談医. (西)
- ・ 平成28年度 厚生労働科学研究費補助金(障害者施策総合研究事業 (精神障害分野))「精神医療にも対応した地域包括ケアシステムのモニタリングに関する政策研究」(西)
- ・ 平成28年度 国立精神・神経医療センター 精神・神経疾患研究開発費「 $\omega$ 3系脂肪酸によるうつ病の予防・治療を目指した基礎・臨床の融合的研究」(西)
- ・ 平成28年度 厚生労働科学研究費補助金「労働生産性の向上に寄与する健康増進手法の開発に関する研究 (研究代表者: 島津明人)」内「労働生産性の心理社会的指標の検討」(西)
- ・ 平成28年度日本医療研究開発機構研究費 長寿・障害総合研究事業 (障害者対策総合研究開発事業)「精神医療に関する空間疫学を用いた疾患発症等の将来予測システムの開発に関する研究 (研究開発代表者: 立森久照)」(立森, 西, 竹島, 菅, 加藤)
- ・ 平成28年度精神・神経疾患研究開発費「筋ジストロフィーのエビデンス創出を目的とした臨床研究と体

制整備」内「筋ジストロフィーの臨床試験における生物統計（研究代表者：小牧宏文）」（立森）

- ・ 平成 28 年度日本医療研究開発機構研究費 医薬品等規制調和・評価研究事業「患者レジストリーデータを活用した臨床開発効率化のための新たな臨床研究デザインの開発（研究代表者：林邦彦）」内「生物統計学的検討と患者レジストリへの応用」（立森）
- ・ 平成 28 年度日本医療研究開発機構 臨床研究等 ICT 基盤構築事業「医療の質向上を目的とした臨床データベースの共通プラットフォームの構築（研究代表者：宮田裕章）」内「NCD 及び DPC を用いたビッグデータ分析の方法論の監修」（立森）
- ・ 平成 28 年度戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）「安全な暮らしをつくる新しい公／市空間の構築」研究開発領域「都市型コミュニティ（川崎市）における援助希求の諸様態に対応した介入・支援に関する研究開発と社会実装（研究代表者：島園進）」（立森）
- ・ 平成 28 年度 日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））「精神医療の行動制限最小化に参画するピアサポーターの教育プログラムの開発と普及」（三宅）
- ・ 平成 28 年度 日本学術振興会 科学研究費助成事業（若手研究 B）「戦後精神病床入院の社会政策史研究：公的支出形態の 3 類型の視点から」科学研究費助成事業（若手研究 B）（後藤）
- ・ 平成 28 年度 公益財団法人家計経済研究所 家計経済研究所研究振興助成事業「公的支出形態の 3 類型から見た戦後日本の措置入院および同意入院の研究」（後藤）

(5) センター内における臨床的活動

NCNP 病院の行動制限最小化委員会（毎月第三月曜）において、PECO で得られたデータ集計をもとに、NCNP 病院での医療の質向上に向けた取り組みを行っている。（山之内，三宅）

(6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Nishi D, Suzuki Y, Nishida J, Mishima K, Yamanouchi Y. Personal lifestyle as a resource for work engagement. *Journal of Occupational Health* 24 59(1): 17-23, 2017.
- 2) Nishi D, Su KP, Usuda K, Chiang YJ, Guu TW, Hamazaki K, Nakaya N, Sone T, Sano Y, Ito H, Isaka K, Hashimoto K, Hamazaki T, Matsuoka YJ. Omega-3 fatty acid supplementation for expectant mothers with depressive symptoms in Japan and Taiwan: an open-label trial. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 70(6): 253-4, 2016.
- 3) Nishi D, Su KP, Usuda K, Chiang YJ, Guu TW, Hamazaki K, Nakaya N, Sone T, Sano Y, Tachibana Y, Ito H, Isaka K, Hashimoto K, Hamazaki T, Matsuoka YJ. The synchronized trial on expectant mothers with depressive symptoms by omega-3 PUFAs (SYNCHRO): Study protocol for a randomized controlled trial. *BMC Psychiatry* 16(1): 321, 2016.
- 4) Nishi D, Kawashima Y, Noguchi H, Usuki M, Yamashita A, Koido Y, Matsuoka YJ. Resilience, posttraumatic growth and work engagement among health care professionals after the Great East Japan Earthquake: A 4-year prospective follow-up study. *Journal of Occupational Health* 58(4): 347-353, 2016.
- 5) Usuda K, Nishi D, Makino M, Tachimori H, Matsoka Y, Sano Y, Konishi T, Takeshima T. Prevalence and related factors of common mental disorders during pregnancy in Japan: a cross-sectional study. *BioPsychoSocial Medicine* published online 2016.
- 6) Kawashima Y, Nishi D, Noguchi H, Usuki M, Yamashita A, Koido Y, Matsuoka YJ. Post-traumatic Stress Symptoms and Burnout among Medical Rescue Workers 4 Years after the Great East Japan

- Earthquake: A Longitudinal Study. *Disaster Medicine and Public Health Preparedness* 10(6): 848-853, 2016.
- 7) Yoshikawa E, [Nishi D](#), Matsuoka Y. Association between regular physical exercise and depressive symptoms mediated through social support and resilience in Japanese company workers: A cross-sectional study. *BMC Public Health* 16: 553, 2016.
  - 8) Yoshikawa E, [Nishi D](#), Matsuoka Y. Association between frequency of fried food consumption and resilience to depression in Japanese company workers: A cross-sectional study. *Lipids in Health and Disease* 15(1): 156, 2016.
  - 9) Okumura Y, [Nishi D](#). Risk of recurrent overdose associated with prescribing patterns of psychotropic medications after nonfatal overdose. *Neuropsychiatric Disease and Treatment* 13: 653-665, 2017.
  - 10) Matsuoka Y, Hamazaki K, [Nishi D](#), Hamazaki T. Change in blood levels of eicosapentaenoic acid and posttraumatic stress symptom: A secondary analysis of data from a placebo-controlled trial of omega-3 supplements. *Journal of Affective Disorders* 205: 289-91, 2016.
  - 11) Takahashi K, [Tachimori H](#), [Kan C](#), [Nishi D](#), Okumura Y, [Kato N](#), [Takeshima T](#): Spatial analysis for regional behavior of patients with mental disorders in Japan. *Psychiatry Clin Neurosci* 2016.
  - 12) Tanisho Y, Shigemura J, Kubota K, Tanigawa T, Bromet EJ, Takahashi S, Matsuoka Y, [Nishi D](#), Nagamine M, Harada N, Tanichi M, Smith AK, Takahashi Y, Shimizu K, Nomura S, Yoshino A, Fukushima NEWS Project Collaborators. The longitudinal mental health impact of Fukushima nuclear disaster exposures and public criticism among power plant workers: the Fukushima NEWS Project study. *Psychological Medicine* 46(15): 3117-3125, 2016.
  - 13) Noguchi M, [Tachimori H](#), Naganuma Y, Zhao X, Kono T, Horii S, [Takeshima T](#). Families' opinions about caring for patients with psychiatric disorders after involuntary hospitalization in Japan. *Int J Soc Psychiatry* 62(2): 167-175, 2016.
  - 14) Matsumoto T, [Tachimori H](#), Takano A, Tanibuchi Y, Funada D, Wada K. Recent Changes in the Clinical Features of Patients with New Psychoactive Substances-Related Disorders in Japan: Comparison of the Nationwide Mental Hospital Surveys on Drug-related Psychiatric Disorders undertaken in 2012 and 2014. *Psychiatry Clin Neurosci* 70(12): 560-566, 2016.
  - 15) Scott KM, Lim CC, Hwang I, Adamowski T, Al-Hamzawi A, Bromet E, Bunting B, Ferrand MP, Florescu S, Gureje O, Hinkov H, Hu C, Karam E, Lee S, Posada-Villa J, Stein D, [Tachimori H](#), Viana MC, Xavier M, Kessler RC: The cross-national epidemiology of DSM-IV intermittent explosive disorder. *Psychol Med* 46(15): 3161-3172, 2016.
  - 16) Ishikawa H, Kawakami N, Kessler R.C, & World Mental Health Japan Survey, Collaborators (Ono Y, Nakane Y, Nakamura Y, Fukao A, Horiguchi I, [Tachimori H](#), Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Oorui M, Funayama K, Naganuma Y, Furukawa TA, Kobayashi M, Ahiko T, Yamamoto Y, [Takeshima T](#), Kikkawa T): Lifetime and 12-month prevalence, severity and unmet need for treatment of common mental disorders in Japan: Results from the final dataset of world mental health Japan survey. *Epidemiol Psychiatr Sci*, 25(3), 217-229, 2016.
  - 17) Yamauchi T, [Takeshima T](#), Hirokawa S, Oba Y, Koh E: An Educational Program for Nursing and Social Work Students Using Artwork Created by People with Mental Health Problems. *Int J Ment Health Addiction* 15:503-513, 2017.
  - 18) Fayyad J, Sampson NA, Hwang I, Adamowski T, Aguilar-Gaxiola S, Al-Hamzawi A, Andrade LH, Borges G, de Girolamo G, Florescu S, Gureje O, Haro JM, Hu C, Karam EG, Lee S, Navarro-Mateu F, O'Neill S, Pennell BE, Piazza M, Posada-Villa J, Ten Have M, Torres Y, Xavier M, Zaslavsky AM, Kessler RC, [WHO World Mental Health Survey Collaborators](#): The descriptive epidemiology of DSM-IV Adult ADHD in the World Health Organization World Mental Health Surveys. *Atten Defic*



- Hyperact Disord. 9(1):47-65, 2017.
- 19) 山之内芳雄：【特集 出口を見据えた精神医療—何処をめざし何処に診るか—】21世紀の精神医療の変化：さまざまなデータから. 精神保健研究 62 : 7-14, 2016.
  - 20) 山之内芳雄, 大野美子:精神疾患を合併する救急患者対応の現状と課題. 総合病院精神医学 29(1) : 30-36, 2017.
  - 21) 松原三郎, 安西信雄, 太田順一郎, 大森哲郎, 小高 晃, 佐藤茂樹, 佐野威和雄, 羽藤邦利, 三國雅彦, 山之内芳雄, 吉住 昭, 渡辺義文:「病床機能分化と地域移行」に関する学会員へのアンケート調査結果報告. 精神神経学会誌 118(9(別冊)), 680-687, 2016.
  - 22) 黒田研二, 岩成秀夫, 太田順一郎, 根本 康, 吉住 昭, 新垣 元, 安西信雄, 池田 学, 磯村大, 一瀬邦弘, 伊藤哲寛, 大海聖子, 大森哲郎, 岡崎伸郎, 加藤春樹, 小高 晃, 佐竹直子, 佐藤茂樹, 佐藤忠彦, 佐野威和雄, 関 健, 竹島 正, 羽藤邦利, 松原三郎, 三國雅彦, 水野雅文, 三野 進, 森村安史, 門司 晃, 渡辺義文, 山下俊幸, 山之内芳雄:【資料】都道府県による精神疾患の医療計画に関する分析と提言. 精神神経学雑誌 118 (4), 199-211, 2016
  - 23) 白田謙太郎, 西 大輔, 佐野 養, 松岡 豊 : 出産に関するプレッシャーと産後抑うつ症状の関連についての縦断的検討. 総合病院精神医学 28(2) : 147-155, 2016.
  - 24) 永田貴子, 平林直次, 立森久照 他 : 医療観察法指定入院医療機関退院後の予後調査. 精神医学 58(7) : 633-643, 2016.
  - 25) 後藤基行, 中村江里, 前田克実 : 戦時精神医療体制における傷痍軍人武蔵療養所と戦後病院精神医学—診療録に見る患者の実像と生活療法に与えた影響— . 社会事業史研究 50 : 143-159, 2016.
  - 26) 白神敬介, 竹島 正, 川野健治, 小野善郎, 藤林武史, 川崎二三彦, 白川教人, 勝又陽太郎, 大塚俊弘 : 児童相談所で把握される自殺の実態と自死遺児支援の状況. 厚生指標 63(6): 8-14. 2016.
  - 27) 小高真美, 松本俊彦, 高井美智子, 山内貴史, 白川教人, 竹島 正 : 自殺のリスク要因としての身体疾患 心理学的剖検研究における自殺事例の定性的検討. 精神科治療学 31(11): 1477-1485, 2016.
- (2) 総説
- 1) 山之内芳雄 : 多剤併用を最適化する基礎知識 抗精神病薬の減量支援シートの使い方. 月刊薬事 58(8) : 47-50, 2016.
  - 2) 山之内芳雄 : 統合失調症における抗精神病薬の減量・中止の仕方. 精神科 29(3) : 216-220, 2016.
  - 3) 山之内芳雄 : 多剤大量投与の是正は不安ですか? ~臨床試験実施施設アンケートから~. 外来精神医療 17(1) : 19-21, 2017.
  - 4) 山之内芳雄, 小林美亜 : 急性期精神医療に役立つクリニカルパスとは. 精神科救急 19 : 29-31, 2016
  - 5) 山之内芳雄 : 【統合失調症のベストプラクティス】 (第II部) 各論 薬物療法の進歩と課題 抗精神病薬の減薬プログラム. 精神科治療学 31(増刊) : 109-112, 2016.
  - 6) 助川鶴平, 山之内芳雄, 稲垣 中, 稲田俊也, 吉尾 隆, 吉村玲児, 岩田仲生 : 【多角的な視点で精神科薬物治療を見直す】安全な適正化という視点で多剤併用大量投与の問題を考える. 臨床精神薬理 19(10) : 63-1469, 2016.
  - 7) 竹島 正, 立森久照, 高橋邦彦, 山之内芳雄 : 【精神保健医療福祉の改革】精神保健医療福祉の改革ビジョンの成果と今後の課題(解説/特集). 公衆衛生 80(11) : 790-796, 2016.
  - 8) 西 大輔 : マタニティブルーとうつ 妊娠期のうつへのアプローチ. 日本産科婦人科学会雑誌 68(12) : 3066-3067, 2016.
  - 9) 西 大輔, 松岡 豊 : 栄養学から見た精神疾患の予防・治療の可能性 オメガ3系脂肪酸による精神疾患へのアプローチ. 日本生物学的精神医学会誌 27(4) : 182-187, 2016.
  - 10) 西 大輔 : 職場におけるレジリエンス. 産業ストレス研究 23(3) : 195-201, 2016.
  - 11) 西 大輔 : レジリエンスを考える. 保健の科学 58 : 724-729, 2016.
  - 12) 立森久照 : 今さら聞けないこの言葉 オッズ比(odds ratio). 精神科臨床サービス 16(2) : 298-299, 2016.

- 13) 立森久照：今さら聞けないこの言葉 メタ解析. 精神科臨床サービス 16(3)：425-426, 2016.
- 14) 立森久照：今さら聞けないこの言葉 効果量(エフェクト・サイズ). 精神科臨床サービス 16(4)：112-113, 2016.
- 15) 立森久照：今さら聞けないこの言葉 有意確率. 精神科臨床サービス 17(1)：113-114, 2016.
- 16) 立森久照：これから論文を書く人のための統計の使い方と報告の仕方 (第15回 ポスト P<0.05 時代へ—アメリカ統計学会の声明より). 日本社会精神医学会雑誌 25(2)：180-181, 2016.
- 17) 立森久照：これから論文を書く人のための統計の使い方と報告の仕方 (第16回「ポスト P<0.05 時代」のための統計学—ベイズ統計を理解する). 日本社会精神医学会雑誌 25(3)：291-293, 2016.
- 18) 立森久照：これから論文を書く人のための統計の使い方と報告の仕方 (第17回「ポスト P<0.05 時代」のための統計学—ベイズ統計を理解する—その2). 日本社会精神医学会雑誌 25(4)：418-419, 2016.
- 19) 立森久照：これから論文を書く人のための統計の使い方と報告の仕方 (第18回「ポスト P<0.05 時代」のための統計学—ベイズ統計を理解する—その3). 日本社会精神医学会雑誌 26(1)：96-97, 2017.
- 20) 竹島 正, 立森久照, 高橋邦彦：わが国の認知症施策の未来⑥認知症施策とこれからの精神保健医療福祉のあり方. 老年精神医学雑誌 27(7)：777-782, 2016.
- 21) 三宅美智, 今川亮介：特集7 救急・急性期における行動制限最小化の実現 当事者と一緒に試みた行動制限最小化の取り組み. 精神科救急 19：65-68, 2016.

### (3) 著書

- 1) 山之内芳雄, 樋口輝彦, 市川宏伸, 神庭重信, 朝田隆, 中込和幸：抗精神病薬の減量・スイッチングの方法. 今日の精神疾患治療指針第2版, 医学書院, 東京, pp96-97, 2016.
- 2) 山之内芳雄：抗精神病薬の減薬プログラム. 「精神科治療学」第31巻増刊号 統合失調症のベストプラクティス, 「精神科治療学」編集委員会, 星和書店, 東京, pp109-112, 2016.
- 3) 西 大輔：心的外傷後ストレス障害. 下山晴彦・中嶋義文編集：公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法, 医学書院, 東京, pp79-81, 2016.
- 4) 西 大輔, 金 吉晴：心的外傷後ストレス障害. 樋口輝彦・市川宏伸・神庭重信・朝田 隆・中込和幸編：今日の精神疾患治療指針第2版. 医学書院, 東京, pp266-271, 2016.
- 5) 西 大輔, 金 吉晴：急性ストレス障害. 樋口輝彦・市川宏伸・神庭重信・朝田 隆・中込和幸編：今日の精神疾患治療指針第2版. 医学書院, 東京, pp271-273, 2016.
- 6) 立森久照：うつの頻度と会社負担. 神庭重信編：うつ病の臨床 現代の病理と最新の治療. 最新医学社, 東京, pp15-18, 2016.
- 7) 立森久照：因果推論とはじめ, 岩波書店, 東京, pp7-25, 2016.
- 8) 立森久照：第8章 精神医療資源 精神科病院. 山下晴彦, 中嶋義文編：精神医療・臨床心理の知識と技法. 医学書院, 東京, pp138-139, 2016.
- 9) 立森久照：第9章 資料9-0-1 概況—患者調査をもとにした推計精神障害者数の推移. 精神保健医療福祉白書委員会編：精神保健医療福祉白書 2017 地域社会での共生に向けて. 中央法規出版株式会社, 東京, pp191-192, 2016.
- 10) 加藤直広, 立森久照, 高橋邦彦：地図の上で階層ベイズモデリング. 岩波データサイエンス委員会編：岩波データサイエンス Vol.4. 岩波書店, 東京, pp55-67, 2016.
- 11) 伊庭幸一, 立森久照, 林 岳彦：特集 因果推論—実世界のデータから因果を読む. 岩波書店, 東京, 2016.
- 12) 伊庭幸一, 深谷肇一, 久保拓弥, 立森久照：特集 地理空間情報処理. 岩波データサイエンス委員会編：岩波データサイエンス Vol.4. 岩波書店, 東京, pp4, 2016.
- 13) 三宅美智：行動制限の最小化. 精神保健医療福祉白書 2017 地域社会での共生に向けて. pp186. 2016.
- 14) 竹島 正, 立森久照：精神科診療所の統合失調症患者の地域医療における役割のマクロ実態. メンタルクリニックでの主要な精神疾患への対応 [3] 統合失調症, 気分障害. pp8-13, 2016

(4) 研究報告書

- 1) 山之内芳雄：精神科病院の入院処遇における医療水準の向上システムの開発と運用。日本医療研究開発機構研究費（長寿・障害総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業)）「精神科病院の入院処遇における医療水準の向上システムの開発に関する研究」。平成28年度 総括・分担研究報告書。2017.
- 2) 山之内芳雄：研究統括・データベース・データツールの作成、需給予測。厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））「精神科医療提供体制の機能強化を推進する政策研究」。平成28年度 総括・分担研究報告書。pp1-110, 2017.
- 3) 山之内芳雄：評価ツール開発、モデル地域連携。厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究」。平成28年度 総括・分担研究報告書。pp53-70, 2017.
- 4) 山之内芳雄：ケースマネジメントのモニタリング指標・技術開発に関する研究。精神・神経疾患研究開発費「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」。平成28年度 総括・分担研究報告書。2017.
- 5) 山之内芳雄：平成28年度自殺ハイリスク者対策推進事業（自殺未遂者地域支援体制推進事業）。平成28年度 総括・分担研究報告書。2017.
- 6) 山之内芳雄：国立精神・神経研究センターにおける政策調査機能の検討。国立がん研究センター研究開発費「国立高度専門医療研究センター独自の政策調査機能に関する研究」。平成28年度 総括・分担研究報告書。2017.
- 7) 山之内芳雄：クリニカルパスの開発・検証、データ分析。科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））「急性期病院におけるせん妄予防管理の標準化に向けたクリニカルパスの開発及び効果検証」。平成28年度 総括・分担研究報告書。2017.
- 8) 山之内芳雄：地域のストレングスを活かすための NDB の活用に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「地域のストレングスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究(研究代表者:竹島 正)」平成28年度 総括・分担研究報告書。pp67-69, 2017.
- 9) 西 大輔：厚生労働科学研究費補助金(障害者施策総合研究事業（精神障害分野））「精神医療にも対応した地域包括ケアシステムのモニタリングに関する政策研究」。平成28年度 総括・分担研究報告書。2017.
- 10) 西 大輔：国立精神・神経医療研究センター 神経疾患研究開発費「 $\omega$ 3系脂肪酸によるうつ病の予防・治療を目指した基礎・臨床の融合的研究」。平成28年度 総括・分担研究報告書。2017.
- 11) 西 大輔：発症・再発の予防による受療必要数への影響の検討。日本医療研究開発機構研究費（長寿・障害総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業)）「精神医療に関する空間疫学を用いた疾患発症等の将来予測システムの開発に関する研究」平成28年度 総括・分担研究報告書。2017.
- 12) 西 大輔：マインドフルネス及びレジリエンス向上とリカバリー。日本医療研究開発機構研究費（長寿・障害総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業)）「当事者を含めた他職種によるリカバリーカレッジの運用のためのガイドラインの開発」平成28年度 総括・分担研究報告書。2017.
- 13) 西 大輔：労働生産性の向上に寄与する健康増進手法の開発に関する研究。厚生労働科学研究費補助金「労働生産性の心理社会的指標の検討」平成28年度 総括・分担研究報告書。2017.
- 14) 立森久照, 菅知絵美, 加藤直広, 西 大輔, 竹島 正：630 調査等による精神保健医療福祉のマクロ動向の分析に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「地域のストレングスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究（研究代表者：竹島正）」平成28年度 総括・分担研究報告書。pp53-66, 2017.
- 15) 立森久照：精神医療に関する空間疫学を用いた疾患発症等の将来予測システムの開発に関する研究。（研究総括）。日本医療研究開発機構研究費（長寿・障害総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業)）平成28年度 総括・分担研究報告書。2017.
- 16) 立森久照：筋ジストロフィーの臨床試験における生物統計。精神・神経疾患研究開発費「筋ジストロフ

- イーのエビデンス創出を目的とした臨床研究と体制整備」平成28年度 総括・分担研究報告書. 2017.
- 17) 立森久照: 生物統計学的検討と患者レジストリへの応用. 日本医療研究開発機構研究費 医薬品等規制調和・評価研究事業「患者レジストリーデータを活用した臨床開発効率化のための新たな臨床研究デザインの開発」平成28年度 総括・分担研究報告書. 2017.
- 18) 立森久照: NCD 及び DPC を用いたビッグデータ分析の方法論の監修. 日本医療研究開発機構 臨床研究等 ICT 基盤構築事業「医療の質向上を目的とした臨床データベースの共通プラットフォームの構築」平成28年度 総括・分担研究報告書. 2017.
- 19) 立森久照: 厚生労働科学研究費補助金(臨床研究等 ICT 基盤構築研究事業)「死亡診断書の死因情報の標準化支援に関する研究」平成28年度 総括・分担研究報告書. 2017.
- 20) 立森久照: 都市型コミュニティ(川崎市)における援助希求の諸様態に対応した介入・支援に関する研究開発と社会実装. 戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発)「安全な暮らしをつくる新しい公/市空間の構築. 研究開発領域」平成28年度 総括・分担研究報告書. 2017.
- 21) 竹島 正, 立森久照, 菅知絵美: 地域ニーズに対応した地域精神保健医療の協働開発に関する研究(3) 川崎市における精神疾患を合併する身体救急患者の救急搬送受け入れ状況に関する調査. 厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「地域のストレングスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究(研究代表者:竹島 正)」平成28年度 総括・分担研究報告書. pp37-52, 2017.
- 22) 竹島 正, 笹井康典, 高橋邦彦, 籠本孝雄, 河崎健人, 立森久照, 堤 俊仁, 本屋敷美奈, 山之内芳雄, 余田俊和, 渡辺洋一郎, 竹之内薫, 宇田英典, 福迫 剛, 松下兼介, 松永絹子, 山畑良蔵, 後藤将志, 山田 敦: 地域ニーズに対応した地域精神保健医療の協働開発に関する研究(1) 大阪研究会・鹿児島研究会の報告. 厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「地域のストレングスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究(研究代表者:竹島 正)」平成28年度 総括・分担研究報告書. pp7-29, 2017.
- 23) 後藤基行: 「日本の精神病床入院システムの実証研究と政策科学研究—歴史的アーカイブズ構築と共に」日本学術振興会 科学研究費助成事業(若手研究 B) 平成28年度 総括・分担研究報告書. 2017.
- 24) 後藤基行: 「日本における精神病床入院メカニズムの実証研究—3 類型化の視点から—」. 公益財団法人家計経済研究所 特別研究員奨励費(PD) 平成28年度 総括・分担研究報告書. 2017.
- 25) 竹島 正: 地域のストレングスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業)「地域のストレングスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究(研究代表者:竹島 正)」平成28年度 総括研究報告書. pp1-5, 2017.
- 26) 竹島 正, 岡部 健, 野木 岳, 森江信子, 津田多佳子, 鈴木 剛, 明田久美子, 植木美津枝, 南里清香, 右田佳子, 熊倉陽介, 大塚俊弘: 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に向けての課題整理-川崎市の取組から-. 厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「地域のストレングスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究(研究代表者:竹島 正)」平成28年度 総括・分担研究報告書. pp31-36, 2017.
- 27) 岩谷 力, 我澤賢之, 後藤将志, 清水寛之, 竹島 正: 自立支援医療の適正な提供に関する研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「地域のストレングスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究(研究代表者:竹島 正)」平成28年度 総括・分担研究報告書. pp71-92, 2017.

(5) 翻訳

(6) その他

## B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kodaka M, Takai M, Tachimori H : Risk and protective factors for elder suicide in Japan. 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention. Tokyo, 2016.05.18-21
- 2) Nishi D, Su KP, Usuda K, Chiang YJ, Guu TW, Hamazaki K, Nakaya N, Sone T, Hashimoto K, Hamazaki T, Matsuoka YJ. Omega-3 fatty acids in the treatment of pregnant women with depressive symptoms in Japan and Taiwan: a cultural perspective. 17<sup>th</sup> Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting, Kaohsiung, Taiwan, 2016.11.3-5.
- 3) 西 大輔: 妊娠期のうつへのアプローチ. 第68回日本産科婦人科学会学術講演会. 東京, 2016.4.21.-23.
- 4) 有本妥美, 三宅美智: 身体合併症治療に伴う行動制限をどのように最小化するか. 第41回日本精神科看護学術集会教育セミナー, 岩手, 2016.6.10.-12.
- 5) 西 大輔, 松岡 豊: がん患者に対する栄養精神医学的介入の可能性. シンポジウム「がん患者・家族の抑うつ・不安に対する新たなアプローチ」第13回日本うつ病学会. 名古屋, 2016.8.6.
- 6) 西 大輔: 妊婦のうつ症状に対するオメガ3系脂肪酸の可能性. シンポジウム「食物由来物質による情動脳機能のコントロール」第38回日本生物学的精神医学会・第59回日本神経化学会大会合同年会, 福岡, 2016.9.8.
- 7) 山之内芳雄: シンポジウム「高規格を考えるための機能と指標とは」第24回日本精神科救急学会学術総会. 福岡, 2016.10.07.
- 8) 佐伯幸治, 太田 薫, 緒方正通, 佐藤 功, 保谷美紀, 村田琢磨, 三宅美智, 西村武彦, 山之内芳雄: 精神科病棟における患者満足度に関連する看護ケアの検討. 第24回日本精神科救急学会学術総会, 福岡, 2016.10.7.-8.
- 9) 立森久照: 空間疫学的手法により可視化された情報は川崎市の地域包括ケアでどのように活用できるか. 第26回学術大会委員会, 神奈川, 2017.2.25.

(2) 一般演題

- 1) Kuraoka M, Kimura E, Nagata T, Okada T, Aoki Y, Tachimori H, Yonemoto N, Imamura M, Takeda S: Serum osteopontin in dystrophic dogs is elevated during muscle regeneration. The 45th European Muscle Conference, Montpellier, France, 2016.9.5.
- 2) Usuda K, Nishi D, Sano Y, Matsuoka YJ. Feeling social pressure as a predictor for common mental disorders (CMD) during pregnancy and postpartum depressive symptoms. 17th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting. Kaohsiung, Taiwan, 2016.11.3-5.
- 3) Matsuoka Y, Matsumura K, Nishi D, Hamazaki K. The efficacy of n-3 polyunsaturated fatty acids for the secondary prevention of clinical and psychophysiological symptoms in posttraumatic stress disorder: a randomized placebo-controlled trial. 17th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting. Kaohsiung, Taiwan, 2016.11.3-5.
- 4) Nishi D, Su KP, Usuda K, Chiang YJ, Guu TW, Hamazaki K, Nakaya N, Sone T, Sano Y, Ito H, Isaka K, Hashimoto K, Hamazaki T, Matsuoka YJ. Omega-3 fatty acids for pregnant women with depressive symptoms in Japan and Taiwan: an open-label trial. 14th International Congress of Behavioral Medicine. Melbourne, Australia, 2016.12.7-10.
- 5) Miyake M, Suzuki Y, Yamanouchi Y : The changes of the use of seclusion and restraint in psychiatric wards over 15 years. 1st Annual Mental Health Meeting of NCMH-IMH-NCNP and International Symposium, Seoul, 2017.3.16-17.
- 6) 奥村泰之, 高橋邦彦, 立森久照: 過量服薬の発生率と再発率の地域差: ナショナルデータベースを活用した地域医療指標の可視化の試み. 第112回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.3.
- 7) 新城大輔, 立森久照: 大規模医療データからみた急性期病院における精神患者の 在院日数と計画的で

- ない再入院. 第112回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.4.
- 8) 西大輔, Kuan-Pin Su, 臼田謙太郎, Yi-Ju Jill Chiang, Tai-Wei Guu, 浜崎景, 中谷直樹, 曾根稔雅, 佐野養, 伊東宏絵, 井坂恵一, 橋本謙二, 浜崎智仁, 松岡豊: 妊婦におけるうつ症状軽減を目指したオメガ3系脂肪酸によるオープン試験. 第25回日本脂質栄養学会, 秋田, 2016.9.16-17.
  - 9) 松岡豊, 浜崎景, 西大輔, 浜崎智仁: オメガ3系脂肪酸による予防介入試験後の赤血球膜エイコサペンタエン酸組成と心的外傷後ストレス症状の関連. 第25回日本脂質栄養学会, 秋田, 2016.9.16-17.
  - 10) 松村健太, 野口普子, 西大輔, 浜崎景, 浜崎智仁, 松岡豊: オメガ3系脂肪酸が高エネルギー外傷患者における心的外傷後ストレス障害の精神生理症状に与える影響. 第25回日本脂質栄養学会, 秋田, 2016.9.16-17.
  - 11) 瀬川和彦, 森まどか, 大矢寧, 高橋祐二, 小牧宏文, 佐々木征行, 立森久照: 完全房室ブロックを合併したデュシェンヌ型筋ジストロフィーの一例. 第3回筋ジストロフィー医療研究会. 愛知, 2016.10.14-15.
  - 12) 後藤基行: 精神病床における医療費支払区分別在院期間の歴史的分析. 第20回日本精神医学史学会. 大阪, 2016.11.12-13.
  - 13) 臼田謙太郎, 西大輔, 立森久照, 佐野養, 松岡豊: 妊娠中の精神疾患の有病率と関連因子および産後うつ症状の予測因子の検討. 第29回日本総合病院精神医学会総会, 東京, 2016.11.25-26.
  - 14) 吉川英省, 西大輔, 松岡豊: レジリエンスとソーシャルサポートを媒介した運動習慣と抑うつの関連について. 第29回日本総合病院精神医学会総会, 東京, 2016.11.25-26.
  - 15) 三宅美智, 服部朝代: PECO Psychiatric Electronic Clinical Observation PECO システムの紹介と活用方法の具体例について. 第23回日本精神科看護専門学術集会, 新潟, 2016.11.26-27.
  - 16) 立森久照: 手元の資料を課題分析に活用する-川崎市消防局救急搬送データをもとに-. 第2回地域包括ケア・精神保健勉強会, 神奈川, 2017.1.24.
  - 17) 竹島正, 立森久照: 非自発的入院者への退院支援と地域ケア~行政の支援はどうあるべきか. 第41回全国精神保健福祉業務研修会, 岡山, 2017.2.11.
  - 18) 立森久照: 精神保健の疫学研究に携わって 精神科の受療データ解析を中心に. 第7回自殺リスクに関する研究会, 東京, 2017.2.26.
  - 19) 後藤基行, 安藤道人: 医療扶助と精神障害者の長期入院 —1956年『在院精神障害者実態調査』原票を用いた統計分析—. 第36回日本社会精神医学会, 東京, 2017.3.3-4.
  - 20) 西大輔, 鈴木友理子, 西田潤子, 三島和夫, 山之内芳雄: ワーク・エンゲイジメントの資源としての生活習慣. 第23回日本行動医学会学術総会, 沖縄, 2017.3.17-18.
  - 21) 岡崎絵美: 共働きの育児期男性がワーク・ライフ・バランスを再構築していくプロセス. 日本行動医学会学術総会, 沖縄, 2017.3.17-18.
  - 22) 宮本有紀, 小川亮, 坂井隆太郎, 松本衣美, 山田理絵, 熊倉陽介, 森田康子, 千葉理恵, 山口創生, 西大輔, 島津明人, 近藤伸介, 笠井清登: 主体的参加によるリカバリー促進実践 英国リカバリーカレッジの提供する講座内容の分析. 第12回統合失調症学会, 米子, 2017.3.24-25.
  - 23) 千葉理恵, 宮本有紀, 山口創生, 西大輔, 島津明人, 近藤伸介, 笠井清登: 精神保健サービスおよびサービスに関わる人のリカバリー志向性に関連する評価尺度: 文献レビュー. 第12回統合失調症学会, 米子, 2017.3.24-25.
  - 24) 松本衣美, 坂井隆太郎, 宮本有紀, 小川亮, 熊倉陽介, 森田康子, 千葉理恵, 西大輔, 山口創生, 島津明人, 近藤伸介, 笠井清登: 英国リカバリーカレッジの効果について 文献レビュー. 第12回統合失調症学会, 米子, 2017.3.24-25.
  - 25) 坂井隆太郎, 松本衣美, 宮本有紀, 小川亮, 熊倉陽介, 森田康子, 千葉理恵, 西大輔, 山口創生, 島津明人, 近藤伸介, 笠井清登: リカバリーを支援するプログラムについて 英国におけるリカバリーカレッジ運営の実態から. 第12回統合失調症学会, 米子, 2017.3.24-25.

(3) 研究報告会

(4) その他

**C. 講演**

- 1) 西 大輔：妊娠期のうつへのアプローチ. 第 68 回日本産科婦人科学会学術講演会, 東京, 2016.04.21-23.
- 2) 山之内芳雄：「主な精神疾患の理解 / 精神科薬物療法の理解」. 精神科看護初心者研修会, 東京, 2016.05.12.
- 3) 西 大輔：専門医にきく！うつ病の予防について～自分や大切な人の心の健康のために～. 府中市健康教育事業, 東京, 2016.6.28.
- 4) 立森久照：因果推論ことはじめ. 岩波データサイエンス Vol.3 の出版記念イベント. 東京, 2016.6.30.
- 5) 山之内芳雄：多剤大量処方に至る思考と心理. 第 16 回日本外来精神医療学会. 神奈川, 2016.7.9.
- 6) 山之内芳雄：<司会>. 日本精神神経学会 第 2 回記者勉強会. 東京, 2016.7.15.
- 7) 西 大輔：うつ病にならないためのセルフケア. 琉球大学医学部保健学科精神看護学分野, 沖縄, 2016.7.19.
- 8) 山之内芳雄：抗精神病薬の多剤併用の適正化. 第 10 回 精神科専門薬剤セミナー. 東京, 2016.9.10.
- 9) 山之内芳雄：正しい抗精神病薬の減らし方. 精神保健福祉公開講演会. 東京, 2016.9.10.
- 10) 山之内芳雄：抗精神病薬多剤大量処方からの安全で現実的な減量法：SCAP 法. 平成 28 年度京都精神神経科診療所協会学術講演会. 京都, 2016.11.05.
- 11) 山之内芳雄：精神疾患合併になぜ取り組むのか。「ユマニチュードによる救急医療のメンタル患者への対応」研修. 愛知, 2016.11.19.
- 12) 山之内芳雄：単剤化・低用量化への国の取り組み. 第 3 回「精神科臨床における多職種チームの活かし方」フォーラム. 宮城, 2016.11.27.
- 13) 山之内芳雄：NCNP 計画部で行う PECO について 質に着目し自律的な改善を促す少し深掘したモニタリング. 平成 28 年度全国自治体病院協議会精神科特別部会運営委員会. 東京, 2016.12.9.
- 14) 西 大輔：周産期のうつに対するスクリーニングと対策. 平成 28 年度愛媛県地域保健研究集会, 松山, 2017.1.19.
- 15) 西 大輔：こころとからだを整える～知っておきたいうつ病予防～. 平成 28 年度久留米市うつ病対策講演会, 福岡, 2017.1.21.

**D. 学会活動**

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 山之内芳雄：日本精神神経学会 広報委員
- 2) 山之内芳雄：日本精神科病院協会「精神科版二次医療圏データベース部会」部会員
- 3) 西 大輔：日本総合病院精神医学会編集委員
- 4) 西 大輔：日本脂質栄養学会評議員
- 5) 西 大輔：日本行動医学会評議員
- 6) 西 大輔：国際栄養精神医学会 (the International Society for Nutritional Psychiatry Research) Executive committee member
- 7) 立森久照：日本社会精神医学会 理事
- 8) 立森久照：日本社会精神医学会 学術委員
- 9) 立森久照：日本社会精神医学会 総務委員

(3) 座長

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 立森久照：日本社会精神医学会雑誌編集委員
- 2) 立森久照：精神科治療学編集委員

**E. 研修**

(1) 研修企画

- 1) 第 53 回精神保健指導過程研修，第一部「メンタルケアの初期対応のリーダーになる」，第二部「データを活用し身近な施策を組み立てる」，東京，2016.9.29-10.1.（山之内，西，鈴木）

(2) 研修会講師

- 1) 三宅美智：患者—看護師関係とコミュニケーション. 日本精神科看護協会 精神科看護初心者研修会，東京，2016.5.13
- 2) 三宅美智：精神科における記録と観察. 日本精神科看護協会 精神科看護初心者研修会，東京，2016.5.13
- 3) 三宅美智：井之頭病院行動制限最小化研修，行動制限事例発表コーディネーター，東京，2016.6.21.
- 4) 西 大輔：一歩先行く睡眠指導. 第 39 回人間ドック健診情報管理指導士ブラッシュアップ研修会，東京，2016.7.3.
- 5) 西 大輔：レジリエンス—逆境を跳ね返すために—. 平成 28 年度静岡県衛生管理者等研修会，静岡，2016.8.26
- 6) 山之内芳雄：日本の精神保健の現状と課題. 精神障害者の地域移行に取り組むための実践研修，兵庫，2016.9.20.
- 7) 山之内芳雄：データを活用し身近な施策を組み立てる. 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 第 53 回精神保健指導過程研修，東京，2016.9.30.
- 8) 西 大輔：職場のメンタルヘルス（セルフケア・ラインケア），平成 28 年度「心の健康づくりの研修（本府省・健康管理者）」，東京，2016.10.5.
- 9) 西 大輔：一歩先行く睡眠指導. 第 40 回人間ドック健診情報管理指導士ブラッシュアップ研修会，大阪，2016.11.20.
- 10) 三宅美智：井之頭病院院内学会「看護研究発表会」講評，東京，2016.11.30.
- 11) 三宅美智：行動制限最小化看護—倫理・臨床での実際と最新情報. 日本精神科看護協会 岩手県支部研修会，岩手，2016.12.2.
- 12) 三宅美智：日本精神科看護協会，東京都支部研修「行動制限最小化」，東京，2017.2.25.

**F. その他**

- 1) 山之内芳雄：精神科リハビリテーション精神医学. 藤田保健衛生大学医学部 3 年生 講義. 愛知，2016.5.17.
- 2) 山之内芳雄：薬の安全な「飲み方」「やめ方」教えます—認知症・頭痛編—. 週刊文春. 東京，2016.8.4.
- 3) 三宅美智：日本精神科看護協会 東京都支部主催「第 8 回東京精神科看護学術集会」講評. 東京，2016.12.3.
- 4) 三宅美智：「就労支援フォーラム NIPPON2016」実行委員. 東京，2016.12.4.
- 5) 三宅美智：積善会看護専門学校，医療倫理学，15 時間，2016.12.15-16,2017.1.11.



### 3. 薬物依存研究部

#### Ⅰ. 研究部の概要

薬物依存研究部は、「麻薬・覚せい剤等に関する実態調査結果に基づく勧告」（総務庁，平成10年5月）により，機能強化が要請され，平成21年度より研究室の改組及び1研究室の新設がなされ，下記のように3研究室体制となっている。

##### 心理社会研究室

- (1) 薬物乱用・依存及び中毒性精神障害の実態調査研究に関すること。
- (2) 薬物依存の発生要因に係わる心理学的及び社会学的調査研究に関すること。
- (3) 薬物依存の予防及びその指導，研修の方法の研究に関すること。

##### 依存性薬物研究室

- (1) 薬物依存の発生要因に係わる精神薬理学的調査研究に関すること。
- (2) 依存性薬物の薬効に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。
- (3) 中毒性精神障害に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。

##### 診断治療開発研究室

- (1) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の開発の研究に関すること。
- (2) 薬物依存及び中毒性精神障害の治療システムの開発の研究に関すること。
- (3) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の研修に関すること。

人員構成は，次のとおりである。

部長：松本俊彦，心理社会研究室長：嶋根卓也，依存性薬物研究室長：船田正彦，診断治療開発研究室長：近藤あゆみ，流動研究員：大曲めぐみ，岩野さやか，客員研究員：浅沼幹人（岡山大学脳神経機構学分野），尾崎 茂（東京都保健医療公社豊島病院），宮永 耕（東海大学健康科学部），和田 清（埼玉県立精神医療センター），成瀬暢也（埼玉県立精神医療センター），森田展彰（筑波大学医学医療系），谷渕由布子（同和会千葉病院），三島健一（福岡大学薬学部，5月より），境 泉洋（徳島大学大学院，8月より），河野 亨（福岡市精神保健福祉センター，10月より），山田正夫（神奈川県立精神保健福祉センター，10月より），科研費研究員：米澤雅子，富山健一，大澤美佳，外来研究員：引土絵未（学術振興会特別研究員），併任研究員：今村扶美（病院臨床心理室），船田大輔（病院第二精神科），研究生：池田朋広（昭和大学附属烏山病院），高野 歩（東京大学大学院精神看護学分野），青尾直也（今川トモエ薬局），邱 冬梅，今井航平（群馬県立精神医療センター），加藤重城（プリマハム(株)基礎研究所，8月より），橋本美保（プリマハム(株)基礎研究所，8月より），熊倉陽介（東京大学大学院精神保健学分野，9月より）

#### Ⅱ. 研究活動

##### A. 疫学的研究

###### 1) 飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査

中学生における飲酒・喫煙・薬物乱用の状況を横断的に把握すると共に，経年的変化をモニタリングすることで，青少年に対する薬物乱用防止対策の基礎資料に供することを目的に，第11回目となる「飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査」を実施した。調査対象校241校のうち，126校（実施率52.3%）から合計52,780名の有効回答を得た（想定生徒数の44.1%）。飲酒・喫煙・有機溶剤の乱用はいずれも低下しており，予防意識や害知識の高まりが確認できた。危険ドラッグに関して，中学生における乱用の拡大は確認できなかったが，害周知率が低下していた。危険ドラッグの流行が終息しつつある中で，危険ドラッグに対する警戒心が低下した可能性がある。薬物乱用防止教育等を通じて，危険ドラッグに関する予防教育を維持・継続していくことが必要と考えられる。覚せい剤および大麻はいずれも増加し，特に大麻は男女ともに増加していた。少年において大麻取締法による送致人員が増加していることや，大麻の害知識が他の薬物に比べて低いことから，青少年における大麻乱用の拡大に注意を払う必要がある。（平成28年度厚生労働科学研究費補助金（以下，厚労科学研究）：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業，嶋根卓也，大曲

めぐみ, 北垣邦彦, 立森久照, 邱冬梅, 和田清)

## 2) 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査

本調査は、1987年以來ほぼ現行の方法論を用い、ほぼ隔年で実施されてきたものであり、精神科医療現場における薬物関連精神疾患の実態を把握できる、わが国唯一の悉皆調査である。平成28年度の調査では、対象施設1576施設のうち1241施設(78.7%)の協力を得て、229施設(14.5%)から総計2340例の薬物関連精神疾患症例が報告された。今回は、このうち患者自身から同意が得られ、重要な情報に欠損のない2262症例を分析対象とした。このうち「主たる薬物」による分類では、覚せい剤1209例(53.4%)が最多であった。次いで、睡眠薬・抗不安薬384例(17.0%)、揮発性溶剤193例(8.5%)、多剤126例(5.6%)、市販薬118例(5.2%)、危険ドラッグ101例(4.5%)、大麻81例(3.6%)などが続いた。また、全対象症例2262例中、1164例に1年以内に薬物の使用が認められたが、この「1年以内使用あり」症例の「主たる薬物」については、覚せい剤が791例(68.0%)と最多で、次いで、揮発性溶剤108例(9.3%)、危険ドラッグ74例(6.4%)、睡眠薬・抗不安薬78例(6.7%)と続いた。なお、この「1年以内使用あり」症例のうち、98例は、「かつて危険ドラッグを主たる薬物として使用し、現在は他の薬物に転向した」症例であったが、現在の主たる薬物は、覚せい剤43例(43.9%)、大麻15例(15.3%)などであった。以上より、平成28年度調査では、前回の調査に比べて、危険ドラッグ関連障害症例の減少が顕著であったが、他方で、少数ながら覚せい剤や大麻の乱用へと移行した症例も認められた。現在、わが国の精神科医療現場は、再び覚せい剤を中心とした薬物関連精神疾患が中心的課題となっていることがうかがわれた。(厚労科学研究：障害者対策総合研究事業。松本俊彦, 嶋根卓也)

## 3) 様々なフィールドにおける危険ドラッグ乱用に関するオンライン調査

医療的に事例化していない「危険ドラッグ」の乱用実態を把握するために、調査協力の得られた野外での音楽イベントの参加者を対象に、携帯端末を活用したオンライン調査を実施した。携帯端末を活用したオンライン調査により、対象者より効率的に情報収集することができた(有効回答数：613名)。危険ドラッグの生涯経験率は11.6%であり、2015年(18.4%)に比べて有意に減少した。2015年から2016年にかけて「危険ドラッグを使用する友人・知人の数」が有意に減少した一方で、「インターネットで購入」する者が有意に増加した。危険ドラッグ使用による健康被害は、「一度もない」とする回答が多い一方で、「かなり具合が悪くなったことがある」という回答も認められた(15.5%)。危険ドラッグ使用を原因とする受診歴(精神科医療機関等)もわずかながら報告された。2015年から2016年にかけて危険ドラッグの生涯経験率は、有意に減少した。また、「インターネットでの購入」のみが増加していることや、周囲の乱用者が減少している結果を踏まえると、危険ドラッグの入手が困難になっている様子がうかがわれる。一方、危険ドラッグ使用による健康被害や、依存症に対する支援のニーズが確認できたことから、アウトリーチ活動を通じた相談・支援に関する情報提供を継続していくことが求められる。(厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。嶋根卓也)

## 4) 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究

本研究では、薬物依存の民間支援団体であるダルク利用者の基礎情報を横断的に把握すると共に、コホート研究デザインにより、アルコール・薬物使用状況等の予後を前向きに追跡する。今年度は、コホート研究のベースラインとなる横断調査を実施し、ダルク利用者の基礎情報を得ることを目的とした。全53施設のうち46施設から調査協力を得て(施設協力率86.8%)、697名より有効回答を得た。対象者の平均年齢は43.3歳(20~85歳)、女性6.9%であった。利用形態は、入所中79.5%、通所中10.3%、スタッフ研修中10.2%であった。主たる依存対象は、薬物依存70.4%、アルコール依存24.7%、ギャンブル依存2.3%であった。主たる依存物質は、覚せい剤42.9%、アルコール24.7%、危険ドラッグ9.3%、有機溶剤4.3%、処方薬4.2%、大麻3.7%、市販薬3.0%と続いた。8割を超える高い協力率で、700名近くの有効回答を得ることができた背景には、各施設との顔が見える信頼関係の構築が影響していると考えられる。(厚労科学研究：障害者政策総合研究事業。

嶋根卓也, 大曲めぐみ, 近藤あゆみ, 米澤雅子)

### 5) 薬物乱用・依存者における HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究

薬物依存症回復支援施設 5ヶ所に入所・通所している薬物依存患者 72 名（経験者を含めるとのべ 155 名）を対象に、面接調査および採血調査を実施した。HIV 抗体陽性者は認められなかったが、「覚せい剤」群での HCV 抗体陽性率は 53.7%（2015 年では 48.8%）と高く、2005 年以降、増加傾向にある（厚労科学研究：エイズ対策研究事業、和田 清, 嶋根卓也）

## B. 臨床研究

### 1) 精神医学・救急医学・法医学が連携した危険ドラッグ使用の病態・症状対応法の開発に関する研究

本研究は、「依存症専門機関」、「精神科急性期治療機関」、「一般救急医療機関」、「法医学機関」という 4 領域を研究フィールドとして、危険ドラッグに関連する医学的障害の詳細を明らかにするとともに、治療ガイドラインを開発するものである。研究班活動は 3 年間で計画しており、2 年度までに各領域における危険ドラッグ関連患者の実態を明らかにし、各領域内での対応ガイドラインを開発し、最終年度には、上記の情報に加え、法医学機関の情報も加味して、医療機関共通の危険ドラッグ患者対応ガイドラインを開発する予定である。研究班活動 2 年度にあたる平成 28 年度には、「依存症専門機関」、「精神科急性期治療機関」、「一般救急医療機関」における調査から明らかにされた、各領域における危険ドラッグ関連患者の実態にもとづいて、各領域内での対応ガイドライン開発を行った。その成果は、最終年度において、法医学機関からの情報も加味されて、全医療機関共通の危険ドラッグ患者対応ガイドライン開発に際しての重要な基礎資料となるものである。（平成 28 年度日本医療研究開発機構：長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）、松本俊彦）

### 2) 薬物事犯による保護観察対象者のコホート研究

2016 年 6 月に「刑の一部の執行猶予制度」が施行され、保護観察下および保護観察終了後の薬物事犯者に対する地域支援体制の構築は喫緊の課題である。そのなかで、薬物事犯者に対する長期的な転帰調査と、その知見に基づく地域支援体制の構築は喫緊の課題である。本研究の目的は、保護観察対象となった薬物事犯者の転帰を明らかにし、転帰に影響する要因を明らかにすることともに、保護観察から地域の任意の社会資源への連携を促進するシステムを構築することにある。平成 28 年度は、研究体制の準備を行い、東京都多摩地区、川崎市、神奈川県、福岡市における薬物事犯保護観察対象者を、保護観察開始時点より 3 年間追跡する研究計画を確定した。具体的には、対象者リクルートは保護観察所で行い、研究に関する同意取得や定期的な情報収集は調査対象地域の精神保健福祉センター（東京都立多摩総合精神保健福祉センター、川崎市精神保健福祉センター、神奈川県精神保健福祉センター、福岡市精神保健福祉センター）で行うとなった。また、データ管理のためのウェブシステムを開発し、不正アクセスや情報漏えい対策が万全なシステムを構築するとともに、各精神保健福祉センターより専用のタブレットを通じて情報入力ができる体制を整備した。以上の決定事項にもとづいて、2017 年 3 月よりコホート研究を開始した。（平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金：障害者対策総合研究事業（精神障害分野）、松本俊彦）

### 3) HIV 陽性者における薬物使用障害罹患脆弱性の要因とその支援に関する研究

HIV 拠点病院に通院する HIV 陽性者から収集した既存データをもとに、HIV 陽性者における薬物使用障害罹患脆弱性の要因を明らかにすることを目的とした。DAST-20 による重症度評価によれば、HIV 陽性者の重症度は低く、薬物依存の診断基準を満たさない可能性が高い軽症例（薬物使用群）が中心となっていた。重症例（薬物依存群）に分類される罹患脆弱性の要因として、過去 1 年以内の覚せい剤使用が挙げられる。また、覚せい剤使用に伴う健康被害として、コンドームを使わない性行動、注射器による薬物使用、他者との注射器共有といったリスクにつながる様子もみられることから、当事者から周囲への HIV 感染の広がりが懸念される。さらに、覚せい剤使用の結果として抗 HIV 薬のアドヒアランスが低下し、HIV 治療の中断リスクの可能

性が高まる可能性も示唆された。(平成28年度精神・神経疾患研究開発費、嶋根卓也)

#### 4) 刑の一部執行猶予制度の施行に向けた民間薬物依存症回復支援施設の実態把握と課題の解明に関する研究

全国のダルク57施設に研究協力依頼を行い、52施設(91.2%)のダルクから協力を得て、施設の実態把握と活動上の課題解明を目的とした研究を実施した結果、9割以上が自立準備ホームや障害者総合支援法下の事業を使って薬物依存症者の支援を行っていることが明らかになった。運営上の課題としては、運営費や利用者の確保、それに関連する職員への待遇について、7割以上の施設が困難を抱えており、特に、制度上の事業を実施していない施設については、金銭面での困難が深刻であることが示唆された。金銭面以外の課題としては、重複障害をもつ利用者への対応や職員の育成についても半数以上の施設が困難を抱えていた。また、刑務所や保護観察所との連携は着実に進んでいるものの、ダルク職員が自らの役割や関与の仕方について連携先と十分な協議や合意が得られないまま刑務所や保護観察所の事業に参加しており、それが施設職員の不全感や徒労感につながるなどの課題も示された(平成28年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)、近藤あゆみ、大曲めぐみ、近藤恒夫、嶋根卓也、米澤雅子)

#### 5) 精神保健福祉センターにおける家族心理教育プログラムの普及と評価に関する研究

依存症相談支援の現状と家族心理教育プログラムの普及状況を把握することを目的に、全国69箇所のセンターを対象にアンケート調査を実施した。59機関(85.5%)から回答を得て分析を行った結果、依存症に関する相談指導に力を入れて充実をはかろうとする機関が増えていること、その傾向は特に薬物において顕著であることなどが明らかになった。また、平成27年度に家族を対象としたグループを実施した44機関のうち17機関(38.6%)で家族心理教育プログラムが活用されたことが確認でき、普及を開始した平成23年度から5年間で一定の成果が得られたといえる。今後は、センターにおける家族支援のさらなる充実に向けて家族心理教育プログラムの普及を継続するとともに、その効果を評価するための縦断調査を実施する(平成28年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)、近藤あゆみ、白川教人、高橋郁絵、森田展彰)

#### 6) 多機関連携による薬物依存症者地域支援の好事例に関する研究

研究協力で同意が得られた精神保健福祉センター17機関に対して、薬物依存症者及びその家族の支援を行う際の関係機関との連携に関するインタビュー調査を行った。精神保健福祉センターと良好な連携関係が構築できている主な機関は保護観察所と依存症回復支援施設であり、保護観察所との連携内容については、観察期間が終了して保護観察所の関与が途切れる前に、本人及び家族を精神保健福祉センターにつなぐ経路が確保されていることに加え、保護観察所が精神保健福祉センターから様々な助言を受けることでより良い支援につながっている可能性が示唆された。依存症回復支援施設との連携は他機関と比較して多様であったが、特に、施設入所が必要な状態にあるケースを支援していく場合の連携が重要であると思われた。また、良好な連携関係を可能にするための関係性については、高い頻度で双方の職員が顔を合わせ、相互理解を深めることが可能な体制づくりが重要であることが示唆された(平成28年度厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)、近藤あゆみ、白川教人)。

### C. 基礎研究

#### 1) チオフェン誘導体の有害作用評価に関する研究

チオフェン誘導体は、新規で流通が確認された危険ドラッグである。本研究では、チオフェン誘導体 methiopropamine (MPA),  $\alpha$ -pyrrolidinobutiothiophenone ( $\alpha$ -PBT),  $\alpha$ -pyrrolidinopentiothiophenone ( $\alpha$ -PVT)について行動薬理学的特性並びに細胞毒性の発現に関する検討を行った。MPA,  $\alpha$ -PBT および  $\alpha$ -PVT 投与により運動促進作用が発現した。これらの効果は、ドパミン受容体拮抗薬(SCH23390 および raclopride) 前処置によって有意に抑制された。3種のチオフェン誘導体の運動促進作用は、ドパミン受容体を介して発現

する作用であることが明らかになった。次に、MPA、 $\alpha$ -PBT および  $\alpha$ -PVT のドパミン取り込み阻害作用について検討した。ドパミントランスポーター(DAT)強制発現細胞を利用して、蛍光基質の取り込み阻害作用を検討した。その結果、MPA、 $\alpha$ -PBT および  $\alpha$ -PVT は DAT を介する取り込み阻害作用のみ有することが明らかとなった。さらに、マウス線条体の初代培養神経細胞を使用して、MPA、 $\alpha$ -PBT および  $\alpha$ -PVT 添加による細胞毒性の評価を行った。薬物添加 24 時間後、細胞生存率が低下し細胞毒性が発現した。本研究より、チオフェン誘導体である MPA、 $\alpha$ -PBT および  $\alpha$ -PVT は中枢興奮作用を有することが明らかになった。これら 3 薬物の中枢興奮作用の発現には、ドパミン神経系特に DAT を介するドパミン取り込み阻害作用が関与している可能性が示唆された。以上の結果から、チオフェン誘導体は、覚せい剤などと同様に乱用される危険性が高いと考えられる。(厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。船田正彦)

## 2) 催幻覚薬の有害作用評価に関する研究

危険ドラッグの PCP 様幻覚薬の作用点である N-methyl-D-aspartate 型グルタミン酸 (NMDA) 受容体ターゲットとして、検出用の細胞構築を検討した。NMDA NR2B サブユニットを、Human Embryonic Kidney (HEK) 293 細胞にトランスフェクションし、発現安定細胞株 HEK-NR2B 細胞を樹立した。HEK-NR2B 細胞を利用して、自動パッチクランプ法により NMDA 受容体イオンチャネル活性を検証し、機能評価を行った。PCP やケタミンなどの幻覚薬は、NMDA 受容体機能を低下させることで作用が発現することが明らかになっている。そこで、グルタミン酸刺激による NMDA 受容体のイオンチャネル活性増加に対する PCP およびケタミンの影響を検討したところ、濃度依存的な抑制が確認された。HEK-NR2B 細胞を利用した自動パッチクランプ法による解析は、PCP 様幻覚薬を検出する手法として利用可能であると考えられる。(日本医療研究開発機構 (AMED)：医薬品等規制調和・評価研究事業。船田正彦)

## Ⅲ. 社会的活動に関する評価

当研究部は、研究部創設以来、厚生労働省に限らず、薬物乱用・依存対策に関係する各省庁・自治体・市民団体等と連携を取り続けてきており、独自に研修会を主催するのみならず、各種研修会への講師派遣、啓発用資料および教材作成、調査等への協力などを行っている(細目は研究業績参照)。

### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・市民向け講演会：(Ⅳ. 研究業績 C. 講演 参照)
- ・報道：(Ⅳ. 研究業績 F. その他 参照)

### (2) 専門教育面における貢献

- ・研修会・研究会
  - 第 30 回薬物依存臨床医師研修会(主催)、第 18 回薬物依存臨床看護研修会(主催)、第 8 回薬物依存症に対する認知行動療法研究会(主催)、平成 28 年度厚生労働省依存症治療拠点機関設置運営事業 全国拠点機関
- ・各種教育研修会等への講師派遣(Ⅳ. 研究業績 C. 講演 参照)
  - ・大学
    - 早稲田大学人間科学学術院非常勤講師(松本俊彦)、国立大学法人東京医科歯科大学非常勤講師(松本俊彦)、星薬科大学非常勤講師(船田正彦)、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科非常勤講師(船田正彦)、東京薬科大学薬学部非常勤講師(嶋根卓也)、津田塾大学非常勤講師(嶋根卓也)、国立障害者リハビリテーションセンター学院非常勤講師(嶋根卓也)
  - ・その他
    - Psychiatry and Clinical Neurosciences Reviewer(松本俊彦)。

### (3) 精研の研修の主催と協力

## (4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

## ・政府委員会

厚生労働省医薬・生活衛生局「薬事・食品衛生審議会」臨時委員 (松本俊彦), 厚生労働省医薬・生活衛生局「依存性薬物検討会」構成員 (松本俊彦), 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部「相模原市の障害者支援施設における事件の検証及び再発防止策検討チーム」構成員 (松本俊彦), 文部科学省生涯学習政策局「青少年を取り巻く有害環境対策の推進 (依存症予防教育推進事業)」技術審査委員 (松本俊彦), 文部科学省初等中等教育局健康教育食育課「薬物乱用防止広報啓発活動推進協力者会議」委員 (嶋根卓也)。

## ・その他公的委員会

東京地方裁判所登録精神保健判定医 (松本俊彦), 東京都危険ドラッグ専門調査委員会専門委員 (船田正彦), 福岡県特定危険薬物指定専門委員 (船田正彦), 埼玉県地方薬事審議会薬物指定審査委員 (嶋根卓也), 埼玉県薬剤師会職能対策・学術委員 (嶋根卓也), 全国高等学校PTA連合会薬物乱用防止啓発パンフレット編集委員 (嶋根卓也), 小学館集英社プロダクション「平成28年度厚生労働省薬物乱用防止啓発訪問事業有識者検討会」委員 (嶋根卓也), 精神保健福祉士国家試験委員 (近藤あゆみ)

## ・研究成果の行政貢献

- ・エチゾラム等の向精神薬指定のための基礎資料となるデータを提供し、向精神薬乱用・依存防止のための施策に貢献した (厚労省医薬食品局)。
- ・「刑の一部執行猶予」制度導入を見越して、薬物依存者に対する「保護観察所における治療プログラムの開発」、ならびに、「地域支援ガイドライン」(案)の策定とそのモデル事業の推進に貢献した (法務省保護局)。
- ・少年院収容者に対する薬物離脱指導プログラム導入に対して、「矯正教育プログラム(薬物非行)」策定とその推進に貢献した (法務省矯正局)。
- ・日本の危険ドラッグ(NPSs)使用状況に関して全国住民調査(2015年)の結果を医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課を通じてUNODC(国連薬物犯罪事務所)へ報告した(厚労省医薬・生活衛生局)。

## (5) センター内における臨床的活動

毎週木曜日に薬物依存症外来での診療を行うとともに、デイケアにて薬物再乱用防止のための集団認知行動療法プログラムを実施している (松本俊彦, 近藤あゆみ)。また、毎週火曜日に医療観察法病棟(8病棟, 9病棟)にて物質使用障害治療プログラムの運営をサポートしている (松本俊彦)。

## (6) その他

## IV. 研究業績

## A. 刊行物

## (1) 原著論文

- 1) Toshihiko Matsumoto, Hisateru Tachimori, Ayumi Takano, Yuko Tanibuchi, Daisuke Funada, Kiyoshi Wada : Recent changes in the clinical features of patients with new psychoactive-substances-related disorders in Japan: Comparison of the Nationwide Mental Hospital Surveys on Drug-related Psychiatric Disorders undertaken in 2012 and 2014.. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 70(12) : 560-566, 2016.
- 2) Manami Kodaka, Toshihiko Matsumoto, Michiko Takai, Takashi Yamauchi, Shizuka Kawamoto, Minako Kikuchi, Hisateru Tachimori, Yotaro Katsumata, Norihito Shirakawa, Tadashi Takeshima: Exploring suicide risk factors among Japanese individuals: The largest case-control psychological

autopsy study in Japan. Asian Journal of Psychiatry 27: 123-126, 2017.

- 3) 高野 歩, 宮本有紀, 川上憲人, 松本俊彦: 日本における薬物依存症に対する e-Health の可能性: ウェブ版再発予防プログラム「e-SMARPP」の開発と改良. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 51(6): 382-392, 2016.
- 4) 池田朋広, 常岡俊昭, 松本俊彦, 高木のり子, 石坂理江, 種田綾乃, 小池純子, 齋藤 勲, 森田展彰, 稲本淳子, 岩波 明: 措置指定病院における精神病性障害と物質使用障害を併せ持つ「精神病性併存性障害者」への集団認知行動療法プログラム実施の意義とその有効性の検討. 日社精医誌 26: 11-24, 2017.
- 5) 伊藤絵美, 吉村由未, 森本雅理, 小畑輝海, 松本俊彦: 報告 女性覚せい剤乱用者に対する回復プログラムの構築と実践 —ローズカフェ第1報—. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 52(1): 34-55, 2017.
- 6) 近藤あゆみ, 栗坪千明, 白川雄一郎, 松本俊彦: 民間依存症回復支援 DARC 利用者を対象とした認知行動療法 SMARPP の有効性評価, 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 51 (6) , 414-424, 2016.
- 7) 近藤あゆみ, 高橋郁絵, 森田展彰: 薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラムの理解度と有用性—医療保健機関家族教室と家族会の参加者を対象としたアンケート調査結果から—, 日本アルコール関連問題学会雑誌, 18 (2) , 25-32,2017.
- 8) 佐々木真人, 嶋根卓也, 村岡謙行, 長崎大武, 田村昌士, 西村直祐, 堀岡広稔: 薬局薬剤師に必要とされる自殺予防ゲートキーパーの養成とその効果. 高知県薬剤師会報 146: 11-20, 2016.
- 9) 大曲めぐみ, 嶋根卓也, 松本俊彦: 日本の刑事施設における薬物依存離脱指導の評価方法についての文献レビュー. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 51(5): 335-347, 2016.

(2) 総説

- 1) 松本俊彦: なぜ多剤併用になってしまうのか—精神科医の処方意図. 薬事 58(8): 27-29, 2016.
- 2) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない!—その理解と対応のヒント—. 児童青年精神医学とその近接領域 57(3): 409-414, 2016.
- 3) 松本俊彦: 危険ドラッグはなぜ「危険」なのか. 神戸市医師会報 640: 38-42, 2016.
- 4) 松本俊彦: 健康問題としての薬物依存症—薬物依存症からの回復のために医療者は何ができるか. 日本医事新報 4808: 19-23, 2016.
- 5) 松本俊彦: うつ病の自殺予防. うつ病の臨床: 現代の病理と最新の治療. 神庭重信 編: 最新医学社, 大阪, pp140-143, 2016.
- 6) 松本俊彦: 子どもが<死>を考えると—子どもの自殺念慮と自殺企図への対応. 児童心理 1026: 59-64, 2016.
- 7) 松本俊彦: 子どもの薬物乱用の現状と予防. 小児科 57(9): 1143-1150, 2016.
- 8) 松本俊彦: 薬物使用障害に対する外来治療プログラム「SMARPP」. 精神療法 42(4): 571-579, 2016.
- 9) 松本俊彦: 物質使用障害における自殺—薬物療法のリスクとベネフィット. 臨床精神薬理 19(8): 1125-1136, 2016.
- 10) 松本俊彦: 特集にあたって (LGBT を正しく理解し, 適切に対応するために). 精神科治療学 31(8): 965-966, 2016.
- 11) 松本俊彦: 第 21 章 物質関連障害および嗜癖性障害 その他の嗜癖関連障害を含む「総論」. 公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法. 下山晴彦・中嶋義文 編: 医学書院, 東京, 295-297, 2016.
- 12) 松本俊彦: 第 21 章 物質関連障害および嗜癖性障害 その他の嗜癖関連障害を含む「アルコール関連障害」. 公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法. 下山晴彦・中嶋義文 編: 医学書院, 東京, 297-299, 2016.
- 13) 松本俊彦: 第 21 章 物質関連障害および嗜癖性障害 その他の嗜癖関連障害を含む「薬物関連障害」. 公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法. 下山晴彦・中嶋義文 編: 医学書院, 東京, 299-302, 2016.

- 14) 松本俊彦, 今村扶美: ワークショップ2: SMARPPの理念と実際—講義とデモセッション—. 日本アルコール関連問題学会雑誌 18(1): 123-125, 2016.
- 15) 松本俊彦: 17 物質関連障害および嗜好性障害群 大麻依存. 今日の精神疾患治療方針 第2版. 樋口輝彦, 市川宏伸, 神庭重信, 朝田 隆, 中込和幸 編: 医学書院, 東京, 654-655, 2016.
- 16) 松本俊彦: 言葉にしないが自殺念慮があるように見える. medicina 53(12): 1921-1925, 2016.
- 17) 松本俊彦: 「いじめ」はいつ自殺に転じるのか. 臨床心理学 16(6): 643-650, 2016.
- 18) 小高真美, 松本俊彦, 高井美智子, 山内貴史, 白川教人, 竹島 正: 自殺のリスク要因としての身体疾患. 精神科治療学 31(11): 1477-1485, 2016.
- 19) 谷渕由布子, 松本俊彦: 危険ドラッグ使用者への安全管理. 精神科治療学 31(11): 1449-1454, 2016.
- 20) 松本俊彦: 思春期における自殺と自傷. 外来小児科 19(3): 340-343, 2016.
- 21) 松本俊彦: 自殺企図. 小児疾患診療のための病態生理 3—改訂第5版—. 『小児内科』編集委員会 編: 東京医学社, 東京, 810-813, 2016.
- 22) 松本俊彦: 妊婦の薬物依存. 日産婦医会報 68(11): 10-11, 2016.
- 23) 松本俊彦: VI. 発達障害, 心身症, 精神疾患-19 自殺企図. 小児内科増刊号 48: 810-813, 2016.
- 24) 松本俊彦: III アルコール関連問題対策. 精神保健福祉士セミナー2 (第6版) 精神保健学—精神保健の課題と支援. 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編: へるす出版, 東京, 92-109, 2017.
- 25) 松本俊彦: IV 薬物乱用防止対策. 精神保健福祉士セミナー2 (第6版) 精神保健学—精神保健の課題と支援. 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編: へるす出版, 東京, 109-130, 2017.
- 26) 松本俊彦: VI 生理的障害及び身体的要因に関連した行動症候群. 精神保健福祉士セミナー1 (第6版) 精神医学—精神疾患とその治療. 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編: へるす出版, 東京, 127-137, 2017.
- 27) 松本俊彦: VII 成人のパーソナリティおよび行動の障害. 精神保健福祉士セミナー1 (第6版) 精神医学—精神疾患とその治療. 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編: へるす出版, 東京, 137-150, 2017.
- 28) 松本俊彦: 自傷—自殺なのか, 感情的苦痛への対処なのか, 操作的行動なのか, あるいは常同行為なのか?—. 精神科治療学 32(1): 67-72, 2017.
- 29) 松本俊彦: 薬物依存症の診断と治療. ペインクリニック 38(2): 179-187, 2017.
- 30) 松本俊彦: 物質依存と精神保健福祉. 系統看護学講座 別巻 精神保健福祉 (第3版2刷). 医学書院, 東京, 265-279, 2017.
- 31) 松本俊彦: 薬物依存症に対する集団認知行動療法. 日精協誌 36(2): 52-58, 2017.
- 32) 赤澤正人, 松本俊彦: 第7章 自殺と自傷行為. テキスト 臨床死生学: 日常生活における「生と死」の向き合い方. 臨床死生学テキスト編集委員会 編著 編: 勁草書房, 東京, 85-95, 2017.
- 33) 松本俊彦: 健康問題としての薬物依存症—薬物依存症からの回復のために医療者にできること—. 心と社会 167: 58-64, 2017.
- 34) 松本俊彦, 船田正彦, 嶋根卓也, 近藤あゆみ: 薬物関連問題とどう対峙するか 疫学研究、毒性評価、臨床実践、政策提言. 精神保健研究 63: 53-61, 2017.
- 35) 松本俊彦: 「ダメ、ゼッタイ」ではダメ—薬物乱用防止教育と「故意に自分の健康を害する」症候群—. 子どもの健康科学 17(1): 23-27, 2017.
- 36) 船田正彦: 危険ドラッグの薬理作用と毒性. 日本病院薬剤師会雑誌. 52, 999-1001, 2016.
- 37) 船田正彦: 危険ドラッグの有害作用: 薬理学研究から探るその正体. メディカル朝日 45, 30-31, 2016.
- 38) 船田正彦: 依存症の分子病態解析. 危険ドラッグの有害作用 依存性と細胞毒性. 脳 21. 19, 43-46, 2016.
- 39) 船田正彦: 危険ドラッグの薬物依存性と細胞毒性. Brain Nerve. 68(10):1149-1158, 2016.
- 40) 嶋根卓也: 学校における薬物乱用防止教育. 精神科治療学, 31(5): 573-579, 2016.
- 41) 嶋根卓也: ユーザーに最も身近な相談窓口として—多剤併用を防ぐ薬剤師の取り組み—. 月刊薬事 58(8): 68-70, 2016.



- 42) 嶋根卓也 : LGBTにおける HIV 感染症と薬物依存. 精神科治療学 31(8) : 1045 - 1052, 2016.
- 43) 嶋根卓也 : 飲酒・喫煙・薬物乱用. VIII 学校保健における健康課題 特集 学校保健パーフェクトガイド, 小児科診療 79(11) : 1657-1663, 2016.
- 44) 嶋根卓也 : 第 10 章 テンションを上げたい, 嫌なことを忘れたい. 大学生のためのメンタルヘルスガイド～悩む人, 助けたい人, 知りたい人へ～ (松本俊彦 編). 大月書店, 東京, 129-143, 2016.
- 45) 嶋根卓也 : 市販薬にも安心できないものがある. 臨床心理学 増刊第 8 号 やさしいみんなのアディクション (松本俊彦 編), 金剛出版, 東京, 66-68, 2016.
- 46) 嶋根卓也 : 第 1 章 大学生のためのわかりやすい薬物乱用の話. 危険ドラッグ問題の表と裏～学生に知ってほしいこれからの薬物乱用防止について～. 薬事日報社, 東京, 11-43, 2016.
- 47) 近藤あゆみ : アディクション臨床ではなぜ家族支援が大切なのか? 編集 松本俊彦, 臨床心理学増刊第 8 号 やさしいみんなのアディクション, 株式会社金剛出版, 140-141, 2016.
- 48) 近藤あゆみ : 境界線を引くこと, イネイプリングをやめること, 編集 松本俊彦, 臨床心理学増刊第 8 号 やさしいみんなのアディクション, 株式会社金剛出版, 143-144, 2016.
- 49) 近藤あゆみ : 家族は本人を 24 時間監視すべきなのか? 編集 松本俊彦, 臨床心理学増刊第 8 号 やさしいみんなのアディクション, 株式会社金剛出版, 144-146, 2016.
- 50) 近藤あゆみ : 第 3 章 疾患や状態の特性に応じた家族支援 薬物依存症者をもつ家族に対する支援, 精神科臨床サービス みんなが元気になれる家族支援 I, 17 (1) ,70-74,2017.
- 51) 永岡正巳, 引土絵未, 村上 宏, 小山 隆 : 第 30 回年次大会シンポジウム 人権と社会福祉. 同志社大学社会福祉学, 30, 1-21, 2016.
- 52) 引土絵未 : 民間リハビリ施設はなぜ「効く」のか? 治療共同体の力. やさしいみんなのアディクション 臨床心理学増刊, 8, 107-108, 2016.

### (3) 著書

- 1) 松本俊彦 : 薬物依存臨床の焦点. 薬物依存臨床の焦点. 金剛出版, 東京, 2016.
- 2) 松本俊彦 : 自分を傷つくと安心するんだけど……. 大学生のためのメンタルヘルスガイド. 松本俊彦 編 : 大月書店, 東京, pp174-193, 2016.
- 3) 宋美玄, NATROM, 森戸やすみ, 堀 成美, Dr.Koala, 猪熊弘子, 成田崇信, 畝山智香子, 松本俊彦, 内田 良, 原田 実, 菊池 誠 : 「誕生学」でいのちの大切さがわかる?. 子どもを守るために知っておきたいこと. メタモル出版, 東京, pp126-123, 2016.
- 4) 松本俊彦 : 自己治療としてのアディクション. やさしいみんなのアディクション. 松本俊彦 編 : 金剛出版, 東京, pp48-52, 2016.
- 5) 松本俊彦 : 「大麻 (マリファナ) は安全」と主張するクライアントにどう対応したらよいか?. やさしいみんなのアディクション. 松本俊彦 編 : 金剛出版, 東京, pp84-86, 2016.
- 6) 松本俊彦 : クロスアディクション事例とどうかかわるか?. やさしいみんなのアディクション. 松本俊彦 編 : 金剛出版, 東京, pp121-122, 2016.
- 7) 松本俊彦 : キュークツな関係から逃げ出そう. 中高生からのライフ&セックスサバイバルガイド. 松本俊彦, 岩室紳也, 古川潤哉 編 : 日本評論社, 東京, pp118-127, 2016.
- 8) 松本俊彦 : 刑事政策意見交換会 6 月例会 薬物依存症者の地域支援のあり方. 刑事政策意見交換会講演録その 1. 公益財団法人矯正協会 編 : 矯正協会, 東京, 2016.
- 9) 船田正彦 : 「危険ドラッグの基礎知識」講談社サイエンティフィック. 2016.
- 10) 嶋根卓也 : 地域の薬剤師に期待される, 薬物乱用・依存防止への対応. Excellent Pharmacy 5 月 1 日号, メディファーム株式会社, 東京, pp11-13, 2016.
- 11) 嶋根卓也 : 危険ドラッグの流行と終息. 最新保健情報資料 2017, 大修館書店, 東京, pp8-10, 2017.
- 12) 嶋根卓也 : 1. 自殺ハイリスク者支援 2 アルコール/薬物乱用・依存性. ワンストップ支援における留

意点—複雑・困難な拝啓を有する人々を支援するための手引き—平成28年度自殺防止対策事業「ワンス  
トップ支援のための情報プラットフォームづくり」, 一般社団法人日本うつ病センター, 2017.3.

- 13) 近藤あゆみ: 依存症という「病」, 編著 池田理知子 五十嵐紀子, よくわかるヘルスコミュニケーション, ミネルヴァ書房, pp26-27, 2016.
- 14) 近藤あゆみ: 物質関連障および嗜癖性障害群 薬物関連障害, 編集 下山晴彦 中嶋義文, 公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法, 株式会社医学書院, pp101-102, 2016.

#### (4) 研究報告書

- 1) 松本俊彦, 白川教人, 和田 清, 近藤あゆみ, 嶋根卓也, 森田展彰: 刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究. 厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業(精神障害分野) 刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究(研究代表者 松本俊彦) 平成28年度総括・分担研究報告書 pp1-10, 2017.
- 2) 松本俊彦, 高野 歩, 熊倉陽介, 熊谷直樹, 橋本直季, 野崎伸次, 谷合知子, 竹島 正, 津田多佳子, 植木美津枝, 木下 優, 佐野由美, 河野 亨, 宇佐美貴士, 山田正夫, 黒沢 亨, 中込昌也, 原井智美, 前川洋平, 石井周作, 田中恵次, 藤井啓喜, 松田淳一郎, 朝倉貴宏: 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業(精神障害分野) 刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究(研究代表者 松本俊彦) 平成28年度総括・分担研究報告書 pp11-51, 2017.
- 3) 松本俊彦, 伊藤 翼, 高野 歩, 谷淵由布子, 船田大輔, 立森久照: 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究(研究代表者 嶋根卓也) 平成28年度総括・分担研究報告書 pp101-136, 2017.
- 4) 船田正彦: 危険ドラッグの検出技術開発に関する研究. 平成28年度精神・神経疾患研究開発費「危険ドラッグの有害作用発現機序の解明と評価技術開発に関する研究(主任研究者: 船田正彦)」平成28年度実績報告書. 2017.
- 5) 船田正彦: 危険ドラッグおよび関連代謝産物の有害性予測法の確立と乱用実態把握に関する研究. 平成28年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグおよび関連代謝産物の有害性予測法の確立と乱用実態把握に関する研究(研究代表者: 船田正彦)」平成28年度総括研究報告書. pp1-14, 2017.
- 6) 船田正彦: チオフェン誘導体の行動薬理学的特性. 平成28年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグおよび関連代謝産物の有害性予測法の確立と乱用実態把握に関する研究(研究代表者: 船田正彦)」平成28年度総括研究報告書. pp15-26, 2017.
- 7) 嶋根卓也, 庄司正実, 松本俊彦, 和田 清, 近藤あゆみ: 危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究. 平成28年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究(研究代表者: 嶋根卓也)」平成28年度総括・分担研究報告書 pp1-14, 2017.
- 8) 嶋根卓也, 大曲めぐみ, 北垣邦彦, 和田 清, 邱 冬梅: 飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査(2016年). 平成28年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究(研究代表者: 嶋根卓也)」平成28年度総括・分担研究報告書 pp15-74, 2017.
- 9) 和田 清, 嶋根卓也: 「危険ドラッグ」を含む薬物乱用・依存に関する国際比較研究. 平成28年度厚

- 生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）」平成 28 年度総括・分担研究報告書 pp137-149, 2017.
- 10) 嶋根卓也, 大曲めぐみ, 近藤あゆみ, 米澤雅子, 近藤恒夫：民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究（研究代表者：松本俊彦）」平成 28 年度総括・分担研究報告書 pp83-98, 2017.
  - 11) 嶋根卓也, 日高庸晴：様々なフィールドにおける危険ドラッグ乱用に関するオンライン調査. 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「危険ドラッグおよび関連代謝産物の有害性予測法の確立と乱用実態把握に関する研究（研究代表者：船田正彦）研究報告書 pp54-77, 2017.
  - 12) 和田 清, 嶋根卓也, 森田展彰, 合川勇三, 堀口忠利：薬物乱用・依存者における HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究（2016 年）. 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）「薬物乱用・依存者、性感染症患者の HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究（研究代表者：木原正博）」平成 28 年度総括・分担研究報告書, 2017.
  - 13) 近藤あゆみ, 白川教人, 高橋郁絵, 森田展彰：精神保健福祉センターにおける家族心理教育プログラムの普及と評価に関する研究, 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）」平成 28 年度総括・分担研究報告書 pp151-168, 2017.
  - 14) 近藤あゆみ, 大曲めぐみ, 近藤恒夫, 嶋根卓也, 米澤雅子：刑の一部執行猶予制度の施行に向けた民間薬物依存症回復支援施設の実態把握と課題の解明に関する研究, 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）」平成 28 年度総括・分担研究報告書 pp169-180, 2017.
  - 15) 近藤あゆみ, 白川教人：多機関連携による薬物依存症者地域支援の好事例に関する研究, 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究（研究代表者 松本俊彦）」平成 28 年度総括・分担研究報告書 pp69-82, 2017.
  - 16) 近藤あゆみ, 米澤雅子, 今村扶美, 若林朝子, 嶋根卓也, 常岡俊昭, 松本俊彦：薬物使用障害患者の外来治療プログラムの効果と治療転帰に与える要因に関する研究, 平成 28 年度国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費「薬物使用障害の病因・病態・治療反応性に関する多面的研究」, 2017.
  - 17) 大嶋栄子, 藤田さかえ, 引土絵未：誰もが取り組めるアルコール（薬物）依存症の社会復帰支援 アルコール依存症の社会復帰支援に関する研究報告書. 平成 28 年度厚生労働科学研究補助金（障害者政策総合研究事業）アルコール依存症に対する総合的な医療の提供に関する研究（研究代表者：樋口 進）（研究分担者：大嶋栄子）」2017.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 松本俊彦, 田代まさし：【対談】回復へのターニングポイントは何だったのか？. やさしいみんなのアイコン. 松本俊彦 編：金剛出版, 東京, pp180-193, 2016.
- 2) 松本俊彦, 岩室紳也, 古川潤哉, 紅音ほたる：【座談会】もっと本音を、もっと失敗を語ろう. 中高生か

- らのライフ&セックスサバイバルガイド. 松本俊彦, 岩室紳也, 古川潤哉 編: 日本評論社, 東京, pp144-159, 2016.
- 3) 松本俊彦, 香山リカ: 【対談】相模原事件容疑者の言動は「思想」なのか「妄想」なのか. 月刊『創』10月号. 創出版, 東京, pp24-33, 2016.
  - 4) 松本俊彦: 私の一冊『その後の不自由——「嵐」のあとを生きる人たち』. 日本医事新報 4826: pp73-73, 2016.
  - 5) 伊賀興一, 小笠原基也, 姜文江, 安藤久美子, 松本俊彦: 「付添人の窓」座談会. 精神科治療学 31(11): pp1495-1510, 2016.
  - 6) 横山 颯, 松本俊彦, 世良守行 司会: 窪田 彰: 【座談会】我が国のアルコール依存症治療の現状と課題. 精神科臨床サービス 16: pp445-454, 2016.
  - 7) 上田 諭, 吉村夕里, 松本俊彦: 【座談会】電気けいれん療法 (ECT)は倫理的な治療か. 精神科治療学 31(12): pp1611-1618, 2016.
  - 8) 松本俊彦, 香山リカ: 【対談】相模原障害者殺傷事件最終報告書が示したもの. 月刊『創』2月号. 創出版, 東京, pp92-105, 2017.
  - 9) 松本俊彦: 【書評】精神科臨床 Q&A for ビギナーズ. 週刊医学界新聞. 医学書院, 東京, p7, 2017.
  - 10) 松本俊彦: 【書評】マインドフルネス&スキーマ療法 BOOK1・BOOK2. 週刊医学界新聞. 医学書院, 東京, p6, 2017.
  - 11) 松本俊彦: 【書評】精神科臨床 Q&A for ビギナーズ. BRAIN and NERVE. 医学書院, 東京, p275, 2017.
  - 12) 松本俊彦: 【講義録】「自分を傷つけずにはいられない!」～自傷行為の理解と援助. 第39回日本産婦人科医学会性教育指導セミナー全国大会集録集. 公益社団法人 日本産婦人科学会, 東京, pp22-24, 2017.
  - 13) 松本俊彦: 【講義録】「自分を傷つけずにはいられない子供の自殺予防のために大人にできること」. 平成28年度研修集録. 神奈川県教育委員会 神奈川県立学校保健会, 神奈川, pp3-4, 2017.
  - 14) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と援助～. 声 (東京都立高等学校学校保健研究会), 2017.2.1.
  - 15) 松本俊彦: 処方薬乱用・依存予防のために一人ひとりにできること. 東京都こころの健康だより, 2017.2.28.
  - 16) 松本俊彦: 【書評】精神科臨床 Q&A for ビギナーズ. BRAIN and NERVE. 医学書院, 東京, p275, 2017.
  - 17) 松本俊彦: 【講義録】「自分を傷つけずにはいられない!」～自傷行為の理解と援助. 第39回日本産婦人科医学会性教育指導セミナー全国大会集録集. 公益社団法人 日本産婦人科学会, 東京, pp22-24, 2017.
  - 18) 松本俊彦: 【講義録】「自分を傷つけずにはいられない子供の自殺予防のために大人にできること」. 平成28年度研修集録. 神奈川県教育委員会 神奈川県立学校保健会, 神奈川, pp3-4, 2017.
  - 19) 嶋根卓也: カムいせつ「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止教育. 公益財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センター ニュースレター第95号: 2-5, 2016.9.
  - 20) 嶋根卓也: HIV 陽性者における薬物使用の理解とサポート 「ダメ。ゼッタイ。」だけでは解決しない. NPO 法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス ニュースレター29号: 1-3, 2016.9
  - 21) 嶋根卓也: 「自殺予防ゲートキーパー養成研修会」開催報告 (地域保健委員会より: 報告). 高知県薬剤師会報 No.147, 2016.11.
  - 22) 嶋根卓也: (監修) 第3章 国内外における依存症に関する青少年の実態と新たな問題 1.薬物依存. 平成28年度文部科学省委託調査「依存症予防教育に関する調査研究」報告書 p9-16, 学研教育アイ・シー・ティー, 2017.3.
  - 23) 嶋根卓也: 「ダメ、ゼッタイ」で終わらせない予防教育を. 平成28年度文部科学省委託調査「依存症予防教育に関する調査研究」報告書 第5章 国内外の依存症予防教育の事例 7.専門家ヒアリング, p122, 学研教育アイ・シー・ティー, 2017.3.

**B. 学会・研究会における発表**

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 松本俊彦:【シンポジウム講演】危険ドラッグ乱用患者の心理社会的特徴. 日本学会会議トキシコロジー分科会シンポジウム, 札幌, 2016.5.17.
- 2) 松本俊彦:【教育講演】トラウマとアディクション. 第15回日本トラウマティック・ストレス学会, 宮城, 2016.5.20.
- 3) 松本俊彦:【教育講演】法医学との連携が精神医学を変える～薬物乱用と自殺に関する研究を通じて～. 第100次日本法医学会学術全国集会, 東京, 2016.6.17.
- 4) 松本俊彦:【公開講座】人は何故依存症になり、回復ができるのか. 第38回日本アルコール関連問題学会秋田大会, 秋田, 2016.9.10.
- 5) 松本俊彦:現場実践の視点からスピリチュアルケアを照らす. 第9回日本スピリチュアルケア学会学術大会, 東京, 2016.9.18.
- 6) 松本俊彦:【教育講演】薬物依存症の治療～SMARPPを中心に～. 第51回アルコール・アディクション医学会新学会誕生記念特別研修プログラム, 東京, 2016.10.8.
- 7) 松本俊彦:【特別企画シンポジウム】人はなぜ依存症になるのか?. 第51回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2016.10.8.
- 8) 松本俊彦:【教育講演】SMARPPの理念と課題—プログラムの「学習」ではなく、支援ネットワークの交差点を目指して. 第51回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2016.10.8.
- 9) 松本俊彦:【特別講演】よくわかるSMARPP—あなたにも出来る薬物依存者支援. 集団認知行動療法研究会 第7回学術総会, 東京, 2016.10.30.
- 10) 松本俊彦:【特別企画講演】専門家のいない薬物依存治療—依存症集団療法「SMARPP」. 第34回日本神経治療学会総会, 鳥取, 2016.11.4.
- 11) 松本俊彦:【教育講演】思春期の問題行動—自傷行為の理解と援助. 第31回日本女性医学学会学術集会, 京都, 2016.11.6.
- 12) 松本俊彦:【記念講演】生き延びるための依存症、生き直すための回復. 第23回関西アルコール関連問題学会滋賀大会, 滋賀, 2016.11.27.
- 13) 船田正彦:薬物乱用のトレンド:依存性薬物の有害作用とその法規制. 長崎. 第90回日本薬理学会年会. 長崎, 2017.3.17.
- 14) 嶋根卓也:薬剤師向けゲートキーパー養成研修とその介入効果:身近な相談窓口としての薬局. シンポジウム8「薬剤師が精神科医に望むこと」, 第16回日本外来精神医療学会, 神奈川, 2016.7.10.
- 15) 嶋根卓也:そして危険ドラッグを使う人はいなくなった:全国住民調査2015年の結果より. シンポジウム6「ポスト「危険ドラッグ」—薬物乱用状況はどう変わったか—. 平成28年度日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2016.10.7.
- 16) 嶋根卓也:薬物乱用・依存の理解と支援—薬剤師によるきづき・関わり・つながり—. 第49回日本薬剤師学会学術大会 分科会12 薬物乱用防止と薬剤師 基調講演, 愛知, 2016.10.9.
- 17) 嶋根卓也:処方薬乱用の理解と支援—薬剤師によるきづき・関わり・つながり—. 第7回日本アプライド・セラピューテクス学会学術大会スイーツセミナー1, 京都, 2016.9.3.
- 18) 近藤あゆみ:薬物依存症外来治療プログラムSTEMの有効性評価, シンポジウム3 薬物依存症に対する心理療法の現状, 第51回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2016. (シンポジウム)
- 19) 近藤あゆみ:薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム, 日本心理教育・家族教室ネットワーク第20回研究集会新潟大会, 新潟, 2017. (分科会)
- 20) 引土絵未:当事者の力を引き出すグループワーク—治療共同体 Amity モデルを用いたエンカウンター・

グループについて一. 日本アルコール関連問題ソーシャルワーカー協会第31回全国研究大会, 京都, 2016.10.30.

## (2) 一般演題

- 1) Matsumoto T: Plenary Session. Addiction and Suicide prevention. 7th Pasific Regieon Congress, International Association of Suicide Prevention, Tokyo, 2016.5.20.
- 2) Shimane T, Fujihara H, Miyano H, Nishikawa S : Evaluating the gatekeeper training program for community pharmacists in Japan: focus on prescription drug overdose. The 7th Asia pacific regional conference of the international association for suicide prevention, Tokyo, Japan, 2016.5.18-21
- 3) Shimane T, Matsumoto T : Reliability and validity of the Japanese version of the DAST-20. CPDD 78th Annual Scientific Meeting, Palm Springs, CA(USA), 2016.6.11-16.
- 4) Shimane T : Monitoring survey of drug use and addiction, and recovery support program in Japan, 17th Drug addiction recovery support, Thanyarak Khon Kaen Hospital(Thailand), 2017.3.22-23.
- 5) Funada, M., Tomiyaama, K. : Expression of the cannabinoid CB1 receptor in Chinese hamster ovary cells: a specific cellular model to investigate the acute and chronic effects of synthetic cannabinoids. College on problems of drug dependence (CPDD) 78th Annual scientific meeting, Palm Springs, CA, USA. 2016.6.11-16.
- 6) 近藤千春, 藤城 聡, 松本俊彦 : 依存症の認知行動療法のグループにおける治療要因の測定結果からの考察. 第51回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2016.10.8.
- 7) 伊藤哲朗, 古川諒一, 神山恵理奈, 川島英頌, 曾田 翠, 筑本貴郎, 多田裕之, 船田正彦, 市清 幸 : 危険ドラッグ蔓延防止に向けた岐阜県における取り組み:合成カンナビノイド代謝物の同定と異性体の構造識別. 第51回日本アルコール・アディクション医学会学術総会,東京,2016.10.8.
- 8) 古川諒一, 曾田 翠, 神山恵理奈, 多田裕之, 伊藤哲朗, 船田正彦, 北市清幸 : 危険ドラッグ成分 AB-CHMINACA における代謝物活性の評価. 日本法中毒学会第35年会. 大阪,2016.7.1.
- 9) 大澤美佳, 船田正彦 : 合成カンナビノイドによる痙攣発現機構の解明. 第90回日本薬理学会年会. 長崎, 2017.3.17.
- 10) 岩野さやか, 船田正彦 : NMDA 受容体発現細胞による幻覚薬作用評価. 第90回日本薬理学会年会. 長崎, 2017.3.17.
- 11) 嶋根卓也 : 危険ドラッグ問題の行方 : 全国住民調査 2015 年の結果より. 第22回埼玉県薬剤師会学術大会, 埼玉, 2016.11.6.
- 12) 近藤あゆみ, 高橋郁絵, 森田展彰 : 薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラムの理解度と有用性, 第51回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2016.
- 13) 引土絵未 : 当事者の経験を技術にする一治療共同体モデルとしてのエンカウンター・グループの試行と効果に関する研究一. 日本社会福祉学会第64回秋季大会, 京都, 2016.9.11.
- 14) 引土絵未, 岡崎重人, 加藤 隆, 山本 大, 山崎明義, 松本俊彦 : 日本型治療共同体モデルとしてのエンカウンター・グループの効果とその要因について. 第51回アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2016.10.8.
- 15) 大曲めぐみ, 嶋根卓也, 松本俊彦 : 日本の刑事施設における薬物依存離脱指導の評価方法についての文献レビュー. 第51回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2016.10.7

## (3) 研究報告会

- 1) 松本俊彦 : 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究. 平成28年度厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者地域支援に関する政策研究(研究代表者:松本俊彦)」研究成果報告会, 東京, 2017.3.10.

- 2) 松本俊彦：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究 (研究代表者：嶋根卓也)」研究成果報告会, 東京, 2017.3.10.
- 3) 船田正彦, 富山健一, 大澤美佳, 岩野さやか：合成カンナビノイド有害作用および有効性評価. 平成 28 年度精神・神経疾患研究開発費「危険ドラッグの有害作用発現機序の解明と評価技術開発に関する研究 (28-1) (主任研究者：船田正彦)」研究成果報告会, 東京, 2016.12.13.
- 4) 嶋根卓也：民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究. 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者地域支援に関する政策研究 (研究代表者：松本俊彦)」研究成果報告会, 東京, 2017.3.10.
- 5) 嶋根卓也：飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識調査 (2016 年). 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究 (研究代表者：嶋根卓也)」研究成果報告会, 東京, 2017.3.10.
- 6) 近藤あゆみ, 白川教人, 高橋郁絵, 森田展彰：薬物依存症者の家族を対象とした心理教育プログラムの開発と精神保健福祉センターへの普及, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 28 年度研究報告会, 2017.2.2.
- 7) 近藤あゆみ, 白川教人, 高橋郁絵, 森田展彰：精神保健福祉センターにおける家族心理教育プログラムの普及と評価に関する研究, 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究 (研究代表者：嶋根卓也)」研究成果報告会, 東京, 2017.3.10.
- 8) 近藤あゆみ, 大曲めぐみ, 近藤恒夫, 嶋根卓也, 米澤雅子：刑の一部執行猶予制度の施行に向けた民間薬物依存症回復支援施設の実態把握と課題の解明に関する研究, 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究 (研究代表者：嶋根卓也)」研究成果報告会, 東京, 2017.3.10.
- 9) 近藤あゆみ, 白川教人：多機連携による薬物依存症者地域支援の好事例に関する研究, 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業)「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究 (研究代表者：松本俊彦)」研究成果報告会, 東京, 2017.3.10.

(4) その他

C. 講演

- 1) 松本俊彦：処方薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. MSD 株式会社主催 プライマリーケアセミナー, 東京, 2016.4.6.
- 2) 松本俊彦：自傷行為の理解と対応. 一般社団法人発達精神医学・心理学研究会 よこはま発達クリニック 共催 児童精神医学研修会, 神奈川, 2016.4.8.
- 3) 松本俊彦：自殺企図・自傷行為の精神科治療と予防. 一般社団法人聖マリアンナ会東横恵愛病院主催 研修会, 神奈川, 2016.4.19.
- 4) 松本俊彦：処方薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. MSD 株式会社主催 clinical effects 研究会～先生方に知ってほしい薬物依存と不眠症～, 茨城, 2016.4.20.
- 5) 松本俊彦：成人期 ADHD の適正な診断と治療を目的とした今後の活動計画の策定. ヤンセンファーマ株式会社主催 成人期 ADHD に関する Advisory board meeting, 東京, 2016.4.24.

- 6) 松本俊彦：薬物乱用防止に係る講演会。藤田保健衛生大学主催アセンブリ I 講演会，愛知，2016.5.2.
- 7) 松本俊彦：薬物に関する基礎的な知識と適切なかわり方について。仙台市精神保健福祉総合センター主催 平成 28 年度アルコール（薬物）問題研修講座，宮城，2016.5.31.
- 8) 松本俊彦：思春期に表出するところと性の課題に振り回されない～課題の後追い対策から、未然防止への転換～。浄土真宗本願寺派北海道教区教務所主催「思春期・若者を知るための公開シンポジウム」，北海道，2016.6.6.
- 9) 松本俊彦：薬物依存からの回復と刑の一部執行猶予制度の運用と在り方。高松高等検察庁総務部主催 薬物依存に関する講演会，香川，2016.6.7.
- 10) 松本俊彦：薬物依存症者の地域支援のあり方。公益財団法人矯正協会主催 刑事政策意見交換会，東京，2016.6.8.
- 11) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と対応～。厚木児童思春期精神保健ネットワーク推進委員会主催 ミニワーク講演会，神奈川，2016.6.10.
- 12) 松本俊彦：処方薬乱用・依存を防ぐために精神科医療に何ができるか。公益社団法人大阪精神科診療所協会 平成 28 年度定時総会 第 22 回（通算 43 回）学術研究会，大阪，2016.6.12.
- 13) 松本俊彦：精神科医療機関における危険ドラッグ使用者の現状と、薬物依存症者に対する認知行動療法プログラムについて。一般社団法人日本精神科看護協会新潟県支部主催 第 55 回支部定期大会特別講演会，新潟，2016.6.14.
- 14) 松本俊彦：思春期の薬物乱用・依存～「故意に自分を傷つける」症候群。ヤンセンファーマ株式会社主催 第 10 回千歳子どものこころの医療研究会，千葉，2016.6.17.
- 15) 松本俊彦：自傷・自殺する子どもたち。岡山県臨床心理士会総会研修会および地域公開講座，岡山，2016.6.19.
- 16) 松本俊彦：子ども達が抱える困難の根底にあるもの～気付き・かわり・つながる大人になるために～。浄土真宗本願寺派東海教区教務所主催 思春期・若者を知るための公開シンポジウム，愛知，2016.6.20.
- 17) 松本俊彦：アルコールとうつ病について。MeijiSeika ファルマ主催 第 1 回あいち CNS フォーラム，愛知，2016.6.23.
- 18) 松本俊彦：生きづらさを抱える若者とその支援。首都大学東京 都市教養学部主催講演会，東京，2016.6.29.
- 19) 松本俊彦：薬物乱用防止教育で伝えたいこと。熊本県教育庁主催 平成 28 年度薬物乱用防止教室講習会，熊本，2016.7.1.
- 20) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか？。MSD 株式会社主催 第 5 階自殺関連行動ならびにアクションからの回復研究会，大阪，2016.7.2.
- 21) 松本俊彦：思春期の問題行動とその対応。公益社団法人日本産科婦人科学会主催 女性のヘルスケアアドバイザー養成プログラム，東京，2016.7.3.
- 22) 松本俊彦：プライマリ医のための睡眠薬・抗不安薬の適正使用法。持田製薬株式会社共催 日野市医師会学術講演会，東京，2016.7.5.
- 23) 松本俊彦：アルコールとうつ、自殺～死のトライアングル」を防ぐために～。吉富薬品株式会社共催 船橋市精神科医学会学術講演会，千葉，2016.7.9.
- 24) 松本俊彦：みんなで見守る大切なところと命～働き盛りのメンタルヘルス～。千歳市主催 こころの健康づくり講演会，北海道，2016.7.12.
- 25) 松本俊彦：薬物乱用から自分と同僚を守るためにできること。慶應病院長特命緊急必須セミナー，東京，2016.7.20.
- 26) 松本俊彦：危険ドラッグはなぜ「危険」なのか～薬物依存の理解と援助。アステラス製薬共催 第 18 回浅香山病院精神科症例研究会，大阪，2016.7.23.
- 27) 松本俊彦：若者の生きづらさと支援。認定 NPO 法人あいち自殺防止センター主催 設立 5 周年記念フォーラム・ワークショップ，愛知，2016.7.24.
- 28) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と援助～。佐賀県産婦人科医学会主催 第 39



- 回日本産婦人科医会性教育指導セミナー全国大会, 佐賀, 2016.7.31.
- 29) 松本俊彦: 処方薬乱用・依存を防ぐために精神科医療にできること. MSD 株式会社主催 埼玉精神神経科診療所協会イブニングセミナー, 埼玉, 2016.8.6.
- 30) 松本俊彦: アディクションとしての自傷. 大日本住友製薬主催 依存症を考える会 2016, 北海道, 2016.8.27.
- 31) 松本俊彦: 生きづらさを抱える若者への支援. 目黒区健康推進部主催 自殺対策講演会, 東京, 2016.9.4.
- 32) 松本俊彦: 生きづらさを抱える若者の理解. 市川市主催 こころの健康市民講座, 千葉, 2016.9.11.
- 33) 松本俊彦: アディクションからの回復. 第18回大分アディクシヨフォーラム, 大分, 2016.9.22.
- 34) 松本俊彦: 依存症からの回復に必要なもの. NPO 法人京都マック主催 京都マック 26周年感謝の集い, 京都, 2016.9.24.
- 35) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか〜痛みと関係性の病理学. 第6回 AIDS 文化フォーラム in 京都, 京都, 2016.10.2.
- 36) 松本俊彦: 若者と自殺について考える. 一般社団法人福島県精神保健福祉協会主催 第16回心うつくしまフォーラム, 福島, 2016.10.15.
- 37) 松本俊彦: 【ランチョンセミナー】アルコールとうつ、自殺. 第51回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2016.10.7.
- 38) 松本俊彦: 思春期と自殺. 一般社団法人日本家族計画協会主催 平成28年度思春期保健セミナーコースII, 東京, 2016.11.20.
- 39) 松本俊彦: 【特別講演】薬物依存の理解と援助. 厚生労働省、石川県主催 平成28年度麻薬・覚醒剤乱用防止運動石川大会, 石川, 2016.11.23.
- 40) 松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 京都府保護司会連合会主催 特別研修会, 京都, 2016.11.30.
- 41) 松本俊彦: SMARPP〜あなたにもできる薬物依存症者支援. MeijiSeika ファルマ主催 第2回札幌メンタルヘルス講演会, 北海道, 2016.12.7.
- 42) 松本俊彦: 処方薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. MSD 株式会社主催 Tokyo Clinical Conference, 東京, 2016.12.9.
- 43) 松本俊彦: 薬物依存について. 大塚製薬株式会社主催 第5回神戸精神障がい者の社会生活機能研究会, 兵庫, 2016.12.15.
- 44) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない〜若者の自殺予防のためにできること. 内閣府主催 平成28年度子供・若者支援地域ネットワーク強化推進事業, 滋賀, 2016.12.16.
- 45) 松本俊彦: 【シンポジウム登壇者】自死・自殺に本気で向き合う「テーマは若者!」. 特定非営利活動法人 京都自死・自殺相談センター主催 死にたいにまつわる言いたいようで言えないそんな気持ちのもっていきどころについてみんなでいろいろ考えるシンポジウム, 京都, 2016.12.23.
- 46) 松本俊彦: 薬物依存症者の地域支援に何が必要か. 大日本住友製薬主催 第3回薬物依存症研究会, 京都, 2017.1.14.
- 47) 松本俊彦: がん医療におけるアルコール・薬物依存. 特定非営利活動法人日本緩和医療学会主催 第22回日本緩和医療学会教育セミナー, 福岡, 2017.1.21.
- 48) 松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 広島県臨床心理士会主催 平成28年度第2回 HIV/AIDS 専門カウンセラー研修会, 広島, 2017.1.21.
- 49) 松本俊彦: 人はなぜ薬物依存症になるのか〜がん診療に携わる医療者が知っておくべき薬物依存の知識〜. 獨協医科大学病院主催 第29回腫瘍センターセミナー・第10回医療安全講習会, 栃木県, 2017.1.23.
- 50) 松本俊彦: 若者の自殺予防〜自傷行為の理解と援助. 千葉県医師会主催 研修会, 千葉, 2017.1.26.
- 51) 松本俊彦: 薬物依存の診断と治療と HIV 感染症. 鳥居薬品主催 第21回埼玉 HIV 感染症研究会, 埼玉, 2017.1.30.
- 52) 松本俊彦: 【基調講演】人はなぜ依存症になるのか〜回復に必要なもの. 日本司法書士会連合会主催 平成28年度第11回司法書士人権フォーラム, 東京, 2017.2.11.
- 53) 松本俊彦: 【基調講演】アルコール依存症の正体とは?〜誰もが陥るアルコール依存症への啓発〜. NPO

- 愛知家族会主催 第 12 回フォーラム, 愛知, 2017.2.12.
- 54) 松本俊彦: HIV にかかわる医療者が薬物依存症の患者さんとどう向き合い、どう支えるか. MSD 株式会社主催 小田急 HIV 懇話会, 神奈川, 2017.2.14.
- 55) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか. 沖縄県総合精神保健福祉センター主催 第 16 回アディクションフォーラム, 沖縄, 2017.2.18.
- 56) 松本俊彦: 【特別講演】人はなぜ依存症になるのか. 山口県臨床心理士会主催 平成 28 年度全体研修会, 山口, 2017.2.19.
- 57) 松本俊彦: 【特別講演】自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と援助～. 熊本児童青年期懇話会・吉富薬品株式会社共催 第 40 回熊本児童青年期懇話会特別講演会, 熊本, 2017.2.21.
- 58) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか. 大塚製薬株式会社主催 第 24 回東京子どものメンタルヘルス研究会, 東京, 2017.2.22.
- 59) 松本俊彦: 【基調講演】人はなぜ依存症になるのか～回復に必要なもの. 日本司法書士会連合会主催 平成 28 年度第 11 回司法書士人権フォーラム, 東京, 2017.2.11.
- 60) 松本俊彦: 【基調講演】アルコール依存症の正体とは?～誰もが陥るアルコール依存症への啓発～. NPO 愛知家族会主催 第 12 回フォーラム, 愛知, 2017.2.12.
- 61) 松本俊彦: HIV にかかわる医療者が薬物依存症の患者さんとどう向き合い、どう支えるか. MSD 株式会社主催 小田急 HIV 懇話会, 神奈川, 2017.2.14.
- 62) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか. 沖縄県総合精神保健福祉センター主催 第 16 回アディクションフォーラム, 沖縄, 2017.2.18.
- 63) 松本俊彦: 【特別講演】人はなぜ依存症になるのか. 山口県臨床心理士会主催 平成 28 年度全体研修会, 山口, 2017.2.19.
- 64) 松本俊彦: 【特別講演】自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と援助～. 熊本児童青年期懇話会・吉富薬品株式会社共催 第 40 回熊本児童青年期懇話会特別講演会, 熊本, 2017.2.21.
- 65) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか. 大塚製薬株式会社主催 第 24 回東京子どものメンタルヘルス研究会, 東京, 2017.2.22.
- 66) 松本俊彦: 【基調講演】精神障がい者の医療と福祉はだれのものかー措置入院の制度改革について考えるー. 日本弁護士連合会主催シンポジウム, 東京, 2017.3.6.
- 67) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか?. 厚生労働省主催 依存症への理解を深めるためのシンポジウム, 東京, 2017.3.11.
- 68) 松本俊彦: 最近の薬物乱用・依存の動向と治療の課題. 第 11 回六郷川精神科医療懇話会, 神奈川, 2017.3.16.
- 69) 松本俊彦: 薬物依存症の理解と援助. MSD 株式会社主催 平成 28 年度第 3 回静岡県精神科薬物療法認定薬剤師研修会, 静岡, 2017.3.18.
- 70) 松本俊彦: 【ランチョンセミナー】うつ病の適切な治療を目指してー今できることは何か?ー. 第 18 回日本サイコセラピー学会, 兵庫, 2017.3.25.
- 71) 松本俊彦: 止められない人たちと依存症. 横須賀断酒新生会主催 こころの健康づくり講演会 結成 50 周年記念大会, 神奈川, 2017.3.26.
- 72) 松本俊彦: もしも「死にたい」と言われたら. 清水町主催 こころの健康づくり講演会, 静岡, 2017.3.29.
- 73) 松本俊彦: 薬物依存臨床における司法的問題への対応. 北里大学医学部精神科学主催 北里大学精神科学教室研究会, 神奈川, 2017.3.30.
- 74) 船田正彦: 危険ドラッグ乱用の危険性を考える. 平成 28 年度東京都薬物乱用防止研修会, 東京, 2016.6.1.
- 75) 船田正彦: 薬物乱用の危険性. 平成 28 年度北見市薬物乱用防止研修会, 東京, 2016.7.2.
- 76) 船田正彦: 薬物乱用の危険性とお薬教育. 平成 28 年度沖縄県教育委員会, 沖縄, 2016.10.18.
- 77) 船田正彦: 身近に迫る危険ドラッグ. 平成 28 年度東京都薬物乱用防止研修会, 東京, 2016.11.15.
- 78) 船田正彦: 身近に迫る薬物乱用. 平成 28 年度鳥取県教育委員会, 鳥取, 2016.12.2.

- 79) 船田正彦：薬物乱用を知る。平成 28 年度町田市薬物乱用防止研修会，東京，2016.12.19.
- 80) 船田正彦：最近の薬物乱用問題。平成 28 年度文部科学省薬物乱用防止研修会，京都，2016.6.1.
- 81) 船田正彦：危険ドラッグの蔓延：基礎研究からのメッセージ。平成 28 年度愛知県薬物乱用防止研修会，名古屋，2017.2.9.
- 82) 船田正彦：危険ドラッグの現在。平成 28 年度岐阜県薬物乱用防止研修会，岐阜，2017.3.1.
- 83) 嶋根卓也：「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止教育。岩手県薬剤師会主催 平成 28 年度岩手県学校薬剤師会総会研修会，岩手，2016.6.4.
- 84) 嶋根卓也：あなたとあなたの友だちを薬物乱用から守るために。横須賀市立不入斗中学校，神奈川，2016.6.28.
- 85) 嶋根卓也：あなたとあなたの友だちを薬物乱用から守るために。横須賀市立衣笠中学校，神奈川，2016.6.28.
- 86) 嶋根卓也：あなたとあなたの友だちを薬物乱用から守るために。横須賀市立大津中学校，神奈川，2016.6.28.
- 87) 嶋根卓也：あなたとあなたの友だちを薬物乱用から守るために。下関市立下関保健所主催 中高生のための薬物乱用防止セミナー，山口，2016.8.23.
- 88) 嶋根卓也：「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止教育。フォーラム□：乱用薬物の撲滅に向けてー衛生薬学的観点から考えるー。日本薬学会 環境・衛生部会主催 フォーラム 2016 衛生薬学・環境トキシコロジー，東京，2016.9.10.
- 89) 嶋根卓也：公衆衛生関係者に知って欲しい薬物依存症の理解と支援。順天堂大学第 276 回衛生・公衆衛生合同ゼミナール，東京，2016.10.18.
- 90) 嶋根卓也：臨床医学Ⅱ物質関連障害を中心に。国立障害者リハビリテーションセンター講義，埼玉，2016.10.25，2016.11.15.
- 91) 嶋根卓也：1. 薬物乱用・依存の実態と動向 2. 「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物依存の支援。関東医療少年院，東京，2016.10.26.
- 92) 嶋根卓也：薬物乱用防止①依存性薬物の健康影響および法規制 ②薬物乱用の実態と理解 ③薬物乱用防止における薬剤師の役割。一般社団法人薬局共創未来人材育成機構主催 健康サポート薬局に係る研修，東京，2016.10.28.
- 93) 嶋根卓也：報告⑤アルコール薬物乱用・依存症。日本うつ病センター平成 28 年度自殺防止対策事業「ワンストップ支援のための情報プラットフォームづくり」連携支援の手引き作成のための合宿セミナー，神奈川，2016.12.5-6.
- 94) 嶋根卓也：日本の一般住民、青少年における薬物使用の動向について。デラウェア州立大学日本海外研修プログラム，東京，2017.1.11.
- 95) 嶋根卓也：薬物依存と性的マイノリティと HIV 感染症。旭川保護観察所主催 平成 28 年度第 4 回物質使用障害学習会，北海道，2017.1.13.
- 96) 嶋根卓也：群馬県の子どもたちを薬物乱用から守るための最新情報。群馬県健康福祉部主催西毛地区薬物乱用防止推進大会，群馬，2017.2.10.
- 97) 嶋根卓也：あなたとあなたの友だちを薬物乱用から守るために。東久留米市立南中学校薬物乱用防止教室，東京，2017.3.13.
- 98) 嶋根卓也：青少年における薬物乱用の現状と薬物乱用防止教育。文部科学省主催依存症予防教育推進シンポジウム，東京，2017.3.16.
- 99) 近藤あゆみ：特定非営利活動法人アルコール・薬物依存症リハビリセンター琉球 GAIA 主催家族会「本人の回復段階に応じた家族の課題～本人が回復初期段階にいる時～」，東京，2016.4.9.
- 100) 近藤あゆみ：特定非営利活動法人アルコール・薬物依存症リハビリセンター琉球 GAIA 主催家族会「本人の回復段階に応じた家族の課題～本人が回復中期段階にいる時～」，東京，2016.5.14.
- 101) 近藤あゆみ：千葉県精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室「薬物依存症とは」，千葉，2016.5.18.

- 102) 近藤あゆみ：特定非営利活動法人アルコール・薬物依存症リハビリセンター琉球 GAIA 主催家族会「本人の回復段階に応じた家族の課題～本人が回復後期段階にいる時～」，東京都，2016.6.11.
- 103) 近藤あゆみ：特定非営利活動法人アルコール・薬物依存症リハビリセンター琉球 GAIA 主催家族研修会「より良い家族関係のために」，東京，2016.7.16.
- 104) 近藤あゆみ：東京都立多摩総合精神保健福祉センター主催依存症家族教室「境界線を大切にしたコミュニケーション」，東京，2016.7.19.
- 105) 近藤あゆみ：千葉県精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室「良いコミュニケーションで本人を治療につなげる」，千葉，2016.7.20.
- 106) 近藤あゆみ：川崎ダルク主催家族会「本人の回復段階に応じた家族の課題～本人が回復初期段階にいる時～」，神奈川，2016.8.13.
- 107) 近藤あゆみ：広島県立総合精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室「逮捕や裁判を本人の回復のきっかけにする」，広島，2016.8.31.
- 108) 近藤あゆみ：特定非営利活動法人アルコール・薬物依存症リハビリセンター琉球 GAIA 主催家族会「薬物依存症と回復」，東京，2016.9.17.
- 109) 近藤あゆみ：千葉県精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室「長期的な回復を支え、再発・再使用に備える」，千葉，2016.9.21.
- 110) 近藤あゆみ：横浜ひまわり家族会主催家族会「逮捕や裁判を本人の回復のきっかけにする」，神奈川，2016.9.24.
- 111) 近藤あゆみ：新潟刑務所主催薬物依存離脱指導「クスリをやめ続けるコツ！」，新潟，2016.9.27.
- 112) 近藤あゆみ：新潟市こころの健康センター主催依存症家族教室「良いコミュニケーションで本人を治療につなげる」，新潟，2016.9.27.
- 113) 近藤あゆみ：東京保護観察所主催家族会「本人の良き回復支援者となるために～本人が回復初期段階にいる時～」，東京，2016.10.14.
- 114) 近藤あゆみ：特定非営利活動法人アルコール・薬物依存症リハビリセンター琉球 GAIA 主催家族会「境界線を意識した心地よいコミュニケーション」，東京，2016.10.15.
- 115) 近藤あゆみ：あなたの大切な人が依存症だったら～回復のために家族にできること・できないこと～浜松市精神保健福祉センター主催依存症講演会，静岡，2016.11.6.
- 116) 近藤あゆみ：特定非営利活動法人アルコール・薬物依存症リハビリセンター琉球 GAIA 主催家族研修会「境界線を意識した心地よいコミュニケーション」，神奈川，2016.11.12.
- 117) 近藤あゆみ：千葉県精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室「家族のセルフケア」，千葉，2016.11.16.
- 118) 近藤あゆみ：J.MARPP 実施上のポイント．関東医療少年院主催薬物非行防止指導に関する効果的な指導方法に係る講演，東京，2016.11.25.
- 119) 近藤あゆみ：若年薬物乱用者の 家族に対する支援．関東医療少年院主催薬物非行防止指導に関する効果的な指導方法に係る講演，東京，2016.11.25.
- 120) 近藤あゆみ：特定非営利活動法人アルコール・薬物依存症リハビリセンター琉球 GAIA 主催家族会「家族のセルフケア」，すみだ産業会館，東京，2016.12.10.
- 121) 近藤あゆみ：千葉県精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室「家族の病としての薬物依存症」，千葉，2017.1.18.
- 122) 近藤あゆみ：東京都立多摩総合精神保健福祉センター主催依存症家族教室「境界線を大切にしたコミュニケーション」，東京，2017.1.31.
- 123) 近藤あゆみ：新潟家族会主催依存症家族会「境界線を意識した親密なコミュニケーション」，新潟，2017.2.12.
- 124) 近藤あゆみ：新潟市こころの健康センター主催平成 28 年度アルコール・薬物依存症の家族教室「家族交流会」，新潟，2017.2.15.

- 125) 近藤あゆみ：群馬県こころの健康センター主催依存症からの回復支援塾助言者，群馬，2017.2.17.
- 126) 近藤あゆみ：多摩立川保健所主催平成27年度課題別地域保健医療推進プラン「薬物依存症家族支援における個別面接用ツールの開発と地域支援者への拡大」第4回PT会議助言者，東京，17.2.23.
- 127) 近藤あゆみ：広島県立総合精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室「回復しつつある本人と新たな関係を築く」，広島，2017.3.7.
- 128) 近藤あゆみ：千葉県精神保健福祉センター主催薬物依存症家族教室「振り返りと今後の目標」，千葉，2017.3.15.
- 129) 引土絵未：依存症者の回復を支える 治療共同体 Amity (アミティ) に学ぶ当事者の力を引き出す環境づくり．一般社団法人日本ASW協会関東支部 東風(こち)の会，神奈川，2016.7.9.
- 130) 引土絵未：一般社団法人日本アルコール関連問題ソーシャルワーカー協会主催アディクション基礎講座「グループの運営方法とセルフヘルプグループとのかかわり」，東京，2016.11.20.
- 131) 引土絵未：栃木ダルク主催家族教室「依存者本人の成長を助ける関わり」，栃木，2017.1.14.

#### D. 学会活動

##### (1) 学会主催

##### (2) 学会役員

- 1) 松本俊彦：日本アルコール・アディクション医学会 理事
- 2) 松本俊彦：日本精神科救急学会 理事
- 3) 松本俊彦：日本青年期精神療法学会 理事
- 4) 松本俊彦：日本社会精神医学会 理事
- 5) 船田正彦：日本アルコール・アディクション医学会 評議員
- 6) 船田正彦：日本神経精神薬理学会 評議員
- 7) 船田正彦：日本薬理学会 評議員
- 8) 嶋根卓也：日本アルコール・アディクション医学会 評議員
- 9) 近藤あゆみ：日本アルコール・アディクション医学会 理事
- 10) 近藤あゆみ：日本アルコール・アディクション医学会 評議員

##### (3) 座長

- 1) 松本俊彦：【シンポジウム座長】精神科外来における薬物依存症治療～刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援のために．第16回日本外来精神医療学会，横浜，2016.7.10.
- 2) 松本俊彦：【座長】私の回復について．第38回日本アルコール関連問題学会秋田大会，秋田，2016.9.10.
- 3) 松本俊彦，森田展彰：【座長】シンポジウム3 薬物依存症に対する心理療法の現状．第51回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2016.10.7.
- 4) 松本俊彦：【司会】シンポジウム8 子ども・若者の自殺予防．第57回日本児童青年精神医学会総会，岡山，2016.10.29.
- 5) 森田展彰，嶋根卓也：シンポジウム18 ハーム・リダクションの展開を考える：医療、回復支援、法的処遇の視点でディベート．平成28年度日本アルコール・アディクション医学会学術総会，東京，2016.10.8.

##### (4) 学会誌編集委員等

- 1) 松本俊彦：日本青年期精神療法学会 編集委員
- 2) 松本俊彦：星和書店「精神科治療学」編集委員

#### E. 研修

## (1) 研修企画

- 1) 第18回薬物依存臨床看護等研修会. 2016.9.6-9.
- 2) 第30回薬物依存臨床医師研修会. 2016.9.6-9.
- 3) 第8回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修. 2016.11.7-9.

## (2) 研修会講師

- 1) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない 子どもの自殺予防のために大人にできること. 神奈川県立学校保健会主催 県立学校保健春季研修会, 神奈川, 2016.6.10.
- 2) 松本俊彦: 講義 (依存症からの回復) およびグループワーク演習のスーパーバイズ. 法務省矯正研修所主催 専門研修過程改善指導科第 42 回 (改善指導プログラム指導職員 (特別編) I) 研修, 東京, 2016.6.15.
- 3) 松本俊彦: 地域における薬物依存症支援に期待すること~刑の一部執行猶予制度の施行を受けて~. 神奈川県精神保健福祉センター主催 平成 28 年度薬物相談業務研修, 神奈川, 2016.6.21.
- 4) 松本俊彦: 【トークセッション】 依存症からの回復を地域で支えるために. 神奈川県精神保健福祉センター主催 平成 28 年度薬物相談業務研修, 神奈川, 2016.6.21.
- 5) 松本俊彦: 講義 (依存症からの回復) およびグループワーク演習のスーパーバイズ. 法務省矯正研修所主催 専門研修過程改善指導科第 43 回 (改善指導プログラム指導職員 (特別編) II) 研修, 東京, 2016.7.5.
- 6) 松本俊彦: 自死・自傷・依存、生きづらさの実態. 子ども・若者ご縁づく推進室主催 思春期・若者支援コーディネーター養成研修会, 京都, 2016.7.6.
- 7) 松本俊彦: なぜ自傷行為を繰り返すのか~青少年の自傷行為とその対応~. 栃木県県北健康福祉センター主催 子どもの心の相談支援体制強化事業・地域自殺対策強化事業 支援機関職員等研修会, 栃木, 2016.7.15.
- 8) 松本俊彦: グループ研修スーパーバイザー. 特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 東京自殺相談ダイヤル・夜間こころの電話相談相談員グループ研修, 東京, 2016.7.17.
- 9) 松本俊彦: アルコールと自殺・自傷. 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成 28 年度第 1 回アルコール依存症臨床医等研修, 神奈川, 2016.7.22.
- 10) 松本俊彦: 子どものサインに気づいて・つなげて~児童生徒の自殺予防に向けた生活指導の充実について~. 府中市主催 教職員対象自殺対策研修, 東京, 2016.7.27.
- 11) 松本俊彦: 若者の依存症について~アルコール・薬物にはまる若者を理解する~. 横須賀市保健所主催 こころの健康づくり教室, 神奈川, 2016.8.1.
- 12) 松本俊彦: 拘禁者の自殺・自傷への対応. 警察大学校 留置業務管理運営専科教養, 東京, 2016.8.2.
- 13) 松本俊彦: 自傷・自殺する子どもたち. 島根県こころの医療センター他主催 平成 28 年度子どもの心の診療ネットワーク専門職研修会, 島根, 2016.8.7.
- 14) 松本俊彦: 自殺予防ー「死にたい」に医療の現場で向き合うー. 公益社団法人岐阜県看護協会主催 看護研修会, 岐阜, 2016.8.21.
- 15) 松本俊彦: 薬物再乱用防止プログラムの集団実施について. 法務省保護局主催 平成 28 年度薬物依存対策研修, 千葉, 2016.8.24.
- 16) 松本俊彦: 生徒の自傷行為について. 東京都立高等学校学校保健研究会主催 第 1 回学校保健 (養護教諭) 研修会, 東京, 2016.8.26.
- 17) 松本俊彦: 自分を傷つけてしまう子どもたちの理解と対応について. 平成 28 年度九州児童心理司研究協議会, 沖縄, 2016.9.14.
- 18) 松本俊彦: 人はなぜ依存していくのか?. NPO 法人東京多摩いのちの電話主催 相談員研修会, 東京, 2016.9.19.
- 19) 松本俊彦: もしも死にたいと言われたら~自殺リスクの理解と対応~. 医療法人杏和会 阪南病院主催 職員研修会, 大阪, 2016.9.24.
- 20) 松本俊彦: 薬物依存者への支援~薬物再乱用防止プログラム~. 奈良県精神保健福祉センター主催 平成

- 28年度奈良県薬物依存症研修会, 奈良, 2016.9.30.
- 21) 松本俊彦: 特定生活指導(薬物 1003 矯正研修所\_非行防止指導)の実践と効果的な実施方法等について. 多摩少年院, 関東医療少年院, 八王子少年鑑別所共催 効果検証業務に係る拡大勉強会, 東京, 2016.10.3.
  - 22) 松本俊彦: 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けて. 厚生労働省医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課主催 平成 28 年度再乱用防止対策講習会, 熊本, 2016.10.4.
  - 23) 松本俊彦: 青年期の依存. 東京都子供の心診療支援拠点病院事業 児童青年期臨床精神医療講座 応用編, 東京, 2016.10.12.
  - 24) 松本俊彦: アルコールと自殺・自傷. 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成 28 年度第 2 回アルコール依存症臨床医等研修, 神奈川, 2016.10.14.
  - 25) 松本俊彦: 薬物依存の現状と治療一処方薬依存を踏まえて. 一般社団法人 日本病院薬剤師会主催 平成 28 年度精神科薬物療法認定薬剤師講習会, 東京, 2016.10.16.
  - 26) 松本俊彦: 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けて. 厚生労働省医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課主催 平成 28 年度再乱用防止対策講習会, 鳥取, 2016.11.2.
  - 27) 松本俊彦: SMARPP の理念と意義. 国立精神・神経医療研究センター主催 第 8 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修, 東京, 2016.11.7.
  - 28) 松本俊彦: 薬物依存症臨床における司法的問題への対応. 国立精神・神経医療研究センター主催 第 8 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修, 東京, 2016.11.7.
  - 29) 松本俊彦: SMARPP ビデオ学習. 国立精神・神経医療研究センター主催 第 8 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修, 東京, 2016.11.8.
  - 30) 松本俊彦: 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けて. 厚生労働省医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課主催 平成 28 年度再乱用防止対策講習会, 滋賀, 2016.11.15.
  - 31) 松本俊彦: 覚せい剤依存症と医療. 法務省矯正研修所主催 任用研修過程高等科第 48 回研修, 東京, 2016.12.2.
  - 32) 松本俊彦: 認知行動療法を用いた薬物依存症に対する集団療法の理念と意義. 独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター主催 平成 28 年度アルコール・薬物関連問題研修, 佐賀, 2016.12.5.
  - 33) 松本俊彦: 【パネルディスカッション司会】“依存症の視点”から考える電話相談依存. NPO 法人メンタルケア協議会主催 電話相談員全体必修研修会, 東京, 2016.12.11.
  - 34) 松本俊彦: 依存症回復支援プログラムにおける講義およびグループワーク運営における指導・助言. 東京都立精神保健福祉センター主催 依存症回復支援プログラム実施における講師, 東京, 2016.12.20.
  - 35) 松本俊彦: 薬物再乱用防止プログラム及び薬物依存症対象者の処遇をテーマとした研修の講師. 宇都宮保護観察所主催 薬物再乱用防止プログラム及び薬物依存対象者の処遇に係る研修, 栃木, 2016.12.21.
  - 36) 松本俊彦: グループ研修スーパーバイザー. 特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 東京自殺相談ダイヤル・夜間こころの電話相談相談員グループ研修, 東京, 2016.12.25.
  - 37) 松本俊彦: 薬物やアルコール等依存症に関する理解と支援. 川崎市精神保健福祉センター主催 基礎研修, 東京, 2017.1.13.
  - 38) 松本俊彦: グループ研修スーパーバイザー. 特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 東京自殺相談ダイヤル・夜間こころの電話相談相談員グループ研修, 東京, 2017.1.15.
  - 39) 松本俊彦: 認知行動療法プログラムスーパーバイザー. 群馬県こころの健康センター主催 平成 28 年度依存症からの回復支援塾, 群馬, 2017.1.20.
  - 40) 松本俊彦: 事例検討会コメンテーター. 広島県臨床心理士会主催 平成 28 年度第 2 回 HIV/AIDS 専門カウンセラー研修会, 広島, 2017.1.22.
  - 41) 松本俊彦: 薬物乱用防止プログラムについて. 法務省法務総合研究所主催 第 52 回保護観察官高等科研修, 東京, 2017.1.31.
  - 42) 松本俊彦: 薬物・アルコール依存とその支援. 四街道市主催 相談対応職員研修会, 千葉, 2017.2.1.
  - 43) 松本俊彦: 事例をとおして依存症を考える. 東京都立中部総合精神保健福祉センター主催 平成 28 年度

- 東京都特別区及び島しょ精神保健福祉行政実務担当者業務連絡の集い, 東京, 2017.2.3.
- 44) 松本俊彦:人はなぜ依存症になるのか～若者の生きづらさを考える～.メンタルネットinとちぎ主催 第5回研修会, 栃木, 2017.2.5.
  - 45) 松本俊彦:【総合司会】薬物依存症回復施設職員研修. 国立精神・神経医療研究センター独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成28年度依存症回復施設職員研修, 神奈川, 2017.2.7.
  - 46) 松本俊彦:自傷・自殺の理解と対応リスク評価と対応. 国立精神・神経医療研究センター独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成28年度依存症回復施設職員研修, 神奈川, 2017.2.8.
  - 47) 松本俊彦:【ファシリテーター】事例検討会. 国立精神・神経医療研究センター独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成28年度依存症回復施設職員研修, 神奈川, 2017.2.8.
  - 48) 松本俊彦:矯正施設における自殺・自傷への対応. 法務省矯正研修所主催 任用研修過程高等科第48回研修, 東京, 2017.2.10.
  - 49) 松本俊彦:もしも死にたいと言われたら～自殺リスクの理解と対応. 埼玉県医師会主催 平成28年度自殺未遂者ケア研修会, 埼玉, 2017.2.16.
  - 50) 松本俊彦:思春期における自傷と自殺. 滋賀県臨床心理士会主催 スクールカウンセラー研修会, 滋賀, 2017.2.26.
  - 51) 松本俊彦:薬物依存症の診断と治療. 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成28年度依存症治療・回復プログラム等研修, 神奈川, 2017.3.1.
  - 52) 松本俊彦:依存のメカニズム. 法務省矯正研修所主催 専門研修過程調査鑑別特別科第10回研修, 東京, 2017.3.7.
  - 53) 松本俊彦:困難事例の支援指針についてのスーパービジョン. RDP 横浜スタッフ対象スーパービジョン研究会, 神奈川, 2017.3.11.
  - 54) 松本俊彦:自傷・嗜癖と自死対策. 東京大学ハラスメント相談所研修会, 東京, 2017.3.12.
  - 55) 松本俊彦:認知行動療法プログラムスーパーバイザー. 群馬県こころの健康センター主催 平成28年度「依存症からの回復支援塾」, 群馬, 2017.3.17.
  - 56) 松本俊彦:グループ研修スーパーバイザー. 特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 東京自殺相談ダイヤル・夜間こころの電話相談相談員グループ研修, 東京, 2017.3.19.
  - 57) 松本俊彦:依存症回復支援プログラムにおける講義およびグループワーク運営における指導・助言. 東京都立精神保健福祉センター主催 依存症回復支援プログラム実施における講師, 東京, 2017.3.21.
  - 58) 松本俊彦:命をつなぎとめ 生きることを支援するとは. 平成28年度中央区第3回ゲートキーパー養成講座, 東京, 2017.3.22.
  - 59) 嶋根卓也:薬物依存症と性的マイノリティおよびHIV感染. 国立精神・神経医療研究センター主催 第8回 認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 東京, 2016.11.9.
  - 60) 嶋根卓也:今、求められる薬剤師の新たな役割とは～過量服薬を防ぐ～. 宇都宮市保健所主催 平成28年度自殺予防ゲートキーパー研修会(薬剤師向け), 栃木, 2016.7.12.
  - 61) 嶋根卓也:薬局薬剤師はメンタルヘルスを支援できるか:ゲートキーパーの提案. 高知県薬剤師会主催 自殺予防ゲートキーパー養成研修会, 高知, 2016.8.7.
  - 62) 嶋根卓也:薬剤師によるメンタルヘルス支援一気づき・関わり・つなぎ. 兵庫県薬剤師会主催 兵庫県薬剤師会ゲートキーパー研修会, 兵庫, 2016.9.4.
  - 63) 嶋根卓也:「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止教育. 埼玉県熊谷保健所主催 薬物乱用防止講習会, 埼玉, 2016.11.4.
  - 64) 嶋根卓也:薬剤師によるメンタルヘルス支援一気づき・関わり・つなぎ. 埼玉県薬剤師会主催 ゲートキーパー研修会, 埼玉, 2016.11.20.
  - 65) 嶋根卓也:「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止教育. 長野県教育委員会主催 平成28年度長野県薬物乱用防止教育指導者講習会, 長野, 2016.12.12.
  - 66) 嶋根卓也:薬物乱用の動向、ならびに薬物依存症と性的マイノリティ・HIV. 国立精神・神経医療研究



- センター独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催平成 28 年度薬物依存症回復施設職員研修，神奈川，2017.2.7.
- 67) 嶋根卓也：IDU and Non-IDU in the context of HIV/AIDS response in Japan. 独立行政法人国際協力機構 (JICA) 主催 平成 28 年度課題別研修「HIV/エイズ予防および対策～MDG6 達成にむけて～」，東京，2017.3.3.
- 68) 嶋根卓也：薬物依存研究の最新情報 (疫学研究). 平成 28 年度東京都薬物乱用防止推進東大和地区協議会研修会，東京，2017.3.29.
- 69) 近藤あゆみ：依存症者をもつ家族に対する相談支援と心理教育. 岩手県精神保健福祉センター主催平成 28 年度薬物・アルコール関連問題支援者研修会①，岩手，2016.6.24.
- 70) 近藤あゆみ：薬物依存症者をもつ家族に対する相談支援. 埼玉県疾病対策課主催平成 28 年度薬物依存症者とその家族への支援研修，埼玉，2016.7.30.
- 71) 近藤あゆみ：薬物依存症の理解と支援 ～家族に寄り添う支援方法を学ぶ～. 広島県立総合精神保健福祉センター主催平成 28 年度地域依存症対策研修事業 (薬物依存症対策支援者スキルアップ研修)，広島，2016.8.30.
- 72) 近藤あゆみ：高知県立精神保健福祉センター主催平成 28 年度薬物依存症者家族支援プログラム勉強会，高知，2016.9.16.
- 73) 近藤あゆみ：依存症の援助の基本と Tamarpp の概要. 薬物依存症者をもつ家族に対する相談支援. 東京都立多摩総合精神保健福祉センター主催平成 28 年度 薬物・アルコール等相談 拡大版 職員学習会，東京，2016.10.19.
- 74) 近藤あゆみ：SMARPP の実際 国立精神・神経医療研究センター主催 第 8 回 認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 東京，2016.11.7.
- 75) 近藤あゆみ：薬物依存者家族支援のためのツール 国立精神・神経医療研究センター主催 第 8 回 認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 東京，2016.11.9.
- 76) 近藤あゆみ：薬物依存症者に対する相談支援と認知行動療法理論に基づく再発予防の考え方 岩手県精神保健福祉センター主催平成 28 年度薬物・アルコール関連問題支援者研修会② 岩手，2016.11.18.
- 77) 近藤あゆみ：本人支援を視野に入れた 家族の心理教育プログラム. 京都市こころの健康センター主催平成 28 年度依存症関係機関職員研修，京都，2017.1.24.
- 78) 近藤あゆみ：薬物依存症者及び家族への支援と関係機関の連携について. 香川県精神保健福祉センター主催薬物依存症者支援機関等職員スキルアップ研修会，香川，2017.2.1.
- 79) 近藤あゆみ：薬物依存症者に対する インテークと重症度評価. 国立精神・神経医療研究センター独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催平成 28 年度薬物依存症回復施設職員研修，神奈川，2017.2.7.
- 80) 近藤あゆみ：薬物依存症者の家族に対する支援. 国立精神・神経医療研究センター独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催平成 28 年度薬物依存症回復施設職員研修，神奈川，2017.2.7.
- 81) 近藤あゆみ：薬物依存症者をもつ家族の支援について. 香川県精神保健福祉センター主催薬物依存症者支援機関等職員スキルアップ研修会，香川，2017.2.14.
- 82) 近藤あゆみ：薬物依存症の理解と支援 ～家族に寄り添う支援方法を学ぶ～. 広島県立総合精神保健福祉センター主催平成 28 年度地域依存症対策研修事業 (薬物依存症対策支援者スキルアップ研修)，広島，2017.3.6.
- 83) 引土絵未：薬物処遇プログラムの実施方法について. 法務省保護局主催 薬物処遇重点実施研修，法務省，東京，2016.10.27.
- 84) 引土絵未：グループワーク. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催平成 28 年度依存症拠点病院事業 薬物依存症に対する認知行動療法研修，国立研究開発法人国立精神・神経センター精神保健研究所，東京，2016.11.8.
- 85) 引土絵未：ダルクにおけるエンカウンター・グループの試み. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研

究センター 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催平成 28 年度衛生関係指導者養成等委託費依存症回復施設職員研修等事業「薬物依存症回復施設職員研修」, 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター, 神奈川, 2016.2.8.

## F. その他

- 1) 松本俊彦: 薬物乱用の実態と、今求められる対策. BS 日テレ 深層 NEWS, 2016.5.17.
- 2) 松本俊彦: 清原和博被告の薬物使用事件を受けて中高年の薬物使用の実態について. テレビ朝日 報道ステーション, 2016.5.31.
- 3) 松本俊彦: 薬物依存はなくせるか「生きづらさ」を抱える人の心のケアが重要. THE PAGE, 2016.4.22.
- 4) 松本俊彦: なぜ逮捕されてもクスリがやめられないのか? 精神科医に聞く、薬物依存症の心理と回復に必要なこと. Cyzo woman, 2016.5.16.
- 5) 松本俊彦: 松本氏と山本氏、薬物依存症に警鐘. YOMIURI ONLINE, 2016.5.18.
- 6) 松本俊彦: 子どもの自傷行為を考える講演会 来月 19 日、岡山大. 毎日新聞地方版, 2016.5.28.
- 7) 松本俊彦: 薬物犯社会で構成支援. 読売新聞, 2016.5.29.
- 8) 松本俊彦: 薬物依存社会で更生. 毎日新聞, 2016.5.31.
- 9) 松本俊彦: 座談会「クスリがやめられない」が言える社会を目指して. 世界 第 883 号, 2016.6.1.
- 10) 松本俊彦: 知って得する! 新名医の最新治療 Vol.430 薬物依存. 週刊朝日 6 月 3 日号, 2016.6.3.
- 11) 松本俊彦: 再犯防止「地域の支援を」 刑の一部執行猶予 150 人参加. 四国新聞, 2016.6.8.
- 12) 松本俊彦: 薬事事件「司法と医療がスクラムを」 「刑の一部執行猶予」導入で講演. 朝日新聞, 2016.6.8.
- 13) 松本俊彦: 薬物犯更生 地域全体で. 読売新聞, 2016.6.9.
- 14) 松本俊彦: 薬物依存は刑罰では治らない. 日刊ゲンダイ, 2016.6.10.
- 15) 松本俊彦: 依存症回復へ少人数集會. 静岡新聞朝刊, 2016.6.15.
- 16) 松本俊彦: 働き盛り 心の健康対処は 来月 12 日千歳で講演会. 北海道新聞朝刊, 2016.6.17.
- 17) 松本俊彦: 危険ドラッグの正体. THE SHAKAI SHINPO, 2016.6.29.
- 18) 松本俊彦: 高松高検: 薬物依存、理解促す 講演会に検察、県警 150 人. 毎日新聞地方版, 2016.7.8.
- 19) 松本俊彦: Treating drug abuse as disease gaining ground. THE JAPAN TIMES, 2016.7.12.
- 20) 松本俊彦: クローズアップ 2016: 障害者施設 19 人刺殺 見逃された予兆. 毎日新聞, 2016.7.27.
- 21) 松本俊彦: 兆候数々 凶行妨げず. 読売新聞, 2016.7.27.
- 22) 松本俊彦: 妄想性障害など複数の診断名 植松容疑者. 日本経済新聞, 2016.7.27.
- 23) 松本俊彦: Japan mass killing sparks debate: Why didn't the system prevent it?. Reuters, 2016.7.27.
- 24) 松本俊彦: 凶行は防げなかったのか 相模原 19 人刺殺 (上) 「措置入院患者 正直荷が重い」. 産経新聞, 2016.7.28.
- 25) 松本俊彦: 凶行は防げなかったのか 相模原 19 人刺殺 (中) 退院後の制度確立 手探り. 産経新聞, 2016.7.29.
- 26) 松本俊彦: 凶行は防げなかったのか 相模原 19 人刺殺 (下) 人権と安全、司法の関与議論を 触法障害者の処遇めぐり. 産経新聞, 2016.7.30.
- 27) 松本俊彦: 精神障害者らへの偏見を懸念. 週刊朝日, 2016.8.12.
- 28) 松本俊彦: 大麻 影響見極め. 毎日新聞, 2016.7.29.
- 29) 松本俊彦: 相模原殺人「多くの人は暴力とは無縁」専門家が精神障害者への偏見を懸念. 週刊朝日, 2016.8.5.
- 30) 松本俊彦: クローズアップ 2016: 措置入院 解除後が焦点. 毎日新聞, 2016.8.11.
- 31) 松本俊彦: 大麻「使用」通報は. 毎日新聞, 2016.8.14.
- 32) 松本俊彦: 相模原殺傷 女性 9 人殺害容疑 再逮捕. 毎日新聞, 2016.8.16.
- 33) 松本俊彦: これからの自殺対策について思うこと. 都医ニュース, 2016.8.15.
- 34) 松本俊彦: 再発防止 苦悩の現場. 読売新聞, 2016.8.26.
- 35) 松本俊彦: 措置入院見直し 病院相手取り訴訟…退院後ケアに課題も. 産経新聞, 2016.8.26.

- 36) 松本俊彦：薬物依存症 集団療法に活路。日本経済新聞，2016.8.28.
- 37) 松本俊彦：相模原事件 妄想なのか思想なのか？。YOMIURI ONLINE，2016.8.29.
- 38) 松本俊彦：薬物問題どう取り組む（上）。神奈川新聞，2016.9.4.
- 39) 松本俊彦：薬物問題どう取り組む（下）。神奈川新聞，2016.9.5.
- 40) 松本俊彦：【対談】相模原事件容疑者の言動は「思想」なのか「妄想」なのか。月刊『創』10月号，2016.9.7.
- 41) 松本俊彦：公開講座「依存症からの回復に必要なもの」。京都新聞，2016.9.13.
- 42) 松本俊彦：グループで依存症治療 薬物やアルコール回復に 石川県が再発防止プログラム。中日新聞，2016.9.15.
- 43) 松本俊彦：京都マック公開講座「1人じゃないんだ 共に歩もう」。京都新聞，2016.9.18.
- 44) 松本俊彦：依存症への理解深めて 22日、大分市でフォーラム。大分合同新聞，2016.9.20.
- 45) 松本俊彦：自死は、向き合える。世界 第887号，2016.10.1.
- 46) 松本俊彦：乱用多いデパスなど向精神薬指定に。YOMIURI ONLINE，2016.9.23.
- 47) 松本俊彦：依存症で「家族や仕事を失う」下京公開講座で体験談。京都新聞，2016.9.25.
- 48) 松本俊彦：意志の力では制御不能。読売新聞，2016.10.12.
- 49) 松本俊彦：「よく効くクスリ」の功罪 “処方薬依存”はなぜ起きる？。YAHOO!ニュース（市川衛），2016.10.15.
- 50) 松本俊彦：徳光&木佐の知りたいニッポン！～1回でもダメ！若者の心と体を壊す薬物乱用～。政府広報インターネットテレビ，2016.10.20.
- 51) 松本俊彦：睡眠導入剤や抗不安薬で薬物依存に…依存症になりやすい人とは？。AERA，2016.11.7.
- 52) 松本俊彦：家族が覚せい剤を使っていたら……高知東生の「これで薬をやめられる」は本心。HEALTH PRESS，2016.11.10.
- 53) 松本俊彦：差別や孤立が重層的に絡み合った事件。週刊金曜日，2016.11.18.
- 54) 松本俊彦：向精神薬になったデパス、処方はどうする？。日経メディカル，2016.11.22.
- 55) 松本俊彦：覚せい剤隠匿か。毎日新聞，2016.11.29.
- 56) 松本俊彦：薬物乱用ない社会を目指す。北國新聞，2016.11.24.
- 57) 松本俊彦：薬物依存で<人里離れた施設に隔離>は古い？～街中でも治療可能な「SMARPP＝スマープ」。HEALTH PRESS，2016.11.25.
- 58) 松本俊彦：ピアスとタトゥー、そして自傷の傷跡。YOMIURI ONLINE，2016.11.28.
- 59) 松本俊彦：ASKAが「覚せい剤」で再逮捕！<刑罰>では薬物依存から構成できない理由とは。HEALTH PRESS，2016.11.29.
- 60) 松本俊彦：薬物依存治療の第一人者が語る境界線。日刊ゲンダイ，2016.12.1.
- 61) 松本俊彦：【基調講演】自分を傷つけずにはいられない。福島民友新聞社，2016.12.4.
- 62) 松本俊彦：新「名医」の最新治療2017「薬物依存」。週刊朝日MOOK，2016.12.5.
- 63) 松本俊彦：松本俊彦医師に聞く ASKA 覚醒剤再逮捕。日刊ゲンダイ，2016.12.6.
- 64) 松本俊彦：相模原殺傷事件 厚労省最終報告書 要旨。毎日新聞，2016.12.9.
- 65) 松本俊彦：依存症は慢性疾患。罰では治らない。日本医事新報，2016.12.10.
- 66) 松本俊彦：デパス向精神薬指定の根拠とは 乱用患者の心理社会的問題に目を向けよ。Nikkei Drug Information，2016.12.10.
- 67) 松本俊彦：成宮寛貴を<引退>に追い込んだ薬物報道～彼は本当に「コカイン」におぼれていたのか？。HEALTH PRESS，2016.12.11.
- 68) 松本俊彦：松本俊彦さんインタビュー（1）ASKAさん逮捕 薬物依存症は犯罪なのか、病気なのか。YOMIURI ONLINE，2016.12.12.
- 69) 松本俊彦：松本俊彦さんインタビュー（2）薬物依存症の報道、どうあるべきか。YOMIURI ONLINE，2016.12.13.
- 70) 松本俊彦：松本俊彦さんインタビュー（3）薬物依存症の治療プログラムとは？。YOMIURI ONLINE，

2016.12.14.

- 71) 松本俊彦：中高年に覚醒剤の影。日本経済新聞，2016.12.22.
- 72) 松本俊彦：思春期と自殺。家族と健康，2017.1.1.
- 73) 松本俊彦：自殺は、向き合える。世界，2017.1.1.
- 74) 松本俊彦：厚労省もついに認めた！この「睡眠薬・安定剤」の濫用にご用心。週刊現代，2017.1.3.
- 75) 松本俊彦：精神障害者支援研修会に参加を。下野新聞，2017.1.7.
- 76) 松本俊彦：デパスに投与制限、中止後どうする？。NIKKEI MEDICAL，2017.1.10.
- 77) 松本俊彦：苦しさや孤独 死にたい気持ち。毎日新聞，2017.1.18.
- 78) 松本俊彦：治療の第一人者が語る「脱・薬物依存」最新プログラム。日刊ゲンダイ DIGITAL，2017.1.18.
- 79) 松本俊彦：断薬から治療優先へ。AERA，2017.1.30.
- 80) 松本俊彦：薬物依存症治療の最先端「またシャブを使ってしまったよ」でも OK。AERA（ネット配信），2017.1.25.
- 81) 松本俊彦：「男らしさ」が苦しい男たち。なぜ男性は自分の弱さを語れないのか？。BuzzFeed Japan，2017.1.30.
- 82) 松本俊彦：市民グループが「薬物報道」ガイドライン発表「偏見を助長させないで」。弁護士ドットコム ニュース他ネット配信，2017.1.31.
- 83) 松本俊彦：「まちがった薬物報道はもうやめて」専門家、当事者は声をあげる。BuzzFeed Japan，2017.1.31.
- 84) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と援助～。声（東京都立高等学校学校保健研究会），2017.2.1.
- 85) 松本俊彦：薬物報道の指針 支援者らが提案 正しく伝え回復後押しを。信濃毎日新聞朝刊，2017.2.1.
- 86) 松本俊彦：「患者の足を引っ張らないで」薬物報道に提言。Medical Tribune，2017.2.1.
- 87) 松本俊彦：なぜやめられないのか。信濃毎日新聞，2017.2.3.
- 88) 松本俊彦：依存症からの回復とは。信濃毎日新聞，2017.2.3.
- 89) 松本俊彦：患者を生きる 依存症 薬物1 打つと強くなる気がした…。朝日新聞，2017.2.6.
- 90) 松本俊彦：薬物依存のフォーラム。中日新聞，2017.2.7.
- 91) 松本俊彦：つなぐ 声なき声を無心に聞く。毎日新聞，2017.2.8.
- 92) 松本俊彦：患者を生きる 依存症 薬物5 情報編 孤立させないことが肝心。朝日新聞，2017.2.14.
- 93) 松本俊彦：つなごう医療 354 中部の最前線 薬物報道 治療に配慮を。中日新聞，2017.2.14.
- 94) 松本俊彦：つなぐ 「信じられる人がいるかもしれない」。毎日新聞，2017.2.15.
- 95) 松本俊彦：「心中は虐待」子救うには。朝日新聞，2017.1.24.
- 96) 松本俊彦：つなぐ 自傷行為をする人は弱い人間か。毎日新聞，2017.2.22.
- 97) 松本俊彦：処方薬乱用・依存予防のために一人ひとりにできること。東京都こころの健康だより，2017.2.28.
- 98) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と援助～。声（東京都立高等学校学校保健研究会），2017.2.1.
- 99) 松本俊彦：薬物報道の指針 支援者らが提案 正しく伝え回復後押しを。信濃毎日新聞朝刊，2017.2.1.
- 100) 松本俊彦：「患者の足を引っ張らないで」薬物報道に提言。Medical Tribune，2017.2.1.
- 101) 松本俊彦：なぜやめられないのか。信濃毎日新聞，2017.2.3.
- 102) 松本俊彦：依存症からの回復とは。信濃毎日新聞，2017.2.3.
- 103) 松本俊彦：患者を生きる 依存症 薬物1 打つと強くなる気がした…。朝日新聞，2017.2.6.
- 104) 松本俊彦：薬物依存のフォーラム。中日新聞，2017.2.7.
- 105) 松本俊彦：つなぐ 声なき声を無心に聞く。毎日新聞，2017.2.8.
- 106) 松本俊彦：患者を生きる 依存症 薬物5 情報編 孤立させないことが肝心。朝日新聞，2017.2.14.
- 107) 松本俊彦：つなごう医療 354 中部の最前線 薬物報道 治療に配慮を。中日新聞，2017.2.14.
- 108) 松本俊彦：つなぐ 「信じられる人がいるかもしれない」。毎日新聞，2017.2.15.
- 109) 松本俊彦：「心中は虐待」子救うには。朝日新聞，2017.1.24.

- 110) 松本俊彦：つなぐ 自傷行為をする人は弱い人間か. 毎日新聞, 2017.2.22.
- 111) 松本俊彦：処方薬乱用・依存予防のために一人ひとりにできること. 東京都こころの健康だより, 2017.2.28.
- 112) 松本俊彦：健康づくり Q&A (回答). 健康づくり 3月号 第467号, 2017.3.1.
- 113) 松本俊彦：自死は、向き合える 第4回 彼らの支援が「生きる」を選ばせる. 世界, 2017.3.1.
- 114) 松本俊彦：つなぐ 「死にたい人は迷っている」. 毎日新聞, 2017.3.1.
- 115) 松本俊彦：回復の足を引っ張るのはやめて！「薬物報道ガイドライン」を作ろう. 季刊 Be!, 2017.3.10.
- 116) 松本俊彦：つなぐ 「一緒に過ごせる人を作ってほしい」. 毎日新聞, 2017.3.15.
- 117) 松本俊彦：薬物使用者 支援を探る 長野 専門家が講演や解説. 信濃毎日新聞, 2017.3.16.
- 118) 松本俊彦：特集ワイド 戦隊ヒーローから「スーパー銭湯アイドル」に変身！ ムード歌謡グループ「純烈」. 毎日新聞, 2017.3.17.
- 119) 松本俊彦：つなぐ 死にたい気持ちの背景を考えて. 毎日新聞, 2017.3.22.
- 120) 松本俊彦：薬物依存症への偏見促す報道に「待った」. Medical Tribune, 2017.3.23.
- 121) 松本俊彦：たまに 薬物依存 社会が助長. 読売新聞, 2017.3.24.
- 122) 松本俊彦：もしも身近な人の自傷に気づいたら. YOMIURI ONLINE, 2017.3.27.
- 123) 松本俊彦：永続的に「監視」人権侵害の恐れ「相模原事件 検討は不十分」. 東京新聞, 2017.3.28.
- 124) 松本俊彦：薬物依存や制度を学ぶ 長野で研修会 ダルクや保護司、支援者ら. 中日新聞, 2017.3.31.
- 125) 船田正彦：覚醒剤依存性は深刻 日本経済新聞, 2016.6.1.
- 126) 船田正彦：覚醒剤事件、自力更生求め. 毎日新聞, 2016.6.1.
- 127) 船田正彦：大麻成分 悪影響の仕組み解明 大阪大. 朝日新聞, 2016.6.30.
- 128) 船田正彦：「医療用大麻」・・・あるの？ 朝日新聞, 2016.11.9.
- 129) 船田正彦：覚醒剤使用：50歳以上再犯者8割. 朝日新聞, 2016.11.29.
- 130) 船田正彦：薬物乱用の恐怖を聞く. 日刊スポーツ, 2016.12.5.
- 131) 船田正彦：大麻-薄れる抵抗感. 産経新聞, 2016.12.6.
- 132) 船田正彦：コカイン摘発倍増. 産経新聞, 2016.12.31.
- 133) 船田正彦：大麻が「入門薬物」：危険ドラッグから移行 読売新聞2017.2.8.
- 134) 嶋根卓也：(情報提供) ねほりんばほりん. NHK 教育テレビ, NHK, 2016.5
- 135) 嶋根卓也：(Web サイト記事) 衝撃！中学生の100人に1人は薬物経験者. 中高生の薬物依存 (3回シリーズ1). ママテナ, ママテナ製作委員会, 2016.5.4.
- 136) 嶋根卓也：(Web サイト記事) 中学生の薬物・子どもは”サイン”を出している. 中高生の薬物依存 (3回シリーズ2). ママテナ, ママテナ製作委員会, 2016.5.8.
- 137) 嶋根卓也：(Web サイト記事) 中学生の薬物依存・・・子を再生に導くには？. 中高生の薬物依存 (3回シリーズ3). ママテナ, ママテナ製作委員会, 2016.5.12.
- 138) 嶋根卓也：薬剤師こそ“門番”役に／防止へ従事者125人研修. 下野新聞, 2016.7.15.
- 139) 嶋根卓也：乱用多いデパスなど向精神薬指定に. ヨミドクター 新医療ルネッサンス, YOMIURI ONLINE, 2016.9.23.
- 140) 嶋根卓也：第49回日本薬剤師会学術大会 分科会の見どころ・聞きどころ 薬物乱用防止と薬剤師. 薬事日報, 2016.10.3.
- 141) 嶋根卓也：特集 つながりなおす なぜやめられないのか. 信濃毎日新聞, 2017.2.3.
- 142) 引土絵未：「ちょっと一杯」の裏に隠れたアルコールのリスクとは？. BuzzFeed Japan, 2017.3.18.

## 4. 心身医学研究部

### I. 研究部の概要

心身医学研究部の研究課題は、ストレス関連疾患、特に心身症や摂食障害、生活習慣病を対象に、Biopsychosocialモデルに基づき、心身相関の観点から病因や発症のメカニズム、病態を臨床的、基礎的に研究すること、効果的な治療法や予防法を開発することである。また、心身症・摂食障害の実態やその背景を調査すること、実証的な診断・治療法を普及していくことである。また平成28年度も前年度に引き続き国庫補助金摂食障害治療支援センター設置運営事業による摂食障害全国基幹センターが当研究部内に設置された。

臨床面では研究部のスタッフが全員で引き続きセンター病院心療内科外来で診療・研究に携わっている。

人事面では平成28年度の人員構成は次のとおりである。ストレス研究室長：安藤哲也，心身症研究室長：菊地裕絵，流動研究員：金 鎮赫，併任研究員：有賀 元（センター病院），大江悠樹（認知行動療法センター），協力研究員：倉 尚樹，客員研究員：近喰ふじ子（東京家政大学），兒玉直樹（産業医科大学），大和 滋，西園マーハ文（白梅学園大学），藤井 靖（明星大学），センター研究補助員：倉 五月，小原千郷，科研費研究補助員：河西ひとみ，科研費心理療法士：船場美佐子，研究生6名。

### II. 研究活動

#### 1) 心身症の発症機序と病態，治療に関する基礎的ならびに臨床的研究

##### (1) 心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発（精神・神経疾患研究開発費）

摂食障害と過敏性腸症候群を対象にして、①摂食障害について、NCNPの治療支援ネットワーク研究拠点としての機能を整備し、治療プログラムを開発すること、②過敏性腸症候群について、臨床研究基盤を整備し治療プログラムを開発することを目標にした。摂食障害については情報ウェブサイト（<http://www.edportal.jp/>および <http://www.edportal.jp/pro/>）を開発し、コンテンツを拡充した。神経性過食症の短期入院プログラムの研究、cEMAを応用した食行動の多面的評価法の開発を進めた。Enhanced-Cognitive Behavior Therapy (CBT-E)のわが国への導入と効果検証を目指して指導者の養成を行った。過敏性腸症候群についてはCBTの開発（後述）、cEMAを用いた多面的評価法の開発（後述）、<sup>13</sup>C マニトール呼気試験による診断法の開発、生体検体由来微量物質マーカー研究を行った。（安藤，菊地，有賀，大江，倉 五月，小原，河西，船場，西園，藤井）。

##### (2) 過敏性腸症候群の認知行動療法開発（精神・神経疾患研究開発費）

過敏性腸症候群は代表的な心身症で有病率は非常に高く慢性に経過しQOL低下や医療資源への負荷が大きい。認知行動療法センター，病院総合内科，東北大学の協力を得て認知行動療法を開発し、フィージビリティスタディーを実施した。介入による有害事象は認められず、症状やQOLの改善が介入後の6ヶ月のフォローアップまで認められ、本プロトコルは安全に実施可能で一定の治療効果を持つと考えられた。成果を英文誌に投稿した。さらに治療者、患者の負担やコストを低減し、プログラムの内容を変えずに汎用性と効率を高めるため、患者用テキストを映像化したビデオ教材を作成し、実施可能性のフィージビリティ研究を実施した。（安藤，菊地，大江，倉 五月，河西，船場，藤井）。

#### 2) 摂食障害の診療体制整備の研究

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分

野)))「摂食障害の診療体制整備に関する研究」

本研究の目的は厚生労働省の摂食障害治療支援センター構想を踏まえ、摂食障害(ED)患者がその病態・病期・背景に応じて必要な診療や支援を受けられるよう、全国の患者および診療の実態を調査し、整備すべき診療・支援ネットワーク体制や、診療体制を明確化し指針を作成すること、整備の為の課題を明確にし、施策の提言を行うこと、患者家族等のための対応マニュアルを作成することである。精神科、心療内科、小児科、内科、疫学の専門家からなる研究班を組織し、平成26年度は実態調査を行った。平成27年度は17年ぶりに摂食障害の全国患者数調査を実施した。平成28年度は、全国患者数調査の二次調査(臨床疫学調査)を実施した。さらに養護教諭を対象にした、摂食障害に関する学校と医療のより良い連携のための対応指針と、非専門医のための摂食障害初期対応指針を作成した。(安藤、菊地、小原、河西、西園)

3) 食行動と生物心理社会的因子の経時的関連に関する包括的モデルの開発(日本学術振興会科学研究費補助金 若手研究(B))

食行動と生物心理社会的因子の経時的関連の包括的理解を目指し、ecological momentary assessment(EMA)法および携帯情報端末による食事記録システムを用いて普通体重群および肥満群での解析を進め、情動統制としての摂食行動の役割とその非機能性についての考察を国際学会にて発表した。(菊地)

4) 過敏性腸症候群の日常生活下での多面的評価法の開発(精神・神経疾患研究開発費)

自己報告による評価が中心となるIBSにおいて、EMAを利用した評価法の開発を行った。これまでに開発してきた日常生活下のストレス評価法の個人内比較における信頼性・妥当性を評価し、それにIBS評価を加えた測定プロトコルを開発し、実施可能性を確認した。また、心拍変動指標(高周波数領域パワー、 $\beta$ )が日常生活下でのストレスの客観指標となりうることを示した(菊地、金)。

5) 日常生活下調査による摂食障害の食行動異常関連要因と背景基盤の解明(日本学術振興会科学研究費補助金 若手研究(B))

EMAを含めた日常生活化調査を用いて摂食障害の食行動異常の関連要因および背景基盤を解明する研究を実施した(菊地、金)。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

摂食障害情報ポータルサイトを運営し(一般向け <http://www.edportal.jp/>、専門職向け <http://www.edportal.jp/pro/>)市民および専門職への摂食障害の普及・啓発を行った。

(2) 専門教育面における貢献

山梨大学大学院客員准教授 社会医学講座、東京大学医学部非常勤講師、東京家政大学非常勤講師、二葉看護学院非常勤講師(安藤哲也)

二葉看護学院非常勤講師、東邦大学医学部客員講師(菊地裕絵)

二葉看護学院講義「心身医学」一部担当(倉五月)

早稲田大学人間総合研究センター招聘研究員(船場美佐子)

秋田大学非常勤講師、東京歯科衛生専門学校非常勤講師、近畿大学豊岡短期大学非常勤講師、近大姫路大学非常勤講師、産業能率大学通信教育課程非常勤講師、自由が丘産能短期大学通信教育課程非常勤講師、東京臨床心理士会学校臨床心理士専門委員会委員、早稲田大学人間総合研究センター招聘研究員、日野市教育委員会就学相談委員会委員、日野市教育委員会特別支援教育巡回相談員、日野市教育委員会特別支援教育専門委員会委員(藤井 靖)

## (3) 精研の研修の主催と協力

安藤哲也, 菊地裕絵: 第 14 回摂食障害治療研修 精神保健に関する技術研修. 精神保健研究所, 東京, 2016.8.30-9.2.

安藤哲也, 菊地裕絵: 第 13 回摂食障害看護研修 精神保健に関する技術研修. 精神保健研究所, 東京, 2016.11.9-11.

## (4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

- ・平成 28 年度精神保健等国庫補助金摂食障害治療支援センター設置運営事業に採択され, 全国摂食障害対策連絡協議会開催及び摂食障害治療支援センターの設置運営を行い神経性無食欲症や神経性大食症などの摂食障害対策を推進した (安藤哲也, 菊地裕絵).

- ・協議会開催

安藤哲也, 菊地裕絵: 平成 28 年度第 1 回全国摂食障害対策連絡協議会, 東京八重洲ホール, 東京, 2016.11.4.

安藤哲也, 菊地裕絵: 平成 28 年度第 2 回全国摂食障害対策連絡協議会, 東京八重洲ホール, 東京, 2017.3.12.

- ・会議開催

安藤哲也, 菊地裕絵: 平成 28 年度第 1 回摂食障害全国支援センター・摂食障害治療支援センター連携ミーティング. 東京八重洲ホール, 東京, 2016.11.4.

安藤哲也, 菊地裕絵: 平成 28 年度第 2 回摂食障害全国支援センター・摂食障害治療支援センター連携ミーティング. 宮城, 2017.1.6.

安藤哲也, 菊地裕絵: 平成 28 年度第 3 回摂食障害全国支援センター・摂食障害治療支援センター連携ミーティング (ウェブ会議). 2017.3.3.

安藤哲也, 菊地裕絵: 平成 28 年度第 4 回摂食障害全国支援センター・摂食障害治療支援センター連携ミーティング. 東京八重洲ホール, 東京, 2017.3.12

- ・研修会開催

安藤哲也: 平成 28 年度養護教諭のための摂食障害ゲートキーパーパイロット研修会. 兵庫, 2017.2.4.

## (5) センター内における臨床的活動

センター病院心療内科併任医師 (安藤哲也, 菊地裕絵)

センター病院心療内科心理士 (倉 五月)

センター病院心療内科心理士 (藤井 靖)

## (6) その他

国立国際医療研究センター国府台病院心療内科非常勤医師, 付帯業務 (安藤哲也)

茨城県 DPAT 統括に就任 (高橋 晶)

## IV. 研究業績

## A. 刊行物

## (1) 原著論文

- 1) Ohara C, Komaki G, Yamagata Z, Hotta M, Kamo T, Ando T: Factors associated with caregiving burden and mental health conditions in caregivers of patients with anorexia nervosa in Japan. *BioPsychoSocial Medicine*. 10: 21, 2016.
- 2) Inada S, Yoshiuchi K, Iizuka Y, Ohashi K, Kikuchi H, Yamamoto Y, Kadowaki T, Akabayashi A: Pilot Study for the Development of a Self-Care System for Type 2



Diabetes Patients Using a Personal Digital Assistant (PDA). International Journal of Behavioral Medicine 23(3), 295-299, 06, 2016.

- 3) Tanisho Y, Shigemura J, Kubota K, Tanigawa T, E. J. Bromet E.J, Takahashi S, Matsuoka Y, Nishi D, Nagamine M, Harada N, Tanichi M, Takahashi Y, Shimizu K, Nomura S, Yoshino A and Fukushima NEWS Project Collaborators: The longitudinal mental health impact of Fukushima nuclear disaster exposures and public criticism among power plant workers: the Fukushima NEWS Project study. Psychol Med 18:1-9, 2016.
- 4) 西原智恵, 菊地裕絵, 安藤哲也, 岩永知秋, 須藤信行: 心身医学的アプローチが有効であった身体表現性障害を合併した食物アレルギーの1例. 心身医学 57(3), 264-271, 03, 2017.
- 5) 河西ひとみ, 辻内琢也, 藤井 靖, 野村 忍: 過敏性腸症候群患者の治癒プロセスに関する質的研究—複線径路等至性モデルによる検討—. 心身医学 57(1): 59-68, 2017.
- 6) 高村 愛: fat talk 生起プロセスに関する質的研究. 人間文化創成科学論叢 19:185-193, 2017.
- 7) 近喰ふじ子, 井上俊哉, 塚本尚子, 他: 「新ストレス対処行動尺度」作成の試み. 東京家政大学研究紀要, 第 57 集 (1), pp.51-58, 2017.
- 8) 近喰ふじ子, 梅原 碧, 佐藤明穂: 「新ストレス対処行動尺度」の有用性の検討. 東京家政大学付属臨床相談センター紀要, 第 17 集, pp.53-61, 2017.

## (2) 総説

- 1) 安藤哲也: 厚生労働省摂食障害治療支援センター設置運営事業の背景, 現状と課題. 精神保健研究 63: 43-51, 2017.
- 2) 安藤哲也: 摂食障害の長期予後を決める要因. 精神保健研究. 62: 53-59, 2016.
- 3) 安藤哲也: 食行動障害および摂食障害群. 日本精神科病院協会雑誌 17, 12-18, 06, 2016.
- 4) 菊地裕絵: 特集 2: 地下鉄サリン事件から 20 年:被害は過去のものとなったのか? サリンによる神経学的後遺症. 日本生物学的精神医学会誌 27(2), 80-83, 06, 2016.
- 5) 菊地裕絵: 摂食障害患者における自殺. 心身医学 56(8), 796-800, 08, 2016.
- 6) 大江悠樹: 痛みに対する心理的アプローチ: 認知行動療法を中心に. 運動器疼痛学会誌 8(2): 158-161, 2016.
- 7) 藤澤大介, 鈴木伸一, 熊野宏昭, 高垣耕企, 大江悠樹, 仲地良子: 身体感覚や行動からここへへのアプローチ: 第四世代認知行動療法に向けて. 認知療法研究 9(2): 100-110, 2016.
- 8) 高橋 晶: 避難所における抑うつ・不安および睡眠障害とその対策. Depression Strategy 6(4): 13-16, 2016.
- 9) 西園マーハ文: 摂食障害の発症, 経過と治療における「本人の関与」. こころと文化 (多文化間精神医学会雑誌) 15: 151-156, 2016.
- 10) 西園マーハ文: 摂食障害の認知行動療法. 精神神経学雑誌 118: 561-569, 2016.
- 11) 西園マーハ文: 摂食障害概論とアスリート問題. (トレーニング指導者に必要な摂食障害の知識) 第 2 回日本トレーニング指導者協会機関誌 56: 16-17, 2016.
- 12) 西園マーハ文: 神経性過食症 (神経性大食症). 改訂版 精神科・わたしの診療手順 臨床精神医学 45 巻増刊号: 316-318, 2016.
- 13) 藤井 靖: 学校で役立つ認知行動療法. 子どもの心と学校臨床 第 16 号: 37-45, 2017.

## (3) 著書

- 1) 大江悠樹: 第 5 部 問題別心理介入プロトコル 第 20 章 心身症 過敏性腸症候群. 下山晴彦・中嶋義文 (編): 公認心理士必携 精神医療・臨床心理の知識と技法. 医学書院, 東京, 2016.
- 2) 大江悠樹: 第 18 章 一次性慢性痛 C.過敏性腸症候群. 日本疼痛学会痛みの教育コアカリキュラム編集委員会 (編): 痛みの集学的診療: 痛みの教育コアカリキュラム. 真興交易 (株)

医書出版部，東京，2016.

- 3) 西園マーハ文：神経性やせ症/神経性無食欲症。笠井清登他編：精神科研修ノート第2版。診断と治療社，東京，pp411-414，2016.
- 4) 西園マーハ文：神経性やせ症。樋口輝彦，市川宏伸，神庭重信他編：今日の精神疾患治療指針第2版。医学書院，東京，pp286-290，2016.
- 5) 西園マーハ文：摂食障害。研修ノート No.97，社会的・精神的な援助が必要な妊産婦への対応。公益社団法人日本産婦人科医会，東京，pp76-79，2017.
- 6) 西園マーハ文：摂食障害・睡眠障害。上島国利他編：精神医学テキスト改訂第4版。南江堂，東京，pp195-201，2017.
- 7) 西園マーハ文：教育現場とのかかわり方。三村将編：精神科レジデントマニュアル，医学書院，東京，pp307-309，2017.
- 8) 藤井 靖：自分の「心」を自分で理解し，変える-認知行動療法-，明星大学心理学科 編：心理学に興味を持ったあなたへ 大学で学ぶ心理学，学研プラス，東京，171-190，2016.

#### (4) 研究報告書

- 1) 安藤哲也：厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「摂食障害の診療体制整備に関する研究」平成26年度 - 平成28年度総合研究報告書，2017.3.
- 2) 安藤哲也：精神・神経疾患研究開発費 26-4 「心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発」総括・分担研究報告書，2017.3.
- 3) 菊地裕絵：過敏性腸症候群の日常生活下での多面的評価法の開発。精神・神経疾患研究開発費(26-4) 心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発 総括・分担研究報告書（平成26-28年度）。pp31-51，2017.
- 4) 菊地裕絵：摂食障害初期対応指針の作成。厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）摂食障害の診療体制整備に関する研究（H26-精神-一般-001）平成26年度～平成28年度 総合研究報告書。pp41-46，2017.
- 5) 西園マーハ文：摂食障害情報センター機能の開発（神経性過食症短期入院プログラムの開発）精神・神経疾患研究開発費 26-4. 「心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発」 総括・分担研究報告書（平成26～28年度）。pp111-156，2017.
- 6) 西園マーハ文，河上純子：地域保健の場における摂食障害の対応に関する実態調査に関する研究。厚生労働科学研究費補助金「摂食障害の診療体制整備に関する研究 H26-精神 - 一般-001」平成26年度 - 平成28年度総合研究報告書。pp59-62，2017.

#### (5) 翻訳

#### (6) その他

- 1) 近喰ふじ子：EAPM2016 LULEA16-18 学会印象記。東京家政大学附属臨床相談センター紀要 第17集，p.85-88，2017.
- 2) 近喰ふじ子：東京家政大学附属臨床相談センターの約15年を振り返って想うコラージュからの一枚一枚の切り抜きの積み重ね。

#### B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

- 1) Kikuchi H: Food intake as a strategy of emotional regulation. International Congress of Psychology 2016, Kanagawa, 2016.7.24-29.
- 2) 安藤哲也：シンポジウム 摂食障害治療支援センター 摂食障害全国基幹センターの活動と課題。第20回日本摂食障害学会学術集会，東京，2016.9.3-4.

- 3) 児玉直樹：シンポジウム 摂食障害の生物学的基盤—病態解明に向けた新たな試み— エンドユーザーからみた機械学習，第 20 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2016.9.3-4.
- 4) 西園マーハ文：摂食障害の妊娠と出産．シンポジウム 3 妊娠と出産．第 20 回日本摂食障害学会，東京，2016. 9.3-4.
- 5) 西園マーハ文：摂食障害における国際的な動向と連携．公開シンポジウム「摂食障害に期待される‘つながり’」．第 20 回日本摂食障害学会，東京，2016. 9.3-4.
- 6) 西園マーハ文：地域における産後メンタルヘルス問題の発見と援助～日本人と共通の課題と特に外国人に必要な援助～シンポジウム 2 都心の地域保健の場における外国人妊産婦のメンタルヘルススクリーニングの現状と援助について．第 23 回多文化間精神医学会学術総会，栃木，2016.10.1-2.
- 7) 西園マーハ文：摂食障害への支援．教育講演 9．第 57 回日本児童青年期精神医学会，岡山，2016.10.27-29.
- 8) 西園マーハ文：摂食障害．女性スポーツメディカルネットワークワークショップ．第 27 回日本臨床スポーツ医学会医学部，東京，2016.11.5.

(2) 一般演題

- 1) Kikuchi H, Yoshiuchi K, Kim J, Yamamoto Y, Ando T: The association between energy intake and momentary depressive mood and its interaction with avoidance coping: a study by using ecological momentary assessment and an electronic diary. International Conference on Eating Disorders 2016, San Francisco, 2016.5.5-7.
- 2) Kikuchi H, Yoshiuchi K, Kim J, Tomita Y, Yamamoto Y, Ando T: Development of a comprehensive stress rating scale for ecological momentary assessment: its within-individual psychometric properties. 75th Annual Scientific Meeting of the American Psychosomatic Society, Seville, 2017.3.15-18.
- 3) Kawanishi H, Funaba M, Fujii Y, Ando T: Introduction of CBT program using adjunctive psychoeducational videos for patients with IBS. 1st Annual Mental Health Meeting of NCMH-IMH-NCNP and International Symposium, Seoul, 2017.3.17.
- 4) Takahashi S, Sodeyama N, Takahashi Y: The Ibaraki Disaster Mental Health Services Activity Report for the 2015 Joso Flood Disaster and Recent Disasters in Japan. 22nd World Congress of Social Psychiatry, New Delhi, 2016.11.30.-12.4.
- 5) Konjiki E, Harada M, Umehara M: Collation of one's feeling of health and stress. POSTER64 Topic NO4.8 Abstract No.5977793P EAPM2016, Rulea, 2016.6.16-18.
- 6) 安藤哲也, 菊地裕絵, 川上憲人：全国の病院の摂食障害受診患者数調査．第 20 回日本摂食障害学会学術総会，東京，2016.9.3-4.
- 7) 安藤哲也, 菊地裕絵, 川上憲人：全国の病院の摂食障害受診患者数調査．第 21 回日本心療内科学会総会学術大会，奈良，2016.12.2-4.
- 8) 安藤哲也：摂食障害の認知行動療法「改良版」(CBT-E)により過食・排出行動と精神病理が著明に改善した神経性過食症 (BN) の 1 例．第 128 回日本心身医学会関東地方会，東京，2017.1.28-29.
- 9) 小原千郷, 鈴木(堀田) 眞理, 西園マーハ文：一般女性における摂食障害についての認識調査．第 20 回日本摂食障害学会，東京，2016.9.3-4.
- 10) 大江悠樹, 倉 五月, 富田吉敏, 有賀 元, 天野智文, 大和 滋, 福土 審, 菊地裕絵, 安藤哲也：過敏性腸症候群に対する認知行動療法 (CBT-IE) の開発研究．パイロットスタディの実施報告．第 57 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会，宮城，2016.6.4-5.
- 11) 大江悠樹：線維筋痛症に対する認知行動療法と社会保障．第 8 回日本線維筋痛症学会，東京，2016.9.18

- 12) 大江悠樹：過敏性腸症候群に対する認知行動療法. 第16回日本認知療法学会, 大阪, 2016.11.24-25.
- 13) 船場美佐子：再休職時にリワークプログラムを経て復職した一例の認知行動的变化. 第23回日本行動医学会学術総会, 沖縄, 2017.3.17-18.
- 14) 高橋 晶：平成27年関東東北豪雨における災害急性期精神保健活動について次の災害に備える:DPAT体制を活かすために. 第15回トラウマティックストレス学会, 宮城, 2016.5.20-21.
- 15) 高橋 晶：茨城県常総市水害後の支援者支援について. 災害後の労働者のメンタルヘルスを支えるための実践策. 第15回トラウマティックストレス学会, 宮城, 2016.5.20-21.
- 16) 高橋 晶, 太刀川弘和, 根本清貴, 南場陽一, 塚田恵鯉子, 石川和宏, 今村芳博, 石川正憲, 河合伸念, 堀 孝文, 新井哲明, 高橋祥友：平成27年関東・東北豪雨における常総市水害支援(1) 茨城県こころのケアチームの急性期活動. 第112回精神神経学会, 千葉, 2016.6.2-4.
- 17) 高橋 晶, 太刀川弘和, 根本清貴, 堀 孝文, 新井哲明, 高橋祥友：常総市鬼怒川水害における急性期の精神支援活動-茨城 DPAT ができる前の活動-災害医療体制の中の DPAT-DPAT の理念とは. 第24回精神科救急学会, 福岡, 2016.10.8.
- 18) 高橋 晶：茨城 DPAT の熊本地震支援について. 茨城精神懇話会, 茨城, 2016.11.3.
- 19) 高橋 晶：いくつかの被災地支援から見えてきたこと. 第29回総合病院精神医学会, 東京, 2016.11.25-26.
- 20) Konjiki F, Harada M, Umehara M: Collation of one's feeling of health and stress. ポスター発表 リサーチウィークス, 東京, 2017.2.9-13.
- 21) 梅原 碧, 近喰ふじ子：幼稚園児の子どもの生活調査と「星と波テスト」および「DAM」の検討. 第18回日本子ども健康科学学会 学術大会, 東京, 2017.3.19.
- 22) 山内麻衣, 近喰ふじ子, 梅原 碧：東京家政大学附属臨床相談センターにおける学習支援利用者の検討. 第18回日本子ども健康科学学会 学術大会, 東京, 2017.3.19.
- 23) 河野貴美子, 近喰ふじ子：発達障害児にみる自律神経系機能と脳波による検討. 日本生命情報科学会, 東京, 2017.3.18.
- 24) 金井希斗, 林 公輔, 重田理佐, 田村将晃, 星野 大, 小林佑貴乃, 瀧澤有加, 西園マーハ文, 野島照雄, 三村 将：単科精神科病院で入院治療を行った神経性やせ症の2例(精神科病院における摂食障害治療1). 第20回日本摂食障害学会, 東京, 2016.9.3-4.
- 25) 星野 大, 重田理佐, 金井希斗, 西園マーハ文：臨床心理士による個別心理教育場面を活用して治療同盟を築く過程.(精神科病院における摂食障害治療2). 第20回日本摂食障害学会, 東京, 2016.9.3-4.
- 26) 重田理佐, 星野 大, 林 公輔, 金井希斗, 那須理絵, 西園マーハ文：グループになじめない人達のグループ-意義と課題-(精神科病院における摂食障害治療3) 第20回日本摂食障害学会, 東京, 2016.9.3-4.
- 27) 松岡珠実, 水上勝義, 西園マーハ文：摂食障害傾向と首尾一貫感覚(Sense of Coherence: SOC)の関連について. 第20回日本摂食障害学会, 東京, 2016.9.3-4.
- 28) 大森美湖, 西園マーハ文, 長部ひとみ, 丸山志保, 石井 彰：SCOFFを用いた大学生に対する過食症のスクリーニング法の検討. 第20回日本摂食障害学会, 東京, 2016.9.3-4.

### (3) 研究報告会

- 1) 安藤哲也：摂食障害ネットワーク拠点整備ならびに過敏性腸症候群の認知行動療法開発. 平成28年度精神・神経疾患研究開発費「心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発」班会議, 東京八重洲ホール, 東京, 2016.6.25.
- 2) 安藤哲也：摂食障害の実態調査に関する研究. 平成28年度 厚生労働科研費補助金「摂食障害の診療体制整備に対する研究」第1回班会議, 東京八重洲ホール, 東京, 2016.07.03.
- 3) 安藤哲也：摂食障害の実態調査に関する研究. 平成28年度 厚生労働科研費補助金「摂食

障害の診療体制整備に対する研究」第2回班会議，東京八重洲ホール，東京，2016.12.25.

(4) その他

C. 講演

- 1) 高橋 晶：基調講演1「支援者のメンタルヘルス」．第11回全国こころのケアチーム連絡協議会，新潟，2016.8.25-26.
- 2) 高橋 晶：常総市鬼怒川水害における急性期の精神支援活動及び熊本地震における茨城 DPAT の活動から．第11回全国こころのケアチーム連絡協議会，新潟，2016.8.25-26.
- 3) 近喰ふじ子：心身医学とアセスメント．MCR 講座，広島，2016.8.20.
- 4) 近喰ふじ子：親の会「こっこ」 母親自らの育ちは我が子の子育てに影響を与えるのか．埼玉，2016.9.22.
- 5) 西園マールハ文：摂食障害を精神医学の立場から考え直す．第2回京都摂食障害研究会，京都，2016.6.25.
- 6) 藤井 靖：自分の心を自分で理解し，変える～心理学を生活にどう活かす？～．東京都立多摩科学技術高等学校，東京，2016.11.17.
- 7) 藤井 靖：高校生の発達障害の理解と保護者の対応．東京都立多摩工業高等学校，東京，2017.2.17.
- 8) 藤井 靖：自分の心を自分で理解し，変える～臨床心理学を生活にどう活かす？～．東京都立多摩工業高等学校，東京，2017.3.21.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 安藤哲也：日本心身医学会 評議員
- 2) 安藤哲也：日本心療内科学会 評議員
- 3) 安藤哲也：日本皮膚科心身医学会 評議員
- 4) 安藤哲也：日本ストレス学会 評議員
- 5) 安藤哲也：日本摂食障害学会 理事
- 6) 安藤哲也：日本心身医学会評議員 戦略・評価委員会委員
- 7) 菊地裕絵：日本心身医学会 代議員
- 8) 菊地裕絵：日本女性心身医学会 評議員，幹事
- 9) 菊地裕絵：日本サイコオンコロジー学会 代議員
- 10) 菊地裕絵：日本交流分析学会 評議員
- 11) 菊地裕絵：日本行動医学会 評議員
- 12) 菊地裕絵：日本ストレス学会 評議員
- 13) 菊地裕絵：日本自律訓練学会 評議員
- 14) 菊地裕絵：日本摂食障害学会 評議員
- 15) 高橋 晶：日本東洋医学会関東甲信越支部茨城県部会 幹事
- 16) 近喰ふじ子：日本パペットセラピー学会 理事
- 17) 近喰ふじ子：日本子ども健康学会 理事
- 18) 近喰ふじ子：日本子ども健康学会 編集委員
- 19) 近喰ふじ子：日本小児心身医学会 評議員
- 20) 近喰ふじ子：日本心身医学会 評議員
- 21) 近喰ふじ子：日本健康学会 評議員

- 22) 近喰ふじ子：日本心療内科学会 評議員
- 23) 近喰ふじ子：日本小児心身医学会関東甲信越地方会 世話人
- 24) 近喰ふじ子：日本心身医学会関東甲信越地方会 世話人
- 25) 近喰ふじ子：日本心身医学会 用語委員
- 26) 近喰ふじ子：日本心身医学会 倫理委員会
- 27) 西園マーハ文：日本摂食障害学会 理事
- 28) 西園マーハ文：日本社会精神医学会 理事
- 29) 西園マーハ文：日本周産期メンタルヘルス学会 顧問
- 30) 西園マーハ文：日本スポーツ精神医学会 評議員
- 31) 藤井 靖：日本学校メンタルヘルス学会 研究倫理担当委員

### (3) 座長

- 1) 菊地裕絵，松林 直：シンポジウム 4 摂食障害治療支援センター設置運営事業. 第 20 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2016.9.3.
- 2) 西園マーハ文：シンポジウム 2 都心の地域保健の場における外国人妊産婦のメンタルヘルスクリーニングの現状と援助について. 第 23 回多文化間精神医学会学術総会，栃木，2016.10.1.
- 3) 高橋 晶：東洋医学会第 23 回茨城県部会学術集会

### (4) 学会誌編集委員等

- 1) 菊地裕絵：日本心身医学会 編集委員会 編集同人・英文投稿推進 WG
- 2) 菊地裕絵：日本摂食障害学会 ニュースレター 編集委員
- 3) 高橋 晶：日本総合病院精神医学会誌 編集委員
- 4) 高橋 晶：日本精神神経学会 災害支援委員
- 5) 高橋 晶：日本総合病院精神医学会 災害対策委員会委員
- 6) 高橋 晶：日本総合病院精神医学会 専門医認定・更新小委員会委員
- 7) 高橋 晶：日本総合病院精神医学会 認知症委員会委員
- 8) 高橋 晶：日本トラウマティックストレス学会 災害対応委員
- 9) 西園マーハ文：日本社会精神医学会雑誌 編集委員
- 10) 藤井 靖：日本学校メンタルヘルス学会誌 副編集委員長

## E. 研修

### (1) 研修企画

- 1) 高橋 晶：第 5 回救済者メンタルヘルス研修会. 茨城，2017.1.14.
- 2) 近喰ふじ子：東京家政大学附属臨床相談センター主催 第 20 回 臨床心理教育研修会「子どもの発達支援に活かす応用行動分析」佐藤 隆弘. 東京，2017.2.4.

### (2) 研修会講師

- 1) 高橋 晶：災害時の精神医療活動「DPAT の定義，活動意義，活動内容」茨城 DPAT 研修会，茨城，2016.11.20.
- 2) 高橋 晶：「災害精神医学及び活動事例について」～茨城県常総市水害 熊本県地震～ 大分 DPAT 研修会 大分県庁，大分，2016.11.12.
- 3) 近喰ふじ子：2016 年度 NCCP 認定カウンセラー養成講座 芸術療法の演習・技法・演習「NCCP 認定初級カウンセラー養成講座」. 東京，2016.10.8.
- 4) 西園マーハ文：ガイドドセルフヘルプ. 第 14 回摂食障害治療研修. 国立精神・神経センター精神保健研究所，東京，2016.9.1.

- 5) 西園マーハ文: 摂食障害を持つ母親の援助について. 府中市保健センター保健師助産師研修. 東京, 2016.10.6.
- 6) 西園マーハ文: 地域における産後メンタルヘルス問題のスクリーニングと援助:「新宿方式」15年の経験から. 慶應義塾大学医学部精神神経科心理研究会, 東京, 2016.11.11.
- 7) 西園マーハ文: 摂食障害の現在. 子ども・専門講座 7, 現代の思春期・青年期を考える. 明治安田心の健康財団, 東京, 2016.11.20.
- 8) 西園マーハ文: 摂食障害の病理と治療の考え方. 慶應義塾大学病院精神神経科専修医講義, 東京, 2016.11.30.
- 9) 西園マーハ文: 摂食障害. 成長期のアスリート指導者研修. 国立スポーツ科学研究センター, 東京, 2016.12.18.
- 10) 西園マーハ文: 地域における産後のメンタルヘルス～発見と援助～第2回周産期医療・母子保健関係者研修. 多摩小平保健所, 東京, 2017.2.1.
- 11) 西園マーハ文: 学校と医療のより良い連携のための対応マニュアルの活用について. 摂食障害全国基幹センター平成28年パイロット研修, 兵庫, 2017.2.4.
- 12) 西園マーハ文: 摂食障害の病理と治療～本人の力を生かす方法を目指して～実践.心理相談. 日本摂食障害協会臨床心理士向け研修, 東京, 2017.2.26.
- 13) 西園マーハ文: ～学校と医療の連携～実践.心理相談. 日本摂食障害協会臨床心理士向け研修, 東京, 2017.2.26.
- 14) 西園マーハ文: 摂食障害の病理と治療. 神戸大学大学院研究科神経精神医学分野講義, 兵庫, 2017.3.6.
- 15) 西園マーハ文: 地域における産後メンタルヘルス. 要支援家庭援助連絡会, 東京, 2017.3.13.
- 16) 高橋 晶: 災害時のこころのケア. 認知症疾患センター第6回研修会講演, 茨城, 2016.6.10.

#### F. その他

- 1) 西園マーハ文: Tulip Mazumdar: Fear over eating disorder care in Japan(ウェブニュース BBC News <http://www.bbc.com/news/health-36095287>), TV版(‘Impact’), ラジオ版. コメント[2016/04/25]
- 2) 藤井 靖: AbemaTV AbemaNEWS『けやきヒル’s NEWS』(制作: テレビ朝日報道局) 月曜日レギュラーコメンテーター

## 5. 児童・思春期精神保健研究部

### I. 研究部の概要

当部は、児童期に発症する種々の行動および情緒の障害について、地域コホートを確立し長期経過および病態解明を継続的に行っており、その成果をもとに早期診断法開発、予防法および治療法開発研究に取り組むとともに、乳幼児期からの横断的および縦断的研究により得られたエビデンスに基づいて、地域・学校ベースの精神保健ケアシステムの提案を発信している。なかでも、自閉症スペクトラム障害（autism spectrum disorder）は、発達最早期から発症し、すべてのライフステージを通して合併精神障害のリスクが高いため、当部が現在、最も精力的に取り組んでいる研究テーマである。ASDの複雑な病態の解明のために、子どもから成人までを対象として神経生理学的、認知神経科学的、分子遺伝学的など多領域アプローチを用いた研究を内外の共同研究者たちと展開しており、近年は、ASDに対する早期療育効果の検証、ASDに合併率の高い不安障害に対する認知行動療法などASDのQOL向上に向けた介入法に関する研究を精力的に進めている。

また、発達障害者支援法に基づき、エビデンスに基づいた知識の普及、支援体制の社会実装を推進する目的として、早期発見・早期介入システムと育児支援のための研修、教育と医療の連携推進、そして一般精神科における成人となった発達障害者への医療に関する研修を含む、多領域の専門家に向けた多様な情報発信および啓発活動にも精力的に取り組んでいる。

人員構成は以下のとおりである。部長：神尾陽子，児童期精神保健研究室長：高橋秀俊，思春期精神保健研究室長：石飛 信，流動研究員（2名）：原口英之，斎藤彩，科研費研究員（1名）：Andrew Stickley，科研費研究補助員（1名）：山口穂菜美，客員研究員（12名）：飛松省三，黒田美保，三宅篤子，則内まどか，平岩幹男，長尾圭造，立花良之，安達潤，清水里美，桑原千秋，上野佳奈子（7月～），中村亨（7月～），研究生（14名）：荻野和雄，山根直人，近藤綾子，望月由紀子，市川寛子，秋元頼孝，青木保典，海老島健，岡琢哉，浅野路子，小原由香，高階美和，近藤和樹（8月～），佐々木祥乃（9月～）

### II. 研究活動

#### 1) 自閉症スペクトラム障害の最適予後のための早期介入に関する研究（精神・神経疾患研究開発費 H26-H28）

有病率2-3%にも推定される自閉症スペクトラム障害(ASD)の長期予後の低さは、生涯持続する中核症状に加え、高頻度に併発する精神医学的併存症による。ASDの多様性は大きく、成人期までASD診断がなされないケースでは、併存症の症状が前景となり包括的評価がなされないまま併存症の治療のみが先行し、ASD者の臨床ニーズに応じた治療サービスが提供されず、社会復帰のバリアとなっている。本研究は、ASD者のライフステージにわたる予後の向上に資する包括的な早期介入のあり方をエビデンスに基づいて提案するために計画され、児童期から思春期にかけて、そして成人期におけるASDおよび閾下群、およびこれらに合併する精神医学的併存症を含む精神発達症状の発達軌跡を明らかにし、脳画像など生物学的指標を含む多次元的評価を行うことでバイオマーカーを同定し、早期介入のためのエビデンスを提供した。神尾らは、地域の一般児童集団（多摩コホート：ASDハイリスク児とローリスク児から成る）の幼児期から児童期にわたる縦断データをベースに、児童期の発達障害を含む全般的なメンタルリスクを幼児期に予測しうる要因について、子ども（自閉症症状、気質特徴）および家族（母親のうつ状態、就学年数などデモグラフィック要因）などの両者の観点から予測的関連性を検証した。①7歳児の情緒の問題および対人関係の問題は、それぞれの5歳時での問題だけでなく、5歳時でのASD症状程度が有意に予測した。②8歳児のASD症状・特性の程度は5歳時のASD症状・特性の程度が集団レベルでも個人レベルでも強く予測した。③多摩コホート5歳児の15%は朝食を毎日食べない習慣



がみられたが、朝食欠食には遅寝遅起き、母親の就学年数に加えて、ASD 症状・特性の程度が有意に関連していた。④5 歳児の情緒や行動の問題といったメンタルヘルスの問題は、2 歳ころの児の気質特徴、ASD 症状、そして母親のメンタルヘルスや就学年数などが有意に関連していた。全般的に、男児では児童の要因がより強く、また女児では親側の要因の関与が強いパターンが指摘され、早期支援のあり方に性差の視点が重要であることを示した。これらより幼児期に ASD 診断の有無にかかわらず、ASD 症状が強い子どもは長期的なメンタルヘルスのリスクが高いことが示唆され、幼児期には児と親を含む包括的なメンタルヘルス評価を行うことで、要支援ケースに対して予防的に早期から支援が可能であることが示唆された。本研究課題は H28 年度で終了し、当該年度に 5 本の英文論文が発表された。(神尾, 石飛, 高橋, 荻野, 山口, 原口, 浅野, 松尾, 小原, 三宅)

## 2) 聴覚情報処理に関わる神経生理学的基盤を用いた児童期から成人期における精神医学的障害の早期発見と早期介入に関わる病態解明に関する研究

本研究は、1)の分担研究として行われたものであるが、これまで客観的指標を用いた研究が乏しくエビデンスが不足している ASD の感覚過敏・鈍麻に関する新知見を提供し、プレスリリースも行い、高橋室長が NHK の発達障害特集番組に出演するなど、複数のメディアからの注目も大きかった。高橋らは、本研究において、児童期から発症する精神医学的障害の生理学的な早期マーカーを同定することを目標として、コホート児童 (ASD・定型発達) を主な対象に、聴覚性驚愕反射 (Acoustic Startle Response: ASR) とその制御機構 (馴化・プレパルス抑制 [prepulse inhibition: PPI]) にかかわる生理学的指標と、臨床指標・遺伝子解析などとの関連の発達の變化を、多次元的・総合的に評価した。これまでに ASR の潜時の延長や微弱な刺激に対する驚愕反応の亢進といった基礎的な指標が、自閉症特性と関連することを報告しているが、ASR の制御機構に関しても、ASR の馴化は対人的動機づけと、PPI は情緒・行動の問題などの臨床特性と関連することを見出した。低次知覚処理を反映する ASR の指標は高い再検査信頼性および安定性が示され、子どもの ASD 症状や併存する情緒・行動上の問題を予測するエンドフェノタイプとなる可能性が示唆された。さらに ASR の非定型性は標準化された尺度で評価した感覚過敏や感覚探究などの表現型と関連したことから、妥当性を支持する。ASR とその制御指標と、ASD 児の言語指標や運動指標などとの関連を調べた結果、ASD 児の自然発話での韻律異常と関連することを見出し、ASR が反映する低次知覚処理の異常が ASD 児の言語発達の早期マーカーとなりうる可能性が示唆された。さらにアクチグラフで計測した活動量との相関を初めて見出し、ASD 児の感覚過敏が日常の過剰な活動性に影響する可能性が考えられた。感覚過敏を ASD の QOL や適応困難の要因として注目することで、あらたな環境調整や治療法に結び付く可能性があり、建築、障害福祉、矯正などの領域との協働研究への発展のステップとなった。

## 3) 我が国における、自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究 (長寿・障害総合研究事業障害者対策総合研究開発事業：日本医療研究開発機構 H26-H28)

発達障害早期支援の最優先課題であるが、わが国の療育は十分な有効性検証がなされていないうえに慢性的に不足している。本研究では、日本の実臨床で実施可能な行動療法の一つである (Applied Behavior Analysis: ABA) (最もエビデンスが集積されているタイプ) に焦点を当て、実際に日本の ASD 幼児に効果があるのかどうか、プログラムを有効足らしめる構成要素は何か、またレスポonderの特徴はどういうものか、などを明らかにすることを目的として行われた。全体計画は、①前向き観察研究、②後ろ向き観察研究、③メタアナリシス、から構成される。①前向き観察研究は、ASD 児 (ABA 群、通常療育群) を全国からリクルートし (H26 年度)、療育開始時 (T1) とその 6 ヶ月後 (H27 年度) (T2) と 1-2 年後 (T3) に児および親を標準化された評価尺度および面接尺度を用いて評価する NCNP が中心となって実施した。疑似実験デザインのため ABA 群は通常療育群よりもベースラインでの発達水準や適応の程度が低いという群間差が見ら

れたにもかかわらず、T1 時の違いを考慮してもなお主要アウトカムである言語—社会 DQ が有意に上昇した。①、②、③と異なるアプローチによる結果を集約すると、個別支援であること、開始年齢が低いことが共通項となることが明らかになった。これらを踏まえて、全国の療育サービス管理者向け講習で利用可能な研修テキストを作成した。(神尾・原口・山口・三宅・小原)

#### 4) 自閉症スペクトラム障害の早期スクリーニング及び診断のためのツール開発研究

米国で開発された幼児対象の自閉症スペクトラム障害のスクリーニング(SRS)の3歳児用の日本語版について妥当性と信頼性、さらに有用性についての検討を行い、国際学会誌に掲載された。SRSの3歳児用は国家的大規模コホートのエコチル研究に採用され、データ収集が始まった。2歳のASD児の包括的診断尺度BISCUITの日本語版についても、妥当性と信頼性、さらに有用性についての検討を行い、その国際比較検討はEuropean Psychiatry誌に掲載された。

#### 5) 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒の包括的な心の健康教育支援/小学校(文部科学科研基盤B H27-、挑戦的萌芽研究H26-H28、NCNP/同志社大学/京都大学の共同研究)

発達障害のある児童も集団で実施して理解しうる実施可能な集団実施のCBTプログラムを開発し、その実施可能性と有用性の予備調査について2本国内学会誌に受理された。さらに発展させたユニバーサルレベルの子どもの情緒や行動の問題をターゲットとするCBTプログラムを作成し、全国からリクルートした9つの小学校(研究参加児童数715名)で10回セッションを完了し、現在、事前、事後1回目の質問紙調査のデータ解析に着手した。

#### 6) 児童思春期精神疾患の薬物治療ガイドライン作成と普及に関する研究(厚生労働科学研究委託費(障害者対策総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業:精神障害分野H26-H28:NCNP/弘前大学などの共同研究))

ASD児者が呈する様々な併存症に対する介入手段の一つとして、本邦でも様々な向精神薬を用いた薬物療法が従来から行われてきたが、その多くが「適応外使用」のもと、各医師の判断と自己責任のうで行わざるを得ないのが現状である。この要因の一つとして、薬物療法に限らず本邦におけるASDに関する標準的な診療に関するエビデンスの不足のため、ASD児者に対する薬物療法を含めた明確な治療ガイドラインが存在しないことがあげられる。当部は、「ASDに対する薬物療法ガイドライン」の章を担当し、推奨文案やその記載方針に関して研究班内のコンセンサスを得てエキスパートの間での協議を行い、作成した。(石飛、神尾)

#### 7) 学童期以降の脳機能と、個性の関連性評価に関する研究(「人間力活性化によるスーパー日本人の育成と産業競争力増進/豊かな社会の構築」(独)科学技術振興機構 委託研究開発費)

センター・オブ・イノベーション(COI)プログラムのCOI拠点「人間力活性化によるスーパー日本人の育成と産業競争力増進/豊かな社会の構築」(中核機関:国立大学法人大阪大学)において、金沢大学を中心とするサテライト金沢の共同研究機関として、「脳の個性を生かした子どもの健やかなこころの育成:特異から得意へのパラダイムシフト」をコンセプトに、精神生理学および発達心理学的手法を用いて達成することを主目的としている。サテライト金沢では、特に(1)拠点の生み出す「人間力活性化」システムを、脳科学的に個々の個性に最適化すること、(2)人間形成で最も重要な“子どもの成育”に焦点をあて、最適介入することを重点に進めている。最終的な目標は、「自然からのrichな刺激と養育者からの愛情のなかで成長し形成される理想的な人間力」について脳科学的に解明をすすめる、個々の特徴が最大限に活かされる生育環境について、学術的に提示することである。その中で、「幼児から老年期までの脳機能と個性の関連性評価」をテーマに、学童期から老齢期までの各年齢における脳機能の客観的評価方法を策定するために、当部では、学童を対象に、発達障害特性が聴覚情報処理に与える影響について脳磁図や脳波を用

いた研究を実施している。これまでに、自閉特性が高い場合、聴覚情報処理でみられる側性が低下していることや、定型発達児に比べ自閉スペクトラム症児では、安静開眼時における側頭頭頂結合部が活動亢進することなどを見出した。また、児童・思春期の定型発達および発達障害を対象とする心電図や脳波のウェアラブルセンサのモニタ試用を実施し、生活環境下における長時間装着実験の実施のための注意点について検討した。また、リストウォッチ式加速度計を用いて身体的行動動態を評価し、ワーキングメモリーなどの認知機能に影響する発達障害の聴覚過敏性の神経生理学的指標との関連について検討したところ、リストウォッチ式加速度計で評価された睡眠潜時や活動量の平均・歪度は、聴覚過敏性の指標などと有意な関連を認めた。引き続き、生活環境下における聴覚情報処理と社会性、情緒・行動、言語理解との関連について検討する予定である。

8) 室内音環境と聴覚情報処理特性が子どものメンタルヘルスに及ぼす影響に関する研究（文部科学省科学研究費）

教室における音環境を測定し、子どもの発達特性・感覚特性および情緒・行動の問題との関連について評価し、音環境調整を行い、子どもの感覚特性に応じて音環境がメンタルヘルスにどのような影響をもたらすか調べることで、学校メンタルヘルス改善につながる最適な音環境対策を提案することを目的とする。将来的には、子どもから成人まで広く聴覚過敏・聴覚鈍麻を有する者に医療・教育・福祉の多領域において応用可能で、治療方法や環境調整法の開発に結び付けやすく、意義は大きい。東京都大島町の保育園の協力を得て、子どもの発達特性や感覚特性が、行動動態に与える影響について調査を開始した。（文部科学科研挑戦的萌芽研究，基盤 B）。

9) 本邦における非精神病性の一般精神科外来受診成人患者における注意欠如・多動性障害 ADHD の有病率推定のための多施設共同横断研究（Japan Prevalence Study of Adult ADHD in Patients at Psychiatric Outpatient Care: J-PAAP）（NCNP/産業医大/イーライリイの共同研究）

産業医大および関連医療機関の一般精神科の 18 歳以上の外来受診患者における ADHD の有病率を、国際的診断基準に準拠した半構造化面接を用いて推定し、さまざまな精神疾患における ADHD 症状の合併および、ADHD 成人の QOL や自殺リスクなどに関連する要因を明らかにすることを目的として国内初の精神科臨床での大規模調査として実施された。H29 年 6 月の精神神経学会では J-PAAP をテーマの一つのシンポジウムを企画している。関連して全英の成人疫学データベース(Adult Psychiatric Morbidity Survey 2007)を用いて ADHD 症状と身体疼痛、孤独感(loneliness)との関連を見出し、国際誌に掲載された。

10) 児童発達支援および放課後等デイサービスに関する調査（厚生労働科学研究費補助金事業障害者対策総合研究事業 H28-「発達障害児とその家族に対する地域特性に応じた継続的な支援の実態と評価のあり方に関する研究」）（原口・神尾）

11) 国、都道府県等において実施する発達障害者診療関係者研修のあり方に関する研究（厚生労働科学研究費補助金事業障害者対策総合研究事業 H28-）（神尾・原口・石飛）

12) こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究, 発達障害モジュール開発（厚生労働科学研究費補助金事業障害者政策総合研究事業（精神障害分野）H28-）（神尾）

13) 自閉症スペクトラム障害における病態生理・発症脆弱性・治療反応性等の解明、および新規治療法・診断予防法の開発を目指した遺伝子解析研究

ASD 児の唾液、毛髪（毛根含む）から抽出された DNA、RNA について、ゲノムワイドな遺伝

子多型解析や遺伝子発現解析などの手法を用いて、感受性遺伝子群を同定する。当部ではデータを収集し、解析は理研が担当しており、現在、解析中である。

### Ⅲ. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

- 社会全体のニーズの高まりに対応して、全国各地での自治体主催の市民向けの公開講座で精力的に講演を行った。また HP を通じて研究成果を逐次更新し、発信した。さらに、テレビ、新聞、雑誌等のメディア取材を積極的に受け、発達障害に関する知識の普及啓発活動を行った。
- 所沢市と精神保健研究所で昨年度、締結された事業連携の要となる「子ども支援センター」が平成 29 年 1 月に開設され、所沢市との協働での縦断研究および療育効果の社会実装研究の準備をすすめた。これと関連して、お茶の水女子大学との連携につなげることができた。

#### (2) 専門教育面における貢献

- 神尾は、山梨大学連携大学院の客員教授として、院生 2 名、今年度から岐阜大学精神科の大学院生を研究生として受け入れ、計 3 名の大学院生（全員 児童精神科医）の学位取得のための研究指導にあたった。
- センター病院への東大、防衛医大の臨床実習生に対する児童精神医学の講義を担当した。
- 対外的には全国の発達障害を診療できる児童精神科医、成人精神科医の人材育成を目的とした事例検討会や研修を担当した。神尾、高橋、石飛は、国や大学、学会、研究会、自治体、そして各地医師会主催の専門家（精神科医、保健師、福祉士、臨床心理士、言語聴覚士、教員）向けの研修会講演講師を可能な範囲で精力的に引き受け、人材の育成に関与した。
- 研究と臨床の橋渡しを目指すカンファレンス「発達障害を考える基礎と臨床の勉強会」をセンター外から第一線の研究者を講師に招き、1 回開催し、内外の若手医師および若手研究者の多数参加を得、活発な意見交換を行った。

#### (3) 精研の研修の主催と協力

- 厚生労働省の発達障害者支援事業の一環として、全国のかかりつけ医対象の発達障害研修を実施する人材育成を目的として、2 回の研修（小児科医等を対象とする第 11 回発達障害早期総合支援研修、小児科医、内科医、精神科医を対象とする第 9 回発達障害精神医療研修）を企画・実施し、両研修会において神尾、石飛、原口が講義も担当した。事後も年間を通して、発達障害早期総合支援研修の受講者から早期発見に関してメールでの問い合わせにも対応している。

#### (4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- 神尾は、第 23 期日本学術会議連携会員として、また各種委員会活動（臨床医学委員会脳とこころ分科会委員、出生・発達分科会委員、科学者委員会男女共同参画分科会委員）を行った。8 月には内閣府からの依頼に対する回答として提言「科学者コミュニティにおける女性の参画を拡大する方策」を発出した。また出生・発達分科会では委員長として教育と医療の連携を推進するための活動の成果を、日本学術協力財団から学術会議叢書 23 として発刊した（「子どもの健康を育むために—医療と教育のギャップを克服する」）。
- 環境省の大規模出生コホート研究であるエコチル調査に、ひきつづき WG 委員の委嘱を受け、進捗管理や計画に参画した。
- 科学技術振興機構社会技術研究開発センター RISTEX の運営評価委員として、社会のための科学を推進する目的に照らして、「社会技術研究開発センターの運営改善に向けた提言」を

とりまとめた。

- その他、日本小児保健協会発達障害への対応委員会委員、小平市の特別支援教育専門家委員として、児童精神医学の専門家として専門的助言を行った。
- 高橋は、東京都大島町からの要請により、全島の発達障害の診断・治療・調査・研究を含めた支援体制の構築に向けて月1回赴いている。また、日本総合病院精神医学会の東日本大震災精神科医派遣プロジェクト～第1次計画福島県浜通り地域（沿岸部）支援～松村総合病院（福島県いわき市）へ診療支援として毎月1回派遣されている。

(5) センター内における臨床的活動

- 高橋は、研究協力希望者に対する臨床活動および地域コホートの外来診療をセンター病院にて行った。

(6) その他

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Takahashi H, Nakahachi T, Stickley A, Ishitobi M, Kamio Y: Relationship between physiological and parent-observed auditory over-responsiveness in children with typical development and those with autism spectrum disorders. *Autism*:1-8, 2016
- 2) Takahashi H, Nakahachi T, Stickley A, Ishitobi M, Kamio Y: Stability of the acoustic startle response and its modulation in children with typical development and those with autism spectrum disorders: a one-year follow-up. *Autism Research* 10(4):673-679, 2016
- 3) Stickley A, Koyanagi A, Takahashi H, Kamio Y: ADHD symptoms and pain among adults in England. *Psychiatry Research* 246 : 326-331, 2016
- 4) Stickley A, Koyanagi A, Takahashi H, Ruchkin V, Inoue Y, Kamio Y: Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms and loneliness among adults in the general population. *Research in Developmental Disabilities* 62 : 115-123, 2017
- 5) Stickley A, Tachibana Y, Hashimoto K, Haraguchi H, Miyake A, Morokuma S, Nitta H, Oda M, Ohya Y, Senju A, Takahashi H, Yamagata T, Kamio Y: Assessment of autistic symptoms in children aged 2 to 4½ years with the preschool version of the Social Responsiveness Scale (SRS-P): findings from Japan. *Autism Research* Version of Record online:1-14, 2017
- 6) Matson J. L., Matheis M, Burns C.O., Esposito G, Venuti P, Pisula E, Misiak A, Kalyva E, Tsakiris V, Kamio Y, Ishitobi M, & Goldin R.L : Examining cross-cultural differences in autism spectrum disorder: a multinational comparison from Greece, Italy, Japan, Poland, and the United States. *European Psychiatry* 42 : 70-76, 2017
- 7) Ohki T, Gunji A, Takei Y, Takahashi H, Kaneko Y, Kita Y, Hironaga N, Tobimatsu S, Kamio Y, Hanakawa T, Inagaki M, Hiraki K : Neural oscillations in the temporal pole for a temporally congruent audio-visual speech detection task . *Scientific Reports*:6-6, 2016
- 8) Yuko Okamoto, Makoto Ishitobi, Yuji Wada, Hiroataka Kosaka.: The Potential of Nasal Oxytocin Administration for Remediation of Autism Spectrum Disorders. *CNS & Neurological Disorders-Drug Targets*, 15 (5): 564-577, 2016
- 9) Okamoto Y, Kosaka H, Kitada R, Seki A, Tanabe HC, Hayashi MJ, Kochiyama T, Saito DN, Yanaka HT, Munesue T, Ishitobi M, Omori M, Wada Y, Okazawa H, Koeda T, Sadato N.: Age-dependent atypicalities in body- and face-sensitive activation of the EBA and FFA

- in individuals with ASD. *Neurosci Res*, 14 (42): 70-76, 2017
- 10) Kosaka H, Okamoto Y, Munesue T, Yamasue H, Inohara K, Fujioka T, Anme T, Orisaka M, Ishitobi M, Jung M, Fujisawa TX, Tanaka S, Arai S, Asano M, Saito DN, Sadato N, Tomoda A, Omori M, Sato M, Okazawa H, Higashida H, Wada Y: Oxytocin efficacy is modulated by dosage and oxytocin receptor genotype in young adults with high-functioning autism: a 24-week randomized clinical trial. *Transl Psychiatry* 23 (6): e872, 2016
  - 11) Goto T, Ishitobi M, Takahashi T, Higashima M, Wada Y: Reversible Splenial Lesion Related to Acute Lithium Intoxication in a Bipolar Patient: A Case Report. *J Clin Psychopharmacol*, 36 (5): 528-529, 2016
  - 12) Araia S, Okamoto Y, Fujioka T, Inohara K, Ishitobi M, Matsumura Y, Junga M, Kawamura K, Takiguchi S, Tomoda A, Wada Y: Altered frontal pole development affects self-generated spatial working memory in ADHD. *Brain and Development* 38 (5): 471-480, 2016
  - 13) 中西 陽, 石川信一, 神尾陽子: 自閉的特性を強く示す中学生に対する通常学級での集団社会的スキル訓練の効果. *教育心理学研究* 64: 544-554, 2017
  - 14) 齊藤 彩, 松本聡子, 菅原ますみ: 児童期後期の不注意および多動性・衝動性と抑うつとの関連—養育要因と自尊感情に着目して—. *パーソナリティ研究* 25 (1): 74-85, 2016
  - 15) 齊藤 彩, 坂田侑奈: 両親の注意欠如／多動傾向と大学生の精神的健康との関連—世代間伝達と親子関係の観点からの検討—. *人間文化創成科学論叢* 19:165-173, 2017

## (2) 総説

- 1) Kuroki T, Ishitobi M, Kamio Y, Sugihara G, Murai T, Motomura K, Ogasawara K, Kimura H, Aleksic B, Ozaki N, Nakao T, Yamada K, Yoshiuchi K, Kiriike N, Ishikawa T, Kubo Ch, Matsunaga C, Miyata H, Asada T, Kanba S: Current viewpoints on DSM-5 in Japan. *Psychiatry and Clinical Neuroscience* 70 (9): 371-393, 2016
- 2) 神尾陽子: 発達障害を理解する 自閉症スペクトラム障害 (ASD) 診断をめぐるデータで読み解く発達障害: 6-10, 2016
- 3) 神尾陽子: 発達障害を理解する 自閉症スペクトラム障害 (ASD) 自然経過・成人移行. データで読み解く発達障害: 16-19, 2016
- 4) 神尾陽子: 乳幼児における精神保健. 精神保健福祉士養成セミナー: 精神保健学. 精神保健の課題と支援 2 (6): 17-24, 2017
- 5) 神尾陽子: 学童期における精神保健. 精神保健福祉士養成セミナー: 精神保健学. 精神保健の課題と支援 2 (6): 24-33, 2017
- 6) 神尾陽子: 思春期における精神保健. 精神保健福祉士養成セミナー: 精神保健学. 精神保健の課題と支援 2 (6): 33-41, 2017
- 7) 五十嵐 隆, 平岩幹男, 神尾陽子, 中邑賢龍: 発達障害児・者の思春期・青年期の社会的課題. *日本医師会雑誌* 145 (11): 2337-2340, 2017
- 8) 神尾陽子: 地域ベースの研究の枠組みを通じた子どもの発達や心の健康等の向上に資する社会実装. *精神保健研究* 30 (63): 5-10, 2017
- 9) 神尾陽子, 桃井眞里子, 児玉浩子, 山中龍宏, 高田ゆり子, 衛藤 隆, 原 寿郎, 水田祥代: 子どもの心の健康を学校で育て、守る: 教育と医療を統合した心の健康支援. 叢書 23 子どもの健康を育むために—医療と教育のギャップを克服する: 100-114, 2017
- 10) 石飛 信, 荻野和雄, 神尾陽子: 自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害(ASD)の治療と療育. 別冊日本臨牀 新領域別症候群シリーズ 37 「精神医学症候群 (第2版) 1—発達障害・統合失調症・双極性障害・抑うつ障害—」 37: 60-63, 2017

- 11) 石飛 信,丁 ミンヨン,小坂浩隆: 自閉スペクトラム症の原因はわかったの? ~脳画像研究の観点から~. チャイルドヘルス 19 (5): 18-22, 2016
- 12) 荻野和雄,原口英之,石飛 信,神尾陽子: 自閉スペクトラム症の早期介入の長期効果. 精神科治療学 31 (7): 873-879, 2016

(3) 著書

- 1) 神尾陽子: 発達障害を理解する主な検査 M-CHAT.総編集 平岩幹男,専門編集 岡 明,神尾陽子, 小枝達也, 金生由紀子編:データで読み解く発達障害, 中山書店, 東京, pp122-125, 2016
- 2) 神尾陽子: コラム 女性の ASD.総編集 平岩幹男,専門編集 岡 明, 神尾陽子, 小枝達也, 金生由紀子編:データで読み解く発達障害, 中山書店, 東京, pp125-125, 2016
- 3) 神尾陽子: 悩みが身体症状や行動に現れるとき.編:児童心理 No.1026, 金子書房, 東京, pp20-26, 2016
- 4) 神尾陽子: 自閉スペクトラム症.樋口輝彦, 市川宏伸, 神庭重信, 朝田 隆, 中込和幸編:今日の精神疾患治療指針第 2 版, 医学書院, 東京, pp313-318, 2016
- 5) 神尾陽子,高橋秀俊, 井口英子: 第 71 章精神障害.田島信元・岩立志津夫・長崎 勤編:新・発達心理学ハンドブック, 福村出版, 東京, pp779-789, 2016
- 6) 藤野 博,槻館尚武,神尾陽子,権藤桂子,松井智子(日本版作成) ,D.V.M. Bishop: 日本版 CCC-2 子どものコミュニケーション・チェックリストマニュアル.大井 学,編:日本文化科学社, 東京, 2016
- 7) 高橋秀俊,神尾陽子: 離島・過疎地域における児童・思春期精神保健と災害: 東京都 大島町での学校精神保健の取組.中込 和幸,山田 光彦,北 洋輔,鈴木 友理子編:精神保健研究第 30 号(通巻 63 号) ,国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, pp31-36, 2017
- 8) 高橋秀俊: ~からだの病気を見落とさない~身体的診察・検査.荒井 宏,宮川 真一編:子どものこころの診療ハンドブック, 星和書店, 東京, pp86-90, 2016
- 9) 高橋秀俊: ~大人との相違点を理解しよう~子どものこころの診療における薬物療法.荒井 宏,宮川 真一編:子どものこころの診療ハンドブック, 星和書店, 東京, pp91, 2016
- 10) 高橋秀俊,萩原邦子,桂川修一,西村勝治: 一般精神科臨床において移植患者に配慮すべきこと.編:精神科治療学 32(3), 星和書店, 東京, pp203-209, 2017
- 11) 廣常秀人,高橋秀俊,高橋雄一: 災害後の子どものこころのケアについて.荒井 宏,宮川 真一編:子どものこころの診療ハンドブック, 星和書店, 東京, 91, 2016
- 12) 石飛 信,小坂浩隆,神尾陽子: 薬物療法と注意点「ASD」.編:データで読み解く発達障害, 中山書店, 東京,pp186-190, 2016
- 13) 井上雅彦,松尾理沙,原口英之: 中学生の困難事例を医療・福祉・教育につなげる. 下山晴彦,村瀬嘉代子,森岡正芳編:発達障害支援ハンドブック, 金剛出版, 東京, pp247-251, 2016

(4) 研究報告書

- 1) 神尾陽子,原口英之: 我が国における, 自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究. 平成 28 年度日本医療研究開発機構 委託研究開発成果報告書.
- 2) 神尾陽子,石飛 信: 自閉症スペクトラム障害の薬物治療ガイドライン作成と普及 (自閉症スペクトラム障害 (ASD) の薬物療法ガイドライン作成に向けた研究—「包括的支援の枠組の中で自閉症スペクトラム障害児・者への薬物療法が適正に行われるためのガイドライン」作成に向けた研究). 平成 28 年度日本医療研究開発機構 委託研究開発成果報告書.
- 3) 神尾陽子: 知的障害者、発達障害者の支援における多分野共通のアセスメントと情報共有手段の開発に関する研究. 平成 28 年度日本医療研究開発機構 委託研究開発成果報告書.

- 4) 神尾陽子, 本田秀夫, 大澤多美子, 内山登紀夫, 外岡資郎, 村松陽子, 石飛 信, 山口穂菜美: 標準的な評価指標に関する研究: 幼児用対人コミュニケーション行動評価尺度 BICUIT) 日本語版の信頼性・妥当性の検証. 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「発達障害児とその家族に対する地域特性に応じた継続的な支援の実態と評価のあり方に関する研究 (主任研究者: 本田秀夫)」
- 5) 神尾陽子, 齋藤 彩, 行廣隆次: 発達障害モジュール開発に関する研究: 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業)「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究(主任研究者: 金 吉晴)」
- 6) 神尾陽子, 高橋秀俊: 被災地の子どもの精神医療支援: 平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費 (障害者政策総合研究事業)「災害時の精神保健医療に関する研究(主任研究者: 金 吉晴)」

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 神尾陽子: 書評. 自閉症スペクトラムの精神病理: 星をつぐ人たちのために. (内海健著). 精神医学 58, pp884, 2016.
- 2) 神尾陽子: 座談会. 発達障害児・者を支援する. 日本医師会雑誌 145, pp2321-2332, 2017
- 3) 神尾陽子: 監修. データで読み解く発達障害. 岡 明, 神尾陽子, 小枝達也, 金生由紀子編集, 平岩幹男 総編集. 編: データで読み解く発達障害, 中山書店, 東京, 2016
- 4) 高橋秀俊: 書評 回復するちから —震災という逆境からのレジリエンス. 精神神経学雑誌, 118 (7): pp551-551, 2016
- 5) 高橋秀俊: 書評 災害時のメンタルヘルス. 精神神経学雑誌, 118 (10): pp805, 2016
- 6) 高橋秀俊: 書評 予防精神医学 脆弱要因の軽減とレジリエンスの増強. 精神神経学雑誌, 118 (9): pp727, 2016
- 7) 高橋秀俊: 書評 子どものうつ病 その診断・治療・予防. 精神神経学雑誌, 118 (12): pp951, 2016
- 8) 高橋秀俊: 書評 クロストークから読み解く周産期メンタルヘルス. 精神神経学雑誌, 119 (1): pp72, 2017

**B. 学会・研究会における発表**

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) Hidetoshi Takahashi, Atsuko Gunji, Yuu Kaneko, Naruhito Hironaga, Koichi Hagiwara, Masumi Inagaki, Shozo Tobimatsu, Takashi Hanakawa, Yoko Kamio: Auditory steady-state gamma responses of MEG in children with autism spectrum disorders: a follow-up report. 脳病態統合イメージングセンター5周年記念国際シンポジウム. 東京, 2016.7.29
- 2) 神尾陽子, 石飛 信, 原口英之: 自閉症スペクトラム障害と治療反応性. 第 112 回日本精神神経学会学術総会(シンポジウム 65: 精神疾患と治療反応性の関連). 千葉, 2016.6.4
- 3) 神尾陽子: 発達アセスメントへのニーズと課題: 新 K 式発達検査改訂版の作成をめぐる. 日本発達障害学会第 51 回研究大会. 京都, 2016.8.28
- 4) 神尾陽子: 発達障害の早期発見と早期支援. 発達障害とうつからみた「自己と他者」自己を知る脳・他者を理解する脳～融合的アプローチによる社会脳研究の魅力～. 日本学術会議「脳と意識」・「神経科学」・「脳とこころ」分科会合同市民公開シンポジウム. 東京, 2016.9.10
- 5) 神尾陽子(指定討論者): 発達障害の子どもと家族: 学習・行動・心の包括的理解と支援: 大会企画シンポジウム①青年期・成人期の課題と親の願い. 日本 LD 学会第 25 回大会. 横浜. 2016.11.19



- 6) 神尾陽子: 一人ひとりの発達特性にあった子育てとそれを支える地域社会. 「うちの子、少し違うかも・・・～発達障害に対する適切な療育・支援のための研究開発～」. サイエンスアゴラ 2016 公開シンポジウム,東京. 2016.11.5
- 7) 神尾陽子: シンポジウム ASD 児の早期発見の地域実装とコミュニティ・ベースの早期療育の試み—M-CHAT と JASPER プログラム. 日本発達心理学会第 28 回大会,広島. 2017.3.25
- 8) 神尾陽子: シンポジウム 社会性の発達に困難を抱える子どもの早期発見と早期支援—乳幼児健診における M-CHAT 項目を活用したアセスメントと支援ツールの有効性. 日本発達心理学会第 28 回大会,広島, 2017.3.26
- 9) 高橋秀俊: 診療所を中心とした児童精神科領域における医療—教育連携について. 第 3 回日本児童青年精神科診療所連絡協議会総会 第 3 回大阪大会シンポジウム,大阪, 2016.4.24
- 10) 高橋秀俊,長尾圭造: 診療所を中心とした児童精神科領域における医療—教育連携について. 第 112 回日本精神神経学会学術総会 シンポジウム 5 4,横浜. 2016.6.4
- 11) 高橋秀俊, 神尾陽子: 児童・思春期の情緒・行動の問題と聴覚性驚愕反応について. 2016 年医療心理懇話会,東京, 2016.11.2
- 12) 高橋秀俊(企画者・話題提供者)、宮口孝治、上野佳奈子(話題提供者)、片岡 聡(指定討論者)、神尾陽子 (司会者) : 自閉スペクトラム症の感覚処理の社会機能への影響～音環境を中心とした多領域からの支援にむけて～. 自主シンポジウム. 日本 LD 学会第 25 回大会,横浜.2016.11.20
- 13) 高橋秀俊, 齋賀孝久: 総合病院精神科をとりまく被災地支援の現状と今後の課題. 第 29 回日本総合病院精神医学会総会,東京. 2016.11.25
- 14) 高橋秀俊: 青年, 成人の発達障害の診療. 第 29 回日本総合病院精神医学会総会,東京. 2016.11.25
- 15) 高橋秀俊: 発達障害. 第 3 回 CEPD 研究会,東京, 2017.3.11

(2) 一般演題

- 1) Takahashi H, Kondo A, Konishi T, Nishikawa K, Jincho N, Nakahachi T, Komatsu S, Mazuka R, Kamio Y: Relationship of atypical prosodic features to acoustic startle measures in children with autism spectrum disorders and those with typical development. International Meeting for Autism Research Annual Meeting of the International Society for Autism Research (IMSAR). Baltimore, USA, 2016.5.13
- 2) H Takahashi, Y Aoki, T Nakahachi, A Stickley, S Komatsu, K Ogino, M Ishitobi, M Iwase, R Ishii, Y Kamio: Eyes open/closed resting state EEG source analysis of children with autism spectrum disorders and those with typical development:a one-year follow-up. American Psychiatric Association Annual Meeting(APA).Atlanta, USA,2016.5.16
- 3) H Takahashi, T Nakahachi, A Stickley, M Ishitobi, Y Kamio : Stability of the acoustic startle response and its modulation in children with typical development and those with autism spectrum disorders over one-year follow-up. 第 39 回日本神経科学大会,横浜,2016.7.22
- 4) A Saito:Inattention and hyperactivity-impulsivity in children and their parents: Association of parent-child relationship and mental health of children.International Conference of Psychology (ICP) 2016 congress.PacificoYokohama,Yokohama, 2016.7.24-7.29
- 5) Ebushima K, Kamio Y: Can Primary Health Professionals' Input to Parent Reports Improve the Ability to Detect Children with ASD?.International Meeting for Autism Research Annual Meeting of the International Society for Autism Research (IMSAR). Baltimore, USA,2016.5.12
- 6) Takefumi O,Atsuko G,Yuichi T,Ryusuke S,Hidetoshi T,YuuK,Masumi I,Takashi H, Kazuo H: Neural oscillations in the temporal pole for an audio-visual speech matching task

reflect late neuronal maturation in adolescence. BIOMAG2016,Korea,2016.10.3

- 7) 高橋秀俊,軍司敦子,金子 裕,賈永成人,萩原 綱,稲垣真澄,飛松省三,花川 隆,神尾陽子: 自閉症スペクトラム児の聴覚誘発脳磁界反応について. 第 31 回日本生体磁気学会大会,金沢,2016.6.3
- 8) 高橋秀俊: 発達障害への治療. 第 112 回日本精神神経学会学術総会 ワークショップ 20,横浜,2016.6.3
- 9) 軍司敦子,竹市博臣,慶永成人,高橋秀俊,金子 裕,飛松省三,稲垣真澄: ヒト声聴取時の感覚運動野における脳磁場反応. 第 31 回日本生体磁気学会大会,金沢, 2016.6.10
- 10) 高橋秀俊,青木保典,中鉢貴行,小松佐穂子,岩瀬真生,石井良平,神尾陽子: 自閉症スペクトラム症児および定型発達児における聴覚性前注意的弁別処理の電位源推定に関する研究: 1 年追跡調査. 第 46 回日本臨床神経生理学会学術大会,福島, 2016.10.28
- 11) 長尾圭造,金森有紀,高橋秀俊,望月由紀子,駒田幹彦: クラス生徒の事例検討を電子媒体で行う方法. 平成 28 年度第 4 7 回学校保健・学校医大会,東京, 2016.10.29
- 12) 高橋秀俊, 神尾陽子: 過疎地域における児童精神科領域の医療—教育連携: 東京都大島町での学校精神保健の取組. 第 20 回日本精神保健・予防学会学術集会,東京,2016.11.12
- 13) 石飛 信, 山口穂菜美, 神尾陽子: The Baby and Infanat Screen for Children with aUtIsm Traits (BUSCUIT)日本語版による自閉症スペクトラム障害の併存症の早期評価. 第 57 回日本児童精神医学会総会,岡山, 2016.10.27
- 14) 原口英之, 山口穂菜美, 石飛 信, 高橋秀俊, 神尾陽子: 地域の一般児童集団における自閉症症状・特性の安定性: 5 歳から 8 歳までの追跡研究.第 57 回日本児童精神医学会総会,岡山,2016.10.28
- 15) 齊藤 彩, 坂田侑奈: 両親の注意欠如／多動傾向と大学生の精神的健康—親子関係との関連—. 日本パーソナリティ心理学会第 25 回大会,大阪,2016.9.14- 9.15
- 16) 新開隆弘, Andrew Stickley, 守田義平, 得津由紀, 西井重超, 大塚悠加, 手銭宏文, 富永裕崇, 中村 純, 吉村玲児, 立森久照, 神尾陽子: 精神科外来における ADHD 罹患率. 第 26 回臨床精神神経薬理学会,大分, 2016.11.17
- 17) 海老島 健, 神尾陽子: M-CHAT を用いたスクリーニングに保健師による関与を追加することで ASD の件出力は高まるか. 第 59 回日本児童精神医学会総会,岡山, 2016.10.28

### (3) 研究報告会

- 1) 神尾陽子: 小学校通常学級におけるメンタルヘルス予防プログラムの有効性に関する研究. 平成 27 年度科学研究費助成事業 (補助金分) 基盤研究 B 第四回班会議,東京,2016.5.25
- 2) 神尾陽子: 国、都道府県等において実施する発達障害者診療関係者研修のあり方に関する研究. 平成 28 年度厚生労働省科学研究費第 1 回班会議,東京, 2016.5.31
- 3) 神尾陽子: 我が国における、自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究. 平成 28 年度国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業) 第 1 回班会議. 東京,2016.6.21
- 4) 神尾陽子: 小学校通常学級におけるメンタルヘルス予防プログラムの有効性に関する研究. 平成 27 年度科学研究費助成事業 (補助金分) 基盤研究 B 第五回班会議,東京, 2016.9.8
- 5) 神尾陽子: 我が国における、自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究. 平成 28 年度国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業) 第 2 回班会議,東京, 2016.11.22
- 6) 神尾陽子: 児童期での予防的介入に大切なこと: 児童期の精神病理と青年期・成人期への連続性.平成 28 年度第 2 回日本医療研究開発機構委託研究水野班班会議,東京,2017.1.28
- 7) 神尾陽子: 小学校通常学級におけるメンタルヘルス予防プログラムの有効性に関する研究. 平成 27 年度科学研究費助成事業 (補助金分) 基盤研究 B 第六回班会議.東京, 2017.2.17

- 8) 高橋秀俊,中村 亨,金 鎮赫,菊地裕絵,中鉢貴行,石飛 信,吉内一浩,安藤哲也,Andrew Stickley,山本義春,神尾陽子: 自閉症スペクトラム症児および定型発達児における身体活動動態と聴覚性驚愕反射およびその制御機構との関連. 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 平成 28 年度 研究報告会,東京,2017.2.20
- 9) 神尾陽子: 我が国における、自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究 . 平成 28 年度国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業) 第 3 回班会議,東京, 2017.3.6

(4) その他

- 1) Yoko Kamio: Discussion on Neurodevelopmental Disorders. Japanese Society of Psychiatry and Neurology - Field Studies Coordination Group for ICD-11 Mental and Behavioural Disorders.Workshop on Key Changes Proposed for ICD-11,東京, 2016.10.6
- 2) 神尾陽子: 閉幕セッション: サイエンスアゴラ NEXT. サイエンスアゴラ 2016,東京, 2016.11.6
- 3) 高橋秀俊: 平成 28 年度情報交換会 学校精神科医講評.東京都立稔ヶ丘高校平成 28 年度情報交換会,東京, 2016.5.9

C. 講演

- 1) 神尾陽子: 発達障害の早期発見・早期支援: 1 歳半でわかることと長期転帰からみた重要性. 第 21 回兵庫県小児疾患懇話会,神戸, 2016.4.16
- 2) 神尾陽子: 地域で責任を持つ自閉症スペクトラム障害の早期発見・早期支援.大塚製薬学術講演会,札幌,2016.7.9
- 3) 神尾陽子: 乳幼児期からの発達支援.日本発達障害学会第 51 回研究大会,京都, 2016.8.28
- 4) 神尾陽子: 発達障害の併存症: 不安症状を中心に.岐阜県精神科医会「秋の研究会」,岐阜,2016.9.3
- 5) 神尾陽子: 発達障害と向き合う地域社会.所沢市こどもと福祉の未来館開館記念講演会,埼玉,2017.2.25
- 6) 高橋秀俊: 思春期・青年期におけるこころのケア: 教育・医療連携について. 東京都 都立学校への専門医派遣事業.東京都立神津高等学校,東京,2016.6.6
- 7) 高橋秀俊: 大島町での教育と医療の連携. 東京都大島町学校保健部会,東京,2016.11.30
- 8) 石飛 信: 「卒業後の生活を見据えたかかりつけ医との関わりかたについて」特別支援学校在学中に教師、養育者が出来ることとは?. 平成 28 年度第 1 回学校保健委員会(都立田無特別支援学校主催),東京,2016.7.21

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 神尾陽子: 第 23 期日本学術会議 会員,臨床医学委員会幹事, 出生・発達分科会委員長, 脳とこころ分科会委員,科学者委員会男女共同参画分科会委員
- 2) 神尾陽子: 日本精神神経学会 精神医学研究推進委員会 委員
- 3) 神尾陽子: 日本自閉症スペクトラム学会 理事、研究奨励賞・実践研究賞選考委員
- 4) 神尾陽子: 日本生物学的精神医学会 評議員、将来計画委員会委員、プログラム委員
- 5) 神尾陽子: 日本小児連絡協議会 (日本小児保健協会、日本小児科学会、日本小児科医会、日本小児期関連学会協議会: 四者協) 発達障害への対応委員会委員
- 6) 神尾陽子: 日本精神保健・予防学会 評議員

- 7) 高橋秀俊：日本精神神経学会 小児精神医療委員，災害支援委員，災害支援連絡会委員，編集委員，国際委員
- 8) 高橋秀俊：日本総合病院精神医学会 評議員，児童青年期委員，災害対策委員
- 9) 高橋秀俊：日本生物学的精神医学会 評議員

(3) 座長

(4) 学会誌編集委員等

**E. 研修**

(1) 研修企画

- 1) 神尾陽子,石飛 信：平成 28 年度精神保健に関する技術研修. 第 11 回発達障害早期総合支援研修,東京,2016.6.15
- 2) 神尾陽子,石飛 信：平成 28 年度精神保健に関する技術研修,第 9 回発達障害早期総合支援研修,東京, 2016.9.14

(2) 研修会講師

- 1) 神尾陽子：発達障害のある児の発達の道筋. 平成 28 年度精神保健に関する技術研修. 第 11 回発達障害早期総合支援研修,東京,2016.6.15
- 2) 神尾陽子：自閉症スペクトラム障害：乳幼児 1 歳 6 ヶ月健診での早期発見から地域での途切れない発達支援へ. 平成 28 年度地域支援研修会,岐阜,2016.8.24
- 3) 神尾陽子：子どもの心の健康支援のために：個人差を理解する.平成28年度メンタルヘルス研修会,京都, 2016.8.25
- 4) 神尾陽子：成人になった発達障害について. 集団認知行動療法研究会中級研修会,東京, 2016.9.11
- 5) 神尾陽子：発達障害の発達の道筋:子どもからおとなへ.平成 28 年度精神保健に関する技術研修,第 9 回発達障害早期総合支援研修,東京, 2016.9.14
- 6) 神尾陽子：発達障がいのある児と家族へのライフステージに応じた地域支援：早期発見から併存症への対応. 三重県における発達支援診療ネットワーク構築に向けての研修会,三重,2016.10.2
- 7) 神尾陽子：発達障がいのある児の発達の道筋など. 平成 28 年度岡山県かかりつけ医等発達障害対応力向上研修会,岡山,2016.10.30
- 8) 神尾陽子：思春期の心の問題について. 平成 28 年度第 2 回校内研修会(東京都立東久留米総合高校),東京, 2016.12.5
- 9) 神尾陽子：これから社会人になる方たちに大切なこと. 平成 28 年度第 3 回校内研修会(東京都立東久留米総合高校),東京,2017.1.18
- 10) 神尾陽子：自閉症の診断と評価. 平成 28 年度第三期特別支援教育専門研修,独立行政法人国立特別支援教育総合研究所主催,神奈川,2017.2.1
- 11) 神尾陽子：発達障害の早期発見のポイントと早期支援の意義～M-CHAT の活用方法～. 平成 28 年度発達障がい支援者研修会,愛媛,2017.3.12
- 12) 高橋秀俊：発達障害への治療. 第 7 回小児精神医療研修会,福岡,2017.1.9
- 13) 石飛 信：発達障害の～依存症の評価と治療. 平成 28 年度精神保健に関する技術研修. 第 9 回発達障害早期総合支援研修,東京, 2016.9.14.

## 6. 成人精神保健研究部

### I. 研究部の概要

研究部及び研究室の研究目的

成人を主な対象とした様々な精神健康上の問題、特にトラウマ性疾患、悲嘆についての病態解明、治療研究に取り組むとともに、自然災害、犯罪被害、虐待等におけるストレスを緩和し、効果的な治療と支援の研究を進め、代表的な病態である PTSD の神経科学的・遺伝学的な解明と治療研究を推進している。各種震災、事故等に際しては専門家派遣などの現地支援に当たるとともに、効果的な行政・医療対応のシステム研究にも取り組んでいる。また関係諸機関（厚生労働省、警察庁、内閣府等中央省庁、精神保健福祉センター、災害医療センター、保健医療科学院、世界保健機構、兵庫県および新潟こころのケアセンター等）とのネットワークの構築、共同研究の推進、教育研修活動も積極的に行っているところである。恐怖記憶の形成と消去に関する実験心理研究を推進している。自然災害、犯罪被害者への対応に関するガイドラインの作成、普及、研修に取り組んでいる。

平成 28 年度の当研究部の構成は以下の通りである。部長：金 吉晴。診断技術研究室長：金 吉晴（併任）（～12 月）、篠崎康子（1 月～）。犯罪被害者等支援研究室長：金 吉晴（併任）。災害等支援研究室長：鈴木友理子。認知機能研究室長：堀 弘明。精神機能研究室長：関口 敦。流動研究員は伊藤真利子、伊藤まどか、大沼麻実。非常勤研究員は島津恵子（6 月～）。科研費研究員は深澤舞子、石田牧子、篠崎康子（8 月～12 月）、葛西 怜（10 月～）。科研費研究補助員は菅原彩子（10 月～）、佐藤安耶（10 月～）。協力研究員は松岡恵子。研究生は伊東史エ、上田 鼓、河瀬さやか、中山未知、成澤知美、吉池卓也、正木智子、本間元康、林 明明、宮本悦子、浅野敬子、松田陽子、片柳章子、赤井利奈、菅原まゆみ、葛西 怜（9 月）、高橋布三代（11 月～）。実習生として古家実可子（8 月～）。客員研究員として加茂登志子、小西聖子、宮地光恵、袴田優子、石丸徑一郎、井筒 節、堤 敦朗、寺島 瞳、栗山健一、福地 成、松本和紀、黒澤美枝、浜崎由紀子、中島聡美各氏を迎えている。（順不同）

### II. 研究活動

#### 1) PTSD に対する持続エクスポージャー療法に関する指導者育成システムの研究

現在各国のガイドラインで PTSD に対する治療法として最もエビデンスがあるとされている、持続エクスポージャー療法（Prolonged Exposure Therapy）の治療者の効果的育成についてのシステム研究を行った。（金）

#### 2) 複雑型 PTSD に関する認知行動療法の検討

ICD-11 で導入が予定されている複雑型 PTSD に対する STAIR/NST 治療を導入し、スーパーバイズ体制を構築し、資料を標準化した。（金）

#### 3) 東日本大震災後の精神健康調査

東日本大震災後の行政職員（県職員、教職員）、児童生徒、地域住民の精神健康調査について、各関係機関に専門的技術支援を行い、解析等を担当した。（鈴木、深澤、金）

#### 4) 複雑性悲嘆の認知行動療法の効果に関する研究

米国の Shear らによって開発された複雑性悲嘆の認知行動療法の有効性をオープントライアルにて検証を行なった。18 例が登録し 15 例が治療を終了し、目標症例数に達したことから登録は終了した。現在結果を解析中であるが、良好な結果を得ている。また、Wagner らによって開発されたインターネットを利用した複雑性悲嘆の認知行動療法についてもオープントライアルを行っている。（中島、伊藤、白井、小西、成澤、正木、松田、金）

#### 5) 性暴力被害者向け支援情報の提供のあり方についての研究

性暴力被害者救援センターなどを対象とした被害者向けの支援情報パンフレット「一人じゃないよ」について、性暴力被害者救援団体、犯罪被害者等早期支援団体を対象に有用性についての評価調査を行った。全体として有用であるという評価を得た。現在結果を分析し、公表した。(中島, 浅野, 小西, 金)

#### 6) PTSD の病態解明と治療効果予測法開発に向けた、遺伝子・バイオマーカー・心理臨床指標による多層的検討

トラウマ体験者(PTSD 発症群, 非発症群)と健常者を対象とし、遺伝子解析(遺伝子多型, 遺伝子発現, DNA メチル化), 内分泌・免疫系や自律神経系指標を含むバイオマーカー測定, 脳MRI 計測, 認知機能測定, 多角的な心理・臨床的評価を行う。PTSD 発症群に対しては持続エクスポージャー療法等の治療を行い, 治療反応性との関連も検討する。これらの検討により, PTSD の病因・病態解明, 生物学的指標に基づく客観的治療効果予測法の開発を目指す。(堀, 関口, 伊藤真利子, 林, 伊藤まどか, 金)

#### 7) PTSD に対するメマンチンの有効性に関するオープン臨床試験

PTSD 患者を対象として, アルツハイマー型認知症の治療に用いられている NMDA 受容体拮抗薬メマンチンを投与し, PTSD 治療におけるメマンチンの有効性を検討する。PTSD 症状と認知機能を主要アウトカム指標とする。本研究では, 予備的検討としてオープン臨床試験を行い, 効果サイズや安全性を検討することにより, その後予定している RCT のプロトコールを作成することを目的とする。(堀, 金)

#### 8) 災害時精神保健医療ガイドライン作成

国内外のガイドラインを精査し, その内容を解体的に再統合し, 包括的ガイドラインと災害データベースの構築を行っている。(金, 島津, 小林, 篠崎)

#### 9) 地域精神保健相談の実態調査

自治体, 保健所における相談業務のなかで精神保健医療関係の相談が占める割合と, 対応上の負担等の実態に関する全国アンケート調査を行い, 結果を解析した。(金, 島津, 篠崎)

#### 10) ストレス関連疾患の疾患横断的なバイオマーカー検索のための脳 MRI 研究

ストレス関連疾患において, 疾患の枠組みを超えて疾患横断的に治療対象となる認知的特徴や心理的指標, 行動指標ごとに特異的な脳内情報処理や脳神経回路ダイナミクスの異常の解明を目指す。(関口, 菅原彩子, 伊藤真利子, 林, 伊藤まどか, 堀, 金)

### Ⅲ. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

以下の報道を通じて研究成果の社会還元を行った。

- ・ TBS ラジオ 萩上チキ Session22 電話ゲスト, 2016.4.20 震災関連死を防ぎ, 命を守る知識とは?。(金)
- ・ 日本テレビ news every. VTR 出演, 2016.4.27. 避難生活にストレス 多くの学校で休校続く 子供の遊び場必要 学習塾で無料授業も。(金)
- ・ 読売新聞(朝刊 3面 2016.4.30) 余震恐怖「心のケア」熊本地震 ストレス深刻・避難所に「相談室」。(金)
- ・ 朝日新聞(朝刊 33面 2016.5.18) 長引く避難 心もケアを 不眠・うつ病 高まるリスク 不安を周囲に話して 水分とって運動も。(金)
- ・ 読売新聞(朝刊 18面 2016.6.17) 医療ルネサンス 被災者の心を守る 5/5 以前の日常回復目指す。(金)
- ・ 神奈川新聞(朝刊 21面 2016.12.26) 相模原殺傷 5か月 周辺住民も傷深く 精神面の相談 50件超 続いた眠れぬ日々 識者「日常生活大切に」。(金)
- ・ Psychological impact of Fukushima Nuclear Power Plant. Meeting with the OECD Nuclear Energy Agency (NEA) and the Division of Radiological Protection &

Radioactive Waste Management. 2016.9.27. Tokyo. (鈴木)

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 専門家向け講演会  
全国精神保健福祉センター長会, 健康危機管理保健所長等研修, 国土交通省幹部職員研修会, 行政職員向け研修会等で, 災害精神保健に関する最新知見を提供している。(金, 鈴木)
- ・ 客員教授: 東京女子医科大学医学部(金), 山梨大学医学部(金), 東京大学大学院医学系研究科(金).
- ・ 大学講師: 東京大学大学院医学系研究科(金), 京都大学医学部(金), 東京医科歯科大学医学部(金), 高知大学(金), 学習院大学(金), 山形大学医学部(鈴木), 東京女子医科大学(堀) 東北大学 東北メディカル・メガバンク機構(関口).
- ・ 各地の医師会, 法務省, 警察庁, 精神保健福祉センター等の依頼を受け, ト라우マ対応, PTSD 治療, 犯罪被害者対応, 被災者・遺族対応, 災害精神保健に関する一連の講演を行った(金, 鈴木).

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・ PTSD のための持続エクスポージャー療法研修を主催した。(金)
- ・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて第 53 回 精神保健指導課程研修. 第一部 メンタルケアの初期対応のリーダーになる. を精神保健計画研究部と共同開催した。(鈴木)

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

①政府委員会

- ・ 原子力規制委員会原子力規制庁 緊急事態応急対策委員(金)

②その他公的委員会

- ・ ふくしま心のケアセンター 顧問(金)
- ・ みやぎ心のケアセンター 顧問(金)
- ・ 福島県立医科大学放射線医学県民健康管理センター 専門委員(鈴木)
- ・ 仙台市教育局教育委員会 平成 28 年度仙台市児童生徒の心のケア推進委員(鈴木)

(5) センター内における臨床的活動

- ・ 病院において外来診療を行っている。(堀)

(6) その他

- ・ 成人部 HP に「自然災害に関するガイドライン」「薬物療法アルゴリズム」「犯罪被害者のメンタルヘルス情報ページ」を掲載し, 専門家, 一般に対し治療や対応についての啓発を行っている。(金)

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Hori H, Koga N, Hidese S, Nagashima A, Kim Y, Higuchi T, Kunugi H: 24-h activity rhythm and sleep in depressed outpatients. J Psychiatr Res. 2016; 77: 27-34.2016.
- 2) Itoh M, Ujiie Y, Nagae N, Niwa M, Kamo T, Lin M, Hirohata S, Kim Y: The Japanese version of the Posttraumatic Diagnostic Scale: Validity in participants with and without traumatic experiences. Asian J Psychiatr 25: 1-5, 2017.
- 3) Suzuki Y, Fukasawa M, Obara A, Kim Y: Burnout among public servants after the Great

- East Japan Earthquake: decomposing the construct aftermath of disaster. *J Occup Health*. 2017 (March) 59: 156-164.2017.
- 4) Iwasa H, Suzuki Y, Shiga T, Maeda M, Yabe H, Yasumura S: Psychometric Evaluation of the Japanese Version of the Posttraumatic Stress Disorder Checklist in Community Dwellers Following the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Incident-The Fukushima Health Management Survey. *SAGE Open*,6(2) 2158244016652444, 2016.
  - 5) Oe M, Fujii S, Maeda M, Nagai M, Harigane M, Miura I, Yabe H, Ohira T, Takahashi H, Suzuki Y, Yasumura S, Abe M: Three-year trend survey of psychological distress, post-traumatic stress, and problem drinking among residents in the evacuation zone after the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident [The Fukushima Health Management Survey]. *Psychiatry Clin Neurosci*. 70(6):245-52, 2016.
  - 6) Kunii Y, Suzuki Y, Shiga T, et al: Severe Psychological Distress of Evacuees in Evacuation Zone Caused by the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident: The Fukushima Health Management Survey. Mappes T, ed. *PLoS ONE*, 11(7):e0158821. 2016.
  - 7) Uemura M, Ohira T, Yasumura S, Otsuru A, Maeda M, Harigane M, Horikoshi N, Suzuki Y, Yabe H, Takahashi H, Nagai M, Nakano H, Zhang W, Hirosaki M, Abe M, for the Fukushima Health Management Survey Group: Association between psychological distress and dietary intake among evacuees after the Great East Japan Earthquake in a cross-sectional study: the Fukushima Health Management Survey. *BMJ Open* 6(7):e011534. 2016.
  - 8) Suzuki Y, Yabe H, Horikoshi N, Yasumura S, Kawakami N, Ohtsuru A, Mashiko H, Maeda M: Mental Health Group of the Fukushima Health Management Survey. Diagnostic accuracy of Japanese posttraumatic stress measures after a complex disaster: The Fukushima Health Management Survey. *Asia Pac Psychiatry* 9(1), 2017.
  - 9) Oe M, Maeda M, Nagai M, Yasumura S, Yabe H, Suzuki Y, Harigane M, Ohira T, Abe M: Predictors of severe psychological distress trajectory after nuclear disaster: evidence from the Fukushima Health Management Survey. *BMJ Open* 2016;6:e013400.
  - 10) Horikoshi N, Iwasa H, Kawakami N, Suzuki Y, Yasumura S: Residence-related factors and psychological distress among evacuees after the Fukushima Daiichi nuclear power plant accident: a cross-sectional study. *BMC Psychiatry*. Nov 24;16(1):420, 2016.
  - 11) Nishi D, Suzuki Y, Nishida J, Mishima K, Yamanouchi Y. Personal lifestyle as a resource for work engagement. *J Occup Health*. 2017 Jan 24;59(1):17-23. 2016.
  - 12) Zhang W, Ohira T, Abe M, Kamiya K, Yamashita S, Yasumura S, Ohtsuru A, Maeda M, Harigane M, Horikoshi N, Suzuki Y, Yabe H, Yuuki M, Nagai M, Takahashi H, Nakano H, for the Fukushima Health Management Survey Group: Evacuation after the Great East Japan Earthquake was associated with poor dietary intake: The Fukushima Health Management Survey. *J Epidemiol*. 2017 Jan. 27 (1): 14-23. 2017.
  - 13) Harigane M, Suzuki Y, Yasumura S, Ohira T, Yabe H, Maeda M, Abe M: The Relationship between Functional Independence and Psychological Distress in Elderly Adults Following the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident: The Fukushima Health Management Survey. *Asia Pacific Journal of Public Health*, 29 (2): 120S-130S, 2017.
  - 14) Oe M, Takahashi H, Maeda M, Harigane M, Fujii S, Miura I, Nagai M, Yabe H, Ohira T, Suzuki Y, Yasumura S, Abe M: Changes of Posttraumatic Stress Responses in Evacuated Residents and Their Related Factors: A 3-Year Follow-up Study From the Fukushima



- Health Management Survey. *Asia Pacific Journal of Public Health*, 29 (2): 182S–192S, 2017.
- 15) Ota M, [Hori H](#), Sato N, Yoshida F, Hattori K, Teraishi T, Kunugi H: Effects of ankyrin 3 gene risk variants on brain structures in patients with bipolar disorder and healthy subjects. *Psychiatry Clin Neurosci*. 70: 498-506, 2016.
  - 16) Matsuo J, Ota M, [Hori H](#), Hidese S, Teraishi T, Ishida I, Hiraishi M, Kunugi H: A large single ethnicity study of prepulse inhibition in schizophrenia: Separate analysis by sex focusing on effect of symptoms. *J Psychiatr Res*. 82: 155-162, 2016.
  - 17) Sasayama D, Hattori K, Ogawa S, Yokota Y, Matsumura R, Teraishi T, [Hori H](#), Ota M, Yoshida S, Kunugi H: Genome-wide quantitative trait loci mapping of the human cerebrospinal fluid proteome. *Hum Mol Genet*, 26: 44-51, 2017.
  - 18) Matsuo J, Ota M, Hidese S, [Hori H](#), Teraishi T, Ishida I, Hiraishi M, Kunugi H: Sexually dimorphic deficits of prepulse inhibition in patients with major depressive disorder and their relationship to symptoms: A large single ethnicity study. *J Affect Disord*. ; 211: 75-82, 2017.
  - 19) Mizuno M, Yamaguchi S, Taneda A, [Hori H](#), Aikawa A, Fujii C: Development of Japanese version of King's Stigma Scale and its short version: Psychometric properties of a self-stigma measure. *Psychiatry Clin Neurosci*. ; 71: 189-197, 2017.
  - 20) Nouchi R, Taki Y, Takeuchi H, Nozawa T, [Sekiguchi A](#), Kawashima R: "Reading aloud and solving simple arithmetic calculation intervention (Learning therapy) improves inhibition, verbal episodic memory, focus attention, and processing speed in healthy elderly people: Evidence from a randomized controlled trial" *Frontiers in Human Neuroscience*, May, 10:217, 2016.
  - 21) Takeuchi H, Taki Y, [Sekiguchi A](#), Nouchi R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Miyauchi CM, Iizuka K, Yokoyama R, Shinada T, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Hashizume H, Kunitoki K, Sassa Y, Kawashima R: "Differences in gray matter structure correlated to nationalism and patriotism" *Scientific Reports*, 15:6:29912. 2016.
  - 22) Nakagawa S, Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, [Sekiguchi A](#), Kotozaki Y, Miyauchi CM, Iizuka K, Yokoyama R, Shinada T, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Kunitoki K, Sassa Y, Kawashima R: "Sex-related differences in the effects of sleep habits on verbal and visuospatial working memory" *Frontiers in Psychology*, 7:1128, 2016.
  - 23) Nouchi R, Takeuchi H, Taki Y, [Sekiguchi A](#), Kotozaki Y, Nakagawa S, Miyauchi CM, Iizuka K, Yokoyama R, Shinada T, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Sassa Y, Kawashima R: "Neuroanatomical bases of effortful control: evidence from a large sample of young healthy adults using voxel-based morphometry". *Scientific Reports*, 6 31231, 2016.
  - 24) Nakagawa S, Sugiura M, [Sekiguchi A](#), Kotozaki Y, Miyauchi CM, Hanawa S, Araki T, Takeuchi H, Sakuma A, Taki Y, Kawashima R: "Effects of post-traumatic growth on the dorsolateral prefrontal cortex after a disaster" *Scientific Reports*, Sep 27;6:34364, 2016.
  - 25) [Sekiguchi A](#), Sato C, Matsudaira I, Kotozaki Y, Nouchi R, Takeuchi H, Kawai M, Tada H, Ishida T, Taki Y, Ohuchi N, Kawashima R: "Postoperative hormonal therapy prevents recovery of neurological damage after surgery in patients with breast cancer" *Scientific Reports*, Oct 6;6:34671, 2016.
  - 26) Nakagawa S, Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, [Sekiguchi A](#), Kotozaki Y, Miyauchi CM, Iizuka K, Yokoyama R, Shinada T, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Hashizume H, Kunitoki K, Sassa Y, Kawashima R: "The anterior midcingulate cortex as a neural node

- underlying hostility in young adults" *Brain Structure and Function*, 222(1):61-70, 2017.
- 27) Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Miyauchi CM, Shinada T, Sakaki K, Sassa Y, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Daniele M, Kawashima R: "Creative females have larger white matter structures: evidence from a large sample study" *Human Brain Mapping*, 38(1):414-430. 2017.
- 28) Takeuchi H, Taki Y, Sekiguchi A, Nouchi R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Miyauchi CM, Iizuka K, Yokoyama R, Shinada T, Yamamoto Y, Hanawa S, Araki T, Kunitoki K, Sassa Y, Kawashima R: "Mean diffusivity of basal ganglia and thalamus specifically associated with motivational states among mood states" *Brain Structure and Function*, 222(2):1027-1037, 2017.
- 29) Hakamata Y, Sato E, Komi S, Moriguchi Y, Izawa S, Murayama N, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H: The functional activity and effective connectivity of pulvinar are modulated by individual differences in threat-related attentional bias. *Scientific Reports*, 6:34777, 2016.
- 30) 金 吉晴: 外傷性悲嘆とトラウマ. 特集 神経症性障害と抑うつ—その相互作用と臨床的意義, 治療について— *精神神経学雑誌*, 118 (7): 516-521, 2016.
- 31) 上田 鼓, 中島聡美, 金 吉晴: 犯罪被害者支援活動における警察職員の二次的外傷性ストレスと関連要因. *トラウマティック・ストレス*, 14(2): 141-150, 2016.
- 32) 大沼麻実, 篠崎康子, 金 吉晴: 災害時の不安対応と心理的応急処置 PFA (サイコロジカル・ファーストエイド). シリーズ: 内科医と災害医療, *日本内科学会雑誌*, 106:130-132, 2017.

## (2) 総説

- 1) 金 吉晴: 長崎市被爆未指定地域住民における原爆目撃体験と関連する精神状態についての調査研究について. *精神保健研究* 63: 25-30, 2017.3.
- 2) 大沼麻実, 金 吉晴: 第 17 章 PFA (サイコロジカル・ファーストエイド). 小澤康司, 中垣真通, 小俣和義編: 緊急支援のアウトリーチ—現場で求められる心理的支援の理論と実践, 225-233, 2017.
- 3) 大沼麻実, 大滝涼子, 金 吉晴: 第 12 章 被災者・支援者のメンタルヘルスとケア 災害直後のこころのケア応急処置. 小井土雄一, 石井美恵子編著: 多職種連携で支える災害医療—身につけるべき知識・スキル・対応力, 127-131, 2017
- 4) 鈴木友理子: メンタルヘルス・ファーストエイドとは. *治療* 98(5): 640-644, 2016.5
- 5) 種田綾乃, 鈴木友理子, 深澤舞子, 伊藤順一郎: 東日本大震災後の地域精神保健医療福祉システム再構築と外部支援: 現地支援者のグループインタビューから. *家族療法研究*. 33(3): 322-330, 2016.

## (3) 著書

- 1) 鈴木友理子: 災害に伴う精神医学的問題. 今日精神疾患治療指針 (第 2 版). 樋口 輝彦/市川 宏伸/神庭 重信/朝田 隆/中込 和幸 (編), 医学書院, 東京, pp 987-990, 2016.10.
- 2) 鈴木友理子: 2. PTSD の有病率. 何がトラウマになるのか. これからの対人援助を考えるくらしの中の心理臨床. 3. トラウマ. 藤森和美, 青木紀久代 (編), pp127-133, 福村出版, 東京, 2016.11.
- 3) 鈴木友理子: 第 8 章. 世界の精神保健. 精神保健福祉士養成セミナー② 精神保健学 (第 6 版) 精神保健の課題と支援. 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 (編), pp307-329, へるす出版, 東京. 2017.1.

- 4) 堀 弘明: 第 8 章 第 2 節 心的外傷後ストレス障害. 精神保健医療福祉白書編集委員会(編): 精神保健医療福祉白書 2017. 中央法規出版, 東京, p174, 2016.

(4) 研究報告書

- 1) 金 吉晴: 災害時の精神保健医療に関する研究. 平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))総括・分担研究報告書. pp1-4, 2017.
- 2) 金 吉晴, 加藤 寛, 荒井秀典, 松本和紀, 前田正治, 富田博秋, 鈴木友理子, 神尾陽子, 松下幸生, 大塚耕太郎, 井筒 節: 災害時精神保健活動ガイドライン: 国内外の文献の検証と新たな包括的ガイドライン作成にむけての構想. 平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))総括・分担研究報告書. pp5-138, 2017.
- 3) 金 吉晴: こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究. 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業 (精神障害分野) 総括・分担研究報告書. pp1-4, 2017.
- 4) 金 吉晴, 山之内芳雄, 三島和夫, 神尾陽子: 全国市町村保健所における精神保健相談の実態調査. 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業 (精神障害分野) 総括・分担研究報告書. pp5-52, 2017.
- 5) 伊藤真利子, 林 明明, 金 吉晴: 運動習慣によるストレス反応の緩和ー主観評価と自律神経活動評価による実験的検討ー. 明治安田厚生事業団 第 31 回 (2014 年度) 若手研究者のための健康科学研究助成成果報告書. pp11-16, 2016.
- 6) 堀 弘明, 金 吉晴, 伊藤真利子, 林 明明: 健常女性における運動習慣と心理的・身体的要因の関連. 総合健康推進財団 平成 26 年度第 31 回一般研究奨励助成事業 研究報告書. pp72-80, 2016.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 金 吉晴: 熊本地震 余震恐怖「心のケア」ストレス深刻・避難所に「相談室」DPAT. 読売新聞朝刊 3 面, 2016.4.30.
- 2) 金 吉晴, 小西聖子: PTSD (心的外傷後ストレス障害) の認知行動療法マニュアル. 不安症研究 2016 特別号, pp155-170, 2016.5.
- 3) 金 吉晴: 長引く避難 心のケアを~不眠・うつ病高まるリスク~. 朝日新聞朝刊 33 面, 2016.5.18.
- 4) 金 吉晴: 長崎原子爆弾に対する曝露後の持続的な精神的苦悩. 【第 14 回日本トラウマティック・ストレス学会】JSTSS & ISTSS コラボ企画シンポジウム Trauma Around the World. トラウマティック・ストレス, 14(1): 14-20, 2016.
- 5) 金 吉晴: 医療ルネサンス NO.6331 被災者の心を守る 以前の日常回復目指す. 読売新聞朝刊 18 面, 2016.6.17.
- 6) 金 吉晴: もっと知ろうからだのこと 24 心的外傷後ストレス障害 PTSD (監修). インタープレス, 東京, 2016.8.5.
- 7) 金 吉晴: PTSD の持続エクスポージャー療法. 日精協誌 36(2): 46-51, 2017.
- 8) 浅野敬子, 中島聡美, 成澤知美, 中澤直子, 金 吉晴, 小西聖子: 急性期性暴力被害者のための支援情報ハンドブックの有用性評価. 女性心身医学, 21(3): 325-335, 2017.
- 9) 大沼麻実: 国際会議「OUT OF THE SHADOWS : Making Mental Health a Global Development Priority」報告. トラウマティック・ストレス, 一般財団法人日本トラウマティック・ストレス学会, 14(2), 81-82, 2016.

- 10) 大沼麻実: 専門医部会 災害医療活動アクションカード. 日本内科学会雑誌 106, 巻頭挟み込み, 2017.1.

## B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) Kim Y: PARALLEL PANEL DISCUSSION 2 Addressing the mental health needs of vulnerable populations across sectors. OUT OF THE SHADOWS: Making Mental Health a Global Development Priority, Washington D.C, 2016.4.14.
  - 2) Kim Y: Persistent distress after psychological exposure to the Nagasaki atomic bomb explosion. National center of mental health inauguration symposium Symposium2. Seoul, 2016.10.14.
  - 3) Kim Y: Comprehensive View of PTSD; Pathogenesis, Biomarkers and Treatment. 2016' Annual autumn meeting of Korean Neuropsychiatric association. Gwangju, 2016.10.28.
  - 4) Suzuki Y: Disorders specifically associated with stress and trauma: Findings in preparation of WHO's ICD-11 release. Discussant. The 31st International Congress of Psychology, Kanagawa, 2016.7.25.
  - 5) Suzuki Y: Psychological distress after the Fukushima Nuclear Power Plant Accident. The XXII World Congress of the World Association of Social Psychiatry, Symposium, "The Psychosocial Impact of Disasters after the 2011 Great East Japan Earthquake / Fukushima Nuclear Accident and the 2015 Joso Flood Disaster in Japan". New Delhi, 2016.11.30-12-4.
  - 6) Hori H: Hypothalamic-pituitary-adrenal Axis Function and Gene Expression Profiles as Useful Blood Biomarkers for Major Depressive Disorders. The 10th Annual Scientific Meeting of Hong Kong Society of Biological Psychiatry, Hong Kong, 2017.3.11.
  - 7) Nakamura S, Hori H, Ishizawa Y, Matsubara K, Matoba R, Kunugi H: Identification of blood-based gene expression biomarkers for major depressive and bipolar disorders. 日本薬学会第137年会 3rd International Symposium for Medicinal Sciences, 宮城, 2017.3.26.
  - 8) 金 吉晴: 心的トラウマと自殺. 第7回国際自殺予防学会アジア・太平洋地域大会/第40回日本自殺予防学会総会ランチョンセミナー1, 東京, 2016.5.18.
  - 9) 金 吉晴: PTSD の多様性とエクスポージャー療法: 概観. 第112回日本精神神経学会学術総会シンポジウム 13 PTSD の多様性とエクスポージャーに基づいた治療法, 千葉, 2016.6.2.
  - 10) 金 吉晴: トラウマと嗜癖. 第112回日本精神神経学会学術総会シンポジウム 30 災害と嗜癖関連行動, 千葉, 2016.6.2.
  - 11) 金 吉晴: PTSD の治療と生活への適応: 持続エクスポージャー療法の立場から. 第112回日本精神神経学会学術総会シンポジウム 37 不安障害の予後~再発の問題を含めて, 千葉, 2016.6.2.
  - 12) 金 吉晴: 強迫症の治療予後~再発と寛解を中心に~ (コーディネーター). 第112回日本精神神経学会学術総会シンポジウム 37 不安障害の予後~再発の問題を含めて, 千葉, 2016.6.2.
  - 13) 金 吉晴: 教育講演 20 PTSD の回復とその経路. 第112回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.4.
  - 14) 金 吉晴: 災害時の心理社会支援: 日本の現況. 災害心理支援シンポジウム - 被災地における心理社会的ケアを考える -. 東京, 2016.8.8.
  - 15) 金 吉晴: トラウマ反応の治療はどこまで来ているのか? シンポジスト. 武蔵野大学臨床心理学国際シンポジウム, 東京, 2016.8.27.

- 16) 金 吉晴, 加茂登志子: シンポジウム 13 PTSD の多様性とエクスポージャーに基づいた治療法 (司会). 第 112 回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.2.
- 17) 松下幸生, 金 吉晴: シンポジウム 30 災害と嗜癮関連行動 (司会). 第 112 回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.2.
- 18) 金 吉晴, 佐藤由佳利, 小林朋子: 支援活動委員会企画シンポジウム「支援活動の裾野を広げるために」話題提供者. 日本心理臨床学会第 35 回秋季大会, 神奈川, 2016.9.6.
- 19) 鈴木友理子: 大災害後の子どもの教育・心理・医療における長期支援について. 第 15 回日本トラウマティック・ストレス学会, 宮城, 2016.5.20-21.
- 20) 鈴木友理子: 災害時のこころのケア. 第 66 回日本病院学会ワークショップ「災害時のメンタルケア-東日本大震災の経験に学ぶ-」, 岩手, 2016.6.23.
- 21) 鈴木友理子・前田正治: 福島第一原子力発電所事故後の地域住民の精神健康について. 第 36 回日本社会精神医学会 災害精神医学 復興期における精神科支援の重要性, 東京, 2017.3.3.
- 22) 堀 弘明: うつ病バイオマーカーとしての視床下部・下垂体・副腎系. 第 13 回日本うつ病学会総会, 愛知, 2016.8.5-6.
- 23) 関口 敦: 脳画像研究から見たうつ病と心身症. ワークショップ 1 「うつ病と心身相関」第 13 回日本うつ病学会総会, 愛知, 2016.8.5-6

(2) 一般演題

- 1) Kim Y: Psychosocial response to disaster: experience and policy. ICDR 2016 2nd International Conference of Disaster Reduction, Seoul. 2016.6.17.
- 2) Itoh M, Hori H, Lin M, Kim Y: Correlations between habitual exercise and mental health in Japanese healthy adult women. 31st International Congress of Psychology, Kanagawa, 2016.7.24-29.
- 3) Hori H, Sasayama D, Teraishi T, Yamamoto N, Nakamura S, Ota M, Hattori K, Kim Y, Higuchi T, Kunugi H: Involvement of hypothalamic-pituitary-adrenal axis in the mechanism of transcriptome-wide identified differentially expressed genes for depression. 29<sup>th</sup> ECNP Congress, Vienna, 2016.9.17-20.
- 4) Kamo T, Kim Y, Ito M, Ujiie Y, Nakayama M: The Trajectory of Mental Health among Mothers and Children who Exposed to Intimate Partner Violence : Prospective Longitudinal Study. ISTSS 32<sup>nd</sup> Annual Meeting, Dallas, 2016.11.10-12.
- 5) Miyachi CM, Takeuchi H, Taki Y, Yokoyama R, Nakagawa S, Hanawa S, Nouchi R, Sekiguchi A, Araki A, Sassa S, Kawashima R: "Regional gray matter volume associated with shame-proneness" The 22<sup>nd</sup> Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, Geneva, Switzerland; June 26-30, 2016.
- 6) Landré L, Thyreau B, Oba K, Abe M, Sekiguchi A, Taki Y: "Socio-demographics and Brain Correlates of Stress due to the 2011 Great East Japan Earthquake" The 22<sup>nd</sup> Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, Geneva, Switzerland; June 26-30, 2016.
- 7) Sekiguchi A, Kotozaki Y, Thyreau B, Takeuchi H, Yokota S, Asano K, Asano M, Sassa Y, Nouchi R, Taki Y, Kawashima R: "Pre-existing smaller DLPFC volume contributes to post-traumatic growth after a disaster in children" The 75<sup>th</sup> Annual Meeting of the American Psychosomatic Society, Seville, 2017 .3.17.(Poster)
- 8) 伊藤真利子, 氏家由里, 丹羽まどか, 長江信和, 林 明明, 加茂登志子, 金 吉晴: PTSD スクリーニングのための自記式尺度の開発: 日本語版 Posttraumatic Diagnostic Scale の再体験 3 項目版尺度. 第 15 回日本トラウマティック・ストレス学会, 宮城, 2016.5.20-21.

- 9) 堀 弘明, 古賀賀恵, 秀瀬真輔, 長島杏那, 金 吉晴, 樋口輝彦, 功刀 浩: 大うつ病エピソードの外来患者における概日活動リズムと睡眠. 第13回日本うつ病学会総会, 愛知, 2016.8.5-6.
- 10) 堀 弘明, 篠山大明, 寺石俊也, 山本宜子, 中村誠二, 太田深秀, 服部功太郎, 金 吉晴, 樋口輝彦, 功刀 浩: Involvement of hypothalamic-pituitary-adrenal axis in the mechanism of transcriptome-wide identified differentially expressed genes for depression. 第38回日本生物学的精神医学会, 福岡, 2016.9.8-10.
- 11) 関口 敦, 伊藤真利子, 林 明明, 伊藤まどか, 堀 弘明, 菅原彩子, 金 吉晴: “ストレス関連疾患の疾患横断的なバイオマーカー検索のための脳MRI研究”. 第128回日本心身医学会関東地方会, 東京, 2017.1.28-29. (口演)
- 12) 佐藤千穂, 関口 敦, 松平 泉, 事崎由佳, 野内 類, 竹内 光, 瀧 靖之, 河合賢朗, 多田 寛, 石田孝宣, 川島隆太, 大内憲明: 脳MRIを用いた初発乳癌術後半年の視床体積における神経可塑性の検討. 第116回日本外科学会定期学術集会, 大阪, 2016.4.14.
- 13) 村椿智彦, 鹿野理子, 石垣 泰, 関口 敦, 澤田正二郎, 近藤敬一, 事崎由佳, 佐々木彩加, 森下 城, 金澤 素, 片桐秀樹, 川島隆太, 福土 審: 肥満症患者の灰白質容量とBMI, 糖代謝指標との関係. 第57回日本心身医学会総会, 仙台, 2016.6.4.

### (3) 研究報告会

- 1) 金 吉晴: PTSD症状と神経的基盤. 2016年 医療心理懇話会, 東京, 2016.11.2.
- 2) 金 吉晴, 篠崎康子, 島津恵子, 小林真綾: 包括的災害対応ガイドラインの作成に向けて. 「災害時の精神保健医療に関する研究」研究班・専門家合同会議, 東京, 2016.10.6.
- 3) 関口 敦: 研究費獲得へ向けたブレインストーミング. 第4回心身医学のニューロサイエンス研究会, 大阪, 2016.9.17.
- 4) 関口 敦: 災害ストレス曝露前後の脳形態変化～健常大学生における検討. 第1回医療心理懇話会, 東京, 2016.11.2-3.

### (4) その他

- 1) Yoshiike T, Honma M, Kim Y, Kuriyama K: Bright light facilitates fear extinction and prefrontal processing for fear extinction in humans. 27th Annual Meeting of Society for Light Treatment & Biological Rhythms, San Diego, 2015.6.28.
- 2) 吉池卓也: 国際学会発表賞. 第112回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.4.
- 3) 浅野敬子: 優秀演題賞. 第15回日本トラウマティック・ストレス学会, 2016.5.20-21.  
浅野敬子, 今野理恵子, 山本このみ, 正木智子, 平川和子, 小西聖子: 性暴力被害者のためのワンストップ支援センターから精神科へ紹介された被害者の実情と治療の課題.

### C. 講演

- 1) 金 吉晴: 一般論. 第13回 Prolonged Exposure Therapy 講習会, 東京, 2016.5.2.
- 2) 金 吉晴: PTSDと災害精神医療. 高知大学神経精神科学教室, 高知, 2016.5.25
- 3) 金 吉晴: 市民公開講座「震災ストレスから眠りと健康をいかに守るか」. 日本睡眠学会第41回定期学術集会, 東京, 2016.7.8.
- 4) 金 吉晴: PTSDの病態と治療. 東京大学医学部附属病院精神神経科における金 吉晴先生 PTSDの病態と治療, 東京, 2016.7.25.
- 5) 金 吉晴: 自然災害と精神保健医療. 平成28年度「徳島県自殺予防講演会」, 徳島, 2016.9.11.
- 6) 金 吉晴: 災害とトラウマ. 熊本地震こころの支援者応援シリーズ, 熊本, 2016.9.27.
- 7) 金 吉晴: 一般精神科診療における PTSD 診断、評価と対応. 2016年度10月精神医療セミナー, 東京, 2016.10.26.
- 8) 金 吉晴: メンタルヘルスケアとキャリア支援プログラム. 平成28年度派遣責任者セミナー,

東京, 2016.11.15.

- 9) 金 吉晴, 大沼麻実: 災害時のサイコロジカル・ファーストエイド. NHK, 東京, 2017.2.8.
- 10) 鈴木友理子, 深澤舞子: 平成 28 年度心とからだの健康調査結果について. 仙台市教育委員会 平成 28 年度第 2 回心のケア推進委員会, 宮城, 2017.1.26.
- 11) 大沼麻実: 被災者を支えるために～サイコロジカル・ファーストエイドについて～. 災害時の被災者への対応能力向上研修会, 広島, 2016.7.15.
- 12) 大沼麻実: PFA 講演会. 埼玉病院, 埼玉, 2017.2.22.

#### D. 学会活動

##### (1) 学会主催

##### (2) 学会役員

- 1) Kim Y: International Society for Traumatic Stress Studies 理事
- 2) Kim Y: Global Committee, International Traumatic Stress Studies, 委員
- 3) Suzuki Y: World Health Organization, Member of the International Health Regulations (2005) (IHR(2005)) Roster of Experts, expert in Mental Health (2012-2016).
- 4) 金 吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会 常任理事
- 5) 金 吉晴: 日本精神神経学会 災害支援委員会委員, 災害支援連絡会委員
- 6) 金 吉晴: 自殺予防学会 理事
- 7) 鈴木友理子: 日本精神神経学会 アンチスティグマ委員.
- 8) 鈴木友理子: 日本トラウマティック・ストレス学会 理事. 国際委員
- 9) 堀 弘明: 日本生物学的精神医学会 評議員
- 10) 関口 敦: 日本心身医学会 幹事

##### (3) 座長

- 1) Kim Y: Symposium Emerging Network for Post-disaster Psychosocial Support in Asia. (Chair). ISTSS 32<sup>nd</sup> Annual Meeting, Dallas, 2016.11.10.
- 2) 金 吉晴: ランチョンセミナー1. 第 15 回日本トラウマティック・ストレス学会, 宮城, 2016.5.20.
- 3) 金 吉晴: ワークショップ 19 PTSD に対する PE 療法の研修会. 第 16 回日本認知療法学会, 大阪, 2016.11.25.
- 4) 鈴木友理子: 東日本大震災とところのケア: 公衆衛生学と実践宗教学の視点から. 第 15 回日本トラウマティック・ストレス学会, 宮城, 2016.5.20-21.
- 5) 関口 敦, 守口善也: シンポジウム 3. 「目に見えるストレス: ニューロイメージング心身医学の新展開」 第 57 回日本心身医学会総会, 仙台, 2016.6.4.
- 6) 瀧本禎之, 関口 敦: ポスター P2-25~28. 「生物学的検討」 第 57 回日本心身医学会総会, 仙台, 2016.6.5.
- 7) 吉川真理, 大沼麻実: 災害心理支援シンポジウム - 被災地における心理社会的ケアを考える -. 東京, 2016.8.8.

##### (4) 学会誌編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board
- 2) Kim Y: European Journal of Psychotraumatology, editorial board
- 3) Kim Y: Disaster Health, editorial board
- 4) Kim Y: Psychiatry and Clinical Neuroscience, field editor

- 5) Suzuki Y: International Journal of Mental Health System, editorial board
- 6) Hori H: The Scientific World Journal, editorial board
- 7) Hori H: Frontiers in Psychiatry, editorial board
- 8) 金 吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会 編集委員長

## E. 研修

### (1) 研修企画

- 1) 金 吉晴: PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.13-16.
- 2) 金 吉晴: 国立精神・神経医療研究センター 国際セミナー, 東京, 2017.1.18. (演者: Justin Kenardy, Ph.D. 自動車衝突事故後の外傷性損傷に伴う精神疾患 “Psychological Disorder associated with Traumatic Injury following Motor Vehicle Crash.”)
- 3) 金 吉晴: 平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 C: 大規模災害対策コース (精神医療関係者). 東京, 2017.2.2-3.
- 4) 金 吉晴: 平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 B: 大規模災害対策コース (一般及び行政医療関係者). 東京, 2017.2.14.
- 5) 金 吉晴: 平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 A: 大規模災害対策コース (通常コース). 東京, 2017.2.22-23.
- 6) 金 吉晴, Leslie Snider, 大沼麻実, 大滝涼子: 第 2 回 WHO 版心理的応急処置 (サイコロジカル・ファーストエイド: PFA) 指導普及に関する専門家検討会, 東京, 2017.2.21.
- 7) 鈴木友理子: 第 53 回 精神保健指導課程研修 第一部 メンタルケアの初期対応のリーダーになる. 東京, 2016.9.29-30.

### (2) 研修会講師

- 1) 金 吉晴: 被害者支援活動の動向. 平成 28 年度ふくしま心のケアセンター年度当初研修会, 福島, 2016.4.4.
- 2) 金 吉晴: PTSD 概論と CBT 理論. PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.13.
- 3) 金 吉晴: PE 概観と症状評価. PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.13.
- 4) 金 吉晴: PE の治療原理と導入. PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.13.
- 5) 金 吉晴: CAPS 講習会. PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.13.
- 6) 金 吉晴: 心理教育. PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.14.
- 7) 金 吉晴: 想像エクスポージャー. PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.14.
- 8) 金 吉晴: 現実エクスポージャー. PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.14.
- 9) 金 吉晴: ホットスポット. PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.15.
- 10) 金 吉晴: PE の実践的課題. PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.15.
- 11) 金 吉晴: 回避への対応. PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.15.
- 12) 金 吉晴: 想像エクスポージャーの修正. PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.15-16.
- 13) 金 吉晴: PE の振り返り. PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.16.
- 14) 金 吉晴: PE 実施の注意点. PTSD のための持続エクスポージャー療法研修. 東京, 2016.6.16.
- 15) 金 吉晴: 災害時の心理変化とこころのケア. 災害支援ナースの基礎知識～災害看護の第一歩～, 兵庫, 2016.7.7.



- 16) 金 吉晴：持続エクスポージャー療法症例検討会～金 吉晴先生をお迎えして～，愛知，2016.7.28.
- 17) 金 吉晴：災害時の精神保健医療対応 総論．平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 C：大規模災害対策コース（精神医療関係者）．東京，2017.2.3.
- 18) 金 吉晴，大沼麻実他：災害時の PFA．平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 C：大規模災害対策コース（精神医療関係者）．東京，2017.2.3.
- 19) 金 吉晴：災害時の精神保健医療対応 総論．平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 B：大規模災害対策コース（一般及び行政医療関係者）．東京，2017.2.14.
- 20) 金 吉晴，Leslie Snider，大沼麻実，大滝涼子：第 2 回 WHO 版心理的応急処置（サイコロジカル・ファーストエイド：PFA）指導普及に関する専門家検討会，国立精神・神経医療研究，東京，2017.2.21.
- 21) 金 吉晴：PTSD の診断と評価．平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 A：大規模災害対策コース（通常コース）．東京，2017.2.22.
- 22) 金 吉晴，Leslie Snider：災害への心理対応～心理的応急処置（PFA）．平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 A：大規模災害対策コース（通常コース）．東京，2017.2.22.
- 23) 金 吉晴：PTSD の心理療法：持続エクスポージャー療法の立場から．平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 A：大規模災害対策コース（通常コース）．東京，2017.2.23.
- 24) 鈴木友理子：東日本大震災から 5 年を経て．岩手県精神保健福祉センター 平成 28 年度災害支援者・救済者研修会，岩手，2016.4.20.
- 25) 鈴木友理子：メンタルヘルス・ファーストエイド（うつ病・自殺対応、物質関連障害）．福島県県民健康調査研修会，福島，2016.6.28.
- 26) 鈴木友理子：不安の問題のメンタルヘルス・ファーストエイド．平成 28 年度自殺対策支援者研修，北九州，2016.7.21-22.
- 27) 鈴木友理子：成人学習理論．平成 28 年度自殺対策支援者研修，北九州，2016.7.21-22.
- 28) 鈴木友理子：メンタルヘルス・ファーストエイド（不安の問題、精神病性障害）．福島県県民健康調査研修会，福島，2016.8.2.
- 29) 鈴木友理子，深澤舞子：平成 28 年度心とからだの健康調査結果について．仙台市教育委員会 平成 28 年度 第 2 回 心のケア研修会，宮城，2016.8.18.
- 30) 鈴木友理子：うつ病と自殺のメンタルヘルス・ファーストエイド．相模原市ゲートキーパー研修，神奈川，2016.9.6.
- 31) 鈴木友理子：ストレス、不安に関連した疾患の知識と対応法．精神医学基礎研修 4「神経症」，神奈川，2016.10.12.
- 32) 鈴木友理子：災害精神保健活動における役割分担と連携～急性期から中長期の心のケア～．平成 28 年度日本臨床心理士会定例研修会 I 第 23 医療保健領域研修会分科会 1. コミュニティの危機に医療チームがどう関わるか，東京，2016.10.23.
- 33) 鈴木友理子：私たちにもできる心の応急手当：自殺のサインとその対処法．平成 28 年度自殺予防のための支援者研修会，岡山，2016.10.31.
- 34) 鈴木友理子：災害時のこころのケア 急性期から中長期の精神保健福祉活動．災害時こころのケア研修会，奈良，2016.11.11.
- 35) 鈴木友理子：メンタルヘルス・ファーストエイドとは．平成 28 年度ゲートキーパー・スキルアップ研修指導者養成講習会，島根，2016.11.19-20.
- 36) 鈴木友理子：うつ病と自殺のメンタルヘルス・ファーストエイド．平成 28 年度ゲートキーパー・スキルアップ研修指導者養成講習会，島根，2016.11.19-20.
- 37) 鈴木友理子：成人学習理論．平成 28 年度ゲートキーパー・スキルアップ研修指導者養成講

- 習会, 島根, 2016.11.19-20.
- 38) 鈴木友理子: 不安の問題のメンタルヘルス・ファーストエイド. 平成 28 年度ゲートキーパー・スキルアップ研修指導者養成講習会. 島根, 2016.11.19-20.
  - 39) 鈴木友理子: 不安の問題. 平成 28 年度メンタルヘルス・ファーストエイド-ジャパン指導者(インストラクター)研修会. 福岡, 2017.1.27.
  - 40) 鈴木友理子: 不安の問題のメンタルヘルス・ファーストエイド. 自殺対策研修・講演会, 東京, 2017.2.14.
  - 41) 鈴木友理子: 災害時の調査・研究. JICA workshop on disaster mental health, 神戸, 2017.3.11.
  - 42) 堀 弘明: PTSD の生物学的基盤と薬物療法. 平成 28 年度 PTSD 対策専門研修事業 A.通常コース, 東京, 2017.2.22.
  - 43) 大沼麻実, 河島 譲, 赤坂美幸: 子どものためのサイコロジカル・ファーストエイド研修. セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン, 東京, 2016.5.13.
  - 44) 大沼麻実, 加茂登志子: サイコロジカル・ファーストエイド研修. 東京女子医科大学救命救急センター, 東京, 2016.5.27.
  - 45) 大沼麻実, 福地 成, 河島 譲, 赤坂美幸, 猿渡英代子: 子どものためのサイコロジカル・ファーストエイド研修. セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン, 神戸, 2016.6.1.
  - 46) 大沼麻実, 石田牧子: サイコロジカル・ファーストエイド研修. セブン&アイホールディングス, 東京, 2016.6.25.
  - 47) 大沼麻実: サイコロジカル・ファーストエイド演習. 東京女子医科大学, 東京, 2016.10.21.
  - 48) 大沼麻実, 宮川 治, 伊藤義徳, 赤嶺遼太郎, 滝 友秀: サイコロジカル・ファーストエイド研修, 沖縄県立総合精神保健福祉センター, 沖縄, 2016.10.28.
  - 49) 大沼麻実, 平安明, 甲田宗良, 諸見秀太, 吉元なるよ, 原田大幹, 井上幸代, 高江洲慶, 諏訪賀一: サイコロジカル・ファーストエイド研修, 沖縄県医師会, 沖縄, 2016.10.29.
  - 50) 大沼麻実, 大滝涼子, 伯耆田修: 緊急事態を想定したワークショップ (PFA 研修). 外務省領事中堅研修, 外務省, 東京, 2015.11.17.
  - 51) 大沼麻実, 鈴木 満, 伯耆田修, 矢田重信: PFA研修会. ERT研修会, 外務省, パリ, 2017.1.26.
  - 52) 大沼麻実, 荻原かおり, 森光玲雄, 澤 智恵, 谷知正章, 大滝涼子, 小松里美: 災害時の PFA (心理的応急処理: サイコロジカル・ファーストエイド). PTSD 対策専門研修事業 C.大規模災害対策コース (精神医療関係者), 国立精神・神経医療研究センター, 東京, 2016.2.3.
  - 53) 大沼麻実, 大滝涼子: PFA研修会. ERT研修会, 外務省, 東京, 2017.3.30.

## F. その他

- 1) Suzuki Y: Psychological impact of Fukushima Nuclear Power Plant. Meeting with the OECD Nuclear Energy Agency (NEA) and the Division of Radiological Protection & Radioactive Waste Management. Tokyo, 2016.9.27.
- 2) 金 吉晴: 震災関連死を防ぎ、命を守る知識とは?. TBS ラジオ 萩上チキ Session22 電話ゲスト, 2016.4.20.
- 3) 金 吉晴: 避難生活にストレス 多くの学校で休校続く 子供の遊び場必要 学習塾で無料授業も. 日本テレビ news every. VTR 出演, 2016.4.27.
- 4) 金 吉晴: 医療ルネサンス NO.6331 被災者の心を守る 以前の日常回復目指す. 読売新聞朝刊 18 面, 2016.6.17.
- 5) 金 吉晴: 【企画】災害心理支援シンポジウム - 被災地における心理社会的ケアを考える -. 東京, 2016.8.8.
- 6) 金 吉晴: 2016 年 医療心理懇話会 企画, 東京, 2016.11.2-3.
- 7) 金 吉晴: 2016 年 医療心理懇話会 総合司会, 東京, 2016.11.2-3.

## 7. 精神薬理研究部

### I. 研究部の概要

精神薬理研究部では、最終目標を「精神疾患の克服を目指した研究開発を行い、研究成果を目の前の医療に活かす」と定義し、当センターの事業計画における位置づけを明確化している。具体的には、我が国において重要な政策課題となっているうつ病に代表される気分障害や不安障害に焦点を当て、精神薬理学をバックボーンとする研究手法を用い、政策立案に必須となる臨床研究を実施するとともに、非臨床ステージにおける創薬研究を中心とした精神神経疾患の治療介入法の研究開発を行っている。研究成果は、患者、健常成人、実験動物、培養細胞等を対象とした生物学的研究から得られた知見をベッドサイド、ひいては日常臨床へと相互にトランスレーションするための基盤となる。

精神薬理研究部には精神薬理研究室と気分障害研究室の2室が所属している。平成28年度の常勤研究員は部長の山田光彦と精神薬理研究室長の齋藤顕宜の2名であり、気分障害研究室長は山田光彦が兼任した。流動研究員は、中嶋智史、請園正敏の2名、科研費研究員は、山田美佐、外来研究員は川島義高であった。客員研究員は、稲垣正俊（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科講師）、岡淳一郎（東京理科大学薬学部薬理学研究室教授）、長田賢一（聖マリアンナ医科大学神経精神科准教授）、亀井淳三（星薬科大学薬物治療学教室教授）、神庭重信（九州大学大学院医学研究院精神病態医学教授）、白川修一郎（睡眠評価研究機構代表者）、高原 円（福島大学共生システム理工学類准教授）、古川壽亮（京都大学大学院医学研究科教授）、米本直裕（京都大学大学院医学研究科助教）であった。研究生は、安東友子、遠藤 香、大槻露華、後藤玲央、高橋 弘、西岡玄太郎、渡辺恭江、早田暁伸、赤木希衣、実習生は、中武優子であった。科研費研究助手は、松谷真由美、村松浩美であった。

### II. 研究活動

#### 1) 精神薬理研究室による基盤的創薬に関する研究

神経研究所疾病研究第四部に併任し、グルタミン酸仮説、デルタ受容体仮説による病態モデル研究、行動薬理評価のバッテリーの開発と非臨床試験への応用、新規抗うつ薬シーズの探索研究等を実施した。

#### 2) 気分障害研究室による臨床に関する研究

うつ病の最適薬物治療戦略確立のための大型無作為比較試験（2,000 症例規模の実践的多施設共同無作為化比較試験：SUN☺D）、薬物療法抵抗性大うつ病に対するスマートフォン認知行動療法とエスタロプラム併用療法の無作為割付比較試験 FLATT study 等に参画した。

### III. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・市民講座、保健所、地方自治体等における講演会、マスメディア等にて普及啓発活動を行った。
- ・オピオイドδ受容体をターゲットとした抗うつ薬・抗不安薬の創薬研究の成果についてプレスリリースを発出した。

#### (2) 専門教育面における貢献

- ・東京理科大学薬学部より学部生及び大学院生を受け入れ指導した。
- ・日本精神神経薬理学会認定医・指導医・治験登録医、日本臨床薬理学会認定医として、昭和大学、星薬科大学において精神医学の卒前卒後教育活動を実施。（山田光彦）
- ・東京理科大学において精神薬理学の卒前卒後教育活動を実施。（齋藤顕宜）
- ・青山学院大学教育人間学部心理学科「心理検査演習」非常勤講師。（川島義高）

- ・ 明治学院大学心理学部心理学科「神経心理学」非常勤講師。(川島義高)

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 該当なし

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・ 厚生労働省自殺未遂者再企図防止事業評価委員会委員。(山田光彦)
- ・ 大型臨床試験 ACTION-J study (自殺企図の再発防止に対する複合的ケース・マネージメントの効果を検証した多施設共同無作為化比較試験)の成果を元に、厚生労働省は平成 28 年度の診療報酬改定で「自殺企図後の患者に対する継続的な指導の評価」を新設した。

(5) センター内における臨床的活動

- ・ 日本臨床精神神経薬理学会専門医制度の研修施設である NCNP 病院において専門医・指導医として、病院レジデント等への教育／指導を実施。(山田光彦)

(6) その他

- ・ 救急搬送された自殺未遂者の再企図防止についての研究論文が、米国疾病予防管理センター (Centers for Disease Control and Prevention : CDC) が発行した「自殺予防のガイダンス (Preventing Suicide: A Technical Package of Policy, Programs, and Practices, 2017)」に引用された。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Suzuki S, Saitoh A, Ohashi M, Yamada M, Oka J, Yamada M: The infralimbic and prelimbic medial prefrontal cortices have differential functions in the expression of anxiety-like behaviors in mice. Behav Brain Res 304: 120-124, 2016.
- 2) Hirose N, Saitoh A, Kamei J: Involvement of glutamatergic N-methyl-d-aspartate receptors in the expression of increased head-dipping behaviors in the hole-board tests of olfactory bulbectomized mice. Behav Brain Res 312: 313-320, 2016.
- 3) Yamauchi T, Inagaki M, Yonemoto N, Iwasaki M, Akechi T, Sawada N, Iso H, Noda M Tsugane S; JPHC Study Group: History of diabetes and risk of suicide and accidental death in Japan: The Japan Public Health Centre-based Prospective Study, 1990-2012. Diabetes Metab 42(3): 184-191, 2016.
- 4) Gotoh L, Saitoh A, Yamada M, Fujii H, Nagase H, Yamada M: Effects of repeated treatment with a delta opioid receptor agonist KNT-127 on hyperemotionality in olfactory-bulbectomized rats. Behav Brain Res Epub 2016 Dec 1.
- 5) Saitoh A, Akagi K, Oka J, Yamada M: Post-reexposure administration of D-cycloserine facilitates reconsolidation of contextual conditioned fear memory in rats. J Neural Transm(Vienna) Epub 2017 Mar 8.
- 6) Sugiyama A, Saitoh A, Yamada M, Oka J, Yamada M: Administration of riluzole into the basolateral amygdala has an anxiolytic-like effect and enhances recognition memory in the rat. Behav Brain Res Epub 2017 Mar 17.
- 7) Nagao K, Nonogi H, Yonemoto N, Gaieski DF, Ito N, Takayama M, Shirai S, Furuya S, Tani S, Kimura T, Saku K; Japanese Circulation Society With Resuscitation Science Study (JCS-ReSS) Group: Duration of Prehospital Resuscitation Efforts After

- Out-of-Hospital Cardiac Arrest. *Circulation* 133(14): 1386-1396, 2016.
- 8) Nakamura T, Yonemoto N, Nakayama M, Hirano S, Aotani H, Kusuda S, Fujimura M, Tamura M; and The Neonatal Research Network, Japan: Early inhaled steroid use in extremely low birthweight infants: a randomised controlled trial. *Arch Dis Child Fetal Neonatal* Ed 101(6) online ,2016.
  - 9) Kono Y, Yonemoto N, Kusuda S, Hirano S, Iwata O, Tanaka K, Nakazawa J: Developmental assessment of VLBW infants at 18 months of age: A comparison study between KSPD and Bayley III. *Brain Dev* 38(4): 377-385, 2016.
  - 10) Kuraoka M, Kimura E, Nagata T, Okada T, Aoki Y, Tachimori H, Yonemoto N, Imamura M, Takeda S: Serum Osteopontin as a Novel Biomarker for Muscle Regeneration in Duchenne Muscular Dystrophy. *Am J Pathol* 186(5): 1302-1312, 2016.
  - 11) Kada A, Yonemoto N, Yokoyama H, Nonogi H; J-PULSE III Investigators, Hanada H, Hase M, Sakamoto T, Kasaoka S, Kikuti M, Nagao K, Sase K, Kimura K, Sumiyoshi T, Fujimoto K, Hisao O, Shirai S, Kanemitsu M, Hayashi K; J-PULSE III Investigators: Association between accessibility to emergency cardiovascular centers and cardiovascular mortality in Japan. *Int J Qual Health Care* 28(3): 281-287, 2016.
  - 12) Stanaway JD, Shepard DS, Undurraga EA, Halasa YA, Coffeng LE, Brady OJ, Hay SI, Bedi N, Bensenor IM, Castañeda-Orjuela CA, Chuang TW, Gibney KB, Memish ZA, Rafay A, Ukwaja KN, Yonemoto N, Murray CJ: The global burden of dengue: an analysis from the Global Burden of Disease Study 2013. *Lancet Infect Dis* 16(6): 712-723, 2016.
  - 13) Amino M, Inokuchi S, Yoshioka K, Nakagawa Y, Ikari Y, Funakoshi H, Hayakawa K, Matsuzaki M, Sakurai A, Tahara Y, Yonemoto N, Nagao K, Yaguchi A, Morimura N; SOS-KANTO 2012 study group: Does Antiarrhythmic Drug During Cardiopulmonary Resuscitation Improve the One-month Survival: The SOS-KANTO 2012 Study. *J Cardiovasc Pharmacol* 68(1): 58-66, 2016.
  - 14) Nagatsuka K, Miyata S, Kada A, Kawamura A, Nakagawara J, Furui E, Takiuchi S, Taomoto K, Kario K, Uchiyama S, Saito K, Nagao T, Kitagawa K, Hosomi N, Tanaka K, Kaikita K, Katayama Y, Abumiya T, Nakane H, Wada H, Hattori A, Kimura K, Isshiki T, Nishikawa M, Yamawaki T, Yonemoto N, Okada H, Ogawa H, Minematsu K, Miyata T: Cardiovascular events occur independently of high on-aspirin platelet reactivity and residual COX-1 activity in stable cardiovascular patients. *Thromb Haemost* 116(2): 356-368, 2016.
  - 15) Matsumura T, Saito T, Yonemoto N, Nakamori M, Sugiura T, Nakamori A, Fujimura H, Sakoda S: Renal dysfunction can be a common complication in patients with myotonic dystrophy 1. *J Neurol Sci* 368: 266-271, 2016.
  - 16) Takeuchi F, Komaki H, Nakamura H, Yonemoto N, Kashiwabara K, Kimura E, Takeda S: Trends in steroid therapy for Duchenne muscular dystrophy in Japan. *Muscle Nerve* 54(4): 673-680, 2016.
  - 17) Forouzanfar MH, Liu P, Roth GA, Ng M, Biryukov S, Marczak L, Alexander L, Estep K, Hassen Abate K, Akinyemiju TF, Ali R, Alvis-Guzman N, Azzopardi P, Banerjee A, Barnighausen T, Basu A, Bekele T, Bennett DA, Biadgilign S, Catalá-López F, Feigin VL, Fernandes JC, Fischer F, Gebru AA, Gona P, Gupta R, Hankey GJ, Jonas JB, Judd SE, Khang YH, Khosravi A, Kim YJ, Kimokoti RW, Kokubo Y, Kolte D, Lopez A, Lotufo PA, Malekzadeh R, Melaku YA, Mensah GA, Misganaw A, Mokdad AH, Moran AE, Nawaz H, Neal B, Ngalesoni FN, Ohkubo T, Pourmalek F, Rafay A, Rai RK, Rojas-Rueda D, Sampson UK, Santos IS, Sawhney M, Schutte AE, Sepanlou SG, Shifa GT, Shiue I, Tedla

- BA, Thrift AG, Tonelli M, Truelsen T, Tsilimparis N, Ukwaja KN, Uthman OA, Vasankari T, Venketasubramanian N, Vlassov VV, Vos T, Westerman R, Yan LL, Yano Y, Yonemoto N, Zaki ME, Murray CJ: Global Burden of Hypertension and Systolic Blood Pressure of at Least 110 to 115 mm Hg, 1990-2015. *JAMA* 317(2): 165-182, 2017.
- 18) Saito T, Kawai M, Kimura E, Ogata K, Takahashi T, Kobayashi M, Takada H, Kuru S, Mikata T, Matsumura T, Yonemoto N, Fujimura H, Sakoda S: Study of Duchenne muscular dystrophy long-term survivors aged 40 years and older living in specialized institutions in Japan. *Neuromuscul Disord* 27(2): 107-114, 2017.
- 19) Hagiwara S, Oshima K, Aoki M, Miyazaki D, Sakurai A, Tahara Y, Nagao K, Yonemoto N, Yaguchi A, Morimura N; SOS-KANTO 2012 Study Group: Does the number of emergency medical technicians affect the neurological outcome of patients with out-of-hospital cardiac arrest? *Am J Emerg Med* 35(3): 391-396, 2017.
- 20) 小林道雄, 石崎雅俊, 足立克仁, 米本直裕, 松村 剛, 豊島 至, 木村 円: ジストロフィン異常症保因者の遺伝カウンセリング・健康管理の実施に関する調査. *臨床神経学* 56(6): 407-412, 2016.

## (2) 総説

- 1) Saitoh A, Nagase H: Delta Opioid Receptor (DOR) Ligands and Pharmacology: Development of Indolo- and Quinolinomorphinan Derivatives Based on the Message-Address Concept. *Handb Exp Pharmacol*. 1-17, 2016.
- 2) 斎藤顕宜, 山田光彦: オピオイド受容体ターゲットとした向精神薬の可能性. *精神科* 30(1): 95-99, 2017.
- 3) 川島義高, 稲垣正俊, 米本直裕, 山田光彦: 救急医療機関における自殺未遂者ケアの現状と今後の課題. *総合病院精神医学* 印刷中, 2017.
- 4) 太刀川弘和, 川島義高, 小田原俊成, 衛藤暢明, 河西千秋, 山田光彦: 大学生を対象とした日本の自殺予防研究に関する系統的レビュー. *CAMPUS HEALTH* 印刷中, 2017.
- 5) 中嶋智史: ケタミンの抗うつ効果は NMDA 受容体拮抗作用によって生じるか? *ファルマシア* 53(3): 265, 2017.

## (3) 著書

- 1) 山田光彦 (分担執筆): *精神科処方ノート 5版 電子版*. 中外医学社, 東京, 2016.
- 2) 川島義高: *救急医療における心理的支援*. 公認心理士必携 精神医療・臨床心理の知識と技法. 下山晴彦, 中嶋義文, 鈴木伸一, 花村温子, 滝沢 龍 編, 医学書院, 東京, 2016.

## (4) 研究報告書

- ・該当なし

## (5) 翻訳

- ・該当なし

## (6) その他

- 1) 長瀬 博, 藤井秀明, 斎藤顕宜, 中田恵理子, 廣瀬雅朗, 大井 勲, 林田康平: モルヒナン誘導体 (特願 2015-54079)
- 2) 長瀬 博, 藤井秀明, 斎藤顕宜, 中田恵理子, 廣瀬雅朗, 大井 勲, 林田康平: モルヒナン誘導体のオピオイド  $\delta$  受容体アゴニスト関連疾患の治療のための使用 (特願 2016-156049)

**B. 学会・研究会における発表**

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) Yamada M: Brief overview: Suicide and Emergency Medicine-Challenges for the future-. The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention, Tokyo, 2016.5.18-21.
  - 2) Kawashima Y, Yonemoto N, Inagaki M, Yamada M: Psychiatric disorders in suicide attempters admitted to emergency department in Japan: a systematic review and meta-analysis. The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention, Tokyo, 2016.5.18-21.
  - 3) Inagaki M, Kawashima Y, Yonemoto N, Yamada M: Effective interventions for suicide attempters after discharge from emergency unit: a meta-analysis of randomized controlled trials. The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention, Tokyo, 2016.5.18-21.
  - 4) Tachikawa H, Kawashima Y, Yamada M: Primary and secondary prevention of suicide in college and university students. The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention, Tokyo, 2016.5.18-21.
  - 5) 齋藤顕宜, 山田光彦:  $\delta$  オピオイド受容体をターゲットとした新規向精神薬の創薬. 第 134 回日本薬理学会関東部会, 栃木, 2016.7.9.
  - 6) 川島義高, 太刀川弘和, 小田原俊成, 衛藤暢明, 河西千秋, 山田光彦: 大学生を対象とした自殺予防に関する国内外の取り組みの現況—系統的レビュー—. 第 13 回日本うつ病学会総会, 愛知, 2016.8.5-6.
  - 7) 川島義高, 米本直裕, 河西千秋, 山田光彦: 自殺企図後のケース・マネジメント: これまでの介入研究から得られたこと. 第 29 回日本サイコオンコロジー学会総会, 北海道, 2016.9.23-24.
  - 8) 山田光彦: 発達障害の臨床と研究. 第 135 回日本薬理学会関東部会, 静岡, 2016.10.8.
  - 9) 齋藤顕宜, 山田光彦: オピオイド  $\delta$  受容体作動薬の臨床開発を目指して. 平成 28 年度生理学研究所研究会「神経回路研究と精神疾患研究の連合による情動機構解明」. 愛知, 2016.10.17-18.
  - 10) 山田光彦, 赤木希衣, 齋藤顕宜, 山田美佐, 岡淳一郎: 恐怖記憶の消去学習と再固定化を操作する新しい不安障害治療法の提案: 理想的な曝露療法併用薬の開発を目指して. 第 90 回日本薬理学会年会, 長崎, 2017.3.15-17.
  - 11) 古川壽亮, 加藤 正, 萬谷昭夫, 倉田健一, 窪内 肇, 広田 進, 佐藤博俊, 茅野 分, 杉下和行, 伊藤かほり, SUN☺D 運営委員会: 精神医学領域でメガトラリアルを実施するために: SUN☺D 臨床試験の経験から. 第 112 回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.2-4.
- (2) 一般演題
- 1) Kodaka M, Takai M, Hikitsuchi E, Okada S, Watanabe Y, Fukushima K, Yamada M, Inagaki M, Takeshima T, Matsumoto T: Feasibility and preliminary effectiveness of a new suicide education program for social work students in Japan. The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention, Tokyo, 2016.5.18-21.
  - 2) Yonemoto N, Inagaki M, Kawashima Y, Yamada M: Prevalence of suicidal behaviors among adolescence and young adults on a health claim database in Japan. The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention, Tokyo, 2016.5.18-21.
  - 3) Saitoh A, Nakata E, Gotoh L, Hirose M, Sakai J, Komatsu T, Fujii H, Yamada M, Nagase

- H, Yamakawa T : A novel  $\delta$  opioid receptor agonist NC-2800 produces anxiolytic-like and antidepressant-like effects in animal models. 2016 Neuroscience, San Diego, 2016.11.12-16.
- 4) Sudo R, Ukezono M, Hara Y, Lauwereyns J: Extreme situations affect human behavior: A study to shed light on some aspects of human perception towards extremes. 31st International Congress of Psychology, Kanagawa, 2016.7.24-29.
  - 5) Suzuki Y, Ukezono M: The study of factor structure of the Japanese version of Multicultural Personality Questionnaire: MPQ Short Form-from the point of view of cultural and social background- Poster exhibition. 31st International Congress of Psychology, Kanagawa, 2016.7.24-29.
  - 6) Nakashima S, Mugitani R, Ukezono M, Hayashi A: Infant recognition memory for unfamiliar faces with emotional expressions. The Budapest CEU Conference on Cognitive Development 2017, Budapest, 2017.1.5-7.
  - 7) Ukezono M, Takano Y: An experimental task to examine the mirror system in rodents. The 2nd International Convention of Psychological Science, Vienna, 2017.3.23-25.
  - 8) 齋藤顕宜, 鈴木聡史, 早田暁伸, 赤木希衣, 山田美佐, 岡淳一郎, 山田光彦: マウスの不安様行動における内側前頭前野の役割を脳内微小透析法で探る. 第 55 回日本生体医工学会大会, 富山, 2016.4.26-28.
  - 9) 川島義高, 大塚耕太郎, 安藤友子, 山田光彦: 救急医療機関を拠点とした自殺未遂者ケアとその人材育成プログラムの現状. 第 19 回日本臨床救急医学会総会・学術集会, 福島, 2016.5.13-14.
  - 10) 齋藤顕宜, 鈴木聡史, 早田暁伸, 大橋正誠, 山田美佐, 長瀬 博, 岡淳一郎, 山田光彦: 内側前頭前野前辺縁皮質領域のオピオイド  $\delta$  受容体は扁桃体へ投射しているグルタミン酸神経伝達を抑制し不安様行動を改善する. 第 46 回日本神経精神薬理学会年会, ソウル, 2016.7.2-3.
  - 11) 後藤玲央, 山田美佐, 齋藤顕宜, 服部功太郎, 功刀 浩, 樋口輝彦, 川寄弘詔, 山田光彦: うつ病バイオマーカーとしてのリゾホスファチジン酸の可能性. 第 13 回日本うつ病学会総会, 愛知, 2016.8.5-6.
  - 12) 齋藤顕宜, 後藤玲央, 山田美佐, 藤井秀明, 長瀬 博, 山田光彦: 嗅球摘出ラットの情動過多反応に及ぼす  $\delta$  オピオイド受容体作動薬 KNT-127 連続投与の影響. 第 36 回鎮痛薬・オピオイドペプチドシンポジウム, 北海道, 2016.8.19-20.
  - 13) 齋藤顕宜, 鈴木聡史, 早田暁伸, 大橋正誠, 山田美佐, 長瀬 博, 岡淳一郎, 山田光彦: オピオイド  $\delta$  受容体作動薬は内側前頭前野前辺縁皮質領域の亢進したグルタミン酸神経伝達を抑制することで不安様行動を改善する. 第 3 回包括的緩和医療科学学術研究会・第 4 回 Tokyo 疼痛緩和次世代研究会 合同研究会, 東京, 2016.8.28.
  - 14) 後藤玲央, 山田美佐, 橋本恵理, 鶴飼 渉, 山田光彦: Lysophosphatidic acid はラット C6 グリオーマのネクロシスを誘導し生存率を低下させる. 第 38 回日本生物学的精神医学会・第 59 回日本神経化学学会大会, 福岡, 2016.9.8-10.
  - 15) 太刀川弘和, 川島義高, 小田原俊成, 衛藤暢明, 河西千秋, 山田光彦: 大学生を対象とした国内外の自殺予防研究に関する系統的レビュー. 第 54 回全国大学保健管理研究集会, 大阪, 2016.10.5-6.
  - 16) 赤木希衣, 山田美佐, 齋藤顕宜, 岡淳一郎, 山田光彦: Riluzole はラットの恐怖記憶消去学習を促進するが再固定化は阻害する. 第 135 回日本薬理学会関東部会, 静岡, 2016.10.8.
  - 17) 早田暁伸, 齋藤顕宜, 後藤玲央, 鈴木聡史, 岡淳一郎, 山田光彦: 嗅球摘出ラットの内側前頭前野及び海馬におけるグルタミン酸及び GABA 含有量の変化について. 第 135 回日本薬理学会関東部会, 静岡, 2016.10.8.



- 18) 齋藤顕宜, 中嶋智史, 山田光彦: オピオイドδ受容体作動薬は新しい向精神薬となるか? 第35回躁うつ病の薬理・生化学的研究懇話会, 山口, 2016.11.4-5.
- 19) 後藤玲央, 山田美佐, 齋藤顕宜, 服部功太郎, 功刀 浩, 樋口輝彦, 川寄弘詔, 山田光彦: 脳脊髄中のリゾホスファチジン酸はうつ病バイオマーカーとなり得るか. 第35回躁うつ病の薬理・生化学的研究懇話会, 山口, 2016.11.4-5.
- 20) 赤木希衣, 齋藤顕宜, 岡淳一郎, 山田光彦: D-cycloserine はラットの恐怖記憶再固定化を促進する. 第35回躁うつ病の薬理・生化学的研究懇話会, 山口, 2016.11.4-5.
- 21) 川島義高, 山田光彦: 医療領域の心理職を対象とした心理職協働スキル評価尺度の開発. 第29回日本総合病院精神医学会総会, 東京, 2016.11.25-26.
- 22) 早田暁伸, 齋藤顕宜, 鈴木聡史, 山田美佐, 岡淳一郎, 長瀬 博, 山田光彦: マウス内側前頭前野前辺縁皮質領域のオピオイドδ受容体はグルタミン酸神経伝達を抑制し不安様行動を改善する. 第27回 マイクロダイアリシス研究会, 東京, 2016.12.17.
- 23) 齋藤顕宜, 鈴木聡史, 大橋正誠, 早田暁伸, 山田美佐, 岡淳一郎, 長瀬 博, 山田光彦: 内側前頭前野前辺縁皮質でオピオイドδ受容体作動薬 KNT-127 はマウスのベラトリン誘発性不安様行動を減弱する. 第90回日本薬理学会年会, 長崎, 2017.3.15-17.
- 24) 齋藤顕宜: これまでにない作用プロファイルを有する抗不安薬の開発戦略. 2016年医療心理懇話会, 東京, 2016.11.2-3.
- 25) 大高靖史, 成重竜一郎, 川島義高, 藤本泰樹, 大久保善朗: 重症自殺未遂者に対する自殺行動の要因調査に関する報告. 第40回日本自殺予防学会総会, 東京, 2016.5.18-21.
- 26) 川島義高: 医療領域における心理職協働スキル評価尺度の探索—系統的レビュー—. 日本心理臨床学会第35回大会, 神奈川, 2016.9.4-7.
- 27) 大高靖史, 成重竜一郎, 藤本泰樹, 石田留生, 川島義高, 大久保善朗: 自殺未遂者の自殺行動に影響を与える要因に関する調査. 第36回 日本社会精神医学会, 東京, 2017.3.3-4.

### (3) 研究報告会

- 1) 齋藤顕宜, 山田光彦: カチノン系化合物の有害作用予測. 平成28年度研究成果報告会「28-1 危険ドラッグの有害作用発現機序の解明と評価技術開発に関する研究」, 東京, 2016.12.13.
- 2) 齋藤顕宜, 早田暁伸, 鈴木聡史, 山田美佐, 大橋正誠, 岡淳一郎, 長瀬 博, 山田光彦: マウス内側前頭前野前辺縁皮質領域におけるオピオイドδ受容体作動薬 KNT-127 の局所灌流はベラトリン誘発不安様行動を抑制する. 平成28年度 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 研究報告会, 東京, 2017.2.20.
- 3) 赤木希衣, 山田美佐, 齋藤顕宜, 岡淳一郎, 山田光彦: 理想的な曝露療法併用薬の開発を目指して-Riluzole はラットの恐怖記憶をどう変容させるか?. 平成28年度 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 研究報告会, 東京, 2017.2.20.
- 4) 山田大輔, 竹内絵里, 鈴木聡史, 齋藤顕宜, 山田光彦, 中村泰子, 和田圭司, 関口正幸: ω3系脂肪酸の摂取はうつ様行動を減弱する-脳内ドパミン系とカンナビノイド系の関与-. 第38回 国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 研究所発表会, 東京, 2017.2.28-3.1.

### (4) その他

- ・該当なし

### C. 講演

- 1) 山田光彦: エビデンスに基づいたうつ病の薬物療法の開始から終了まで. 横浜市北部精神医療懇話会. 昭和大学 横浜市北部病院, 神奈川, 2016.5.26.
- 2) 山田光彦: 精神疾患を背景にもつ自殺未遂者のケア: 再企図予防への挑戦!. 医療法人社団慶竹会 ほづみクリニック, 東京, 2016.9.26.

- 3) 川島義高：自殺のリスクが高い生徒・学生・患者さんへ支援者は何ができるのか？：エビデンスに基づいた安全で効果的な自殺対策を考える。明治学院大学，東京，2016.12.10.

#### D. 学会活動

##### (1) 学会主催

- ・該当なし

##### (2) 学会役員

- 1) 山田光彦：日本薬理学会 評議員
- 2) 山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会 評議員
- 3) 山田光彦：日本うつ病学会 評議員
- 4) 山田光彦：日本神経精神薬理学会 薬事委員会委員
- 5) 山田光彦：Mayo Neuroscience Forum 地区幹事
- 6) 山田光彦：躁うつ病の薬理生化学的研究懇話会 幹事
- 7) 山田光彦：Japanese Genetics Initiative for Drug Abuse：JGIDA group 幹事
- 8) 斎藤顕宜：日本薬理学会 評議員
- 9) 斎藤顕宜：日本神経精神薬理学会 先端研究推進基盤構築タスクフォース委員
- 10) 斎藤顕宜：日本薬学会 トピックス委員
- 11) 斎藤顕宜：鎮痛薬オピオイドペプチド研究会 世話人
- 12) 斎藤顕宜：第 26 回神経行動薬理若手研究者の集い 世話人
- 13) 斎藤顕宜：日本学術振興会科学研究費委員会 専門委員
- 14) 川島義高：国際自殺予防学会アジア・太平洋地域大会・日本自殺予防学会 実行委員

##### (3) 座長

- 1) Yamada M：Suicide and Emergency Medicine: Challenges for the future. 第 7 回国際自殺予防学会アジア・太平洋地域(IASP) 第 40 回日本自殺予防学会総会(JASP)，東京，2016.5.18-21.
- 2) Yamada M：Intervention for self-harm/suicide attempt. 第 7 回国際自殺予防学会アジア・太平洋地域(IASP) 第 40 回日本自殺予防学会総会(JASP)，東京，2016.5.18-21.
- 3) 山田光彦：発達障害の臨床と研究. 第 135 回日本薬理学会関東部会，静岡，2016.10.8.
- 4) 斎藤顕宜：シンポジウム「ストレス性精神疾患の克服に向けた創薬・育薬研究」オピオイド  $\delta$  受容体をターゲットとした新規向精神薬開発の可能性. 第 134 回日本薬理学会関東部会，栃木，2016.7.9.

##### (4) 学会誌編集委員等

- 1) 山田光彦：分子精神医学 編集同人
- 2) 山田光彦：日本臨床薬理学会 認定医
- 3) 山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会 専門医，指導医，治験登録医
- 4) 山田光彦：日本精神神経学会 専門医

#### E. 研修

##### (1) 研修企画

- 1) 厚生労働省事業による「救命救急センターに搬送された自殺未遂者の自殺企図の再発防止に対する複合的ケース・マネジメントに関する研修会」，第 1 回北日本地区研修会，札幌，2016.6.10-11.
- 2) 第 2 回関東地区研修会，東京，2016.7.30-31.

- 3) 第3回九州地区研修会, 福岡, 2016.8.27-28.
- 4) 第4回関西地区研修会, 大阪, 2016.10.1-2.
- 5) 第5回北日本地区研修会, 盛岡, 2016.10.22-23.
- 6) 第6回九州地区研修会, 北九州, 2016.11.12-13.
- 7) 第7回関東地区研修会, 東京, 2016.11.19-20.
- 8) 第8回関西地区研修会, 奈良, 2016.12.24-25.
- 9) 第9回九州地区研修会, 熊本, 2017.1.7-8.
- 10) 第10回関西地区研修会, 大阪, 2017.1.28-29.

(2) 研修会講師

- 1) 川島義高: 複雑事例を通して学ぶ自殺予防のエッセンシャル. 日本うつ病学会主催, 愛知, 2016.8.5.
- 2) 川島義高: 院内自殺予防と事後対応研修会. 東京精神科病院協会主催, 東京, 2016.11.10.

F. その他

- ・該当なし

## 8. 社会精神保健研究部

### I. 研究部の概要

社会精神保健研究部は昭和27年の国立精神衛生研究所創立時の5部の1つとしてスタートし、昭和61年の国立精神・神経センター統合の際に3研究室を有する社会精神保健部となり、平成22年に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部となった。当研究部では、すべての国民が質の高い精神科医療をどの医療機関でも受けることができるように、医療機関の評価と医療の質の均てん化に関する多施設臨床研究を、高度専門医療センターにおける研究として進めている。具体的には、研究に関心のある臨床家が参画して、保健医療サービス研究の手法を用いて、身体疾患と精神疾患との融合領域研究、管理研究（医療の質に関する研究）および政策研究を実施している。平成24年度から3年間国立高度専門医療研究センターとの共同で実施する「身体疾患患者へのメンタルケアモデル開発に関するナショナルプロジェクト」を実施、現在はフォローアップフェーズである。社会精神保健研究部の所掌事項は「精神疾患と精神保健に関する社会文化的要因との関係」に関する調査及び研究を行うことである。

当研究部には、社会福祉研究室（小林清香 室長：平成28年7月まで、羽澄 恵 研究員：平成29年1月から）、社会文化研究室（伊藤弘人 部長併任）、家族・地域研究室（堀口寿広 室長）がある。また流動研究員（橋本 塁、羽澄 恵：平成28年12月まで）が当研究部に配属され、研究に従事してきた。なお臨床での問題意識からの多施設臨床研究を実施すべく、精神科・循環器科・内科医療に従事する専門家等が当研究部の研究に参画している（阿部裕二、庵地雄太、伊藤 緑、大塚豪士、大森由実、岡島純子、上村智子、河口朋子、杉浦伸一、八田耕太郎、平田豊明、堀川直史、宮地元彦、村松公美子、安井博規、和田 健）。

### II. 研究活動

#### 1) 政策研究身体疾患と精神疾患に関する研究

- 循環器疾患：国立循環器病研究センター、久留米大学、名古屋大学、東京女子医科大学、早稲田大学、日本循環器心身医学会の専門家とともに、循環器疾患と精神疾患に関する研究計画の策定及び研究の実施（内村直尚、水野杏一、志賀 剛、鈴木 豪、鈴木伸一、橋本 塁、大森由実、小林清香、伊藤弘人）。
- 糖尿病：国立国際医療研究センター、国立病院機構京都医療センター、京都大学、久留米大学及び糖尿病専門医療機関の専門家とともに、糖尿病と精神疾患に関する研究の実施（野田光彦、徳永雄一郎、内村直尚、佐藤俊哉、橋本 塁、岡島純子、大森由実、小林清香、羽澄 恵、伊藤弘人）。

#### 2) 政策研究

- 精神科重症入院患者のクリニカルパスと地域連携に関する研究（堀口寿広、伊藤弘人）。
- 障害者の権利擁護に関する研究（堀口寿広）。

### III. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 保健活動の共通のゴール（目標）とは何か久留米市保健活動研修会。
- ・ 自閉症カンファレンス NIPPON2016（開催日：8月20-21日）において、医療における合理的配慮に関して講演を行うとともに、別途会場にて研究班作成のガイドライン等の展示をおこなった（堀口寿広）。

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 韓国、シンガポールの医療関係者への病院紹介と研究プロジェクトに関する意見交換を行った (伊藤弘人).
- ・ クリティカルパスに関して公益社団法人日本精神科病院協会主催の通信教育講座スクーリング講師として専門看護師等を対象とした講義を実施 (伊藤弘人, 堀口寿広).
- ・ 不眠症の認知行動療法初学者に対し不眠症の認知行動療法の実践方法について教育した (羽澄 恵).
- ・ 国立保健医療科学院における精神保健活動平成 28 年度専門課程養成訓練 (伊藤弘人).

(3) 精研の研修の主催と協力

なし

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・ APEC メンタルヘルスプロジェクトへの参画 (伊藤弘人).
- ・ 厚生労働省「これからの精神保健医療福祉のあり方に関する検討会」構成員 (伊藤弘人).
- ・ 厚生労働省「長期入院精神障害者の地域移行に向けた病院の構造改革の推進のための具体的方策のあり方に関する研究」検討委員 (伊藤弘人).
- ・ 国立研究開発法人日本医療研究開発機構「認知症研究のための国際連携体制の整備に関する調査研究事業」評価委員会委員 (伊藤弘人).

(5) センター内における臨床的活動

- ・ 精神科病棟における臨床 (橋本 壘).

(6) その他

なし

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Satoh-Asahara N, Ito H, Akashi T, Yamakage H, Kotani K, Nagata D, Nakagome K, Noda M: A Patient-Held Medical Record Integrating Depression Care into Diabetes Care. Japanese Clinical Medicine, 7: 19-22, 2016.
- 2) Sato M, Noda T, Sugiyama N, Yoshihama F, Miyake M, Ito H: Characteristics of aggression among psychiatric inpatients by ward type in Japan: Using the Staff Observation Aggression Scale-Revised (SOAS-R). International Journal of Mental Health Nursing, 2016.
- 3) Ohmori Y, Ito H, Morita A, Deura K, Miyachi M; Saku Cohort Study Group: Associations between depression and unhealthy behaviours related to metabolic syndrome: a cross sectional study. Asia Pacific Journal of Clinical Nutrition, 26(1): 130-140, 2017.
- 4) Ishii M, Okumura Y, Sugiyama N, Hasegawa H, Noda T, Hirayasu Y, Ito H: Feasibility and efficacy of shared decision making for first-admission schizophrenia: a randomized clinical trial. BMC Psychiatry, 17(52): 1-7, 2017.
- 5) 千葉広毅, 伊藤道哉, 池崎澄江, 伊藤弘人: 日本医療・病院管理学誌における学術用語の動向—探索的および計量的分析—. 日本医療・病院管理学会誌, 53(4): 227-237, 2016.
- 6) 阿部裕二, 大森由実, 西宮弘之, 伊藤弘人: 精神科領域における自記式栄養管理ツールの開

発. 日本精神科病院協会雑誌, 35(11): 73-77, 2016.

## (2) 総説

- 1) 伊藤弘人: 精神保健医療における地域連携促進に向けた改革. 公衆衛生, 80(11): 797-803, 2016.
- 2) 庵地雄太, 水谷和郎, 荒木祥子, 上羽康之, 大石醒悟, 竹原 歩, 辻井由紀, 北井 愛, 熊尾良子, 山根崇史, 松石邦隆, 村井亮介, 北井 豪, 仲村直子, 堂本康治, 山根光量, 民田浩一, 高橋恭子, 安井博規, 見野耕一, 井上信孝, 平田健一, 小林清香, 安齊俊久, 伊藤弘人: 心臓リハビリテーションを基礎とした心臓病患者へのメンタルケアモデル開発. 日本心臓リハビリテーション学会誌, 21(1・2・3): 15-20, 2016.
- 3) 堀口寿広: スクールカウンセラー, 発達障害者支援センターとの連携. 小児内科, 48(5): 722-726, 2016.
- 4) 堀口寿広: 保育, 教育現場における障害児虐待を防止する対策の現状と, 「保護者から誤解されかねない対応」について考える. 小児保健研究, 75(6): 711-714, 2016.

## (3) 著書

- 1) Ito H: The Toyota Way. Quality Improvement in Behavioral Health. Springer, pp87-96, 2016.
- 2) 伊藤弘人: 身体疾患に伴ううつ病の身体予後への影響. 最新医学, 最新医学社, pp23-28, 2016.
- 3) 伊藤弘人: 慢性期医療に必要な認知症の知識とケア. 一般社団法人日本慢性期医療協会編: 総合診療医テキスト第2巻, 中央法規, pp55-65, 2016.
- 4) 伊藤弘人: 医療とは 制度としての医療—保健医療制度. 下山晴彦, 中島義文編: 精神医療・臨床心理の知識と技法, 医学書院, pp4-6, 2016.
- 5) 伊藤弘人: 精神科医療と国民経済. 精神保健福祉白書編集委員会編: 精神保健福祉白書, 中央法規, p166, 2016.
- 6) 堀口寿広: 医療における発達障害者(児)への合理的配慮とは. 自閉症カンファレンス NIPPON 実行委員会・朝日新聞厚生文化事業団編: 自閉症カンファレンス NIPPON2016, 2016, pp172-175.
- 7) 堀口寿広: 障害年金・生活保護. 下山晴彦, 中嶋義文編: 公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法, 医学書院, 東京, pp167-168, 2016.

## (4) 研究報告書

- 1) 伊藤弘人: 医療の場における自殺総合対策の推進に資する政策パッケージ. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))「学術的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究(研究代表者: 本橋 豊)」平成28年度総括・分担研究報告書. pp115-118, 2016.
- 2) 秋山千枝子, 大石田久宗, 堀口寿広, 伊藤幸寛, 竹内富士夫: 重症心身障害児が保育所を利用することの費用対効果の分析. 公益財団法人 大同生命厚生事業団 平成27年度地域保健福祉研究助成報告書, 2016, pp45-49.

## (5) 翻訳

なし

## (6) その他

- 1) 堀口寿広：合理的配慮の事例集を作成。シルバー新報 1205 号，2016.4.8.

## B. 学会・研究会における発表

### (1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

- 1) 伊藤弘人：病院に求められる地域における医療拠点機能の強化策。平成 28 年度医療・病院管理研究会。東京，2016.6.10.
- 2) 伊藤弘人：精神科チーム医療を考える～多職種連携～。第 4 回日本精神科医学会学術大会。沖縄，2016.10.9.
- 3) 堀口寿広：保育，教育現場における障害児虐待を防止する対策の現状と，「保護者から誤解されかねない対応」について考える。第 63 回日本小児保健協会学術集会。埼玉，2016.6.23-25.

### (2) 一般演題

- 1) 伊藤弘人：医療政策の動向からみたせん妄・認知症への取り組み：日本心臓リハビリテーション学会への期待。第 22 回日本心臓リハビリテーション学会学術集会。東京，2016.7.17.
- 2) 橋本 壘，小林清香，羽澄 恵，浅原哲子，野田光彦，佐藤俊哉，伊藤弘人：糖尿病とうつ病（DAD）研究グループ：双極性障害の合併による 2 型糖尿病における血糖コントロールおよび腎機能への影響。第 31 回日本糖尿病合併症学会。宮城，2016.10.7-8.
- 3) 齊藤正樹，板本孝治，鏡谷武雄，大西浩文，浅川直也，榊原 守，橋本暁佳，成澤弘美，下濱 俊，三國信啓，三浦哲嗣，寶金清博，村松公美子，伊藤弘人：ノートを使ったうつの検出とケアの可能性－脳卒中・急性心筋梗塞あんしん連携ノートを用いたうつの検出－。第 73 回日本循環器心身医学会学術総会。東京，2016.11.3.
- 4) 堀口寿広：市町村担当課が把握する管内保育所等における障害者虐待防止法への対応状況。第 63 回日本小児保健協会学術集会。埼玉，2016.6.23-25.
- 5) 羽澄 恵，中島 俊，岡島 義，越智萌子，井上雄一：不眠障害患者の不眠の重症度と関連する心理学的特性の検討。第 41 回日本睡眠学会。東京，2016.7.7.
- 6) 羽澄 恵，伊藤弘人：地域医師会と構築する地域包括医療モデル。第 56 回全国国保地域医療学会。山形，2016.10.7.

### (3) 研究報告会

- 1) 橋本 壘，小林清香，羽澄 恵，浅原哲子，野田光彦，佐藤俊哉，伊藤弘人，糖尿病とうつ病（DAD）研究グループ：双極性障害の合併による 2 型糖尿病における血糖コントロールおよび腎機能への影響。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 28 年度研究報告会。東京，2017.2.20.
- 2) 堀口寿広，秋山千枝子，橋本創一：インクルーシブ保育に対する意識調査と「医療的ケア児」への並行保育の実施。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 28 年度研究報告会。東京，2017.2.20.

### (4) その他

なし

## C. 講演

- 1) 堀口寿広：医療における発達障害者（児）への合理的配慮とは。自閉症カンファレンス NIPPON2016。東京，2016.8.20-21.

**D. 学会活動**

(1) 学会主催

なし

(2) 学会役員

- 1) 伊藤弘人：一般社団法人 日本・医療病院管理学会 理事
- 2) 伊藤弘人：一般社団法人 日本・医療病院管理学会 評議員
- 3) 伊藤弘人：日本循環器心身医学会 理事
- 4) 堀口寿広：第63回日本小児保健協会学術集会 プログラム委員

(3) 座長

- 1) 峯 真人, 堀口寿広：いろいろな場面から見た子ども虐待防止対策. 第63回日本小児保健協会学術集会. 埼玉, 2016.6.23-25.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 堀口寿広：公益社団法人日本小児保健協会「小児保健研究」誌 編集委員.
- 2) 堀口寿広：「チャイルドヘルス」誌 編集協力員.

**E. 研修**

(1) 研修企画

なし

(2) 研修会講師

- 1) 堀口寿広, 伊藤弘人：クリティカルパスに関して. 公益社団法人日本精神科病院協会通信教育講座上級コース. 大阪, 2016.7.5.

**F. その他**

- 1) 伊藤弘人：日本医療機能評価機構 評価調査者
- 2) 伊藤弘人：これからの精神保健医療福祉のあり方に関する検討会 構成員
- 3) 伊藤弘人：公益社団法人 医療病院管理研究協会 理事



## 9. 精神生理研究部

### I. 研究部の概要

研究部および研究室の研究目的

精神生理研究部では、睡眠、意識、認知、感情、意欲等の精神活動を脳科学的にとらえ、その制御メカニズムを明らかにし、これら生理機能の調節障害に基づく各種の睡眠・覚醒障害、気分障害、認知症、神経症・心身症などの病態と治療法を解明することを目的としている。そのために、精神生理学、時間生物学、分子生物学、神経内分泌学、脳機能画像技術などの手法を用いて、学際的な研究を進めている。

部長 1 名、室長 2 名に加え、流動研究員 2 名、科研費研究員 2 名、協力研究員 2 名が研究に携わった。これら研究員と国立精神・神経医療研究センター内外の研究・治療協力施設の客員研究員および協力研究者との連携のもとに研究を進めている。

研究者の構成

部長：三島和夫。精神生理機能研究室長：肥田昌子。臨床病態生理研究室長：北村真吾。流動研究員：綾部直子、勝沼るり（5/1～）。科研費研究員：勝沼るり（～4/30）、中崎恭子（～5/31）、吉村道孝（10/1～）。

協力研究員：阿部又一郎、梶 達彦。併任研究員：亀井雄一（センター病院）。客員研究員：樋口重和（九州大学）、井上雄一（医療法人社団絹和会）、内山 真（日本大学）、兼板佳孝（大分大学）、大川匡子（睡眠総合ケアクリニック代々木）、海老澤 尚（横浜クリニック）、本多 真（東京都医学総合研究所）、上田泰己（東京大学）、池田正明（埼玉医科大学）、程 肇（金沢大学）、山寺 亘（東京慈恵会医科大学）、熊野宏明（早稲田大学）、岩越美恵（神戸常磐大学）、高橋一志（東京女子医科大学）、阿部高志（産業技術総合研究所）、守口善也（群馬大学）、福水道郎（東京都立府中療育センター）、神谷之康（京都大学）。そのほか外来研究員 1 名、科研費研究補助員 2 名、科研費研究助手 2 名、センター研究助手 1 名、研究生 18 名、実習生 1 名（11/14～）。

### II. 研究活動

1) 睡眠医療プラットフォーム PASM を用いて実施する臨床研究ネットワーク、運用システム、リソースの構築に関する研究（精神・神経疾患研究開発費、主任研究者：三島和夫、分担研究者：肥田昌子、北村真吾）

本研究では、睡眠医療および睡眠研究用プラットフォーム（Research Platform for Advanced Sleep Medicine; PASM）を活用した睡眠医学研究を推進するために以下の課題に取り組んだ。

- ・ PASM のユーザビリティの向上：睡眠医療コアによる先進的睡眠医療の提供と多施設共同研究ネットワークの連携強化、一次医療ネットワークの構築
- ・ PASM の機能強化：オンライン診断システムの拡充、小型活動量計や携帯型脳波計を用いたデータマイニング法の開発、臨床評価ツールの開発など
- ・ 日本人の睡眠特性の標準値の作成とバイオリソースの収集
- ・ PASM を用いた臨床研究・産学連携事業

その結果、以下の成果が得られた

- 1) 多施設共同研究・診療ネットワークの構築：睡眠医学研究用バイオバンクの構築と利活用に関する研究事業：国内の睡眠医学研究コアである 14 施設が参加する「睡眠医学研究用バイオバンクの構築と利活用に関する研究事業」を立ち上げ、NCNP の倫理委員会承認が得られた。また、日本睡眠学会認定医師、歯科医師の所属する 296 医療機関（全登録数の 73.5%）の医療情報を Google Map と連動した PASM 内の睡眠医療機関マップに実装した。

- 2) PASM の機能強化：睡眠障害のオンライン診断システムの精度向上のためのプログラムの改善, 小型活動量計 FS-760 の睡眠判定アルゴリズムの作成, PASM 内のユーザビリティの向上を行った.
- 3) 日本人の睡眠特性の標準値の作成とバイオリソースの収集を推進した.
- 4) NCNP 及び分担研究機関が PASM を用いた各種事業を推進した.

2) **こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究：睡眠障害モジュール開発（厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業，分担研究者：三島和夫，研究協力者：綾部直子）**

本研究は相談業務で遭遇する睡眠障害を早期に同定する診断モジュールの開発を行うことを目的とし、本研究では精神疾患で高率に認められる不眠症のスクリーニング尺度の選定および一般住民での得点分布と抑うつ・不安との関連を調査した。調査は、東京近郊エリアに在住する交代勤務に従事したことの無い20歳以上の男女348名（平均年齢44.1±15.2歳，20-79歳，M/F=145/203）を対象に行った。調査項目には、不眠症の評価尺度として国際的にも広く認知されているアテネ不眠尺度（Athenes insomnia scale; AIS），不眠重症度指数（Insomnia Severity Index; ISI），ピッツバーグ睡眠質問票（Pittsburgh Sleep Quality Index; PSQI）を選択した。メンタルヘルスの指標としては、うつ病自己評価尺度（center for epidemiologic studies depression scale; CES-D），状態-特性不安尺度（State-Trait Anxiety Inventory; STAI）を用いた。なかでも AIS が CES-D ( $r^2 = .40$ ) および STAI-S ( $r^2 = .223$ ), STAI-T ( $r^2 = .294$ ) と最も強く相関した。AIS は国際的にも広く用いられている不眠症のスクリーニング尺度であり、日本人での標準化も行われている。項目数も8項目と少なく、QOL 障害も合わせて評価することが可能である。相談業務で遭遇する睡眠障害を早期に同定する診断モジュールの作成において、アテネ不眠尺度がメンタルヘルスに問題のある相談者を簡便にスクリーニングすることのできる臨床評価尺度として有用であると判断された。

3) **高齢者の睡眠障害に関わる環境及び遺伝の相互作用の解明（文部科学省科学研究費助成事業（基盤研究B，主任研究者：三島和夫，研究協力者：肥田昌子）**

本研究では、睡眠の質的量的低下や内的脱同調などの睡眠・生体リズム調節障害が高齢者の認知機能や気分調節に及ぼす影響を精密に評価し、その罹患脆弱性や個人差が生じる生理・分子的基盤を遺伝要因と環境要因の相互作用の視点から明らかにする。また、睡眠・生体リズムを効果的に調整するための生活習慣の確立とその奏功メカニズム、高齢者の頑健な睡眠維持が健康長寿に資する生理的意義を明らかにする。本年度は若年健常被験者を対象に睡眠・生体リズム指標と連動して日内変動を示すゲノムメチル化部位を調べた。20代健常男性10名（平均年齢24.1歳）をリクルートし、非利き腕に取り付けたアクチグラフを用いて在宅での睡眠状態を調査した。各被験者の平均入眠時刻を起点として睡眠覚醒時刻、食事、照度、温湿度などのマスキング要因を統制した隔離実験室内にて、48時間にわたり睡眠（2夜のポリグラフ検査）および生体リズム指標（低照度下メラトニン分泌立ち上がり時刻）の測定ならびに4時間おきに8ポイント末梢血を採取した。現在のところ、被験者4人（平均年齢23歳）の血液サンプルからDNAを抽出し、各被験者につき8サンプル合計32サンプルに対して866,297マーカーを搭載する Infinium MethylationEPIC BeadChip キットを用いてマイクロアレイシステムによるゲノム全体のメチル化タイピングを行った。現在解析を進めている。

4) **不眠や気分障害予防における過覚醒状態の評価方法の確立及び臨床的有用性の検討（文部科学省科学研究費補助金 若手研究（B），研究代表者：綾部直子）**

不眠症や気分障害等の背景には生理的過覚醒がある。この過覚醒状態を評価する

**Hyperarousal Scale** (以下, **HAS** とする) は自記式 26 項目で構成され, 先行研究においては, 不眠症者は健常者と比較すると過覚醒得点が有意に高いことや, 高い過覚醒状態はうつ症状やストレス, 睡眠問題と関連していることが知られている. 本研究は, **HAS** 日本語版を用いて評価した過覚醒状態が, 不眠症や気分障害のスクリーニングツールとして有用であるかどうかを検証することを目的としている. 初年度は, 東京近郊エリアに配布した広告媒体を用いてこれまで交代勤務に従事したことの無い地域住民と, 精神科または睡眠外来を受診している不眠症患者を対象として, **HAS** 日本語版や不眠の重症度, 気分障害に関連する質問紙データを収集した. 地域住民のうち精神疾患の既往がなくかつ睡眠薬を服用していない 303 名, 睡眠薬服用中の不眠症患者 225 名を解析対象とした結果, 不眠症患者は地域住民と比較すると **HAS** 得点が約 10 点高いことが示された. また, 不眠症患者のうち不眠の重症度尺度がカットオフ未満の者においても高い過覚醒状態にあることが明らかにされた. したがって, 睡眠薬服用後に不眠症状が寛解している不眠症患者においてもなお高い過覚醒状態にあり, 不眠症や気分障害の再発リスクを抱えている可能性が示唆された.

5) **生体リズムと気分調節における機能障害の分子メカニズム (文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C, 主任研究者: 肥田昌子)**

生体リズム障害のメカニズムを明らかにするため, 睡眠覚醒リズム異常を呈する患者群由来の培養細胞に概日リポーター遺伝子を導入し, 培養細胞内の発光リズムを測定した. 非 24 時間睡眠覚醒リズム障害では対照健常群より有意に長いリズム周期を示したが, 睡眠覚醒相後退障害では違いは認められなかった. 患者群の治療反応性の有無を決定して末梢時計リズムとの関連性を調べたところ, 非 24 時間睡眠覚醒リズム障害患者の治療無反応群の末梢時計リズム周期は治療反応群より長かった. 一方, 睡眠覚醒相後退障害患者群では治療反応性との関係は認められなかった. 非 24 時間睡眠覚醒リズム障害の発症にはリズム周期の延長が関わっていること, 他の発症要因 (光同調能, 位相反応性など) も存在すること, 周期長が治療反応性の有用なマーカーとなる可能性が示された. さらに, 気分調整薬リチウムをはじめとする種々の薬物が生体リズムに与える影響を検証するため, 不死化培養細胞 U2OS に異なる 3 種類の概日リポーター遺伝子を個別に導入した培養細胞安定株を作成した. いずれも顕著な概日リズムを刻み固有の位相を示すことを確認した. 初代・不死化細胞を用いた末梢時計リズム評価系を活用することで, 睡眠覚醒リズム異常の発症機序解明や新たな治療薬の探索・同定, 治療反応性の推定につながることを期待される.

6) **灌流スピラベリングを用いた脳血流定量測定による脳の概日リズムと漸進的共感の解明 (文部科学省科学研究費助成事業 若手研究 B, 主任研究者: 元村祐貴)**

ヒトの生体リズム機構は地球の目録環境のリズム (昼夜) に適応して発達してきたものであると考えられているが, 人工照明の発明により急速に 24 時間型となった現代社会では, 生体リズム周期と実際の睡眠覚醒リズムが一致しない中で生活しなければならない機会が増加しており, 事故の発生や心身の健康への負担などの要因となっている. 概日リズムは精神機能に多大な影響を及ぼすにもかかわらず, 生体リズム機構と実際の脳活動の関連について機能的核磁気共鳴画像 (MRI) を用いて検討した研究は少なく, その詳細は明らかにされていない. 本研究では, 灌流スピラベリング法を用いてヒトの生体リズム機構と脳活動の関連について調査することを目的とした. 健常者 42 名に対し, 安静時灌流スピラベリングの撮像と, 個人の生体リズムを反映する日周嗜好性の測定を実施し, 生体リズムと脳の血流量との関連を検討することを目的として解析を進めている.

7) **クロノタイプと気分変動の関連に対する位相角差とストレス反応の寄与 (文部科学省科学研究費助成事業 若手研究 B, 主任研究者: 北村真吾)**

概日リズム位相と習慣的睡眠スケジュールとの間の位相角差の程度と、抑うつ・気分状態との関連性について20～39歳の健常成人男性12名を対象に時間隔離実験により検証を行った。BDIはPSQIにおける就床時刻、入眠時刻と有意に相関し、SDS・CES-Dはアクチグラフィにおける入眠時刻、睡眠中央時刻と有意な相関を示した。しかし、DLMOと気分の各指標とは有意な関連は示されず、また、位相角差とも同様に関連はみられなかった。

気分状態に寄与する睡眠・生体リズム指標を同定することを目的として探索的なステップワイズ重回帰分析を行った結果、SDS、BDI、CES-Dと関連する指標は、それぞれアクチグラフィによる覚醒時刻、MCTQでの平日の睡眠時間、アクチグラフィによる睡眠中央時刻であった。

本研究の結果から、気分状態の低下は睡眠のタイミングと量に有意に関連するが、位相角差とは独立していることが示された。

8) 生体リズム内的脱同調の健康影響と脆弱性要因の解明（文部科学省科学研究費助成事業 新学術領域研究，主任研究者：北村真吾）

低照度環境での内的脱同調出現を検証し、併せてリスク要因（クロノタイプ、光同調能、社会・その他の生物学的要因）の評価を行う目的で内的脱同調検証実験を実施した。ISSの光環境（覚醒期間で約100lux）を想定した4日間の低照度隔離実験を健康成人12名を対象として実施し、概日リズム位相（メラトニン分泌開始時刻）と睡眠覚醒スケジュールとの乖離を指標とした低照度環境による内的脱同調の出現についての検証を進めた。12名の結果から、ISSを想定した低照度環境での内的脱同調の出現を確認した（平均25分、95%信頼区間15-34分）。3日目起床時の1時間の高照度光曝露により位相は平均して前進したが、約2時間の幅がみられ、個人の光反応性の違いの反映と考えられた。この個人の光反応性は1日目から2日目の位相の変化量と有意に相関したことから、内的脱同調のリスク要因として示された。一方、生物時計の表現型のひとつである個人のクロノタイプ特性（朝型夜型）はスペクトラムとしても群間としても位相変化量と有意な関連がみられず、内的脱同調のリスク要因として示されなかった。

9) 子どもの高い光感受性と概日リズムの夜型化・成熟に関する研究（文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（A），分担研究者：北村真吾）

47名の男女児童及びその養育者を対象として、児童における概日リズム位相、睡眠のタイミング、夜間の光曝露（照明環境、メディア使用）の関係に対する年齢の影響を検証した。就床時刻は年齢とともに後退を示したが概日リズム位相（DLMO）は相関せず、結果的に位相角差（就床時刻とDLMOの時間差）は年齢が上がるほど増大する関係を示した。低年齢の児童（6～11歳）でのみ、DLMOとクロノタイプ（休日の睡眠中央時刻）に相関が認められた。多変量解析の結果、低年齢群では入眠時刻の決定要因としてDLMOと就寝前のメディア使用時間が抽出されたが、高年齢群では認められなかった。本研究の結果から、低年齢の児童は高年齢の児童と比較して体内時計と睡眠の結びつきが強く就寝時のメディア使用の影響を受けやすいことが示された。

10) クロノタイプ別睡眠負債解消の機能解明（文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C），分担研究者：北村真吾）

クロノタイプ、いわゆる朝型・夜型と呼ばれる個人特性によって睡眠不足の影響を受ける程度に差があり、夜型指向性の強い人は睡眠不足の影響を受けにくいと言われているが、単純に睡眠不足に耐性があるのか睡眠不足（睡眠負債）を解消しやすいのかどうかは明らかにされていない。

本研究では強制脱同調プロトコル（forced desynchrony protocol; FDP）という特殊な生理学

的手法を用いてクロノタイプおよび概日リズム周期 ( $\tau$ ) の違いによる睡眠不足に対する抵抗性および睡眠負債の解消についての機能解明を行う。FDP に導入した 20~35 歳の健常成人 18 名の FDP 前後での 38.67 時間持続覚醒中の血中メラトニン分泌量からメラトニン分泌開始時刻およびメラトニン分泌頂点位相を決定し、前後の変化量から個人の概日リズム周期を決定した。

### Ⅲ. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

各研究員は、都民・市民のための公開講座、講演会などにおいて睡眠と健康づくり、睡眠障害および関連する健康問題などについての普及啓発に努めた。NHK および民放テレビ、ラジオ、オンラインサイト、新聞、雑誌等のメディアを通して、睡眠習慣および睡眠問題の重要性について普及啓発活動を行った。

#### (2) 専門教育面における貢献

各研究員は、国内各地の学術集会、研究会、談話会、医師会講演会などで睡眠障害、気分障害、認知症の睡眠行動障害等の治療と予防について講演した。三島和夫は、東京農工大学(客員教授)、山梨大学(客員教授)、東京医科歯科大学(非常勤講師)、秋田大学(非常勤講師)、早稲田大学、筑波大学など教育機関において学生教育の援助を行った。元村祐貴は、東京工科大学(非常勤講師)、首都大学東京(非常勤講師)において学生教育の援助を行った。

また、研究員は日本睡眠学会、日本時間生物学会、日本生物学的精神医学会、日本公衆衛生学会、不眠研究会、睡眠学研究会、関東睡眠障害懇話会、日本生理人類学会、関東脳核医学研究会などにおける理事、評議員、世話人としての活動を通じて睡眠障害診療従事者の研究及び教育のサポートを行った。国際老年精神医学会、米国睡眠学会、ヨーロッパ睡眠学会、国際時間生物学会等、米国心身医学会、ヨーロッパ CBT 学会、等において講演者、シンポジスト、オーガナイザーとして研究成果を発表し、各国の第一線の研究者達と意見交換を行った。

#### (3) 精研の研修の主催と協力

研究員は、病院部門と連携して平成 27 年度・第 6 回 NCNP 不眠症の認知行動療法セミナーを実施した(平成 28 年 11 月 5 日, 6 日)。

#### (4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

三島和夫は、国民健康・栄養調査企画解析検討会構成員として、同調査の項目策定と調査実行に関わった。社会保障審議会統計分科会専門委員として、ICD-11 の策定準備作業に関わった。厚生省薬事・食品衛生審議会において専門協議委員、参考人として複数の新薬の審査にたずさわった。

#### (5) センター内における臨床的活動

三島和夫、綾部直子および研究員は、国立精神・神経医療研究センター病院において睡眠障害専門外来を開設し、専門的診療および臨床研究を行った。

#### (6) その他

三島和夫は医学専門家として新規睡眠薬の臨床治験に関わった。三島和夫、北村真吾および研究員は企業から要請された治療薬剤および診断機器の安全性、有効性、機能向上に関する受託研究に関わった。

### Ⅳ. 研究業績

## A. 刊行物

## (1) 原著論文

- 1) Itani O, Kaneita Y, Munezawa T, Mishima K, Jike M, Nakagome S, Tokiya M, Ohida T: Nationwide epidemiological study of insomnia in Japan. *Sleep Med*, 25: 130-38, 2016.
- 2) Nishi D, Suzuki Y, Nishida J, Mishima K, Yamanouchi Y: Personal lifestyle as a resource for work engagement. *J Occup Health*, 59(1): 17-23, 2017.
- 3) Takarada T, Xu C, Ochi H, Nakazato R, Yamada D, Nakamura S, Kodama A, Shimba S, Mieda M, Fukasawa K, Ozaki K, Iezaki T, Fujikawa K, Yoneda Y, Numano R, Hida A, Tei H, Takeda S, Hinoi E: Bone Resorption Is Regulated by Circadian Clock in Osteoblasts. *J Bone Miner Res*, 2016.
- 4) Nakazato R, Hotta S, Yamada D, Kou M, Nakamura S, Takahata Y, Tei H, Numano R, Hida A, Shimba S, Mieda M, Hinoi E, Yoneda Y, Takarada T: The intrinsic microglial clock system regulates interleukin-6 expression. *Glia*, 65(1): 198-208, 2017.
- 5) Kitamura S, Katayose Y, Nakazaki K, Motomura Y, Oba K, Katsunuma R, Terasawa Y, Enomoto M, Moriguchi Y, Hida A, Mishima K: Estimating individual optimal sleep duration and potential sleep debt. *Sci Rep*, 6: 35812, 2016.

## (2) 総説

- 1) Mishima K: Pathophysiology and strategic treatment of sighted non-24-h sleep-wake rhythm disorders. *Sleep and Biological Rhythms*: 1-10, 2016.
- 2) Mishima K: Sleep disturbances as prodromes, risk factors and treatment targets in dementia. *Minerva Psichiatrica*, 58(1): 26-39, 2017.
- 3) 三島和夫: 最新のガイドラインを生かした日常内科診療—その充実とレベルアップを目指して—【不眠症の薬物療法】. *Medical Practice* 33 (臨時増刊号): 296-302, 2016.
- 4) 三島和夫: 高照度光療法とその臨床応用. *BIO Clinica* 31(9): 33-7, 2016.
- 5) 三島和夫: 認知症の早期兆候とその要因としての睡眠問題. *BRAIN and NERVE* 68(7): 779-791, 2016.
- 6) 三島和夫: 季節性うつ病. *最新医学* 71(7): 1508-18, 2016.
- 7) 三島和夫: 社会的ジェットラグがもたらす健康リスク. *日本内科学会雑誌* 105(9): 1675-80, 2016.
- 8) 三島和夫: 日本における不眠症の実態と治療の動向. *精神科臨床 Legato* 2(4): 178-83, 2016.
- 9) 三島和夫: 特集 どうする?メンタルな問題 眠れない. *Medicina* 53(12): 1945-49, 2016.
- 10) 三島和夫: 睡眠薬をどう使うか, どう止めるか. *MEDICAL REHABILITATION* 203: 61-7, 2016.
- 11) 三島和夫: 「眠れない」を診分ける. *精神科治療学* 32(1): 41-6, 2017.
- 12) 三島和夫: 睡眠時無呼吸と睡眠薬. 最新医学別冊 診断と治療のABC119 睡眠時無呼吸症候群: 69-76, 2017.
- 13) 三島和夫: 不眠症の薬物療法. *医薬ジャーナル* 53(2): 63-9, 2017.
- 14) 榎本みのり, 北村真吾: クロノタイプ別睡眠負債解消の機能解明. *BIO Clinica* 31(9): 98-103, 2016.

## (3) 著書

- 1) Mishima K: Circadian Regulation of Sleep. Gumz ML ed.: *Circadian Clocks: Role in Health and Disease*. Springer, New York, pp103-15, 2016.
- 2) 三島和夫: 第15章 2 睡眠障害. 田村 晃, 松谷雅生, 清水輝夫, 辻 貞俊, 塩川芳昭, 成田善孝 編: 第4版 EBM に基づく脳神経疾患の基本治療指針. メジカルビュー社, 東京,

- pp733-9, 2016.
- 3) 三島和夫：第 1 章 睡眠の概念とその生理的意義. 三島和夫 編：睡眠科学 最新の基礎研究から医療・社会への応用まで. 科学同人, 東京, pp1-16, 2016.
  - 4) 三島和夫：第 4 章 睡眠覚醒と生物時計機構との関わり. 三島和夫 編：睡眠科学 最新の基礎研究から医療・社会への応用まで. 科学同人, 東京, pp48-68, 2016.
  - 5) 三島和夫：第 1 章 症候, 主訴からのアプローチ 睡眠の異常. 樋口輝彦, 市川宏伸, 神庭重信, 朝田 隆, 中込和幸 編：今日の精神疾患治療方針 第 2 版. 医学書院, 東京, pp12-8, 2016.
  - 6) 三島和夫：第 15 章 睡眠覚醒障害 睡眠相前進症候群 (概日リズム睡眠-覚醒障害群・睡眠相前進型). 樋口輝彦, 市川宏伸, 神庭重信, 朝田 隆, 中込和幸 編：今日の精神疾患治療方針 第 2 版. 医学書院, 東京, pp568-70, 2016.
  - 7) 三島和夫：第 21 章 精神療法とその他の治療法 高照度光療法. 樋口輝彦, 市川宏伸, 神庭重信, 朝田 隆, 中込和幸 編：今日の精神疾患治療方針 第 2 版. 医学書院, 東京, pp825-7, 2016.
  - 8) 三島和夫：8-2-10 睡眠障害. 精神保健医療福祉白書編集委員会 編：精神保健医療福祉白書. 東京法規出版東京, p176, 2016.
  - 9) 三島和夫：精神疾患 抗不安薬. 福井次矢, 高木 誠, 小室一誠 編：今日の治療指針 2017 年版. 医学書院, 東京, pp970-3, 2017.
  - 10) 三島和夫：精神疾患 睡眠障害治療薬. 福井次矢, 高木 誠, 小室一誠 編：今日の治療指針 2017 年版. 医学書院, 東京, pp974-8, 2017.
  - 11) 三島和夫：高照度光療法が適応となる患者. 「臨床精神医学」編集委員会 編：〔改訂版〕精神科・わたしの診療手順. アークメディア, 東京, pp46-8, 2016.
  - 12) 肥田昌子：第 15 章 睡眠と体内時計を測る. 三島和夫 編：睡眠科学 最新の基礎研究から医療・社会への応用まで. 科学同人, 東京, pp213-24, 2016.
  - 13) 北村真吾, 三島和夫：夜間勤務によるサーカディアンリズムの乱れと発がんリスク. 坪田一男 編：ブルーライトテキストブック. 金原出版, 東京, pp165-71, 2016.
  - 14) 北村真吾：第 17 章 睡眠の発達と加齢. 三島和夫 編：睡眠科学 最新の基礎研究から医療・社会への応用まで. 科学同人, 東京, pp239-51, 2016.

#### (4) 研究報告書

- 1) 三島和夫：睡眠医療プラットフォーム PASM を用いて実施する臨床研究ネットワーク運用システム, リソースの構築に関する研究. 国立精神・神経研究センター 精神・神経疾患研究開発費「睡眠医療プラットフォーム PASM を用いて実施する臨床研究ネットワーク運用システム, リソースの構築に関する研究 (研究代表者：三島和夫)」(26-2) 平成 26 年度～平成 28 年度総括・分担研究報告書. pp1-5, 2017.
- 2) 肥田昌子：PASM を用いたバイオリソースを利用した睡眠障害判断ツールの構築と検証. 国立精神・神経研究センター 精神・神経疾患研究開発費「睡眠医療プラットフォーム PASM を用いて実施する臨床研究ネットワーク運用システム, リソースの構築に関する研究 (研究代表者：三島和夫)」(26-2) 平成 26 年度～平成 28 年度総括・分担研究報告書. pp11-3, 2017.
- 3) 北村真吾：地域調査と産学連携を通じた PASM の有用性検証と睡眠医療研究用リソースの収集. 国立精神・神経研究センター 精神・神経疾患研究開発費「睡眠医療プラットフォーム PASM を用いて実施する臨床研究ネットワーク運用システム, リソースの構築に関する研究 (研究代表者：三島和夫)」(26-2) 平成 26 年度～平成 28 年度総括・分担研究報告書. pp15-7, 2017.
- 4) 亀井雄一, 豊澤あゆみ, 鈴木みのり, 綾部直子, 元村祐貴, 北村真吾, 三島和夫：PASM 用

診断アルゴリズムの精度向上, 医療機関紹介マップの作成に関する研究. 国立精神・神経研究センター 精神・神経疾患研究開発費「睡眠医療プラットフォーム PASM を用いて実施する臨床研究ネットワーク運用システム, リソースの構築に関する研究 (研究代表者: 三島和夫)」(26-2) 平成 26 年度～平成 28 年度総括・分担研究報告書. pp19-23, 2017.

(5) 翻訳

(6) その他

## B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Motomura Y: 【Symposium】 The role of sleep in emotion and mood regulation. UNIST-JPA Joint Symposium 2016 on Anthropological and Physiological Research on Humans Living in Modern Society of East Asia, Ulsan, Korea, 2016.9.23-24.
- 2) 三島和夫: 【シンポジウム】 社会的ジェットラグがもたらす健康リスク. 第 113 回日本内科学会, 東京, 2016.4.15-17.
- 3) 三島和夫: 【シンポジウム】 高齢者の睡眠問題の特徴とその背景要因. 第 16 回日本抗加齢医学会総会, 神奈川, 2016.6.10-12.
- 4) 三島和夫: 【シンポジウム】 メラトニンおよびメラトニン受容体作動薬の開発と臨床応用. 日本睡眠学会第 41 回定期学術集会, 東京, 2016.7.7-8.
- 5) 三島和夫: 【ランチョンセミナー】 睡眠薬依存をどのように捉えるか? ～日本人におけるベンゾジアゼピン依存・離脱症状スケールの検討も含めて～. 日本睡眠学会第 41 回定期学術集会, 東京, 2016.7.7-8.
- 6) 三島和夫: 【シンポジウム】 高齢者の不眠の背景に何があるのか, どう対処すべきか. 日本睡眠学会第 41 回定期学術集会, 東京, 2016.7.7-8.
- 7) 三島和夫: 【サテライトシンポジウム】 高齢者を取り巻く光環境 どこが問題か, いかに対処するか. 第 8 回日本臨床睡眠医学会, 兵庫, 2016.8.7.
- 8) 三島和夫: 【ランチョンセミナー】 高齢者の睡眠と QOL を保つための生活指導, 服薬指導. 第 14 回日本臨床医療福祉学会, 秋田, 2016.9.2.
- 9) 三島和夫: 【ランチョンセミナー】 ストレス応答と適用破綻としての慢性不眠症とその効果的な対処法. 第 32 回日本ストレス学会学術総会, 東京, 2016.10.29-30.
- 10) 三島和夫: 【ランチョンセミナー】 精神科臨床で留意すべき睡眠障害とその診断・治療について. 第 29 回日本総合病院精神医学会学術総会, 東京, 2016.11.25-26.
- 11) 三島和夫: 【ランチョンセミナー】 働く世代で留意すべき睡眠問題とその対策. 第 24 回日本産業ストレス学会, 東京, 2016.11.26.
- 12) 三島和夫: 【教育講演】 睡眠障害の基礎と臨床-認知症と睡眠障害の最前線. 第 35 回 (公社) 全日本鍼灸学会関東支部学術集会, 東京, 2016.11.27.
- 13) 肥田昌子, 北村真吾, 中崎恭子, 綾部直子, 元村祐貴, 加藤美恵, 松井健太郎, 小林美奈, 碓氷章, 井上雄一, 草薙宏明, 亀井雄一, 三島和夫: 【シンポジウム・ポスター】 睡眠相後退型, フリーラン型の抹消時計リズム周期. 日本睡眠学会第 41 回定期学術集会, 東京, 2016.7.7-8.
- 14) 肥田昌子: 【シンポジウム】 概日リズム睡眠障害の病態生理と治療反応性. 第 23 回日本時間生物学学会学術大会, 愛知, 2016.11.12-13.
- 15) 北村真吾: 【講演】 クロノタイプおよび睡眠剥夺によるヒト血中トランスクリプトーム変化. 2016 年度日本生理人類学会研究奨励発表会 (九州地区), 福岡, 2017.2.11.
- 16) 元村祐貴, 勝沼るり, 板坂典朗, 吉村道孝, 三島和夫: 【シンポジウム・ポスター】 睡眠負



債時における安静時気分の低下とその神経基盤：fMRI 研究. 日本睡眠学会第 41 回定期学術集会, 東京, 2016.7.7-8.

- 17) 元村祐貴：【シンポジウム】感性を科学する？そのための学び. 感性フォーラム 2016, 福岡, 2016.10.31.
- 18) 元村祐貴：【シンポジウム】睡眠の不調と気分調節機能とのかかわり, その神経基盤. 第 23 回日本時間生物学会学術大会, 愛知, 2016.11.12-13.
- 19) 綾部直子：【シンポジウム】不眠症の新たな日中機能評価：不眠症用 QOL 尺度 (Quality of Life Scale for insomnia : QOL-I). 日本睡眠学会第 41 回定期学術集会, 東京, 2016.7.7-8.
- 20) 綾部直子：【シンポジウム】不眠認知行動療法による睡眠薬減薬の可能性. 第 16 回日本認知療法学会, 大阪, 2016.11.24-25.
- 21) 勝沼り, 大場健太郎, 元村祐貴, 寺澤悠里, 中崎恭子, 北村真吾, 肥田昌子, 守口善也, 三島和夫：【シンポジウム・ポスター】日常生活における睡眠負債が肥満に及ぼす神経学的検証. 日本睡眠学会第 41 回定期学術集会, 東京, 2016.7.7-8.

(2) 一般演題

- 1) Kitamura S, Higuchi S, Lee S, Xu H: The relationship among light conditions, biological clock and sleep in children. Modernization and Health in the Asia-Pacific Region 2016, Hawaii, 2016.8.19-20.
- 2) Kitamura S, Higuchi S, Lee S, Xu H: The relationship among light conditions, biological clock and sleep in children. 平成 28 年度日本生理人類学会照明研究部会, 福岡, 2016.9.28.
- 3) Higuchi S, Lin Y, Zhang Y, Qiu J, Ohashi M, Lee S, Kitamura S, Yasukouchi A: Sleep habits, lifestyle and light exposure at night in Japanese and Chinese university students. 平成 28 年度日本生理人類学会照明研究部会, 福岡, 2016.9.28.
- 4) Kitamura S, Enomoto M, Miidera H, Tachimori H, Mishima K: Pharmacoepidemiological Survey for Risk of Hip Fracture among Older People Using Psychoactive Drugs. 1st Mental Health International Symposium [NCMH-IMH-NCNP], Seoul, Korea, 2017.3.17.
- 5) Motomura Y, Katsunuma R, Itasaka M, Yoshimura M, Mishima K: Two days sleep debt causes mood decline during resting state via diminished amygdala-prefrontal connectivity: fMRI study. ESRS2016, Bologna, Italy, 2016.9.13-16.
- 6) Motomura Y: The role of sleep in emotion and mood regulation. UNIST-JPA Joint Symposium 2016 on Anthropological and Physiological Research on Humans Living in Modern Society of East Asia, Ulsan, Korea, 2016.9.23-24.
- 7) Ayabe N, Okajima I, Nakajima S, Inoue Y, Uchimura N, Yamadera W, Kamei Y, Mishima K: Effectiveness of cognitive behavioural therapy for insomnia: randomized controlled trial in a multicentre study in Japan. EABCT2016, Stockholm, Sweden, 2016.8.31-9.3.
- 8) 許慧敏, 李相逸, 西村佳菜, 北村真吾, 樋口重和：子どもの睡眠習慣と概日リズム位相の関係. 日本生理人類学会第 73 回大会, 大阪, 2016.6.4-5.
- 9) 綾部直子, 三島和夫：不眠認知行動療法による睡眠薬減薬の可能性. 第 16 回日本認知療法学会, 大阪, 2016.11.25.
- 10) 吉村道孝, 元村祐貴, 板坂典朗, 勝沼り, 坪田一夫, 三島和夫：短時間睡眠が健常者の身体バランスに与える影響. 日本睡眠学会第 41 回定期学術集会, 東京, 2016.7.7-8.
- 11) 吉村道孝, 元村祐貴, 勝沼り, 北沢桃子, 岸本泰士郎, 坪田一男, 三島和夫：部分断眠における表情への影響. 第 23 回日本行動医学会学術総会, 沖縄, 2017.3.17-18.

(3) 研究報告会

- 1) 三島和夫, 綾部直子：H28 年度打合せ. 障害者政策総合研究事業 金班分担研究者会議, 東

- 京, 2016.7.13.
- 2) 三島和夫, 綾部直子: H28 年度打合せ. 障害者政策総合研究事業 金班分担研究者会議, 東京, 2016.10.21.
  - 3) 三島和夫, 綾部直子: H28 年度打合せ. 障害者政策総合研究事業 金班分担研究者会議, 東京, 2016.12.2.
  - 4) 北村真吾, 榎本みのり, 三井寺浩幸, 立森久照, 三島和夫: 向精神薬の処方をもたらす転倒骨折リスクに関する薬剤疫学調査. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 28 年度研究報告会 (第 28 回), 東京, 2017.2.20.
  - 5) 北村真吾, 三島和夫: 生体リズム内的脱同調の健康影響と脆弱性要因の解明. 新領域研究「宇宙に生きる」全体会議, 東京, 2017.3.10.
  - 6) 元村祐貴: 慢性不眠症患者の情動機能: fMRI. 不眠研究会 第 32 回研究会発表, 東京, 2016.11.26.
  - 7) 綾部直子: 不眠症に対する認知行動療法の有効性に関する検討—多施設共同 RCT による不眠症状の変化. 不眠研究会 第 32 回研究会発表, 東京, 2016.11.26.
  - 8) 綾部直子, 鈴木みのり, 立森久照, 北村真吾, 亀井雄一, 三島和夫: 多施設共同 RCT による不眠症に対する認知行動療法 (Cognitive Behavioral Therapy for Insomnia: CBT-I) の有効性. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 28 年度研究報告会 (第 28 回), 東京, 2017.2.20.

#### (4) その他

- 1) 三島和夫: 【一般向け講演】専門医に聞く『快眠のコツ』. 朝日カルチャーセンター講演, 東京, 2016.5.30.
- 2) 三島和夫: 【市民公開講座・座長】震災ストレスから私たちの眠りと健康をいかに守るか. 日本睡眠学会第 41 回定期学術集会, 東京, 2016.7.7-8.
- 3) 三島和夫: 【市民公開講座・講演】震災時の睡眠対処マニュアル. 日本睡眠学会第 41 回定期学術集会, 東京, 2016.7.7-8.
- 4) 三島和夫: 【一般向け講演】快眠と健康～睡眠のメカニズムを知り, 活用する～ (震災時の睡眠とメンタルヘルスも含めて). 秋の「すいみんの日」市民公開講座 2016 大分, 大分, 2016.9.3.
- 5) 三島和夫: 【一般向け講演】「働く世代から始める睡眠対策」～こころとからだの健康のために～. 国分寺市平成 28 年度メンタルヘルス講座, 東京, 2016.9.8.
- 6) 三島和夫: 【市民公開講座】睡眠リズムの乱れが招く健康被害—夜型生活と社会的時差ボケについて—. 名古屋大学環境医学研究所市民公開講座 2016 「最新脳科学が解き明かす睡眠の謎～ヒトはなぜ眠るのか～」, 愛知, 2016.10.15.
- 7) 三島和夫: 【一般向け講演】なぜ眠るのか, なぜ眠らなくてはならないのか—睡眠と健康の深～い関係—. 平成 28 年度第 8 回都医学研都民講座現代社会と睡眠障害～よい眠りをとるために～, 東京, 2017.2.16.
- 8) 綾部直子: 【一般向け講演】子どもの睡眠の大切さ—睡眠のリズムを整えよう—. 逗子葉山地区学校保健会総会, 神奈川, 2016.5.24.
- 9) 綾部直子: 【一般向け講演】「ねむり」のたいせつさ～子どもたちの健康で豊かな生活と睡眠～. 江戸川区青少年育成葛飾地区委員会研修, 東京, 2016.7.10.
- 10) 綾部直子: 【一般向け講演】睡眠でからだところを健康に!—よい睡眠をとるコツ—. 東京都立葛飾商業高等学校定時制保健講演会, 東京, 2016.9.13.
- 11) 綾部直子: 【一般向け講演】「睡眠の大切さ」を知ろう. 綾瀬市立天台小学校学校保健委員会, 東京, 2016.10.21.
- 12) 綾部直子: 【一般向け講演】睡眠力 UP!～子どもたちの睡眠, 今のままで大丈夫?!～. 平

- 塚市子どもの生活習慣病予防のための研修会，神奈川，2016.11.4.
- 13) 綾部直子：【一般向け講演】自分の睡眠を知って，心地よい眠りを目指そうー睡眠日誌を活用するコツー．柏市松野台自治会文化講演会，千葉，2016.11.13.
  - 14) 綾部直子：【一般向け講演】小中9年間を通じた生活習慣の確立を目指して～生活習慣と睡眠～．八潮市立大曾根小学校・大原小学校・大原中学校3校合同学校保健委員会，埼玉，2016.12.9.
  - 15) 綾部直子：【一般向け講演】“ねむりの問題”これで解決！3つの睡眠戦略！！．相模原市保健所緑保健センターストレス講演会，神奈川，2016.12.11.
  - 16) 綾部直子：【一般向け講演】良質な睡眠ーよく眠れる秘訣・工夫などー．平成28年度さいたま市大宮中部公民館介護予防事業，埼玉，2017.1.23.
  - 17) 綾部直子：【一般向け講演】こちよく眠るためのコツー認知行動療法の活用ー．足立区役所平成28年度健康管理講演会，東京，2017.2.17.
  - 18) 綾部直子：【一般向け講演】こちよく眠るためのコツ．あんしん財団労働安全衛生講演会高崎会場，群馬，2017.2.23.
  - 19) 綾部直子：【一般向け講演】ストレス社会において心地よく眠るためのコツ．宮崎県延岡保健所平成28年度こころの健康づくり講演会，宮崎，2017.2.24.
  - 20) 綾部直子：【一般向け講演】こちよく眠るためのコツ．あんしん財団労働安全衛生講演会東京会場，東京，2017.3.3.
  - 21) 綾部直子：【一般向け講演】中学生にとっての睡眠の大切さー睡眠リズムを整えて活力UP！ー．品川区立大崎中学校地域健全育成運営協議会，東京，2017.3.4.

### C. 講演

- 1) 三島和夫：【講演】不眠症の薬物療法 Up-to-date:ガイドライン後の動向と今後の課題．第13回桜山睡眠研究会，愛知，2016.4.21.
- 2) 三島和夫：【講演】患者目線から不眠治療を紐解くー二つの出口を見据えてー．高松不眠症治療セミナー，香川，2016.4.26.
- 3) 三島和夫：【講演】患者目線から不眠治療を紐解くー二つの出口を見据えてー．学術講演会ー小松市・加賀市・能美市医師会ー，石川，2016.5.26.
- 4) 三島和夫：【講演】不眠症の薬物療法 Up-to-date:難治性不眠症の背景と対処．第56回中信精神科医会，長野，2016.6.21.
- 5) 三島和夫：【講演】病理生体を踏まえた不眠症の診断と治療戦略．Sleep Disorder Experts Seminar，東京，2016.6.25.
- 6) 三島和夫：【講師】睡眠制御の神経メカニズムとその障害．慶応義塾大学 生理学特別講義，東京，2016.6.30.
- 7) 三島和夫：【講演】プライマリケアにおける不眠症治療 Up-to-date．洛北 PrimaryCare 研究会，京都，2016.7.14.
- 8) 三島和夫：【講演】ポストベンゾ時代の不眠症治療戦略ー新たな治療選択肢の登場を受けてー．北海道精神神経科診療所協会学術講演会，北海道，2016.7.16.
- 9) 三島和夫：【講演】ポストベンゾ時代の不眠症治療戦略ー新たな治療選択肢の登場を受けてー．Sleep Symposium，東京，2016.7.20.
- 10) 三島和夫：【教員・学生向け講演】見えていだけではダメ．私たちを取り巻く光環境と健康．慶応義塾大学医学部 眼科学教室公開セミナー，東京，2016.7.21.
- 11) 三島和夫：【講演】なにげない睡眠習慣に潜む生活習慣病リスク．第8回出雲睡眠学セミナー，島根，2016.7.27.
- 12) 三島和夫：【講演】概日リズム睡眠障害の診断と治療学 Up-to-date．第9回精神科臨床睡眠懇話会，東京，2016.7.30.

- 13) 三島和夫：【講演】患者目線から見た安全で効果的な不眠症治療-睡眠薬の適正使用ガイド。東大和市医師会講演会，東京，2016.9.9.
- 14) 三島和夫：【講演】睡眠障害と健康リスクについて。平成 28 年度日本医師会生涯教育講座，山梨，2016.10.2.
- 15) 三島和夫：【講演】患者目線から不眠症治療を紐解く-二つの出口を見据えて-。日医生涯教育講座学術講演会 内科と精神科の連携懇話会，長野，2016.10.25.
- 16) 三島和夫：【講演】光をうまく利用して睡眠・生体リズムを調節する。第 19 回睡眠医学セミナー，愛知，2016.11.7.
- 17) 三島和夫：【講師】睡眠とメンタルヘルス。早稲田大学グローバルエデュケーションセンター「メンタルヘルスマネジメント概論」，東京，2016.11.9.
- 18) 三島和夫：【講演】高齢者の不眠の診立てと治療のポイント。船橋市内科医会学術講演会，千葉，2016.11.16.
- 19) 三島和夫：【講演】不眠症薬物療法の光と影-睡眠薬とその他の向精神薬-。星薬科大 認定薬剤師研修 薬剤師生涯学習・講演会シリーズ，東京，2016.12.11.

#### D. 学会活動

##### (1) 学会主催

##### (2) 学会役員

- 1) 三島和夫：日本睡眠学会 理事
- 2) 三島和夫：日本時間生物学会 理事
- 3) 三島和夫：日本生物学的精神医学会 評議員
- 4) 三島和夫：日本公衆衛生学会 評議員
- 5) 三島和夫：脳科学関係学会連合 評議員
- 6) 三島和夫：精神科臨床睡眠懇話会 世話人
- 7) 肥田昌子：日本時間生物学会 評議員
- 8) 肥田昌子：日本睡眠学会 評議員
- 9) 北村真吾：日本時間生物学会 評議員
- 10) 北村真吾：日本生理人類学会 理事
- 11) 北村真吾：日本睡眠学会 評議員

##### (3) 座長

- 1) 三島和夫：【シンポジウム司会】睡眠学がもたらす精神医学への貢献。第 112 回日本精神神経学会学術総会，千葉，2016.6.2-4.
- 2) 三島和夫：【市民公開講座・座長】震災ストレスから私たちの眠りと健康をいかに守るか。日本睡眠学会第 41 回定期学術集会，東京，2016.7.7-8.
- 3) 三島和夫：【シンポジウム座長】不眠症の代替薬物療法としての向精神薬の位置づけ-現状と問題点，解決すべきアジェンダー。日本睡眠学会第 41 回定期学術集会，東京，2016.7.7-8.
- 4) 三島和夫：【シンポジウム座長】生物時計と睡眠恒常性を理解し，高齢者の不眠診療に生かす。日本睡眠学会第 41 回定期学術集会，東京，2016.7.7-8.
- 5) 三島和夫：【ランチョンセミナー座長】不眠症治療におけるリラクゼーション・体温調節の科学的効果。日本睡眠学会第 41 回定期学術集会，東京，2016.7.7-8.
- 6) 肥田昌子：【シンポジウム座長】睡眠困難の病態。日本睡眠学会第 41 回定期学術集会，東京，2016.7.7-8.
- 7) 肥田昌子：【シンポジウム座長】精神疾患の病態研究～リズムと睡眠。第 23 回日本時間生物学会学術大会，愛知，2016.11.12-13.

- 8) 北村真吾：【シンポジウム座長】ヒト睡眠生理のトピックス．日本睡眠学会第 41 回定期学術集会，東京，2016.7.7-8.
- 9) 元村祐貴：【座長】口演セッション 1．日本生理人類学会第 74 回大会，石川，2016.10.22-23.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 三島和夫：Frontiers in Neurology, Associate editor.
- 2) 三島和夫：Psychiatry Journal, Associate editor.
- 3) 三島和夫：Sleep and Biological Rhythms, Advisory Board.
- 4) 三島和夫：睡眠医療 編集委員
- 5) 三島和夫：ねむりと医療 編集委員
- 6) 肥田昌子：Scientific Reports, Editorial Board.
- 7) 北村真吾：Journal of Physiological Anthropology, Handling editor.

E. 研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

- 1) 三島和夫：【講師】体温調節に着目した睡眠障害の診断・アプローチ．日本睡眠学会第 20 回「睡眠科学研究講座」，東京，2016.7.6.
- 2) 三島和夫：【研修講師】適切な睡眠へのアプローチ—エビデンスに基づいた支援の実践—．平成 28 年度健康づくり事業推進指導者育成研修，東京，2016.10.6.
- 3) 三島和夫：【講演】睡眠障害の見かた—朝起きられない，よく眠れませんの訴えにどう対応するか—．平成 28 年度精神保健福祉関係職員研修テーマ別研修会「睡眠障害」，福島，2016.12.22.
- 4) 勝沼りり：【講師】ジェスチャー行動を理解する際，その意味付けまで脳は判別しているのだろうか？．2016 年度日本生理人類学会夏期セミナー，京都，2016.9.5-6.
- 5) 綾部直子：【講師】症例検討 2．第 7 回 NCNP 不眠症の認知行動療法セミナー，アドバンスコース，東京，2016.11.6.

F. その他

- 1) 三島和夫：寝酒がダメな理由．NIKKEI STYLE，2016.4.5.
- 2) 三島和夫：老いとともに 夜の眠りは量より「質」．朝日新聞 28 面，2016.4.6.
- 3) 三島和夫：その睡眠薬必要ですか？過剰摂取 副作用リスク 「日誌」つけて生活改善．日本経済新聞朝刊 14 面，2016.4.10.
- 4) 三島和夫：眠れる時に眠る，手足温かく 避難生活での眠りのコツは．朝日新聞デジタル，2016.4.16.
- 5) 三島和夫：日本人に多い過ち「眠れぬ夜に寝酒」が体を痛めつけている．CIRCL，2016.4.18.
- 6) 三島和夫：春眠暁を覚えず，は本当か．NIKKEI STYLE，2016.4.19.
- 7) 三島和夫：その睡眠薬必要ですか？ 変化の春，正しく服用：トピックス from 日経電子版．日経 Gooday，2016.4.21.
- 8) 三島和夫：被災者の睡眠問題に日本睡眠学会が対応策．Medical Tribune，2016.4.21.
- 9) 三島和夫：花粉症薬の副作用で「悪夢」って本当？ 夢日記をつけて調べてみた．withnews，2016.4.22.
- 10) 三島和夫：湯船が快適な睡眠をもたらす！「加温効果」による効果的な睡眠とは．CIRCL，2016.4.23.
- 11) 三島和夫：睡眠中に手をガブリ，その理由とは．NIKKEI STYLE，2016.5.3.

- 12) 三島和夫：今後の内科学の臨床と教育を考える 第 113 回日本内科学会開催。週刊医学界新聞, 2016.5.9.
- 13) 三島和夫：定年後の資産設計・投資・快眠... 専門家 3 氏が解説。朝日新聞デジタル, 2016.6.13.
- 14) 三島和夫：被災者の心を守る 発生直後の不眠は自然。讀賣新聞 朝刊 18 面, 2016.6.14.
- 15) 三島和夫：睡眠障害や不眠に悩むが...やはり超人?超過酷な宇宙飛行士の睡眠実態。CIRCL, 2016.6.20.
- 16) 三島和夫：朝型勤務 夜型人間の心身不調を引き起こしかねない。NEWS ポストセブン, 2016.6.26.
- 17) 三島和夫：要注意...5 日間の睡眠不足で「怒られた記憶だけ残る」うつ予備軍に CIRCL, 2016.7.4.
- 18) 三島和夫：過度の早起きは寿命縮める!? 睡眠の権威語る新常識“遅起き”の効用とは。BS 日テレ 深層ニュース, 2016.7.20.
- 19) 三島和夫：理想の睡眠, 早寝・早起きにまつわる誤解とは?。YOMIURI ONLINE, 2016.7.20.
- 20) 三島和夫：誤った睡眠神話...ベストな就寝・起床時間とは。YOMIURI ONLINE, 2016.7.20.
- 21) 三島和夫：なんでも健康相談 夫が「レム睡眠行動障害」と診断されました。きょうの健康：117, 2016.7.21.
- 22) 三島和夫：深層 NEWS 理想の睡眠語る。読売新聞, 2016.7.21.
- 23) 三島和夫：日本版サマータイム導入 団らんは増えるが事故も増える! CIRCL, 2016.8.4.
- 24) 三島和夫：トークプラス 中高年の睡眠。BS ジャパン 日経プラス 10, 2016.8.17.
- 25) 三島和夫：元気なう 高齢者の睡眠 1 必要な時間 徐々に短く。読売新聞 朝刊 20 面, 2016.9.4.
- 26) 三島和夫：子供のお昼寝, 悩んでいませんか?。WomenNews, 2016.9.10.
- 27) 三島和夫：高齢者の睡眠(1) 必要な時間, 徐々に短く。yomiDr, 2016.9.12.
- 28) 三島和夫：「早寝早起き」は本当に体にいいのか?...睡眠の新常識。yomiDr, 2016.9.12.
- 29) 三島和夫：いよいよ千葉大病院で実用化間近 オンラインで不眠症を根本から克服。CIRCL, 2016.9.13.
- 30) 三島和夫：明るい寝室は不眠のもと, 暗い朝は寝坊のもと。NIKKEI STYLE, 2016.9.13.
- 31) 三島和夫：3 つの誤解があなたの眠りを邪魔している場合が! 不眠を改善して熟睡感を手に入れる!。NHK ガッテン!: pp68-76, 2016.9.16.
- 32) 三島和夫：「都会」と「田舎」でこれだけ違う<脳ストレス> 都市生活者は不安障害やうつ病のリスクが増加。HEALTH PRESS, 2016.10.1.
- 33) 三島和夫：ひらめきやアイデアが生まれやすいのは睡眠の前?後?。日経ウーマンオンライン, 2016.10.4.
- 34) 三島和夫：眠気の正体。NIKKEI STYLE, 2016.10.4.
- 35) 三島和夫：特集「脳」入門 眠れないあなたに送る不眠症と眠りの Q&A。週刊東洋経済：pp81-3, 2016.10.8.
- 36) 三島和夫：睡眠不足がメタボを招く 寝だめ逆効果 リズムが大切 1 日 7 時間目安 食事も規則正しく。日経プラスワン, 2016.10.15.
- 37) 三島和夫：睡眠中の突然死を防ぐには。NIKKEI STYLE, 2016.10.18.
- 38) 三島和夫：予約困難な「絶頂睡眠」を体験してきた。ハーバービジネスオンライン, 2016.10.23.
- 39) 三島和夫：脳の掃除は夜勤体制。ナショナルジオグラフィック, 2016.10.27.
- 40) 三島和夫：医療ニュース 無自覚な睡眠不足の解消が内分泌機能の改善につながる。QLifePro, 2016.10.28.
- 41) 三島和夫：健康成人の必要睡眠時間は平均 8.41 時間という実験結果, 「自覚していない睡眠不足」による悪影響も確認される。スラド, 2016.10.31.
- 42) 三島和夫：【悲報】長年連れ添っても夫婦の睡眠習慣は似ない。NIKKEI STYLE, 2016.11.1.
- 43) 三島和夫：原因は睡眠不足?増える発達障害の子どもたち。CIRCL, 2016.11.3.

- 44) 三島和夫：からだこころナビ “隠れ睡眠不足”あるかも 20代男性で1時間程度。デーリー東北, 2016.11.7.
- 45) 三島和夫：絶対に寝過ごさない目覚まし時計。週刊朝日 11月18日号：pp134-5, 2016.11.8.
- 46) 三島和夫：からだこころナビ “隠れ睡眠不足”あるかも 20代男性で1時間程度。山口新聞, 2016.11.8.
- 47) 三島和夫：ヴェルト, ウェアラブル製品向けの睡眠判定アルゴリズムを国立精神・神経医療センターと共同開発。fabcross, 2016.11.9.
- 48) 三島和夫：潜在的睡眠不足は平均1時間, 健康にも影響。あなたの健康百科, 2016.11.9.
- 49) 三島和夫：“隠れ睡眠不足”警告 20代男性で1時間程度。埼玉新聞, 2016.11.9.
- 50) 三島和夫：眠くない寝不足「潜在的睡眠不足」の怖さ。ナショナルジオグラフィック, 2016.11.10.
- 51) 三島和夫：試験で裏付け 20代男性には隠れ睡眠不足？ 1時間程度 自覚なしに心身の負担に。山陰中央新報, 2016.11.10.
- 52) 三島和夫：20代男性は寝不足？ 睡眠試験で判明 1時間ほど短く。徳島新聞, 2016.11.10.
- 53) 三島和夫：“隠れ睡眠不足”にご注意 平均あと1時間必要？。岩手日報, 2016.11.11.
- 54) 三島和夫：眠れたつもりでも睡眠不足？ 国立医療研究センター 20代男性試験基に警告。沖縄タイムス, 2016.11.13.
- 55) 三島和夫：すこやか “隠れ睡眠不足”あるかも 20代男性で1時間程度。神奈川新聞, 2016.11.13.
- 56) 三島和夫：走る・飛ぶ・香る!? 朝がラクになる最新「目覚まし時計」を試してみた！。dot, 2016.11.15.
- 57) 三島和夫：“睡眠によい食べ物”のウソ。NIKKEI STYLE, 2016.11.15.
- 58) 三島和夫：医療新世紀 隠れ睡眠不足 あるかも 20代男性で1時間程度。47NEWS, 2016.11.15.
- 59) 三島和夫：“隠れ睡眠不足”あるかも 20代男性で1時間程度。中部経済新聞, 2016.11.15.
- 60) 三島和夫：“潜在的睡眠不足”大丈夫？ 研究チーム警告 自覚なく心身の負担に。愛媛新聞, 2016.11.15.
- 61) 三島和夫：自覚ない「隠れ睡眠不足」 20代男性で1時間。茨城新聞, 2016.11.17.
- 62) 三島和夫：“隠れ睡眠不足”に注意 20代男性で1時間程度。四国新聞, 2016.11.18.
- 63) 三島和夫：“隠れ睡眠不足”あるかも 20代男性1時間程度 自覚ない人対象に試験。下野新聞, 2016.11.18.
- 64) 三島和夫：科学の扉 睡眠の謎に迫る 脳内物質・遺伝子の研究進む。朝日新聞 朝刊 35面, 2016.11.20.
- 65) 三島和夫：自覚なし...“隠れ睡眠不足”あるかも 20代男性で1時間程度。産経ニュース, 2016.11.21.
- 66) 三島和夫：うつ病, 統合失調症など精神疾患も生活習慣病のひとつ？。health クリック, 2016.11.21.
- 67) 三島和夫：“隠れ睡眠不足” 20代男性1時間。上毛新聞, 2016.11.21.
- 68) 三島和夫：“隠れ睡眠不足”あるかも 20代男性で1時間程度 国立精神センターが警告。福井新聞, 2016.11.22.
- 69) 三島和夫：長時間労働で睡眠6時間未満4割, 主要国で睡眠時間が最も短い日本で多発する自殺・過労死・精神障害。BLOGOS, 2016.11.24.
- 70) 三島和夫：潜在的睡眠不足 20代男性1時間 精神・神経医療研が警告。神戸新聞, 2016.11.24.
- 71) 三島和夫：からだこころナビ 潜在的睡眠不足が1時間程度 20代男性で試験。岐阜新聞, 2016.11.26.
- 72) 三島和夫：自覚ないのに睡眠不足かも 20代男性の試験基に警告。山形新聞, 2016.11.28.

- 73) 三島和夫：現代人が抱える「自覚できない」睡眠不足. ケアネット, 2016.11.29.
- 74) 三島和夫：眠気がないから睡眠時間は十分? でも自覚できない睡眠不足かも. Aging Style 2016.12.3.
- 75) 三島和夫：睡眠障害や不眠に悩むが...やはり超人?超過酷な宇宙飛行士の睡眠実態. CIRCL, 2016.12.7.
- 76) 三島和夫：日本人に多い過ち「眠れぬ夜に寝酒」が体を痛めつけている. CIRCL, 2016.12.8.
- 77) 三島和夫：自覚なくても実は睡眠不足 精神・神経医療研究センター 20代男性で「あと1時間」. 熊本日日新聞 朝刊 25面, 2016.12.10.
- 78) 三島和夫：認知症高齢者の在宅介護 最大の問題は「睡眠障害」 家庭ですぐにできる工夫紹介. CIRCL, 2016.12.12.
- 79) 三島和夫：後からわかった不眠の悪影響・「受診するほどじゃない」と思っている方へ. Fuminers, 2016.12.22.
- 80) 三島和夫：1時間超える昼寝は危険 シエスタは短めに. NIKKEI STYLE, 2016.12.27.
- 81) 三島和夫：え。そうだったの? 「長命社会を生き抜く」間違いだらけの健康法 正しい健康法. サンデー毎日 2017年1月8日号: pp34-5, 2016.12.27.
- 82) 三島和夫：毎日の睡眠は、あと1時間長い方がいい! 自覚のない睡眠不足は内分泌機能に影響する. 日経ヘルス: 101, 2016.12.28.
- 83) 三島和夫：睡眠不足がアルツハイマーの原因に... 「7時間睡眠が理想」の真相は. デイリー新潮, 2017.1.5.
- 84) 三島和夫：ナポレオン早死の原因? 睡眠不足で上昇する「がん」リスク. デイリー新潮, 2017.1.5.
- 85) 三島和夫：よく眠れる人も寝不足かも 20代男性実験「必要睡眠時間」は8時間半. 東京新聞, 2017.1.5.
- 86) 三島和夫：「眠り」について学ぶ無料都民講座を開催. 共同通信, 2017.1.13.
- 87) 三島和夫：第67回 睡眠研究のための“異時間空間”「隔離実験室」. ナショナルジオグラフィック, 2017.1.19.
- 88) 三島和夫：こんな痛み・不調にご用心 つらい不眠を解消する!. Health&Life, 387: pp8-12, 2017.2.1.
- 89) 三島和夫：夜驚症・睡眠時驚愕症とは?特徴, 原因, 対応方法, 治療法についてまとめました. LITALICO 発達ナビ, 2017.2.16.
- 90) 三島和夫：血糖値は睡眠の質で変わる! 生活習慣病の原因は「隠れ不眠」だった. 現代ビジネスオンライン, 2017.2.17.
- 91) 三島和夫：生活改善で不眠解消. NHK テキスト今日の健康: 46-9, 2017.2.21.
- 92) 三島和夫：睡眠研究の「異時間空間」 隔離実験室に潜入する. NIKKEI STYLE, 2017.2.21.
- 93) 三島和夫, 綾部直子：最新報告!血糖値を下げるデルタパワーの謎. NHK ガッテン!, 2017.2.22.
- 94) 三島和夫：最強の睡眠を決定! 「快眠メソッド」を実際に試してみた そもそも睡眠とは?. SPA 3月7日号: 119, 2017.2.28.
- 95) 三島和夫：睡眠薬の効果は「4階建て」 ニセ薬, 侮り難し. Yahoo!, 2017.3.5.
- 96) 三島和夫：徹底調査でバッテン! NHK「ガッテン!」を信じるな. 週刊文春: pp124-7, 2017.3.16.
- 97) 三島和夫：「眠れないから寝酒を」は禁物 薬に頼りすぎない不眠症治療を学ぶ. J-CAST ヘルスケア, 2017.3.23.
- 98) 三島和夫：ヴェルト, FeliCa チップを内蔵したウォッチベルトや新モデル「VELDT LUXTURE」発表. CNET Japan, 2017.3.27.
- 99) 三島和夫：スマホと連動!ラグジュアリーな佇まいでありながら, 生活リズムをサポートしてくれる時計. IGNITE, 2017.3.28.
- 100) 三島和夫：外観はアナログ, 中身はスマート 腕時計「ヴェルト ラクスチュア」予約受付開



- 始. J-CASTトレンド, 2017.3.30.
- 101) 三島和夫 : アナログ顔のスマートウォッチ, 光で生活リズム整える. 日経テクノロジーオンライン, 2017.3.30.
- 102) 北村真吾 : 生体リズム内的脱同調の健康影響と脆弱性要因の解明. 宇宙に生きる, 2 : p11, 2016.11.1.
- 103) 北村真吾 : あなたの知らない睡眠のハナシ. Hanako ママ, 45 (12) : 27, 2016.11.8
- 104) 北村真吾 : 「潜在的睡眠不足」危険性判明 生活習慣の盲点. 科学新聞 4面, 2016.12.2.

## 10. 知的障害研究部

### I. 研究部の概要

知的障害研究部は診断研究室、治療研究室、発達障害支援研究室（部長併任）の3室体制で、知的障害など発達障害に関する研究を本年度も広範に進めた。すなわち、精神遅滞（知的障害）、学習障害、注意欠如・多動性障害（ADHD）や自閉症スペクトラムなどの発達障害とその近縁状態の発生要因解明、診断法開発、治療法策定、予防対策に関する研究をそれぞれ発展させた。

発達障害児・者はその障害の発生時期や原因、年齢、重症度、養育環境によりまったく異なった症状を示し、多彩な課題を抱えている。これらの問題解決のために当研究部では、臨床例の解析に加えて、調査研究や実験動物を用いた基礎的研究など多面的アプローチを駆使している。部の英語名は Department of Developmental Disorders と表記していることから、発達障害全般について、神経病態から理解して診断・治療・対策・処遇までの広い守備範囲を研究ターゲットとしている。

平成28年度の常勤研究員は部長（稲垣真澄）、診断研究室長（加賀佳美）、治療研究室長（北洋輔）の3名であった。稲垣と28年4月1日付で赴任した加賀は、主として小児神経学、発達障害医学、神経生理学の立場から研究を進めた。北は特別支援教育学、認知神経科学の立場から研究を進めた。なお稲垣は発達障害支援研究室長を併任した。稲垣と加賀はセンター病院小児神経診療部の併任医師として発達障害児に対する診療を定期的に行い、病院診療部のスタッフとともに臨床研究の充実のため活動を展開した。

28年度の流動研究員は奥村安寿子、鈴木浩太、田中美歩の3名であり、併任研究員の中川栄二（センター病院小児神経科医長、病院外来部長）とともに研究を進めた。客員研究員（井上祐紀、加我牧子、木実谷哲史、軍司敦子、小池敏英、後藤隆章、竹市博臣、田中敦士、中村みほ、林 隆、宮島 祐、三砂ちづる、山崎広子）の13名はこれまで通り研究部員と相互協力して発達障害に関する研究を実施した。今年度新たに、立正大学中田洋二郎教授が客員研究員に加わり発達障害児の保護者支援の研究を進めた。研究生（大城武史、大森幹真、小林朋佳、崎原ことえ、佐久間隆介、須藤茉衣子、中村雅子、水越菜那、米田れい子、安村 明、李 珩）と科研費心理療法士（土井裕一郎）が常勤研究者と共に研究を進めた。外来研究員は大井雄平（学術振興会 DC）が研究に携わり、自閉症スペクトラム、ADHD、学習障害に関する研究を進めた。なお、研究助手として大橋啓子、井上さゆりが事務的な補助を行った。白川由佳は科研費研究補助員として研究活動を支えた。北村柚葵は実習生として研究に参加した。稲垣、加賀、田中は神経研究所疾病研究所第二部の併任研究員あるいは研究生として、基盤研究にも携わった。

### II. 研究活動

#### 1) ADHD の診断・介入に関する研究

乳幼児期からの高次脳機能の発達とその障害について神経生理学的・神経心理学的アプローチにより研究を進めている。特に視・聴覚認知機能に関する研究を推進し、精神遅滞、自閉症、学習障害、ADHD など発達障害児・者に適用してその有用性を明らかにした。今年度はADHD児の意思決定の特徴について発表し、てんかん合併ADHDにおける前頭葉機能障害を光トポグラフィ検査で明らかにした。またADHD児の非薬物治療法としてニューロフィードバック法の有効性に関する介入研究を継続し、注意機能に側頭棘部が関わることを神経生理学的に見出し発表した。そしてADHDの診断と治療法のガイドライン策定にエキスパートとして協力した。（稲垣、加賀、北、安村、奥村、大森、鈴木、田中美、加我、後藤、大城、中川。精神・神経疾患研究開発費）

#### 2) 社会性認知機能評価に関する研究

自閉症スペクトラム障害児の脳機能の検討と早期診断法の確立をはかるため、声認知や行動モ

ニタリングに関する脳機能評価を健常成人，定型発達小児・学童そして，自閉症スペクトラム児において進め論文化した．ヒト声や環境音を用いた新しい聴力検査法を確立して，健常幼児，小児および成人におけるデータ収集を行い，論文化を進めた．また小学校児童の保護者と担任による評定で発達障害の有病率が 8.1%であることを見出し，併存が多い点も明らかにした(稲垣，北，鈴木，安村，崎原，軍司．精神・神経疾患研究開発費，精神薬療分野一般研究助成)

### 3) 学習障害，発達性協調運動障害に関する研究

発達性読み書き障害・算数障害の診断治療ガイドラインを小児科臨床現場で普及するように，講演や学会発表・誌上発表を通じて広報活動を進めた．部全体で学習障害と ADHD との併存に関する研究を進めた．大細胞系機能障害を客観的に評価しうる視覚誘発電位が緑内障症例でも異常を示すことを誌上発表し，当該論文が日本臨床神経生理学会優秀論文賞を受けることとなった．漢字の読み書きの標準検査バッテリーを確立するための多施設共同研究(山梨大学，国立成育医療研究センター，久留米大学)は前年度同様に継続した．一方，発達性協調運動障害(DCD)の国際的な診断ツールである MABC-2 (Movement Assessment Battery for Children) の日本語版の開発は継続され，Age band 2 における定型小児データの論文を発表した．定型小児データの集積に加えて，発達障害児で検査妥当性や汎用性を検証する研究を継続した．(稲垣，北，小林，山崎，鈴木，小枝，小池．精神・神経疾患研究開発費，厚生労働科学研究)

### 4) 発達障害児を持つ家族のレジリエンス向上に関する研究

発達障害とくに自閉症スペクトラム児の養育レジリエンスを客観的に評価可能な指標を確定した事を受けて今年度は，ペアレントトレーニングによる介入前後の養育レジリエンスの変化について検討が進められた．(稲垣，鈴木，加我，小林．厚生労働科学研究，精神・神経疾患研究開発費)

### 5) 小児副腎白質ジストロフィー症(ALD)に関する研究

進行性代謝性変性疾患の一つである小児型 ALD に対する骨髄移植(造血幹細胞移植)療法時期決定と治療後評価のための研究を継続した．脳波成分の特徴について解析を進め，発表した．(稲垣，軍司，崎原，加我，中村雅子．厚生労働科学研究)

### 6) 顕在化しにくい発達障害の特性を早期に抽出するアセスメントツールの開発および普及に関する研究

顕在化しにくい発達障害である学習障害，吃音，チック，発達性協調運動障害の早期アセスメントのために，巡回相談員が簡便に利用可能な質問項目を明らかにするべく，調査研究を開始した．初年度は4つの発達障害に関する質問票を各研究者が作成し，一般幼稚園・保育園に通う就学前幼児について保護者，幼稚園教諭・保育士等が評価を行い，質問項目の精査と抽出を行い信頼性，妥当性の検討を行った．次年度にも継続した調査を計画している．(稲垣，北，加賀．厚生労働科学研究)

### 7) 発達障害児の行動異常モデルにおける研究

Bronx waltzer (bv) マウスの中枢神経系病態解明はとくに ADHD，自閉性障害など発達障害の病態研究，治療研究につながるものと考えている．bv マウスの原因遺伝子(Srrm4)の発現と不安様行動との関連や脳内 GABA 機能の異常に関する基盤研究を神経研究所疾病研究第二部後藤雄一部長，井上健室長との共同で遂行した．これらは発達障害の不安症状の解明と治療法開発に向けた研究につながっている．(稲垣，加賀，田中美，白川，李，加我．精神・神経疾患研究開発費)

### Ⅲ. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

常勤研究者は各種講演などの場を通じて、研究成果を社会に還元した。常勤・非常勤の研究者全員が発達障害児・者とその家族に対しセンター病院において、日常的診療サポートを提供している。

#### (2) 専門教育面における貢献

稲垣、北を中心に病院小児神経科レジデントなど若手医師への臨床、研究指導を日常的に行っている。毎週火曜夕方にレジデント対象の神経生理学セミナーを部内で行い、北が主に講義、実習を担当し、稲垣は電気生理学的所見判読のアドバイスをを行った。また講演会や各種セミナー、講義などにより医師、看護師、保健師、福祉関係専門職、言語聴覚士、学校教員の教育に貢献している。稲垣は日本小児科学会専門医試験委員として小児科医師の専門知識の普及・向上に貢献した。稲垣は東京農工大学工学部の学生講義を担当し、国立障害者リハビリテーションセンター学院児童指導員科の学生に対する「知的障害の医学（概論）」の講義を行った。加賀は山梨大学看護学科で身体観察法の中で小児発達などの診察法について講義を担当した。北は東京学芸大学で学習障害教育学特論、学習障害指導法について、首都大学東京で認知行動学、そして白梅学園大学で非行の心理と教育について講義を担当した。鈴木は常葉大学で生理心理学、東京学芸大学で発達と障害の心理について、立正大学で生理心理学について各々講義を担当した。奥村は複数言語環境にある子どもの相談室の運営に相談員として関わった。6月に防衛医科大学学生実習を稲垣、加賀、北らが担当した。7月開催の国立精神・神経医療研究センター小児神経セミナーでは、全国から集まった小児神経科医に対して稲垣が発達障害の診断と治療の講義を行った。今年度精神保健研究所として初めて世界脳週間イベントに協力し、稲垣は都内の高校生に対して発達障害に関する講義を行い、ラボツアーで稲垣と加賀は聴覚誘発電位計測紹介を行った。

#### (3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援法に示されている専門家養成のため、発達障害支援医学研修を年二回（7月と1月）に企画・実施した。

#### (4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

稲垣は、環境省の子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）の評価委員として参加した。稲垣は加我とともに日本障害者スポーツ協会専門委員会医学委員として、知的障害者の国際スポーツ大会参加における医学的判断という社会活動に貢献している。また、障害者スポーツ医養成研修講師を務めた。併せて稲垣は独立行政法人国立特別支援教育総合研究所運営委員として、当該研究所の活動に関する指導助言を行った。

#### (5) センター内における臨床的活動

全員が病院に併任としてセンター内の臨床的活動に関わり、知的障害、学習障害、ADHD、自閉症スペクトラムなど発達障害の診療に定期的に携わっている。

#### (6) その他

### Ⅳ. 研究業績

#### A. 刊行物

##### (1) 原著論文

- 1) [Kita Y](#), [Suzuki K](#), [Hirata S](#), [Sakihara K](#), [Inagaki M](#), [Nakai A](#): Applicability of the Movement Assessment Battery for Children-Second edition to Japanese children: A study of the age

- band 2. Brain and Development 38 (8): 706-13, 2016.
- 2) Yasumura A, Takimoto Y, Nakazawa E, Inagaki M: Decision making in children with attention-deficit/hyperactivity disorder. Open Journal of Pediatrics 6: 158-62, 2016.
  - 3) Suzuki K, Kita Y, Sakihara K, Hirata S, Sakuma R, Okuzumi H, Inagaki M: Uniqueness of action monitoring in children with autism spectrum disorder: Response types and temporal aspects. Journal of Clinical and Experimental Neuropsychology 2016, DOI: <http://dx.doi.org/10.1080/13803395.2016.1266308>.
  - 4) Ohki T, Gunji A, Takei Y, Takahashi H, Kaneko Y, Kita Y, Hironaga N, Tobimatsu S, Kamio Y, Hanakawa T, Inagaki M, Hiraki K: Neural oscillations in the temporal pole for a temporally congruent audio-visual speech detection task. Scientific Reports 6: 37973. DOI: 10.1038/srep37973. 2016.
  - 5) Ohyama T, Kaga Y, Goto Y, Aoyagi K, Ishii S, Kanemura H, Sugita K, Aihara M: Developmental changes in autonomic emotional response during an executive functional task: A pupillometric study during Wisconsin card sorting test. Brain and Development 39(3):187-95, 2017. DOI: <http://dx.doi.org/10.1016/j.braindev.2016.10.002>.
  - 6) Baba S, Takeshita E, Yamazaki H, Tarashima M, Sasaki M: Disruption of the photoreceptor inner segment-outer segment junction in a 6-year-old girl with Joubert syndrome. Neuro-Ophthalmology 41(1): 19-23, 2016.
  - 7) Muramatsu Y, Tokita Y, Mizuno S, Nakamura M: Disparities in visuo-spatial constructive abilities in Williams syndrome patients with typical deletion on chromosome 7q11.23. Brain and Development 39(2): 145-53, 2017.
  - 8) 加賀佳美, 石井佐綾香, 黒田 格, 神谷裕子, 中村幸介, 金村英秋, 杉田完爾, 相原正男: 重症心身障害者の骨粗鬆症に対する静注用 alendronate の有用性. 脳と発達 49: 113-9, 2017.
  - 9) 井上祐紀, 奥村泰之, 藤田純一: 知的障害児に併存する精神疾患・行動障害への向精神薬処方の実態—大規模レセプトデータベースを活用したコホート研究—. 精神神経学雑誌 118(11): 823-33, 2016.
  - 10) 銘苺実土, 中知華穂, 後藤隆章, 小池敏英: 中学 1-3 年生の英単語綴り困難における重複リスク要因に関する研究: 重複リスク要因の学年的特徴に基づく検討. LD 研究, 25: 272-285, 2016.
  - 11) 瀧元沙祈, 中知華穂, 銘苺実土, 後藤隆章, 雲井未歎, 小池敏英: 学習障害児における改行ひらがな単語の音読特徴: 音読の時間的側面と誤反応の分析に基づく検討. 特殊教育学研究. 54: 65-75, 2016.
  - 12) 山崎広子, 柴 玉珠, 関根久恵, 岩渕一馬, 稲垣真澄, 加我牧子: 国府台病院眼科における知的障害者専門外来: 開設後 10 年の状況. 臨床眼科 70(10): 1565-70, 2016.
  - 13) 高橋孝治, 中川栄二, 竹下絵里, 本橋裕子, 石山昭彦, 齋藤貴志, 小牧宏文, 須貝研司, 北 洋輔, 高橋章夫, 大槻泰介, 佐々木征行: 片側巨脳症における半球離断手術後の非罹患側の脳波経過と発達. てんかん研究 34(3): 619-27, 2017.
- (2) 総説
- 1) 稲垣真澄: 5 知的障がい. (公財) 日本障がい者スポーツ協会 (編): 新版 障がい者スポーツ指導教本 初級・中級. ぎょうせい, pp168-75, 2016.
  - 2) 稲垣真澄: 読字の発達とその障害の検出法. こころの科学 通巻 187 号. 日本評論社, pp34-45, 2016.
  - 3) 稲垣真澄: 学習障害 (限局性学習症). 新島新一, 山本 仁, 山内秀雄 (編): こどもの神経疾患の診かた. 医学書院, pp154-8, 2016.
  - 4) 稲垣真澄, 米田れい子: 発達性言語障害, 語音障害, 吃音, 社会的コミュニケーション障害. 小児内科 48 巻増刊号 小児疾患診療のための病態生理 3 改訂 5 版. 東京医学社,

- pp739-45, 2016.
- 5) 稲垣真澄, 加賀佳美: ADHD とディスレクシア. 精神医学 59(3): 239-245, 2017.
  - 6) 稲垣真澄, 北 洋輔, 奥村安寿子, 加賀佳美: 算数の障害. 精神医学症候群 (第 2 版) - 発達障害・統合失調症・双極性障害・抑うつ障害-I, pp99-103, 2017.
  - 7) 加賀佳美, 稲垣真澄: 精神遅滞 (知的能力障害/知的発達障害). 永井良三, 笠井清登他 (編): 精神科研修ノート 改訂第 2 版. 診断と治療社, pp516-8, 2016.
  - 8) 北 洋輔: 自他識別の発達とその障害. 認知神経科学 18(3, 4): 115-20, 2016.
  - 9) 鈴木浩太, 稲垣真澄: 発達障害児 (者) をもつ養育者のレジリエンス: 尺度の開発と適用について. 精神保健研究 63: 63-71, 2017.
  - 10) 加我牧子, 森山花鈴: 自殺に関する概況と子どもの自殺をめぐって—希死念慮のある子どもの小児神経外来での対応の経験を含めて. 社会と倫理 31: 133-46, 2016.
  - 11) 加我牧子: ランドー・クレフナー症候群 (Landau-Kleffner syndrome; LKS) の特徴と診療の実際. 新薬と臨床 66(1): 80-4, 2017.
  - 12) 小池敏英: 仮名と漢字の特性. 発達障害事典 日本 LD 学会編 丸善出版 pp46-7, 2016.
  - 13) 後藤隆章: ひらがなの読み指導. 発達障害事典 日本 LD 学会編 丸善出版 pp178-9, 2016.
  - 14) 後藤隆章: 漢字の読み指導. 発達障害事典 日本 LD 学会編 丸善出版 pp182-3, 2016.
  - 15) 中田洋二郎: 発達障害における親の「障害受容」—レビュー論文の概観—. 立正大学心理学研究年報 8: 15-30, 2017.
  - 16) 中村みほ: ウィリアムズ症候群のコミュニケーションの異質性. 認知神経科学 18(3,4): 128-34, 2016.
  - 17) 林 隆: ライフサイクルにおけるチェックポイント 学童(高学年) 不登校, いじめ, 不注意, 他害, 自傷行為など. 小児内科, 48(5): 693-6, 2016.
  - 18) 林 隆: 各時期ごとの健診のチェックポイント 5 歳児健診. 小児科診療, 79(5): 703-9, 2016.
  - 19) 宮島 祐: 小児の症候群 2 精神疾患「Gilles de la Tourette 症候群」. 小児科診療 診断と治療社, pp99, 2016.
  - 20) 宮島 祐: 今日の治療指針 第 2 3 章 小児疾患「チック症群」. 医学書院, pp1421-2, 2017.
- (3) 著書
- 1) 稲垣真澄: ②知的能力障害との鑑別 第 2 章 ADHD の診断・評価 5 鑑別診断. 齋藤万比古編: 注意欠如・多動症—ADHD—の診断・治療ガイドライン 第 4 版. じほう, pp125-8, 2016.
  - 2) 稲垣真澄: ⑥神経発達症群—2 (知的能力障害, 限局性学習症, 発達性協調運動症) 第 2 章 ADHD の診断・評価 6 併存症. 齋藤万比古編: 注意欠如・多動症—ADHD—の診断・治療ガイドライン 第 4 版. じほう, pp176-83, 2016.
- (4) 研究報告書
- 1) 稲垣真澄, 北 洋輔, 鈴木浩太, 中川栄二, 宮島 祐, 芦沢文子: 発達障害の臨床症状に関する包括的疫学調査. 先進医薬研究振興財団 2016 年度 研究成果報告書. 公益財団法人 先進医薬研究振興財団, pp6-7, 2017.
- (5) 翻訳
- (6) その他
- 1) 稲垣真澄: 母親の養育レジリエンスを高めるために. あゆみ 2016 久留米大学小児科同門会会報 第 44 号, p74, 2016.
  - 2) 稲垣真澄: 小児の吃音. ドクターサロン vol.60 7 月, pp35-9, 2016.
  - 3) 稲垣真澄: 学習障害. 日刊ゲンダイ, 2016.

- 4) 稲垣真澄：発達障害の臨床症状に関する包括的疫学調査. 先進医薬年報 No. 17 p20, 2016.

**B. 学会・研究会における発表**

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kita Y, Yamamoto H, Hanakawa T, Inagaki M: Magnocellular function in children with developmental dyslexia. The 5th memorial IBIC international symposium, Tokyo, 2016.7.29.
- 2) 稲垣真澄：小児神経科における光トポグラフィー (NIRS) の臨床応用. 実践教育セミナー3：第2回明日から役立つ小児神経生理学入門 第58回日本小児神経学会学術集会, 東京, 2016.6.2.
- 3) 稲垣真澄：指定討論 ミニシンポジウム 1 知的障害の研究—遺伝子・環境との関係—. 第46回日本神経精神薬理学会年会, 韓国 ソウル, 2016.7.2.
- 4) 稲垣真澄：発達障害児を持つ保護者の養育レジリエンスの向上にむけて. 第20回研修セミナー 第116回日本小児精神神経学会, 山口, 2016.11.12.
- 5) 加賀佳美：技術講習会2 小児脳波入門. 第46回日本臨床神経生理学会, 福島, 2016.10.29.
- 6) 加賀佳美：電気生理 (ABR, P300) 実演. 実践教育セミナー3：第2回明日から役立つ小児神経生理学入門 第58回日本小児神経学会学術集会, 東京, 2016.6.2.
- 7) 北 洋輔：近赤外線スペクトロスコープによる脳機能の測定実習. 小児の測定に向けて. 実践教育セミナー3：第2回明日から役立つ小児神経生理学入門 第58回日本小児神経学会学術集会, 東京, 2016.6.2.
- 8) 北 洋輔：自他識別の発達とその障害. シンポジウム 1 社会脳の発達とその障害 (発達障害) 第21回認知神経科学学術集会, 東京, 2016.8.6.
- 9) 奥村安寿子：文字単語処理と視覚的注意：初期視覚過程における相互作用的關係 ライジングスターセッション2. 第34回日本生理心理学会大会, 愛知, 2016.5.15.
- 10) 軍司敦子, 竹市博臣, 廣永成人, 高橋秀俊, 金子 裕, 飛松省三, 稲垣真澄：ヒト声聴取時の感覚運動野における脳磁場反応. シンポジウム 4 脳磁図の小児への応用 第31回日本生体磁気学会大会, 石川, 2016.6.10.
- 11) 中村みほ：ウィリアムズ症候群におけるコミュニケーションの異質性. シンポジウム 1 社会脳の発達とその障害 (発達障害) 第21回認知神経科学学術集会, 東京, 2016.8.6.

(2) 一般演題

- 1) Kita Y, Inagaki M, Nakai A: Reliability and validity of the Movement Assessment Battery for Children-Second Edition checklist: a preliminary study on the Japanese children. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, 2016.7.29.
- 2) Okumura Y, Kita Y, Suzuki K, Inagaki M: Quantifying distractibility in children with attention deficit hyperactivity disorder: Attentional capture by salient and attractive distractors. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, 2016.7.29.
- 3) Okumura Y, Kasai T, Takeya R, Murohashi H: Initial-letter position modulates spatial attention towards Japanese hiragana strings. Society for Psychophysiological Research 56th Annual Meeting, Minneapolis, 2016.9.23.
- 4) Suzuki K, Okumura Y, Kita Y, Oi Y, Shinoda H, Inagaki M: Involvement of frontal activities in proactive inhibition depends on the proportion of incompatible stimuli: a simultaneous EEG and NIRS study. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, 2016.7.29.
- 5) Kaga M, Nakamura M, Gunji A, Sakihara K, Inagaki M, Suzuki M: Forty nine-years follow-up of a patient with Landau-Kleffner syndrome. 14th International Child Neurology Congress 2016, Amsterdam, 2016.5.1-5.5.
- 6) Kaga M, Inagaki M, Oana S: Evaluation of the cognitive function in the middle aged Down

- syndrome with severe intellectual disabilities. 2016 IASSIDD 15th World Congress, Melbourne, 2016 .8.15-8.19.
- 7) Takahashi H, Gunji A, Kaneko Y, Hironaga N, Hagiwara K, Inagaki M, Tobimatsu S, Hanakawa T, Kamio Y: Auditory steady-state gamma responses of MEG in children with typical development and those with autism spectrum disorders. The 20<sup>th</sup> International Conference of Biomagnetism (BIOMAG), Soul, 2016.10.1-10.6.
  - 8) 北 洋輔, 平田正吾, 濱田香澄, 奥村安寿子, 池田吉史, 鈴木浩太, 松本秀彦: 特別支援教育における発達障害への実験的接近(3) - 注意欠陥多動性障害(ADHD)児の高次認知機能 -. 日本特殊教育学会 第54回大会, 新潟, 2016.9.18.
  - 9) 北 洋輔: 文字の読みを支える脳機能の発達的变化とその異常. 第46回日本臨床神経生理学会, 福島, 2016.10.28.
  - 10) 奥村安寿子: ライムを単位とした不規則単語の習得を促す支援について 中学校における英単語習得困難の背景とその支援. 日本LD学会第25回大会, 神奈川, 2016.11.20.
  - 11) 奥村安寿子, 河西哲子, 室橋春光: ひらがな文字列に対する空間的注意は語頭位置に調節される. 第34回日本生理心理学会大会, 愛知, 2016.5.14.
  - 12) 奥村安寿子, 北 洋輔, 大森幹真, 鈴木浩太, 福田亜矢子, 安村 明, 稲垣真澄: ADHD児におけるニューロフィードバック療法の効果予測. 第21回認知神経科学学術集会, 東京, 2016.8.6.
  - 13) 鈴木浩太: エラー関連陰性電位. 第46回日本臨床神経生理学会, 福島, 2016.10.29.
  - 14) 大井雄平, 北 洋輔, 鈴木浩太, 奥村安寿子, 奥住秀之, 山下裕史朗, 稲垣真澄: ADHD児の空間性ワーキングメモリにかかわる脳血流動態の特徴. 第21回認知神経科学学術集会, 東京, 2016.8.6.
  - 15) 小橋孝介, 大久保真理子, 斎藤良彦, 中川栄二, 竹下絵里, 本橋裕子, 石山昭彦, 斎藤貴志, 小牧宏文, 須貝研司, 福田亜矢子, 大森幹真, 加賀佳美, 稲垣真澄, 佐々木征行: ADHDの睡眠時脳波の周波数解析と臨床症状の関係 - 睡眠紡錘波(spindle)に着目して -. 第58回日本小児神経学会学術集会, 東京, 2016.6.3.
  - 16) 高橋秀俊, 軍司敦子, 金子 裕, 廣永成人, 萩原綱一, 稲垣真澄, 飛松省三, 花川 隆, 神尾陽子: 脳磁図の小児への応用: 自閉症スペクトラム児の聴覚誘発脳磁界反応について. 第31回日本生体磁気学会大会, 石川, 2016.6.9.
  - 17) 小池敏英, 中 知華穂, 大山帆子, 彌永さとみ, 中村理美, 後藤隆章: 通級学級低学年における読み書き低成績の背景と支援. 日本特殊教育学会 第54回大会, 新潟, 2016.9.17.
  - 18) 銘苅実土, 後藤隆章, 小池敏英: 中学生における英単語綴り困難の背景と支援 英単語綴りの基礎スキルの習得に基づく困難の改善における検討. 日本特殊教育学会 第54回大会, 新潟, 2016.9.19.
  - 19) 大山帆子, 増田純子, 彌永さとみ, 成田まい, 須藤史晴, 小池敏英: ひらがな漢字の検索・完成課題による音読困難の軽減効果(1) ガイドライン等価課題を用いた支援効果の評価. 日本特殊教育学会 第54回大会, 新潟, 2016.9.19.
  - 20) 崎原ことえ, 軍司敦子, 加賀佳美, 中川栄二, 稲垣真澄: 脳波解析に基づく発達障害児の脳機能評価 - ASDとAD/HDを中心に -. 第46回日本臨床神経生理学会, 福島, 2016.10.28.

### (3) 研究報告会

- 1) 稲垣真澄: 研究班の目指すもの. 厚生労働科学研究費補助金「顕在化しにくい発達障害の特性を早期に抽出するアセスメントツールの開発および普及に関する研究」班 平成28年度第1回研究班会議, 東京, 2016.4.24.
- 2) 稲垣真澄, 加賀佳美, 奥村安寿子, 鈴木浩太, 大井雄平, 斎藤良彦, 中川栄二: てんかんの神経生理学的マーカーの開発と病態解明. 国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-4 「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」



- 班 平成 28 年度第 1 回研究班会議，東京，2016.6.12.
- 3) 稲垣真澄，加我牧子：平成 27 年度知的障害者スポーツ活動報告．日本障がい者スポーツ協会医学委員会，東京，2016.6.19.
  - 4) 稲垣真澄：発達障害（ADHD，LD）の先進的診断・治療法開発に関する研究．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-7 「発達障害の先進的診断・治療法開発に関する研究」班 平成 28 年度第 1 回研究班会議，東京，2016.6.26.
  - 5) 稲垣真澄，奥村安寿子，北 洋輔，大井雄平，鈴木浩太，相原正男，小枝達也，山下裕史朗：発達障害（ADHD，LD）の診断治療法開発．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-7 「発達障害の先進的診断・治療法開発に関する研究」班 平成 28 年度第 1 回研究班会議，東京，2016.6.26.
  - 6) 稲垣真澄，北 洋輔，加賀佳美，鈴木浩太，相原正男，小枝達也，中川栄二，山下裕史朗：発達障害（ADHD，LD）の併存症病態解明．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-7 「発達障害の先進的診断・治療法開発に関する研究」班 平成 28 年度第 1 回研究班会議，東京，2016.6.26.
  - 7) 稲垣真澄，奥村安寿子，北 洋輔，大井雄平，加賀佳美，鈴木浩太，中川栄二，相原正男，青柳閣郎，小枝達也，盛崎俊浩，山下裕史朗：発達障害（ADHD，LD）の診断治療法開発．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-7 「発達障害の先進的診断・治療法開発に関する研究」班 平成 28 年度第 2 回研究班会議，東京，2016.11.13.
  - 8) 稲垣真澄，北 洋輔，鈴木浩太，中川栄二，宮島 祐，芹沢文子：発達障害の臨床症状に関する包括的疫学調査．第 49 回精神神経系薬物治療研究報告会，大阪，2016.12.2.
  - 9) 加賀佳美，斎藤良彦，大井雄平，田中美歩，土井裕一朗，中川栄二，稲垣真澄：注意欠陥・多動性障害（ADHD）児の病態解明と神経生理学的マーカーの開発－脳波周波数解析と事象関連電位による検討－．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 28 年度 研究報告会（第 28 回），東京，2017.2.20.
  - 10) 北 洋輔：読み書き障害の早期アセスメント評価．厚生労働科学研究費補助金「顕在化しにくい発達障害の特性を早期に抽出するアセスメントツールの開発および普及に関する研究」班 平成 28 年度第 1 回研究班会議，東京，2016.4.24.
  - 11) 北 洋輔：読み書き障害の早期アセスメント評価．厚生労働科学研究費補助金「顕在化しにくい発達障害の特性を早期に抽出するアセスメントツールの開発および普及に関する研究」班 平成 28 年度第 2 回研究班会議，東京，2016.11.5.
  - 12) 北 洋輔，鈴木浩太，加賀佳美，稲垣真澄，相原正男，小枝達也，中川栄二，山下裕史朗：発達障害（ADHD，LD）の併存症病態解明．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-7 「発達障害の先進的診断・治療法開発に関する研究」班 平成 28 年度第 2 回研究班会議，東京，2016.11.13.
  - 13) 鈴木浩太，稲垣真澄，平谷美智夫，加我牧子：教員・保育者における発達障害に関する“気づき”の研究 テキストマイニング技法を用いた検討．明治安田こころの健康財団報告会，東京，2016.7.23.
  - 14) 田中美歩，佐藤敦史，池田和隆，白川由佳，加賀佳美，李コウ，刑部仁美，井上 健，稲垣真澄：不安を伴う発達障害モデルマウスの病態解析．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 28 年度 研究報告会（第 28 回），東京，2017.2.20.
  - 15) 中川栄二：発達障害を伴う小児てんかんの臨床病態の解明．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-4 「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」班 平成 28 年度第 1 回研究班会議，東京，2016.6.12.
  - 16) 中川栄二，斎藤良彦，山本寿子，岩淵惠美，奥村安寿子，鈴木浩太，大井雄平，北 洋輔，加賀佳美，稲垣真澄：ADHD の抑制機能障害の病態解明．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-7 「発達障害の先進的診断・治療法開発に関する研究」班 平成 28 年度

- 第1回研究会議，東京，2016.6.26.
- 17) 中川栄二，齋藤良彦，山本寿子，大久保真理子，小橋孝介，大井雄平，鈴木浩太，奥村安寿子，北 洋輔，加賀佳美，稲垣真澄：ADHD の抑制機能障害の病態解明．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-7 「発達障害の先進的診断・治療法開発に関する研究」班 平成28年度第2回研究会議，東京，2016.11.13.
  - 18) 金澤恭子，池谷直樹，齋藤貴志，岩崎真樹，高橋祐二，中川栄二：成人・高齢者てんかんの臨床病態と治療の解析．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-4 「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」班 平成28年度第1回研究会議，東京，2016.6.12.
  - 19) 軍司敦子，大城武史，武井雄一，佐久間隆介：ADHD の注意障害の病態生理．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-7 「発達障害の先進的診断・治療法開発に関する研究」班 平成28年度第1回研究会議，東京，2016.6.26.
  - 20) 小池敏英：学習障害の診断法開発に関する研究．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-7 「発達障害の先進的診断・治療法開発に関する研究」班 平成28年度第1回研究会議，東京，2016.6.26.
  - 21) 軍司敦子，大城武史，武井雄一，佐久間隆介：ADHD の注意障害の病態生理．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-7 「発達障害の先進的診断・治療法開発に関する研究」班 平成28年度第2回研究会議，東京，2016.11.13.
  - 22) 小池敏英，中知華穂，銘莉実土，大山帆子，彌永さとみ，成田まい：学習障害の診断プログラム開発に関する研究．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 28-7 「発達障害の先進的診断・治療法開発に関する研究」班 平成28年度第2回研究会議，東京，2016.11.13.
  - 23) 山本寿子，中川栄二，北 洋輔，竹下絵里，本橋裕子，石山昭彦，齋藤貴志，小牧宏文，須貝研司，稲垣真澄，佐々木征行：ADHD 治療薬による脳波への影響の検討．国立精神・神経医療研究センター病院 平成28年度 病院研究発表会，東京，2017.3.14.

#### (4) その他

- 1) 稲垣真澄：プログラム委員．第58回日本小児神経学会学術集会，東京，2016.6.3.
- 2) 稲垣真澄，加賀佳美：ラボツアー 音刺激による脳の指紋を比べてみよう．世界脳週間2016 NCNP レクチャー&ラボツアー 脳の科学の最前線，東京，2016.7.16.
- 3) 稲垣真澄：プログラム委員．第46回日本臨床神経生理学会，福島，2016.10.27.

#### C. 講演

- 1) 稲垣真澄：平成27年度活動報告．平成28年度日本障がい者スポーツ協会 医学委員会，東京，2016.6.19.
- 2) 稲垣真澄：発達障害児の示す認知行動の特徴から探る発達期の脳機能の偏倚について．東京農工大学平成28年度脳神経科学講義，東京，2016.7.13.
- 3) 稲垣真澄：発達障害総論（ADHD，LDを中心に）．第22回国立精神・神経医療研究センター小児神経セミナー，東京，2016.7.15.
- 4) 稲垣真澄：発達障害の脳を守り，育むための方策：3つのヒント．世界脳週間2016 NCNP レクチャー&ラボツアー 脳の科学の最前線，東京，2016.7.16.
- 5) 稲垣真澄：知的障害のあるひとの機能退行を防ぐために．杉並区障害者グループホーム地域ネットワーク事業講座，東京，2016.7.21.
- 6) 稲垣真澄：発達障害児の現状．Work Shop 2016「気になる子ども」への関わり方を考える．日本口腔衛生学会関東地方研究会・日本小児歯科学会関東地方会・日本障害者歯科学会・日本歯科衛生学会ジョイント4主催，東京，2016.7.31.

- 7) 稲垣真澄：リハビリテーション概論 LD, ディスレクシア. 国立障害者リハビリテーションセンター学院児童指導員科 講義, 埼玉, 2016.8.4.
- 8) 稲垣真澄：障害各論「知的障害」. 平成 28 年度中級障がい者スポーツ指導員養成講習会 (3), 東京, 2016.10.10.
- 9) 稲垣真澄：特異的発達障害：診断・評価・介入について. 東京都立小児総合医療センター講演会, 東京, 2017.1.24.
- 10) 稲垣真澄：顕在化しにくい発達障害：早期アセスメントの研究ストラテジー. 精神保健研究所ランチョンミーティング, 東京, 2017.2.6.
- 11) 稲垣真澄：ADHD の診断と治療. 国立精神・神経医療研究センター市民公開講座「発達障害の診断と治療の最前線」, 東京, 2017.2.19.
- 12) 稲垣真澄：知的・発達しょうがいの病理. 平成 28 年度障がい者スポーツ医師養成講習会, 埼玉, 2017.2.25.

#### D. 学会活動

##### (1) 学会主催

##### (2) 学会役員

- 1) 稲垣真澄：日本小児神経学会 評議員
- 2) 稲垣真澄：日本臨床神経生理学会 代議員
- 3) 稲垣真澄：日本神経精神薬理学会 評議員
- 4) 稲垣真澄：小児脳機能研究会 世話人
- 5) 稲垣真澄：日本てんかん学会 てんかん専門医指導医
- 6) 稲垣真澄：日本発達障害学会 評議員
- 7) 加賀佳美：日本小児神経学会 評議員
- 8) 加賀佳美：日本臨床神経生理学会 代議員
- 9) 加賀佳美：日本小児神経学会 長期計画委員
- 10) 加賀佳美：日本てんかん学会 てんかん専門医指導医
- 11) 加賀佳美：小児脳機能研究会 世話人
- 12) 北 洋輔：日本 DCD 学会 理事

##### (3) 座長

- 1) 稲垣真澄, 宮島 祐：座長 一般演題 (口演)：発達障害 1. 第 58 回日本小児神経学会学術集会, 東京, 2016.6.3.
- 2) 稲垣真澄, 加我牧子：座長 シンポジウム 1 社会脳の発達とその障害 (発達障害). 第 21 回認知神経科学学術集会, 東京, 2016.8.6.
- 3) 稲垣真澄：座長 神経生理学でわかる中枢神経系の成長, 発達. 第 46 回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島, 2016.10.28.
- 4) 稲垣真澄：座長 脳波と臨床応用. 第 46 回日本臨床神経生理学会学術大会, 福島, 2016.10.28.
- 5) 稲垣真澄：座長 セッションIV 知的障害研究部. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 28 年度 研究報告会 (第 28 回), 東京, 2017.2.20.
- 6) 稲垣真澄：座長 特別支援教育における医療と教育の連携. 第 9 回多摩発達障害研究会 学術講演会, 東京, 2017.3.9.
- 7) 加我牧子：座長 発達障害にともなう認知の問題点. 第 21 回認知神経科学学術集会, 東京, 2016.8.6.
- 8) 中川栄二：座長 発達障害とてんかん—脳波所見から考える治療的アプローチ. 第 21 回認知神経科学学術集会, 東京, 2016.8.6.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 稲垣真澄：日本小児神経学会機関誌「Brain & Development」Managing Editor
- 2) 稲垣真澄：発達障害研究 編集委員
- 3) 加賀佳美：日本小児神経学会機関誌「脳と発達」 編集委員
- 4) 北 洋輔：日本小児神経学会機関誌「Brain & Development」Editorial Board
- 5) 北 洋輔：日本小児神経学会機関誌「脳と発達」アドバイザー

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 第21回発達障害支援医学研修，東京，2016.07.06-07.
- 2) 第22回発達障害支援医学研修，東京，2017.01.25-26.

(2) 研修会講師

- 1) 稲垣真澄：発達障害児をもつ母親の養育レジリンス向上の支援策．国立精神・神経医療研究センター第21回発達障害支援医学研修，東京，2016.7.7.
- 2) 稲垣真澄：発達障害の医学的理解～医療ができること，学校ができること．平成28年度あきる野市教育委員会・都立あきる野学園共催 特別支援教育研修会，東京，2016.8.8.
- 3) 稲垣真澄：気になる子どもの就学前の気づき．国立障害者リハビリテーションセンター 平成28年度 発達障害支援者研修会，埼玉，2016.11.1.

F. その他

## 11. 社会復帰研究部

### I. 研究部の概要

社会復帰研究部は、生物・心理・社会的観点から精神疾患や精神障害を多面的に捉え、施策としても導入可能な精神保健医療福祉のサービスモデルを呈示し、その効果に関する実証研究を推進することを目的の第一としている。研究の実施にあたっては、大臣指針および厚生労働省が実施する「これからの精神保健医療福祉のあり方検討会」で示された方向性を重視し、エビデンスに基づく政策提言を行うことを目指している。

近年は、重症精神障害者の地域生活支援を可能にするための具体的で広く社会に普及可能な精神保健医療福祉のシステムモデル作りを目指し、当事者のリカバリー支援の観点から、個別性重視のサービスモデルの開発に力を入れている。具体的には、従来の「居場所」としてのデイケアから、当事者の希望するアウトカムを達成できるデイケアへと移行するためのモデル構築に関する研究、多職種によるアウトリーチサービスの開発研究および普及のため研修、精神障害者の一般就労と職場適応を支援するためのモデルプログラムの開発普及などを実施している。これに加えて、当事者のリカバリーや主体性、権利擁護に焦点を当てたサービスモデルの検討にも取り組んでいる。ピアサポートやピアスタッフ（自らの障害の経験を活かしながら支援に携わるスタッフ）に関する効果検証や研修のあり方の検討といった、当事者の力や視点を効果的に活用していくための地域精神保健医療福祉システム作りに関する研究も実施している。さらには自治体および精神保健福祉センター等の行政の役割にも着目し、より包括的なサービスを提供するための重層的支援体制の確立のための具体的方法につき、自治体関係者、精神保健福祉センターとの協働による研究にも力を入れている。

これらの研究活動により、地域における当事者のリカバリー支援が可能となる我が国の精神保健医療福祉のあり方につき政策提言していくため、以下の人員構成で活動を行うとともに、センター病院専門疾病センターの「地域精神科モデル医療センター」のデイケア、訪問看護ステーション PORT の協働、研究所内の他部との連携および外部機関とのネットワークの構築についても重視している。

部長：藤井千代、精神保健相談研究室長：佐藤さやか、援助技術研究室長：山口創生、流動研究員：松長麻美、水野雅之（～11.30）、科研費研究員：種田綾乃、澤田宇多子、併任研究員：平林直次、坂田増弘、佐竹直子、客員研究員：伊藤順一郎、原 敬造、福井里江、瀬戸屋雄太郎、吉田光爾、橘 薫子、杉山直也（1.23～）、研究生：久永文恵、小川 亮、佐々木奈都記、水野雅之（12.1～）

さらに今年度から、医療観察法医療の一般精神科医療への応用を推進するため、司法精神医学研究部よりの菊池安希子 専門医療・社会復帰研究室長と米田恵子 流動研究員が当研究部の併任となり、司法精神医学領域との連携の促進を図っている。

### II. 研究活動

#### 1) 精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究（藤井、佐藤、山口）

平成 25 年の精神保健福祉法改正を受け、精神障害者の地域保健医療福祉サービスの展開について具体的かつ実現可能な方法を提示することが本研究の目的であった。外来診療によるケアマネジメントの強化、自治体による地域精神保健活動支援の在り方、精神科デイケアの機能分化等の研究班に加え、いわゆる相模原事件の検証および再発防止策検討チームの報告書を踏まえ、措置入院制度運用の現状分析及び今後の改善策への提言を目的に措置入院患者の地域包括支援のあり方に関する研究も実施している。全国の自治体に対するアンケート調査の分析、措置診断書、症状消退届の分析、措置入院者の特徴の分析等の結果および先行研究レビュー、エキスパートコンセンサスにより、措置入院の運用に係る自治体職員を対象としたガイドラインおよび措置入院診療ガイドラインを作成中である。また措置入院者の退院後支援ニーズアセスメントについても開発中である。

#### 2) デイケアからの地域移行に関する研究（佐藤、藤井）

我が国の医療機関における就労支援の内容や利用者の臨床像の実態について就労支援を主たる業務とする地域支援機関を比較しつつ基礎的資料を得るため調査研究を行った。調査の結果、デイケア

が主たる支援機関の場合、比較的就職が容易と思われる若年層で高機能の利用者の背中を押す、という機能を担っていることが示唆された。ただ、ほとんどのケースで地域との連携と行っているため、本調査の内容からは連携の有無と就労の転帰との関連は見いだせなかった。就労支援事業所では最初に就労するまでの期間が長い、一度就職すると離職は少なかった。また就労が困難なケースの生活支援に非常に多くの支援が提供されていた。就業・生活支援 C では就労者数が多く、最初に就労するまでの期間も短い、離職も多かった。ケースロードの多さを考えると支援可能な範囲は限られており、機関単体での支援ではなく役割分担と密な連携が求められていると思われる。

3) **アウトリーチ支援における認知行動療法の提供に関する研究（佐藤，水野，松長）**

Assertive Community Treatment (ACT) 支援における認知行動療法 (Cognitive Behavioral Therapy : CBT) の効果について Cluster Randomized Controlled Trial (クラスターRCT) デザインによる介入研究を実施した。ベースラインデータの検討の結果、利用者のベースラインデータについて介入群のほうが対照群と比べて ACT 利用期間短く、特性不安や他者評価不安が高く、主観的なリカバリー志向性が低かった。また外出や日々の活動の遂行程度の程度から主観的に判断さらえる身体的な QOL や自分自身に対する満足度や日々のネガティブな気分の主観的な生起頻度から判断される心理的な QOL が低かった。さらにスタッフデータについて介入群のほうが対照群と比べて CBT 研修経験のあるものが多かった。また 4 か月間の介入の効果検討の結果、利用者の GAF 得点において介入群のみ有意に改善していた。今後、十分が介入期間および追跡期間において、数理統計的にクラスターの影響を考慮し、介入効果の分析が可能な混合効果モデルによる分析を実施予定である。

4) **精神障害者の地域生活を支えるための精神科診療所の役割に関する研究（藤井）**

精神科診療所の類型を、仮に多機能型診療所（外来診療＋訪問看護＋デイケア＋訪問診療または往診＋チームミーティング実施）とそれ以外の非多機能型診療所に分類し、それらの地域における役割の違いを検討している。日本精神神経科診療所協会所属の診療所から多機能型診療所と非多機能型診療所を無作為に抽出し、それぞれの診療所の初診患者連続 50 例の属性、サービス利用状況、転帰について調査した。さらに多機能型診療所 1 施設に関して、連続 6 日間に受診した全外来患者の属性およびサービス利用状況を調査した。1.8 ヶ月目のフォローアップ調査においては、多機能型診療所では、非多機能型診療所と比較し、包括的支援を必要としているハイユーザー患者のフォローアップ率が高く、状態が改善している傾向が認められた。研究結果からは、多機能型診療所は比較的重度の精神障害者の地域生活を支えるための有効な社会資源となりうることが示唆された。

5) **精神障がい者への就労支援現場で使用可能な尺度開発研究（佐藤，佐々木，山口）**

本研究の目的は精神障害を対象とした就労場面における社会的スキル尺度 (SSS-W) と就労場面における認知機能尺度 (VCRS 日本語版) を作成することであった。研究終了時期までに全国 11 支援の利用者 144 名 (男性 52 名, 女性 92 名, 平均年齢 38.67±9.156 歳) から協力を得た。SSS-W について因子分析の結果、4 因子 20 項目の最終版が作成され、十分な内的整合性および併存的妥当性が示された。また VCRS は BACS 中程度の相関があり原版と同様に地域での使用に有用と考えられた。現在両尺度とも投稿準備中である。

6) **個別援助付き雇用に関する研究（山口，佐藤，松長，水野）**

精神障害者に対する就労支援として最も効果的とされる individual placement and support (IPS) に準ずる個別型援助付き雇用の均てん化とプロセスに関する調査に取り組んだ。具体的には実践者とネットワークを構築し、日本版個別型援助付き雇用フィデリティ調査を実施した。また、統合失調症の利用者に対する支援要素を検証するための長期追跡調査も平行して実施中である。

7) **ピアサポートの効果検証に関する研究（山口，水野，種田，澤田）**

ピアスタッフの効果検証を行うことを目的とし、関東および福岡県における地域活動支援センターおよび就労継続支援 B 型事業所（合計 31 機関、うち 17 機関はピアスタッフを雇用）を対象に、ナチュラルコース・コホートを実施した。ベースラインの時点での研究協力機関の全スタッフおよびピアスタッフに対する自記式調査を実施し、現在分析を進めている。また、新規利用者に対する 18 ヶ月間の追跡調査は、平成 28 年 4 月～平成 29 年 9 月をリクルート期間として実施中である。なお、本研究は日本で初めてのピアサポートの効果検証研究である。

8) 障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に関する研究（山口，藤井，種田）

障害領域におけるピアサポートの専門性および有効性を高めるための研修カリキュラムの作成にあたり、一般社団法人メンタルヘルスピアサポート専門員機構のピアサポート専門員養成研修の全受講者に対して、研修ニーズを把握するための無記名自記式質問紙調査を実施し、128 名より回収を得た。これらを踏まえ、研修カリキュラム作成を進めており、今後、研修実施と並行して、効果検証調査を実施していく予定である。

9) 精神科事前指示に関する研究（藤井）

患者本人の同意判断能力が保たれているときに自身の同意判断能力が著しく低下した際の代理人指示と内容的指示について書面で記載しておく「精神科事前指示（Psychiatric Advance Directives：以下 PADs）」について、我が国における PADs 作成の意義と、作成援助方法に関する研究を実施している。共同研究機関であるあさかホスピタルの精神科救急病棟に入院中であり 2 週間以内に退院が決定している患者に対し PADs 作成の援助を行い、研究参加への同意の得られた患者 62 名に作成援助を実施したところ、患者は PADs 作成により自分の権利がより尊重されるという肯定的な捉え方をする傾向がある一方で、治療法についての選択にあたり、治療者任せとなる傾向が認められ、PADs 作成援助にあたり適切な意思決定支援を行う必要性が認められた。また、複数の入院歴のある患者の方が PADs 作成を希望する傾向が認められた。今後さらに詳細な検討を行っていく。

10) サービス管理責任者に対する研修の構築に関する研究（山口，松長，澤田，小川）

障害者総合支援法下の地域支援事業所におけるサービスの質の維持と向上を図るために、各事業所のサービス管理責任者を対象とする研修の枠組みとそのカリキュラムの構築に関わった。この研修企画は、サービス管理責任者のキャリア全体を通じた継続的な研修を前提としている。2016 年度は、各サービス分類におけるサービス管理責任者にインタビューをして、研修で取り扱うべき内容を調査委した。

11) 精神障害者に対するスティグマに関する研究（山口，松長，小川）

東京大学および Institute of Psychiatry, Psychology & Neuroscience (IoPPN) の研究者と共同し、精神障害者のスティグマ是正を図るための全般的かつ学術的な研究を推し進めた。2016 年度は、新聞メディアを用いた介入の効果を検証する長期無作為比較試験を論文化し、長期フォローアップの分析も開始した。また、INDOG READ という医学生に向けた教育プログラムの効果検証に卵向けて調整している。

12) 訪問看護ステーションによる支援で実施可能な家族支援に関する研究（佐藤，松長）

海外での先行研究でエビデンスの示されている家族心理教育の普及をめざし、現在の我が国の地域精神保健システムの枠内でもっとも普及しているアウトリーチ活動である精神科訪問看護による支援の過程で実施できる家族支援の在り方について家族や訪問看護ステーションスタッフに対するインタビュー等を実施し検討を行った。また家族および訪問看護ステーションスタッフに対するインターネット調査も実施した。得られたデータは家族が 305 名分、ステーションスタッフが 52 名分であった。現在データを精査中である。

## 13) 統合失調症に関するリカバリーガイドラインの作成に関する研究 (山口, 種田, 澤田)

2016年度より, AMED 研究費において, 統合失調症患者を対象とした治療や支援のガイドライン作成に携わった. 利用者の主体性を尊重する支援や利用者からみたリカバリーに関するアウトカムについてのインタビュー調査を実施した. リカバリーカレッジの視察を実施した.

## III. 社会的活動に関する評価

## (1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・地域の保健センターにおける思春期精神保健相談およびアウトリーチによる相談支援を定期的に実施した. (藤井)
- ・地域における講演会などに講師として可能な限り参加した. (藤井, 佐藤, 山口)

## (2) 専門教育面における貢献

- ・東邦大学医学部精神神経医学教室 客員講師 (藤井)
- ・早稲田大学人間科学部「ケースフォーミュレーション」非常勤講師 (佐藤)
- ・日本社会事業大学社会福祉学科「精神保健学」非常勤講師 (佐藤・松長)
- ・立教大学現代心理学部「臨床心理学」非常勤講師 (佐藤)
- ・立教大学大学院臨床心理学専攻「臨床心理面接特論Ⅰ」 (佐藤)
- ・東洋大学「精神保健福祉論」, 「精神保健福祉援助技術」 (精神保健福祉士国家試験直前対策講座) 非常勤講師 (山口)
- ・法政大学「精神保健ソーシャルワークⅡ」非常勤講師 (山口)
- ・文教大学「就労支援サービス」「精神科リハビリテーション」「精神障害者の生活支援システム」非常勤講師 (山口)
- ・東京大学医学部健康総合科学科精神衛生・看護学教室 非常勤講師 (松長)
- ・大妻女子大学「精神保健福祉援助演習Ⅱ」非常勤講師 (種田)
- ・神奈川県立保健福祉大学「精神医学Ⅱ」非常勤講師 (種田)

## (3) 精研の研修の主催と協力

- ・第14回 多職種による包括型アウトリーチ研修の主任・講師, 第4回 医療における個別就労支援研修の主任 (藤井)
- ・第14回 多職種による包括型アウトリーチ研修の副主任・講師, 第4回 医療における個別就労支援研修の副主任・講師 (佐藤・山口)

## (4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

## (5) センター内における臨床的活動

- ・地域精神科モデル医療センターの訪問看護ステーション, および精神科デイケアと連携し, センター内での地域精神科リハビリテーションのシステム作りに関与している (藤井, 佐藤, 山口)
- ・国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーションにて週に 0.5 程度, 訪問時を中心に利用者本人および家族に認知行動療法を提供した (佐藤)

## (6) その他

## IV. 研究業績

## A. 刊行物

## (1) 原著論文



- 1) Kageyama M, Solomon P, Kita S, Nagata S, Yokoyama K, Nakamura Y, Kobayashi S, Fujii C: Factors related to physical violence experienced by parents of persons with schizophrenia in Japan. *Psychiatry Research* 25(243): 439-445, 2016.6.
- 2) Koike S, Yamaguchi S, Ojio Y, Shimada T, Watanabe K, Ando S: Long-term effect of a name change for schizophrenia on reducing stigma. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology* 50(10): 1519-1526, 2016.5.
- 3) Aoki Y, Yamaguchi S, Ando S, Sasaki N, Bernick PJ, Akiyama T: The experience of electroconvulsive therapy and its impact on associated stigma: A meta-analysis. *International Journal of Social Psychiatry* 62(8):708-718, 2016.
- 4) Yamaguchi S, Sato S, Horio N, Yoshida K, Shimodaira M, Taneda A, Ikebuchi E, Nishio M, Ito J: Cost-effectiveness of cognitive remediation and supported employment for people with mental illness: a randomized controlled trial. *Psychological Medicine* 47(1):53-65, 2017.
- 5) Koike S, Yamaguchi S, Ohta K, Ojio Y, Watanabe K, Ando S: Mental health-related stigma among Japanese children and their parents and impact of renaming of schizophrenia. *Psychiatry & Clinical Neurosciences* 71(3):170-179,2017.
- 6) Noguchi R, Sekizawa Y, So M, Yamaguchi S, Shimizu E: Effects of five-minute internet-based cognitive behavioral therapy and simplified emotion-focused mindfulness on depressive symptoms: a randomized controlled trial. *BMC Psychiatry* 17(1):85,2017.
- 7) Mizuno M, Yamaguchi S, Taneda A, Hori H, Aikawa A, & Fujii C: Development of Japanese version of King's Stigma Scale and its short version: psychometric properties of a self-stigma measure. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 71(3): 189-197. 2017.3.
- 8) Matsunaga A, Kitamura T: The effects of symptoms diagnostic labels and education in psychiatry on the stigmatization towards schizophrenia:a questionnaire survey among a lay population in Japan. *Mental Illness* 8(1):16-20,2016.5.
- 9) 渡邊 理, 藤井千代, 佐久間 啓, 安藤久美子, 岡田幸之, 水野雅文: 「精神科事前指示」作成支援ツール開発の試み. *精神医学*, 59(2) : 159-167, 2017.2.
- 10) 関沢洋一, 宗 未来, 野口玲美, 山口創生, 清水栄司: 信頼と心理指標 (抑うつ度, 不安度, ネガティブ感情, ポジティブ感情) の関係の検証: 心理介入によって信頼を向上させることができるか? . *RIETI Discussion Paper Series 16-J-050*, 2016.
- 11) 山口創生, 佐藤さやか, 松長麻美, 坂田増弘, 大島真弓, 武田裕美, 藤井千代, 細谷章子, 伊藤順一郎: 精神科デイケアにおけるアウトリーチ型ケースマネジメントの実装に関するプロセス調査: サービス量分析. *臨床精神医学*, 46(1) : 91-102, 2017.1.
- 12) 水野雅之: 進路選択に関するサポートの活用に伴う要請スキルと小集団閉鎖性が及ぼす影響—友人および父親, 大学教員に注目した検討—. *キャリアデザイン研究*, 12 : 191-198. 2016.9.

(2) 総説

- 1) Liu NH, Daumit GL, Dua T, Aquila R, Charlson F, Cuijpers P, Druss B, Dudek K, Freeman M, Fujii C, Gaebel W, Hegerl U, Levav I, Munk Laursen T, Ma H, Maj M, Elena Medina-Mora M, Nordentoft M, Prabhakaran D, Pratt K, Prince M, Ranganwamy T, Shiers D, Susser E, Thornicroft G, Wahlbeck K, Fekadu Wassie A, Whiteford H, Saxena S: Excess mortality in persons with severe mental disorders: a multilevel intervention framework and priorities for clinical practice, policy and research agendas. *World Psychiatry* 16(1):30-40, 2017.2.
- 2) 藤井千代: 多職種アウトリーチの社会実装. *精神保健研究*, 30 : 11-16, 2017.
- 3) 河野稔明, 安藤久美子, 藤井千代, 菊池安希子, 中澤佳奈子, 曾雌崇弘, 米田恵子, 長沼洋一, 岡田幸之: 医療観察法制定から10年: 現況分析. *精神科*, 29(2) : 151-159, 2016.8.
- 4) 藤井千代: 精神障害者の地域移行. *精神科臨床 Legato*, 2(4) : 216-218, 2016.10.

- 5) 佐藤さやか, 梅田典子, 小野彩香, 池淵恵美: 認知機能リハビリテーションは就労支援にどのように役立つのか. 精神科臨床サービス, 16(3): 364-370, 2016.8.
- 6) 小池進介, 山口創生, 小塩靖崇, 安藤俊太郎: 精神疾患への早期支援, 偏見軽減を目的とした学校現場での啓発・支援活動. 精神科治療学, 31(増刊号): 355-360, 2016.
- 7) 松長麻美, 北村俊則: 精神疾患を合併した妊産婦の支援. 産婦人科の実際, 66(3): 317-322, 2017.3.
- 8) 種田綾乃, 鈴木友理子, 深澤舞子, 伊藤順一郎: 東日本大震災後の地域精神保健医療福祉システム再構築と外部支援—現地支援者のグループインタビューから. 家族療法研究. 33(3): 74-82, 2016.12.
- 9) 池田朋広, 常岡俊昭, 松本俊彦, 高木のり子, 石坂理江, 種田綾乃, 小池純子, 齋藤 勲, 森田展彰, 稲本淳子, 岩波 明: 措置指定病院における精神病性障害と物質使用障害を併せ持つ「精神病性併存性障害者」への集団認知行動療法プログラム実施の意義とその有効性の検討. 日本社会精神医学会雑誌, 26(1): 11-24, 2017.2.

### (3) 著書

- 1) 藤井千代: 精神科医療におけるインフォームド・コンセント. 福井次矢, 高木誠, 小室一成 (総編集): 今日の治療指針, 医学書院, 東京, 979-980, 2017.1.1.
- 2) 佐藤さやか: 障害者就業・生活支援センター. 樋口輝彦, 市川宏伸, 神庭重信, 朝田 隆, 中込和幸 (編): 今日の精神疾患 治療指針, 医学書院, 東京, 882, 2016.10.15.
- 3) 佐藤さやか: 統合失調症に対する精神科リハビリテーション. 別冊日本臨牀 新領域別症候群シリーズ 37「精神医学症候群 (第2版) I—発達障害・統合失調症・双極性障害・抑うつ障害—, 日本臨牀社, 東京, 419-423, 2017.3.20.
- 4) 山口創生, 伊藤順一郎: 地域精神科医療・地域精神保健. 樋口輝彦, 市川宏伸, 神庭重信, 朝田隆, 中込和幸 (編): 今日の精神疾患 治療指針, 医学書院, 東京, 965-969, 2016.10.15.
- 5) 水野雅之: 交流分析. 独立行政法人労働政策研究・研修機構 (編) 新時代のキャリアコンサルティング—キャリア理論・カウンセリング理論の現在と未来—, 独立行政法人労働政策研究・研修機構, 東京, 140-143, 2016.8.31.
- 6) 水野雅之: 応用行動分析. 独立行政法人労働政策研究・研修機構 (編) 新時代のキャリアコンサルティング—キャリア理論・カウンセリング理論の現在と未来—, 独立行政法人労働政策研究・研修機構, 東京, 160-163, 2016.8.31.
- 7) 水野雅之: コミュニティアプローチ①—その理念—. 独立行政法人労働政策研究・研修機構 (編) 新時代のキャリアコンサルティング—キャリア理論・カウンセリング理論の現在と未来—, 独立行政法人労働政策研究・研修機構, 東京, 179-182, 2016.8.31.
- 8) 水野雅之: コミュニティアプローチ②—ソーシャル・サポート—. 独立行政法人労働政策研究・研修機構 (編) 新時代のキャリアコンサルティング—キャリア理論・カウンセリング理論の現在と未来—, 独立行政法人労働政策研究・研修機構, 東京, 180-183, 2016.8.31.

### (4) 研究報告書

- 1) 原 敬造, 山之内芳雄, 藤井千代: 地域生活を支えるための精神科診療所の役割に関する検討. 精神障害者の地域生活支援の在り方とシステム構築に関する研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業 (精神障害分野) 精神障害者の地域生活支援の在り方とシステム構築に関する研究 (研究代表者: 伊藤順一郎) 平成28年度 総括・分担研究報告書. pp35-42, 2017.3.
- 2) 佐藤さやか: ACT・多職種アウトリーチチームの治療的機能についての評価. 精神障害者の地域生活支援の在り方とシステム構築に関する研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業 (精神障害分野) 精神障害者の地域生活支援の在り方とシステム構築に関する研究 (研究代表者: 伊藤順一郎) 平成28年度 総括・分担研究報告書. pp 75-82, 2017.3.
- 3) 藤井千代: 精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業 (精神障害分野) 精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究 (研究代表者: 藤井千代) 平成28年度 総括・分担研究報告書. pp 1-6, 2017.3.

- 4) 佐藤さやか: 精神科デイケア等医療機関における就労支援に関する基礎的研究. 精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業(精神障害分野) 精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究(研究代表者: 藤井千代) 平成28年度 総括・分担研究報告書. pp 89-97, 2017.3.
  - 5) 松長麻美, 山口創生, 澤田宇多子: サービス管理責任者へのインタビュー調査. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野)) 障害福祉サービスにおける質の確保とキャリア形成に関する研究(研究代表者 高木憲司) 平成28年度 総括研究報告. pp 129-144, 2017.3.
- (5) 翻訳
- (6) その他

## B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) Sato S: Cognitive Remediation with Supported Employment. 31st International Congress of Psychology (ICP2016), Thematic Session TS29-26 Neuropsychology, Kanagawa, 2016.7.29.
  - 2) Fujii C: Mental Health in Asia (Chairperson). 36<sup>th</sup> Annual Meeting of the Japanese Society for Social Psychiatry, Tokyo, 2017.3.4.
  - 3) Fujii C: Community Mental Health Services in Japan. 1st Annual Mental Health Meeting of NCMH-IMH-NCNP and International Symposium, Soul, 2017.3.16.
  - 4) 藤井千代: シンポジウム 地域共生社会の実現に向けた地域医療構想及び精神保健福祉法施行後3年の見直しの課題と方向性(コーディネーター, 司会). 第112回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.3.
  - 5) 佐藤さやか: JCORES をリハビリテーションの領域でどう用いるか—認知機能リハと就労支援の統合について—. 第24回日本精神障害者リハビリテーション学会, 長野, 2016.12.1.
  - 6) 山口創生: リカバリー志向型ピア主導型 SDM SHARE システムとその効果: 無作為化臨床試験(シンポジスト). 2016年度リカバリー全国フォーラム, 東京, 2016.8.27.
  - 7) 山口創生: 日本精神障害者リハビリテーション学会 第3回野中賞(最優秀賞) 受賞講演: 重症精神障害者における退院後の地域サービスの利用状況とコスト: ネステッド・クロスセクショナル調査. 第24回日本精神障害者リハビリテーション学会, 長野, 2016.12.2.
  - 8) 山口創生, 佐藤由美子, 黒木紀子: ピアスタッフとリカバリー志向型 SDM ツール「SHARE」による新しい共同意思決定システム. 第12回日本統合失調症学会 米子大会, 鳥取, 2017.3.25.
  - 9) 水野雅之: 就職活動研究の最新動向とその応用可能性—研究と実践をつなぐ試み(1)—(企画者・司会・話題提供者). 日本教育心理学会第58回総会, 香川, 2016.10.9.
  - 10) 種田綾乃: スティグマの是正と当事者視点(シンポジスト). こころのバリアフリー研究会総会, 東京, 2016.6.12.
  - 11) 松谷光太郎, ともちん, 種田綾乃: SDM におけるピアスタッフの役割～SHARE 利用者の声から～(シンポジスト). 2016年度リカバリー全国フォーラム, 東京, 2016.8.27.
- (2) 一般演題
- 1) Yamaguchi T, Fujii C, Saito J, Katagiri N, Tsujino N, Nemoto T, Mizuno M: The differences in suicidal behaviours between schizophrenia and mood disorders. IEPA 10<sup>th</sup> International Conference on Early Intervention in Mental Health, Milan, 2016. 10.21.
  - 2) Yamazawa R, Kikuchi K, Yamada K, Suzuki K, Fujii C, Murakami M, Nemoto T, Mizuno M: Cognitive remediation program in early stage of treatment for psychosis. IEPA 10<sup>th</sup> International Conference on Early Intervention in Mental Health, Milan, 2016. 10.21.

- 3) Sato S, Ikebuchi E, Yamaguchi S, Shimodaira M, Taneda A, Ichikawa K, Ishii K, Usui T, Satake N, Sakata M, Nisio M, Ito J: The Influence Which Adding Cognitive Rehabilitation to Supportive Employment - from Results of RCT Study about Thinking Skills for Work in Japan. 8<sup>th</sup> World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies, Melbourne, 2016.6.24.
- 4) Matsunaga A, Yamaguchi S, Taneda A, Mizuno M, Sato S, Fujii C: Impact of a peer-led and recovery-oriented shared decision making system on conversation in medical consultation. 1<sup>st</sup> mental health international symposium, Seoul, 2017.3.17.
- 5) Mizuno M, Ishikawa M, Sato J: Development of the perceived function of writing scale. The 31<sup>st</sup> International Congress of Psychology, Yokohama, 2016.7.26.
- 6) Sugawara D, Chishima Y, Mizuno M: The effects of self-compassion on stress and on mental health. The 31<sup>st</sup> International Congress of Psychology, Yokohama, 2016.7.27.
- 7) Mizuno M, Chishima Y: Effects of reality shock and copings with reality shock of campus life on adjustment to university. The 31<sup>st</sup> International Congress of Psychology, Yokohama, 2016.7.28.
- 8) 藤井千代: 精神科臨床における守秘義務とは. 第112回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.2.
- 9) 藤井千代: 精神疾患の早期介入における精神科診療所の役割. 第112回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.3.
- 10) 藤井千代: 精神障害者を支える地域づくり—T市保健センターの取り組みから—. 第112回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.3.
- 11) 藤井千代: 精神科デイケアの実態と今後の方向性. 第112回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.4.
- 12) 河野稔明, 藤井千代, 菊池安希子, 岡田幸之: 医療観察法入院処遇における治療ステージダウン・スキップの状況. 第12回日本司法精神医学会大会, 千葉, 2015.6.18.
- 13) 菊池安希子, 法務省保護局総務課精神保健観察企画室, 小山繭子, 河野稔明, 藤井千代, 岡田幸之: 社会復帰促進アセスメントの問題行動に対する予測妥当性の検討. 第12回日本司法精神医学会大会, 千葉, 2016.6.18.
- 14) 藤井千代, 五十嵐禎人, 吉岡眞吾, 山本輝之: イタリアにおける司法精神医療改革. 第12回日本司法精神医学会大会, 千葉, 2016.6.19.
- 15) 藤井千代, 山口創生, 名雪和美, 青木 勉, 川副泰成: 精神科医療機関において通院患者に実施されているインテンシブ・ケアマネジメントの実態に関する研究. 第36回日本社会精神医学会, 東京, 2017.3.4.
- 16) 川副泰成, 名雪和美, 山口創生, 青木 勉, 藤井千代: 精神科医療機関におけるインテンシブ・ケアマネジメントの提供に関連する要因: クロスセクショナル調査. 第36回日本社会精神医学会, 東京, 2017.3.4.
- 17) 鈴木航太, 新村秀人, 山澤涼子, 吉村理穂, 村上雅昭, 根本隆洋, 水野雅文, 三村 将, 藤井千代: 就労支援を目的とした精神科デイケアにおける個別支援の効果について. 第36回日本社会精神医学会, 東京, 2017.3.4.
- 18) 佐藤さやか, 梁田英磨, 足立千啓, 佐藤朋恵, 西内絵里沙, 遠嶋哲吏, 水野雅之: 包括的地域生活支援 (Assertive Community Treatment : ACT) を実践するアウトリーチチームにおける認知行動療法のニーズ把握に関する全国実態調査. 日本認知・行動療法学会第42回大会, 徳島, 2016.10.10.
- 19) 山口創生, 吉田光爾, 岩崎 香: 福祉型訪問サービスの利用とアウトカムの関連: 後ろ向き追跡研究①～臨床アウトカムとサービス利用状況の検証～. 第5回日本精神保健福祉学会全国学術研究集会, 沖縄, 2016.6.24.
- 20) 吉田光爾, 山口創生, 岩崎 香: 福祉型訪問サービスの利用とアウトカムの関連: 後ろ向き追跡研究②～生活課題の把握と改善に着目して～. 第5回日本精神保健福祉学会全国学術研究集会, 沖縄, 2016.6.24.
- 21) 米倉裕希子, 山口創生: 施設職員における知的障害者に対する態度と関連する基本属性: 横断調査. 第64回日本社会福祉学会, 岡山, 2016.9.11.

- 22) 山口創生, 澤田恭一, 中谷真樹, 本多俊紀: 就労・主体性・自己決定: パーソナル・リカバリーを応援する就労支援とは?. 第 24 回日本精神障害者リハビリテーション学会, 長野, 2016.12.2.
- 23) 千葉理恵, 宮本有紀, 山口創生, 西 大輔, 島津明人, 近藤伸介, 笠井清登: 精神保健サービスおよびサービスに関わる人のリカバリー志向性に関連する評価尺度: 文献レビュー. 第 12 回日本統合失調症学会, 鳥取, 2017.3.24.
- 24) 宮本有紀, 小川 亮, 坂井隆太郎, 松本衣美, 山田理絵, 熊倉陽介, 森田康子, 千葉理恵, 山口創生, 西 大輔, 島津明人, 近藤伸介, 笠井清登: 主体的参加によるリカバリー促進実践: 英国リカバリーカレッジの提供する講座内容の分析. 第 12 回日本統合失調症学会, 鳥取, 2017.3.24.
- 25) 松本衣美, 坂井隆太郎, 宮本有紀, 小川 亮, 熊倉陽介, 森田康子, 千葉理恵, 西 大輔, 山口創生, 島津明人, 近藤伸介, 笠井清登: 英国リカバリーカレッジの効果について: 文献レビュー. 第 12 回日本統合失調症学会, 鳥取, 2017.3.24.
- 26) 坂井隆太郎, 松本衣美, 宮本有紀, 小川 亮, 熊倉陽介, 森田康子, 千葉理恵, 西 大輔, 山口創生, 島津明人, 近藤伸介, 笠井清登: リカバリーを支援するプログラムについて: 英国におけるリカバリーカレッジ運営の実態から. 第 12 回日本統合失調症学会, 鳥取, 2017.3.24.
- 27) 小池進介, 山口創生, 小塩靖崇, 安藤俊太郎: 統合失調症へのスティグマはどこから解消されるか? ランダム化比較試験の追加解析より. 第 12 回日本統合失調症学会, 鳥取, 2017.3.25.
- 28) 山口創生, 種田綾乃, 松長麻美, 佐々木奈都記, 水野雅之, 澤田優美子, 坂田増弘, 福井里江, 久永文恵, 伊藤順一郎: ピアスタッフと協働した共同意思決定システムの効果: 無作為化比較臨床試験. 第 12 回日本統合失調症学会, 鳥取, 2017.3.25.
- 29) 水野雅之, 関口雄一, 白倉 瞳: 日本における場面緘黙児への支援に関するシステムティックレビュー—2001 年から 2015 年の論文を対象として—. 日本カウンセリング学会第 49 会大会, 山形, 2016.8.27.
- 30) 尾花真梨, 桑原千明, 水野雅之, 皆川佳織: 小学生における攻撃行動の生起に対する認識の検討. 日本カウンセリング学会第 49 会大会, 山形, 2016.8.28.
- 31) 軽部雄輝・水野雅之・石川万里子: 日常場面における筆記行動の機能に関する研究 (1) —筆記者が経験している筆記行動の機能に関する予備的検討—. 日本心理臨床学会第 35 回秋季大会, 神奈川, 2016.9.5.
- 32) 水野雅之・石川万里子・軽部雄輝: 日常場面における筆記行動の機能に関する研究 (2) —日常的な筆記が自己肯定感に及ぼす影響—. 日本心理臨床学会第 35 回秋季大会, 神奈川, 2016.9.5.
- 33) 石川万里子・軽部雄輝・水野雅之: 日常場面における筆記行動の機能に関する研究 (3) —日常課題への筆記行動が精神的健康に及ぼす影響—. 日本心理臨床学会第 35 回秋季大会, 神奈川, 2016.9.5.
- 34) 水野雅之, 菅原大地, 千島雄太: セルフ・コンパッションがウェルビーイングに及ぼす影響—コーピングを媒介して—. 日本教育心理学会第 58 回総会, 香川, 2016.10.10.
- 35) 水野雅之, 山口創生, 種田綾乃, 堀 弘明, 相川章子, 藤井千代: 日本語版セルフスティグマ尺度の作成と妥当性・信頼性の検討. 第 16 回日本認知療法学会, 大阪, 2016.11.25.
- 36) 松長麻美, 高馬章江, 多田克彦, 北村俊則: ボンディング障害のクラスター分析による判別と Mother-to-Infant Bonding Scale (MIBS) によるスクリーニングの検討. 第 36 回日本精神科診断学会, 東京, 2016.8.5.
- 37) 松長麻美, 高馬章江, 多田克彦, 北村俊則: 正常ボンディング群と病的ボンディング群におけるボンディング障害尺度得点の継時的変化. 第 13 回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会, 東京, 2016.11.19.
- 38) 種田綾乃, 山口創生: 精神科医療機関におけるリカバリー志向の共同意思決定システム「SHARE」導入による変化—個別インタビューによる利用者の声から—. 日本社会福祉学会第 64 回秋季大会, 京都, 2016.9.11.
- 39) 種田綾乃, 山口創生, 水野雅之, 濱田由紀, 澤田宇多子, 相川章子: 精神保健福祉サービス事業所で働くピアスタッフの勤務実態〜ピアスタッフ自身の主観的な状況に着目して. 第 24 回日本精神障害者リハビリテーション学会, 長野, 2016.12.1.

- 40) 大島真弓, 松谷光太郎, 佐藤由美子, 友保快児, 種田綾乃: 精神科デイケアにおいてピアスタッフが  
ができること～「ピア活動」と利用者アンケートを通じて見えてきたこと. 第24回日本精神障害  
者リハビリテーション学会, 長野, 2016.12.1.
- 41) 種田綾乃, 佐藤由美子, 友保快児, 松谷光太郎, 大島真弓: 精神科医療機関のデイケアにおけるピ  
アスタッフ導入に関する利用者の変化とニューズー利用者アンケートの声からー. 第36回日本社会  
精神医学会, 東京, 2017.3.4.

### (3) 研究報告会

- 1) 山口創生, 種田綾乃, 松長麻美, 水野雅之, 佐藤さやか, 藤井千代: ピアスタッフと連携した共同  
意思決定システムの効果検証. 平成28年度精神保健研究所研究報告会, 東京, 2017.2.20.
- 2) 松長麻美, 山口創生, 種田綾乃, 水野雅之, 佐藤さやか, 藤井千代: 共同意思決定システムの利用  
が診察時の会話内容に与える影響. 平成28年度精神保健研究所研究報告会, 東京, 2017.2.20.

### (4) その他

## C. 講演

- 1) 藤井千代: 統合失調症の地域ケアとリカバリー. 第4回精神科病院オープンカンファレンス, 東京,  
2016.7.25.
- 2) 藤井千代: 精神科リハビリテーションについて. 第1回所沢市自立支援協議会こころ部会研修会,  
埼玉, 2016.8.24.
- 3) 藤井千代: 精神科訪問支援が始まった…所沢市からの報告. さいたま市メンタルネット研修会, 埼  
玉, 2016.11.22.
- 4) 藤井千代: いま, 注目の多機能型診療所!～入院に頼らない精神医療の時代へ～. 第37回こんぼ  
亭, 東京, 2016.11.26.
- 5) 藤井千代: 精神科医療の現状と将来. 横浜市医療政策人材育成研修, 神奈川, 2017.3.23.
- 6) 佐藤さやか: 精神障害者の就労の現状と支援のための心理社会的プログラム-認知機能リハビリテー  
ションを中心に. 国立精神・神経医療研究センター病院精神医療セミナー, 東京, 2017.1.25
- 7) 佐藤さやか, 佐藤朋恵: アウトリーチでできる認知行動療法～「不安」に着目した支援～. 第8回  
ACT全国研修会関東大会, 埼玉, 2017.1.29.
- 8) 山口創生: リカバリーを応援する支援とストレングスモデル: 「正しい」ストレングスモデル入門.  
札幌エルプラザ, 北海道, 2016.11.2.
- 9) 山口創生: リカバリーを応援する支援とストレングスモデル: リカバリー志向の支援目標の設定と  
ストレングスモデルの実装. NPO法人 コミュネット楽創, 北海道, 2016.11.3.

## D. 学会活動

### (1) 学会主催

### (2) 学会役員

- 1) 藤井千代: 日本社会精神医学会 評議員
- 2) 藤井千代: 日本精神保健・予防学会 評議員
- 3) 藤井千代: 日本精神神経学会 医療倫理委員
- 4) 藤井千代: 日本精神神経学会 男女共同参画委員
- 5) 藤井千代: 日本社会精神医学会 倫理規定委員
- 6) 佐藤さやか: 日本精神障害者リハビリテーション学会 常任理事
- 7) 山口創生: こころのバリアフリー研究会 評議員
- 8) 山口創生: 日本精神保健福祉学会 編集委員
- 9) 山口創生: 日本統合失調症学会 パブリックリレーション委員会 アドバイザーボード

- 10) 松長麻美：こころのバリアフリー研究会 評議員
- 11) 松長麻美：日本精神障害者リハビリテーション学会 研修委員
- 12) 種田綾乃：スクールソーシャルワーク実践研究会 会長

(3) 座長

- 1) 佐藤さやか：やさしさを伝えるケア技術：ユマニチュード（座長）. 第8回 ACT 全国研修会関東大会, 埼玉, 2017.1.28.
- 2) 山口創生：ピアサポートおよびピアスタッフの可能性と実際（座長）. 平成28年度こころのバリアフリー研究会総会, 東京, 2016.6.12.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 藤井千代：日本社会精神医学会雑誌編集委員
- 2) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
- 3) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 英文監修者
- 4) 山口創生：学会誌投稿論文等査読小委員会及び査読制度の在り方検討小委員会
- 5) 山口創生：Canadian Journal of Psychiatry: reviewer registration
- 6) 山口創生：Epidemiology and Psychiatric Sciences: reviewer registration
- 7) 水野雅之：日本キャリアデザイン学会 査読者

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 藤井千代, 佐藤さやか, 山口創生：第14回 多職種による包括型アウトリーチ研修, 平成28年度精神保健に関する技術研修. 東京, 2016.8.31-9.2.
- 2) 藤井千代, 佐藤さやか, 山口創生：第4回 医療における個別就労支援研修, 平成28年度精神保健に関する技術研修. 東京, 2016.8.31-9.2.

(2) 研修会講師

- 1) 藤井千代：精神保健医療福祉の現状. 第14回 多職種による包括型アウトリーチ研修, 東京, 2016.8.31.
- 2) 佐藤さやか：明日から使えるストレングスアセスメント/ケアプラン作りのコツ. 第14回 多職種による包括型アウトリーチ研修, 東京, 2016.9.1.
- 3) 山口創生：リカバリー志向型のサービスの提供：ゴール設定, 支援哲学, 組織体制. 第14回 多職種による包括型アウトリーチ研修/第4回医療における個別就労支援研修, 東京, 2016.8.31.
- 4) 山口創生：個別型援助付き雇用型就労支援と個別支援の実際:エビデンスにみる効果的な就労支援. 第4回医療における個別就労支援研修, 東京, 2016.9.1.
- 5) 山口創生, 岩上洋一：正しいストレングスモデル入門. 第8回 ACT 全国研修会関東大会, 埼玉, 2017.1.29.

F. その他

- 1) 佐藤さやか：アウトリーチで使える認知行動療法. 国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーション勉強会, 東京, 2016.5.19,6.16.
- 2) 佐藤さやか：認知機能障害と認知機能リハビリテーションの基礎知識. 新ソフト「Jcores」を用いた認知機能リハビリテーションと就労支援研修会, 琉球病院, 沖縄, 2016.7.8.
- 3) 佐藤さやか：Jcores ソフトの実施方法. 新ソフト「Jcores」を用いた認知機能リハビリテーションと就労支援研修会, 琉球病院, 沖縄, 2016.7.9.
- 4) 佐藤さやか：認知機能障害と認知機能リハビリテーションの基礎知識. 「Jcores」を用いた認知機能リハビリテーションと就労支援研修会, 第9回 ACT 十勝勉強会, 北海道, 2016.8.27.

- 5) 佐藤さやか: JCORES をリハビリテーションの領域でどう用いるか—認知機能リハと就労支援の統合について. JCORES 研修会, 東京, 2016.8.28.
- 6) 山口創生, 松谷光太郎: リカバリー志向型/ピア主導型 SDM SHARE システムとその効果: 無作為化臨床試験. 東京大学病院精神科デイホスピタル, 東京, 2016.8.10.
- 7) 山口創生: リカバリー志向型のサービスの提供: ゴール設定, 支援哲学, 組織体制. 国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーション勉強会, 東京, 2016.8.12.
- 8) 山口創生: 「正しい」ストレングスモデル入門. 国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーション勉強会, 東京, 2016.8.20.
- 9) 山口創生: ストレングスモデルにおける個別スーパービジョン. 国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーション勉強会, 東京, 2016.11.25.
- 10) 水野雅之: 就職活動とサポート資源の関連. 第21回キャリア発達研究会, 東京, 2016.5.28.
- 11) 水野雅之: 大学生から社会人へ—臨床心理士という職業選択—. 慶應義塾大学環境情報学部「心的環境論」, 神奈川, 2016.6.17.
- 12) 水野雅之: 就職活動に対する認知的評価とコーピングが就職活動に及ぼす影響—セルフ・コンパッションに着目して—. 日本キャリアデザイン学会奨励研究(研究費助成), 東京, 2016.9.10.
- 13) 松長麻美: 診断的範疇としてのボンディング障害—MIBSによる検討—. 第1回周産期メンタルヘルスセミナー・第2回精神科診断学セミナー, 東京, 2016.8.7.



## 12. 司法精神医学研究部

### I. 研究部の概要

司法精神医学研究部は、平成 15 年 7 月 10 日「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律（以下、医療観察法）」の成立に伴い、同年 10 月に 11 番目の研究部として新たに設置された。精神鑑定研究室、専門医療・社会復帰研究室、制度運用研究室の 3 室より構成されている。

（精神鑑定研究室を中心とする研究）

- ・ 刑事、民事、家事等の各種の精神鑑定の全国的な均てん化に関する研究
- ・ 司法精神医療の領域における各種の評価方法（リスクアセスメント）についての研究
- ・ 犯罪捜査支援（プロファイリング）と犯罪解決支援の精神医学的方法の開発研究
- ・ 精神障害者の同意判断能力および医療保護入院の倫理的判断に関する研究
- ・ 精神科事前指示（psychiatric advance directives）に関する研究

（専門医療・社会復帰研究室を中心とする研究）

- ・ 司法精神医療における専門的治療技法の開発
- ・ サイコーシスの認知行動療法の研究
- ・ 医療観察法通院処遇中の対象者の変化についての研究
- ・ 構造的臨床家判断ツールタイプのリスクアセスメントやリスクマネジメントについての研究

（制度運用研究室を中心とする研究）

- ・ 医療観察法の制度運用に関するモニタリング調査研究
- ・ 重度精神疾患標準的治療法確立のためのデータベースの構築

平成 28 年度の人員構成は、部長事務取扱：中込和幸、専門医療・社会復帰研究室長：菊池安希子、精神鑑定研究室長：安藤久美子（併任）、制度運用研究室長：河野稔明（併任）、任期付研究員：曾雌崇弘（併任、～平成 28 年 12 月 31 日）、流動研究員：米田恵子である。併任研究員として国立精神・神経医療研究センター病院医師の野田隆政、同病院臨床心理技術者の朝波千尋、客員研究員として東京医科歯科大学大学院精神行動医学分野の岡田幸之、京都大学大学院法学研究科の安田拓人、愛媛大学総合健康センターの楠元克徳、国際医療福祉大学の三澤孝夫、科学警察研究所の渡邊和美、科研費心理療法士として中澤佳奈子、科研費研究補助員として岡野茉莉子、高橋布三代、照本麦子（平成 28 年 10 月 1 日～）、センター研究補助員として照本麦子（～平成 28 年 9 月 30 日）を迎えて研究に臨んだ。

### II. 研究活動

#### 1) 心神喪失者等医療観察法制度の指定入院モニタリング調査研究

本研究は、医療観察制度の指定入院医療機関からの情報を統合的に収集管理し、専門的な見地からの評価と分析を加え、その結果を関係機関にフィードバックするものである。平成 26 年度までに全国の指定入院医療機関の協力により収集した、対象者の基礎情報（氏名、住所等の個人を特定する情報を除く）、治療期間や治療内容、退院に際しての住居の確保、社会復帰における連携状況等に関する情報を用いて、平成 27 年度は詳細な分析を行った。在院期間 5 年以上の超長期在院者の退院阻害要因、退院促進要因の抽出、治療ステージスキップの背景要因の予備的検討などを行い、平成 29 年度以降に行う多数例での分析の基礎となる成果を得た。（河野、岡田）

#### 2) 心神喪失者等医療観察法制度の指定通院モニタリング調査研究

本研究は、医療観察制度の指定通院医療機関からの情報を統合的に収集管理し、専門的な見地からの評価と分析を加え、その結果を関係機関にフィードバックするものである。データ収集にあたっては、全国の指定通院医療機関の協力により、その臨床情報から、対象者の基礎情報（氏名、住所等の個人を特定する情報を除く）に加え、通院処遇中の精神保健福祉法による入院や通院処遇中

の問題行動の有無に関しても詳細な情報を収集し、解析した。その結果、環境調整のための入院が多くを占めるものの、通院開始から1週間以内に入院しているケースも一定数認められており、入院処遇から通院処遇への円滑な移行を支援するための新たな入院制度の必要性などについて提唱した。(安藤, 中澤, 曾雌, 岡田)

### 3) 刑事責任能力の評価に関する研究

司法精神鑑定の公平性の実現は長年にわたる懸案事項である。安藤・岡田らは、この刑事責任能力の評価・判定方法について精神医学と法学の両側面から、その標準化をはかるべく研究を行っている。本年度は、刑事責任能力の評価方法、及び刑事責任能力の減損としては考慮されないような精神障害の犯行への影響について、法実務家、法律学者を交えたケース検討を行った。(安藤, 岡田)

### 4) 重度精神障害者の脆弱性とストレングスに注目したリスクアセスメントツールの開発に関する研究

Short-Term Assessment of Risk and Treatability (START : Webster et al., 2009) は、精神障害、物質使用、パーソナリティ障害に関連するリスクをアセスメントし、マネジメントするための構造的専門家判断ツールである。20項目の動的要因について、脆弱性とストレングスの両面から評価し、最終的なリスク判断をする。STARTはカナダで開発され、少なくとも4カ国語に翻訳され、10カ国以上の司法精神科を中心に使用されており、英国では暴力その他のリスクを管理する上で有用なツールとして推奨された (Department of Health, 2007)。本研究では、STARTの日本版を開発し、本邦の司法精神科である医療観察法の通院処遇者における問題行動に対する予測妥当性を確認した (菊池, 河野, 岡田)

### 5) 生物・心理・社会的諸要因からの多面的な司法精神医学的アセスメントツールの開発研究

暴力等のリスクアセスメントについては、その評価基準があいまいで、臨床家ごとにリスク判断にもばらつきがみられるといった問題点なども指摘されており、司法精神医学分野では、客観的なアセスメント手法の開発の必要性が以前より求められてきた。本研究では、疫学統計的、および臨床的観点から見たファクターと、生体反応を用いた科学的観点に基づくファクターとを組み合わせ、包括的なアセスメントツールを開発することを最終目的とし、研究を行った。本年度は、衝動性が高く、実際に触法行為を行った者を対象に、早急性反応が強制される状況におけるエラー反応およびその修復に関して検査を行い、解析のためのデータ蓄積を行った。(安藤, 曾雌, 中澤, 野田)

### 6) 統合失調症の社会認知を改善するためのメタ認知トレーニングの予備的検討

医療観察法の制度開始以来、指定入院医療機関にて治療を受けている対象者の8割は、統合失調症の診断がつく。統合失調症患者の機能的転帰に対しては、神経認知機能にも増して、社会的認知機能の与える影響が大きいことが指摘されている。メタ認知トレーニングは、結論への性急な飛躍、外的帰属バイアス、反証に対するバイアス、エラーに対する過剰確信、心の理論などの認知的バイアスを標的とした心理的プログラムである。本研究では、メタ認知トレーニングの日本版が本邦の統合失調症患者に対して、認容性があり、介入効果があるかどうかを検証した結果、結論への飛躍バイアスに対する改善効果が確認された。(菊池)

### 7) 精神科医療倫理に関する研究

平成25年度までに岡田・安藤が作成した日本語版の精神科事前指示 (Letter of Intent for Mental Health Emergency ; LIME) について、非自発的入院の経験を有する精神障害者へのインタビューをもとに改訂した。また、実際に非自発的入院を行った4名の患者に使用した結果について学会誌に発表した。現在も、改訂版 LIME の有用性に関する検討を継続している。また緊急時の同意判断能力評価である (Competency Assessment Scheme for Mental Health Emergency ; CASME) (安藤・岡田, 2011) についても、医療保護入院患者を対象として妥当性の検証を実施するとともに、ジョンセンらによる臨床倫理の四分割表に基づき、医療保護入院時の精神保健指定医による倫理的判断に関する検討を実施している。(安藤, 岡田)

### Ⅲ. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

安藤久美子、岡田幸之は、裁判所、検察庁の依頼による刑事司法鑑定および心神喪失者等医療観察法の鑑定を行い、市民社会に貢献した。

安藤久美子は、警視庁の依頼により、人質立てこもり事件等における支援活動員を務め、市民社会に貢献した。

#### (2) 専門教育面における貢献

菊池安希子は、法務省保護局社会復帰調整官の初任研修、ならびに、専修科研修において講義を行い、医療観察法精神保健観察の実務につく社会復帰調整官の養成に貢献した。

菊池安希子は、法務省矯正局の成人用一般的リスクアセスメントツールの開発準備に関わる助言指導（アドバイザー）を行った。

菊池安希子は、府中刑務所に設置された効果検証専従班における、「標準的な行動適正化指導についての検討」のアドバイザーを務めた。

菊池安希子は、東京医科歯科大学の学部及び大学院において、非常勤講師を務め、司法精神医療に携わる看護師の養成に貢献した。

菊池安希子は、日本臨床心理士会司法矯正領域委員会委員として、第7回司法矯正領域研修会の企画し、司法領域に関わる臨床心理士の育成に貢献した。

菊池安希子は、国立精神・神経医療研究センター病院において、暴力のリスクアセスメントおよび EMDR の講義を行った。

菊池安希子は、日本 EMDR 学会の主催する EMDR トレーニングにおいて臨床技術の指導を行った。また、日本 EMDR 学会が後援する東京スタディグループにてコンサルタントとして、臨床技術の指導を行い、臨床家の技術向上に貢献した。

菊池安希子は、東北大学予防精神医学寄付講座における統合失調症の認知行動療法のスーパーバイザーを務め、臨床家の技術向上に貢献した。

菊池安希子は、国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センターにおいて、認知処理療法研修の一部講義を担当し、臨床家の技術向上に貢献した。

安藤久美子は、司法研修所にて全国の家裁裁判所の調査官に対して「精神医学」に関する講義を2度にわたって担当し、司法実務に関わる調査官の養成に貢献した。

安藤久美子は、法務総合研究所において、第13回裁判員裁判対象事件担当中核事務官研修にて「精神鑑定」に関する講義を担当し、司法実務を補佐する事務官の養成に貢献した。

安藤久美子は、法務総合研究所において、新任検事を対象として「精神鑑定」に関する講義を担当し、司法実務につく法実務家の養成に貢献した。

安藤久美子は、東京地方検察庁にて、定期的で開催されている精神障害が疑われる事例に関する相談会において司法精神医学的観点からの助言を行い、司法実務に貢献した。

安藤久美子は、警察大学校において、全国の警察本部に所属する幹部職員に対して、「発達障害をもつ被疑者への取調べ」について、6回に渡る講義を行い、警察官の教育等に貢献した。

安藤久美子は、警察大学校において、全国の警察本部に所属する児童ポルノ担当警察官らを対象に「児童ポルノ被害者の心理」に関する講義を行い、警察官の教育等に貢献した。

安藤久美子は、法務省矯正局の幹部職員に対して、発達上の課題を抱える少年院在院者に対する性非行プログラムの策定に関して助言を行い、少年矯正における教育の向上に貢献した。

安藤久美子は、法務省矯正局の幹部職員に対して、法務省式リスクアセスメントツール効果検証に関して助言を行い、少年矯正におけるリスクアセスメント業務に貢献した。

安藤久美子は、法務省矯正局の専門官に対して、法務省式アセスメントツール維持管理作業に関して助言を行い、少年矯正におけるリスクマネジメント業務に貢献した。

安藤久美子は、警察庁および法務省によって開催された「児童の性的搾取等に係る対策に関するワーキンググループ」において性犯罪加害者への介入等に関する講演を行い、わが国の適正な政策および制度改革等に貢献した。

安藤久美子は、東京都司法精神医療福祉ネットワーク会議において、医療観察法を担当する精神保健福祉士を対象とした医療観察法の地域処遇に関する講義を行い、地域処遇の質の向上に貢献した。

岡田幸之は、科学警察研究所において、捜査担当者を対象とした「犯罪者プロファイリング課程研修講義：精神鑑定・精神医学概論」を担当し、捜査実務家の養成に貢献した。

岡田幸之は、法務総合研究所において、検察官を対象として「刑事責任能力」に関する講義を担当し、法実務家の養成に貢献した。

岡田幸之は、司法研修所において、裁判官を対象として「精神鑑定」に関する講義を担当し、司法実務につく法律家の養成に貢献した。

### (3) 精研の研修の主催と協力

菊池安希子は、国立精神・神経医療研究センター社会復帰研究部開催の第14回多職種による包括型アウトリーチ研修にて、講義を行った。

菊池安希子、安藤久美子、河野稔明、曾雌崇弘、岡田幸之は、国立精神・神経医療研究センター第11回司法精神医学研修にて講義を行った。

### (4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

菊池安希子は、日本医療研究開発機構研究費（障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野））「医療観察法における、新たな治療介入法や、行動制御に係る指標の開発等に関する研究」において、医療観察法指定入院医療機関における対象者の暴力についての単施設実態調査を行い、医療従事者職員の医療安全に貢献するための基礎資料を提供した。

菊池安希子は、日本臨床心理士会司法矯正領域委員会委員として、派遣事業の企画、領域内技能区分案の作成や、研修の企画等を行い、全国の司法矯正領域において臨床活動を行う臨床心理士の技能向上に貢献した。

安藤久美子、河野稔明、岡田幸之は、厚生労働行政推進事業費補助金（障害者政策総合研究事業）「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」において、有用な基礎的情報をモニタリング研究により収集し、その結果を医療の現場へと提供し、その質の向上に貢献した。

安藤久美子、河野稔明、岡田幸之は、当センターが厚生労働省から依頼を受けた重度精神疾患標準的治療法確立事業（医療観察法データベース事業）において、病院第二精神診療部、財務経理部、企画経営部と共同で、データベースシステムの構築（詳細設計に関する業者との打ち合わせ等）、システム運用の準備（運営組織・要綱の草案作成等）を行った。

安藤久美子は、厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」内「全国の指定通院医療機関を対象としたモニタリング調査研究（通院モニタリング研究）」を実施して、地域医療の実態を探り、医療観察法のよりよい改正のために貢献した。

安藤久美子は、厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「発達障害者への支援を緊急時（犯罪の被害や加害、災害など）に関係機関が連携して適切な対応を行うためのモデル開発に関する研究」の実施にあたり、国内外における緊急時の支援体制の現状に関する基礎的情報を収集し、「発達障害者支援法」に基づく地域支援の方向性を明確化する作業に貢献した。

### (5) センター内における臨床的活動

菊池安希子は、病院臨床心理技術者を併任し、医療観察法病棟（8病棟、9病棟）及び外来、デ

ケアにおいて臨床的活動を行った。

安藤久美子は、病院第一精神診療部精神科医師を併任し、臨床的活動を行った。

安藤久美子、河野稔明は、医療観察法病棟（8病棟、9病棟）運営会議に出席し、臨床的活動を行った。

安藤久美子、岡田幸之は、医療観察法鑑定入院（5階北病棟）に、鑑定医、および鑑定助手として協力した。

安藤久美子は、臨床治験の分担医師として複数の患者を担当し、新薬開発のために貢献した。

曾雌崇弘は、病院併任研究員として、病院の臨床活動に基づく研究に貢献した。

(6) その他

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Ishikawa R, Ishigaki T, Kikuchi A, Matsumoto K, Kobayashi S, Morishige S, Hosono M, Nakamura Y, Kase A, Morimoto T, Haga D: Cross-cultural validation of the Cognitive Biases Questionnaire for psychosis in Japan and examination of the relationships between cognitive biases and schizophrenia symptoms. *Cognitive Ther Res*, Online first DOI 10.1007/s 10608-016-9807-8.
- 2) Ando K, Soshi T, Nakazawa K, Noda T, Okada T: Risk Factors for Problematic Behaviors among Forensic Outpatients under the Medical Treatment and Supervision Act in Japan. *Front Psychiatry* 7: 144. 2016.
- 3) Soshi T, Noda T, Ando K, Nakazawa K, Tsumura H, Okada T: Impulsivity is associated with early sensory inhibition in neurophysiological processing of affective sounds. *Frontiers in Psychiatry* 6: 141. 2016.
- 4) 菊池安希子, 大迫充江, 大森まゆ, 平林直次: 医療観察法における患者からの暴力の実態－単施設調査の結果から－. *精神科治療学* 31(10): 1289-1294, 2016.
- 5) 河野稔明, 岡田幸之, 平林直次: 医療観察法入院処遇に適した在院期間代表値の選定－3つの平均値に着目して－. *司法精神医学* 12(1): 11-18, 2017.

(2) 総説

- 1) 菊池安希子: 暴力的なクライアントにどう接するべきか?－リスクアセスメントの活用. 特集:「こんなときにどうする?」にこたえる 20 のヒント「心理職の仕事術」, *臨床心理学* 17(1): 49-51, 2017.
- 2) 安藤久美子: 刑事鑑定の国際比較. *精神科* 30(1): 28-33, 2017.
- 3) 安藤久美子: 統合失調症と暴力犯罪. *精神医学症候群 (第2版) I－発達障害・統合失調症・双極性障害・抑うつ障害－*, 別冊日本臨牀新領域別症候群シリーズ No.37: 241-245, 2017.
- 4) 安藤久美子: 治療への同意能力評価と意見決定支援. *司法精神医学* 12(1): 64-70, 2017.
- 5) 安藤久美子, 河野稔明, 曾雌崇弘, 岡田幸之: 研究成果を社会実装する－心神喪失者等医療観察法施行 10 年. *精神保健研究* 63: 17-24, 2017.
- 6) 河野稔明, 安藤久美子, 藤井千代, 菊池安希子, 中澤佳奈子, 曾雌崇弘, 米田恵子, 長沼洋一, 岡田幸之: 特集Ⅲ 医療観察法制定から 10 年を振り返って－医療観察法制定から 10 年: 現状分析. *精神科* 29(2): 151-159, 2016.
- 7) 河野稔明: 【統合失調症のベストプラクティス】長期在院の現状と対策. *精神科治療学* 31(増): 279-284, 2016.
- 8) 三澤孝夫: 特集Ⅲ 医療観察法制定から 10 年を振り返って－指定入院医療における多職種の

役割とプログラム. 精神科 29(2) : 139-144, 2016.

(3) 著書

- 1) 菊池安希子: 日常生活の改善をめざした認知行動療法. 樋口輝彦, 市川宏伸, 神庭重信, 朝田隆, 中込和幸 (編) 今日の精神疾患治療指針第2版. pp891-893, 東京, 医学書院, 2016.
- 2) 菊池安希子: 第22章 触法精神医療における心理的アプローチ「総論」. 下山晴彦, 中嶋義文 (編) 公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法. 医学書院, 東京, pp305-306, 2016.
- 3) 菊池安希子: 第22章 触法精神医療における心理的アプローチ「触法精神障害を伴った精神疾患」. 下山晴彦, 中嶋義文 (編) 公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法. 医学書院, 東京, pp307-311, 2016.
- 4) 安藤久美子: 精神鑑定への誘い. 星和書店, 東京, 2016.
- 5) 安藤久美子: 性的虐待行為により, 精神障害(うつ病)を発症した事例について, 除斥期間の起算点はうつ病を発症した時であるとして, 除斥期間の経過を認めなかった事例. 年報医事法学3, 日本評論社, 東京, pp151-157, 2016.
- 6) 安藤久美子: 医療観察法における指定通院医療機関モニタリング調査研究. 医療観察統計レポート—入院・通院モニタリング調査—, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部, 東京, pp29-61, 2017.
- 7) 河野稔明: 第9章「資料」第3節「統計資料」表12~20, 図8・9. 精神保健医療福祉白書編集委員会(編): 精神保健医療福祉白書2017—地域社会での共生に向けて. 中央法規出版, 東京, pp214-223, 2016.
- 8) 河野稔明: 第9章「資料」第3節「統計資料」解説(都道府県別, 医療費). 精神保健医療福祉白書編集委員会(編): 精神保健医療福祉白書2017—地域社会での共生に向けて. 中央法規出版, 東京, pp233-234, 2016.
- 9) 河野稔明: 医療観察法における指定入院医療機関モニタリング調査研究. 医療観察統計レポート—入院・通院モニタリング調査—, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部, 東京, pp7-27, 2017.
- 10) 三澤孝夫: 第3章「精神保健における個別課題への取り組み」Ⅶ「司法精神保健福祉対策」. 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会(編): 精神保健福祉士養成セミナー② 精神保健学〈第6版〉—精神保健の課題と支援. へるす出版, 東京, pp149-164, 2017.
- 11) 三澤孝夫: 第5章「更生保護制度」. 福祉臨床シリーズ編集委員会(編), 古屋龍太(責任編集): 精神保健福祉士シリーズ第7巻 精神保健福祉に関する制度とサービス [第3版]. 弘文堂, 東京, pp134-138, 2017.
- 12) 三澤孝夫: 第6章「医療観察法」. 福祉臨床シリーズ編集委員会(編), 古屋龍太(責任編集): 精神保健福祉士シリーズ第7巻 精神保健福祉に関する制度とサービス [第3版]. 弘文堂, 東京, pp161-191, 2017.
- 13) 三澤孝夫: 第6章「矯正施設と処遇」. 福祉臨床シリーズ編集委員会(編), 森長秀(責任編集): 更生保護制度. 社会福祉士シリーズ第20巻 更生保護制度 [第3版]. 弘文堂, 東京, pp121-127, 2017.
- 14) 三澤孝夫: 第7章「医療観察制度の概要」. 福祉臨床シリーズ編集委員会(編), 森長秀(責任編集): 更生保護制度. 社会福祉士シリーズ第20巻 更生保護制度 [第3版]. 弘文堂, 東京, pp131-154, 2017.

(4) 研究報告書

- 1) 菊池安希子: 医療観察法医療従事者のメンタルヘルスに関する調査. 国立研究開発法人日本医療研究開発機構委託研究長寿・障害総合研究事業障害者対策総合研究開発事業「医療観察

法における、新たな治療介入法や、行動制御に係わる指標の開発等に関する研究」(研究開発代表者：平林直次)平成 27 年度総括・分担研究開発報告書, 167-174, 2017.

- 2) 菊池安希子：医療観察法処遇終了者の社会復帰促進に関する研究. 平成 28 年度精神・神経疾患研究開発費「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」(主任研究者：大塚俊弘) 研究報告集, 2017 印刷中.
- 3) 安藤久美子, 中澤佳奈子, 三澤孝夫, 岡田幸之：医療観察法指定通院医療機関モニタリング調査研究. 平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係わる体制整備・周辺制度の整備に係わる研究」(研究代表者：岡田幸之) 総括・分担研究報告書, 2017 印刷中.
- 4) 安藤久美子：犯罪傾向のある障害者のアセスメント治療に関する研究. 平成 28 年度精神・神経疾患研究開発費「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」(主任研究者：大塚俊弘) 研究報告集, 2017 印刷中.
- 5) 安藤久美子：触法行為を行った発達障害者の介入手法. 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))「発達障害者への支援を緊急時(犯罪の被害や加害, 災害など)に関係機関が連携して適切な対応を行うためのモデル開発に関する研究」 総括・分担研究報告書, 2017 印刷中.
- 6) 河野稔明, 藤井千代：全国の指定入院医療機関を対象としたモニタリング調査研究(入院モニタリング研究). 平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係わる体制整備・周辺制度の整備に係わる研究」(研究代表者：岡田幸之) 総括・分担研究報告書, 2017 印刷中.
- 7) 岡田幸之：平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」(研究代表者：岡田幸之) 総括・分担研究報告書, 2017 印刷中.

(5) 翻訳

- 1) 菊池安希子, 佐藤美奈子(訳), ダグラス・ターキントンら(著)：リカバリーをめざす統合失調症の認知行動療法ワークブックー私の「ふつつ」を取り戻すための技法を学ぶー. 東京, 星和書店, 2016.

(6) その他

- 1) 菊池安希子：医療観察法関連. 野島一彦(編)「公認心理師への期待」, こころの科学特別号 2016, p90, 東京, 日本評論社, 2016.
- 2) 菊池安希子：司法矯正領域における動機付け面接法の応用. 日本臨床心理士会雑誌 25(2) : 69-71, 2017.
- 3) 安藤久美子：永山則夫のケースからみた鑑定の特徴とは？(質疑応答：臨床一般/法律・雑件). 週刊日本医事新報 4815 : pp58-59, 2016.
- 4) 伊賀興一, 小笠原基也, 姜文江, 安藤久美子, 松本俊彦：「付添人の窓」座談会ー司法精神医療における新たな連携を目指してー. 精神科治療学, 星和書店, 東京, pp1495-1510, 2016.
- 5) 渡邊和美：書評 橋本和明(編著)「犯罪心理鑑定の技術」. 臨床心理学 16(6) : 760, 2016.
- 6) 渡邊和美：体験した事実を聴き取るための面接スキル(法と心理学会第 16 回大会 大会企画シンポジウム 会議録). 法と心理 16(1) : 43-51, 2016.

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) 菊池安希子：医療観察法病棟の患者を対象として CBTp 技法を用いた対応について勉強する

- (講師). CBTp ワークショップ, 群馬, 2016.4.16.
- 2) 菊池安希子: シンポジウム 15 「統合失調症の認知行動療法の効果と実践」. 第 112 回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.2-4.
  - 3) 大澤智子, 菊池安希子: 特別講演「AIP (適応的情報処理) 理論による Complex PTSD と解離の理解」(通訳). 第 11 回日本 EMDR 学会学術大会, 兵庫, 2016.6.10.
  - 4) 菊池安希子: ワークショップ II 「SAPROF (暴力の保護要因評価) ワークショップ (コーディネーター・通訳). 第 12 回日本司法精神医学会大会, 千葉. 2016.6.18-19.
  - 5) 橋本忠行, 野田昌道, 大屋寿美子, 宮崎有香, 吉田統子, 菊池安希子: 治療的アセスメントについて考える (その 7) (自主シンポジウム 1). 日本心理臨床学会第 35 回秋季大会, 神奈川, 2016.9.4-7.
  - 6) 菊池安希子: 社会認知のトレーニング (シンポジウム 1). 第 12 回日本統合失調症学会, 鳥取, 2017.3.24-25.
  - 7) 安藤久美子: ワークショップ 4 (司法精神医学委員会) (日本司法精神医学会推薦) 「精神科専門医に求められる司法精神鑑定: 発達障害の精神鑑定」(講演者). 第 112 回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.2-4.
  - 8) 安藤久美子: 治療への同意能力評価と意思決定評価 (シンポジウム I). 第 12 回日本司法精神医学会大会, 千葉. 2016.6.18-19.
  - 9) 安藤久美子: 現代の精神鑑定 - 多様なニーズに応えるために (メインシンポジウム). 第 53 回日本犯罪学会総会, 東京, 2016.12.3.
  - 10) 安藤久美子: 神経症圏とパーソナリティ障害の精神鑑定. 第 8 回刑事精神鑑定ワークショップ (講師), 東京, 2017.1.22.
  - 11) 松原三郎, 岡田幸之: ワークショップ 4 (司法精神医学委員会) (日本司法精神医学会推薦) 「精神科専門医に求められる司法精神鑑定」(司会). 第 112 回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.2-4.
  - 12) 岡田幸之, 平林直次: ワークショップ I 「第 8 回刑事精神鑑定 事例検討会」(司会). 第 12 回日本司法精神医学会大会, 千葉, 2016.6.18-19.

## (2) 一般演題

- 1) Kikuchi A: Risk Factor Change during Forensic Probation in Japan. International Association of Forensic Mental Health Services, New York, 2016.6.21-23.
- 2) Kikuchi A, Sato S, Yoshida M, Koyama M, Kono T, Ishigaki T, Nakagome K: Pilot trial of the Japanese version of Metacognitive Training. The 31st International Congress of Psychology (ICP2016), Kanagawa, 2016.7.24-29.
- 3) Soshi T, Nakajima H, Hagiwara H: Neurophysiological activities for processing same words assisted by the same grammatical marker change with varying cognitive requirements. Neuroscience 2016 The 39th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society, Kanagawa, 2016.7.20-22.
- 4) Watanabe K, Ono S, Wachi T, Yokota K, Otsuka Y, Hiramata K, Ando K, Okada T: Preliminary development and validity assessment of a culture-free version of the NRIPS and NCNP's Forensic Ability Screening Test (N2-FAST). The 31st International Congress of Psychology (ICP2016), Kanagawa, 2016.7.24-29.
- 5) 菊池安希子: 複数のトラウマを持つ女性への EMDR (指定討論者). 日本心理臨床学会第 35 回秋季大会, 神奈川, 2016.9.4-7.
- 6) 小山繭子, 吉田由紀, 菊池安希子, 近藤千加子: 母親の自死に遭遇した 30 代女性に対する EMDR. 第 11 回日本 EMDR 学会学術大会, 兵庫, 2016.6.10.
- 7) 児島達美, 菊池安希子, 鈴木俊太郎, 法澤直子: 「ブリーフ」を再定義する. 日本ブリーフ



- サイコセラピー学会第 26 回六本木大会，東京，2016.7.29-31.
- 8) 安藤久美子，曾雌崇弘，中澤佳奈子，岡田幸之：医療観察法通院対象者の精神保健福祉法による入院治療に関する分析．第 12 回日本司法精神医学会大会，千葉，2016.6.18-19.
  - 9) 安藤久美子，中澤佳奈子，照本麦子，岡田幸之：医療観察法医療における円滑な社会内処遇につなげるための検討．第 36 回日本社会精神医学会，東京，2017.3.3-4.
  - 10) 河野稔明，藤井千代，菊池安希子，岡田幸之：医療観察法入院処遇における治療ステージダウン・スキップの状況．第 12 回日本司法精神医学会大会，千葉，2016.6.18-19.
  - 11) 河野稔明：藤田先生の選考研究に学んだ精神保健統計基礎．第 7 回自殺リスクに関する研究会，東京，2017.2.26.
  - 12) 曾雌崇弘，安藤久美子，中澤佳奈子，岡田幸之：通院処遇中における問題行動を抑制するポジティブ要因の抽出にかかわる研究．第 12 回日本司法精神医学会大会，千葉，2016.6.18-19.
  - 13) 曾雌崇弘：時間的自己参照点機能の脳内表現。「こころの時間学」2016 年度第 1 回領域会議，北海道．2016.7.10-11.
  - 14) 曾雌崇弘，野田隆政，安藤久美子，岡田幸之：反応抑制に関わる後期事象関連電位活パターンを用いた気分障害特性に関する事例研究．第 46 回日本臨床神経生理学会学術大会，福島，2016.10.27-29.
  - 15) 曾雌崇弘：言語情報の欠如はアクティブな予測処理を促す：持続性脳電位活動の変動．第 14 回日本ワーキングメモリ学会大会，京都，2016.12.10.
  - 16) 中澤佳奈子，安藤久美子，照本麦子，岡田幸之：臨床心理士の精神鑑定における役割と鑑定の経験を通じたスキルアップ．第 36 回日本社会精神医学会，東京，2017.3.3-4.
  - 17) 照本麦子，安藤久美子，中澤佳奈子，大塚俊弘：性犯罪のリスクのある知的障害者向けの治療プログラム（SOTSEC-ID 日本語版）の開発と普及．第 53 回日本犯罪学会総会，東京，2016.12.3.
  - 18) 照本麦子，安藤久美子，中澤佳奈子，伊豆丸剛史，大塚俊弘：地域で実施可能な知的障害向けの性犯罪再犯防止プログラム（SOTSEC-ID 日本語版）の開発と普及．第 36 回日本社会精神医学会，東京，2017.3.3.

### (3) 研究報告会

- 1) 菊池安希子：平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業補助金（障害者政策総合研究事業）「精神科医療提供体制の機能強化を推進する施策研究」（研究代表者：山之内芳雄）第 2 回班会議．東京，2016.8.21.
- 2) 菊池安希子：措置入院に係るガイドライン班会議．東京，2017.1.9.
- 3) 菊池安希子：平成 28 年度日本医療研究開発機構委託研究 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（AMED）「医療観察法における，新たな治療介入法や，行動制御に係る指標の開発等に関する研究」（研究代表者：平林直次）第 2 回医療観察法に関する研究班（平林班・岡田班）合同班会議．2017.1.13-14.
- 4) 菊池安希子：ACT&CBT 研究第 4 回事例検討会．東京，2017.3.4.
- 5) 菊池安希子：措置入院ガイドライン班会議．東京，2017.3.5.
- 6) 安藤久美子：平成 28 年度精神・神経疾患研究開発費「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」（主任研究者：大塚俊弘）班会議．東京，2016.4.24.
- 7) 安藤久美子：平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」（研究代表者：岡田幸之）第 1 回医療観察法に関する研究班（平林班・岡田班）合同班会議．東京，2016.5.20-21.
- 8) 安藤久美子：日本精神神経学会男女共同参画推進委員会女性会員活動活性化推進班会議．千

- 葉, 2016.6.2.
- 9) 安藤久美子: 2016年度第3回定例会. 東京, 2016.6.15.
  - 10) 安藤久美子: 精神障害と量刑判断等共同研究平成28年度第1回研究会. 東京, 2016.7.29.
  - 11) 安藤久美子: 第18回TFPC研究会. 東京, 2016.7.30.
  - 12) 安藤久美子: 平成28年度厚生労働科学研究費補助金「発達障害者への支援を緊急時(犯罪の被害や加害, 災害など)に関係機関が連携して適切な対応を行うためのモデル開発に関する研究」(研究代表者: 内山登紀夫) 班会議. 東京, 2016.8.18.
  - 13) 安藤久美子: 平成28年度厚生労働科学研究費補助金「発達障害者への支援を緊急時(犯罪の被害や加害, 災害など)に関係機関が連携して適切な対応を行うためのモデル開発に関する研究」(研究代表者: 内山登紀夫) 班会議. 東京, 2016.8.29.
  - 14) 安藤久美子: 医療観察法及び精神鑑定の現状・課題・将来展望. 第75回精神医療研究会, 東京, 2016.9.24.
  - 15) 安藤久美子: 日本精神神経学会男女共同参画推進委員会〈女性会員活動活性化推進班〉班会議. 東京, 2016.9.25.
  - 16) 安藤久美子: 第45回かながわ司法精神医療福祉ネットワーク会議. 東京, 2016.10.13.
  - 17) 安藤久美子: 研究課題に関する裁判例の商会と裁判官の問題意識の把握. 精神障害と量刑判断等共同研究平成28年度第2回研究会, 東京, 2016.10.13.
  - 18) 安藤久美子: 第19回TFPC研究会. 東京, 2016.12.10.
  - 19) 安藤久美子: 平成28年度精神・神経疾患研究開発費「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」(主任研究者: 大塚俊弘) 班会議. 東京, 2016.12.13.
  - 20) 安藤久美子: 精神障害と量刑判断等共同研究平成28年度第3回研究会. 東京, 2016.12.28.
  - 21) 安藤久美子: 第127回医療観察制度関係機関連絡協議会. 根岸病院, 東京, 2017.1.12.
  - 22) 安藤久美子: 平成28年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」(研究代表者: 岡田幸之) 第2回医療観察法に関する研究班(平林班・岡田班) 合同班会議. 東京, 2017.1.13-14.
  - 23) 安藤久美子: 犯罪傾向にある障害者向け治療プログラム説明会. 研究プロジェクト会議, 長崎, 2017.1.23.
  - 24) 安藤久美子: 心神喪失者等医療観察法関係研究協議会. 東京, 2017.1.25.
  - 25) 安藤久美子: 第11回通院医療等研究会. 東京, 2017.1.28.
  - 26) 安藤久美子, 中澤佳奈子, 曾雌崇弘, 河野稔明, 岡田幸之: 医療観察法の10年間を振り返る—円滑な社会内処遇につなげるために—. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成28年度研究報告会, 東京, 2017.2.20.
  - 27) 安藤久美子: 第4回 犯罪傾向のある障害者のアセスメントと治療に関する研究. 平成28年度精神・神経疾患研究開発費「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」(主任研究者: 大塚俊弘) 安藤分担班会議, 長崎, 2017.3.17.
  - 28) 安藤久美子: 第5回 犯罪傾向のある障害者のアセスメントと治療に関する研究. 平成28年度精神・神経疾患研究開発費「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」(主任研究者: 大塚俊弘) 安藤分担班会議, 長崎, 2017.3.30.
  - 29) 安藤久美子: 知的障害のある性犯罪者向け治療プログラムに掛かる効果検証会議. 東京, 2017.3.14.
  - 30) 河野稔明: 平成28年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」(研究代表者: 岡田幸之) 第1回医療観察法に関する研究班(平林班・岡田班) 合同班会議. 東京, 2016.5.20-21.

- 31) 河野稔明：平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」（研究代表者：岡田幸之）第 2 回医療観察法に関する研究班（平林班・岡田班）合同班会議．東京，2017.1.13-14.
- 32) 曾雌崇弘：平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」（研究代表者：岡田幸之）第 1 回医療観察法に関する研究班（平林班・岡田班）合同班会議．東京，2016.5.20-21.
- 33) 米田恵子，菊池安希子，竹田和良，中込和幸：Facial Emotional Selection Test 日本語版の妥当性検討．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 28 年度研究報告会，東京，2017.2.20.
- 34) 岡田幸之，平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」（研究代表者：岡田幸之）第 1 回医療観察法に関する研究班（平林班・岡田班）合同班会議．東京，2016.5.20-21.
- 35) 岡田幸之：平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」（研究代表者：岡田幸之）第 2 回医療観察法に関する研究班（平林班・岡田班）合同班会議．東京，2017.1.13-14.
- 36) 三澤孝夫：平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」（研究代表者：岡田幸之）第 1 回医療観察法に関する研究班（平林班・岡田班）合同班会議．東京，2016.5.20-21.
- 37) 三澤孝夫，島田明裕，小河原大輔，若林朝子，古賀千夏，千野根理恵子，宮坂歩：「医療観察法医療従事者養成等制度運用の見直しに関する研究」について報告．第 5 回全国指定入院医療機関精神保健福祉士連絡協議会，新潟，2016.10.29.
- 38) 三澤孝夫：平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」（研究代表者：岡田幸之）第 2 回医療観察法に関する研究班（平林班・岡田班）合同班会議．東京，2017.1.13-14.

(4) その他

- 1) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会常任理事会．東京，2016.4.10.
- 2) 菊池安希子：日本臨床心理士会．司法矯正領域委員会，東京，2016.4.17.
- 3) 菊池安希子：日本 EMDR 学会理事会．神戸，2016.6.11.
- 4) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会平成 28 年度第 2 回常任理事会．東京，2016.7.29.
- 5) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会平成 28 年度第 1 回理事会．東京，2016.7.30.
- 6) 安藤久美子：日本精神神経学会男女共同参画推進委員会．東京，2016.4.3.
- 7) 安藤久美子：日本精神神経学会第 5 回司法精神医学委員会．東京，2016.5.15.
- 8) 安藤久美子：日本精神神経学会男女共同参画推進委員会．千葉，2016.6.2.
- 9) 安藤久美子：司法精神医学会認定鑑定医試験委員会．東京，2016.7.9.
- 10) 安藤久美子：日本精神神経学会第 6 回司法精神医学委員会．東京，2016.7.10.
- 11) 安藤久美子：指定医講習会．東京，2016.7.20.
- 12) 安藤久美子：日本司法精神医学会と日弁連刑事弁護センター責任能力 PT の協議会（第 18 回）．東京，2016.7.23.

- 13) 安藤久美子:平成28年度日本司法精神医学会学会認定精神鑑定医面接審査. 東京, 2016.8.20.
- 14) 安藤久美子: 日本司法精神医学会と日弁連刑事弁護センター責任能力PTの協議会(第19回). 東京, 2016.10.15.
- 15) 安藤久美子: 精神神経学会司法精神委員会. 東京, 2016.10.16.
- 16) 安藤久美子: 司法精神医学委員会. 東京, 2016.12.18.
- 17) 安藤久美子: 平成28年度第3回日本犯罪学会編集委員会. 東京, 2017.1.25.
- 18) 安藤久美子: 司法精神医学委員会. 東京, 2017.2.5.
- 19) 安藤久美子: 日本司法精神医学会と日弁連刑事弁護センター責任能力PTの協議会(第20回). 東京, 2017.3.18.

### C. 講演

- 1) Ando K: Criminal Responsibility of ASD. New School of Psychotherapy and Counselling, London, 2017.2.14.
- 2) 菊池安希子: EMDR準備のあれこれー人生グラフと三分岐プロトコルー. 日本EMDR学会東京スタディグループ, 東京, 2016.4.23.
- 3) 菊池安希子: 認知行動療法に役立つコミュニケーションの基礎. 東京, 2016.5.13.
- 4) 菊池安希子: リスクアセスメント概要について, リスクアセスメントツール(HCR-20第2版)の概要と使い方について. 犯罪者等に対するアセスメントに関する研究会(講義), 東京, 2016.8.23.
- 5) 菊池安希子: 英国における臨床心理士. 新しい時代に求められる臨床心理士のあり方ー英米との比較からー(公開講演), 東京, 2016.8.27.
- 6) 菊池安希子: 精神療法Ⅱ暴力のリスクアセスメント入門. 国立精神・神経医療研究センター初期レジデントセミナー, 東京, 2016.8.30.
- 7) 菊池安希子: アセスメントに関する専門家からの講義及び助言. 平成28年度第3回関東ブロック心神喪失者等医療観察法制度連絡協議会(講師), 関東地方更正保護委員会, 東京, 2016.11.4.
- 8) 菊池安希子: EMDR入門. 国立精神・神経医療研究センター医局内クルズス, 国立精神・神経医療研究センター病院, 東京, 2016.11.15.
- 9) 安藤久美子: 司法精神医療 多職種による多角的支援の検討. 平成28年度精神科薬物療法認定薬剤師講習会, 東京, 2016.10.16.
- 10) 安藤久美子: 法律家の先生方をお願いしたいことー司法と医療の協働のためにー. 関東弁護士連合会意見交換会. 東京, 2016.10.17.
- 11) 安藤久美子: 性犯罪者の治療プログラムについて(講義). 性犯罪等に対するアセスメントに関する研究会, 東京, 2016.12.15.
- 12) 安藤久美子: 発達障害について. 平成28年度刑事実務研究会(講師), 埼玉, 2017.2.22.
- 13) 安藤久美子: 「司法精神医学と発達障害～コンサータ錠の有用性を踏まえて～」. 第9回多摩発達障害研究会学術講演会, 東京, 2017.3.9.
- 14) 安藤久美子: 「問題行動」「触法行為」の理解. 知的障害・発達障害のある人のためのトラブル・シューター養成セミナー(講義). 滋賀, 2017.3.13.
- 15) 三澤孝夫: 医療観察ってなに? 名古屋保護観察所主催 平成28年度長野県医療観察制度普及セミナー, 長野, 2016.9.2.
- 16) 三澤孝夫: 医療観察法における対象者の実像と地域処遇におけるケアマネジメントの重要性ークライシスプラン, セルフモニタリング等を中心にー. さいたま保護観察所主催 平成28年度埼玉県医療観察制度運営連絡協議会専門部会, 埼玉, 2016.11.25.
- 17) 三澤孝夫: 医療観察法における多職種連携. 名古屋保護観察所主催 平成28年度愛知県指定通院医療機関等連絡調整会, 愛知, 2017.3.1.

**D. 学会活動**

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 菊池安希子：日本司法精神医学会 評議員
- 2) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会 副会長
- 3) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会 常任理事
- 4) 菊池安希子：日本 EMDR 学会 副理事長（～5月）
- 5) 菊池安希子：日本 EMDR 学会 理事
- 6) 菊池安希子：日本 EMDR 学会 トレーニング委員会委員長
- 7) 安藤久美子：日本社会精神医学会 評議員
- 8) 安藤久美子：日本司法精神医学会 評議員
- 9) 安藤久美子：日本司法共生社会学会 理事
- 10) 安藤久美子：日本司法精神医学会 編集委員
- 11) 安藤久美子：日本犯罪学会 編集委員
- 12) 岡田幸之：日本犯罪学会 理事
- 13) 岡田幸之：日本司法精神医学会 理事
- 14) 岡田幸之：日本社会精神医学会 評議員
- 15) 岡田幸之：日本精神科診断学会 評議員

(3) 座長

- 1) 平田豊明，岡田幸之：シンポジウム I 「法的能力の精神医療学的評価」. 第 12 回日本司法精神医学会大会，千葉. 2016.6.18-19.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会 学術委員会委員長
- 2) 菊池安希子：日本 EMDR 学会 トレーニング委員会委員長
- 3) 菊池安希子：日本司法精神医学会 編集委員
- 4) 菊池安希子：日本 EMDR 学会 第 12 回学術大会準備委員
- 5) 菊池安希子：日本臨床心理士会 司法矯正領域専門委員会委員
- 6) 菊池安希子：日本認知療法学会 編集委員会常任委員
- 7) 安藤久美子：日本司法精神医学会 編集委員
- 8) 安藤久美子：日本犯罪学会 編集委員
- 9) 安藤久美子：日本司法精神医学会 裁判員制度プロジェクト委員
- 10) 安藤久美子：日本精神神経学会 司法精神医学委員
- 11) 安藤久美子：日本精神神経学会 男女共同参画推進委員
- 12) 安藤久美子：日本司法共生社会学会，第 2 回日本司法共生学会 プログラム委員
- 13) 安藤久美子：American Academy of Psychiatry and the Law International Committee
- 14) 岡田幸之：日本司法精神医学会 編集委員長
- 15) 岡田幸之：日本犯罪学会 編集委員
- 16) 岡田幸之：日本司法精神医学会 研修・教育企画拡大委員
- 17) 岡田幸之：日本司法精神医学会 裁判員制度プロジェクト委員
- 18) 岡田幸之：日本司法精神医学会 精神鑑定委員
- 19) 岡田幸之：American Academy of Psychiatry and the Law International Committee

**E. 研修****(1) 研修企画**

- 1) 中込和幸, 菊池安希子, 安藤久美子, 河野稔明, 曾雌崇弘, 米田恵子: 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成28年度精神保健に関する技術研修, 第11回司法精神医学研修, 東京, 2016.10.25-26.
- 2) 菊池安希子: 訪問におけるリスクマネジメント. 第14回多職種による包括型アウトリーチ研修. 東京, 2016.9.2.
- 3) 菊池安希子, 柏木宏子: HCR-20v3 研修 (リスクアセスメントツール). 東京, 2016.10.8-10.
- 4) 菊池安希子: 統合失調症の認知行動療法“入門”. 平成28年度精神保健福祉研修(後期)「統合失調症の認知行動療法を学ぶ」, 東京, 2016.11.1.
- 5) 安藤久美子: 性犯罪加害再犯防止のための地域基盤支援プログラム. SOTSEC-IDの支援者研修, 東京, 2016.10.1.
- 6) 安藤久美子: 第11回通院医療等研究会(企画補佐). 東京, 2017.1.28.
- 7) 安藤久美子: 性犯罪加害再犯防止のための地域基盤支援プログラム. SOTSEC-IDの支援者研修, 長崎, 2017.3.17.
- 8) 安藤久美子: 性犯罪加害者のリスクアセスメント研修. 長崎, 2017.3.29-30.

**(2) 研修会講師**

- 1) 菊池安希子: 司法精神医療における心理学的治療アプローチ(1)・(2). 第11回司法精神医学研修, 東京, 2016.10.26.
- 2) 菊池安希子: 司法精神医学③医療観察におけるリスクアセスメント. 第9回社会復帰調整官初任研修, 東京, 2016.10.27.
- 3) 菊池安希子: 司法精神医療医におけるリスク管理. 第4回社会復帰調整官専修科研修, 東京, 2017.2.27.
- 4) 安藤久美子: 発達障害について. 取り調べ技術・捜査指揮研修科, 東京, 2016.5.19.
- 5) 安藤久美子: 発達障害について. 取り調べ技術・捜査指揮研修科, 東京, 2016.6.14.
- 6) 安藤久美子: 精神医学Ⅰ. 家庭裁判所調査官養成課程第13期前期合同研修, 東京, 2016.7.8.
- 7) 安藤久美子: 精神医学Ⅱ. 家庭裁判所調査官養成課程第13期前期合同研修, 東京, 2016.7.12.
- 8) 安藤久美子: 発達障害について. 取り調べ技術・捜査指揮研修科, 東京, 2016.7.28.
- 9) 安藤久美子: 鑑定ワークショップ(講師・ファシリテーター). 第6回司法精神医学研修会, 宮城, 2016.9.4.
- 10) 安藤久美子: 発達障害について. 「取調べ技術・捜査指揮研修科」教養, 東京, 2016.10.4.
- 11) 安藤久美子: 「リスクアセスメント」(講義)「面接技法」(実技). 平成28年度発達障害者地域支援マネージャー研修会(応用研修), 埼玉, 2016.10.6.
- 12) 安藤久美子: 精神鑑定. 第14回裁判員裁判対象事件担当中核事務官研修, 東京, 2016.10.24.
- 13) 安藤久美子: 刑事責任能力と精神鑑定. 第11回司法精神医学研修, 東京, 2016.10.25.
- 14) 安藤久美子: 医療観察法の現状(通院). 第11回司法精神医学研修, 東京, 2016.10.25.
- 15) 安藤久美子, 岡田幸之: 医療観察法総論. 第11回司法精神医学研修, 東京, 2016.10.25.
- 16) 安藤久美子, 曾雌崇弘, 岡田幸之: 司法精神医療におけるリスク・アセスメント等各種ツール(1)・(2)・(3). 第11回司法精神医学研修, 東京, 2016.10.26.
- 17) 安藤久美子: 発達障害について. 取調べ技術・捜査指揮研修科, 東京, 2016.11.17.
- 18) 安藤久美子: 知的・発達障害を有する者の取調べ要領. 取調べ技術専科, 東京, 2016.12.2.
- 19) 安藤久美子: 性犯罪を繰り返すケースへの対応について. 平成28年度第1回精神事例検討会兼研修会, 東京, 2016.12.6.
- 20) 安藤久美子: 知的・発達障害を有する者の取調べ要領. 取調べ技術専科, 東京, 2016.12.12.
- 21) 安藤久美子: 被害児童の心理と特性. 児童ポルノに関する専科教養, 東京, 2017.1.26.

- 22) 安藤久美子：精神鑑定. 平成 28 年度新任検事研修，東京，2017.3.22.
- 23) 河野稔明：医療観察法の現状（入院）. 第 11 回司法精神医学研修，東京，2016.10.25.
- 24) 岡田幸之：司法精神学概論－歴史，法律，制度. 第 11 回司法精神医学研修，東京，2016.10.25.
- 25) 三澤孝夫：「精神保健参与員の業務と責任」，「精神保健参与員 業務演習」，「グループディスカッションⅡ 通院開始事例」. 厚生労働省委託，日本精神科病院協会主催：平成 28 年度全国研修「精神保健判定医等養成研修会」，大阪，2016.7.15-17.
- 26) 三澤孝夫：「精神保健参与員の業務と責任」，「精神保健参与員 業務演習」，「グループディスカッションⅡ 通院開始事例」. 厚生労働省委託，日本精神科病院協会主催：平成 28 年度全国研修「精神保健判定医等養成研修会」，東京，2016.8.4-6.
- 27) 三澤孝夫：「精神保健参与員の業務と責任」，「精神保健参与員 業務演習」，「グループディスカッションⅡ 通院開始事例」. 厚生労働省委託，日本精神科病院協会主催：平成 28 年度全国研修「精神保健判定医等養成研修会」，福岡，2016.8.25-27.
- 28) 三澤孝夫，島田明裕，小河原大輔：「指定入院医療機関における精神保健福祉士の業務」，「指定通院医療機関における精神保健福祉士の業務」. 厚生労働省委託，精神・神経科学振興財団主催：平成 28 年度全国研修「指定入院・通院医療機関従事者研修会」，東京，2016.12.21-22.
- 29) 三澤孝夫，島田明裕，小河原大輔：「指定入院医療機関における精神保健福祉士の業務」，「指定通院医療機関における精神保健福祉士の業務」. 厚生労働省委託，精神・神経科学振興財団主催：平成 28 年度全国研修「指定入院・通院医療機関従事者研修会」，東京，2017.1.30-31.
- 30) 三澤孝夫，島田明裕，小河原大輔：「指定入院医療機関における精神保健福祉士の業務」，「指定通院医療機関における精神保健福祉士の業務」. 厚生労働省委託，精神・神経科学振興財団主催：平成 28 年度全国研修「指定入院・通院医療機関従事者研修会」，東京，2017.2.27-28.
- 31) 渡邊和美：面接技法. 国立障害者リハビリテーションセンター学院 児童指導員科・リハビリテーション体育学科合同授業，埼玉，2016.9.21.
- 32) 渡邊和美：知的障害者音コミュニケーション特性に応じた聴取と支援. 一般社団法人千葉県社会福祉士会 刑事司法ソーシャルワーカー養成講座（応用編），千葉，2016.10.1.

## F. その他

- 1) 菊池安希子：府中刑務所効果検証業務. 標準的な行動適正化指導の検討に係わる助言・教授，東京，2016.5.23.
- 2) 菊池安希子：府中刑務所効果検証業務. 標準的な行動適正化指導の検討に係わる助言・教授，東京，2016.6.15.
- 3) 菊池安希子：新しい時代に求められる臨床心理士のあり方. 平成 28 年度「公開講演」討論，帝京平成大学，東京，2016.8.27.
- 4) 菊池安希子：府中刑務所効果検証業務. 標準的な行動適正化指導の検討に係わる助言・教授，東京，2017.1.24.
- 5) 菊池安希子：府中刑務所効果検証業務. 標準的な行動適正化指導の検討に係わる助言・教授，東京，2017.2.7.
- 6) 安藤久美子：「少年犯罪と精神鑑定」番組企画協力. NHK，東京，2016.4.11.
- 7) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援. 福島，2016.4.13.
- 8) 安藤久美子：カンファレンス. 東京地方裁判所立川支部刑事 1 部，東京，2016.4.21.
- 9) 安藤久美子：被告人に対する精神鑑定時の状況及び鑑定結果について聴取・捜査協力. 横浜地方検察庁公判部，東京，2016.4.22.
- 10) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導. 国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2016.4.28.
- 11) 安藤久美子：医療観察法事件カンファレンス. 東京地方裁判所刑事 3 部，東京，2016.4.28.
- 12) 安藤久美子：カンファレンス. 横浜地方裁判所第 5 刑事部，神奈川，2016.5.9.
- 13) 安藤久美子：医療観察法電話カンファレンス. 東京地方裁判所立川支部，東京，2016.5.10.

- 14) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2016.5.18.
- 15) 安藤久美子：カンファレンス。東京地方裁判所立川支部，東京，2016.5.6.
- 16) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2016.5.25.
- 17) 安藤久美子：精神障害又は精神鑑定に関する相談会。東京地方検察庁，東京，2016.5.27.
- 18) 安藤久美子：カンファレンス。横浜地方裁判所第4刑事部，神奈川，2016.5.31.
- 19) 安藤久美子：カンファレンス。横浜地方裁判所第5刑事部，神奈川，2016.5.31.
- 20) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2016.6.8.
- 21) 安藤久美子：立てこもり事件被害者に関する画像分析。松山東警察署，東京，2016.6.9-10.
- 22) 安藤久美子：証人尋問。横浜地方裁判所，神奈川，2016.6.16.
- 23) 安藤久美子：医療観察カンファレンス。東京地方裁判所立川支部刑事第3部，東京，2016.6.20.
- 24) 安藤久美子：医療観察カンファレンス。東京地方裁判所刑事第1部，東京，2016.6.21.
- 25) 安藤久美子：電話カンファレンス。東京地方裁判所刑事第3部，東京，2016.6.22.
- 26) 安藤久美子：医療観察カンファレンス。東京地方裁判所刑事第4部，東京，2016.6.24.
- 27) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2016.6.29.
- 28) 安藤久美子：事例相談・助言。横浜地方検察庁，東京，2016.6.30.
- 29) 安藤久美子：鑑定人尋問。横浜地方裁判所，神奈川，2016.7.4.
- 30) 安藤久美子：審判。東京地方裁判所刑事第1部，東京，2016.7.5.
- 31) 安藤久美子：医療観察カンファレンス。東京地方裁判所刑事第4部，東京，2016.7.7.
- 32) 安藤久美子：電話カンファレンス。東京地方裁判所立川支部刑事第2部，東京，2016.7.11.
- 33) 安藤久美子：電話カンファレンス。東京地方裁判所立川支部刑事第3部，東京，2016.7.11.
- 34) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2016.7.13.
- 35) 安藤久美子：事例検討。横浜家庭裁判所調査官，東京，2016.7.14.
- 36) 安藤久美子：電話カンファレンス。東京地方裁判所立川支部刑事第2部，東京，2016.7.15.
- 37) 安藤久美子：ケースカンファレンス。東京地方裁判所刑事第7部，東京，2016.7.19.
- 38) 安藤久美子：電話カンファレンス。東京地方裁判所立川支部刑事第3部，東京，2016.7.21.
- 39) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2016.7.27.
- 40) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導。国立大学法人お茶の水女子大学，東京，2016.7.27.
- 41) 安藤久美子：審判。東京地方裁判所，東京，2016.7.29.
- 42) 安藤久美子：カンファレンス。東京地方裁判所刑事第1部，東京，2016.7.29.
- 43) 安藤久美子：審判。東京地方裁判所刑事第4部，東京，2016.7.29.
- 44) 安藤久美子：相模原市の障害者施設殺害事件を受けて措置入院制度の課題と改善の手立て。NHKスペシャル電話取材，東京，2016.7.29.
- 45) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2016.8.10.
- 46) 安藤久美子：カンファレンス。東京地方裁判所刑事第7部，東京，2016.8.16.
- 47) 安藤久美子：鑑定召喚。東京地方裁判所刑事第7部，東京，2016.8.16.
- 48) 安藤久美子：医療観察法電話カンファレンス。東京地方裁判所刑事第8部，東京，2016.8.17.
- 49) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所刑事第4部，東京，2016.8.18.
- 50) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所刑事第18部，東京，2016.8.18.
- 51) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所刑事第7部，東京，2016.8.18.
- 52) 安藤久美子：審判。東京地方裁判所刑事第4部，東京，2016.9.1.
- 53) 安藤久美子：効果検証業務に係る統計分析及び解釈に関する事項の教授等。八王子少年鑑別所，東京，2016.9.12.
- 54) 安藤久美子：立てこもり事件捜査カンファレンス。東京地方裁判所刑事第1部，東京，2016.9.13.
- 55) 安藤久美子：審判。東京地方裁判所刑事第1部，東京，2016.9.13.
- 56) 安藤久美子：ヒアリング。警視庁，東京，2016.9.13.



- 57) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2016.9.14.
- 58) 安藤久美子：児童の性的搾取等に係る対策に関する有識者第1回ヒアリング。中央合同庁舎，東京，2016.9.20.
- 59) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2016.10.5.
- 60) 安藤久美子：鑑定召喚。さいたま地裁，埼玉，2016.10.6.
- 61) 安藤久美子：精神障害又は精神鑑定に関する相談会。東京地方検察庁，東京，2016.10.7.
- 62) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2016.10.12.
- 63) 安藤久美子：児童の性的搾取等に係る対策に関する有識者第2回ヒアリング。中央合同庁舎，東京，2016.10.18.
- 64) 安藤久美子：医療観察電話カンファレンス。東京地方裁判所立川支部刑事第1部，東京，2016.10.20.
- 65) 安藤久美子：相模原市の障害者施設殺傷事件を受け，精神医療現場の現状や事件の余波など，現場の諸状況について。ハートネットTV（取材），東京，2016.10.21.
- 66) 安藤久美子：ケースカンファレンス。港区保健所，東京，2016.10.27.
- 67) 安藤久美子：カンファレンス。東京地方裁判所刑事第1部，東京，2016.10.31.
- 68) 安藤久美子：殺人捜査支援カンファレンス。静岡県警察署，東京，2016.11.11.
- 69) 安藤久美子：審判。東京地方裁判所刑事1部，東京，2016.11.14.
- 70) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2016.11.16.
- 71) 安藤久美子：知的能力に制約のある少年院在院者に対する性非行防止指導の教材開発に係る助言・指導。神奈川医療少年院，東京，2016.11.18.
- 72) 安藤久美子：カンファレンス。東京地方裁判所刑事7部，東京，2016.11.28.
- 73) 安藤久美子：通り魔捜査支援カンファレンス。静岡県警察署，東京，2016.12.9.
- 74) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2016.12.14.
- 75) 安藤久美子：カンファレンス。東京地方裁判所刑事7部，東京，2016.12.19.
- 76) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2016.12.20.
- 77) 安藤久美子：内山班ヒアリング。日大危機管理学部，東京，2016.12.22.
- 78) 安藤久美子：カンファレンス。東京地方裁判所立川支部刑事3部，東京，2016.12.22.
- 79) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2017.1.11.
- 80) 安藤久美子：審判。東京地方裁判所立川支部刑事第3部，東京，2017.1.19.
- 81) 安藤久美子：通り魔捜査支援カンファレンス。静岡県警察署，東京，2017.1.20.
- 82) 安藤久美子：証人召喚。東京地方裁判所刑事第7部，東京，2017.1.30.
- 83) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所刑事1部，東京，2017.2.2.
- 84) 安藤久美子：家庭裁判所調査官病院実習。裁判所職員研修所委託，東京，2017.2.2.
- 85) 安藤久美子：医療観察法審判。東京地方裁判所立川支部刑事2部，東京，2017.2.7.
- 86) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所刑事18部，東京，2017.2.7.
- 87) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2017.2.8.
- 88) 安藤久美子：責任能力等に関する検討にかかる助言・教授。東京地方検察庁，東京，2017.2.10.
- 89) 安藤久美子：性犯罪加害者の治療について。青少年の非行・被害防止対策検討会，内閣府，東京，2017.2.22.
- 90) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）。愛光女子学園，東京，2017.3.7.
- 91) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援。福島，2017.3.8.
- 92) 安藤久美子：医療観察法カンファレンス。東京地方裁判所刑事第1部，東京，2017.3.9.
- 93) 安藤久美子：鑑定人召喚。東京地方裁判所刑事第1部，東京，2017.3.14.
- 94) 安藤久美子：証人尋問。東京地方裁判所刑事第7部，東京，2017.3.16.
- 95) 安藤久美子：ケースカンファレンス。東京地方裁判所刑事第1部，東京，2017.3.22.
- 96) 安藤久美子：「ストーカー加害者対策について」検討会。警察庁，東京，2017.3.22.

- 97) 安藤久美子：知的障害者のある性犯罪者向け治療プログラムに掛かる効果検証会議（アドバイザー）。法務省矯正局，東京，2017.3.23.
- 98) 安藤久美子：発達障害のある被疑者の取調について（アドバイザー）。警察大学校，東京，2017.3.24.
- 99) 安藤久美子：人質立てこもり事件捜査支援。警視庁，東京，2017.3.28.

## 13. 自殺総合対策推進センター

### I. センターの概要

平成 28 年 4 月 1 日に施行された改正自殺対策基本法の新しい理念と趣旨に基づき、学際的な観点から関係者が連携して自殺対策の PDCA サイクルに取り組むためのエビデンスの提供及び民間団体を含め地域の自殺対策を支援する機能を強化することを使命としている。

自殺総合対策推進センターは、センター長のもとに評議委員会が置かれ、さらに自殺実態・統計分析室、地域連携推進室、自殺未遂者・遺族支援等推進室、自殺総合対策研究室の 4 室を置いている。

センター長：本橋 豊、自殺実態・統計分析室長：金子善博、地域連携推進室長：反町吉秀、自殺未遂者・遺族支援等推進室長：藤森麻衣子、自殺実態・統計分析室研究員：山内貴史（5/31 まで）、非常勤研究員：安藤実里（10/11 から）、川本静香（8/31 まで）、小高真美、高井美智子、菊池美名子、客員研究員：岡 檀、勝又陽太郎、川島大輔、荘島幸子、島菌 進、白神敬介、須賀万智、高橋祥友、廣川聖子、福永龍繁、福山なおみ（7/15 から）、研究生：井上佳祐、徐 慶怡（9/26～30）、高木幸子、高本真寛、久永彩香、森 正樹、センター研究補助員：井上徳穂（5/31 まで）、科研費研究補助員：堀口泰代（7/1 から）、センター研究助手：望月園江、外来事務助手：長島弥生、増田久重。

### II. 研究活動（実務活動を含む）

1) 学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究（センター長が統括）

自殺が多様かつ複合的な原因及び背景を有することに鑑み、保健医療のみならず他部門との連携のあり方を含めた学術的基盤を学際的・国際的観点から強化し、国際的動向を注視しつつ我が国の自殺総合対策のさらなる推進に貢献することを目的とし、海外視察やシンポジウムを開催した。（本橋、反町、金子）平成 28 年度は班会議を 3 回開催し、最終年度としての研究成果のとりまとめを行った。平成 28 年 10 月 26 日、第 75 回日本公衆衛生学会総会シンポジウムとして「地域における自殺対策の人材育成」を開催し、今後重要となる地域自殺対策推進における人材育成の在り方について討議を行った。平成 29 年 1 月 22 日に東京大学小島ホールにおいて、第 1 回国際自殺対策フォーラムを開催し、ドイツ・ライプツヒヒ大学精神医学講座の Ulrich Hegerl 教授を招聘し基調講演を実施した。

国際的活動としては、平成 28 年 10 月にスイス・ジュネーブ市で開催された mhGAP フォーラムに参加し、国際的なメンタルヘルス研究と施策の動向についての情報収集を行った。また平成 28 年 11 月 28～29 日にフィリピン・マニラ市で開催された WHOCC 合同会議に参加し、アジア地域におけるメンタルヘルスの施策の動向についての情報収集を行った。

平成 28 年度における研究活動として最も重要なものは、地域自殺実態プロフィールの開発及び地域自殺対策政策パッケージの概念構築とその社会的実用化のための研究だった。いずれも社会的実用化に向けた研究開発が成功し、平成 29 年度に閣議決定される新たな自殺総合総合対策大綱にも両者は重要項目として盛り込まれ、社会的貢献に直ちに資する政策研究を目指すという「学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」の最終的な目標を達成することができた。

2) 自殺実態・統計分析室の研究活動

自殺実態・統計分析室では、主として地域の自殺実態プロファイルの研究、開発を行った。これは、改正自殺対策基本法により国および自殺総合対策推進センターに作成が求められているもので

あり、法改正により全国自治体に義務づけられた自殺対策計画の策定に際し、地域の自殺の実状を勘案する際の参考とされるものである。その目的は、地域の実態の分析および地域特性（地域の課題）の効果的な把握であり、自治体における自殺の基本的分析および、自殺の地域特性にあった政策形成、対策事業の企画および評価に活用されることが期待されている。この中では、自殺統計、人口動態統計、国勢調査、経済センサスやその他の公的統計や官公庁の事業統計、民間団体の調査など新たな自殺対策に関連する各種の資料を包括的に活用することが求められている。このプロファイルは都道府県政令指定都市および都道府県、市区町村に対する自殺対策のための包括的な情報提供として、国内全自治体（1741カ所）を対象とし作成するものであり、項目内容だけでなく効率的な作成配付方法についての研究開発も併せて行っている。平成28年度中には自殺統計を中心とした第一版を作成し、自殺総合対策推進センターとして、国内全自治体に対して配付した。これらは各地の自殺対策の参考資料として活用されている。これらの開発状況については10月に行われた第75回日本公衆衛生学会総会において「地域の自殺実態統計プロファイル提供システムの開発」として、また平成29年1月に行われたThe 1st international forum on suicide prevention policy（第1回自殺予防政策国際フォーラム）においてCommunity Profile Data on Suicide: A Key Tool for Promoting Community Suicide Policy（自殺対策推進のための重要なツールとしての地域自殺実態プロファイル）として報告した。

### 3) 地域連携推進室の研究活動

#### ① 研究活動

厚生労働科学研究（代表研究者・本橋豊）において、「避けられる死を防ぐための死因究明制度と自殺対策への活用のための政策提言」に関する研究の遂行のため、アイルランド共和国の死因究明関連機関、自殺対策関係機関を訪問調査し、日本セーフティプロモーション学会（2016年12月）において研究発表するとともに、報告書のとりまとめを行った。

足立区への視察調査を基に、「SOSの出し方教育」について、足立区の関係者と共著で、雑誌「法律のひろば」2016年10月号に論文を執筆した。

「よりそいホットライン」（復興庁並びに厚生労働省社会援護局補助金事業）の仕組みと果たしている機能について、第12回国際障害予防・セーフティプロモーション学会（2016年9月、フィンランド・タンペレ）において、研究発表を行った。

#### ② 実務活動

都道府県及び政令指定都市に対しては、地域自殺対策推進センター連絡会議の開催、メールや電話等を用いた相談により、自殺総合対策の推進並びに自殺対策計画の策定支援を行った。

自殺総合対策や地域自殺対策推進計画に関する相談を、市町村や保健所などから受け、支援を行った。

自殺対策の企画立案において中心的な役割と担う自治体担当者を主な対象とし、自殺対策の企画・運営能力の向上並びに、自殺対策計画策定の基礎を身につけるための人材養成研修（地域自殺対策推進企画研修）の企画・運営を行った。

自治体、関係機関、医療機関等で相談業務に関わる方を対象とし、生きる支援としての自殺対策の意義を理解し、自殺に傾いた人や自死で遺された人の思いに寄り添う相談を、地域における関係機関や民間団体と連携して行う基礎を身につけるための人材養成研修（自殺対策・相談支援研修）の企画・運営を行った。

また、都道府県並びに市区町村の首長を対象とする都道府県自殺対策トップセミナー（11県で開催）の運営支援を行うと共に、講師を担当することで、都道府県並びに市区町村の自殺総合対策の推進並びに地域自殺対策計画の策定支援を行った。

自殺対策計画策定の支援やSOSの出し方教育に関わる自治体（主として、都道府県並びに指定都市）及び関係機関・団体から依頼された講演（延べ20回）を積極的に引き受け、各地にお

ける人材育成に貢献した。

厚生労働省補助金事業「未遂者ケア研修（精神科救急版，並びに一般救急版）」の企画運営を担った。

以上の活動を担う中で，自殺総合対策推進並びに地域自殺対策推進計画策定のための自治体支援のあり方について，検討を行った。

4) 自殺未遂者・遺族支援等推進室

地域における自殺未遂者ケアの在り方に関する講演会をセンター長が2回行った。

平成28年5月に自死遺族ケアの在り方に関するヒアリングを日本弁護士連合会所属の弁護士を対象に実施した。

5) 自殺総合対策研究室

センター長が研究代表を務める厚生労働科学研究「学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」の実施におけるフォーラムや班会議の開催支援とともに，自殺総合対策の在り方についての研究を実施した。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

メディア・カンファレンスを開催し（2017.2.8），メディア関係者に自殺対策の現状や自殺報道の影響等の啓発を行った。

2) 専門教育面における貢献

平成28年度自殺未遂者ケア研修（精神科救急版）を日本精神科救急学会と共催で開催した（2017.2.5）。また，一般救急版は，日本臨床救急医学会と共催で開催した（2017.3.4）。

本橋 豊は，広島大学医学部，東京大学大学院医学系研究科にて非常勤講師を務めた。

また，本橋 豊は平成28年10月に開催された全国医育機関衛生学公衆衛生学教育協議会において日本全国の医学部の衛生学・公衆衛生学の教育担当者を対象に，医学部医学科の正規カリキュラムに自殺対策の授業を盛り込むことを要請し，平成29年度に10の医学部医学科の正規授業に自殺対策の授業を実施することが可能になった。

金子善博は，秋田大学大学院医学系研究科，弘前大学医学部にて非常勤講師を務めた。

反町吉秀は，青森県立保健大学の非常勤講師を務めた。

3) 精研の研修の主催と協力

反町吉秀は，第1回地域自殺対策推進企画研修（2016.8.22-24），第1回自殺対策・相談支援研修（2016.9.26-27）の主任を務め，第1回地域自殺対策推進企画研修（2016.8.22-24）の講師を担当した。

本橋 豊は，第1回地域自殺対策推進企画研修（2016.8.22-24），第1回自殺対策・相談支援研修で講師を担当した。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

本橋 豊は，平成28年7月に「自殺対策研究のグランドデザイン」をとりまとめ，このグランドデザインを参照して，平成29年度開始される国の「革新的自殺対策プログラム」が構想された。

本橋 豊は，平成28年12月から設置された厚生労働省「新たな自殺総合対策の在り方に関する検討会」の座長を務め，新たな自殺総合対策大綱の改定に求められる検討会の議論をとりまとめた。

本橋 豊は日本公衆衛生学会・自殺対策メンタルヘルス専門委員会委員長として，同学会の国への自殺対策の提言をとりまとめ，平成29年2月20日厚生労働省社会・援護局長に提出した。

全国の都道府県・政令指定都市に設置された地域自殺対策推進センターの連絡調整のため，平

成 28 年度第 1 回地域自殺対策推進センター等連絡会議を行った (2016.11.17)。

反町吉秀は、横浜市栄区セーフティコミュニティ傷害サーベイランス分科会委員、平成 28 年度寄り添い型相談支援事業「相談内容分析・検討委員会」委員を務めた。

- 5) センター内における臨床的活動 なし
- 6) その他

#### IV. 研究業績

##### A. 刊行物

##### (1) 原著論文

- 1) Toyoshima M, Kaneko Y, Motohashi Y: Leisure-time activities and psychological distress in a suburban community in Japan. Preventive Medicine Reports 4: 1-5, 2016.
- 2) 島本和恵, 反町吉秀, 岩瀬靖彦: 乳幼児の飲料摂取と母親の飲料に対する意識との関連. 日本栄養士会雑誌 59 (9): 25-36, 2016.
- 3) 瀧澤 透, 反町吉秀: オーストラリアにおける国立コロナ情報システムデータベースによる公衆の健康と安全の増進一. 日本セーフティプロモーション学会誌 9 (2): 35-43, 2016.
- 4) 瀧澤 透, 反町吉秀: オーストラリア連邦ビクトリア州における Victorian Suicide Register の概要と自殺予防 —コロナ事務所の訪問調査より—. 日本セーフティプロモーション学会誌 9 (1): 35-49, 2016.
- 5) Higuchi Y, Inagaki M, Koyama T, Kitamura Y, Sendo T, Fujimori M, Uchitomi Y, Yamada N: A cross-sectional study of psychological distress, burnout, and the associated risk factors in hospital pharmacists in Japan. BMC Public Health 16: 534-534, 2016.

##### (2) 総説

- 1) 本橋 豊, 金子善博: 自殺の実態と対策の現状. 法律のひろば 69(10): 4-10, 2016.
- 2) 本橋 豊: 組織における自殺対策—職場のゲートキーパー養成—. 産業ストレス研究 23 (4): 257-260, 2016.
- 3) 馬場優子, 西川路由紀子, 反町吉秀: SOS の出し方教育—児童・生徒への自殺予防教育の具体的な取組. 法律のひろば 69(10): 25-33, 2016.
- 4) 藤森麻衣子: がん患者との良好なコミュニケーション. 医薬ジャーナル 52 (12): 75-79, 2016.

##### (3) 著書

- 1) 本橋 豊: これからの自殺対策の方向性. 精神保健医療福祉白書編集委員会編: 精神保健医療福祉白書 2017, 中央法規出版, 東京, 45-45, 2016.
- 2) 近藤 克則, 本橋 豊, 金子 善博, 藤田 幸司, 他: ソーシャル・キャピタルと自殺予防, ケアと健康, 講座ケア 4, ミネルヴァ書房, 140 - 156, 2016.9.
- 3) 藤森麻衣子, 稲垣正俊: 心的外傷およびストレス因関連障害群 適応障害. (編集) 下山晴彦, 中嶋義文, (編集協力) 鈴木伸一, 花村温子, 滝沢 龍編: 公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法, 医学書院, 東京, 82-83, 2016.

##### (4) 研究報告書

- 1) 本橋 豊: 総括研究報告, 障害者対策総合研究事業「学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」平成 28 年度総括・分担研究報告書, 1-15, 2016.
- 2) 本橋 豊, 金子善博, 反町吉秀: 自殺対策のための重要なツールとしての地域実態プロファイル, 障害者対策総合研究事業「学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」平成 28 年度総括・分担研究報告書, 23-26, 2016.

- 3) 金子善博, 本橋 豊, 反町吉秀: 地域自殺対策の政策パッケージ～自殺対策計画推進の重要ツールの開発～, 障害者対策総合研究事業「学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」平成 28 年度総括・分担研究報告書, 27-32, 2016.
- 4) 本橋 豊, 金子善博, 反町吉秀: WHO の自殺対策の動向～mhGAP Forum の概要と地域自殺対策ツールの開発～, 障害者対策総合研究事業「学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」平成 28 年度総括・分担研究報告書, 41-46, 2016.
- 5) 本橋 豊, 井門正美, 金子善博, 反町吉秀: 「児童生徒の SOS の出し方教育」の研究体制整備～教職大学院における人材育成の体制整備の推進～, 障害者対策総合研究事業「学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」平成 28 年度総括・分担研究報告書, 47-51, 2016.
- 6) 本橋 豊, 清水康之, 反町吉秀, 石原憲治, 岩瀬博太郎: アイルランド共和国における自殺対策について～その死因究明制度と全国自傷登録制度ならびに自殺対策への波及効果を中心に～, 障害者対策総合研究事業「学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」平成 28 年度総括・分担研究報告書, 69-84, 2016.
- 7) 本橋 豊, 藤田幸司, 金子善博, 佐々木久長, 烏帽子田彰: 自殺総合対策の政策過程に関する障害者対策総合研究事業「学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」平成 28 年度総括・分担研究報告書, 125-129, 2016.
- 8) 本橋 豊, 澤田康幸, 反町吉秀, 藤原佳典: 韓国の地域づくり型自殺対策の現状と課題－華城市の取り組み, 障害者対策総合研究事業「学際的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」平成 28 年度総括・分担研究報告書, 125-129, 2016.

#### (5) 翻訳

- 1) 自殺総合対策推進センター (英訳): 改正自殺対策基本法. Basic Law on Suicide Countermeasures (Law No.85 of 2006) Revised by the Diet, March 22, 2016. (JSSC ホームページ掲載: [jssc.ncnp.go.jp](http://jssc.ncnp.go.jp))
- 2) 自殺総合対策推進センター (英訳): 自殺総合対策大綱. The General Principles of Suicide Prevention Policy Toward the Creation of a Society Where No One is Driven to Suicide (Cabinet Decision, 28<sup>th</sup> August 2012). (JSSC ホームページ掲載: [jssc.ncnp.go.jp](http://jssc.ncnp.go.jp))

#### (6) その他

- 1) 瀧澤 透, 反町吉秀: オーストラリアにおける国立コロナ情報システムデータベースによる公衆の健康と安全の増進－. 日本セーフティプロモーション学会誌 9 (2): 35-43, 2016.
- 2) 瀧澤 透, 反町吉秀: オーストラリア連邦ビクトリア州における Victorian Suicide Register の概要と自殺予防－コロナ事務所の訪問調査より－. 日本セーフティプロモーション学会誌 9 (1): 35-49, 2016.

#### B. 学会・研究会における発表

##### (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Motohashi Y: WHO collaborating centre for Research and Training in Suicide Prevention. Second Regional Forum of WHO Collaborating Centres in the Western Pacific, Manila, Philippines, 2016.11.28-29.
- 2) 本橋 豊: 国際的・国際的アプローチによる新たな自殺総合対策の推進. 第 1 回国際自殺対策
- 3) フォーラム, 東京, 2017.1.22.
- 4) 本橋 豊: 地域自殺対策の推進に向けた公衆衛生人材の育成. 第 75 回日本公衆衛生学会, 大阪, (ア) 2016.10.26-28.

- 5) 本橋 豊: 大震災からの復興と公衆衛生の課題. 第75回日本公衆衛生学会, 大阪, 2016.10.26-28.
- 6) 金子善博: 自殺対策推進のための重要なツールとしての地域自殺実態プロフィール. 第1回国際自殺対策フォーラム, 東京, 2017.1.22.
- 7) 金子善博: (シンポジウム1) 地域における自殺対策の人材育成—行政と大学の連携. 第75回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016.10.26-28.
- 8) 大場ミエ, 荒木田美香子, 数見隆生, 反町吉秀: 生きる力を支える地域社会. 特別シンポジウム 地域社会の未来を拓く英略—生きる力を育み支える, 第5回日本公衆衛生看護学会学術集会, 仙台国際センター, 宮城, 2017.1.22.
- 9) Uchitomi Y, Fang CK, Fujimori M, Tang WR: (WORKSHOP1) Breaking bad news and related communication. Psychosocial Cancer Care, Singapore, 2016.11.10.
- 10) Fujimori M: (PLENARY LECTURE2) Communication skills training. Psychosocial Cancer Care, Singapore, 2016.11.11.
- 11) 松岡 豊, 藤澤大介, 猪口浩伸, 川原美紀, 藤森麻衣子, 明智龍男: 合同シンポジウム3: 支持・緩和・心理的ケアのエビデンスを創出する多施設協働研究グループ (J-SUPPORT) の設立第29回日本サイコオンコロジー学会総会, 北海道, 2016.9.24.
- 12) 秋月伸哉, 二宮ひとみ, 岡島美朗, 横尾実乃里, 白井由紀, 藤森麻衣子: シンポジウム6: HARE-CST10年のあゆみ—サイコオンコロジストが活躍できるコミュニケーション技術研修会—. 第29回日本サイコオンコロジー学会総会, 北海道, 2016.9.24.
- 13) 藤森麻衣子: ワークショップ3: がんリハビリテーションにおけるコミュニケーションスキル. 第6回日本がんリハビリテーション研究会, 慶應義塾大学日吉キャンパス独立館, 横浜, 2017.1.8.

## (2)一般演題

- 1) Kaneko Y, Fujita K, Yong R, Sasaki H, Eboshida A, Motohashi Y: Study on the Importance of Individual Level Cognitive Social Capital in suicide prevention among the Community-Dwelling People. 5th European Conference on Mental Health, Prague, 2016.9.14-16.
- 2) 金子善博, 反町吉秀, 本橋 豊: 地域の自殺実態統計プロフィール提供システムの開発. 第75回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016.10.26-28.
- 3) Sorimachi Y, Isomura D, Endo T: A nation-wide free telephone hot line for social inclusion after the Great East Japan Earthquake. The 12th World Conference on Injury Prevention and Safety Promotion, Tampere, Finland, 2016.9.18-22.
- 4) 反町吉秀, 石原憲治, 金子善博, 本橋 豊: アイルランド共和国における全国自傷行為登録制度について. 日本セーフティプロモーション学会第10回学術大会, 京都, 2016.12.12-13.
- 5) Fujimori M, Shirai Y, Asai M, Katsumata N, Kubota K, Uchitomi Y: Effect of communication skills training program for oncologists based on the patient preferences for communicating bad news: A randomized control trial. 31st International congress of psychology, Yokohama, 2016.7.24-29.
- 6) Fujimori M, Hikiji W, Tanifuji T, Suzuki H, Takeshima T, Matsumoto T, Yamauchi T, Kawano K, Fukunaga T: Characteristics of suicide in cancer patients in the Special Wards of the Tokyo Metropolitan Area. 18th International psycho-oncology society congress, Ireland, 2016.10.17-21.
- 7) 藤森麻衣子, 引地和歌子, 谷藤隆信, 鈴木秀人, 竹島 正, 松本俊彦, 山内貴史, 川野健治, 福永龍繁: 東京都23区におけるがんの既往のある自殺事例の人口統計学的特性. 第29回日本サイコオンコロジー学会総会, 北海道, 2016.9.24-25.



**(3)研究報告会**

- 1) 本橋 豊：改正された自殺対策基本法と地域における自殺対策の推進方策。韓国自殺予防視察団報告会，2016.10.20
- 2) 本橋 豊：日本の自殺対策：今後の課題。精神保健研究所ランチョンセミナー，2016.11.21.

**(4)その他**

- 1) 藤森麻衣子：日本緩和医療学会 平成 28 年度第 1 回 SHARE-CST WPG 会議，2016.6.18.
- 2) 藤森麻衣子：日本緩和医療学会 平成 28 年度第 3 回 SHARE-CST WPG 会議，2017.2.11.

**C. 講演**

- 1) Motohashi Y: New Step in the Development of Suicide Prevention Policy by Interdisciplinary Approach with an International Scope. International Forum on Suicide Prevention Policy, Tokyo, Japan. 2017.1.22.
- 2) 本橋 豊：いのちのリレー講座。京都府健康福祉部福祉・援護課，京都，2016.5.12.
- 3) 本橋 豊：児童・生徒の SOS の出し方教育について。東京都教育庁主催 平成 28 年度自殺防止教育連絡会，東京，2016.6.9.
- 4) 本橋 豊：自殺総合対策推進センターの役割について。全国自殺対策主管課長会議，2016.6.18
- 5) 本橋 豊：自殺対策の現状と対策について。一般社団法人秋田県薬剤師会女性部会研修会，秋田，2016.7.24.
- 6) 本橋 豊：自殺総合対策推進センターの役割。いのちささえる真心あふれる社会づくり市区町村連絡協議会総会，2017.7.29.
- 7) 本橋 豊：自殺総合対策推進センターについて，自殺対策を推進する議員の会総会。2016.10.12.
- 8) 本橋 豊：地域自殺対策推進計画策定のプロセス。自殺のない社会づくり市区町村会西ブロック研修会，京都市，2016.12.2.
- 9) 本橋 豊：自殺対策基本法の改正に係る自殺対策計画及び未遂者対策等の今後の施策等について。自殺未遂者支援関係者研修会，秋田，2016.12.16.
- 10) 本橋 豊：自殺対策の基本的な枠組みと関係機関の役割と連携について，平成 28 年度地域自死対策研修会，仙台市，2017.2.16.
- 11) 本橋 豊：自殺対策基本法と地域の取組み～市町村の自殺対策計画の作成に向けて～。地域科学研究会，改正自殺対策基本法施行と自治体の対応施策」セミナー，2017.2.2.
- 12) 本橋 豊：地域自殺対策の政策パッケージ概要。自殺対策を推進する議員の会総会，2017.3.15.
- 13) 本橋 豊：生きる支援に向けた児童生徒の SOS の出し方教育～国の政策の今後の方向性～。命の教育 2017 シンポジウム，札幌市，2017.3.19
- 14) 金子善博：児童・生徒の SOS の出し方教育について。東京都教育庁主催 平成 28 年度自殺防止教育連絡会，東京，2016.6.9.
- 15) 反町吉秀：児童・生徒の SOS の出し方教育について。東京都教育庁主催 平成 28 年度自殺防止教育連絡会，東京，2016.6.14.
- 16) 反町吉秀：市区町村における自殺対策の留意点について。神奈川県精神保健福祉センター主催 平成 28 年度第 1 回地域自殺対策担当者会議，神奈川，2016.6.24.
- 17) 反町吉秀：自殺対策計画策定について。青森県主催 平成 28 年度青森県自殺総合対策研修会，青森，2016.7.15.
- 18) 反町吉秀：自殺対策の国の動向と多分野協働で行う自殺予防の取り組みについて。さいたま市こころの健康センター主催 平成 28 年度重点施策研修，埼玉，2016.8.3.
- 19) 反町吉秀：生命尊重を基盤とした生活指導の徹底 児童・生徒の自殺予防教育について。大田

- 区教育委員会主催 平成 28 年度生活指導主任会, 東京, 2016.9.8.
- 20) 反町吉秀: 生徒への SOS の出し方教育. 群馬県教育委員会主催 平成 28 年度第 2 回公立高等学校・公立中等学校・県立特別支援学校教育相談対策協議会, 群馬, 2016.9.16.
- 21) 反町吉秀: 市町村自殺対策計画策定研修. 千葉県主催 平成 28 年度千葉県市町村等自殺対策担当者会議, 千葉, 2016.10.6.
- 22) Sorimachi Y: National suicide prevention policy- its history, present situations and future. Lunch time lecture in National Suicide Research Foundation and Department of Epidemiology and Public Health of University College Cork, Cork, Ireland, 2016.11.2.
- 23) 反町吉秀: 日本における自殺対策のこれまでとこれから—改正自殺対策基本法の解説を含めて. 秋田・こころのネットワーク主催 生きることの包括的支援シンポジウム, 秋田, 2016.12.2.
- 24) 反町吉秀: 自殺対策地域計画の策定と包括的な自殺対策の推進について. 愛知県精神保健福祉センター主催 平成 28 年度第 1 回自殺防止地域力強化事業評価研修会, 愛知, 2016.12.27.
- 25) 反町吉秀: 自殺総合対策行動計画見直しのプロセスと対策, 計画策定をうまくすすめるためのヒント. 沖縄県保健医療部健康長寿課主催 平成 28 年度沖縄県自殺総合対策行動計画にかかわる関係者研修会, 沖縄, 2017.1.17.
- 26) 反町吉秀: 地域自殺対策推進計画の策定プロセスと対策・計画策定をうまく進めるためのヒント. 静岡県精神保健福祉センター主催 平成 28 年度静岡県自殺対策情報交換会, 静岡, 2017.1.27
- 27) 反町吉秀: 自殺対策のこれまでとこれから—改正自殺対策基本法の解説を含めて—. 山形県精神保健福祉センター主催 平成 28 年度自殺対策についての相談機関合同研修会, 山形, 2017.2.10.
- 28) 反町吉秀: 被災地における自殺対策行動計画策定に向けての考え方. 福島県精神保健福祉センター主催 平成 28 年度自殺対策担当者研修会, 福島, 2017.2.16.
- 29) 金子善博: 自殺対策における自殺統計の活用について. 長野県精神保健福祉センター主催 平成 28 年度自殺防止地域関係者研修会, 長野, 2016.12.21.

## D. 学会活動

### (1) 学会主催

- 1) 本橋 豊: 第 1 回国際自殺対策フォーラム, 平成 29 年 1 月 22 日, 東京.

### (2) 学会役員

- 1) 本橋 豊: 日本公衆衛生学会理事, 評議員, 自殺対策メンタルヘルス委員会委員長, 東日本大震災復興対策推進委員会委員長
- 2) 本橋 豊: 日本自殺総合対策学会発起人
- 3) 本橋 豊: 日本健康都市学会世話人
- 4) 本橋 豊: 東北公衆衛生学会名誉会員
- 5) 金子善博: 秋田県公衆衛生学会世話人
- 6) 反町吉秀: 日本セイフティープロモーション学会副理事長
- 7) 反町吉秀: 日本健康福祉政策学会理事
- 8) 藤森麻衣子: 日本サイコオンコロジー学会 代議員, 教育委員, ガイドライン策定委員, 広報・普及啓発委員

### (3) 座長

- 1) 本橋 豊: シンポジウム・地域における自殺対策の人材育成, 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016.10.26-28.
- 2) 本橋 豊: 第 1 回国際自殺対策フォーラム, 基調講演 Ulrich Hegrl 欧州における自殺予防介

入，東京，2017.1.22

- 3) 本橋 豊：平成 28 年度メディアカンファレンス，東京，2017.2.8.

#### (4) 学会誌編集委員等

- 1) 金子善博：秋田県公衆衛生学雑誌編集委員

### E. 研修

#### (1) 研修企画

- 1) 本橋 豊：平成 28 年度メディアカンファレンス．東京，2017.2.8.
- 2) 反町吉秀：第 1 回地域自殺対策推進企画研修．東京，2016.8.22-24.
- 3) 反町吉秀：第 1 回自殺対策・相談支援研修．東京，2016.9.26-27.
- 4) 反町吉秀：平成 28 年度自殺未遂者ケア研修会（精神科救急版）．京都，2017.2.5.
- 5) 反町吉秀：平成 28 年度自殺未遂者ケア研修会（一般救急版）．東京，2017.3.4.
- 6) 藤森麻衣子：平成 28 年度第 1 回国立精神・神経医療研究センター自殺予防研修．東京，2016.6.29・2016.10.26.

#### (2) 研修会講師

- 1) 本橋 豊：日本の自殺問題，自殺対策の基本的な枠組み，センターの役割．第 1 回地域自殺対策推進企画研修．東京，2016.8.22.
- 2) 本橋 豊：日本の自殺問題，自殺対策の基本的な枠組み．第 1 回自殺対策・相談支援研修．東京，2016.9.26.
- 3) 本橋 豊：自殺の現状と自殺対策の方向性-改正自殺対策基本法の理念と枠組み．平成 28 年度自殺未遂者ケア研修会（精神科救急版），京都，2017.2.5.
- 4) 金子善博：地域診断と自殺統計の活用．第 1 回地域自殺対策推進企画研修．東京，2016.8.23.
- 5) 反町吉秀：地域自殺対策推進計画の策定プロセスと市町村支援．第 1 回地域自殺対策推進企画研修．東京，2016.8.24.

### F. その他

- 1) 本橋 豊：自殺予防教育．毎日新聞，2016.5.2.
- 2) 本橋 豊：視点・論点．NHK，2016.6.21.
- 3) 本橋 豊：Listening <そこが聞きたい>自殺大国からの脱却．毎日新聞，2016.7.7.
- 4) 本橋 豊：自分を大切に，相手を大切に，一人ひとりを大切に 大切ないのちを守るためにできること．政府インターネットテレビ，2016.8.16.
- 5) 本橋 豊：先読み！夕方ニュース，NHK ラジオ，2016.8.23.
- 6) 本橋 豊，反町吉秀：長野県「いのち支える地域自殺対策」トップセミナー．長野，2016.9.14.
- 7) 本橋 豊，反町吉秀：徳島県自殺対策トップセミナー．徳島，2016.12.19.
- 8) 本橋 豊，金子善博：千葉県自殺対策トップセミナー．千葉，2017.1.16.
- 9) 本橋 豊，反町吉秀：香川県自殺対策トップセミナー．香川，2017.1.25.
- 10) 本橋 豊，反町吉秀：香川県自殺対策トップセミナー．大分，2017.1.30.
- 11) 本橋 豊，反町吉秀：広島県自殺対策トップセミナー．広島，2017.2.7.
- 12) 本橋 豊，反町吉秀：山梨県地域自殺対策トップセミナー．山梨，2017.2.14.
- 13) 本橋 豊，反町吉秀：茨城県「いのち支える地域自殺対策」トップセミナー．茨城，2017.2.15.
- 14) 本橋 豊，反町吉秀：愛媛県自殺対策トップセミナー．愛媛，2017.3.22.
- 15) 本橋 豊，反町吉秀：新潟県自殺対策トップセミナー．新潟，2017.3.28.
- 16) 反町吉秀：第 1 回新潟県自殺対策計画策定委員会．新潟，2016.9.29.

## 14. 災害時こころの情報支援センター

### I. 研究部の概要

災害時こころの情報支援センターは、平成23年東日本大震災の被災者に対する継続的な対応、及び今後発生が予想されるその他の災害の発生に備えた体制づくりのための研究や調査を行うことを目的として、平成23年12月に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所に設置された。

当センターの活動は、主に以下の4つである。

#### (1) DMHISS の改良，調査研究

##### ①災害対応経験の集積を踏まえた災害対応マニュアルの開発

岩手県、宮城県、福島県が設置した心のケアセンターや、これまでの自然災害の対応経験者、国内外の専門家、DPAT事務局の意見、国内外の文献を参照し、災害対応マニュアルの開発、改良を行った。

##### ②災害時、災害後の支援経験に基づいた DMHISS の改良

実際に DMHISS を使用してきた、上記心のケアセンターや、広島水害、茨城県水害の支援経験者の意見を踏まえ、DMHISS 改良の課題を抽出し、改良に着手した。

#### (2) 災害及び事故・事件後の精神保健医療に係る助言・技術的支援，情報発信・連携

##### ①大規模災害後の心のケアセンター活動について

上記心のケアセンターに対して日常業務に関する助言を行うとともに、実施中の心のケア活動から得られるデータ（被災状況、家族状況、年齢、性別、職業、居住場所等生活環境、症状、治療履歴等）について DMHISS 等を活用しながら収集し、解析の上、助言を行った。

##### ②その他の自然災害後の精神保健医療について

現地のニーズを踏まえ、精神保健福祉センター長会議等と連携し、助言、指導を行った。

#### (3) 連携協議会の開催

上記に関して、効果的な予防、対応、モニタリング、専門家育成、ネットワーク形成等についての、地域精神保健医療専門家等による連絡協議会を複数回開催し、有効な方策と、継続的な協力体制のあり方を検討し、実施した。

#### (4) PTSD 対策専門研修の開催

厚生労働省「こころの健康づくり対策事業」のうち、「PTSD（心的外傷後ストレス障害）対策専門研修事業」を受託し、PTSD 及び災害時の精神保健医療支援に関する専門家の養成研修を実施した。

平成28年度の当センターの構成は以下の通りである。センター長：金吉晴、情報支援研究室長：鈴木友理子、併任研究員：関口敦、高橋秀俊、科研費研究員：島津恵子、科研費研究助手：小林真綾、藪内奈津子、客員研究員：宮本有紀、種市康太郎、昼田源四郎、前田正治、高橋晶、秋山剛、笠井清登、富田博秋、研究生：大滝涼子、石田牧子、任喜史。

### II. 研究活動

- 1) 平成23年東日本大震災等被災者への支援内容に関するデータの収集・分析及び技術的指導・助言
- 2) 3県心のケアセンター活動報告集計
- 3) WHO版の心理的応急処置（PFA）の普及活動可能性の検討

### III. 社会的活動に関する評価

- (1) 市民社会に対する一般的な貢献

以下の報道を通じて研究成果の社会還元を行った。

- ・読売新聞（朝刊 3 面 2016.4.30）熊本地震 余震恐怖「心のケア」ストレス深刻・避難所に「相談室」DPAT.（金）
- ・朝日新聞（朝刊 33 面 2016.5.18）長引く避難 心のケアを ～不眠・うつ病高まるリスク～.（金）
- ・神奈川新聞（朝刊 21 面 2016.12.26）相模原殺傷 5 か月 周辺住民も傷深く 精神面の相談 50 件超 続いた眠れぬ日々 識者「日常生活大切に」.（金）
- ・震災関連死を防ぎ、命を守る知識とは？. TBS ラジオ 萩上チキ Session22 電話ゲスト, 2016.4.20.（金）
- ・避難生活にストレス 多くの学校で休校続く 子供の遊び場必要 学習塾で無料授業も. 日本テレビ news every VTR 出演, 2016.4.27.（金）
- ・当センターの HP(<http://saigai-kokoro.ncnp.go.jp/>)で、ガイドライン・マニュアル等の資料を、専門家、一般向けに公開し、災害時の対応についての啓発を行った。

## (2) 専門教育面における貢献

- ・平成 28 年度「こころの健康づくり対策事業」補助金による PTSD 対策専門研修事業  
 災害被災者、犯罪・事故被害者、災害遺族、被虐待児童等、トラウマに対するこころのケアが必要な方に対応できる人材を確保するため、標記補助金を別途獲得して、精神保健医療従事者等に対しトラウマに対するこころのケアにおいて必要な知識を系統的に習得させるための研修を実施し、地域においてトラウマに対するこころのケアに専門的に対応できる者の養成を行った。
  - A. 通常コース 平成 29 年 2 月 22 日（水）～23 日（木）  
 災害被害者、犯罪・事故被害者、災害遺族、被虐待児童等の心理的トラウマに関する理解を深め、PTSD 等の治療の知識を得、基本的対応スキルを習得する為、主に精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、臨床心理技術者等で実際にトラウマの現場に関わっている者を対象に実施され、114 名が受講した。
  - B. 大規模災害対策コース（一般及び行政医療関係者） 平成 29 年 2 月 14 日（火）  
 災害被災者への精神保健医療支援への理解を深め、行政において、あるいは行政と連携して効果的な対応を行う知識を習得する為、自然災害、甚大事故、テロ等、大規模災害時に、行政において、あるいは行政と関連して、地域での精神保健医療対応に従事する可能性のある保健医療関係者を対象に実施され、50 名が受講した。
  - C. 大規模災害対策コース（精神医療関係者） 平成 29 年 2 月 2 日（木）～2月 3 日（金）  
 大規模災害時の地域精神保健医療対応に関する専門知識の習得及び、災害時の被災者への心理社会的初期対応に関する「サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）」の講義、ロールプレイ、コミュニケーションスキル、シナリオに基づいた討論などを通じて、対応の基本方針を理解し、基本技能を習得する為、自然災害、甚大事故、テロ等、大規模災害時に実際に地域でのこころのケアへの対応にあたる可能性のある精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、臨床心理技術者等を対象に実施され、59 名が受講した。
- ・当センターの HP で、専門家向けに e-learning を用いた災害時の精神保健医療に関する教育プログラムを実施した。
- ・WHO 版 PFA を日本語に翻訳・導入し、WHO ならびに国際連合大学グローバルヘルス研究所との研究協力書の下で PFA 指導者研修、一般研修を継続した。
- ・日本ユニセフ協会と連携し、ユニセフ本部が発行している Child Friendly Space (CFS) のマニュアルをもとに、国内での緊急時のために共同で開発した「子どもにやさしい空間」のガイドラインに基づいた研修プログラムを作成し、feasibility を検討した。熊本震災では避難所の一

部で NGO によって CFS 活動が行われ、メディア報道がなされた。

- ・各種学術団体で、心のマネジメントや災害時の精神的健康について講演を行った。
- ・専門家向けに PTSD や災害精神医療等についての講演を行った。
- ・メディア取材を通じて専門知識の社会普及を行った。
- ・OCED の放射線防護に関するヒアリングで情報提供を行った。Psychological impact of Fukushima Nuclear Power Plant. Meeting with the OECD Nuclear Energy Agency (NEA) and the Division of Radiological Protection & Radioactive Waste Management, Tokyo, 2016.9.27.

### (3) 精研の研修の主催と協力

### (4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

金 吉晴：原子力規制委員会原子力規制庁 緊急事態応急対策委員

金 吉晴：ふくしま心のケアセンター 顧問

金 吉晴：みやぎ心のケアセンター 顧問

鈴木友理子：福島県立医科大学放射線医学県民健康管理センター 専門委員

鈴木友理子：仙台市教育局教育委員会 平成 28 年度仙台市児童生徒の心のケア推進委員

### (5) センター内における臨床的活動

### (6) その他

## IV. 研究業績

### A. 刊行物

#### (1) 原著論文

- 1) Nakagawa S, Sugiura M, Sekiguchi A, Kotozaki Y, Miyauchi CM, Hanawa S, Araki T, Takeuchi H, Sakuma A, Taki Y, Kawashima R: "Effects of post-traumatic growth on the dorsolateral prefrontal cortex after a disaster". Scientific Reports 27(6): 34364, 2016.
- 2) Iwasa H, Suzuki Y, Shiga T, Maeda M, Yabe H, Yasumura S: Psychometric Evaluation of the Japanese Version of the Posttraumatic Stress Disorder Checklist in Community Dwellers Following the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Incident: The Fukushima Health Management Survey. SAGE Open: 1-11, 2016.
- 3) Kunii Y, Suzuki Y, Shiga T, et al: Severe Psychological Distress of Evacuees in Evacuation Zone Caused by the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident: The Fukushima Health Management Survey. PLoS ONE 11(7): e0158821, 2016.
- 4) Uemura M, Ohira T, Yasumura S, Otsuru A, Maeda M, Harigane M, Horikoshi N, Suzuki Y, Yabe H, Takahashi H, Nagai M, Nakano H, Zhang W, Hirosaki M, Abe M, for the Fukushima Health Management Survey Group: Association between psychological distress and dietary intake among evacuees after the Great East Japan Earthquake in a cross-sectional study: the Fukushima Health Management Survey. BMJ Open 6(7): e011534, 2016.
- 5) Oe M, Maeda M, Nagai M, Yasumura S, Yabe H, Suzuki Y, Harigane M, Ohira T, Abe M: Predictors of severe psychological distress trajectory after nuclear disaster: evidence from the Fukushima Health Management Survey. BMJ Open 6: e013400, 2016.
- 6) Horikoshi N, Iwasa H, Kawakami N, Suzuki Y, Yasumura S: Residence-related factors and psychological distress among evacuees after the Fukushima Daiichi nuclear power

- plant accident: a cross-sectional study. BMC Psychiatry 16(1): 420, 2016.
- 7) Zhang W, Ohira T, Abe M, Kamiya K, Yamashita S, Yasumura S, Ohtsuru A, Maeda M, Harigane M, Horikoshi N, Suzuki Y, Yabe H, Yuuki M, Nagai M, Takahashi H, Nakano H, for the Fukushima Health Management Survey Group: Evacuation after the Great East Japan Earthquake was associated with poor dietary intake: The Fukushima Health Management Survey. Journal of Epidemiology 27(1): 14-23, 2017.
  - 8) Suzuki Y, Yabe H, Horikoshi N, Yasumura S, Kawakami N, Ohtsuru A, Mashiko H, Maeda M; Mental Health Group of the Fukushima Health Management Survey: Diagnostic accuracy of Japanese posttraumatic stress measures after a complex disaster: The Fukushima Health Management Survey. Asia Pac Psychiatry 9(1): 2017.
  - 9) Suzuki Y, Fukasawa M, Obara A, Kim Y: Burnout among public servants after the Great East Japan Earthquake: decomposing the construct aftermath of disaster. J Occup Health 59: 156-164, 2017.
  - 10) Harigane M, Suzuki Y, Yasumura S, Ohira T, Yabe H, Maeda M, Abe M: The Relationship between Functional Independence and Psychological Distress in Elderly Adults Following the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident: The Fukushima Health Management Survey. Asia Pacific Journal of Public Health 29(2): 120S-130S, 2017.
  - 11) Oe M, Takahashi H, Maeda M, Harigane M, Fujii S, Miura I, Nagai M, Yabe H, Ohira T, Suzuki Y, Yasumura S, Abe M: Changes of Posttraumatic Stress Responses in Evacuated Residents and Their Related Factors: A 3-Year Follow-up Study From the Fukushima Health Management Survey. Asia Pacific Journal of Public Health 29(2): 182S-192S, 2017.
  - 12) 大沼麻実, 篠崎康子, 金 吉晴: 災害時の不安対応と心理的応急処置 PFA (サイコロジカル・ファーストエイド). シリーズ: 内科医と災害医療. 日本内科学会雑誌 106: 130-132, 2017.
  - 13) 金 吉晴: 外傷性悲嘆とトラウマ. 特集 神経症性障害と抑うつ —その相互作用と臨床的意義, 治療について—. 精神神経学雑誌 118(7): 516-521, 2016.

## (2) 総説

- 1) 金 吉晴: 長崎市被爆未指定地域住民における原爆目撃体験と関連する精神状態についての調査研究について. 精神保健研究 63: 25-30, 2017.
- 2) 大沼麻実, 金 吉晴: 第 17 章 PFA (サイコロジカル・ファーストエイド) . 緊急支援のアウトリーチ —現場で求められる心理的支援の理論と実践: 225-233, 2017.
- 3) 大沼麻実, 大滝涼子, 金 吉晴: 第 12 章 被災者・支援者のメンタルヘルスとケア 災害直後のこころのケア応急処置. 多職種連携で支える災害医療-身につけるべき知識・スキル・対応力: 127-131, 2017.
- 4) 鈴木友理子: メンタルヘルス・ファーストエイドとは. 治療 98(5): 640-644, 2016.
- 5) 種田綾乃, 鈴木友理子, 深澤舞子, 伊藤順一郎: 東日本大震災後の地域精神保健医療福祉システム再構築と外部支援: 現地支援者のグループインタビューから. 家族療法研究 33(3): 322-330, 2016.

## (3) 著書

- 1) 鈴木友理子: 災害に伴う精神医学的問題. 樋口輝彦, 市川宏伸, 神庭重信, 朝田 隆, 中込和幸 編: 今日精神疾患治療指針 (第 2 版). 医学書院, 東京, pp987-990, 2016.
- 2) 鈴木友理子: 2. PTSD の有病率. 何がトラウマになるのか. 藤森和美, 青木紀久代 編: これからの対人援助を考える 暮らしの中の心理臨床 3. トラウマ. 福村出版, 東京,

pp127-133, 2016.

(4) 研究報告書

- 1) 金 吉晴: 災害時の精神保健医療に関する研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業(精神障害分野) 災害時の精神保健医療に関する研究 平成28年度 総括・分担研究報告書. pp1-4, 2017.
- 2) 金 吉晴, 加藤 寛, 荒井秀典, 松本和紀, 前田正治, 富田博秋, 鈴木友理子, 神尾陽子, 松下幸生, 大塚耕太郎, 井筒 節: 1. 災害時精神保健活動ガイドライン: 国内外の文献の検証と新たな包括的ガイドライン作成にむけての構想. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業(精神障害分野) 災害時の精神保健医療に関する研究 平成28年度 総括・分担研究報告書. pp5-138, 2017.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 金 吉晴: 長崎原子爆弾に対する曝露後の持続的な精神的苦悩. 【第14回日本トラウマティック・ストレス学会】JSTSS & ISTSS コラボ企画シンポジウム Trauma Around the World. *トラウマティック・ストレス* 14(1): 14-20, 2016.
- 2) 金 吉晴: 一般サイト こころのひだまりサイト PTSD チェックリスト監修. 2017.

**B. 学会・研究会における発表**

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kim Y: PARALLEL PANEL DISCUSSION 2 Addressing the mental health needs of vulnerable populations across sectors. OUT OF THE SHADOWS: Making Mental Health a Global Development Priority, Washington D.C, 2016.4.14.
- 2) Kim Y: Persistent distress after psychological exposure to the Nagasaki atomic bomb explosion. National center of mental health inauguration symposium Symposium2, Seoul, 2016.10.14.
- 3) Kim Y: Comprehensive View of PTSD; Pathogenesis, Biomarkers and Treatment. 2016' Annual autumn meeting of Korean Neuropsychiatric association, Gwangju, 2016.10.28.
- 4) Kim Y: Disaster Mental Health, Trauma and Resilience. 1st Mental Health International symposium Symposium2, Seoul, 2017.3.17.
- 5) Suzuki Y: Disorders specifically associated with stress and trauma: Findings in preparation of WHO's ICD-11 release. Discussant. The 31st International Congress of Psychology, Yokohama, 2016.7.25.
- 6) Suzuki Y: Psychological distress after the Fukushima Nuclear Power Plant Accident. The Psychosocial Impact of Disasters after the 2011 Great East Japan Earthquake / Fukushima Nuclear Accident and the 2015 Joso Flood Disaster in Japan, New Delhi, 2016.11.30-12.4.
- 7) 金 吉晴: 災害時の心理社会支援: 日本の現況. 災害心理支援シンポジウム 一被災地における心理社会的ケアを考える一, 東京, 2016.8.8.
- 8) 金 吉晴: トラウマ反応の治療はどこまで来ているのか? シンポジスト. 武蔵野大学臨床心理学国際シンポジウム, 東京, 2016.8.27.
- 9) 金 吉晴, 佐藤由佳利, 小林朋子: 支援活動委員会企画シンポジウム「支援活動の裾野を広げるために」話題提供者. 日本心理臨床学会第35回秋季大会, 神奈川, 2016.9.6.
- 10) 鈴木友理子: 大災害後の子どもの教育・心理・医療における長期支援について. 第15回日



本トラウマティック・ストレス学会，宮城，2016.5.20-21.

- 11) 鈴木友理子：災害時のこころのケア．第 66 回日本病院学会ワークショップ「災害時のメンタルケア ―東日本大震災の経験に学ぶ―」，岩手，2016.6.23.
- 12) 鈴木友理子，前田正治：福島第一原子力発電所事故後の地域住民の精神健康について．第 36 回日本社会精神医学会 災害精神医学 復興期における精神科支援の重要性，東京，2017.3.3.

(2) 一般演題

- 1) Kim Y: Psychosocial response to disaster: experience and policy. ICDR 2016 2nd International Conference of Disaster Reduction, Seoul, 2016.6.17.
- 2) Landré L, Thyreau B, Oba K, Abe M, Sekiguchi A, Taki Y: "Socio-demographics and Brain Correlates of Stress due to the 2011 Great East Japan Earthquake". The 22nd Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, Geneva, 2016.6.26-30.
- 3) Sekiguchi A, Kotozaki Y, Thyreau B, Takeuchi H, Yokota S, Asano K, Asano M, Sassa Y, Nouchi R, Taki Y, Kawashima R: "Pre-existing smaller DLPFC volume contributes to post-traumatic growth after a disaster in children". The 75th Annual Meeting of the American Psychosomatic Society, Seville, 2017.3.17.
- 4) 関口 敦，伊藤真利子，林 明明，伊藤まどか，堀 弘明，菅原彩子，金 吉晴：ストレス関連疾患の疾患横断的なバイオマーカー検索のための脳 MRI 研究．第 128 回日本心身医学会関東地方会，東京，2017.1.28-29.
- 5) 関口 敦：災害ストレス曝露前後の脳形態変化 ～健常大学生における検討．第 1 回医療心理懇話会，東京，2016.11.2-3.
- 6) 大滝涼子：ヨガのこころ ～ヨガの智慧を活かした生き方～．第 23 回多文化間精神医学会学術総会，栃木，2016.10.2.

(3) 研究報告会

(4) その他

- 1) Suzuki Y: Psychological impact of Fukushima Nuclear Power Plant. Meeting with the OECD Nuclear Energy Agency (NEA) and the Division of Radiological Protection & Radioactive Waste Management, Tokyo, 2016.9.27.

**C. 講演**

- 1) 金 吉晴：市民公開講座「震災ストレスから眠りと健康をいかに守るか」．日本睡眠学会第 41 回定期学術集会，東京，2016.7.8.
- 2) 金 吉晴：自然災害と精神保健医療．平成 28 年度「徳島県自殺予防講演会」，徳島，2016.9.11.
- 3) 金 吉晴：災害とトラウマ．熊本地震こころの支援者応援シリーズ，熊本，2016.9.27.
- 4) 金 吉晴：メンタルヘルスケアとキャリア支援プログラム．平成 28 年度派遣責任者セミナー，東京，2016.11.15.
- 5) 金 吉晴，大沼麻実：災害時のサイコロジカル・ファーストエイド．NHK PFA 研修会，東京，2017.2.8.

**D. 学会活動**

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) Kim Y: International Society for Traumatic Stress Studies 理事
- 2) Kim Y: Global Committee, International Traumatic Stress Studies, 委員
- 3) 金 吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会 常任理事
- 4) 金 吉晴: 日本精神神経学会 災害支援委員会委員, 災害支援連絡会委員
- 5) 金 吉晴: 自殺予防学会 理事
- 6) Suzuki Y: World Health Organization, Member of the International Health Regulations (2005) (IHR(2005)) Roster of Experts, expert in Mental Health (2012-2016).
- 7) 鈴木友理子: 日本精神神経学会 アンチスティグマ委員
- 8) 鈴木友理子: 日本トラウマティック・ストレス学会 理事, 国際委員
- 9) 関口敦: 日本心身医学会 幹事

(3) 座長

- 1) Kim Y: Symposium Emerging Network for Post-disaster Psychosocial Support in Asia. (Chair). ISTSS 32nd Annual Meeting, Dallas, 2016.11.10.
- 2) 金 吉晴: ランチョンセミナー1 座長. 第15回日本トラウマティック・ストレス学会, 宮城, 2016.5.20.
- 3) 松下幸生, 金 吉晴: シンポジウム 30 災害と嗜癮関連行動 司会. 第113回日本精神神経学会学術総会, 千葉, 2016.6.2.
- 4) 金 吉晴: ワークショップ 19 PTSD に対する PE 療法の研修会 座長. 第16回日本認知療法学会, 大阪, 2016.11.25.
- 5) 金 吉晴: 2016年 医療心理懇話会 総合司会. 東京, 2016.11.2-3.
- 6) 鈴木友理子: 東日本大震災とこころのケア: 公衆衛生学と実践宗教学の視点から 座長. 第15回日本トラウマティック・ストレス学会, 宮城, 2016.5.20-21.
- 7) 大滝涼子: シンポジウム 14「東洋の文化とこころ(第二報)より健康でその人らしい生き方をめざして」 座長. 第23回多文化間精神医学会学術総会, 栃木, 2016.10.2.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board
- 2) Kim Y: European Journal of Psychotraumatology, editorial board
- 3) Kim Y: Disaster Health, editorial board
- 4) Kim Y: Psychiatry and Clinical Neuroscience, field editor
- 5) 金 吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会 編集委員長
- 6) Suzuki Y: International Journal of Mental Health System, editorial board

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 金 吉晴: 平成28年度「こころの健康づくり対策」事業, PTSD 対策専門研修 C. 大規模災害対策コース(精神医療関係者) 主催. 東京, 2017.2.2-3.
- 2) 金 吉晴: 平成28年度「こころの健康づくり対策」事業, PTSD 対策専門研修 B. 大規模災害対策コース(一般及び行政医療関係者) 主催. 東京, 2017.2.14.
- 3) 金 吉晴: 平成28年度「こころの健康づくり対策」事業, PTSD 対策専門研修 A. 大規模災害対策コース(通常コース) 主催. 東京, 2017.2.22-23.
- 4) 金 吉晴, Leslie Snider, 大沼麻実, 大滝涼子: PFA ファシリテーターマニュアル検討会 主催. 東京, 2017.2.21.
- 5) 金 吉晴: 国立精神・神経医療研究センター 国際セミナー 主催. (演者: Mark Gluck, Ph.D. "Understanding PTSD as a Disruption to the Brain Circuits for Learning and

- Generalization." ). 東京, 2017.3.1.
- 6) 鈴木友理子: 第一部 メンタルケアの初期対応のリーダーになる 企画. 第 53 回 精神保健指導課程研修. 東京, 2016.9.29-30.
- (2) 研修会講師
- 1) 金 吉晴: 被害者支援活動の動向. 平成 28 年度ふくしま心のケアセンター年度当初研修会, 福島, 2016.4.4.
  - 2) 金 吉晴: 災害時の心理変化とこころのケア. 災害支援ナースの基礎知識～災害看護の第一歩～, 兵庫, 2016.7.7.
  - 3) 金 吉晴: 災害時の精神保健医療対応 総論. 平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 C. 大規模災害対策コース (精神医療関係者), 東京, 2017.2.3.
  - 4) 金 吉晴, 大沼麻実, 大滝涼子 他: 災害時の PFA. 平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 C. 大規模災害対策コース (精神医療関係者), 東京, 2017.2.3.
  - 5) 金 吉晴: 災害時の精神保健医療対応 総論. 平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 B. 大規模災害対策コース (一般及び行政医療関係者), 東京, 2017.2.14.
  - 6) 金 吉晴, Leslie Snider, 大沼麻実, 大滝涼子: PFA ファシリテーターマニュアル検討会. 東京, 2017.2.21.
  - 7) 金 吉晴: PTSD の診断と評価. 平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 A. 大規模災害対策コース (通常コース), 東京, 2017.2.22.
  - 8) 金 吉晴, Leslie Snider, 大滝涼子: 災害への心理対応～心理的応急処置(PFA). 平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 A. 大規模災害対策コース (通常コース), 東京, 2017.2.22.
  - 9) 金 吉晴: PTSD の心理療法: 持続エクスポージャー療法の立場から. 平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 A. 大規模災害対策コース (通常コース), 東京, 2017.2.23.
  - 10) 金 吉晴: 災害時における被災者のメンタルヘルスと精神保健医療対応 ～PTSD・トラウマと PFA 活動～. 平成 28 年度東京都災害時こころのケア体制 (東京 DPAT) 研修, 東京, 2017.3.23.
  - 11) 鈴木友理子: 東日本大震災から 5 年を経て. 岩手県精神保健福祉センター 平成 28 年度災害支援者・救済者研修会, 岩手, 2016.4.20.
  - 12) 鈴木友理子: メンタルヘルス・ファーストエイド (うつ病・自殺対応、物質関連障害). 福島県県民健康調査研修会, 福島, 2016.6.28.
  - 13) 鈴木友理子: 不安の問題のメンタルヘルス ファーストエイド. 平成 28 年度自殺対策支援者研修, 福岡, 2016.7.21-22.
  - 14) 鈴木友理子: 成人学習理論. 平成 28 年度自殺対策支援者研修, 福岡, 2016.7.21-22.
  - 15) 鈴木友理子: メンタルヘルス・ファーストエイド (不安の問題、精神病性障害). 福島県県民健康調査研修会, 福島, 2016.8.2.
  - 16) 鈴木友理子: うつ病と自殺のメンタルヘルス・ファーストエイド. 相模原市ゲートキーパー研修, 神奈川, 2016.9.6.
  - 17) 鈴木友理子: 災害精神保健活動における役割分担と連携 ～急性期から中長期の心のケア～. 平成 28 年度日本臨床心理士会定例研修会 I 第 23 医療保健領域研修会分科会 1. コミュニティの危機に医療チームがどう関わるか, 東京, 2016.10.23.
  - 18) 鈴木友理子: 災害時のこころのケア 急性期から中長期の精神保健福祉活動. 災害時こころのケア研修会, 奈良, 2016.11.11.
  - 19) 鈴木友理子: メンタルヘルス・ファーストエイドとは. 平成 28 年度ゲートキーパー・スキルアップ研修指導者養成講習会, 島根, 2016.11.19-20.

- 20) 鈴木友理子：不安の問題のメンタルヘルス・ファーストエイド。平成 28 年度ゲートキーパー・スキルアップ研修指導者養成講習会，島根，2016.11.19-20.
- 21) 鈴木友理子：災害時の調査・研究。JICA workshop on disaster mental health，兵庫，2017.3.11.
- 22) 大滝涼子：リラクゼーションの演習。平成 28 年度ふくしま心のケアセンター年度当初研修会，福島，2016.4.5.
- 23) 大滝涼子：PFA・CFS 講師。PFA サイコロジカル・ファーストエイド研修，子ども版 PFA 研修，CFS こどもにやさしい空間，新潟，2016.5.24-26.
- 24) 大滝涼子：檜葉町「ママためサークル」におけるヨガ。檜葉町「ママためサークル」におけるヨガ，福島，2016.6.23.
- 25) 大滝涼子：「リラクゼーション・スキルアップ講習」におけるヨガ。ふくしま心のケアセンターいわき方部リラクゼーション・スキルアップ講習，福島，2016.6.23.
- 26) 大滝涼子：ヨガを通したリラクゼーション。檜葉町離乳食教室，福島，2016.7.12.
- 27) 大滝涼子：「リラクゼーション・スキルアップ講習」におけるヨガ。ふくしま心のケアセンターいわき方部リラクゼーション・スキルアップ講習 2，福島，2016.7.12.
- 28) 大滝涼子：「リラクゼーション・スキルアップ講習」におけるヨガ。ふくしま心のケアセンターいわき方部リラクゼーション・スキルアップ講習 3，福島，2016.9.13.
- 29) 大滝涼子：CFS 講師。平成 28 年度第 2 回 CFS(Child Friendly Spaces：子どもにやさしい空間)研修会，新潟，2016.9.21.
- 30) 大滝涼子：PFA for Children 講師。平成 28 年度新潟県災害医療研修会（中越地区），新潟，2016.10.23.
- 31) 大滝涼子：ヨガでセルフケア～こころとからだのリラクゼーション～。第 1 回被災市町村派遣職員等メンタルヘルス研修，福島，2016.10.24.
- 32) 大滝涼子：ヨガでセルフケア～こころとからだのリラクゼーション～。第 2 回被災市町村派遣職員等メンタルヘルス研修，福島，2016.10.26.
- 33) 大滝涼子：檜葉町「ママためサークル」におけるヨガ。檜葉町「ママためサークル」におけるヨガ，福島，2016.10.27.
- 34) 大滝涼子：「リラクゼーション・スキルアップ講習」におけるヨガ。ふくしま心のケアセンター県中・県南方部リラクゼーション・スキルアップ講習 1，福島，2016.10.27.
- 35) 大滝涼子：ヨガでセルフケア～こころとからだのリラクゼーション～。第 3 回被災市町村派遣職員等メンタルヘルス研修，福島，2016.11.1.
- 36) 大滝涼子，大沼麻実：サイコロジカル・ファーストエイド(PFA)研修，平成 28 年度領事中堅研修，東京，2016.11.17.
- 37) 大滝涼子：PFA 講師。北海道スクールカウンセリング研究協議会主催 PFA 研修会，北海道，2016.11.27.
- 38) 大滝涼子：PFA 講師。香川大学主催 PFA 研修会，香川，2016.12.17.
- 39) 大滝涼子：檜葉町「ママためサークル」におけるヨガ。檜葉町「ママためサークル」におけるヨガ，福島，2016.12.22.
- 40) 大滝涼子：「リラクゼーション・スキルアップ講習」におけるヨガ。ふくしま心のケアセンター県中・県南方部リラクゼーション・スキルアップ講習 2，福島，2016.12.22.
- 41) 大滝涼子：災害への心理対応～心理的応急処置(PFA)：ストレス免疫訓練 (SIT)。平成 28 年度「こころの健康づくり対策」事業 PTSD 対策専門研修 A。通常コース，東京，2017.2.22.
- 42) 大滝涼子：檜葉町「ママためサークル」におけるヨガ。檜葉町「ママためサークル」におけるヨガ，福島，2017.2.23.
- 43) 大滝涼子：「リラクゼーション・スキルアップ講習」におけるヨガ。ふくしま心のケアセンターいわき方部リラクゼーション・スキルアップ講習 4，福島，2017.2.23.

44) 大滝涼子, 大沼麻実 : PFA 講師. 外務省主催による PFA 研修会, 東京, 2017.3.30.

**F. その他**

## 15. 上級専門職室

### I. 概要

上級専門職は、国立精神・神経医療研究センター組織規定（平成22年規定第2号）第10条の2の規定により置かれるもので、その任用基準は総長伺定（平成22年7月6日）に定められており、「センター職員以外の者で、センターの部長職に相当する能力を有する者で、大学の教授クラスのポストに就任した経験のある者」とされている。

平成28年3月7日の第11回臨時理事会において、大塚俊弘が、平成28年4月1日付けで上級専門職として任用されることが承認された。所掌事務としては、社会精神医学及び精神保健医療行政に係る課題に関して、国立高度専門医療研究センターとして、精神保健研究所の関係各研究部（精神保健計画研究部、社会精神保健研究部、社会復帰研究部及び司法精神医学研究部）が協働して取り組むための高度かつ専門的な調整及び助言を行うことを担当するものとされた。

なお、大塚は、長崎県において、精神保健福祉センター所長の他、中央児童相談所、婦人相談所、知的障害者更生相談所、身体障害者更生相談所の所長（いずれも兼務）、福祉保健部健康政策課医療監、医療政策課課長、県央保健所所長を経験した精神科医師である。

### II. 研究活動

#### 1) 疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究（精神・神経疾患研究開発費）

精神疾患の疾病構造変化と精神障害者の地域移行に伴う多様化したニーズに対応できる精神医療福祉の体制づくりには、精神保健福祉領域で培われてきた治療や支援技術の組合せや統合、さらにはそれらの普及が必要であり、同時に、治療や支援技術の提供・利用状況や有効性等に関するモニタリング体制も重要となる。このような考え方にに基づき、精神保健研究所の社会政策系4研究部が一体となって進める本研究が計画された。

4研究部がこれまでの研究・教育の実践で集積してきた評価法や治療・介入技法、教育・技術支援のノウハウ等を活用して、今日の地域精神保健福祉の現場において対応困難なニーズへのサービス提供体制とその評価のあり方について疫学データを踏まえた検討を行うとともに、対応困難となっている精神障害者に対する有効な治療・支援プログラムを開発し、その有効な活用方法と体制を提案する。分担研究班および担当研究部は以下の通りである。

- a) 身体疾患と精神疾患を合併する患者の予後に関する研究（社会精神保健研究部）
- b) アウトリーチ支援における家族心理教育およびCBTを活用した家族支援の効果に関する研究（社会復帰研究部）
- c) 外来多職種チームによる重複障害等に対する効果的な診療体制の検討（司法精神医学研究部、司法精神科臨床研修センター）
- d) 医療観察法処遇終了者の社会復帰促進に関する研究（司法精神医学研究部）
- e) 犯罪傾向のある障害者のアセスメントと治療に関する研究（同上）
- f) ケースマネジメントのモニタリング指標・技術開発に関する研究（精神保健計画研究部）

分担研究班a)～e)のは独立して調査および治療・支援プログラムの開発を行うが、目的や開発経過は全体班会議を通じて共有するとともに、開発プログラムの活用促進・汎化に関しては一体化して進めて行く。f)は、他の5つの分担研究班の担当分野も含めた精神保健福祉体制のモニタリング技術開発研究である。

### III. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・市民向け講演会の講師（IV. 研究業績 C. 講演 参照）

(2) 専門教育面における貢献

- ・各種研修会の講師（Ⅳ. 研究業績 C. 講演 参照）
- ・大学院での講義：東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻 精神保健学Ⅰ「トピックス①自殺予防対策をどう評価するか」

(3) 精研の研修の主催と協力

なし

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・平成 28 年度老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業「刑務所出所者における認知症者の実態調査と課題の検討」（社会福祉法人 南高愛隣会）委員
- ・平成 28 年度地域保健総合推進事業「保健所、精神保健福祉センターの連携による、ひきこもりの地域生活支援の状況と課題に関する研究」（日本公衆衛生協会、分担事業者：白川教人）アドバイザー
- ・平成 28 年度地域保健総合推進事業「改正精神保健福祉法における保健所の役割に関する研究」（日本公衆衛生協会、分担事業者：中原由美）アドバイザー
- ・平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「外因死の背景要因とその遺族への心のケアに関する研究」（研究代表者：川野健治）分担研究「監察医務機関のない地域における外因死の背景となる精神保健的・社会的要因の究明に関する研究」（分担研究者：竹島正）研究協力者
- ・平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「地域のストレンクスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究」（研究代表者：竹島正）研究協力者
- ・平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「精神科医療提供体制の機能強化を機能強化する政策研究」（研究代表者：山之内芳雄）アドバイザー
- ・平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究」（研究代表者：藤井千代）アドバイザー
- ・平成 28 年度自殺防止対策事業「ワンストップ支援のためのプラットホームづくり」（一般社団法人 日本うつ病センター）手引き編集責任者

(5) センター内における臨床的活動

なし

(6) その他

なし

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

なし

(2) 総説

なし

## (3) 著書

- 1) 大塚俊弘, 竹島正: 第1章 精神保健に関する基本的理解, 第5章-I 地域精神保健施策の概要, II 地域保健・地域精神保健に係る関係法規・関係施策. 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編: 精神保健福祉士養成セミナー2 第6判. 精神保健学. 精神保健の課題と支援. へるす出版, 東京, pp1-16, 225-259, 2017.

## (4) 研究報告書

- 1) 大塚俊弘, 竹島正: ワンストップ支援における留意点. 複雑・困難な背景を有する人々を支援するための手引き. 平成28年度自殺防止対策事業「ワンストップ支援のためのプラットフォームづくり」(一般社団法人 日本うつ病センター), 2017.

## (5) 翻訳

なし

## (6) その他

- 1) 大塚俊弘: 児童相談所との連携における留意点. 第34回日本小児心身医学会学術集会講演記録(精神科レクチャー). 日本小児心身医学会雑誌 25(4): 341-343, 2017.

**B. 学会・研究会における発表**

## (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 大塚俊弘: 精神科レクチャーII 児童相談所との連携における留意点. 第34回日本小児心身医学会学術集会, 長崎, 2016.9.9-11.

## (2) 一般演題

- 1) 照本麦子, 安藤久美子, 中澤佳奈子, 大塚俊弘: 性犯罪のリスクのある知的障害者向けの治療プログラム(SOTSEC-ID 日本語版)の開発と普及. 第53回日本犯罪学会, 東京, 2016.12.3.
- 2) 照本麦子, 安藤久美子, 中澤佳奈子, 伊豆丸剛史, 大塚俊弘: 地域で実施可能な知的障害者向けの性犯罪再犯防止プログラム(SOTSEC-ID 日本語版)の開発と普及. 第36回日本社会精神医学会, 東京, 2017.3.3-4.
- 3) 大塚俊弘: 地域保健福祉行政機関の役割と連携のこつ(第4分科会 地域の依存症問題). 第29回九州アルコール関連問題学会, 鹿児島, 2017.3.10-11.

## (3) 研究報告会

なし

## (4) その他

なし

**C. 講演**

- 1) 大塚俊弘: 長崎こども・女性・障害者支援センターの活動から. 川崎市精神保健福祉センター講演会, 神奈川, 2016.7.4.
- 2) 大塚俊弘: 精神医療の動向. 日本公衆衛生協会「改正精神保健福祉法への対応研修(全国保健所長会協力事業)」, 福岡, 2016.9.29.
- 3) 大塚俊弘: 障がい者の反社会的行動を理解するために. 社会・心理・医学的側面から考える. 長崎県福祉の支援協力事業所協議会研修会, 長崎, 2016.10.22.
- 4) 大塚俊弘: 精神保健福祉法の適正運用及び入院治療のあり方. 鹿児島県保健所長会研修会,



鹿児島，2016.11.11.

- 5) 大塚俊弘：こころの健康講座．うつ病と依存症の理解を中心に．川崎市職員中央安全衛生委員会衛生研修会，神奈川県，2016.11.21.
- 6) 大塚俊弘：児童虐待／DV 被害．日本うつ病センター自殺防止対策事業「ワンストップ支援のための情報プラットフォームづくり」事業 連携支援の手引き作成のための合宿セミナー，神奈川県，2016.12.5.
- 7) 大塚俊弘：高齢者のこころの健康と自殺予防．こころ健やかに地域で安心して暮らすために．鹿児島県精神保健福祉協議会「こころの健康を考えるつどい」基調講演，鹿児島，2017.1.20.
- 8) 大塚俊弘：精神疾患や精神的不調の把握とその対応について．川崎市児童家庭相談における精神保健福祉研修，神奈川県，2017.2.27.

#### D. 学会活動

##### (1) 学会主催

なし

##### (2) 学会役員

- 1) 大塚俊弘：日本社会精神医学会 評議員

##### (3) 座長

なし

##### (4) 学会誌編集委員等

なし

#### E. 研修

##### (1) 研修企画

なし

##### (2) 研修会講師

なし

#### F. その他

なし

### Ⅲ. 研 修 実 績

#### 平成 28 年度研修報告

研究所事務室

精神保健研究所における研修は、国、地方公共団体、精神保健福祉法第 19 条の規定による指定病院等において精神保健の業務に従事する医師、保健師、看護師、作業療法士、臨床心理業務に従事する者、精神科ソーシャルワーカー等を対象に、精神保健技術者として必要な資質の向上を図ることを目的として、精神保健各般にわたり必要な知識及び技術の研修を行うものである。平成 28 年度には、発達障害早期総合支援研修、発達障害支援医学研修（2 回）、地域自殺対策推進企画研修、摂食障害治療研修、多職種による包括型アウトリーチ研修、医療における個別就労支援研修、薬物依存臨床医師研修、薬物依存臨床看護等研修、発達障害精神医療研修、自殺対策・相談支援研修、精神保健指導課程研修、司法精神医学研修、認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修、摂食障害看護研修、の計 15 回の研修を合計 842 名に対して実施した。

《発達障害早期総合支援研修》

平成 28 年 6 月 15 日から 6 月 17 日まで、第 11 回発達障害早期総合支援研修を実施し、「地域における早期の自閉症発見とその後の発達支援のシステムのあり方」を主題に、各自治体において、行政的な立場で研修の実施に携わる者、医療、保健、福祉、教育等の分野で支援に携わる者 33 名に対して研修を行った。

課程主任 神尾 陽子 課程副主任 石飛 信

6月15日(水)

厚生労働省における発達障害施策について	日詰 正文
発達障害のある児の発達の道筋	神尾 陽子
地域特性に応じた発達支援のあり方	高橋 脩
鹿児島県の地域支援体制づくり ～地域支援機能のある公的医療機関の取り組み～	外岡 資朗

6月16日(木)

乳幼児の対人コミュニケーション行動のアセスメントⅠ（定型発達）	立花 良之
乳幼児の対人コミュニケーション行動のアセスメントⅡ（ASD）	原口 英之
内灘町における発達障害児支援の取組み ～就学までの包括支援体制づくり～ 「ふくいっこ、『みんな違ってみんないい』応援プロジェクト」 途切れない支援を目指して・・・	中井 七美子  津田 明美

6月17日(金)

発達支援Ⅰ（地域支援）	原口 英之
発達支援Ⅱ（子ども支援・家族支援）	井上 雅彦
ワークショップ：地域発達支援の行動計画立案 当事者の体験から ～ASD者がこれからの発達支援に期待すること～	ファシリテーター：日詰 正文  片岡 聡

講師名簿

神尾 陽子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部部長
石飛 信	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部室長
原口 英之	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
高橋 脩	豊田市福祉事業団理事長
外岡 資朗	鹿児島県こども総合療育センター所長
立花 良之	国立成育医療研究センターこころの診療部乳幼児メンタルヘルス診療科医長
中井 七美子	内灘町町民福祉部保険年金課内灘町保健センター保健師
津田 明美	福井県こども療育センター小児科・児童精神科医療次長
井上 雅彦	鳥取大学大学院医学系研究科教授
片岡 聡	NPO 法人リトルプロフェッサーズ理事長

## 《発達障害支援医学研修》

平成28年7月6日から7月7日まで、第21回発達障害支援医学研修を実施し、「発達障害の診断・治療と支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し発達障害に関心を有する医師で特に指導について責任的立場にある者、自治体において行政的な立場で地域の研修実施に携わる者50名に対して研修を行った。

課程主任 稲垣 真澄 課程副主任 加賀 佳美・北 洋輔

7月6日(水)

厚生労働省の発達障害支援施策	日詰 正文
発達障害児の感覚評価と支援	岩永 竜一郎
顕在化しにくい発達障害～吃音症	菊池 良和
虐待問題を抱える親子への治療と支援	犬塚 峰子
発達障害児を持つ保護者へ伝えたいこと	林 隆

7月7日(木)

発達障害の薬物療法	宮島 祐
顕在化しにくい発達障害～学習障害	小枝 達也
発達障害児をもつ母親の養育レジリンス向上の支援策	稲垣 真澄
ADHD 児の診方～問題行動解決のための面接技法～	井上 祐紀

## 講師名簿

稲垣 真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部部長
加賀 佳美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
北 洋輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
岩永 竜一郎	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科准教授
菊池 良和	九州大学病院耳鼻咽喉科臨床助教
犬塚 峰子	大正大学人間学部臨床心理学科教授
林 隆	医療法人テレサ会西川医院発達診療部部長
宮島 祐	東京家政大学子ども学部子ども支援学科教授
小枝 達也	国立成育医療研究センターこころの診療部部長
井上 祐紀	横浜南部地域療育センター所長

《地域自殺対策推進企画研修》

平成 28 年 8 月 22 日から 8 月 24 日まで、第 1 回地域自殺対策推進企画研修を実施し、「改正自殺対策基本法の趣旨に従った自殺対策の企画・運営能力の向上並びに、自殺対策行動計画策定の基礎を身につける」を主題に、都道府県（政令指定都市）等において、自殺対策の企画立案の指導的立場または中心的な役割を担う者 74 名に対して研修を行った。

課程主任 反町 吉秀

8月22日(月)

日本の自殺問題、自殺対策の基本的な枠組み、センターの役割	本橋 豊
自殺対策基本法改正の趣旨と内容	岩井 一郎
生きる支援としての自殺対策に求められるもの	清水 康之
演習Ⅰ グループ討議（情報交換・意見交換）	自殺総合対策推進センター

8月23日(火)

地域診断と自殺統計の活用	金子 善博
遺族支援の意義—支援の現場と遺族の声から	杉本 脩子・佐々木 浩則
先進的な取り組み事例①（生きる支援としての包括的自殺対策）	馬場 優子
自殺対策に取り組む市区町村のネットワークについて	根岸 親
先進的な取り組み事例②（生活困窮者支援の取組）	生水 裕美
演習Ⅱ グループ討議（地域特性を踏まえた自殺対策の検討）	自殺総合対策推進センター

8月24日(水)

自殺未遂者支援について	大塚 耕太郎
地域自殺対策推進計画の策定プロセスと市町村支援	反町 吉秀
演習Ⅲ まとめ 発表 講評	自殺総合対策推進センター

講師名簿

本橋 豊	国立精神・神経医療研究センター自殺総合対策推進センターセンター長
反町 吉秀	国立精神・神経医療研究センター自殺総合対策推進センター室長
金子 善博	国立精神・神経医療研究センター自殺総合対策推進センター室長
岩井 一郎	厚生労働省自殺対策推進室大臣官房参事官
清水 康之	NPO 法人ライフリンク代表
杉本 脩子	全国自死遺族総合支援センター代表
佐々木 浩則	浜松わかちあいの会代表
馬場 優子	足立区衛生部こころとからだの健康づくり課課長
根岸 親	自殺のない社会づくり市区町村会事務局担当（NPO 法人ライフリンク）
生水 裕美	滋賀県野州市市民部市民生活相談課課長補佐
大塚 耕太郎	岩手医科大学神経精神科学講座教授

## 《摂食障害治療研修》

平成28年8月30日から9月2日まで、第14回摂食障害治療研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、病院、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害に関心を有する医療従事者58名に対して研修を行った。

課程主任 安藤 哲也

8月30日(火)

摂食障害の疫学・診断・病態・治療概論	安藤 哲也
小児科での初期対応と診療	作田 亮一
慢性期・回復期の支援	武田 綾
当事者の話を聞く	武田 綾

8月31日(水)

家族の心理教育	小原 千郷
精神科での初期対応と精神障害・パーソナリティ障害を合併する摂食障害	和田 良久
身体管理・身体合併症	吉内 一浩
摂食障害とアルコール・薬物などのアディクション	鈴木 健二

9月1日(木)

症例検討	田村 奈穂
小児の摂食障害	宇佐美 政英
ガイドド・セルフヘルプの考え方	西園マーハ文
総合討論	

9月2日(金)

心理教育	馬場 安希
入院治療	河合 啓介
精神科病院における診療体制	竹林 淳和
過食症の認知行動療法	中里 道子

## 講師名簿

安藤 哲也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部室長
作田 亮一	獨協医科大学越谷病院子どものこころ診療センター教授
武田 綾	NPO 法人のびの会心理療法士
小原 千郷	東京女子医科大学附属女性生涯健康センター臨床心理士
和田 良久	府中みくまり病院医師
吉内 一浩	東京大学大学院医学系研究科ストレス防御・心身医学准教授
鈴木 健二	鈴木メンタルクリニック院長

田村 奈穂	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科医師
宇佐美 政英	国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科診療科長
西園 マーハ文	白梅学園大学子ども学部発達臨床学科教授
馬場 安希	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科臨床心理士
河合 啓介	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科診療科長
竹林 淳和	浜松医科大学医学部附属病院精神科神経科講師
中里 道子	千葉大学子どもこころの発達教育研究センター特任教授

【地域精神科モデル医療研修シリーズ】

《多職種による包括型アウトリーチ研修》

平成28年8月31日から9月2日まで、第14回多職種によるアウトリーチ研修を実施し、「医療支援および障害福祉サービスを含むアウトリーチ支援定着のためのプログラム」を主題に、精神科医療機関、精神保健福祉センター、保健所、市町村、社会復帰施設等に勤務する従事者等43名に対して研修を行った。

課程主任 藤井 千代 課程副主任 佐藤 さやか・山口 創生

8月31日(水)

精神保健(福祉)の現状		藤井 千代
パーソナル・リカバリーとリカバリーを応援する支援 導入編		山口 創生
当事者から見たリカバリー	古関 俊彦・内布	智之・小阪 和誠
グループワーク	ファシリテーター：山口 創生	古関 俊彦・内布 智之・小阪 和誠
リカバリー志向型のサービスの提供		山口 創生

9月1日(木)

アウトリーチおよびケアマネジメント総論		吉田 光彌
ストレングスモデル(概念)		久永 文恵
ストレングスアセスメント/ケアプラン作りの実際		上田 昌広
明日から使えるストレングスアセスメント/ケアプラン作りのこつ		佐藤 さやか
事例の紹介		上田 昌広
グループワーク		
ケアプラン(初版)作り		
ストレングスアセスメントのグループスーパービジョンとケアプラン改訂		
	ファシリテーター：上田 昌広・久永 文恵・社会復帰研究部	

9月2日(金)

アウトリーチチームの実際		
医療機関における多職種アウトリーチ支援		原子 英樹
訪問型生活訓練におけるアウトリーチ支援		遠藤 紫乃
サービスユーザーから見たアウトリーチ支援		訪問看護ステーション利用者
多職種アウトリーチのチームビルディングとマネジメント		富沢 明美
精神科医の役割		佐竹 直子
訪問におけるリスクマネジメント		菊池 安希子
グループワーク		
「施設内支援と違う多職種アウトリーチ支援の課題と良いところ？」		
	コメンテーター：藤井 千代	



講師名簿

藤井 千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部長
佐藤 さやか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
山口 創生	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
菊池 安希子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
富沢 明美	国立精神・神経医療研究センター病院訪問看護ステーション管理者
佐竹 直子	国立精神・神経医療研究センター病院第一精神診療部医師
古関 俊彦	NPO 法人颯埜扉地域活動支援センターセンター長
内布 智之	一般社団法人日本メンタルヘルスピアサポート専門員研修機構代表理事
小阪 和誠	一般社団法人ソラティオ荒川区精神障害者相談支援事業所コンパス 相談支援センターあらかわピアサポート専門員
吉田 光爾	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授
久永 文恵	NPO 法人地域精神保健福祉機構コンボリハビリテーションカウンセラー
上田 昌広	特定非営利活動法人リカバリーサポートセンターACTIPS 管理責任者
原子 英樹	株式会社円グループ訪問看護ステーション卵 看護師・精神保健福祉士
遠藤 紫乃	一般社団法人スターアドバンス 多機能型自立訓練（生活訓練）・生活介護事業所「コン」代表理事

【地域精神科モデル医療研修シリーズ】

《医療における個別就労支援研修》

平成28年8月31日から9月2日まで、第4回医療における個別就労支援研修を実施し、「個別職場定着とサポート（IPS：individual Placement and Support）の就労支援の原則を学び、そこから精神科デイケアを中心とした個別就労支援のありかたや、医療機関が周囲の就労支援機関と組む場合のありかたについて検討する」を主題に、精神科医療機関で臨床に従事しており、利用者の就労支援に関心を持つ者、および医療機関と密接な関係をもちながら精神障害者の個別就労支援に既に従事している者30名に対して研修を行った。

課程主任 藤井 千代 課程副主任 佐藤 さやか・山口 創生

8月31日（水）

精神保健（福祉）の現状	藤井 千代
パーソナル・リカバリーとリカバリーを応援する支援 導入編	山口 創生
当事者から見たリカバリー	古関 俊彦・内布 智之・小阪 和誠
グループワーク	ファシリテーター：山口 創生 古関 俊彦・内布 智之・小阪 和誠
リカバリー志向型のサービスの提供	山口 創生

9月1日（木）

精神障害者就労支援：制度と現状	加藤 辰明
HWが（医療における）就労支援に期待すること	茂呂 奈美・池田 真砂子
個別型援助付雇用型就労支援と個別支援の実際	山口 創生
ビジネスマナーのグループワーク	池田 真砂子・松井 彩子
医療機関における就労支援	松井 彩子・木下 明雄
企業が就労支援に期待すること	矢寄 照久・松井 彩子

9月2日（金）

就労支援への医師の関わり	坂田 増弘
サービスユーザー体験談	梅田 典子・ビルド利用者
地域における就労支援	
立川における就労支援	池田 真砂子
京都における就労支援	池田 克之
市川における就労支援	梅田 典子
パネルディスカッション「ESの役割と他業種・他機関との連携」	
	池田 真砂子・池田 克之・梅田 典子・松井 彩子
グループ・ディスカッション	
	ファシリテーター：池田 真砂子・池田 克之・梅田 典子・松井 彩子

講師名簿

藤井 千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部長
佐藤 さやか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
山口 創生	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
坂田 増弘	国立精神・神経医療研究センター病院第一精神診療部医師
古関 俊彦	NPO 法人颯埜扉地域活動支援センターセンター長
内布 智之	一般社団法人日本メンタルヘルスピアサポート専門員研修機構代表理事
小阪 和誠	一般社団法人ソラティオ荒川区精神障害者相談支援事業所コンパス 相談支援センターあらかわピアサポート専門員
加藤 辰明	東京労働局職業安定部職業対策課職業対策課長補佐
茂呂 奈美	八王子公共職業安定所専門援助第二部門就職支援コーディネーター
池田 真砂子	特定非営利活動法人ゆるら社会生活サポートセンターこみっと所長代理
松井 彩子	医療法人社団じうんどう慈雲堂病院ダイケア管理者・就労支援専門員
木下 明雄	医療法人社団じうんどう慈雲堂病院ダイケア生活支援員
矢寄 照久	三鷹郵便局窓口営業部部長
梅田 典子	NPO 法人 NECST 障害者就職サポートセンタービルド施設長
池田 克之	NPO 法人京都メンタルケア・アクション ACT-K 就労支援センターそらいろ所長

## 《薬物依存臨床医師研修》 《薬物依存臨床看護等研修》

平成28年9月6日から9月9日まで、第30回薬物依存臨床医師研修ならびに第18回薬物依存臨床看護等研修を実施し、「薬物依存症概念の理解と薬物依存症に対する臨床的対応の普及」を主題に、精神科病院、精神保健福祉センター等に勤務する医師20名、看護師等49名に対して研修を行った。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 嶋根 卓也・船田 正彦・近藤 あゆみ

9月6日(火)

「薬物依存臨床総論～乱用・依存・中毒」	和田 清
行動薬理学からみた薬物依存（精神依存、身体依存）	船田 正彦
覚せい剤精神疾患の生物学的病態	曾良 一郎

9月7日(水)

薬物関連精神障害患者の臨床	松本 俊彦
女性と薬物乱用・依存	森田 展彰
青少年と薬物乱用・依存	嶋根 卓也
薬物依存症者家族の支援について	近藤 あゆみ

9月8日(木)

精神保健福祉センターにおける薬物依存への取り組み	谷合 知子
【埼玉県立精神医療センターへ移動】病棟見学	
病棟見学と医療施設における薬物依存の治療（医師）	成瀬 暢也・合川 勇三
病棟見学と医療施設における薬物依存の治療（看護等）	青柳 歌織

9月9日(金)

薬物関連精神障害者の司法的問題とその対応	松本 俊彦
薬物依存からの回復者による自助活動・ダルクの取り組み	栗坪 千明・栃原 晋太郎
大麻によって発現する動物の異常行動	三島 健一
ベンゾジアゼピン系薬物の基礎と臨床	稲田 健

## 講師名簿

松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
船田 正彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
嶋根 卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
近藤 あゆみ	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長

和田 清	埼玉県立精神医療センター依存症治療研究部部長
曾良 一郎	神戸大学大学院医学研究科精神医学分野教授
森田 展彰	筑波大学大学院社会精神保健学分野准教授
谷合 知子	多摩総合精神保健福祉センター広報援助課課長代理

成瀬 暢也	埼玉県立精神医療センター副病院長
合川 勇三	埼玉県立精神医療センター第2精神科医長
青柳 歌織	埼玉県立精神医療センター外来・地域支援科（精神認定看護師）主任
栗坪 千明	栃木ダルク代表
栃原 晋太郎	栃木ダルクスタッフ
三島 健一	福岡大学薬学部生体機能制御学研究室教授
稲田 健	東京女子医科大学医学部精神医学（神経精神科）講師

《発達障害精神医療研修》

平成28年9月14日から9月16日まで、第9回発達障害精神医療研修を実施し、「発達障害児・者が合併する精神疾患の早期対応と適切な治療が可能となるような地域内の体制整備の推進」を主題に、各自治体において地域の精神医療の中核となる機関に勤務する精神科医及び行政的な立場で研修の実施に携わる者等30名に対して研修を行った。

課程主任 神尾 陽子 課程副主任 石飛 信

9月14日(水)

発達障害者支援事業について	日詰 正文
発達障害の発達の道筋：子どもからおとなへ	神尾 陽子
発達障害、精神疾患の児童に対する今日の教育支援	丹羽 登
当事者の体験から～ASD者からみた成人の精神科臨床への期待と課題～	片岡 聡

9月15日(木)

発達障害の依存症の評価と治療	石飛 信
自治体の取り組み紹介	
～札幌市での児童思春期精神科医療の地域医療の向上への取り組みの現状～	齋籐 卓弥
鹿児島県の地域支援体制づくり	
～地域支援機能のある公的医療機関の取り組み～	外岡 資朗
ワークショップ I	
ADHDにおける診断の実際	齋籐 卓弥

9月16日(金)

発達障害者の就労支援	梅永 雄二
ワークショップ II	
自閉スペクトラム症の脳画像研究からわかること	山末 英典
当事者の体験より～当事者・家族・支援者へ～	村上 由美

講師名簿

神尾 陽子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部部長
石飛 信	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部室長
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
丹羽 登	関西学院大学教育学部教授
片岡 聡	NPO 法人リトルプロフェッサーズ理事長
齋籐 卓弥	北海道大学大学院医学研究科児童思春期精神医学講座特任教授
外岡 資朗	鹿児島県こども総合療育センター所長
梅永 雄二	早稲田大学教育・総合科学学術院教授
山末 英典	浜松医科大学精神医学講座教授
村上 由美	ボイスマネージ・株式会社ビブリオスタイル言語聴覚士、認定コーチング・スペシャリスト®

《自殺対策・相談支援研修》

平成 28 年 9 月 26 日から 9 月 27 日まで、第 1 回自殺対策・相談支援研修を実施し、「生きる支援としての自殺対策の基本を理解した上で、自殺のリスクアセスメントや様々な場面における相談支援の基本を身につける」を主題に、自治体、関係機関、企業、医療機関等で相談業務に関わる者 147 名に対して研修を行った。

課程主任 反町 吉秀

9月26日(月)

日本の自殺問題、自殺対策の基本的な枠組み	本橋 豊
生きる支援としての自殺対策に求められるもの	清水 康之
自殺のリスクアセスメントについて	近藤 伸介
自殺未遂者の支援—個別支援と地域との連携構築	近藤 伸介・与儀 恵子・上田 光世
自死遺族支援—基本的理解と多角的な支援	杉本 脩子・生越 照幸

9月27日(火)

自殺予防のためのパーソナリティ障害の理解と対応	渡邊 直樹
生きる支援としての多機関連携とパーソナルサポートの実際	馬場 優子
若年者の心の相談と自殺予防	波床 将材
依存症と自殺予防	磯村 大
相談・支援のあり方についての問い直し、まとめ	森川 すいめい

講師名簿

本橋 豊	国立精神・神経医療研究センター自殺総合対策推進センターセンター長
反町 吉秀	国立精神・神経医療研究センター自殺総合対策推進センター室長
清水 康之	NPO 法人ライフリンク代表
近藤 伸介	東京大学医学部附属病院精神神経科特任講師
与儀 恵子	荒川区福祉部障害福祉課係長
上田 光世	岩手県精神保健福祉センター心理判定員
杉本 脩子	全国自死遺族総合支援センター代表
生越 照幸	自死遺族支援弁護団事務局長
渡邊 直樹	メンタルホスピタルかまくら山名誉院長
馬場 優子	足立区衛生部こころとからだの健康づくり課課長
波床 将材	京都市こころの健康増進センター所長
磯村 大	金杉クリニック副院長
森川 すいめい	みどりの杜クリニック院長

《精神保健指導課程研修》

平成28年9月29日から10月1日まで、第53回精神保健指導課程研修を実施し、「第一部メンタルケアの初期対応のリーダーになる」として「メンタルに課題を抱えた人への初期対応法に関する知識と技術を身につける」を主題に、また、「第二部データを活用し身近な施策を組み立てる」として「事業等の企画評価の観点から、データを活用し施策を組み立て評価するための知識と技術を身につける」を主題に、精神保健医療従事者、地域の精神保健医療において中核的な役割を担い、企画や人材育成を要する機関の保健医療従事者46名に対して研修を行った。

課程主任 山之内 芳雄 課程副主任 鈴木 友理子

【第一部】

9月29日(木)

メンタルヘルス・ファーストエイド (MHFA) とは	鈴木 友理子
うつ病・自殺の MHFA	大塚 耕太郎
物資使用の MHFA	長 徹二
地域における MHFA 研修の実際	加藤 隆弘・小原 圭司

9月30日(金)

不安障害の MHFA	藤澤 大介
精神病性障害の MHFA	橋本 直樹
総合討議	鈴木 友理子

【第二部】

9月30日(金)

精神保健行政	松本 千寿
地域診断	尾島 俊之
実習1「既存統計資料の活用」	

ファシリテーター：尾島 俊之・山之内 芳雄・精神保健計画研究部スタッフ

10月1日(土)

地域精神保健の経験から事業の企画と組み立てー所沢市の経験からー	小野寺 健
市町村の健康づくり施策におけるデータの活用から学ぶ	津下 一代
地域精神保健の経験から事業の企画と組み立てー松山市の経験からー	竹之内 直人・花崎 みゆき
精神保健福祉における地域診断	山之内 芳雄
実習2「メンタル領域のデータを使った地域診断」	

ファシリテーター：山之内 芳雄・竹之内 直人・花崎 みゆき・精神保健計画研究部スタッフ



講師名簿

山之内 芳雄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部部長
鈴木 友理子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所成人精神保健研究部室長
大塚 耕太郎	岩手医科大学医学部神経精神科学講座教授
長 徹二	三重県立こころの医療センター医長
加藤 隆弘	九州大学大学院医学研究院精神病態医学分野・ 九州大学先端融合医療レドックスナビ研究拠点特任准教授
小原 圭司	島根県立心と体の相談センター所長
藤澤 大介	慶応義塾大学医学部精神・神経科講師
橋本 直樹	北海道大学医学研究科神経病態学講座精神医学分野助教
松本 千寿	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課主査
尾島 俊之	浜松医科大学健康社会医学講座教授
小野寺 健	所沢市健康推進部保健センター健康管理課こころの健康支援室主査
津下 一代	あいち健康の森健康科学総合センターセンター長
竹之内 直人	愛媛県心と体の健康センター所長
花崎 みゆき	松山市保健福祉部保健予防課課長

## 《司法精神医学研修》

平成28年10月25日から10月26日まで、第11回司法精神医学研修を実施し、「司法精神医学的な評価と介入を提供するために必要となる基本的な知識と技能の習得、およびその一般精神医療への応用」を主題に、精神科医療機関や行刑施設、地域(保健所等)において精神医療に従事している医師、臨床心理技術者、看護師、精神保健福祉士等40名に対して研修を行った。

課程主任 中込 和幸 課程副主任 菊池 安希子・安藤 久美子・河野 稔明

10月25日(火)

司法精神医学概論—歴史、法律、制度	岡田 幸之
刑事責任能力と精神鑑定	安藤 久美子
医療観察法総論	安藤 久美子・岡田 幸之
医療観察法の現状(入院)	河野 稔明
医療観察法の現状(通院)	安藤 久美子

10月26日(水)

司法精神医療におけるリスク・アセスメント(1)	岡田 幸之・安藤 久美子・曾雌 崇弘
司法精神医療におけるリスク・アセスメント(2)	岡田 幸之・安藤 久美子・曾雌 崇弘
司法精神医療におけるリスク・アセスメント(3)	岡田 幸之・安藤 久美子・曾雌 崇弘
司法精神医療における心理学的治療アプローチ(1)	菊池 安希子
司法精神医療における心理学的治療アプローチ(2)	菊池 安希子

## 講師名簿

中込 和幸	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
菊池 安希子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
安藤 久美子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
河野 稔明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
曾雌 崇弘	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部
岡田 幸之	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科精神行動医科学分野教授

《認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修》

平成 28 年 11 月 7 日から 11 月 9 日まで、第 8 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修を実施し、「薬物依存症者の臨床的特徴と治療に関するエビデンスを理解し、直面化を避けた動機づけ面接の重要性を理解し、薬物依存症に対する集団認知行動療法のファシリテーションの実際を学ぶとともに、家族支援への理解を深める」を主題に、医療機関、行政機関、司法機関、民間回復施設等で薬物依存症者の援助に従事している者 120 名に対して研修を行った。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 船田 正彦・嶋根 卓也・近藤 あゆみ

11月7日(月)

厚生労働省挨拶	朝倉 崇文
薬物中毒・乱用・依存の概念と最近の薬物関連障害患者の動向	和田 清
薬物依存症患者への対応の基本	成瀬 暢也
SMARPP の理念と意義	松本 俊彦
SMARPP の実際	近藤 あゆみ
社会資源（1）～精神保健福祉センターにおける支援～	谷合 知子
社会資源（2）～民間リハビリ施設と自助グループ～	加藤 隆
薬物依存症臨床における司法的問題への対応	松本 俊彦

11月8日(火)

SMARPP ビデオ学習	松本 俊彦
デモセッション	今村 扶美
グループワーク（1）	引土 絵未・今村 扶美・若林 朝子・高野 歩・米澤 雅子・加藤 隆
グループワーク（2）	引土 絵未・今村 扶美・若林 朝子・高野 歩・米澤 雅子・加藤 隆
まとめとディスカッション	松本 俊彦

11月9日(水)

薬物依存症と性的マイノリティおよび HIV 感染	嶋根 卓也
薬物依存者家族支援のためのツール	近藤 あゆみ
CRAFT の基礎	吉田 精次
動機づけ面接の基礎	澤山 透

講師名簿

松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
船田 正彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
嶋根 卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
近藤 あゆみ	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
引土 絵未	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部
高野 歩	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部
米澤 雅子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部

今村 扶美	国立精神・神経医療研究センター病院精神リハビリテーション部臨床心理室室長
若林 朝子	国立精神・神経医療研究センター病院精神保健福祉士
朝倉 崇文	厚生労働省社会・援護局精神・障害保健課依存症対策専門官
和田 清	埼玉県立精神医療センター依存症治療研究部長
成瀬 暢也	埼玉県立精神医療センター副病院長
谷合 知子	東京都立多摩総合精神保健福祉センター広報援助課長代理
加藤 隆	NPO 法人八王子ダルク代表理事
吉田 精次	藍里病院副院長
澤山 透	北里大学精神科講師

《摂食障害看護研修》

平成 28 年 11 月 9 日から 11 月 11 日まで、第 13 回摂食障害看護研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、精神科、心療内科、小児科、精神保健福祉センター等に勤務する看護師および保健師、作業療法士、精神保健福祉士等 53 名に対して研修を行った。

課程主任 安藤 哲也

11月9日(水)

摂食障害の疫学・病態・治療概論	安藤 哲也
摂食障害治療の基本	高倉 修
心療内科病棟における看護	北田 忍
精神障害・パーソナリティ障害を合併する摂食障害	大森 美湖

11月10日(木)

栄養リハビリテーション	阿部 裕二
心理教育的アプローチ	武田 綾
摂食障害のデイケアについて	稲土 愛奈
摂食障害の身体的合併症の管理	河合 啓介

11月11日(金)

ケアとコミュニケーションのスキル	小原 千郷
重症の神経性無食欲症の入院治療と看護	熊坂 真由美
小児科病棟における治療と看護	高宮 静男・佐野 智子

講師名簿

安藤 哲也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部室長
高倉 修	九州大学病院心療内科診療講師
北田 忍	国立国際医療研究センター国府台病院看護師長
大森 美湖	東京学芸大学保健管理センター准教授
阿部 裕二	国立国際医療研究センター国府台病院栄養管理室副栄養管理室長
武田 綾	NPO 法人のびの会心理療法士
稲土 愛奈	浜松医科大学病院精神医学講座臨床心理士
河合 啓介	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科診療科長
小原 千郷	東京女子医科大学附属女性生涯健康センター臨床心理士
熊坂 真由美	北里大学東病院精神科急性期治療病棟看護係長
高宮 静男	西神戸医療センター精神・神経科部長
佐野 智子	西神戸医療センター小児病棟看護師

## 《発達障害支援医学研修》

平成29年1月25日から1月26日まで、第22回発達障害支援医学研修を実施し、「発達障害児に対する医学的介入と心理社会的支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師で特に指導について責任的立場にある者、自治体において行政的な立場で地域の研修実施に携わる者49名に対して研修を行った。

課程主任 稲垣 真澄 課程副主任 加賀 佳美・北 洋輔

1月25日(水)

厚生労働省の発達障害支援施策	日詰 正文
Vineland II による適応機能評価と支援について その1	萩原 拓
Vineland II による適応機能評価と支援について その2	萩原 拓
顕在化しにくい発達障害：不器用児の診断と治療	中井 昭夫
顕在化しにくい発達障害：チック症・Tourette 症候群の診断と治療	金生 由紀子

1月26日(木)

地域における発達障害支援：大阪府の取り組み	菅 玲子
発達障害者の就労状況の現状と展望	志賀 利一
ネット依存・スマホ依存の考え方と対応：発達障害児の場合	中山 秀紀
発達障害支援の考え方	齊藤 万比古

## 講師名簿

稲垣 真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部部長
加賀 佳美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
北 洋輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
萩原 拓	国立大学法人北海道教育大学旭川校教授
中井 昭夫	兵庫県立リハビリテーション中央病院子どもの睡眠と発達医療センター副センター長
金生 由紀子	東京大学大学院医学系研究科こころの発達医学分野准教授
菅 玲子	大阪府福祉部障がい福祉室地域生活支援課発達障がい児者支援グループ統括主査
志賀 利一	独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園事業企画局研究部長
中山 秀紀	独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター精神科医長
齊藤 万比古	社会福祉法人恩賜財団母子愛育会愛育研究所児童福祉・精神保健研究部長、愛育相談所長

研修の推移

国立精神衛生研究所			
	36年6月～		54年度～ 61年度
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医学科研修</li> <li>・心理学研修</li> <li>・社会福祉学研修</li> <li>・精神衛生指導科研修</li> </ul>	→	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医学課程研修</li> <li>・心理学課程研修</li> <li>・社会福祉学課程研修</li> <li>・精神衛生指導課程研修</li> <li>・精神科デイ・ケア課程研修</li> </ul>

国立精神・神経センター精神保健研究所						
	61年度		62年度～	18年度～	20年度	21年度
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医学課程研修</li> <li>・心理学課程研修</li> <li>・社会福祉学課程研修</li> <li>・精神衛生指導課程研修</li> <li>・精神科デイ・ケア課程研修</li> </ul>	→	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医学課程研修</li> <li>・心理学課程研修</li> <li>・社会福祉学課程研修</li> <li>・精神保健指導過程研修</li> <li>・精神科デイ・ケア課程研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神保健指導過程研修</li> <li>・精神科デイ・ケア課程研修</li> <li>・発達障害支援課程研修</li> <li>・摂食障害治療課程研修</li> <li>・社会復帰リハビリテーション研修</li> <li>・ACT研修</li> <li>・薬物依存臨床課程研修</li> <li>・児童思春期精神医学研修</li> <li>・司法精神医学課程研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・地域自殺対策支援研修</li> <li>・心理職等自殺対策研修</li> <li>・自殺対策相談支援研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・社会復帰リハビリテーション研修</li> <li>・薬物依存臨床看護研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・PTSD精神療法研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・ACT研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・地域自殺対策支援研修</li> <li>・心理職等自殺対策研修</li> <li>・自殺対策相談支援研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・社会復帰リハビリテーション研修</li> <li>・薬物依存臨床看護研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・PTSD精神療法研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・ACT研修</li> <li>・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修</li> </ul>

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
	22年度	23年度	24年度
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・心理職自殺予防研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・PTSD医療研修</li> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修</li> <li>・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> <li>・ACT研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・心理職自殺予防研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・不眠症の認知行動療法研修</li> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・PTSD認知行動療法基本研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修</li> <li>・ACT研修</li> <li>・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・薬物依存症に対する認知行動療法研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・心理職自殺予防研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修</li> <li>・ACT研修</li> <li>・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・薬物依存症に対する認知行動療法研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> </ul>

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所	
25年度		26年度	
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・心理職自殺予防研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・心理職自殺予防研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修</li> <li>・医療における包括型アウトリーチ研修</li> <li>・医療における個別就労支援研修</li> <li>・司法精神医学ワンデイセミナー</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・心理職自殺予防研修</li> <li>・メンタルヘルス問題への初期対応指導者研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・薬物依存症に対する認知行動療法研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・精神科急性期医療の質を考える研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ACT研修</li> <li>・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・薬物依存症に対する認知行動療法研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> <li>・精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ACT・多職種アウトリーチ研修</li> <li>・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・薬物依存症に対する認知行動療法研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> <li>・医療における個別就労支援研修</li> <li>・司法精神医学ワンデイセミナー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・薬物依存症に対する認知行動療法研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・精神科急性期医療の質を考える研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> </ul>

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		
28年度		
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・地域自殺対策推進企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・多職種による包括型アウトリーチ研修</li> <li>・医療における個別就労支援研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・自殺対策・相談支援研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・摂食障害看護研修</li> </ul>



Ⅲ 研 修 実 績

平成28年度精神保健に関する技術研修課程 実施計画表

研修日程	課程名	申込み方法		申込み期間	受講料	定員	主任		自殺総合対策推進センターの担当する研修
		WEB	自治体推薦				副主任		
6月15日(水)～17日(金)	(第11回) 発達障害早期総合支援研修		○	3月18日(金)～4月8日(金)	無料	67組	神尾 陽子 石飛 信		
7月6日(水)～7日(木)	(第21回) 発達障害支援医学研修		○	4月7日(木)～4月28日(木)	無料	60	稲垣 真澄 加賀 佳美 北 洋輔		
8月22日(月)～24日(水)	(第1回) 地域自殺対策推進企画研修	○		6月9日(木)～6月30日(木)	無料	80	反町 吉秀	○	
8月30日(火)～9月2日(金)	(第14回) 摂食障害治療研修	○※		6月24日(金)～7月15日(金)	¥24,000	40	安藤 哲也		
8月31日(水)～9月2日(金)	(第14回) 多職種による包括型アウトリーチ研修	○		6月24日(金)～7月15日(金)	¥18,000	40	藤井 千代 佐藤さやか 山口 創生		
	(第4回) 医療における個別就労支援研修					20			
9月6日(火)～9日(金)	(第30回) 薬物依存臨床医師研修	○※		7月1日(金)～7月22日(金)	¥24,000	20	松本 俊彦 船田 正彦 嶋根 卓也 近藤あゆみ		
	(第18回) 薬物依存臨床看護等研修					30			
9月14日(水)～16日(金)	(第9回) 発達障害精神医療研修		○	6月17日(金)～7月8日(金)	無料	67組	神尾 陽子 石飛 信		
9月26日(月)～27日(火)	(第1回) 自殺対策・相談支援研修	○		7月13日(水)～8月3日(水)	無料	80	反町 吉秀	○	
9月29日(木)～10月1日(土)	(第53回) 精神保健指導課程研修(二部制)	○		7月22日(金)～8月12日(金)	全日 ¥18,000 各部 ¥12,000	各部 40	山之内芳雄 鈴木友理子		
第一部 9月29日(木)～30日(金) 第二部 9月30日(金)～10月1日(土)	第一部 メンタルケアの初期対応のリーダーになる 第二部 データを活用し身近な施策を組み立てる								
10月25日(火)～26日(水)	(第11回) 司法精神医学研修	○※		8月19日(金)～9月9日(金)	¥12,000	50	中込 和幸 安藤久美子 菊池安希子 河野 稔明		
11月7日(月)～9日(水)	(第8回) 認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する 集団療法研修	○※		8月31日(水)～9月21日(水)	¥18,000	60	松本 俊彦 船田 正彦 嶋根 卓也 近藤あゆみ		
11月9日(水)～11日(金)	(第13回) 摂食障害看護研修	○※		9月2日(金)～9月23日(金)	¥18,000	40	安藤 哲也		
平成29年 1月25日(水)～26日(木)	(第22回) 発達障害支援医学研修		○	10月27日(木)～11月17日(木)	無料	60	稲垣 真澄 加賀 佳美 北 洋輔		

※推薦状  
が必要な  
研修

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所

平成28年度 研究報告会

(第28回)

プログラム・抄録集

平成29年2月20日(月)

国立精神・神経医療研究センター

教育研修棟 ユニバーサルホール1・2

平成27年度精神保健研究所報告会 受賞者名

青年賞 (優秀発表賞)

- 斎藤顕立 (精神薬理研究部)

「オセオイド受容体をターゲットとした新規向精神薬開発の可能性」

若手奨励賞

- 後藤希央 (精神薬理研究部)

「うつ病バイオマーカーとしてのリンホスファアチン酸の可能性」

平成 28 年度 国立精神・神経医療研究センター  
精神保健研究所 研究報告会

会期：平成 29 年 2 月 20 日(月)  
会場：国立精神・神経医療研究センター 教育研修棟ユニバーサルホール1・2

【開 会】	9:30 ～ 9:40	開会の辞 ご挨拶
【セッションⅠ】	9:40 ～ 10:00	報告 1 司法精神医学研究部
	10:00 ～ 10:20	報告 2 社会復帰研究部
	10:20 ～ 10:40	報告 3 成人精神保健研究部 災害時こころの情報支援センター
※休憩 15 分※	10:40 ～ 10:55	
【セッションⅡ】	10:55 ～ 11:15	報告 4 薬物依存研究部
	11:15 ～ 11:35	報告 5 精神保健計画研究部
	11:35 ～ 11:55	報告 6 社会精神保健研究部
	11:55 ～ 12:15	写真撮影・連絡
	12:15 ～ 13:30	昼食
【セッションⅢ】	13:30 ～ 13:50	報告 7 精神薬理研究部
	13:50 ～ 14:10	報告 8 児童・思春期精神保健研究部
	14:10 ～ 14:30	報告 9 精神生理研究部
※休憩 15 分※	14:30 ～ 14:45	
【セッションⅣ】	14:45 ～ 15:05	報告 10 自殺予防総合対策センター
	15:05 ～ 15:25	報告 11 知的障害研究部
	15:25 ～ 15:45	報告 12 心身医学研究部
【閉 会】	15:45 ～ 16:00	閉会の辞

< 後片付け・評価検討 >

【懇親会・表彰式】 17:00 ～ 18:30 (16:30 開場：教育研修棟多目的室)

平成 28 年度 精神保健研究所リサーチ委員会  
金吉晴 安藤久美子 石飛信 北村真吾 近藤あゆみ 佐藤さやか

お知らせとお問い合わせ

<発表者の皆様へ>

- 発表時間  
発表時間は研究部あたり 20 分で、1 演題につき 10 分 (発表 7 分、質疑応答 3 分) です。円滑な進行のため、発表者の交替も含めて時間厳守をお願いいたします。
- 発表形式および発表用ファイルの様  
発表にはリサーチ委員会が用意する Windows マシン (Powerpoint2013 対応\*) を使用いたします。  
発表者の持参機、Macintosh マシンの切り替え作業は行いません。Windows 版 Powerpoint での発表用ファイル作成をお願いいたします。発表用ファイルは各部 1 ファイルにまとめ、ファイル名は「01 司法精神医学研究部.pptx (もしくは.ppt)」のように、報告番号 (前頁参照) および研究部名としてください。
- 発表用ファイルの提出  
発表用ファイルは、下記のいずれかの方法でご提出ください。  
<動作確認を希望しない場合> 2 月 17 日 (金) までに社会復帰研究部 田中 (tukkibu.hisho@ncnp.go.jp) までメール添付でお送りください。委員会では動作確認は行ないません。  
<動作確認を希望する場合> 2 月 17 日 (金) 13 時～17 時 (時間厳守) に、社会復帰研究部 (2 号館 4 階) に当日使用 PC を準備します。あらかじめ社会復帰研究部 佐藤さやか (sayakas@ncnp.go.jp) まで連絡の上、USB メモリでファイルを持参いただき、各自確認を行ってください。

<歴長・会場係のお願い>

- 歴長は各部長先生にお願いいたします。スケジュールが非常にタイトですので、上記発表時間厳守での運営をお願いします。
- 会場係 (タイムキーパー 1 名、照明・マイク担当 2 名) は、セッションごとにリサーチ委員の所属する部からのご協力をお願いいたします。

次の歴長、発表者は最前列にご着席になり、お待ちください。

<写真撮影に関するお願い>

午前中の発表が終了した段階 (11:55～) で、会場で記念写真撮影を行います。若手研究者の皆さんは、テーブルや椅子、機材等の移動等の手伝いをお願いいたします。

\*2016年10月3日のご案内では「Powerpoint2010対応」と記載しておりましたが、「Powerpoint2013対応」の誤りでした。大変失礼いたしました。

- 2: PTSD 女性患者における認知機能  
 ○堀弘明<sup>1)</sup>、伊藤真利子<sup>1)</sup>、林明明<sup>1)</sup>、丹羽まどか<sup>1)</sup>、井野敬子<sup>2)</sup>、  
 今井理紗<sup>2)</sup>、小川成<sup>2)</sup>、関口敦<sup>1)</sup>、功刀浩<sup>3)</sup>、加茂登志子<sup>4)</sup>、金吉晴<sup>1)</sup>  
 1) 成人精神保健研究部、  
 2) 名古屋国立大学大学院医学研究科精神認知行動医学分野、  
 3) 疾病研究第三部、4) 東京女子医科大学附属女性生涯健康センター

【セッションII】  
 10:55-11:15 薬物依存研究部 座長 松本俊彦

- 1: 薬物依存症者の家族を対象とした心理教育プログラムの開発と精神保健福祉センターへの普及  
 ○近藤あゆみ<sup>1)</sup>、白川教人<sup>2)</sup>、高橋郁絵<sup>3)</sup>、森田展彰<sup>4)</sup>  
 1) 薬物依存研究部、2) 横浜市の健康相談センター、  
 3) 原宿カウンスリングセンター、4) 筑波大学医学医療系  
 2: 幻覚剤の検出システム構築に関する研究: NMDA 受容体を標的としたスクリーニング手法  
 ○岩野さやか、畠田正彦、松本俊彦

11:15-11:35 精神保健計画研究部 座長 山之内芳雄

- 1: 2040年の精神科入院需要予測  
 山之内芳雄  
 2: 精神病床を有する病院に新規入院した患者の地域への退院  
 ○菅知絵美<sup>1)</sup>、立森久照<sup>1)2)</sup>、山之内芳雄<sup>1)</sup>  
 1) 精神保健計画研究部、2) 統計数理研究所リスク解析戦略研究センター

11:35-11:55 社会精神保健研究部 座長 伊藤弘人

- 1: インクルーシブ保育に対する意識調査と「医療的ケア児」への並行保育の実施  
 ○堀口寿広<sup>1)</sup>、秋山千枝子<sup>2)</sup>、橋本創一<sup>3)</sup>  
 1) 社会精神保健研究部、2) 医療法人社団千実会、3) 東京学芸大学

平成28年度 精神保健研究所 研究報告会  
 プログラム

9:30-9:40 開会の辞 国立精神・神経医療研究センター 理事長 水澤 英洋  
 ご挨拶 精神保健研究所 所長 中込 和幸

<< 発表 >>  
 【セッションI】  
 9:40-10:00 司法精神医学研究部 座長 安藤久美子

- 1: Facial Emotional Selection Test 日本語版の妥当性検討  
 ○米田恵子<sup>1)</sup>、菊池安希子<sup>1)</sup>、竹田和良<sup>2)</sup>、中込和幸<sup>3)</sup>  
 1) 司法精神医学研究部、2) 病院 第二精神診療部、3) 精神保健研究所  
 2: 医療観察法の10年間を振り返り返る一円滑な社会内処遇につなげるために—  
 ○安藤久美子<sup>1)2)</sup>、中澤佳奈子<sup>1)2)</sup>、曾雌崇弘<sup>1)</sup>、河野稔明<sup>1)2)</sup>、岡田幸之<sup>1)3)</sup>  
 1) 司法精神医学研究部、2) 病院 司法臨床研究センター、  
 3) 東京医科歯科大学大学院医学総合研究科精神行動医学分野

10:00-10:20 社会復帰研究部 座長 藤井千代

- 1: ピアスタッフと連携した共同意思決定システムの効果検証  
 ○山口創生、種田綾乃、松長麻美、水野雅之、佐藤さやか、藤井千代  
 2: 共同意思決定システムの利用が診察時の会話内容に与える影響  
 ○松長麻美、山口創生、種田綾乃、水野雅之、佐藤さやか、藤井千代

10:20-10:40 成人精神保健研究部・災害時こころの情報支援センター 座長 金吉晴

- 1: 災害時精神保健医療活動の包括的ガイドライン:  
 先行文献の解体 (dismantling) 的検討  
 ○島津 恵子<sup>1)</sup>、小林真綾<sup>2)</sup>、篠崎康子<sup>1)</sup>、金吉晴<sup>1)2)</sup>  
 1) 成人精神保健研究部、2) 災害時こころの情報支援センター

14 : 10-14 : 30 精神生理研究部 座長 三島和夫

- 1 : 向精神薬の処方をもたらす転倒骨折リスクに関する薬剤疫学調査  
 ○北村真吾<sup>1)</sup>, 榎本みのり<sup>2)</sup>, 三井寺浩幸<sup>3)</sup>, 立森久照<sup>4)</sup>, 三島和夫<sup>1)</sup>  
 1) 精神生理研究部, 2) 東京工科大学医療保健学部臨床検査学科,  
 3) 七生病院精神科, 4) 精神保健計画研究部
- 2 : 多施設共同 RCT による不眠症に対する認知行動療法 (Cognitive Behavioral Therapy for Insomnia : CBT-I) の有効性  
 ○綾部直子<sup>1)</sup>, 鈴木みのり<sup>2)</sup>, 立森久照<sup>3)</sup>, 北村真吾<sup>1)</sup>, 亀井雄一<sup>2)</sup>, 三島和夫<sup>1)</sup>  
 1) 精神生理研究部, 2) 病院 臨床検査部, 3) 精神保健計画研究部

【セッションⅣ】

14 : 45-15 : 05 自殺予防総合対策センター 座長 本橋豊

- 1 : 新たな自殺対策の方向性  
 本橋豊
- 2 : 自殺実態プロフィールの開発と活用について  
 金子善博

15 : 05-15 : 25 知的障害研究部 座長 稲垣真澄

- 1 : 注意欠陥・多動性障害(ADHD)児の病態解明と神経生理学的マーカーの開発  
 一 脳波周波数解析と事象関連電位による検討一  
 ○加賀佳美<sup>1)</sup>, 斎藤良彦<sup>2)</sup>, 大井雄平<sup>1)</sup>, 田中美歩<sup>1)</sup>, 土井裕一朗<sup>1)</sup>, 中川栄二<sup>2)</sup>, 稲垣真澄<sup>1)</sup>  
 1) 知的障害研究部, 2) 病院 小児神経科
- 2 : 不安を伴う発達障害モデルマウスの病態解析  
 ○田中美歩<sup>1,2)</sup>, 佐藤敦史<sup>2,3)</sup>, 池田和隆<sup>2)</sup>, 白川由佳<sup>1)</sup>, 加賀佳美<sup>1)</sup>, 李コウ<sup>4)</sup>, 刑部仁美<sup>4)</sup>, 井上健<sup>4)</sup>, 稲垣真澄<sup>1)</sup>  
 1) 知的障害研究部, 2) 東京都医学総合研究所 依存性薬物プロジェクト,  
 3) 東京大学 小児科, 4) 疾病研究第二部

2 : 双極性障害の合併による 2 型糖尿病における血糖コントロールおよび腎機能への影響

- 橋本皇<sup>1)</sup>, 小林清香<sup>2)</sup>, 羽瀨恵<sup>1)</sup>, 浅原哲子<sup>3)</sup>, 野田光彦<sup>2)</sup>,  
 佐藤俊哉<sup>4)</sup>, 伊藤弘人<sup>1)</sup>, 糖尿病とうつ病 (DAD) 研究グループ  
 1) 社会精神保健研究部, 2) 埼玉医科大学, 3) 京都医療センター, 4) 京都大学

【セッションⅢ】

13 : 30-13 : 50 精神薬理研究部 座長 山田光彦

- 1 : マウス内側前頭野前辺縁皮質領域におけるオピオイドδ受容体作動薬 KNT-127 の局所灌流はベラトリリン誘発不安様行動を抑制する  
 ○斎藤顕宜<sup>1)</sup>, 早田暁伸<sup>1,2)</sup>, 鈴木聡<sup>1,2)</sup>, 山田美佐<sup>1)</sup>, 大橋正誠<sup>1,2)</sup>, 岡淳一郎<sup>2)</sup>, 長瀬博<sup>3)</sup>, 山田光彦<sup>1)</sup>  
 1) 精神薬理研究部, 2) 東京理科大学薬学部薬理学研究室,  
 3) 筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構創薬化学研究室

- 2 : 理想的な曝露療法併用薬の開発を目指して  
 -Rituzole はラットの恐怖記憶をどう変容させるか-  
 ○赤木希衣<sup>1,2)</sup>, 山田美佐<sup>1)</sup>, 斎藤顕宜<sup>1)</sup>, 岡淳一郎<sup>2)</sup>, 山田光彦<sup>1)</sup>  
 1) 精神薬理研究部, 2) 東京理科大学薬学部薬理学研究室,

13 : 50-14 : 10 児童・思春期精神保健研究部 座長 神尾陽子

- 1 : 我が国における、自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究  
 ○原口英之, 山口穂菜美, 三宅篤子, 神尾陽子
- 2 : 閉スベクトラム症児および定型発達児における身体活動動態と聴覚性驚愕反射およびその制御機構との関連  
 ○高橋秀俊<sup>1,2)</sup>, 中村亨<sup>3)</sup>, 金鐘赫<sup>3,4)</sup>, 菊地裕絵<sup>4)</sup>, 中鉢真行<sup>1)</sup>, 石飛信<sup>1)</sup>, 吉内一浩<sup>5)</sup>, 安藤哲也<sup>4)</sup>, Andrew Stickley<sup>1,6)</sup>, 山本義春<sup>3)</sup>, 神尾陽子<sup>1)</sup>  
 1) 児童・思春期精神保健研究部  
 2) 脳神経統合イメージングセンター先進脳画像研究部  
 3) 東京大学大学院教育学研究科身体教育学コース, 4) 心身医学研究部  
 5) 東京大学大学院医学系研究科内科学専攻生体防御腫瘍内科学講座ストレス防御・心身医学  
 6) Stockholm Center for Health and Social Change (Schohost), Södertörn University

15 : 25-15 : 45 心身医学研究部

座長 安藤哲也

1 : 全国の病院の摂食障害受診患者数調査

○安藤哲也<sup>1)</sup>, 菊地裕絵<sup>1)</sup>, 立森久照<sup>2)</sup>

1) 心身医学研究部, 2) 精神保健計画研究部

2 : 神経性やせ症のケア提供家族におけるケア負担感と精神的健康

○小原千郷, 安藤哲也

15 : 45-16 : 00 閉会の辞

精神保健研究所 所長

中込 和幸

17 : 00-18 : 30 懇親会・表彰式 (16 : 30 開場 : 教育研修棟多目的室)

## 口頭発表 抄録

### Facial Emotional Selection Test 日本語版の妥当性検討

○米田恵子<sup>1)</sup>、菊池安希子<sup>1)</sup>、竹田和良<sup>2)</sup>、中込和幸<sup>3)</sup>

1) 司法精神医学研究部, 2) 病院 第二精神診療部, 3) 精神保健研究所

#### 【はじめに】

統合失調症の一部の患者においては、暴力行為が社会適応の妨げとなっている。たとえば、心神喪失者等医療観察法制度による入院処遇中の者は、制度開始以来、8割が統合失調症である。暴力行為の背景については、暴力を伴わない患者と比較した研究によって、社会認知の障害の影響が示唆されている。暴力歴のある患者は、ない患者に比べ、顔の表情を通して感情の強さを識別する能力が低いことが示されている (Silver H, 2005)。さらに治療介入の点では、社会認知改善プログラムが、精神症状とは独立して、患者の攻撃的な行動の抑制に効果があることが示唆されている (Combs DR, 2007)。これまでの知見から、暴力を伴う統合失調症患者の社会認知の特徴を把握し、その改善を試みることは、①患者の社会的転帰に影響を与える可能性、および、②暴力の抑制につながる可能性が示唆される。しかし、本邦では、社会認知を評価するための尺度開発が遅れているのが現状である。

#### 【目的】

本研究では、社会認知の中でも、顔表情認知機能を測定する「Facial Emotional Selection Test (FEST)」\* 日本語版 (Hagiya et al., 2015) の妥当性を検討することを目的とする。

#### 【方法】

外来通院中の統合失調症と診断された患者と精神科受診歴のない者 (対照群) に FEST・JACFEE/JACNeuf\*\* を含む社会認知の包括的テストバッテリーを実施し、FEST と理論的に関連が強いと推定される JACFEE/JACNeuf との併存的妥当性を検討する。

\*FEST は日本人の顔写真のみで構成され、基本6感情 (喜び、悲しみ、怒り、驚き、嫌悪、恐怖) と「感情なし」の顔写真を見て、感情の判別をしてもらうことで感情認知機能認知を評価する検査である。

\*\*JACFEE・JACNeuf (Matsumoto & Ekman, 1988) は、日本人・白人の顔表情写真で構成され、感情認知を評価する既存の尺度として、広く使われている。

#### 【結果・考察】

2016年12月現在、データ収集中である。

### 医療観察法の10年間を振り返る — 円滑な社会内処遇につなげるために —

○安藤久美子<sup>1)2)</sup>、中澤佳奈子<sup>1)2)</sup>、曾岐崇弘<sup>1)</sup>、河野稔明<sup>1)2)</sup>、  
岡田幸之<sup>1)3)</sup>

1) 司法精神医学研究部, 2) 病院 司法臨床研究センター,  
3) 東京医科歯科大学大学院 歯学総合研究科 精神行動医学分野

医療観察法は、心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者に対して適切な医療を継続して提供することにより同様の他害行為を防止し、社会復帰を促進させることを目的とした法律である。

医療観察法対象者の真の「社会復帰」を考えるうえでは、通院処遇中の処遇状況について正確に把握し、処遇終了後の治療と生活を念頭において、地域機関との連携を強化していくことが重要となる。われわれは、そうした視点を踏まえて、医療観察法施行から10年間にわたって、通院対象者の社会内処遇の実態に関する調査を行った。その結果、裁判所の審判によって、入院によらない医療 (通院医療) が決定した者であっても、その約半数が通院処遇中に精神保健福祉法による入院治療を併用していることや、当初審判後に、いわゆる「直接通院」が選択されるケースや入院治療を終えて通院処遇に移行するケースのなかには、より積極的に精神保健福祉法による入院治療を取り入れられるほうが、長期的な予後が改善する一群が存在することも明らかになってきた。

そこで本研究では、改めて通院対象者における精神保健福祉法による入院の実態について分析し、この10年間の変化を明らかにするとともに、入院から通院へと円滑な社会内処遇につなげるための方策について検討した。

分析の対象は本研究に同意した全国の指定通院医療機関502施設で処遇されている通院対象者1759例である。このうち、通院処遇中に精神保健福祉法による入院を併用していた例は857例 (49.3%) で、さらに467例 (54.56%) については通院処遇開始直後から精神保健福祉法による入院が行われていた。また、通院に至る形式によって分けると、直接通院者における精神保健福祉法による入院率は56%で、移行通院者における入院率は45%であった。発表当日は、入院開始の時期や入院理由などの背景要因から分類した4群を比較分析することによって、新たな政策にも直結しうる実行可能性のあるプランを提案する。

## ピアスタッフと連携した共同意思決定システムの効果検証

○山口創生, 種田綾乃, 松長麻美, 水野雅之, 佐藤さやか, 藤井千代

## 【背景】

重い精神障害を持った患者と医師との治療内容の共同意思決定 (Shared decision making: SDM) は国際的に重要なテーマとなっている。しかしながら、SDM の社会実装は大きな課題となっており、その効果も明らかになっていない。本研究は、患者と医師の双方に働きかけ、ピアスタッフと協働した新しいSDMシステムの開発および効果検証を目的とした。

## 【方法】

本研究のデザインは無作為化比較試験 (SDM 群 vs 通常診療 [TAU] 群) であり、6カ月間の追跡を実施した。調査員が全ての参加者に研究の概要や目的、参加の拒否権などについて説明をした。全ての参加者から書面による同意を得た。本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会から承認を得ている (No. A2014-001)。SDM 群に割り付けられた参加者は、1) 精神科の診察前にピアスタッフ (精神疾患を経験したピアスタッフ) の補助のもと、2) 専用のSDM 促進ツール [SHARE (Support for Hope And REcovery)] に自身の治療や生活における目標 (リカバリーゴール)、その日の体調等を入力し、3) 入力内容を基に、診察にて主治医と一緒にリカバリーゴールを共有し、治療内容を決めるSDM を実施した。アウトカムは、患者-医師との信頼関係 (STAR)、コミュニケーション (IPC)、機能 (GAF)、症状 (BPRS)、副作用 (DIEPSS)、アドヒアランス (MMAS)、生活の質 (WHO-QOL26)、薬剤処方などであった。主分析には混交モデルを用いた。統計的有意水準は5%とした。

## 【結果】

56名が無作為割り付けの対象となり、53名が分析対象となった (SDM 群: 26名, TAU 群: 27名)。ベースラインにおいてアウトカム得点に両群に有意な差はみられなかった。追跡調査の終了後、TAU 群の参加者と比較し、SDM 群の参加者は (患者からみた) 医師との信頼関係 (協力的態度  $B = 1.48, P = 0.030$ ; 協力的行動  $B = 0.78, P = 0.020$ ) やコミュニケーション ( $B = 1.86, P = 0.001$ ) が有意に改善していた。副作用の得点について、SDM 群の得点が TAU 群より有意に低くなっていった (Mean change:  $-1.19$  vs  $0.55, P = 0.016$ )。また、薬剤処方について、ベースライン時より6ヵ月後のクロロプロマジン換算量が減少した人の割合は、TAU 群 ( $n = 3/19$ ) よりSDM 群 ( $n = 10/16$ ) で有意に多かった ( $P = 0.006$ )。一方、機能や症状、アドヒアランス、その他の臨床・心理社会的アウトカムについて、両群に有意な差はなかった。

## 【結論】

本研究が開発したピアスタッフと協働したSDM システムは、患者-医師間の関係性やコミュニケーション、患者の副作用の改善に貢献できる可能性がある。

## 共同意思決定システムの利用が診察時の会話内容に与える影響

○松長麻美, 山口創生, 種田綾乃, 水野雅之, 佐藤さやか, 藤井千代

## 【背景】

重い精神疾患を持った人に対する支援においてはその自律性の尊重、権利擁護の観点から共同意思決定 (Shared Decision Making: SDM) の重要性が認識されつつある。SDM の実施により診察時のコミュニケーションが改善することで患者-医師の信頼関係がより良好なものになることが期待される一方で、SDM を臨床場面に適用するのは容易ではない。本研究では、ピアスタッフと協働したSDM 支援システムの開発を行った上で、SDM 支援システム利用による診察場面での会話内容の変化と、その患者-医師の信頼関係への影響を検討した。

## 【方法】

無作為化比較試験のデザインにより実施した。本研究への参加にあたっては、調査員が研究の概要や目的、参加の任意性などについて説明し、書面による同意を得た。本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会承認を得て実施した (No. A2014-001)。介入群は6ヵ月間、外来診察前にSDM 支援PCツール (Support for Hope And Recovery: SHARE) をピアスタッフの補助のもと利用した。SHARE に自身の治療や生活における目標、その日の体調などを入力し、診察時にその内容を基に主治医と治療方針についてのSDM を実施した。対照群はこの間、通常治療を受けた。また、介入前3ヵ月間と介入後6ヵ月間の診察時にICレコーダーに録音した。分析モデルには、介入前と介入後それぞれの期間の診察時における、利用者の好みに基づく会話および科学的な知識に基づく会話の程度 (coding system) による診察場面録音データの評価) と、介入開始時と介入6ヵ月後の2時点で測定した、利用者からみた患者-医師の信頼関係 (STAR-P)、SDM 支援システム利用の有無を投入した。分析には構造方程式モデリングを用いた。

## 【結果】

無作為割り付けの対象となった56名のうち、介入前後の診察時の録音データがある者33名を分析対象とした (介入群16名, 対照群17名)。構造方程式モデリングによる分析の結果、SDM 支援システム利用の有無は診察時の会話内容の充実に寄与しており、さらに会話内容が充実しているほど患者-医師の信頼関係も良好であった。

## 【結論】

SDM 支援システムの利用により、診察時の会話内容が充実し、さらにそのことが患者-医師の信頼関係の構築に寄与している可能性が示唆された。



## PTSD 女性患者における認知機能

○堀弘明<sup>1)</sup>、伊藤真利子<sup>1)</sup>、林明明<sup>1)</sup>、丹羽まどか<sup>1)</sup>、井野敬子<sup>2)</sup>、  
今井理紗<sup>2)</sup>、小川成<sup>2)</sup>、関口敦<sup>1)</sup>、功刀浩<sup>3)</sup>、加茂登志子<sup>4)</sup>、金吉晴<sup>1)</sup>

- 1) 成人精神保健研究部, 2) 名古屋市立大学大学院医学研究科精神認知行動医学分野,  
3) 疾病研究第三部, 4) 東京女子医科大学附属女性生涯健康センター

【背景】心的外傷後ストレス障害 (posttraumatic stress disorder: PTSD) は、記憶をはじめとする認知機能の障害に関連することが多く、研究によって明らかにされている。近年の大規模疫学研究において、PTSD は認知症の発症リスクを高めることも示されている。しかし、これらの研究の大部分は職関連のトラウマに曝露された男性 PTSD 患者を対象としたものであり、他の種類のトラウマによる PTSD 患者の認知機能についてはエビデンスが乏しい。本研究では、性被害や DV 被害のトラウマに曝露された女性 PTSD 患者における認知機能を検討することを目的とした。PTSD 自体に関連する認知機能障害を明らかにするために、トラウマ曝露や合併しているうつ病が認知機能に及ぼす影響についても併せて検討した。

【方法】本研究は、当センターが主幹研究機関となり、共同研究機関である東京女子医科大学および名古屋市立大学とともに実施している、PTSD の病因解明に向けたゲノム・バイオマーカー表現型統合解析プロジェクトで収集中のデータの一部を用いて行われたものである。参加者は、PTSD 患者 30 名 (『PTSD/うつ病+』群 17 名、『PTSD/うつ病』群 13 名)、トラウマ体験を有する健康対照者 (『トラウマ+』群) 17 名、有さない健康対照者 (『トラウマ-』群) 50 名の合計 97 名であり、年齢の範囲は 20-64 歳、すべて女性であった。トラウマ体験の判定および精神疾患の診断は DSM-IV に基づいて行った。精神選別や認知症の診断を有する者は除外した。認知機能の評価には、標準化された神経心理検査バッテリーである Repeatable Battery for the Assessment of Neuropsychological Status (RBANS) の日本語版を用い、即時記憶、視空間・構成能力、言語能力、注意力、遅延記憶を測定するとともに、それらを総合した総指標得点を算出した。また、Japanese Adult Reading Test を実施し、IQ を推定した。

【結果】平均年齢は 4 群とも 30 歳代後半～40 歳であり、有意な群間差は認められなかった。PTSD/うつ病+群と PTSD/うつ病-群は RBANS の全指標において同程度の成績であったため、以下の分析では PTSD 群を単群として扱い、3 群間で RBANS 得点を比較した。推定 IQ に有意な群間差が認められたため、RBANS 得点の比較には推定 IQ を共変量とした共分散分析を用いた。注意力を除くすべての指標で群の有意な主効果は認められ、多重比較の補正を施したペアごとの比較の結果、いずれの指標も PTSD 群において (トラウマ-群ないしトラウマ+群と比較して) 有意に得点が低く、中でも即時記憶や遅延記憶、総指標では 1SD 以上の得点差がみられた。トラウマ+群とトラウマ-群の間にはどの指標にも有意差がみられなかった。【考察】本研究により、PTSD は広汎な認知機能の障害に関連し、この障害はうつ病やトラウマ曝露とは概ね独立のものであることが示された。これらの結果は、先行研究で示されている職関連トラウマの男性 PTSD 患者における認知機能障害の知見に合致したものであることから、PTSD の認知機能障害はトラウマの種類や性別を超えて存在する普遍的な特徴であるという可能性が示唆された。本研究は進行中であるため、報告会当日は追加データを含めた結果を報告し、認知機能障害改善を重点とした PTSD 治療の可能性についても考察したい。

災害時精神保健医療活動の包括的ガイドライン：  
先文文献の解体 (dismantling) 的検討

○島津 恵子<sup>1)</sup>、小林真綾<sup>2)</sup>、篠崎康子<sup>1)</sup>、金吉晴<sup>1,2)</sup>

- 1) 成人精神保健研究部, 2) 災害時こころの情報支援センター

【背景・目的】災害や事故・事件などの予期せぬ出来事は、身体的病状、負傷の原因となったり、生活環境上の困難をもたらすだけでなく、一過性または持続的な精神的影響を与えることがある。精神保健医療対応を通じて被災者のウェルビーイングを向上させるためには、従事者が統一的な介入・支援方針を共有して連携して活動することが必要であり、そのためには広く承認されたマニュアルないしガイドラインを参照することが必要である。いわゆる先進国の中で日本は最も多く災害を経験しており、それを反映して、既に 20 点以上のガイドライン・教科書が作成または翻訳、紹介されているが、その内容は様々であり、見解に不統一な点も見受けられる。そこで多様な既存のガイドラインを整理し、内容の充実と今後のより幅広い普及に向けて災害時精神保健医療に関する他文献を含め包括的に再構成・最新化するものとした。

【方法】2000 年から 2015 年までに発行された災害時の精神保健医療対応に関する①書籍、②ガイドライン、③研究報告書から参照されること多い 12 点を選択した。これらの対象文献で記された内容をテーマごとに解体、共通項目を抽出し、その項目に沿って分野ごとに各書籍・各資料の内容を整理し、災害時精神保健医療活動に重要と考えられる課題 - 「心理反応・精神疾患」、「トラウマ対応」、「アセスメント」、「初期 (対応)」、を含む 21 項目より構成されたコンテンツ・マトリックスを作成した。各項目に対応する文献内容を要約し、その要約内容から災害時心のケアに関する各課題における既存知識の傾向を考察し、次の段階である各項目要約内容の圧縮作業への準備とした。

【結果】21 項目が抽出された。これらの検討を通じて、災害の分類については国内外の文献を通じてほぼ共通であり、災害時精神保健医療の災害精神医学上の位置付け、精神保健医療の災害時の役割、災害時支援におけるレジリエンス、外傷後成長の重要性についても国内外共通することが判明した。一方、日本が海外と異なる点として外部より臨床専門家による支援でなく地域行政を軸とした支援 (支援者が被災者)、ハイリスク・アプローチに対してボリュメーション・アプローチの強調、行政・外部機関の連携については横繋がりではなく縦割りが主軸であることが見出された。

【考察】文化的背景の差異に加え、エビデンスに基づいた記述が非常に乏しいことから記述の妥当性には十分な注意を要するが、本研究で得られたすべての内容を網羅するガイドラインが必要である。日本のように政府が災害時精神保健医療ガイドラインを作成、普及しているのは世界的にも例外的である。国際的な文献比較を踏まえた包括的な災害時精神保健医療活動ガイドラインを作成し、国内外に公開することは意義深いと考えられる。

薬物依存研究部

## 幻覚剤の検出システム構築に関する研究： NMDA 受容体を標的としたスクリーニング手法

○岩野さやか, 船田正彦, 松本俊彦

薬物依存研究部

危険ドラッグの世界的な広がりは近年大きな問題となっている。日本において危険ドラッグとして、幻覚剤であるジフエニジンやメトキセタミンが検出されており、引き起こされる幻覚により重大な事故や自傷他害が生じる危険がある。これらの化合物は N-methyl-D-aspartate (NMDA) 受容体に作用する。幻覚作用は NMDA 受容体の働きが阻害されることにより生じると考えられている。従来、幻覚作用を持つ化合物の評価には化合物を投与した動物の head-twitch response といった行動観察実験が用いられてきた。しかしながらこの方法では化合物の大量かつ迅速な評価が困難であるため、培養細胞を用いたより簡便な評価方法を開発する必要がある。

本研究では NMDA 受容体に着目し、その阻害効果をハイスループットにて解析する手法の開発を目的とした。NMDA 受容体は全ての受容体に共通の NR1 サブユニットと複数のサブユニットが知られている NR2 サブユニットから構成されるイオンチャネルである。NR2 サブユニットのなかでも NR2B は中枢神経系に多く発現しており、依存形成および幻覚作用に関連があるとされる。そこで、NMDA-NR2B 受容体を発現させた HEK-293 細胞を用いて、NMDA-NR2B 受容体のイオンチャネル活性を測定した。カルシウムイオンを蛍光標識する色素 Fluo-4 によって細胞内のカルシウム変動を測定することでイオンチャネル活性の指標とした。

グルタミン酸の添加により NMDA-NR2B 受容体を刺激すると、濃度依存的に受容体のイオンチャネル活性が増大することが確認された。NMDA-NR2B 受容体の阻害剤である MK-801、Ro 25-6981、幻覚剤として知られるフェンサイクリジン、ケタミン、また危険ドラッグの成分として検出されているジフエニジン、メトキセタミンを前処置するとグルタミン酸刺激による NMDA-NR2B 受容体のイオンチャネル活性は濃度依存的に抑制される。これらの結果から細胞を用いた NMDA-NR2B 受容体の機能評価が、幻覚作用を持つ化合物の迅速な検出に応用可能であると考えられる。

薬物依存研究部

## 薬物依存症者の家族を対象とした心理教育プログラムの 開発と精神保健福祉センターへの普及

○近藤あゆみ<sup>1)</sup>, 白川教人<sup>2)</sup>, 高橋郁絵<sup>3)</sup>, 森田展彰<sup>4)</sup>

- 1) 薬物依存研究部, 2) 横浜市中心の健康相談センター,
- 3) 原宿カウンセリングセンター, 4) 筑波大学医学医療系

【背景及び目的】依存症対策において家族支援は重要であることから、報告者らは平成 22 年度より薬物依存症の家族を対象とした心理教育プログラム（以下、家族プログラムと記す）の開発を行い、全国の精神保健福祉センター（以下、精福センターと記す）に普及を進めてきた。今回、平成 23 年度と平成 27 年度の精福センターにおける家族支援状況と家族プログラムの普及状況の把握を目的としたアンケート調査を実施したので、結果を報告する。

【方法】全国 69 箇所の精福センターを対象に、郵送による自記式アンケート調査を実施した。調査時期は平成 28 年 7~8 月であり、59 機関（85.5%）から回答を得た。

【結果】平成 27 年度に依存症の家族教室を実施した 44 機関のうち 17 機関（38.6%）で家族プログラムが活用されており、そのうち 5 機関（29.4%）は平成 23 年度未実施であった。家族プログラムを活用せずに家族教室を実施した 27 機関のうち 13 機関（48.4%）が今後の活用を希望していた。家族教室未実施の 15 機関のうち 6 機関は今後の実施を検討しており、そのうち 5 機関（83.3%）は、今後の実施に向けて家族プログラムの活用を希望していた。平成 27 年度における薬物依存症者の家族からの来所相談人数の中央値は 4 名、総数は 526 名であった。延人数の中央値は 7 名、総数は 1347 名であり、実人数（Wilcoxon の順位和検定  $p=0.014$ ）、延人数（Wilcoxon の順位和検定  $p=0.016$ ）ともに平成 23 年度と比較して有意に増加していた。次に、平成 23 年度は家族教室未実施であったが平成 27 年度には実施した 10 機関について、両年度の薬物依存症家族の来所相談人数を比較した結果、有意な増加が認められた ( $p=0.027$ )。一方、平成 23 年度も平成 27 年度も家族教室未実施であった 15 機関では、変化が認められなかった。

【考察】過去 5 年間で家族プログラムの普及が進んでいくことが確認でき、また、家族プログラムの普及が家族教室の立ち上げに役立っていることが示唆された。家族教室の実施は、個別相談も含めた家族支援の充実につながる可能性があることから、今後は、家族教室未実施の機関への普及に力を入れるとともに、縦断的調査による効果評価も行う必要がある。

2040 年の精神科入院需要予測

山之内芳雄

昭和 25 年に精神衛生法が施行された。都道府県に精神病院を設置するよう義務付ける一方、私宅監置を禁止し、精神障害者は入院医療で治療することを原則とした法律である。その後他の要因も加わり、精神病床は大幅に増加することとなり、昭和 30 年代から平成 6 年までに精神病床は 5 万床弱から 35 万床超に増えた。その後、「病院から地域へ」の スローガンのもと、精神障害者の地域移行の政策がとられていった。平成 16 年には、厚生労働省で「精神保健医療福祉の改革ビジョン」が策定され、『精神病床入院患者の中で約 7 万人いると推計された「受入条件を整えば退院可能な者」を 10 年間で退院させる。』という目標が掲げられた。この間様々な施策が行われたものの、精神病床の入院患者は平成 17 年から 26 年の 9 年間で 4 万人しか減少せず、受入条件を整えば退院可能な者も依然 5 万人以上入院しているという結果だった。

一方、人口の高齢化や地方の過疎化、医療現場では医療従事者の地域偏在が進展し、今後人口減少社会に突入する。その中で、あまり減少しているとはいえない精神病床はどうなっていくのだろうか。

我々は、厚生労働省行政推進調査事業「精神科医療提供体制の機能強化を推進する政策研究」班を組織し、上記課題に対して精神科入院需要の将来予測を試みた。入院患者統計は平成 22-26 年のいわゆる 630 調査と呼ばれる「精神保健福祉資料」、人口推計は国立社会・人口問題研究所が平成 25 年に行った「日本の地域別将来人口推計」を用いた。精神病床の入院患者を 1 年以内、1 年以上に分類し、それぞれの 2040 年（平成 52 年）までの疾患別の入院患者数を独自の方法で推計した。これは、1 年以上の入院患者の多くが、冒頭で述べた病床増加期に入院した患者であるため、別の集団として推計を行ったためである。それによると、1 年以内の入院患者は 2025 年までは微増するがその後減少に転じ、1 年以上の入院患者は 2025 年に現在の 80%、2040 年には現在の 40% になると推計された。

今後の医療技術の進歩や政策成果、人口動態の変化等によって、この推計結果が変動する可能性は十分あるものの、現状の医療・社会のシナリオにおける自然体の推計として参照する価値はあると考えている。研究班では、推計された値に対して、個々の精神科医療機関が地域で機能を発揮するにはどのような対応をすればいいのかについて、引き続き検討を行っている。

精神病床を有する病院に新規入院した患者の地域の地域への退院

○菅知絵美<sup>1)</sup>、立森久照<sup>1),2)</sup>、山之内芳雄<sup>1)</sup>

1) 精神保健計画研究部、2) 統計数理研究所リスク解析戦略研究センター

【背景と目的】精神科病院の入院治療中心から地域退院の促進は 1960 年代前半から始まり世界的な潮流となっている。わが国でも 2004 年に厚生労働省が「精神保健医療福祉の改革ビジョン」に「入院医療中心から地域生活中心へ」という基本方針を打ち出し、新規入院の患者でも早期の退院が推進されている。そこで、本研究では精神病床を有する病院に新規入院した患者の入院直前と退院直後の居住形態を検討することで、地域から入院し比較的早く地域へ退院する者と転院・死亡での退院や継続在院する者の特徴を把握することを目的とした。

【方法】全国の精神病床を有する約 1600 の病院に平成 26 年 1 月から 6 月の間に新規入院をした患者、および 15 万人を対象とした後向き調査データより 1 月から 3 月末日に地域（家庭、グループホーム・ケアホーム・社会復帰施設等、高齢者福祉施設）から入院した患者を約 6 万人抽出したデータを使用した。その患者の入院後 90 日時点での状態（地域、転院・死亡、継続在院）と関連する要因を検討した。

【結果と考察】地域からの新規入院患者を対象に、年齢、疾患（F0、F1、F2、F3、F4、その他）、同一二次医療圏（新規入院患者の入院直前の居住地が含まれる二次医療圏と入院した病院が所属する二次医療圏が同じか否か）別に入院直前と退院直後の居住について記述統計を用いて検討した。その結果、約 7 割の患者が地域へ退院し、1 割が転院・死亡、残りの 2 割が継続在院であった。地域へ退院する新規入院患者のなかで年齢や認知症を有する者は地域への退院が大幅に減少した。また、同一二次医療圏が同じか否かに関わらずほぼ同じ割合で地域へ退院をしていた。次に、年齢、疾患、同一二次医療圏を説明変数、退院先（地域と転院・死亡あるいは在院継続）を目的変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。その結果、退院先に年齢と疾患が有意に関連していたが、同一二次医療圏との関連はみられなかった（OR=1.03[0.99-1.08]）。つまり、地域への退院が、高齢者に比べて若年者で 2 倍から 3 倍（65 歳以上と比べて 34 歳以下（OR=2.97[2.79-3.18]）、35-64 歳（OR=1.97[1.89-2.06]）、認知症に比して物質関連障害の者で 2 倍（OR=2.17[2.00-2.34]）、統合失調症の者で 1.5 倍（OR=1.53[1.45-1.62]）、気分障害の者で 3 倍（OR=3.00[2.82-3.19]）、不安障害の者で 3.7 倍（OR=3.65[3.28-4.06]）の頻度であった。

【結語】地域への退院に年齢と疾患が関連すると同定され、高齢者や認知症の新入院患者の地域への退院を促進する方策を検討することが重要と考えられる。しかし、本研究では患者の重症度や身体症状の回答が得られていないことから因果関係については慎重に解釈することが必要である。

## インクルージョン保育に対する意識調査と「医療的ケア児」への

## 並行保育の実施

○堀口寿広<sup>1)</sup>、秋山千枝子<sup>2)</sup>、橋本創一<sup>3)</sup>

- 1) 社会精神保健研究部, 2) 医療法人社団千実会, 3) 東京学芸大学

【目的】人工呼吸器を装着しているなど医療的ケアを要する障害児「医療的ケア児」の生活の場は、これまでは医療設備の整った施設が主となっていた。在宅医療の進展により自宅での生活が可能となってきたものの、支援する施設や専門職の数はいまだ十分に整っていないと言えず、家族のレスパイトと社会参加を促進するためにも当該児が地域で生活できる場が求められていた。障害児への保育は「インクルージョン保育」と呼ばれ、いくつかのモデルが実践されている。そこで、地域ネットワークを構築し、小児科診療所が介在して医療的ケアを提供することにより一般の保育所での医療的ケア児への保育を実施するモデルを考えた。自治体の協力を得て、保育施設を対象にインクルージョン保育に対する意識の調査と、医療的ケア児への並行保育を試行的事業として実施し、医療的ケア児を対象とした保育の普及に向けた課題を整理した。

【方法】東京都三鷹市、武蔵野市の協力を得て、両市の担当部課、保育施設長、福祉団体代表者等からなる「重度障害児地域生活支援協議会」を組織した。インクルージョン保育に関するアンケートは、協議会より77施設、勤務する職員980人を対象に郵送した。施設にはハイレベルでの整備状況などを、職員にはインクルージョン保育に対する意見をたずね、いずれも無記名で郵送で回収した。また、並行保育事業については、市立の認可保育所1施設あたり児童1人の枠を設け、小児科診療所が開設した児童発達支援事業所から医療職または保育職1人が帯同して、移動から保育中のケアを実施した。保育の実施に当たり利用者の費用の負担はなしとした。事業所を利用してはいる児童の保護者のうち、協議会のコーディネーターから事業内容の説明を受け参加の同意が得られたものを対象とした。

【結果】インクルージョン保育に関するアンケートには、50施設、432人から回答があった。インクルージョン保育については、11施設が「賛同し、行っている」とし、178人の職員が「全体的に賛成」と回答した。並行保育事業には平成26～27年度の2年度間に5人が参加し合計のべべ84回実施した。経験をもとに並行保育を実施する手順をまとめガイドラインを作成した。

【考察】インクルージョン保育に対する施設と職員の意識は高く、必要な知識や手技を習得できる研修等を普及させることで、インクルージョン保育のさらなる促進が期待される。また、医療的ケア児の地域生活の形態の一つとして、一般の保育所を活用し、小児科診療所が介在して医療的ケアを提供する並行保育は有効であり、費用対効果を考慮して普及させるべきモデルと考える。

## 双極性障害の合併による2型糖尿病における

## 血糖コントロールおよび腎機能への影響

○橋本塁<sup>1)</sup>、小林清香<sup>2)</sup>、羽澄恵<sup>1)</sup>、浅原哲子<sup>3)</sup>、野田光彦<sup>2)</sup>、佐藤俊哉<sup>4)</sup>、伊藤弘人<sup>1)</sup>、糖尿病とうつ病(DAD)研究グループ

- 1) 社会精神保健研究部, 2) 埼玉医科大学, 3) 京都医療センター, 4) 京都大学

【目的】双極性障害は、大うつ病性障害よりも糖尿病の発症リスクが高いことが示唆されている一方で(Bai et al, 2013)、双極性障害が併発することによる糖尿病の病態への影響についての知見は乏しい。本研究では、気分障害を併発する2型糖尿病患者のうち、双極性障害に罹患する者の血糖コントロールおよび腎機能について、大うつ病性障害と比較検討することを目的とする。

【方法】本研究は、糖尿病に対する何らかの薬物療法を受けている2型糖尿病患者のうち、精神科外来にて双極性障害、もしくは大うつ病性障害の治療を受けている79名(双極性障害群25名、大うつ病性障害群54名)を対象とした横断研究である。血糖コントロールの指標としてHb-A1cを、腎機能の指標としてeGFRを使用した。その他、質問紙調査において、糖尿病のセルフケアの指標としてSDSCA、抑うつ性の指標としてPHQ-9、不安の指標としてGAD-7、不眠の指標としてAIS、をそれぞれ使用した。

【結果】Hb-A1cおよびeGFRを従属変数として、1検定によって双極性障害群と大うつ病性障害群との値を比較した。その結果、大うつ病性障害群と比較して、双極性障害群においてeGFRが有意に低いことが示された( $p < 0.05$ )。また、双極性障害群と大うつ病性障害群との有意な相関は認められなかった。なお、糖尿病および気分障害の罹病期間とeGFRとの間には有意な相関は認められなかった。

【考察】本研究の結果、これまで併発による糖尿病のコントロールへの悪影響が示されてきた大うつ病性障害と比較して、双極性障害の併発はさらなる腎機能の悪化をもたらすことが示された。腎機能は、血糖コントロールと比較して相対的に可逆性の低い指標であるため、これらの結果は、併発による長期的な影響性が反映されていると考えられる。腎機能の悪化の背景には食事制限の程度が影響していることが示唆されたことから、双極性障害を併発する2型糖尿病患者においては、食事などのセルフケアを支援することによって合併症の増悪を防ぐよう留意することが重要である。

理想的な曝露療法併用薬の開発を目指して  
-Riluzole はラットの恐怖記憶をどう変容させるか-

○赤木希衣<sup>1,2)</sup>, 山田美佐<sup>1)</sup>, 斎藤顕宜<sup>1)</sup>, 岡淳一郎<sup>2)</sup>, 山田光彦<sup>1)</sup>

1) 精神薬理研究部, 2) 東京理科大学 薬学部 薬理学研究室

【背景・目的】恐怖記憶は、安全な状況で想起されると消去学習により一時的に減弱する。消去学習は不安障害等の曝露療法に臨床応用されているが、D-cycloserine などの併用によりその効果を高めることができる。しかし、消去学習の成立が不十分な条件では、恐怖記憶の再固定化の促進が生じるため、恐怖記憶がかえって増悪するケースも報告されている。そのため、消去学習を促進するが再固定化を促進しない薬剤の開発が希求されている。これまでに我々は、グルタミン酸神経に作用する Riluzole がラットの消去学習を促進することを報告している。しかし、再固定化に対する影響については未だ結論が得られていない。そこで本研究では、恐怖記憶の消去学習及び再固定化に対する Riluzole の効果を詳細に検討した。

【方法】本研究では、再曝露時間を区別した文脈的恐怖条件付け試験を用いた。動物は雄性 Wistar/ST ラット(条件付け時 8 週間)を用いた。装置は床に電気グリッドを設置したチャンバーを使用した。文脈的恐怖条件付け試験の 1 日目に、チャンバーで電気刺激(0.4 mA, 1 秒間、40 秒間隔を 3 回)を与え条件付けを行った。2 日目に、チャンバーへ 10 分間(消去学習実験)または 3 分間(再固定化実験)再曝露し、直後に試験薬(Riluzole 3 mg/kg または Saline)を皮下投与した。3 日目は 28 日目の評価日に、チャンバーへ再曝露し 6 分間のすくみ行動時間を測定した。

【結果・考察】消去学習実験では、3 日目の評価日に Riluzole が恐怖記憶の消去学習を促進したことが確認できた。また、28 日目の評価日には恐怖記憶が自発的に回復していた。一方、再固定化実験においても、Riluzole 群のすくみ行動は 3 日目に減弱しており、Riluzole が恐怖記憶の再固定化を阻害した可能性が考えられた。しかし、28 日目には、消去学習実験と異なり、恐怖記憶の自発的回復は制限されていた。この結果は、Riluzole がラットにおいて恐怖記憶の再固定化を阻害した可能性をさらに強く示唆するものである。我々は、Riluzole が認知記憶を障害せずに抗不安様作用を示すことを既に明らかにしている。以上、Riluzole は曝露療法併用薬として理想的な特徴を有すると考えられた。一方、活性化 CREB の定量研究により、恐怖記憶の消去学習は扁桃体と内側頭前野が、再固定化は扁桃体と背側海馬が重要な役割を果たしていることが示されている。今後、Riluzole の薬理作用および恐怖記憶の分子メカニズムに注目した詳細な検討が必要であると考えられた。

【結論】先行研究では、消去学習を促進する薬物は再固定化も促進するとされており、相反する作用を併せ持つ薬剤は報告されていない。しかし、本研究により Riluzole はラットの恐怖記憶消去学習を促進するが、再固定化は阻害することが明らかとなった。以上より、Riluzole が、これまでにない理想的な曝露療法併用薬となる可能性が強く示唆された。

マウス内側頭前野前辺縁皮質領域における  
オピオイドδ受容体作動薬 KNT-127 の局所灌流は  
ベラトリン誘発不安様行動を抑制する

○斎藤顕宜<sup>1)</sup>, 早田暁伸<sup>1,2)</sup>, 鈴木聡<sup>1,2)</sup>, 山田美佐<sup>1)</sup>,  
大橋正誠<sup>1,2)</sup>, 岡淳一郎<sup>2)</sup>, 長瀬博<sup>3)</sup>, 山田光彦<sup>1)</sup>

1) 精神薬理研究部, 2) 東京理科大学 薬学部 薬理学研究室,

3) 筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構 創薬化学研究室

内側頭前野は、情動行動の調節に重要な役割を果たしていることが知られている。これまでに我々は、マウスの内側頭前野前辺縁皮質領域(PL-PFC)を薬理的に興奮させると、①不安様行動が示されること、②この行動変化はNMDA受容体を介していること、③さらにPL-PFCから扁桃体に投射する神経回路が関与していること、を報告した。一方、当研究部では選択的オピオイドδ受容体(DOR)作動薬KNT-127の全身投与が抗不安様作用を示すことを報告している。興味深いことにDORは、PL-PFCに高発現していることが報告されている。そこで本研究では、電位依存性Na<sup>+</sup>チャネル活性化薬ベラトリンを用いてPL-PFCを薬理的興奮させた際に出現する不安様行動に対するKNT-127併用の影響を検討した。さらに、扁桃体におけるc-Fos陽性細胞を指標に、DOR作動薬によって調節される神経ネットワークを検討した。

実験には、C57BL/6N雄性マウス6-7週齢を用いた。電気化学検出器付高速液体クロマトグラフを用いたマイクロアリス法により、PL-PFCの細胞外グルタミン酸濃度を定量した。マウスPL-PFCに透析プローブを留置し、透析液を灌流させ、さらに2時間後より被験薬(ベラトリン/ベラトリン)を含んだ透析液を30分間灌流させた。薬物灌流開始20分後からの10分間にオープンフィールド(OF)試験を実施し情動行動を評価した。

PL-PFCにベラトリン(100 μM)を灌流させたマウスは、細胞外グルタミン酸濃度の有意な増加と、OF試験における中心部滞在時間および移動距離の有意な減少を示した。一方、KNT-127(3-30 μM)を併用すると、ベラトリン投与群で認められたグルタミン酸濃度の増加とそれに伴う不安様行動は完全に抑制された。興味深いことに、ベラトリン灌流で認められた扁桃体各亜核におけるc-Fos陽性細胞数の有意な増加は、KNT-127の併用により消失した。従って、KNT-127はPL-PFCから扁桃体に投射している神経回路を抑制し抗不安様作用を示すことが示唆された。

内側頭前野の過活動は、不安障害や気分障害の病態に関与していることが示唆されている。PL-PFCの過剰なグルタミン酸神経伝達を抑制するKNT-127は、新規作用機序による抗不安薬開発のモデル薬物となる可能性が期待される。

## 我が国における、自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究

○原口英之, 山口穂菜美, 三宅篤子, 神尾陽子

【背景・目的】自閉症スペクトラム障害 (ASD) の早期介入においては、個々の支援ニーズに対応しうるエビデンスに基づく支援が重要となる。欧米を中心に、ASD に対する応用行動分析 (ABA) による早期介入 (以下、療育) が ASD 児の発達促進や行動改善に効果をもたらすと示されてきているが、地域の現実環境下で実施されている ABA による療育が ASD 児に対して効果をもたらすかについてはほとんど明らかになっていない。そこで、本研究では、①地域の ABA による療育は ASD 児の発達を促進し、行動を改善するのか? ②地域の通常療育 (TAU) を受けた ASD 児と比べて、ABA による療育を受けた ASD 児の 1 年後のアウトカムはどうか? の 2 点について明らかにすることを目的とする。

【方法】対象は、地域の大学、民間施設、公的療育機関からリクルートされ、独立した研究チームが診断した 2~6 歳の ASD 児 (平均 4.0 歳, SD 1.2) 61 名 (ABA 群 27 名, TAU 群 34 名) であった。アウトカム指標は全て標準化された臨床指標であり、児の発達指数 (DQ)、適応行動 (VABS)、ASD 症状 (PARS, ADOS, SRS)、情緒・行動の問題 (SDQ)、親の養育ストレス (PSI)、うつ症状 (TQI) を療育開始時 (T1) と 1 年後 (T2) に評価した。観察を要する評価は療育内容にブラインドな検査者が実施した。T1 時の児と親のデモグラフィック要因には 2 群間で有意差はなく、児の臨床指標は全て ABA 群の方が有意に重篤であった。

【結果】2 群を合わせた 61 名全員において、主要アウトカムである DQ および VABS 総合点の 1 年間の変化量を対応のある t 検定により解析した結果、DQ には有意な得点増加が見られたが、VABS 総合点には有意な得点増加は見られなかった。1 年間の DQ および VABS 総合点の変化量と、T1 時の DQ および VABS 総合点の相関分析の結果、T1 の VABS 総合点が高いと有意に DQ の変化量が大きくなる ( $r = .302, p = .018$ )、T1 の DQ が高いと有意に VABS 総合点の変化量が大くなる ( $r = .357, p = .005$ ) という相関関係が認められた。そこで、T1 の VABS 総合点を共変量として DQ の 1 年間の変化量の群間比較を共分散分析で調べた結果、ABA 群は TAU 群に比べて有意に DQ の変化量が高かった ( $F = 6.067, p = .017$ )。また、T1 の DQ を共変量として VABS 総合点の 1 年間の変化量の群間比較を共分散分析で調べた結果、ABA 群と TAU 群に有意な差はなかった ( $F = 1.096, p = .299$ )。

【考察】ABA 群は TAU 群よりも T1 の DQ と VABS 総合点が高い (より重篤なケースが ABA 療育を求めていることが示唆される) という群間差が見られ、DQ、VABS 総合点が高いほど 1 年間の変化量が大きくなるという傾向が見られたが、T1 時の VABS 総合点を調整すると ABA 群で DQ の上昇が大きかった。本研究は、実臨床場面で、親が親の意思で児の療育を受けさせている群を対象としており、療育内容や時間も療育提供者と親が選んだ条件のものであり、研究者があらかじめ設定したのではない。こうした地域の ASD 児に提供される実際のサービスタという文脈において早期療育の効果を明らかにしたのは本研究が初めてである。

## 自閉スペクトラム症児および定型発達児における身体活動動態と聴覚性驚愕反射およびその制御機構との関連

○高橋秀俊<sup>1,2)</sup>, 中村亨<sup>3)</sup>, 金鐘赫<sup>3,4)</sup>, 菊地裕絵<sup>4)</sup>, 中鉢貴行<sup>1)</sup>, 石飛信<sup>1)</sup>, 吉内一浩<sup>5)</sup>, 安藤哲也<sup>4)</sup>, Andrew Stickley<sup>1,6)</sup>, 山本義春<sup>3)</sup>, 神尾陽子<sup>1)</sup>

- 1) 児童・思春期精神保健研究部,
- 2) 脳形態統合イメージングセンター先進脳画像研究部,
- 3) 東京大学大学院教育学研究科身体教育学コース, 4) 心身医学研究部,
- 5) 東京大学大学院医学系研究科内科学専攻生体防衛腫瘍内科学講座ストレス防衛・心身医学,
- 6) Stockholm Center for Health and Social Change (Schohost), Södertörn University

【目的】自閉スペクトラム症 (Autism spectrum disorder: ASD) におけるトランスレーショナル・リサーチを推進するためには、定量的かつ客観的な行動上の表現型ならびに神経生理学的エンドフェノタイプを同定し、これらの関連について解明することが重要な課題である。本研究では、身体活動動態および聴覚性驚愕反射 (acoustic startle response: ASR) とその制御機構との関連について ASD 児と定型発達 (Typical development: TD) 児において検討した。

【方法】ASD 児 14 名・TD 児 13 名を対象に ASR 検査を行い、ASR の潜時、65、75、85、95、105dB の 5 種類の音圧の聴覚刺激に対する ASR の大きさ、そして馴化および 65、70、75dB の 3 種類の音圧のアプレハルスに対する prepulse inhibition (PPI) といった ASR の制御機構を評価した。これら ASR の指標と、時計型アクチグラフを用いて評価した身体活動動態との関連について検討した。本研究は、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会および東京大学ライフサイエンス委員会倫理審査専門委員会の承認を得て行われ、全ての被験者及びその保護者から書面にて同意を得た。

【結果】TD 児に比し ASD 児では、終日の身体活動量が有意に負の歪度を示し、日中の身体活動量も負の歪度を示す傾向にあった。全被験者において、70dB のアプレハルスに対する PPI は、終日の活動量の平均と負の歪度、および入眠潜時と有意な相関を示した。一方、65dB の刺激に対する ASR の大きさは、覚醒時の活動量の平均と負の歪度と有意な相関を示した。

【まとめ】ASD 児の聴覚過敏性は、覚醒時の高い活動性と散発的な活動低下という特徴と関連することが示唆され、PPI は終日のこれらの指標に加え入眠潜時とも関連が考えられた。PPI は統合失調症などの精神障害や児童の情緒・行動上の問題と関連することも知られており、ASR および身体活動動態という客観的・定量的指標を評価することで、ASD や併存障害の新規治療法開発につながる病態解明が推進すると考えられた。

## 向精神薬の処方をもたらし転倒骨折リスクに関する

## 薬剤疫学調査

○北村真吾<sup>1)</sup>、榎本みのり<sup>2)</sup>、三井寺浩幸<sup>3)</sup>、立森久照<sup>4)</sup>、三島和夫<sup>1)</sup>

- 1) 精神生理研究部, 2) 東京工科大学医療保健学部臨床検査学科,  
3) 七生病院精神科, 4) 精神保健計画研究部

股関節部骨折は高齢に伴い顕著に増加することが知られ、健康度の悪化や生活の質の低下などをもたらす重要な公衆衛生的問題である。向精神薬は転倒による股関節部骨折のリスク要因であることが指摘されている。本研究では日本医療データセンター (JMDC) が保有する複数の健保団体の計約33万人の加入者の中で、2005年4月1日～2013年3月31日の96ヶ月間に大腿部骨折に罹患した50歳以上の患者115名を対象に、向精神薬 (睡眠薬、抗うつ薬、抗不安薬、抗精神病薬、抗てんかん薬、抗ヒスタミン薬、その他の向精神薬) の処方期間をケース、非処方期間をコントロールとした、ケース・クロスオーバーデザインによる時間依存型比例ハザードモデルによるリスク解析を行い、向精神薬の転倒骨折罹患に対するリスクを評価することを目的とした。

いずれかの向精神薬処方による転倒骨折の相対リスク (RR) は調整なしで1.90 (95% CI: 1.31～2.75, P<0.001) であり、性・年齢の調整後もほぼ同水準 (1.86) であった。ケース・コントロールのいずれも睡眠薬の処方が最も多く (各28%)、薬剤別では、睡眠薬とその他の向精神薬の処方が転倒骨折に対する有意な相対リスクを示し (睡眠薬: RR=2.10, 95% CI=1.34～3.28, P<0.01; その他の向精神薬: RR=3.21, 95% CI=1.38～7.45, P=0.006)、睡眠薬の処方による性・年齢・各向精神薬処方の調整でも同程度のリスクを示した (RR=2.22, 95% CI=1.25～3.9, P=0.007)。睡眠薬の作用機序別では、ベンゾジアゼピン系 (RR=4.51, 95% CI=2.72～7.46, P<0.001) および非ベンゾジアゼピン系 (RR=3.55, 95% CI=1.55～8.16, P=0.003) のいずれも有意な転倒骨折リスクを示したが、性・年齢・各作用機序別睡眠薬処方を調整した結果、ベンゾジアゼピン系のみが有意な転倒骨折リスクとして抽出された (RR=7.18, 95% CI=3.86～13.36, P<0.001)。本知見は、中高年における転倒骨折予防において、ベンゾジアゼピン系睡眠薬の慎重な処方と注意を求める。

## 多施設共同RCTによる不眠症に対する認知行動療法 (Cognitive

## Behavioral Therapy for Insomnia : CBT-I) の有効性

○綾部直子<sup>1)</sup>、鈴木みのり<sup>2)</sup>、立森久照<sup>3)</sup>、北村真吾<sup>1)</sup>、

亀井雄一<sup>2)</sup>、三島和夫<sup>1)</sup>

- 1) 精神生理研究部, 2) 病院 臨床検査部, 3) 精神保健計画研究部

これまで、不眠症治療の新しい選択肢として非薬物療法である認知行動療法 (Cognitive Behavioral Therapy for Insomnia : CBT-I) の有効性は数多く認められてきた。メタ解析においても中途覚醒の回数・時間、総睡眠時間、睡眠の質については、CBT-Iは薬物療法と同等の効果を示されている (Smith et al., 2002)。近年においては、睡眠薬の減薬・中止に対するCBT-Iの併用効果も明らかにされている (Morgan et al., 2003)。しかしながら、国内で本格的なランダム化比較試験 (Randomized Controlled Trial : RCT) によるCBT-Iの有効性についての検証は乏しく、特に治療抵抗性の不眠症に関する臨床データは少ない。そこで、本研究は、睡眠薬服用後も不眠症状が残っている原発性不眠症患者を対象に多施設共同RCTを行い、不眠症状の改善、および睡眠薬の減薬率をアウトカムとしたCBT-Iの有効性について検証を行った。対象者は、睡眠薬を常用服用し、The Japanese version of the Insomnia Severity Index (ISI-J) を用いた不眠重症度が8点以上の原発性不眠症患者とし、従来の介入法を行った群 (CBT-I +TAU群) の2群のいずれかに割付された。介入中に睡眠薬の減薬が可能とみなされた者は、両群ともにセッション4から漸減法を用いた減薬が行われた。なお、本研究は、国立精神・神経医療研究センターおよび各研究協力施設の倫理委員会の承認を受けており、臨床研究および疫学研究の倫理指針に基づく手続きを遵守している。

本試験には、計51名 (CBT-I+TAU群: 24名, TAU群: 27名) が組み入れられ、介入前と同意撤回をした1名を除く50名を解析対象とした。平均年齢は、CBT-I+TAU群が61.25±13.48歳 (男性9名, 女性15名)、TAU群が58.70±16.32歳 (男性10名, 女性16名) であり、2群における年齢、男女比に有意な差異は認められなかった。解析の結果、CBT-I+TAU群はTAU群と比較して、介入後および1ヶ月フォローアップ時に不眠重症度が有意に低下していた。また、不眠症状が寛解した者 (ISI-J<8) は、CBT-I介入を受けた者に多かった。したがって、本邦における多施設共同RCTの結果、CBT-I介入によって不眠症状が軽減されることとが示された。当日は、その他の指標の結果についても報告予定である。

新たな自殺対策の方向性

本橋 豊

自殺総合対策推進センター

平成28年4月1日、改正自殺対策基本法が施行された。改正法では、自殺対策の理念の明確化と地域自殺対策推進の強化がなされた。第二条第1項には「自殺対策は、生きることの包括的な支援として、全ての人がかけがえのない個人として尊重されるところにも、生きる力を基礎として生きがいや希望を持って暮らすことができよう、その妨げとなる諸要因の解消に資するための支援とそれを支えかつ促進するための環境の整備充実が幅広くかつ適切に図られることを旨として、実施されなければならない」との規定がなされた。また、第5項には「自殺対策は、保健、医療、福祉、教育、労働その他の関連施策との有機的な連携を図られ、総合的に実施されなければならない」と規定され、自殺対策における多分野協働と総合的観点の重要性が強調されている。

地域自殺対策を推進するための新たな組織として、自殺総合対策推進センターが国立精神・神経医療研究センター内に設置され、地域自殺対策推進を支援することになった。また、都道府県には自殺総合対策推進センターが直轄する地域自殺対策推進センターの設置が求められており、市町村の自殺対策計画策定支援をすることになった。

地域で自殺対策を進めていくためには、地域の自殺の実態を正確に把握し、地域特性に基づき自殺対策を進めていくことが必要である。自殺総合対策推進センターでは、自殺実態プロフィールと地域政策パッケージを提供し、地域における自殺対策計画策定を支援する予定である。計画では、自殺予防の他、自殺未遂者や自死遺族への支援を行う体制の整備にも十分な配慮を図ることが求められている。また、自殺対策に関連する生活困窮者自立支援事業や地域包括支援事業等と連動させた計画にすることが求められている。

自殺対策を進めるためには、社会モデルとしての自殺対策の重要性を認識することが大切である。例えば、借金問題等の法的解決に向けた相談支援には司法書士会や弁護士会が役割を果たすし、児童生徒の自殺対策を推進するためには、学校のみならず家庭、地域、児童相談所等の連携が必要である。地域自殺対策推進のためには、医療・保健・福祉の関係者のみならず、学校関係者や商工関係者（事業主を含む）、民間団体などが、緊密に連携を図りつつ協力をしていくことが不可欠である。

自殺実態プロフィールの開発と活用について

金子善博

自殺総合対策推進センター

平成28年4月に改正された自殺対策基本法において、都道府県・政令指定都市および市区町村に地域の実態に即した地域自殺対策計画の策定が求められることとなった。地域の実態に即した対策を進めるためには、どのような領域が対策上の課題となっているか、また対策の実施体制の課題を各自治体で把握する必要がある。しかしながら従来、特に人口規模の小さな市町村や保健所管内ではこれらを把握、評価する上で困難が多かった。

全国の基礎自治体で更なる自殺対策を底上げし推進するためには、これまでの精神医学的研究の知見、経済生活問題への支援の知見、高齢者や社会的弱者の社会参加の知見などを基盤に、地域で実行可能な対策を、地域の関係者の理解のもと政策形成していく必要がある。自殺対策はその背景の多様性から、行政機関内においても地域社会においても、多様な分野がそれぞれの専門性を発揮すると共に、分野横断的な連携が必要であるが、人口5万人以下の自治体において、庁内横断的な自殺対策推進体制がある自治体は1割程度、自殺対策連絡協議会などの地域の分野横断的な連携体制がある自治体も2割以下との調査結果が得られている。これは、自殺対策の地域格差が大きいかを示しており、自治体支援の必要性が明確となった。

当センターでは各自治体の自殺対策に関する政策形成を支援するために、地域の現状の把握を容易にするための自殺実態プロフィールの開発を始め、都道府県・政令指定都市の地域自殺対策推進センター等を通じて全国の全ての市区町村に順次提供を開始した。各自治体からの関心、期待は高く、今後の開発を通じて自殺対策計画の策定支援および自殺対策の全国的な底上げに活用を図っていくこととしている。



## 全国の病院の摂食障害受診患者数調査

○安藤哲也<sup>1)</sup>、菊地裕絵<sup>1)</sup>、立森久照<sup>2)</sup>

1) 心身医学研究部, 2) 精神保健計画研究部

【目的】摂食障害の受診患者数の全国推計は 1998 年の調査以後、実施されていない。現在のわが国での摂食障害の患者数とその臨床疫学像を示す統計的資料はなく、医療施策立案に支障を来している。そこで、全国の病院の摂食障害受診患者数を推計することと、摂食障害の臨床疫学像を明らかにすることを目的とした。

【方法】難病の患者数と臨床疫学像把握のための全国疫学調査マニュアル<sup>第 2 版</sup>に準拠し、患者数推計のための一次調査と、疫学臨床像把握のための二次調査を実施した。一次調査では全国の 20 床以上の病床を持つ病院の精神科、心療内科、小児科、内科（総合内科・一般内科・総合診療科、代謝・内分泌・糖尿病内科）、産婦人科 11,766 施設（診療科単位）から層化無作為抽出した 5220 施設に調査票を送付し、診断分類別・男女別の受診患者数を調べた。本研究は国立精神・神経医療研究センターの倫理委員会の承認を得て実施された。

【結果】2016 年 12 月時点で 2565 施設（回収率 49.1%）から有効な回答を得た。2014 年 10 月から 2015 年 9 月までの 1 年間の受診患者数の推計値は、神経性やせ症 12,674 人、全診断を合算すると 24,506 人であった。推定患者数の約 65% が精神科、9% が心療内科、8% が小児科、4% が産婦人科であった。報告数の上位 5% の施設が、心療内科では報告患者数の 60%、精神科では 50%、小児科で 60% を占めていた。

【考察】前回 1998 年の調査では神経性食欲不振症 12,500 人、中枢性摂食異常常症全体で 23,200 人と推計されており、この間の病院受診患者数に著明な変化はないものと考えられる。しかし、従来から指摘されていた少数の施設に多数の患者が集中している傾向が確認された。結果の解釈には診断基準が前回の DSM-IV から今回 DSM-5 に変わったことなどを考慮する必要がある。また調査の限界として、摂食障害患者に多い未受診例は把握されないこと、受診していたとしても治療を受けたとは限らないことに注意が必要である。今後、二次調査により、人口学的事項、受療や医療費に関する事項、転帰、治療内容、併存症等の臨床的事項を調べる予定である。

【結論】2014 年 10 月から 2015 年 9 月までの 1 年間に全国の病院を摂食障害で受診した患者数は神経性やせ症で 12,674 人、全診断を合算すると 24,506 人と推定された。

## 神経性やせ症のケア提供家族におけるケア負担感と精神的健康

○小原千郷、安藤哲也

【背景】神経性やせ症（以下、AN）は死亡率が高く慢性化しやすい疾患であるが、患者は治療や体重増加を拒むことが多く、心配する家族との間で葛藤が生じがちである。また軌職による様々な問題行動は家庭生活にも悪影響を及ぼすため、家族の心労は大きい。特に患者にケアを提供する家族の負担は大きく、欧米諸国ではケアに対する精神的負担感（以下、ケア負担感）及び、精神的な健康状態に関する調査が行われ、その関連因子が検討されている。しかし、本邦ではこうした研究の報告ない。

【目的】AN 患者の家族のケア負担感及び精神的健康に関連する因子を探ることを目的とした。先行研究で指摘された関連因子に加え、ストレスコーピングとの関連を検討した。

【方法】対象者は、都内のある協立病院に通院した AN 患者の主要なケア提供者であった（2012.8～2014.3）。ケア提供者に対しては自記式のアンケート調査を実施し、その内容は基本情報（年齢、患者との続柄、患者と接する時間など）と標準化された尺度（ケア負担感：J-ZBI\_8、精神的健康：GHQ28、ストレスコーピング：CISS、社会的支援：SNQ、全般的家族機能：GF-FAD、家族による患者の症状評価：ABOS）であった。また、患者の診療情報（年齢、病型、BMI など）を、主治医を通じて収集した。

【結果】79 名のケア提供者から回答が得られた（回収率 76.0%）。ケア提供者の年齢は平均 56.0±8.0 歳であり、患者との続柄は父親 5 名（6.3%）、母親 70 名（88.6%）、その他 4 名（5.1%）であった。ケア負担感を有意に予測した因子は、家族による摂食障害状態評価と CISS の「情緒優先対処」であり、この 2 因子でケア負担感の分散の 40.1% が予測された。同様に、情緒優先対処の健康を有意に予測した因子は、CISS の「情緒優先対処」、SNQ の「心理的支援」、患者と接する時間」であり、この 3 因子で、精神的健康状態の分散の 60.2% が予測された。GHQ28 において、精神健康上の問題を示唆するカットオフポイントを超えていた者が 48 名（60.8%）存在した。

【考察】本邦において、AN 患者に対して主要なケアを提供する家族の多くは、ケアの負担感を感じており、精神的健康状態を害していた。ケア負担感の高さを予測した因子は、家族から見た摂食障害症状が重いこと、情緒優先のストレス対処方略を多く用いることであった。また、精神的健康状態の悪さを予測した因子は、情緒優先のストレス対処方略を多く用いることと、周囲からの心理的なサポートが少なく、患者と接する時間が長いことであった。患者の症状の重さやソーシャルサポートが家族のケア負担感を予測する時間が増えるという先行研究が支持されるとともに、情緒優先のストレス対処様式や患者と接する時間が長いことがメンタルヘルスに悪影響を与えることが示唆された。情緒優先のストレス対処を減らし、より適応的なコーピングを促進する介入が、摂食障害の患者家族への有効な支援となる可能性がある。

【結論】AN の主要なケア提供者の多くは精神的健康状態を害しており、情緒優先のストレス対処様式がケア負担感及び精神的健康に悪影響を与える可能性があることが示唆された。

知的障害研究部

注意欠陥・多動性障害(ADHD)児の  
病態解明と神経生理学的マーカーの開発  
—脳波周波数解析と事象関連電位による検討—

○加賀佳美<sup>1)</sup>、斎藤良彦<sup>2)</sup>、大井雄平<sup>1)</sup>、田中美歩<sup>1)</sup>、  
土井裕一朗<sup>1)</sup>、中川栄二<sup>2)</sup>、稲垣真澄<sup>1)</sup>  
1) 知的障害研究部, 2) 病院 小児神経科

【緒言】

注意欠陥・多動性障害(ADHD)の病態仮説モデルでは実行機能とより抑制機能の障害が指摘され、前頭前野の関与が強く疑われている。当研究部ではこれまで、事象関連電位(ERP)や光トポグラフィ(NIRS)などの臨床神経生理学的手法によるADHDの病態解明研究を進めてきた。今回、睡眠中の脳機能に着目した研究として新たに睡眠時紡錘波の解析により前頭葉—視床の機能関連の検討を行った。また、覚醒中の抑制機能評価法としてADHD児に適用的なERP課題(Go/NoGo課題)を作成し、バイオマーカーとしての有用性を検討した。

【方法】

●検討1: 7~18歳のADHD児18名と定型発達児(TDC)18名とした。フーリエ変換によるパワースペクトラム解析を行い、睡眠段階2の12Hz, 14Hzのspindleに着目して全周波数成分における含有率を求めた。またStroop課題、continuous performance test(CPT; もぐら一すぢ<sup>®</sup>)による行動評価との関連について検討した。  
●検討2: 7~15歳のADHD10名と、TDC12名とした。7~9歳の年少群、10~15歳の年長群に分けて検討した。色提示ERP課題Go/NoGo課題(試行中の脳波を解析し、Go刺激やNoGo刺激提示後300msec付近の陽性波をGoP3、NoGoP3と定義し、NoGoP3(Cz)とGoP3(Pz)の振幅比について群間比較した。

【結果】

●検討1: 周波数解析では、14Hzのパワー含有率は両群間で差は認められなかったが、12Hzでは有意に高く、特に自閉症スペクトラム障害(ASD)合併例でその傾向が強くなりみられた。また、前頭極での12Hzパワー含有率は、CPT課題の反応時間のばらつきにおいて正の相関を認めた。  
●検討2: Go/NoGo課題施行時の正答率は、年少ADHD群のGo条件で有意に低下していた。年長群では、Go、NoGo課題とも有意差は認めなかった。NoGo/GoP3振幅比は、年少群ADHD 0.39、TDC 0.76 ( $p=0.07$ )、年長群ADHD 0.65、TDC 1.06 ( $p=0.23$ )であり年齢とともに振幅比は増大したが、両年齢群ともADHDで低い傾向にあった。

【考察】

注意の振動所見とfrontal spindleの出現に相関がみられたことは、ADHDの前頭葉機能障害に視床の機能異常が関わることを示唆された。Go/NoGo課題のNoGo P3/GoP3振幅比はADHDの抑制機能のバイオマーカーとして、有用である可能性が示された。

知的障害研究部

不安を伴う発達障害モデルマウスの病態解析

○田中美歩<sup>1),2)</sup>、佐藤敦史<sup>2),3)</sup>、池田和隆<sup>2)</sup>、白川由佳<sup>1)</sup>、  
加賀佳美<sup>1)</sup>、李コウ<sup>4)</sup>、刑部仁美<sup>4)</sup>、井上健<sup>4)</sup>、稲垣真澄<sup>1)</sup>  
1) 知的障害研究部, 2) 東京都医学総合研究所 依存性薬物プロジェクト,  
3) 東京大学 小児科, 4) 疾病研究第二部

【緒言】

自閉症スペクトラム障害(ASD)は時に不安障害を併発する。ASDの不安の原因の一つとしてセロトニン(5-HT)が報告されている。血中5-HT濃度はセロトニントランスポーター(SERT)によって調節されており、ASD患者ではSERTの機能が低下していると考えられている。SERTノックアウト(SERTKO)マウスの社会性行動、不安様行動を解析し、治療介入研究(トリプトファン欠乏食投与)を行った。一方、マイクログリウムの選択的サブライミングに関する遺伝子Ser/Arg repetitive matrix 4 (Strm4)の部分欠失マウス(Bv)は不安様行動を示すことが知られている。本遺伝子はASDの原因の一つとして最近注目されており、Bvの不安病態にStrm4とGABA系機能が関与すると想定して分子生物学的研究を進めた。

【方法】

●検討1: SERTKOマウスの行動実験を行い、ASD様行動及び不安行動について検討した。線条体の5-HT量をマイクロダイアリシス法によりトリプトファン欠乏食投与前後で測定した。  
●検討2: マウス脳内でのStrm4発現を組織学的に明らかにし、BvマウスでのGABA系介在神経細胞の脳内分布、年齢変化について検討を行った。

【結果】

●検討1: SERTKOマウスは社会的相互交流異常と不安行動がみられ、線条体5-HT濃度が増加していた。トリプトファン欠乏食により、5-HT濃度が低下し、行動も改善した。  
●検討2: Strm4発現は海馬、嗅球、小脳に強く、大脳皮質にも広く見られた。Bvマウス大脳皮質の免疫染色ではparvalbumin (PV) 陽性GABA介在神経細胞の細胞密度がP56マウスでは低下していたが、P21マウスでは低下は認められなかった。

【考察】

●検討1: SERTKOマウスでは、線条体による5-HT増加がASD様行動と関連しており、トリプトファン欠乏食で改善が得られた。このことは、ASDの病態にはSERTが関与しており、脳内5-HT濃度を低下させることによる治療効果も期待できるものと考えられる。  
●検討2: BvマウスのPV陽性GABA介在神経細胞の減少が成熟マウスで見られたことにより、Strm4はGABA介在神経細胞の成熟に関与している可能性がある。今後さらに、Strm4がGABA介在神経細胞にどのように関与している可能性やメカニズムについて検討を重ねていく方針である。

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所  
平成28年度 研究報告会  
(第28回)

プログラム・抄録集

発行 国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター  
印刷 株式会社東京アート印刷所

V. 平成28年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
精 研 所 長 室	中込和幸	研究代表者	精神疾患の機能ドメインに基づく新しい治療法の開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	中込和幸	研究代表者	大うつ病性障害患者を対象とした新規抗うつ薬の長期投与試験	臨床研究	持田製薬株式会社/田辺三菱製薬株式会社
	中込和幸	研究分担者	血液バイオマーカーを用いたうつ病と双極性障害の鑑別診断法の開発に関する研究	障害者対策総合研究開発事業	日本医療研究開発機構
	中込和幸	研究分担者	精神疾患患者に対する早期介入とその体制の確立のための研究	障害者対策総合研究開発事業	日本医療研究開発機構
	中込和幸	研究分担者	治療フェデリティと目標設定は認知矯正療法の効果に影響を与えるか	学術研究助成基金助成金基盤研究 (C)	日本学術振興会
	中込和幸	研究分担者	経頭蓋直流刺激による統合失調症の認知機能の改善:脳機能画像による反応予測法の開発	学術研究助成基金助成金基盤研究 (C)	日本学術振興会
	中込和幸	研究分担者	認知リハビリテーションによる統合失調症ワーキングメモリ障害の改善メカニズムの解明	学術研究助成基金助成金基盤研究 (C)	日本学術振興会
精 神 保 健 計 画 研 究 部	山之内芳雄	研究開発代表者	「精神科病院の入院処遇における医療水準の向上システムの開発に関する研究」内「精神科病院の入院処遇における医療水準の向上システムの開発と運用」	日本医療研究開発機構研究費(長寿・障害総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業))	日本医療研究開発機構
	山之内芳雄	研究代表者	「精神科医療提供体制の機能強化を推進する政策研究」内「研究統括・データベース・データツールの作成、需給予測」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	山之内芳雄	研究分担者	「地域のストレングスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究」内「精神保健医療改革の達成プロセスの円滑化と資源活用に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	山之内芳雄	研究分担者	「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究」内「評価ツール開発、モデル地域連携」	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	山之内芳雄	分担研究者	「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」内「ケースマネジメントのモニタリング指標・技術開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山之内芳雄	研究担当	平成27年度自殺ハイリスク者対策推進事業(自殺未遂者地域支援体制推進事業)	委託事業	愛知県
	山之内芳雄	研究分担者	「国立高度専門医療研究センター独自の政策調査機能に関する研究」内「国立精神・神経研究センターにおける政策調査機能の検討」	国立がん研究センター研究開発費	国立がん研究センター
	山之内芳雄	研究分担者	「急性期病院におけるせん妄予防管理の標準化に向けたクリニカルパスの開発及び効果検証」内「クリニカルパスの開発・検証、データ分析」	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)))	日本学術振興会
	立森久照	研究開発代表者	「精神医療に関する空間疫学を用いた疾患発症等の将来予測システムの開発に関する研究」(研究総括)	日本医療研究開発機構研究費(長寿・障害総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業))	日本医療研究開発機構
	立森久照	研究分担者	「地域のストレングスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究」内「精神保健医療改革に資する資料の作成」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))	厚生労働省
	立森久照	研究分担者	「筋ジストロフィーのエビデンス創出を目的とした臨床研究と体制整備」内「筋ジストロフィーの臨床試験における生物統計」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	立森久照	研究分担開発者	患者レジストリーデータを活用した臨床開発効率化のための新たな臨床研究デザインの開発」内「生物統計学的検討と患者レジストリーへの応用」	日本医療研究開発機構研究費 医薬品等規制調和・評価研究事業	日本医療研究開発機構
	立森久照	研究分担開発者	「医療の質向上を目的とした臨床データベースの共通プラットフォームの構築」内「NCD及びDPCを用いたビッグデータ分析の方法論の監修」	日本医療研究開発機構 臨床研究等ICT基盤構築事業	日本医療研究開発機構
	立森久照	分担	都市型コミュニティ(川崎市)における援助希求の諸様態に対応した介入・支援に関する研究開発と社会実装	戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発)	国立研究開発法人 科学技術振興機構社会技術研究開発センター
	西大輔	研究開発代表者	「ω3系脂肪酸によるうつ病の予防・治療を目指した基礎・臨床の融合的研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	西大輔	研究開発代表者	「精神医療に関する空間疫学を用いた疾患発症等の将来予測システムの開発に関する研究」内「発症・再発の予防による受療必要数への影響の検討」	日本医療研究開発機構研究費(長寿・障害総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業))	日本医療研究開発機構
	西大輔	研究分担者	「当事者を含めた他職種によるリカバリーカレッジの運用のためのガイドラインの開発」内「マインドフルネス及びレジリエンス向上とリカバリー」	日本医療研究開発機構研究費(長寿・障害総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業))	日本医療研究開発機構
	西大輔	研究分担者	「労働生産性の向上に寄与する健康増進手法の開発に関する研究」内「労働生産性の心理社会的指標の検討」	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省
	後藤基行	研究代表者	「日本の精神科入院システムの実証研究と政策科学—歴史的アーカイブ構築と共に」	科学研究費助成事業(若手研究B)	日本学術振興会
	後藤基行	研究代表者	「日本における精神科入院メカニズムの実証研究—3類型化の視点から—」	特別研究員奨励費(PD)	公益財団法人家計経済研究所
三宅美智	研究代表者	「精神医療の行動制限最小化に参画するピアサポーターの教育プログラムの開発と普及」	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)))	日本学術振興会	
白田謙太郎	代表者	妊娠中のうつ病のスクリーニングに関する研究	助成金	財団せせらぎ	

V 平成28年度委託および受託研究課題

	竹島正	研究代表者	「地域のストレンスを活かした精神保健医療改革プロセスの明確化に関する研究」内「総括/地域ニーズに対応した地域精神保健医療の協働開発に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	竹島正	研究開発分担者	「精神医療に関する空間疫学を用いた疾患発症等の将来予測システムの開発に関する研究」内「疾患発症等の将来予測または受療必要数の検討に必要な質的情報の収集と分析」	日本医療研究開発機構研究費（長寿・障害総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業)）	日本医療研究開発機構
	竹島正	研究開発分担者	「障害福祉データの利活用に関する研究」内「生活のしづらさなどに関する調査」の詳細統計作成(精神障害に関する分析)	日本医療研究開発機構研究費（長寿・障害総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業)）	日本医療研究開発機構
	竹島正	研究開発分担者	都市型標準集落ソーシャルキャピタルとセルフケア能力向上プログラムの開発と評価	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）））	日本学術振興会
	竹島正	研究分担者	「都市型順限界集落ソーシャルキャピタルとセルフケア能力向上プログラムの開発と評価」内「メンタルヘルス部門・啓発担当」	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）））	日本学術振興会
	竹島正	代表者	「NCNP所蔵・国立精神療養所関連資料のアーカイブズ整備・戦時精神医療体制の基礎研究を中心に」	助成金	三菱財団助成金
	竹島正	研究分担者	過労死等の実態解明と防止対策に関する総合的な労働安全衛生研究内「過労死等の事案解析（主に精神・自殺）」	労災疾病臨床研究事業費補助金	厚生労働省
薬物依存研究部	松本俊彦	主任研究者	物質依存症に対する医療システムの構築と包括的治療プログラムの開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	研究開発代表者	精神医学・救急医学・法医学が連携した危険ドラッグ使用の病態・症状対応法の開発に関する研究	日本医療研究開発機構研究助成	日本医療研究開発機構
	松本俊彦	研究開発分担者	自殺の実態解明と効果的な介入プログラムの開発に関する学際的研究	日本医療研究開発機構研究助成	日本医療研究開発機構
	松本俊彦	研究代表者	刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	児童思春期の学校における自殺関連要因の前方視的研究	科学研究費補助金基盤研究（C）	文部科学省
	松本俊彦	治験	慢性疼痛患者を対象としたS-8117のオープンラベル試験	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-200)	塩野義製薬
	松本俊彦	治験	慢性腰痛症患者を対象としたS-8117のプラセボに対する優越性試験	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-203)	塩野義製薬
	松本俊彦	治験	慢性腰痛症患者を対象としたS-8117の継続投与試験	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-204)	塩野義製薬
	松本俊彦	治験	オピオイド誘発性の便秘症を有する非がん性の慢性疼痛患者を対象としたnaldemedineの第3相臨床試験－S-8117(オキシコドン塩酸塩)使用例でのオープンラベル試験－	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-235)	塩野義製薬
	松本俊彦	治験	S-877489の小児注意欠陥・多動性障害患者を対象とした第2相臨床試験(継続長期投与試験)(治験番号:1318A3222)	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-258)	塩野義製薬
	松本俊彦	治験	S-877489の小児注意欠陥・多動症患者を対象とした第2/3相臨床試験(治験番号:1411A3223)	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-259)	塩野義製薬
	松本俊彦	治験	S-877489の小児注意欠陥・多動症患者を対象とした長期投与試験(治験番号:1412A3231)	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬(受-260)	塩野義製薬
	松本俊彦	拠点病院	拠点センター（薬物依存症）	厚生労働省依存症治療拠点病院事業	厚生労働省
	船田正彦	主任研究者	危険ドラッグの有害作用発現機序の解明と評価技術開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	船田正彦	分担研究者	「危険ドラッグの有害作用発現機序の解明と評価技術開発に関する研究」内「危険ドラッグの検出技術開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	船田正彦	研究代表者	危険ドラッグおよび関連代謝産物の有害性予測法の確立と乱用実態把握に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	船田正彦	研究分担者	「危険ドラッグおよび関連代謝産物の有害性予測法の確立と乱用実態把握に関する研究」内「チオフェン誘導体の行動薬理学的特性」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	船田正彦	研究代表者	危険ドラッグを中心とした中枢神経系に作用する物質の迅速検出法の開発に関する研究	日本医療研究開発機構（AMED）（医薬品等規制調和・評価研究事業）	厚生労働省
	嶋根卓也	研究代表者	危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
嶋根卓也	研究分担者	「危険ドラッグを含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」内「薬物使用に関する全国住民調査」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省	
嶋根卓也	研究分担者	「危険ドラッグおよび関連代謝産物の有害性予測法の確立と乱用実態把握に関する研究」内「様々なフィールドにおける危険ドラッグ乱用に関するオンライン調査」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省	
嶋根卓也	研究分担者	「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究」内「民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業 精神障害分野)	厚生労働省	

	嶋根卓也	分担研究者	「薬物使用障害の病因・病態・治療反応性に関する多面的研究」内「HIV陽性者における薬物使用障害罹患脆弱性の要因とその支援に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費（精神障害分野）	国立精神・神経医療研究センター
	近藤あゆみ	研究分担者	刑の一部執行猶予制度の施行に向けた 民間薬物依存症回復支援施設の実態把握と課題の解明に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	近藤あゆみ	研究分担者	精神保健福祉センターにおける 家族心理教育プログラムの普及と評価に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	近藤あゆみ	研究分担者	多機関連携による 薬物依存症者地域支援の好事例に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）	厚生労働省
	近藤あゆみ	分担研究者	薬物使用障害患者の外来治療プログラムの効果と治療転帰に与える要因に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
心身医学研究部	安藤哲也	研究代表者	摂食障害の診療体制整備に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野）））	厚生労働省
	安藤哲也	主任研究者	心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発	精神・神経疾患開発費	国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
	安藤哲也	研究代表者	エクソーム解析による摂食障害原因変異の網羅的探索	科学研究費助成事業基盤C	日本学術振興会
	菊地裕絵	研究代表者	日常生活下調査による摂食障害の食行動異常関連要因と背景基盤の解明	科学研究費助成事業（若手B）	日本学術振興会
	菊地裕絵	研究分担者	EMAを用いたボディイメージと健康行動に関する実証的研究	科学研究費助成事業（基盤（B））	日本学術振興会
	菊地裕絵	研究分担者	摂食障害初期対応指針の作成	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）	厚生労働省
	西園マーハ文	研究分担者	摂食障害情報センター機能の開発（神経性過食症短期入院プログラムの開発）	精神・神経疾患研究開発費26-4 「心身症・摂食障害の研究ネットワーク拠点整備と治療プログラムの開発」	厚生労働省
	西園マーハ文	研究分担者	地域保健の場における摂食障害の対応に関する実態調査に関する研究	厚生労働科学研究費補助金「摂食障害の診療体制整備に関する研究H26-精神-一般-」	厚生労働省
	藤井 靖	研究代表者	過敏性腸症候群の未患者に対する携帯情報端末を用いた認知的介入は有効か？	文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）	文部科学省
	藤井 靖	研究代表者	過敏性腸症候群の未患者に対する携帯情報端末を用いた認知行動的介入は有効か？	文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）	文部科学省
児童・思春期精神保健研究部	神尾陽子	研究代表者	国、都道府県等において実施する発達障害者診療関係者研修のあり方に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	神尾陽子	研究代表者	我が国における、自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究	長寿・障害総合研究事業障害者対策総合研究開発事業	日本医療研究開発機構
	神尾陽子	研究代表者	小学校通常学級におけるメンタルヘルス予防プログラムの有効性に関する研究	科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(基盤研究(B))	日本学術振興会
	神尾陽子	研究代表者	通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒の包括的な心の健康教育支援	科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会
	神尾陽子	研究担当者(責任者)	「人間力活性化によるスーパー日本人の育成と産業競争力増進/豊かな社会の構築」内「学童期以降の脳機能と、個性の関連性評価」に関する研究	委託研究開発費	(独)科学技術振興機構
	神尾陽子	主任研究者	「自閉症スペクトラム障害の最適予後のための早期介入に関する研究」内「自閉症スペクトラム障害における幼児期、児童期から青年期への発達軌跡の多様性」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	神尾陽子	研究代表者	日本における非精神病性の一般精神科外来受診成人患者における注意欠如・多動性障害ADHDの有病率推定のための多施設共同横断研究：J-PAAP研究	受託・共同研究費	日本イーライリリー(株)
	神尾陽子	研究分担者	「災害時の精神保健医療に関する研究」内「被災地の子どもの精神医療支援」	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	神尾陽子	研究分担者	「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究」内「発達障害モジュール開発」	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	神尾陽子	研究分担者	「発達障害児者等の地域特性に応じた支援ニーズとサービス利用の実態の把握と支援内容に関する研究」内「サービス内容の評価」	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野))	厚生労働省
	神尾陽子	研究分担者	「発達障害を含む児童・思春期精神疾患の薬物治療ガイドライン作成」内「発達障害を含む児童・思春期精神疾患の薬物治療ガイドライン作成と普及」	長寿・障害総合研究事業障害者対策総合研究開発事業	日本医療研究開発機構
	神尾陽子	研究分担者	「知的障害者、発達障害者の支援における多分野共通のアセスメントと情報共有手段の開発に関する研究」内「情報共有プラットフォームの開発、早期発達・早期支援でのパッケージ開発、情報共有モデル候補地調査・選定、モデル地域での情報共有試行準備」	長寿・障害総合研究事業障害者対策総合研究開発事業	日本医療研究開発機構
	神尾陽子	研究分担者	「サルと自閉症児を対象とした援助行動の生物学的・進化的要因解明に関する実験的研究」内「自閉症児の実験の実施」	科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(基盤研究(A))	日本学術振興会
	神尾陽子	研究分担者	「自閉症スペクトラム成人に持続する社会性障害の発達の基盤の解明に関する研究」内「発達障害の病原病態研究と診断治療研究、発達障害の臨床特徴をてがかりにして、より広く人間の社会性の根源に迫る文理融合方共同研究」	委託研究開発費	昭和大学発達障害医療研究所
	高橋秀俊	研究代表者	聴覚環境と聴覚情報処理特性が自閉症スペクトラム児の学校メンタルヘルスに及ぼす影響	科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会
	高橋秀俊	研究代表者	教室内音環境と聴覚情報処理特性が子どものメンタルヘルスに及ぼす影響	科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(基盤研究(B))	日本学術振興会

V 平成28年度委託および受託研究課題

	高橋秀俊	研究分担者	「自閉症スペクトラム障害の最適予後のための早期介入に関する研究」内「聴覚情報処理に関わる神経生理学的基盤を用いた児童期から成人期における精神医学的障害の早期発見と早期介入に関わる病態解明に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	石飛 信	研究代表者	自閉症スペクトラム障害の併存症に対する包括的評価手法の開発に関する研究	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	石飛 信	研究分担者	「自閉症スペクトラム障害の最適予後のための早期介入に関する研究」内「自閉症スペクトラム障害の併存症に対する早期発見・早期介入のあり方についての研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
成人精神保健研究部	金 吉晴	研究代表者	災害時の精神保健医療に関する研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究代表者	こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究代表者	モバイル情報通信を使用した災害時の精神保健・心理社会的支援に関する研究	地球規模保健課題解決推進のための研究事業	日本医療研究開発機構
	金 吉晴	研究分担者	認知課題を用いたPTSDの客観的評価指標に関する研究	科学研究費助成事業 (挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会
	鈴木友理子	分担研究者	「東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究および被災児童の心的外傷後ストレス障害 (PTSD) に関する研究」内「石巻市の被災児童と健常児の比較検討研究」	平成28年度国際医療研究開発事業 (疾病研究分野)	国立国際医療研究センター
	鈴木友理子	研究分担者	「精神疾患患者早期介入のための医療従事者向け研修プログラム開発—メンタルヘルス・ファーストエイドの応用—」内「プログラム開発と評価方法の検討」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業	日本医療研究開発機構
	堀 弘明	研究代表者	PTSDに対するママンチンの臨床試験	平成27年度 (第40回) 研究奨励金	公益財団法人 臨床薬理研究振興財団
	堀 弘明	研究代表者	パーソナリティに基づく健康-疾患連続性の検討: 遺伝子発現プロファイルとの関連	科学研究費補助金[基金] (基盤研究(C))	日本学術振興会
	堀 弘明	研究代表者	心的外傷後ストレス障害に対する持続エクスポージャー療法の作用メカニズムの検討	平成28年度研究活動助成金	公益財団法人メンタルヘルス岡本記念財団
	堀 弘明	研究代表者	認知機能と遺伝子多型を指標とした、統合失調症と気分障害の連続性・非連続性の検討	統合失調症研究会研究助成金	統合失調症研究会
	堀 弘明	研究代表者	遺伝子発現プロファイルによる精神疾患発症予測法開発	平成28年度研究奨励金	公益財団法人上原記念生命科学財団
	関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	医学系奨励研究	公益財団法人武田科学振興財団
	関口 敦	研究代表者	脳MR画像を用いた外的刺激によるシナプス可塑性の個人差の評価	平成28年度東北大学加齢医学研究所共同利用・共同研究費	東北大学加齢医学研究所
	伊藤真利子	研究代表者	認知課題を用いたPTSDの客観的評価指標に関する研究	科学研究費補助金[基金] (挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会
	伊藤 (丹羽) まどか	研究分担者	認知課題を用いたPTSDの客観的評価指標に関する研究	科学研究費補助金[基金] (挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会
大沼麻実	研究代表者	WHO版心理的応急処置の研修受講者の支援状況と知識および自己評価に対する追跡調査	科学研究費補助金[基金] (若手研究(B))	日本学術振興会	
林 明明	研究分担者	認知課題を用いたPTSDの客観的評価指標に関する研究	科学研究費補助金[基金] (挑戦的萌芽研究)	日本学術振興会	
袴田優子	研究代表者	「注意バイアス調整療法」の効果評価研究—神経科学的作用機序に着目して—	科学研究費補助金[基金] (若手研究(A))	日本学術振興会	
精神薬理研究部	山田光彦	研究開発代表者	精神疾患に起因した自殺の予防法に関する研究	委託研究開発費長寿・障害総合研究事業 (障害者対策総合研究開発事業)	日本医療研究開発機構
	山田光彦	研究開発分担者	「情動系を調節するオピオイドδ受容体作動薬の開発」内「NP-4102-NNの有効性及び安全性に関する薬理プロファイルの取得と既存薬との差別化に関する検討」	委託研究開発費 医療分野研究成果展開事業 産学連携医療イノベーション創出プログラム	日本医療研究開発機構
	山田光彦	研究開発分担者	「自殺未遂者支援のための社会実装研究: 効果的な自殺再発防止方略の開発と普及、制度化を目的とした研究」内「システムティック・レビュー、自殺再発防止モデルの制度化のための研究」	委託研究開発費長寿・障害総合研究事業 (障害者対策総合研究開発事業)	日本医療研究開発機構
	山田光彦	分担研究者	「精神疾患の機能ドメインに基づく新しい治療法の開発」内「Negative Valence Systemsを対象とした新規向精神薬候補化合物の行動薬理試験による妥当性の検討と臨床へのトランスレーション」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山田光彦	研究代表者	うつ病の病態及び治療機序におけるリゾホスファチジン酸シグナル伝達的作用	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	山田光彦	研究分担者	「新規抗不安薬開発に向けたδオピオイド受容体を介する情動制御の機序解明」内「統計解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	山田光彦	研究分担者	「リゾホスファチジン酸シグナル伝達系をターゲットとした新規抗うつ薬の創薬研究」内「発現定量、採血、脳脊髄液採取、LPA濃度測定」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	斎藤顕宜	研究開発代表者	「情動系を調節するオピオイドδ受容体作動薬の開発」内「NP-4102-NNの有効性及び安全性に関する薬理プロファイルの取得と既存薬との差別化に関する検討」	委託研究開発費 医療分野研究成果展開事業 産学連携医療イノベーション創出プログラム	日本医療研究開発機構
	斎藤顕宜	分担研究者	「危険ドラッグの有害作用発現機序の解明と評価技術開発に関する研究」内「カチノン系化合物の有害作用予測」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	斎藤顕宜	研究代表者	新規抗不安薬開発に向けたδオピオイド受容体を介する情動制御の機序解明	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	斎藤顕宜	研究分担者	「うつ病の病態及び治療機序におけるリゾホスファチジン酸シグナル伝達的作用」内「行動薬理試験」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会

	斎藤顕直	研究分担者	「リゾホスファチジン酸シグナル伝達系をターゲットとした新規抗うつ薬の創薬研究」内「情動行動評価、モデル動物の作成と評価」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	中嶋智史	研究代表者	顔記憶における環境的文脈の影響過程の解明	科学研究費助成事業 (若手研究B)	日本学術振興会
	山田美佐	研究代表者	リゾホスファチジン酸シグナル伝達系をターゲットとした新規抗うつ薬の創薬研究	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	山田美佐	研究分担者	「うつ病の病態及び治癒機転におけるリゾホスファチジン酸シグナル伝達の役割」内「免疫組織科学解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	山田美佐	研究分担者	「新規抗不安薬開発に向けた6αオピオイド受容体を介する情動制御の機序解明」内「神経伝達物質定量解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	山田美佐	研究分担者	「回復するうつ病治療：治癒阻害因子から解明する脳神経回路網修復促進ストラテジー」内「グリア細胞における伝達物質放出機構の解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	川島義高	研究代表者	救急医療機関においてエビデンスに基づいた自殺対策を行うための社会福祉システム構築	特別研究員奨励費	日本学術振興会
社会精神保健研究所	伊藤弘人	研究開発代表者	合併症を伴う精神疾患の治療に関する研究	日本医療研究開発機構研究費(障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野))	日本医療研究開発機構
	伊藤弘人	研究代表者	複合慢性疾患患者の治療アドヒアランス向上を目指したメンタルアプローチ	科学研究費助成事業 基盤研究(B)	日本学術振興会
	伊藤弘人	研究分担者	「学術的・国際的アプローチによる自殺総合対策の新たな政策展開に関する研究」内「国際的動向を踏まえた学術的研究、とくに精神保健医療政策の在り方に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	堀口寿広	研究協力者	発達性吃音の最新治療法の開発と実践に基づいたガイドライン作成	日本医療研究開発機構研究費(障害者対策総合研究開発事業)	日本医療研究開発機構
精神生理研究所	三島和夫	主任研究者	睡眠医療プラットフォームPASMを用いて実施する臨床研究ネットワーク、運用システム、リソースの構築に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	三島和夫	研究分担者	「こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究」内「睡眠障害モジュール開発」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	三島和夫	研究代表者	高齢者の睡眠障害に関わる環境及び遺伝の相互作用の解明	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	肥田昌子	分担研究者	「睡眠医療及び睡眠研究用プラットフォームの構築に関する研究」内「PASMを用いたバイオリソースを利用した睡眠障害診断ツールの構築と検証」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	肥田昌子	研究代表者	睡眠障害における生体リズム異常の分子メカニズム	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	北村真吾	分担研究者	「睡眠医療及び睡眠研究用プラットフォームの構築に関する研究」内「地域調査と産学連携を通じたPASMの有効性検証と睡眠医療研究用リソースの収集」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	北村真吾	研究代表者	クロノタイプと気分変動の関連に対する位相角差とストレス反応の寄与	科学研究費助成事業 (若手研究B)	日本学術振興会
	北村真吾	研究代表者	「生体リズム内的脱同調の健康影響と脆弱性要因の解明」	科学研究費助成事業 (新学術領域研究)	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	「子どもの高い光感受性と概日リズムの夜型化・成熟に関する研究」内「睡眠・リズム調査実施、睡眠データ解析、論文執筆」	科学研究費助成事業 (基盤研究A)	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	「クロノタイプ別睡眠負債解消の機能解明」内「生体リズムの測定」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	綾部直子	研究代表者	不眠や気分障害予防における過覚醒状態の評価方法の確立及び臨床的有用性の検討	科学研究費助成事業 (若手研究B)	日本学術振興会
	元村祐貴	研究代表者	リアルタイムfMRIによるニューロフィードバックを用いた慢性不眠症治療法の開発	科学研究費助成事業 (特別研究員奨励費)	日本学術振興会
元村祐貴	研究代表者	灌流スピナバリングを用いた脳血流量定量測定による脳の概日リズムと全身的協同の解明	科学研究費助成事業 (若手研究B)	日本学術振興会	
知的障害研究部	稲垣真澄	研究代表者	顕在化しにくい発達障害の特性を早期に抽出するアセスメントツールの開発および普及に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業(感覚器障害分野))	厚生労働省
	稲垣真澄	主任研究者	発達障害の先進的診断・治療法開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	稲垣真澄	分担研究者	「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」内「てんかんの神経生理学的マーカーの開発と病態解明」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	稲垣真澄	研究代表者	発達障害の臨床症状に関する包括的疫学的調査	精神薬療分野一般研究助成金	先進医薬研究振興財団
	稲垣真澄	研究分担者	ヒトの適応的歩行に関わる神経基盤の解明	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	稲垣真澄	研究分担者	共同注意の発達の意義に基づく社会性認知機能の解明：ウィリアムズ症候群との比較研究	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	北洋輔	研究代表者	発達性ディスレクシアのリスク児における病態解明と早期支援システムの導入	科学研究費助成事業 (若手研究B)	日本学術振興会
	北洋輔	分担研究者	「発達障害の先進的診断・治療法開発に関する研究」内「発達障害(ADHD,LD)の併存症病態解明」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター



V 平成28年度委託および受託研究課題

	北洋輔	分担研究者	「顕在化しにくい発達障害の特性を早期に抽出するアセスメントツールの開発および普及に関する研究」内『読み書き障害の早期アセスメント評価』	厚生労働科学研究費（障害者政策総合研究事業（感覚器障害分野））	厚生労働省
	北洋輔	研究分担者	ヒトの適応的歩行に関わる神経基盤の解明	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	北洋輔	研究代表者	小児における運動の不器用さがメンタルヘルスに与える影響を解明する	第32回若手研究者のための健康科学研究助成金	公益財団法人 明治安田厚生事業団
	奥村安寿子	研究代表者	未就学児の潜在的な文字学習評価に基づく発達性ディスレクシアの早期発見と介入法の確立	科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）	日本学術振興会
	鈴木浩太	研究代表者	養育者の適応力に着目した発達障害支援策の発展に関する研究	科学研究費助成事業（若手研究B）	日本学術振興会
	安村 明	研究代表者	未就学児を対象としたADHD検査システムの開発	科学研究費助成事業（若手研究A）	日本学術振興会
	安村 明	研究代表者	認知課題困難児における安静時脳活動の差異に関する研究	科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）	日本学術振興会
	崎原ことえ	研究代表者	ヒトの適応的歩行に関わる神経基盤の解明	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
社会 復帰 研究 部	藤井千代	研究代表者	精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「精神科医療提供体制の機能強化を推進する政策研究」内「精神保健医療に関する制度の国際比較」	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に関する研究」内「ピアサポーター基礎研修のプログラムの構築と記述」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（身体・知的等障害分野）	厚生労働省
	藤井千代	研究代表者	精神科事前指示の活用による自己決定権を尊重した精神科医療のあり方に関する研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（挑戦的萌芽研究）	日本学術振興会
	藤井千代	研究分担者	「急性期病院におけるせん妄予防管理の標準化に向けたクリニカルパスの開発及び効果検証」内「拘束に関する倫理的検討」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））	日本学術振興会
	佐藤さやか	研究分担者	「精神障害者の地域生活支援の在り方とシステム構築に関する研究」内「ACT・多職種アウトリーチチームの治療的機能についての評価」	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）	厚生労働省
	佐藤さやか	研究分担者	「精神障害者の地域生活支援を推進する政策研究」内「医療機関における就労支援に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）	厚生労働省
	佐藤さやか	分担研究者	「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」内「アウトリーチ支援における家族心理教育およびCBTを活用した家族支援の効果に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山口創生	研究分担者	「精神障害者の就労移行を促進するための研究」内「精神障害者の就労支援に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	「障害福祉サービスにおける質の確保とキャリア形成に関する研究」内「分野別研修プログラム案の開発研修内容案の開発」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（身体・知的等障害分野）	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	「障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に関する研究」内「研修プログラムの評価と記述」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（身体・知的等障害分野）	厚生労働省
	山口創生	研究代表者	日本版 I P S/援助付き雇用フィデリティ尺度の検証とフィデリティ評価システムの構築	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手研究（B））	日本学術振興会
	山口創生	研究分担者	「ピアサポートの意義および効果に関する包括的研究」内「効果評価における調査研究班責任者、データ分析」	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（基盤研究（B））	日本学術振興会
	山口創生	研究分担者	「主体的人生のための統合失調症リハビリ支援—当事者との共同創造co-productionによる実践ガイドライン策定」内「当事者の主体のサービス提供のあり方とアウトカムとの関連に関する研究」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	山口創生	研究分担者	「当事者を含めた多職種によるリハビリカレッジ運用のためのガイドラインの開発」内「就労支援とリハビリ」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	種田綾乃	研究代表者	精神科医療機関におけるピアスタッフの実態と効果的な活用の可能性	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手研究（B））	日本学術振興会
伊藤順一郎	研究代表者	精神障害者の地域生活支援の在り方とシステム構築に関する研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）	厚生労働省	
伊藤順一郎	研究分担者	「重症精神障害者へのアサーティブコミュニケーションリートメントの全国多施設効果評価研究」内「多職種アウトリーチ支援に関する精神医学的評価および技術・立ち上げ支援の在り方に関する検討」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））	日本学術振興会	
	菊池安希子	分担研究者	「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」内「医療観察法処遇終了者の社会復帰促進に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	菊池安希子	研究開発分担者	「医療観察法における、新たな治療介入法や、行動制御に係る指標の開発等に関する研究」内「医療観察法従事者のメンタルヘルスに関する研究」	長寿・障害総合研究事業障害者対策総合研究開発事業（AMED）	日本医療研究開発機構
	安藤久美子	研究分担者	精神の障害が一定の影響を及ぼした事案における量刑判断等のあり方に関する学際的研究	科学研究費助成事業（基盤研究B）	日本学術振興会
	安藤久美子	分担研究者	「疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究」内「犯罪傾向のある障害者のアセスメントと治療に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター

司法精神医学研究部	安藤久美子	研究分担者	「発達障害者への支援を緊急時（犯罪の被害や加害、災害など）に関係機関が連携して適切な対応を行うためのモデル開発に関する研究」内「触法行為を行った発達障害者の介入手法」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業（身体・知的等障害分野））	厚生労働省
	安藤久美子	研究分担者	「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」内「全国の指定通院医療機関を対象としたモニタリング調査研究（通院モニタリング研究）」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	安藤久美子	研究分担者	精神科事前指示の活用による自己決定権を尊重した精神科医療のあり方に関する研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）挑戦的萌芽研究	日本学術振興会
	安藤久美子	研究分担者	発達障害者の性犯罪再犯防止SOTSEC-ID-認知行動療法と地域包括支援	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	安藤久美子	研究分担者	「コグニティブライフシステム」の創出を目指して	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	河野聡明	研究分担者	「観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究」内「全国の指定入院医療機関を対象としたモニタリング調査研究（入院モニタリング研究）」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	曾雌崇弘	研究代表者	衝動性に関する言語学、ならびに認知神経科学的アプローチ	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）挑戦的萌芽研究	日本学術振興会
	曾雌崇弘	研究分担者	「コグニティブライフシステム」の創出を目指して	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	米田恵子	研究代表者	統合失調症患者における内発的動機づけと認知リハビリテーションの効果に関する研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金若手研究（B））	日本学術振興会
岡田幸之	研究代表者	観察法制度分析を用いた観察法医療の円滑な運用に係る体制整備・周辺制度の整備に係る研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省	
自殺総合対策推進センター	本橋豊	研究代表者	地域の総合的自殺対策の科学的政策評価と新たなベンチマーク評価指標の開発	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	本橋豊	研究代表者	自殺総合対策の政策輸出によるアジアの自殺問題解決へ向けた支援に関する実証的研究	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	反町吉秀	研究分担者	「外因死者遺族に対する効果的な心のケア実践システムの構築」内「外因死者遺族に配慮した対応の教育」	厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	金子善博	研究代表者	地域の自殺予防に資するレジリエンス社会の構成要因の探索	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	金子善博	研究分担者	多世代参加コミュニティ・エンパワメントの実践による地域づくり型自殺予防の実証研究	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省
	藤森麻衣子	研究代表者	情動的共感に対するコミュニケーション技術学習プログラムの有効性の検討	文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）	文部科学省
	藤森麻衣子	研究代表者	がん治療中止と予後を話し合う際に患者が医師に望むコミュニケーション	メンタルヘルス岡本記念財団 研究活動助成金	メンタルヘルス岡本記念財団
	菊池美名子	研究代表者	自殺・自傷とジェンダー：予防と回復に向けた学際的理論の構築	文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）	文部科学省
小高真美	研究代表者	自殺予防教育をソーシャルワーカー養成課程で実施するための教授法に関する研究	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）	文部科学省	
災害時こころの情報支援センター	金吉晴	研究代表者	災害時の精神保健医療に関する研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	金吉晴	研究代表者	こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））	厚生労働省
	金吉晴	研究代表者	モバイル情報通信を使用した災害時の精神保健・心理社会的支援に関する研究	地球規模保健課題解決推進のための研究事業	日本医療研究開発機構
	金吉晴	研究分担者	認知課題を用いたPTSDの客観的評価指標に関する研究	科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）	日本学術振興会
	金吉晴	実務担当者	平成28年度災害時こころの情報支援センター（災害等によるストレス関連疾患対策情報支援センター機能）事業に係る業務一式	委託費	厚生労働省
	金吉晴	実務担当者	平成28年度こころの健康づくり対策事業	補助金	厚生労働省
	鈴木友理子	分担研究者	PTSD対策専門研修事業		
	鈴木友理子	研究分担者	「東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究および被災児童の心的外傷後ストレス障害（PTSD）に関する研究」内「石巻市の被災児童と健常児の比較検討研究」	平成28年度国際医療研究開発事業（疾病研究分野）	国立国際医療研究センター
	鈴木友理子	研究分担者	「精神疾患患者早期介入のための医療従事者向け研修プログラム開発—メンタルヘルス・ファーストエイドの応用—」内「プログラム開発と評価方法の検討」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業	日本医療研究開発機構
関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	医学系奨励研究	公益財団法人武田科学振興財団	
関口 敦	研究代表者	脳MR画像を用いた外的刺激によるシナプス可塑性の個人差の評価	平成28年度東北大学加齢医学研究所 共同利用・共同研究費	東北大学加齢医学研究所	
上級専門職室	大塚俊弘	主任研究者	疾病構造変化と地域移行に伴うニーズの多様化に対応する精神医療福祉体制構築に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター

精神保健研究所年報 No.30 (通号 No.63) 2017

---

平成 29 年 10 月 31 日発行

編集責任者

中込 和幸

編集委員

藤井 千代

立森 久照

河野 稔明

発行所

国立研究開発法人

国立精神・神経医療研究センター

精神保健研究所

〒187-8553

東京都小平市小川東町 4-1-1

(非売品)

電話 042 (341) 2711

印刷：(株) 東京アート印刷所

---